九州横断自動車道関係
埋蔵文化財調査報告
—19—

甘木市所在柿原遺跡群の調査　Ⅳ
（D地区）

1990

福岡県教育委員会

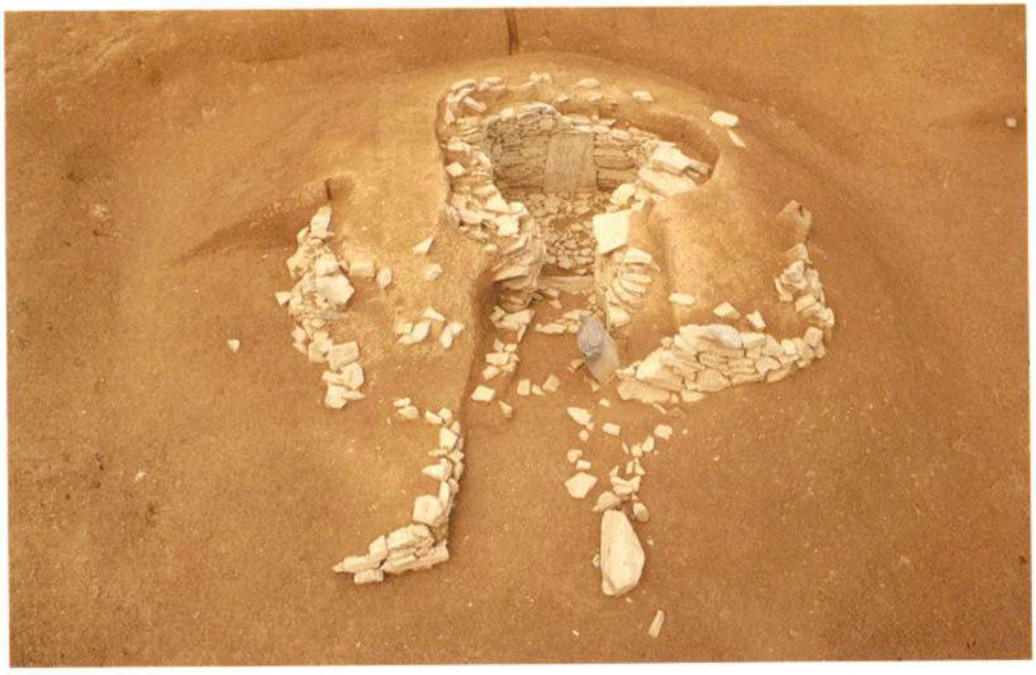
九州横断自動車道関係
埋蔵文化財調査報告

—19—

甘木市所在柿原遺跡群の調査　Ⅳ
（D地区）

柿原遺跡Ｄ地区全景

1号墳全景



22号墳全景

序

本書は，福岡県教育委員会が，日本道路公団から委託を受けて，昭和54年度から実施している九州横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査の報告書であります。

今回の報告書は，昭和59・60年度に行った甘木市所在の柿原遺跡群についてのもので，その第4冊目にあたります。柿原遺跡群関係の調査は昭和60年度，その他の九州横断自動車道関係の発掘調査も昭和63年度で完了いたしており，今後もその調査結果の報告書を，順次刊行していく予定であります。

調査に際しましては，地元の方々をはじめ関係各位の御協力をいただき，多大な成果をあげることができました。深く感謝いたします。

なお，本書が文化財愛護思想の普及，学術研究に役立つことを望みます。

平成2年3月31日

福岡県教育委員会

教育長　御手洗　　康

例　言

1．本書は，昭和55年度から昭和60年度に福岡県教育委員会が，日本道路公団から委託を受けて，九州横断自動車道建設に伴う土取りのために破壊される埋蔵文化財を発掘調査した柿原遺跡群の第4冊目の報告書であり，九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告の第19冊目にあたる。

2．本書の執筆は，新原正典・小池史哲・日高正幸・武田光正が分担した。

3．掲載の写真のうち，遺構は小池が，遺物は九州歴史資料館の石丸洋・須原悦子と小池が撮影した。なお，パシフィク航業・国際航業KK・空中写真稲富撮影の写真も使用した。

4．遺構図は，新原・小池・日高・武田のほかに栗原和彦・石山勲・高田一弘・田中康信・平島文博・向田雅彦・下村洋介が実測し，発掘後の地形図作製では国際航業KKに航空測量図化を依頼した。また，遺物のうち土器は小池・武田と高瀬照美・速見公己・松島邦子が，その他の遺物は小池が実測した。なお，図面の浄書には豊福弥生・塩足里美・鶴田佳子の協力を得た。

5．出土遺物の整理にあたっては，九州歴史資料館の横田義章と岩瀬正信の協力を得た。

6．挿図で使用する方位は，個別の遺構図にあっては磁北，その他の配置図・地形図は真北に統一している。

7．本書の編集は，小池史哲があたった。

本 文 目 次

柿原（かきばる）遺跡群の調査（D地区）

I　調査の経過 …… 1

II　位置と環境 …… 7

III　遺構と遺物 …… 9

1．1号墳 …… 9
2．2号墳 …… 20
3．3号墳 …… 24
4．4号墳 …… 31
5．5号墳 …… 40
6．6号墳 …… 53
7．7号墳 …… 56
8．8号墳 …… 59
9．9号墳 …… 68
10．10号墳 …… 75
11．11号墳 …… 81
12．12号墳 …… 85
13．13号墳 …… 87
14．14号墳 …… 90
15．15号墳 …… 94
16．16号墳 …… 104
17．17号墳 …… 109
18．18号墳 …… 115
19．19号墳 …… 119
20．20号墳 …… 120
21．21号墳 …… 126
22．22号墳 …… 129
23．23号墳 …… 137

24. 24号墳……143
25. 25号墳……148
26. 26号墳……157
27. 27号墳……165
28. 28号墳……170
29. 石棺墓……173
30. その他の遺構と遺物……175

IV おわりに……178

1．段状遺構について……178
2．石室の形態と年代……183

図 版 目 次

本文対照頁

巻頭図版 1		柿原遺跡D地区全景	1
巻頭図版 2	(1)	1号墳全景	9
	(2)	22号墳全景	129
図 版 1		柿原遺跡周辺航空写真	1
図 版 2	(1)	調査前の柿原遺跡群	1
	(2)	調査前の柿原遺跡D地区	1
図 版 3	(1)	柿原遺跡D地区全景（南から）	1
	(2)	柿原遺跡D地区全景（東から）	1
図 版 4		柿原遺跡D地区全景空中写真	1
図 版 5	(1)	1号墳全景（南から）	9
	(2)	1号墳石室全景	11
図 版 6	(1)	1号墳石室全景（西から）	11
	(2)	1号墳石室全景（南から）	11
図 版 7	(1)	1号墳玄室奥壁	11
	(2)	1号墳玄室左側壁	11
	(3)	1号墳前室左側壁	11
図 版 8	(1)	1号墳玄室右側壁	11
	(2)	1号墳前室右側壁	11
	(3)	1号墳前室右側壁細部	11
図 版 9	(1)	1号墳前室左側壁細部	11
	(2)	1号墳石室閉塞状況（外側）	11
	(3)	1号墳石室閉塞状況（内側）	11
図 版 10	(1)	1号墳左前面区画（南から）	11
	(2)	1号墳左前面区画（南東から）	11
	(3)	1号墳左前面区画遺物出土状況	16
図 版 11	(1)	1号墳右前面区画遺物出土状況	16
	(2)	1号墳右前面区画遺物出土状況	16
	(3)	1号墳石室掘り方（南から）	11
図 版 12		1号墳出土土器、鉄器	17
図 版 13	(1)	2号墳全景（南から）	20

(2) 2号墳石室全景（西から）……22
図版 14 (1) 2号墳玄室奥壁……22
(2) 2号墳玄室左側壁……22
(3) 2号墳玄室右側壁……22
図版 15 (1) 2号墳前面遺物出土状況……22
(2) 2号墳前面遺物出土状況……22
(3) 2号墳出土土器……22
図版 16 (1) 3号墳全景（南から）……24
(2) 3号墳石室全景（南から）……24
図版 17 (1) 3号墳左側列石（西から）……24
(2) 3号墳左側列石（北西から）……24
(3) 3号墳右側列石（東から）……24
図版 18 (1) 3号墳玄室奥壁……24
(2) 3号墳玄室右側壁……24
図版 19 (1) 3号墳石室閉塞状況（外側）……24
(2) 3号墳石室閉塞状況（内側）……24
(3) 3号墳前室遺物出土状況……25
図版 20 3号墳出土土器1……25
図版 21 3号墳出土土器2、鉄器……25
図版 22 (1) 4号墳全景（南から）……31
(2) 4号墳石室と段状遺構（西から）……33
図版 23 (1) 4号墳前面の段状遺構（西から）……33
(2) 4号墳石室全景（南から）……32
(3) 4号墳玄室奥壁……32
図版 24 (1) 4号墳段状遺構遺物出土状況……34
(2) 4号墳前面遺物出土状況……34
(3) 4号墳前面遺物出土状況……34
図版 25 4号墳出土土器、鉄器……35
図版 26 (1) 5号墳全景（南から）……40
(2) 5号墳石室と段状遺構（南から）……45
図版 27 (1) 5号墳段状遺構（南から）……45
(2) 5号墳段状遺構（東から）……45
(3) 5号墳段状遺構（南東から）……45

図　版　28　(1)　5号墳石室全景（南から）……42
(2)　5号墳石室全景（東から）……42
図　版　29　(1)　5号墳玄室奥壁……42
(2)　5号墳玄室左側壁……42
(3)　5号墳羨道左側壁……42
図　版　30　(1)　5号墳石室玄門……42
(2)　5号墳石室閉塞状況（外側）……42
(3)　5号墳石室閉塞状況（内側）……42
図　版　31　(1)　5号墳左前面区画（南から）……40
(2)　5号墳左前面区画（東から）……40
(3)　5号墳右前面（南から）……40
図　版　32　(1)　5号墳玄室遺物出土状況……46
(2)　5号墳玄室遺物出土状況……46
(3)　5号墳段状遺構遺物出土状況……46
(4)　5号墳段状遺構遺物出土状況……46
図　版　33　5号墳出土土器、鉄器、玉類……47
図　版　34　(1)　6号墳全景（南から）……53
(2)　6号墳石室全景（南から）……55
図　版　35　(1)　6号墳玄室奥壁……55
(2)　6号墳石室左側壁……55
(3)　6号墳石室右側壁……55
図　版　36　(1)　7号墳全景（南から）……56
(2)　7号墳石室全景（西から）……56
図　版　37　(1)　7号墳玄室奥壁……56
(2)　7号墳玄室左側壁……56
(3)　7号墳玄室右側壁……56
図　版　38　(1)　7号墳石室閉塞状況……56
(2)　7号墳石室閉塞状況（内側）……56
(3)　7号墳出土遺物……58
図　版　39　(1)　8号墳全景（南から）……59
(2)　8号墳石室全景（南から）……59
図　版　40　(1)　8号墳玄室奥壁……59
(2)　8号墳玄室左側壁……59

(3) 8号墳玄室右側壁……59
図版 41 (1) 8号墳石室玄門……59
(2) 8号墳羨道左側壁……59
(3) 8号墳玄室……59
図版 42 (1) 8号墳石室閉塞状況（上から）……59
(2) 8号墳石室閉塞状況（外側）……59
(3) 8号墳石室閉塞状況（内側）……59
図版 43 (1) 8号墳玄門付近遺物出土状況……61
(2) 8号墳玄門付近遺物出土状況……61
(3) 8号墳奥壁付近遺物出土状況……61
図版 44 8号墳出土土器1……62
図版 45 8号墳出土土器2、鉄器……62
図版 46 (1) 9号墳全景（南から）……68
(2) 9号墳石室全景（東から）……69
図版 47 (1) 9号墳玄室奥壁……69
(2) 9号墳玄室左側壁……69
(3) 9号墳玄室右側壁……69
図版 48 (1) 9号墳玄室遺物出土状況……70
(2) 9号墳玄室遺物出土状況……70
(3) 9号墳玄室遺物出土状況……70
図版 49 (1) 9号墳前面遺物出土状況……70
(2) 9号墳前面遺物出土状況……70
(3) 9号墳前面遺物出土状況……70
(4) 9号墳前面遺物出土状況……70
図版 50 9号墳出土土器1……70
図版 51 9号墳出土土器2、玉類、銅製品……70
図版 52 (1) 10号墳全景（南から）……75
(2) 10号墳全景（南から）……75
図版 53 (1) 10号墳石室全景（南から）……75
(2) 10号墳石室全景（南から）……75
図版 54 (1) 10号墳玄室奥壁……75
(2) 10号墳玄室左側壁……75
(3) 10号墳玄室右側壁……75

図　版　55　(1)　10号墳玄室前壁……75
(2)　10号墳玄室前壁と閉塞状況……75
(3)　10号墳石室閉塞状況（上から）……75
図　版　56　(1)　10号墳石室閉塞状況（外側）……75
(2)　10号墳玄室遺物出土状況……77
(3)　10号墳前面遺物出土状況……77
図　版　57　10号墳出土土器……77
図　版　58　(1)　11号墳全景（南から）……81
(2)　11号墳全景（西から）……81
図　版　59　(1)　11号墳石室全景（南から）……83
(2)　11号墳石室全景（西から）……83
(3)　11号墳玄室遺物出土状況……84
図　版　60　(1)　11号墳玄室奥壁……83
(2)　11号墳玄室左側壁……83
(3)　11号墳玄室右側壁……83
図　版　61　(1)　11号墳石室閉塞状況（外側）……83
(2)　11号墳玄室閉塞状況（上から）……83
(3)　11号墳石室閉塞状況（内側）……83
(4)　11号墳出土鉄器、鉄滓……84
図　版　62　(1)　12号墳全景（南から）……85
(2)　12号墳石室全景（東から）……85
図　版　63　(1)　12号墳石室（南から）……85
(2)　12号墳玄室奥壁……85
(3)　12号墳玄室左側壁……85
図　版　64　(1)　12号墳玄室右側壁……85
(2)　12号墳羨道部（上から）……85
(3)　12号墳羨道部（内側から）……85
(4)　12号墳墳裾出土土器……87
図　版　65　(1)　13号墳全景（南から）……87
(2)　13号墳石室全景（東から）……88
図　版　66　(1)　13号墳石室（南から）……88
(2)　13号墳玄室奥壁……88
(3)　13号墳玄室左側壁……88

図　版　67　(1)　13号墳玄室右側壁……88
(2)　13号墳玄室遺物出土状況……88
(3)　13号墳玄室遺物出土状況……88
図　版　68　13号墳出土土器、玉類……88
図　版　69　(1)　14号墳全景（南から）……90
(2)　14号墳玄室（上から）……91
図　版　70　(1)　14号墳玄室奥壁……91
(2)　14号墳玄室左側壁……91
(3)　14号墳玄室右側壁……91
図　版　71　(1)　14号墳石室閉塞状況（外側）……91
(2)　14号墳玄室閉塞状況（上から）……91
(3)　14号墳石室閉塞状況（内側）……91
図　版　72　14号墳出土土器、玉類、調査風景１……92
図　版　73　(1)　15号墳全景（南から）……94
(2)　15号墳石室（西から）……95
図　版　74　(1)　15号墳墳丘堆積状況（石室後方）……94
(2)　15号墳墳丘堆積状況（石室左側）……94
(3)　15号墳墳丘堆積状況（石室右側）……94
図　版　75　(1)　15号墳石室（南から）……95
(2)　15号墳石室（東から）……95
(3)　15号墳石室（北から）……95
図　版　76　(1)　15号墳玄室奥壁……95
(2)　15号墳玄室左側壁……95
(3)　13号墳玄室右側壁……95
図　版　77　(1)　15号墳前室遺物出土状況……96
(2)　15号墳前室遺物出土状況……96
(3)　15号墳前室遺物出土状況……96
(3)　15号墳前室遺物出土状況……96
図　版　78　15号墳出土土器１……96
図　版　79　15号墳出土土器２、鉄器……96
図　版　80　(1)　16号墳全景（南から）……104
(2)　16号墳石室（南から）……104
図　版　81　(1)　16号墳石室（東から）……104

(2) 16号墳石室（閉塞時）……104
図版 82 (1) 16号墳玄室奥壁……104
(2) 16号墳玄室左側壁……104
(3) 16号墳玄室右側壁……104
図版 83 (1) 16号墳前室左側壁……104
(2) 16号墳石室閉塞状況（上から）……104
(3) 16号墳石室閉塞状況（内側）……104
図版 84 16号墳出土土器、鉄器……106
図版 85 (1) 17号墳全景（南から）……109
(2) 17号墳全景（南西から）……109
図版 86 (1) 17号墳全景（西から）……109
(2) 17号墳石室（北から）……111
図版 87 (1) 17号墳玄室奥壁……111
(2) 17号墳玄室左側壁……111
(3) 17号墳玄室右側壁……111
図版 88 (1) 17号墳石室閉塞状況（外側）……111
(2) 17号墳石室閉塞状況（上から）……111
(3) 17号墳石室遺物出土状況……112
図版 89 17号墳出土土器、耳環……112
図版 90 (1) 18号墳全景（南から）……115
(2) 18号墳全景（西から）……115
図版 91 (1) 18号墳石室（西から）……115
(2) 18号墳石室（北から）……115
(3) 18号墳玄室（東から）……115
図版 92 (1) 18号墳玄室奥壁……115
(2) 18号墳玄室左側壁……115
(3) 18号墳玄室右側壁……115
図版 93 (1) 18号墳石室閉塞状況（外側）……115
(2) 18号墳石室閉塞状況（上から）……115
(3) 18号墳石室閉塞状況（内側）……115
図版 94 (1) 18号墳石室前面遺物出土状況……116
(2) 18号墳出土土器、鉄滓、ふいご羽口……117
図版 95 (1) 18号墳石室（南から）……119

(2) 19号墳石室（東から）……119
図 版 96 (1) 20号墳全景（南から）……120
(2) 20号墳石室（西から）……120
図 版 97 (1) 20号墳玄室奥壁……120
(2) 20号墳玄室左側壁……120
(3) 20号墳玄室右側壁……120
図 版 98 (1) 20号墳前室左側壁……120
(2) 20号墳石室閉塞状況（外側）……120
(3) 20号墳石室閉塞状況（上から）……120
図 版 99 (1) 20号墳周溝II区遺物出土状況……121
(2) 20号墳周溝III区遺物出土状況……121
(3) 20号墳周溝III区遺物出土状況……121
図 版 100 (1) 20号墳出土土器……121
(2) 21号墳石室（南から）……126
図 版 101 (1) 22号墳全景（南から）……129
(2) 22号墳石室（南から）……129
図 版 102 (1) 22号墳石室（東から）……129
(2) 22号墳玄室奥壁……129
(3) 22号墳玄室左側壁……129
図 版 103 (1) 22号墳玄室右側壁……129
(2) 22号墳石室玄門……129
(3) 22号墳玄門付近遺物出土状況……130
図 版 104 (1) 22号墳玄室遺物出土状況……130
(2) 22号墳出土土器1……131
図 版 105 22号墳出土土器2、鉄器、玉類……131
図 版 106 (1) 23号墳全景（南から）……137
(2) 23号墳石室（南から）……138
図 版 107 (1) 23号墳石室（東から）……138
(2) 23号墳石室前面……138
(3) 23号墳玄室奥壁……138
図 版 108 (1) 23号墳玄室左側壁……138
(2) 23号墳玄室右側壁……138
(3) 23号墳玄室前壁……138

図　版 109　(1)　23号墳周溝Ⅲ区遺物出土状況 ……138
(2)　23号墳出土土器、鉄器 ……140
図　版 110　(1)　24号墳全景（南から） ……143
(2)　24号墳石室（西から） ……144
図　版 111　(1)　敷石除去後の24号石室（南から） ……144
(2)　敷石除去後の24号石室（西から） ……144
(3)　24号墳玄室奥壁 ……144
図　版 112　(1)　24号墳玄室右側壁 ……144
(2)　24号墳玄室遺物出土状況 ……145
(3)　24号墳前室遺物出土状況 ……145
図　版 113　24号墳出土土器、鉄器 ……145
図　版 114　(1)　25号墳全景（南から） ……148
(2)　25号墳石室（南から） ……149
図　版 115　(1)　25号墳石室（東から） ……149
(2)　25号墳左側列石 ……149
(3)　25号墳周溝遺物出土状況 ……150
図　版 116　(1)　25号墳玄室奥壁 ……149
(2)　25号墳玄室左側壁 ……149
(3)　25号墳玄室右側壁 ……149
図　版 117　(1)　25号墳石室玄門と閉塞 ……149
(2)　25号墳石室閉塞状況（上から） ……149
(3)　25号墳石室閉塞状況（外側） ……149
図　版 118　(1)　25号墳石室遺物出土状況 ……150
(2)　25号墳石室遺物出土状況 ……150
(3)　25号墳石室遺物出土状況 ……150
(4)　25号墳石室遺物出土状況 ……150
図　版 119　25号墳出土土器１ ……151
図　版 120　25号墳出土土器２、鉄器、玉類 ……151
図　版 121　(1)　26号墳全景（南から） ……157
(2)　26号墳石室（南から） ……158
図　版 122　(1)　26号墳玄室奥壁 ……158
(2)　26号墳玄室左側壁 ……158
(3)　26号墳玄室右側壁 ……158

図　版 123　(1)　26号墳石室遺物出土状況 ……160
(2)　26号墳周溝Ⅲ区遺物出土状況 ……160
(3)　26号墳石室出土土器、鉄滓 ……161
図　版 124　26号墳出土土器 ……161
図　版 125　(1)　27号墳全景（南から） ……165
(2)　27号墳石室（南から） ……167
図　版 126　(1)　27号墳玄室奥壁 ……167
(2)　27号墳玄室左側壁 ……167
(3)　27号墳石室遺物出土状況 ……167
図　版 127　27号墳出土土器 ……167
図　版 128　(1)　28号墳全景（南から） ……169
(2)　28号墳石室（南から） ……170
図　版 129　(1)　28号墳石室（西から） ……170
(2)　28号墳玄室奥壁 ……170
(3)　28号墳玄室左側壁 ……170
図　版 130　(1)　28号墳玄室右側壁 ……170
(2)　28号墳石室玄門と閉塞 ……170
(3)　28号墳石室閉塞状況（上から） ……170
図　版 131　(1)　28号墳石室前面と閉塞 ……170
(2)　28号墳玄室遺物出土状況 ……172
(3)　28号墳出土土器 ……172
図　版 132　(1)　石棺墓全景（南から） ……173
(2)　石棺墓（西から） ……173
図　版 133　その他の出土遺物、調査風景 2 ……176
図　版 134　調査風景 3 、調査風景 4 …… 1

挿 図 目 次

第 1 図　九州横断自動車道路線図……2
第 2 図　周辺の地形と遺跡の分布……折込み
第 3 図　D地区地形測量図……折込み
第 4 図　D地区遺構配置図……折込み
第 5 図　1号墳墳丘・地山整形面測量図……10
第 6 図　1号墳墳丘実測図……折込み
第 7 図　1号墳石室床面と掘り方実測図……11
第 8 図　1号墳石室実測図1……12
第 9 図　1号墳石室実測図2……13
第 10 図　1号墳石室閉塞状況実測図……15
第 11 図　1号墳主体部掘り方実測図……16
第 12 図　1号墳前面区画遺物出土状況実測図……17
第 13 図　1号墳右前面区画出土土器実測図……18
第 14 図　1号墳左前面区画・周溝出土土器実測図……19
第 15 図　1号墳出土鉄器実測図……19
第 16 図　2・3号墳墳丘・地山整形面測量図……21
第 17 図　2号墳石室実測図……折込み
第 18 図　2号墳前面・墳丘裾出土土器実測図……23
第 19 図　3号墳石室実測図……折込み
第 20 図　3号墳石室内遺物出土状況実測図……26
第 21 図　3号墳石室出土土器実測図1……27
第 22 図　3号墳石室出土土器実測図2……28
第 23 図　3号墳前面出土土器実測図1……29
第 24 図　3号墳前面出土土器実測図2……29
第 25 図　3号墳石室出土鉄器実測図1……29
第 26 図　3号墳石室出土鉄器実測図2……30
第 27 図　4号墳墳丘・地山整形面測量図……32
第 28 図　4号墳石室実測図……折込み
第 29 図　4号墳段状遺構実測図……34
第 30 図　4号墳前庭部遺物出土状況実測図……35

第 31 図　4 号墳墳丘内出土土器実測図……36
第 32 図　4 号墳段状遺構等出土土器実測図 1 ……37
第 33 図　4 号墳段状遺構等出土土器実測図 2 ……38
第 34 図　4 号墳玄室内出土土器実測図……39
第 35 図　4 ・ 5 号墳間出土土器実測図……39
第 36 図　4 号墳石室内出土鉄器実測図……40
第 37 図　5 号墳墳丘・地山整形面測量図……41
第 38 図　5 号墳石室平面実測図……43
第 39 図　5 号墳石室実測図……折込み
第 40 図　5 号墳段状遺構実測図……45
第 41 図　5 号墳玄室内遺物出土状況実測図……46
第 42 図　5 号墳石室出土土器実測図……47
第 43 図　5 号墳段状遺構出土土器実測図……49
第 44 図　5 号墳墳丘内出土土器実測図……50
第 45 図　5 号墳周溝出土土器実測図……50
第 46 図　5 号墳石室出土鉄器実測図……51
第 47 図　5 号墳石室出土玉類実測図……52
第 48 図　6 ・ 7 号墳墳丘・地山整形面測量図……53
第 49 図　6 号墳石室実測図……54
第 50 図　6 号墳前面斜面出土土器実測図……55
第 51 図　7 号墳石室実測図……57
第 52 図　7 号墳出土土器実測図……58
第 53 図　7 号墳石室出土金属器実測図……59
第 54 図　8 ・10号墳墳丘・地山整形面測量図……60
第 55 図　8 号墳石室実測図 1 ……折込み
第 56 図　8 号墳石室実測図 2 ……折込み
第 57 図　8 号墳石室内遺物出土状況実測図……62
第 58 図　8 号墳石室出土土器実測図 1 ……63
第 59 図　8 号墳石室出土土器実測図 2 ……65
第 60 図　8 号墳前面等出土土器実測図……66
第 61 図　8 号墳石室出土鉄刀実測図……67
第 62 図　8 号墳石室出土鉄器類実測図……67
第 63 図　9 号墳墳丘・地山整形面測量図……68

第 64 図　9 号墳石室実測図……折込み
第 65 図　9 号墳石室出土土器実測図……71
第 66 図　9 号墳石室前面出土土器実測図……72
第 67 図　9 号墳石室出土玉類・耳環実測図……73
第 68 図　9 号墳石室出土銅釧実測図……74
第 69 図　10号墳石室実測図……折込み
第 70 図　10号墳石室出土土器実測図……77
第 71 図　10号墳前庭部他出土土器実測図 1 ……78
第 72 図　10号墳前庭部他出土土器実測図 2 ……79
第 73 図　10号墳前庭部他出土土器実測図 3 ……80
第 74 図　10号墳前庭部他出土土器実測図 4 ……81
第 75 図　11・12号墳墳丘・地山整形面測量図……82
第 76 図　11号墳石室実測図……折込み
第 77 図　11号墳石室出土土器実測図……84
第 78 図　11号墳出土鉄器実測図……84
第 79 図　12号墳石室実測図……86
第 80 図　12号墳出土土器実測図……87
第 81 図　13号墳墳丘・地山整形面測量図……87
第 82 図　13号墳石室実測図……折込み
第 83 図　13号墳石室出土土器実測図……89
第 84 図　13号墳石室出土玉類実測図……90
第 85 図　14号墳墳丘・地山整形面測量図……91
第 86 図　14号墳石室実測図……折込み
第 87 図　14号墳前面出土土器実測図……93
第 88 図　14号墳石室出土玉類実測図……94
第 89 図　15号墳墳丘・地山整形面測量図……95
第 90 図　15号墳石室実測図……折込み
第 91 図　15号墳石室遺物出土状況実測図……97
第 92 図　15号墳左側列石遺物出土状況実測図……97
第 93 図　15号墳石室出土土器実測図 1 ……98
第 94 図　15号墳石室出土土器実測図 2 ……99
第 95 図　15号墳周溝Ⅱ区出土土器実測図 1 ……100
第 96 図　15号墳周溝Ⅱ区出土土器実測図 2 ……102

第 97 図　15号墳石室出土鉄器実測図 ……103
第 98 図　16号墳墳丘・地山整形面測量図 ……104
第 99 図　16号墳石室実測図……折込み
第 100 図　16号墳石室出土土器実測図 ……106
第 101 図　16号墳周溝出土土器実測図 1 ……107
第 102 図　16号墳周溝出土土器実測図 2 ……108
第 103 図　16号墳周溝出土鉄器実測図 ……108
第 104 図　16号墳石室出土鉄器・玉類実測図……109
第 105 図　17～20号墳墳丘・地山整形面測量図 ……110
第 106 図　17号墳石室実測図……折込み
第 107 図　17号墳石室出土土器実測図 ……113
第 108 図　17号墳前庭部・前面出土土器実測図 ……114
第 109 図　17号墳出土耳環実測図 ……115
第 110 図　18号墳石室実測図……折込み
第 111 図　18号墳前面・周溝出土土器実測図 ……117
第 112 図　19号墳石室実測図 ……119
第 113 図　20号墳石室実測図……折込み
第 114 図　20号墳周溝Ⅲ区遺物出土状況実測図 ……122
第 115 図　20号墳周溝Ⅲ区他出土土器実測図 1 ……123
第 116 図　20号墳周溝Ⅲ区他出土土器実測図 2 ……125
第 117 図　21～23号墳墳丘・地山整形面測量図 ……127
第 118 図　21号墳石室実測図 ……128
第 119 図　21号墳出土土器実測図 ……129
第 120 図　22号墳石室実測図……折込み
第 121 図　22号墳石室遺物出土状況実測図 ……131
第 122 図　22号墳石室出土土器実測図 ……132
第 123 図　22号墳前庭部・周溝Ⅰ区出土土器実測図 ……133
第 124 図　22号墳周溝Ⅰ区出土土器実測図 ……133
第 125 図　22号墳周溝Ⅱ区出土土器実測図 1 ……134
第 126 図　22号墳周溝Ⅱ区出土土器実測図 2 ……134
第 127 図　22号墳石室出土装身具・鉄器実測図 ……135
第 128 図　23号墳石室実測図 ……139
第 129 図　23号墳周溝遺物出土状況実測図 ……140

第 130 図　23号墳石室・墳丘内出土土器実測図 ……141
第 131 図　23号墳石室前面出土土器実測図 ……141
第 132 図　23号墳周溝Ⅲ区出土土器実測図 ……142
第 133 図　23号墳石室出土鉄器実測図 ……143
第 134 図　24号墳墳丘・地山整形面測量図 ……144
第 135 図　24号墳墳丘下土坑実測図……折込み
第 136 図　24号墳石室実測図……折込み
第 137 図　24号墳石室出土土器実測図 ……146
第 138 図　24号墳周溝出土土器実測図 ……147
第 139 図　24号墳石室出土鉄器実測図 ……147
第 140 図　25号墳墳丘・地山整形面測量図 ……148
第 141 図　25号墳石室実測図……折込み
第 142 図　25号墳石室内遺物出土状況実測図 ……150
第 143 図　25号墳石室出土土器実測図 ……152
第 144 図　25号墳石室前面出土土器実測図 ……153
第 145 図　25号墳周溝出土土器実測図1……154
第 146 図　25号墳周溝出土土器実測図 2 ……155
第 147 図　25号墳石室出土鉄器実測図 ……156
第 148 図　25号墳石室出土装身具実測図 ……156
第 149 図　26号墳墳丘・地山整形面測量図 ……158
第 150 図　26号墳石室実測図 ……159
第 151 図　26号墳周溝遺物出土状況実測図 ……160
第 152 図　26号墳石室出土土器実測図 ……161
第 153 図　26号墳周溝Ⅱ区出土土器実測図 1 ……162
第 154 図　26号墳周溝Ⅱ区出土土器実測図 2 ……163
第 155 図　26号墳周溝Ⅳ区外出土土器実測図 ……164
第 156 図　27号墳墳丘・地山整形面測量図 ……165
第 157 図　27号墳石室実測図 ……166
第 158 図　27号墳石室遺物出土状況実測図 ……167
第 159 図　27号墳石室出土土器実測図 ……168
第 160 図　27号墳周溝出土土器実測図 ……169
第 161 図　28号墳丘・地山整形面測量図 ……170
第 162 図　28号墳石室実測図 ……171

第163図　28号墳石室出土土器実測図 ……172
第164図　28号墳石室前面出土土器実測図 ……173
第165図　石棺墓周辺地形測量図 ……174
第166図　石棺墓実測図 ……174
第167図　1号土坑実測図 ……175
第168図　2号土坑実測図 ……176
第169図　包含層出土・表採遺物実測図 ……177
第170図　墓道復元図 ……181
第171図　石室平面図1 ……186
第172図　石室平面図2 ……187

表　目　次

表1　柿原遺跡群調査工程表……3
表2　5号墳出土玉類一覧表……52
表3　9号墳出土玉類一覧表……74
表4　16号墳出土玉類一覧表 ……109
表5　22号墳出土玉類一覧表 ……136
表6　25号墳出土玉類一覧表 ……157
表7　古墳計測表……折込み
表8　石室各部計測値と各所の比率・推定尺度 ……185

付　　図

付図　　柿原遺跡群地形図

I　調査の経過

九州横断自動車道建設に伴う採土場となった甘木市柿原所在の柿原遺跡群の発掘調査は昭和55年度初め頃から継続実施してきたが，今回報告するD地区の調査は昭和55年度に実施した地形測量調査と，昭和59年度後半から60年度初め頃にかけて実施した発掘調査の２次に分れる。

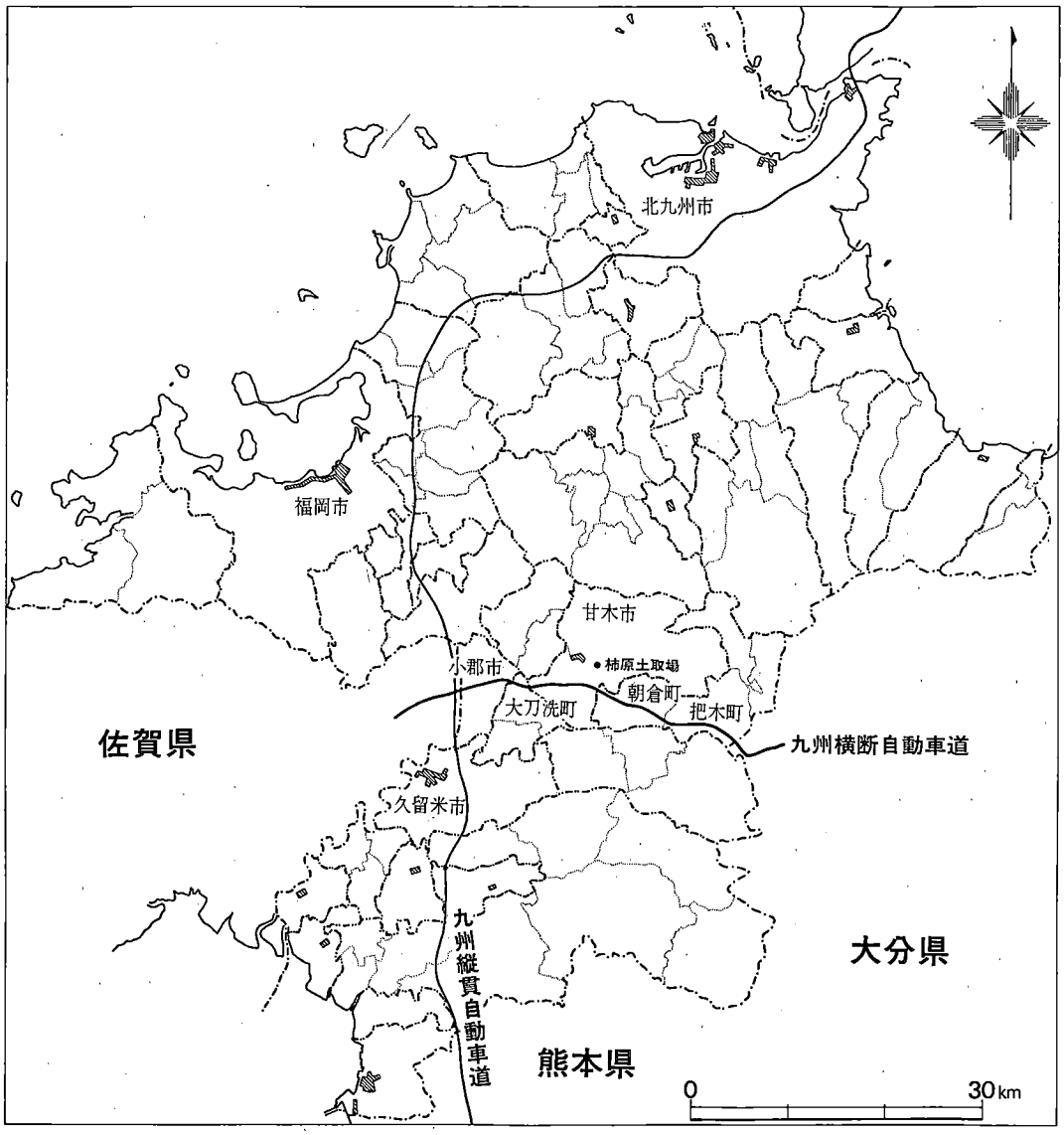
昭和55年度は，D・I・L地区で伐採の終了した部分をそれぞれ地形測量したが，全体の工事工程との関係もあり，実際にD地区を調査した期間は55年５月30日から７月24日までと，55年12月16日から56年１月10日までで，測量基準杭の設定と，平板を用いた地形測量調査を実施している。

昭和59年度は，前半にE・F・L地区の発掘調査を実施しているが，公団側の土採りは次にD地区が急ぐということであったので，F・L地区が一応終了してE地区を発掘中の７月下旬に，D地区の調査を実施する計画を立てた。D地区は昭和55年度の伐採からそのまま放置されていたので，現状はその間に芽ぶいた枝やカヤが繁茂しており伐採のやり直しを要する状況であった。このため甘木市森林組合に伐採を依頼して，伐採した草・木材の片付くまでに１ケ月余りの期間が過ぎた。９月10日から昭和55年度の地形測量でやり残していた部分の地形測量を始めたが，急傾斜の谷部分以外の地形測量が終了したのは９月下旬であった。一方，D地区は開墾を受けていない部分が多く，古墳の墳丘が随所にみられたが，墳丘のみられない部分での遺構の有無を確認する必要もあり，D地区尾根の高所から重機を用いた表土剝ぎ作業を９月中旬から実施した。

地形測量が終了した９月下旬には，E地区の調査での古墳本体の掘り下げ作業が大半終了していて，実測作業と，古墳下の遺構の検出作業が中心となってきていたので，作業員の半数をD地区調査に割いて，９月26日からD地区最高所にある古墳の発掘作業にかかった。

この地区では，古墳の墳丘が随所にみられるもの，石室天井石等の石材を抜取ったために墳丘中央に陥没穴があり，陥没穴の脇にある木は石室部分に根を張って育ったものが多くみられた。また，全体に急傾斜の斜面に占地する古墳が多いので，各古墳の写真撮影のための撮影台を据える場所を確保するのが困難であった。このために，高所にある古墳の排土や周辺の表土を集めて順次斜面を下りながら写真撮影することにした。それでも撮影台の据付けは極めて困難であるので，労働基準順守や安全面では問題があるものの，バックフォーのバケットの先に乗って撮影したものが多い。

D地区尾根では，北側斜面や南側斜面の東側は開墾を受けて段々畑になった部分がほとんどであるが，表土剝ぎや，試掘調査の結果，幸い古墳群の広がりは南側斜面のみで，尾根線上にも古墳の存在はみられなかった。10月中には１～９号墳の掘り下げを，11月中には15号墳までの掘り下げにかかり，12月末には20号墳まで，60年１月末には26号墳まで掘り下げ作業を進めることができた。しかし，この頃には排土はかなりの量になっていた。斜面下にはブドウ畑があり，このブドウ畑のすぐ上の部分に古墳の存在が確認されていたので排土をD地区外に搬出しな



第 1 図　九州横断自動車道路線図

表1　柿原遺跡群調査工程表

年　度	調査地区	調　査　期　間	調査担当者	調査内容	調査面積	調　査　概　要	備　考
昭和55年度	D・I・L	S55.4.26～7.24 S55.11.15～S56.1.10	栗原　石山 新原　佐々木	地形測量	14,700㎡		
〃 56年度	G	S56.10.12～S58.3.29	新原　池辺	発掘調査	900㎡	横穴式石室	報告書第4集
〃 57年度	G・H・S	S57.5.10～S58.3.29	浜田　新原 中間	〃	8,300㎡	横穴式石室，土壙墓 石棺系竪穴式石室	〃
〃　〃	I	S57.6.14～S58.3.31	浜田　新原 中間	地形測量 発掘調査	15,000㎡	横穴式石室，石棺系竪穴式石室 土壙墓，住居跡，縄文土器	報告書第6集
〃 58年度	I	S58.4.4～12.28 S.59.3.1～3.23	新原　中間 小池	発掘調査			〃
〃 59年度	F	S59.4.2～7.24	栗原　新原 小池　伊崎	〃	5,000㎡	横穴式石室，石棺墓，火葬墓，住居跡 甕棺墓，土壙墓，石蓋土壙墓，土壙	報告書第12集
〃　〃	L	S59.6.4～7.26	栗原　小池	〃	1,600㎡	横穴式石室，住居跡	
〃　〃	E	S59.7.3～10.23	栗原　新原 小池　木村	〃	4,600㎡	横穴式石室，石棺墓，火葬墓 住居跡，甕棺墓	報告書第12集
〃　〃	D	S59.9.10～S60.3.30	栗原　新原 小池　日高	地形測量 発掘調査	7,300㎡	横穴式石室，石棺墓	報告書第19集
〃 60年度	D	S60.4.1～4.30	小池　日高	発掘調査	1,000㎡	〃	〃
〃　〃	L	S60.10.22～11.19	中間　小田	〃	3,400㎡	横穴式石室	

ければならなかった。また，各古墳は掘り下げの後に実測作業にとりかかるものの，E地区調査が完了せずにD地区の掘り下げが進んだことと，閉塞石部分と遺物出土状況の実測が急を要し，実測作業が追いつかない状態であった。道路公団と五洋・東亜共同企業体と協議のうえ排土を搬出することになったものの，工事に使用できない伐開除根土はなかなか片付かなかった。その片方で，1号墳のすぐ近くまで土取りが進んできていた。さらに，この間には予期しない出来事もあった。遺物出土状況の写真撮影は済んだが未実測の遺物が12月2日の日曜日に盗難に遭い，後日そのうちの半分程度が戻ったものの遺物を失ったことは残念であった。

発掘後の地形測量は各古墳の周辺は平板を用いて実施したが，それ以外の急傾斜の斜面については航空測量による地形図図化を援用することにして2月19日には，排土の山を除いた部分の全景写真撮影を兼ねて国際航業側でヘリコプターによる航空写真撮影が実施された。この時は天候が悪く，図化には差支えがないものの全景写真としては満足のいくものではなかったので，気球による撮影を22日までの間に計画したが，晴れても風が強すぎて結局撮影はできなかった。2月末には1号墳部分を工事側に譲らなければならない状況であったので，1号墳の分解作業にかかり26日までに終了したが，この後の2日間の降雨の影響で1号墳部分が地すべりを起こしてずり落ちたのには肝を冷やされた。3月には28号墳部分も掘り下げが終了して，3月13日には斜面下部の航空測量を兼ねた気球写真撮影が国際航業と空中写真稲富によって行われた。この後は各古墳の実測作業に専念したが，古墳下から土坑なども発見されて，全ての作業が終了したのは昭和60年度の4月30日である。

調査にあたっては，柿原地権者協議会の山下利雄委員長に地元の調整など種々の協力をいた

だき，作業員として参加された柿原・相窪・堤地区の方々の協力を得た。

昭和59年度と昭和60年度の調査関係者は下記のとおりである。

日本道路公団福岡建設局

局　　長	今村　浩三	
総務部長	菱刈　庄二	安元　富次
管理課長	森　　宏之	
管理課長代理	野口　利夫(前任)	佐伯　　豊

日本道路公団福岡建設局甘木工事事務所

所　　長	乗松　紀三	
副 所 長	西田　　功	
副所長（技術担当）	中村　義治	
庶務課長	松下　幸男(前任)	徳永　　登
用地課長	岩下　　剛	
工務課長	山口　宗雄(前任)	後藤二郎彦
小郡工事区工事長	友田　義則	
甘木工事区工事長	猪狩　宗雄	
朝倉工事区工事長	平沢　　正(前任)	小手川良和
杷木工事区工事長	前田　雄一(前任)	山中　　茂

福岡教育委員会

総　括

教育長	友野　　隆	
教育次長	安部　　徹	
管理部長	伊藤　博之(前任)	大鶴　英雄
文化課長	前田　栄一	
文化課長補佐	中村　一世(前任)	平　　聖峰
文化課長技術補佐	宮小路賀宏	
文化課参事補佐	栗原　和彦	

庶　務

文化課庶務係長	松尾　　満(前任)	平　聖峰（兼任）
文化課事務主査	長谷川伸弘	

調　査

文化課調査第二係長	栗原　和彦(前任)	宮小路賀宏（兼任）
文化課技術主査	井上　裕弘	

文化課主任技師	木下　修(前任)		
文化課主任技師	高橋　章		
文化課主任技師	児玉　真一(前任)		
文化課主任技師	新原　正典(前任)		
文化課主任技師	中間　研志		
文化課主任技師	佐々木隆彦		
文化課主任技師	小池　史哲		
文化課技師	伊崎　俊秋		
文化課技師	小田　和利		
文化課技師	緒方　泉		
文化課文化財専門員	木村幾多郎		
文化課臨時職員	日高　正幸		
文化課臨時職員	森山　栄一(前任)		
文化課臨時職員	宮田　浩之(前任)		
調査補助員	高田　一弘	武田　光正	佐土原逸男
	平嶋　文博	向田　雅彦	田中　康信

柿原遺跡群全体の調査工程は表1に示すが,D地区の調査では,主として,昭和55年度は新原・日高，昭和59・60年度は栗原・新原・小池・日高・武田が担当したが，多くの方々の協力を受けて実施し，各古墳の写真撮影には福島建設の協力を得た。

遺物整理・報告書の作成

九州横断自動車道の開通に向けて報告書作成よりも発掘調査の終了が急がれる切迫した状況で，集中的には成しえていない。柿原遺跡群に関係する報告書作成作業は，昭和62年度にE・F地区分の報告書を作成したあと,引続きD地区にとりかかったが諸般の事情で昭和63年度と平成元年度にわたることとなった。D地区の遺物整理・報告書作成での関係者は以下のとおりである。

昭和63年度

総　括

文化課長	葉石　勲
文化課長補佐	平　聖峰
文化課長技術補佐	宮小路賀宏
文化課参事補佐	柳田　康雄（調査班総括）

庶　務

文化課庶務係長　　池原　脩二

文化課主任主事　　沢田　俊夫

整　理

文化課技術主査　　井上　裕弘（調査班主任）

文化課技術主査　　小池　史哲

文化課臨時職員　　日高　正幸

文化課整理指導員　　岩瀬　正信（土器復原作業指導）

整理補助員　　武田　光正　　豊福　弥生　　塩足　里美

平成元年度

総　括

文化課長　　六本木聖久　　葉石　　勲（前任）

文化課長補佐　　平　　聖峰

文化課長技術補佐　　宮小路賀宏

文化課参事補佐　　柳田　康雄（調査班総括）

文化課参事補佐　　井上　裕弘（調査班副総括）

庶　務

文化課管理係長　　池原　脩二

文化課主任主事　　沢田　俊夫

整　理

九州歴史資料館技術主査　　石丸　　洋（遺物写真撮影）

筑豊教育事務所技術主査　　新原　正典

福岡教育事務所技術主査　　小池　史哲

文化課臨時職員　　日高　正幸

整理補助員　　武田　光正　　豊福　弥生　　塩足　里美

出土遺物の整理は，九州歴史資料館と文化課甘木調査事務所でおこなったが，土器類の水洗・接合・復原には小島佐枝子・中塩屋リツ子・中村紀代子・尾花道子・石井紀美子・藤井カオル，土器類の実測には高瀬照美・速見公己・松島邦子，遺構図の整理・浄書には鶴田佳子・関久江・原田和枝，写真の撮影・整理には須原悦子・矢野明美の各氏の協力を得た。このほかにも，発掘作業，報告書作成作業を通じて多くの方々の有益な助言・協力を得ることができた。感謝に耐えない。　　（小池）

II　位置と環境

柿原遺跡群は，福岡県甘木市大字柿原字若山，同字大谷と，大字板屋字城ノ下の一部にかけて所在する。

柿原D地区は，柿原採土場の最高所標高155.67m位から八手のように広がる丘陵のうち東に延びる丘陵で，標高130m程の所からはやや緩やかな尾根線を呈し，標高80m位で南側に向きを変えてさらに緩やかな尾根が続く。この尾根線のくびれの部分の南側には小さな谷が入っていて，蓮池に注ぐ導水路もこの部分を通る。一方，前回報告したE地区との間には小さな谷があり，谷の上部は地滑りによる崖をなしている。この二つの小さな谷に挟まれた部分は陽あたりのよい南斜面であり，標高55m位で蓮池の水面に没する。

D地区の調査範囲は大字柿原字大谷の1361, 1362, 1363, 1364, 1365, 1366-1, 1366-2, 1368と，大字板屋字城ノ下の621-1, 621-2, 621-4, 621-5, 621-6, 631にわたり，総面積は35000㎡程度に達するが，試掘調査などの結果遺構の分布しない北側斜面などを除いて，発掘調査面積は約15000㎡に及ぶ。

この調査区では横穴式石室を内部主体とする古墳が群集しているが，E～L地区では次のような遺構が発見されている。

E・F地区……縄文時代土坑6，弥生時代住居跡7・木棺墓14・石蓋土壙墓4・甕棺墓25，古墳時代横穴式石室22・石棺墓4，火葬墓5など

G地区……古墳時代横穴式石室1・竪穴式石室2・石蓋土壙墓1

H地区……古墳時代横穴式石室3・竪穴式石室4・石蓋土壙墓2・土壙1

S地区……古墳時代横穴式石室1・竪穴式石室1・土壙1

I地区……古墳時代横穴式石室22・竪穴式石室55・小石室3・火葬墓7・住居跡1・甕棺墓1，縄文時代遺構など

L地区……古墳時代横穴式石室4・住居跡3

これらの遺構の分布は付図に示すが，竪穴式石室は石棺系のものが多いので付図では石棺として一括した。分布状況からすると，縄文時代の遺構は緩傾斜地に，弥生時代の遺構は尾根の先端部に，横穴式石室を内部主体にする古墳は南斜面に多く分布していて，D・E地区の先端部の削平によって弥生時代の遺構を失った可能性は高いであろう。また，D地区での古墳の分布は，他の地区に比して密度が高く，急傾斜地に占地している。

柿原遺跡群周辺の遺跡分布については，柿原古墳群・遺跡群のI～IIIをはじめ九州横断自動車道関係の文化財調査報告や，甘木市文化財調査報告書に記述されていて，特に弥生・古墳時

代に関しては詳しい。九州横断自動車道関係の発掘調査などで新知見も急増しているが，ここでは，奈良時代・平安時代を中心に周辺の遺跡を見てみることにしよう。

九州横断自動車道関係の発掘調査では，甘木市立野遺跡・宮原遺跡・高原遺跡・塔ノ上遺跡，朝倉町大還端遺跡・石成久保遺跡・中道遺跡・西法寺遺跡・大庭久保遺跡・上の原遺跡・狐塚南遺跡・才田遺跡・長島遺跡・妙見遺跡・原の東遺跡・鎌塚遺跡・山田遺跡・長田遺跡・金場遺跡・恵蘇山遺跡・稗畑遺跡・大迫遺跡などで，この時期の遺構・遺物が発見されている。

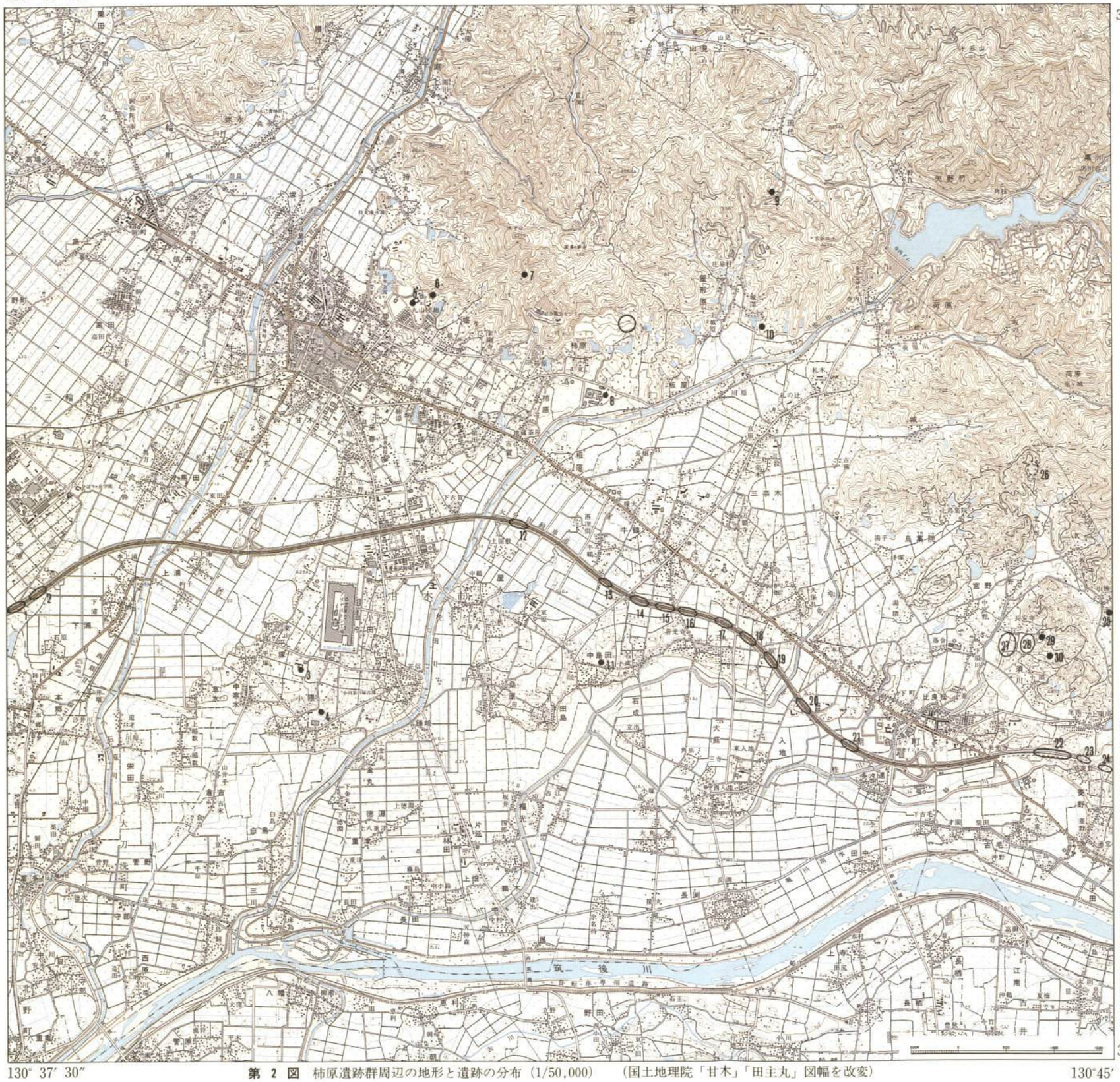
特に，奈良時代の住居跡は多数発見されていて，宮原遺跡・塔ノ上遺跡・中道遺跡・西法寺遺跡・大庭久保遺跡・上の原遺跡・狐塚南遺跡・才田遺跡・長島遺跡などで700軒以上が発掘調査された。甘木・朝倉の平野部を横断道関係で帯状に調査したことになるが，甘木市小隈松山遺跡・金川中島田遺跡・小田道遺跡・柿原野田遺跡などでも住居跡は発見されており，朝倉平野一帯で多数の住居跡が群をなし，当時の集落を形成していたことであろう。

墓地では，いわゆる終末期の群集墳は甘木市堤鬼迫古墳群・迫谷古墳群，朝倉町北八坂B古墳群・赤林古墳群などが知られる。いずれも南に開口する特徴があり，この外にも朝倉山塊の山麓部南斜面を中心に多数の該期古墳が存在するであろう。また土壙墓は甘木市立野遺跡・朝倉町大還端遺跡・上の原遺跡・長島遺跡などで発掘されている。

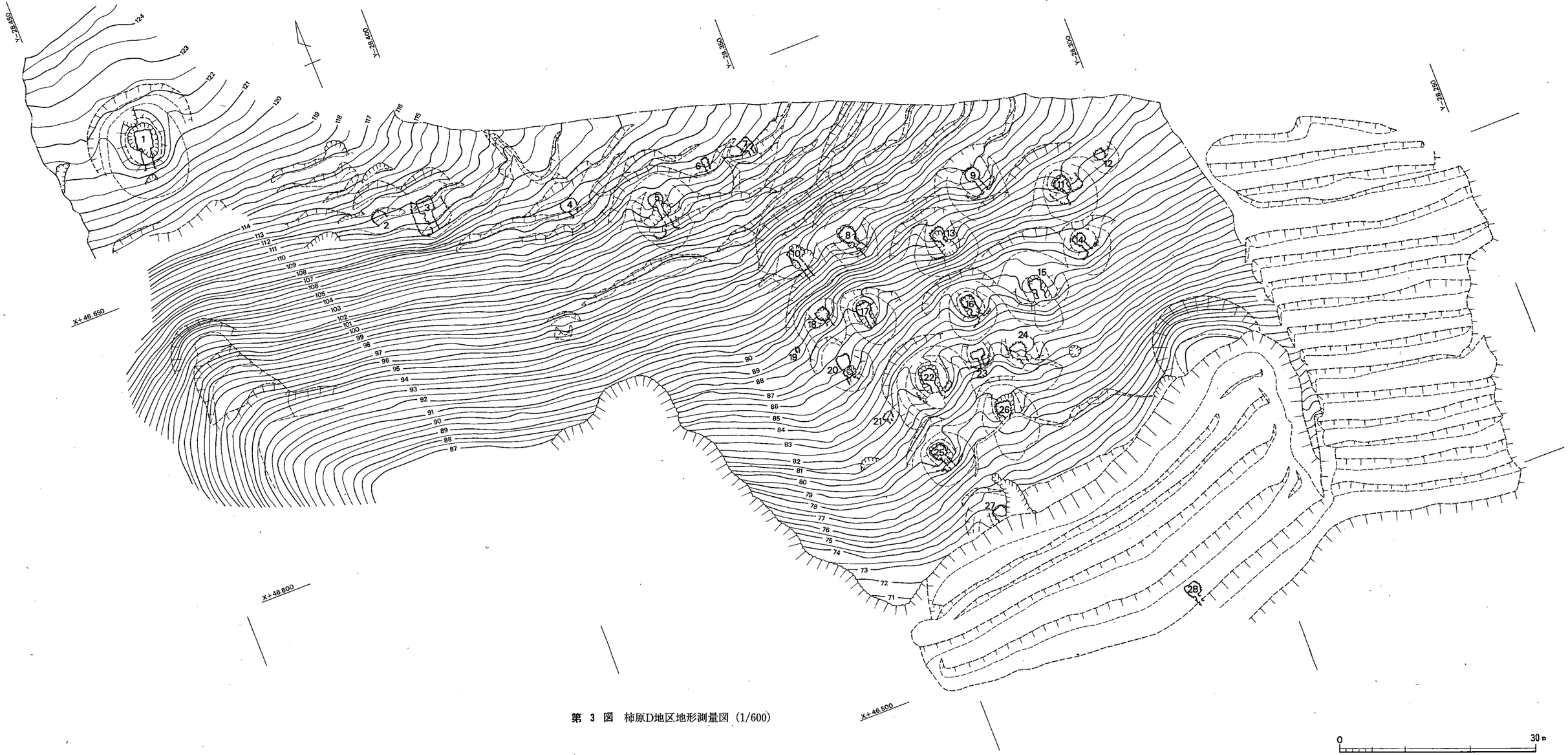
寺院関係では，甘木市堂ケ尾廃寺・朝倉町長安寺廃寺などがある。堂ケ尾廃寺では大宰府史跡出土瓦と同型の瓦が出土している。長安寺廃寺は奈良時代の瓦と「大寺」・「寺家」銘の墨書土器の出土と礎石群がある。

また，長安寺の地は斉明天皇の朝倉橘廣庭宮跡伝承地でもあり，百済救済のために筑紫に下り朝倉の地で崩じられる文献記録に比定されていた。1973～1975年に九州歴史資料館によって発掘調査がなされ，宮跡の積極的な痕跡は認められなかったが，宮野・須川の一帯をはじめとし朝倉山塊裾部の地にあった可能性は否定できない。

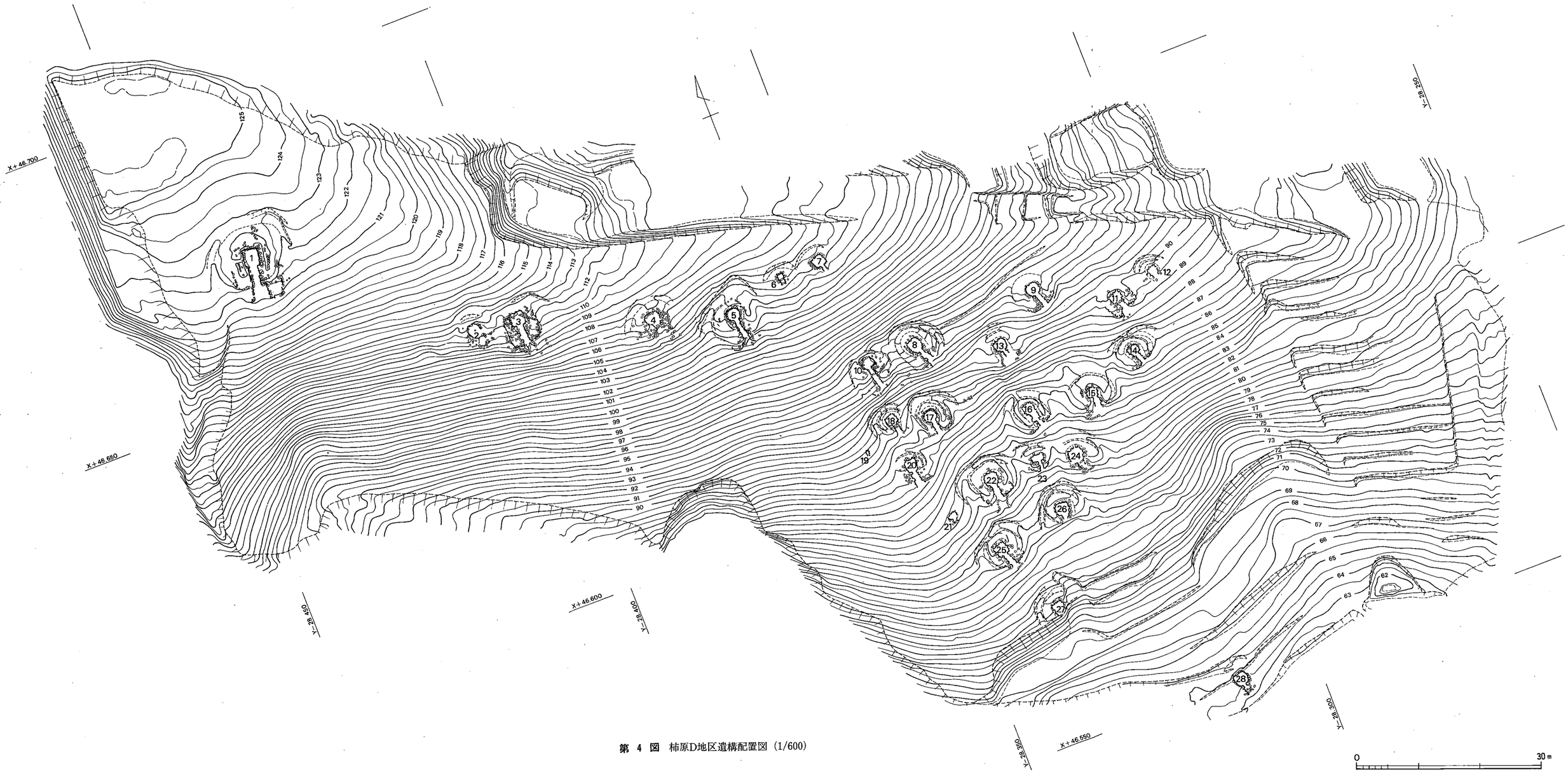
甘木・朝倉の平野部にある住居跡群や墓地，山麓部の終末期の古墳には，斉明天皇の朝倉橘廣庭宮の時期と前後するものが多数あり，当時の環境を知る上に欠かすことのできない重要な位置を占めていると言えよう。



第 2 図　柿原遺跡群周辺の地形と遺跡の分布（1/50,000）　（国土地理院「甘木」「田主丸」図幅を改変）



第 3 図 柿原D地区地形測量図 (1/600)



第 4 図 柿原D地区遺構配置図（1/600）

III　遺構と遺物

柿原D地区では，横穴式石室28基，石棺墓１基，土壙３基の遺構を調査した。

１．１号墳

墳　丘（図版５－１，第５・６図）

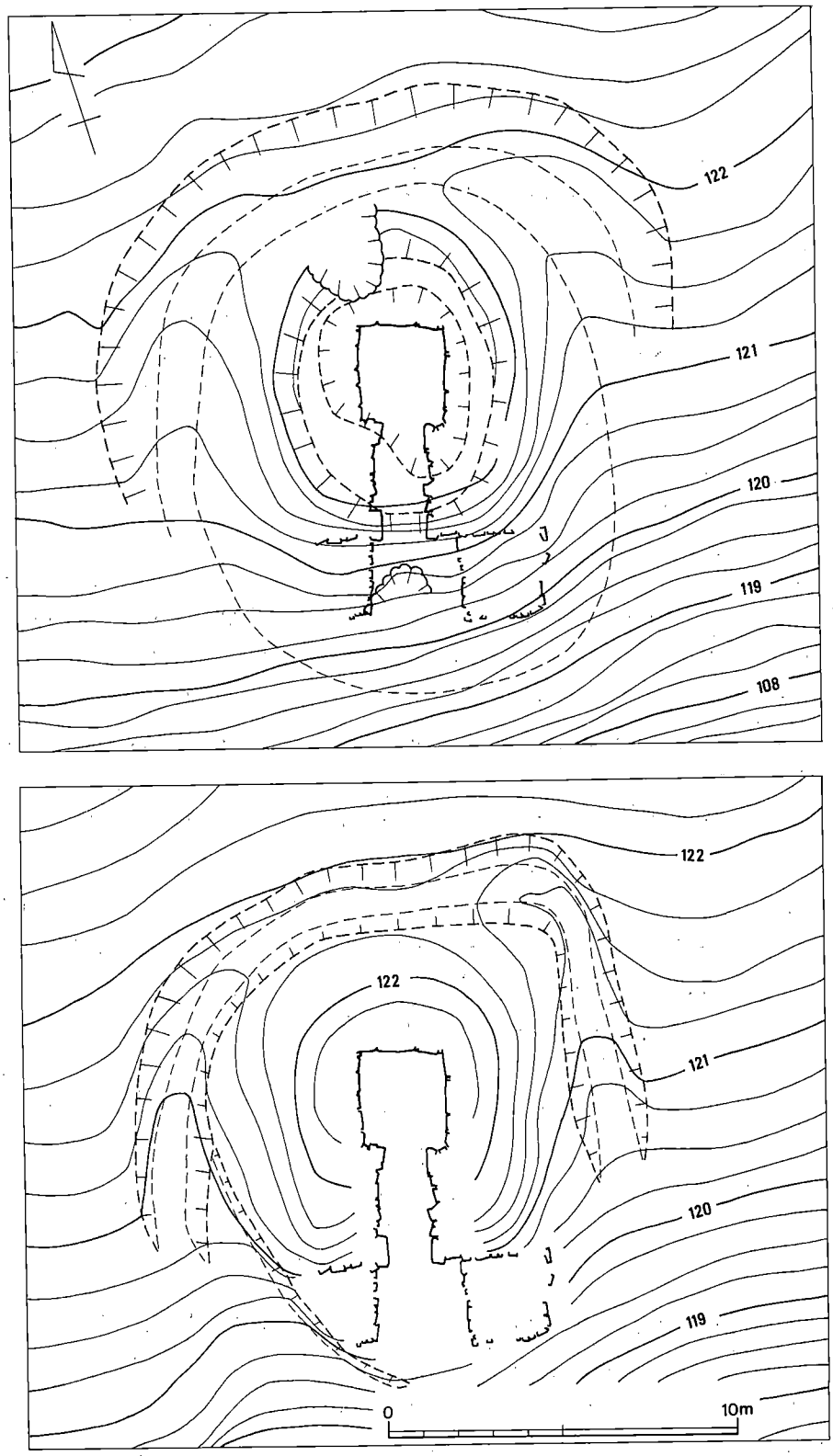
D地区古墳群中で最高所の標高121mに位置する古墳である。調査前の観察では，南北方向に15m，東西方向に12mの楕円形プランで，北側の馬蹄形溝を含めると17m強の大きさである。墳丘高は約２mを測る。墳頂部は石室天井石が取去られて陥没し，石室内部が露出した状況であった。また，昭和55年度の地形測量時には南西部裾は旧状を留めていたが，発掘調査開始時の昭和59年度には防火帯として設けられたらしい重機による削平を受けていた。発掘調査では，石室内の掘り下げと墳丘部分での石室の左右と後方に設定したトレンチを掘り下げたが，各トレンチ内に旧表土とみられる堆積土は確認しえなかった。

この古墳は，尾根線に近い南側斜面上に等高線に直交させて石室を構築している。地山整形では北側の標高122m位を上端として馬蹄形溝を削り，標高121.5m位から平坦面を形成させて，標高120m位から低い所は削り出した土砂を埋めてテラス状に整地している。

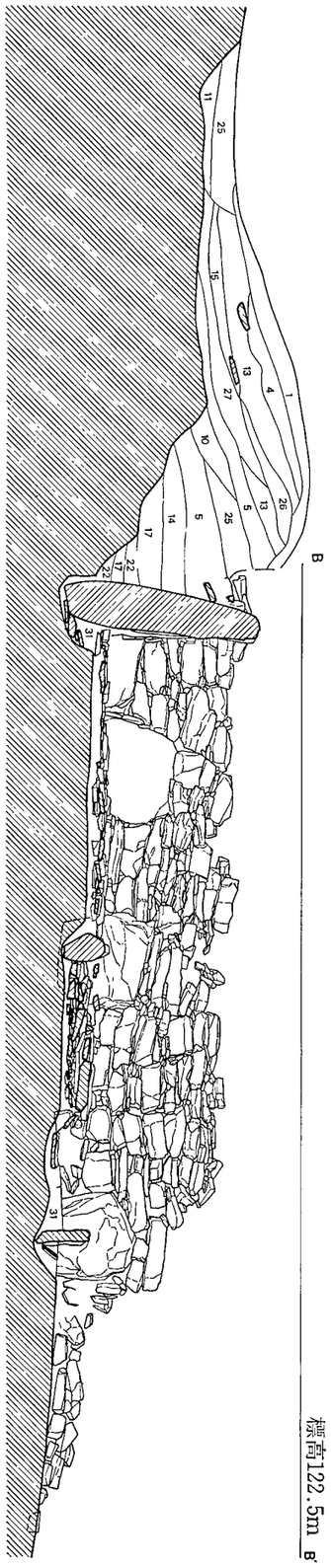
調査では，断面土層図作製時に，礫混じりの黄褐色土の硬い面を地山と考えていたが，最終的に掘方を確認した際に墳丘堆積土を除去して地山でないことを知るに至ったために，土層図としては不十分なものとなった。結果的にはこの面は石室構築中途段階の仮の整地面であって，この下に旧表土がある。

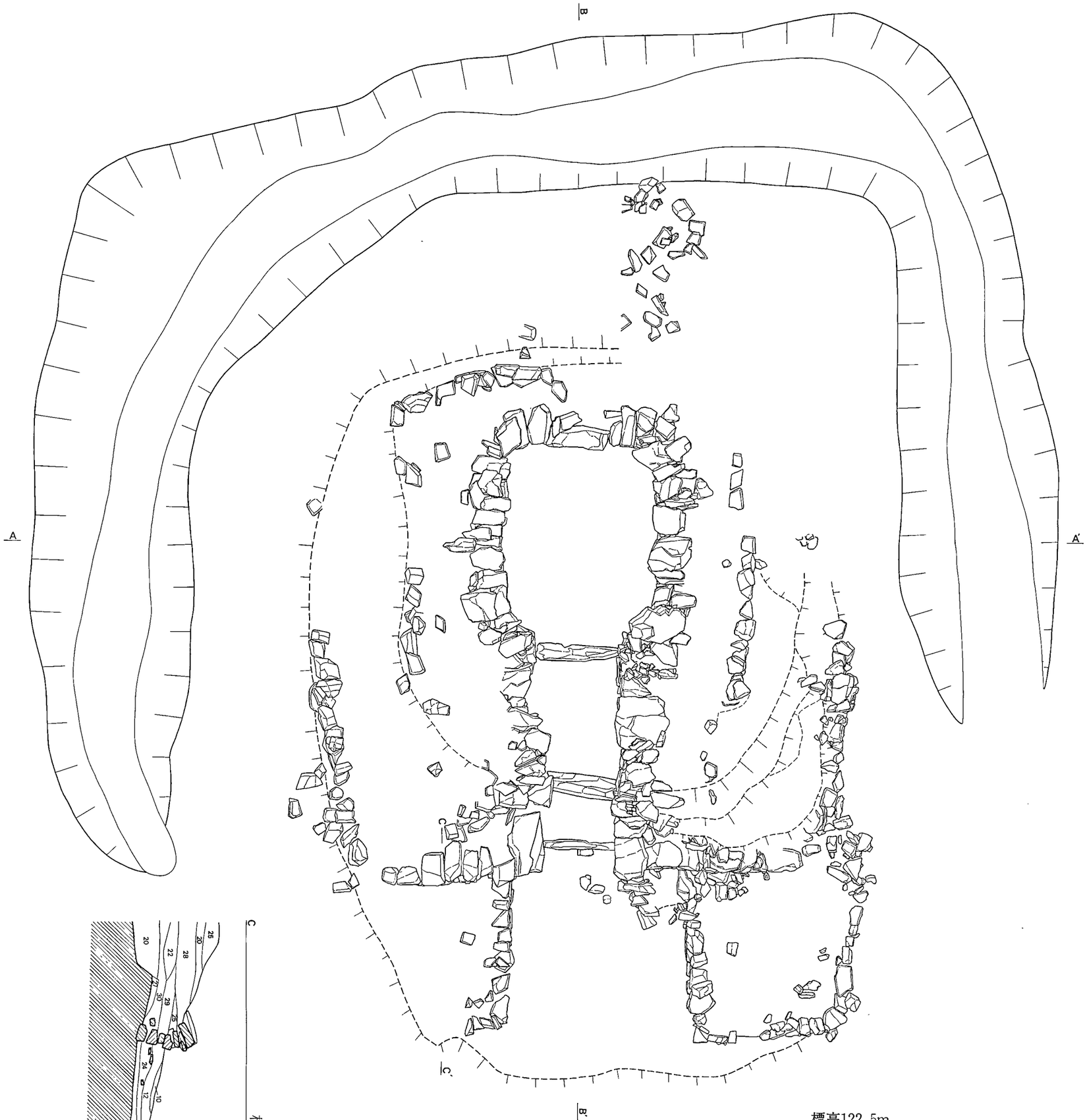
第５図下の地山整形面測量図では，周溝部分は地山整形を示し，墳丘部分は表土・再堆積土を取除いた状態を示している。

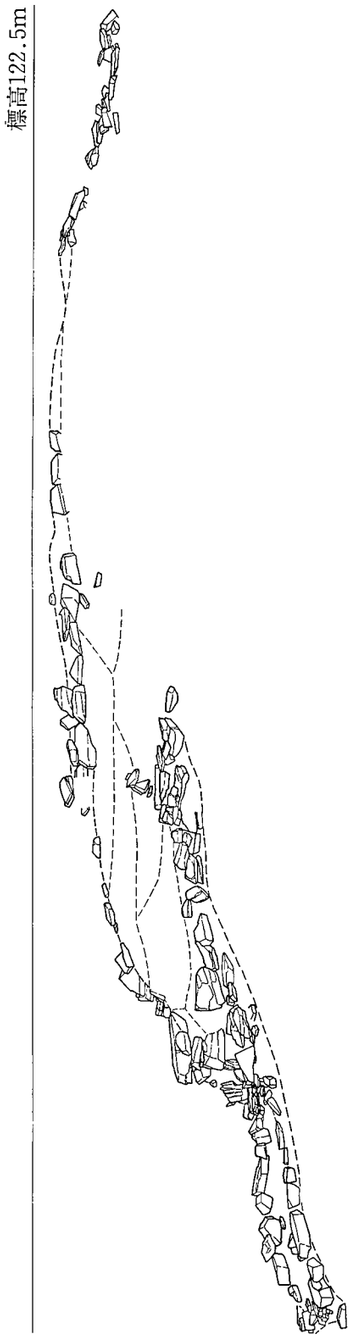
また，第６図は同じ状態の墳丘を実測したものである。墳丘には緑色片岩のやや扁平な塊石を積んだ列石が巡る。標高122m前後の高さに巡る列石は，部分的に崩壊しているものの，東西・南北方向ともに4.8m程度の方形プランに配されていて，２段程度残っているが，それより上は削平を受けているためにはっきりしない。また，標高120.5～121.3m位に東西7.0～7.7mの列石が石室前端に続くように配置されていて，北方向には3.5m分まで延びている。この列石は前面

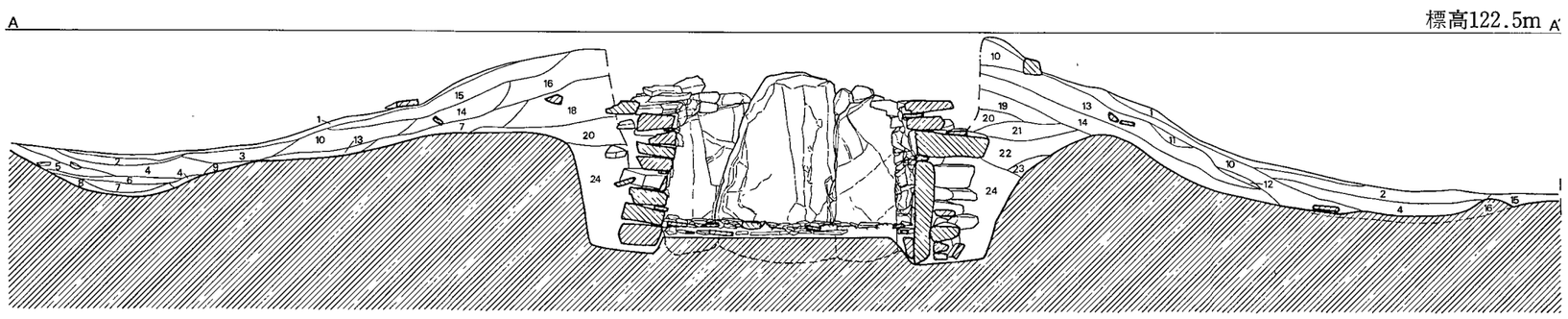


第 5 図　1号墳墳丘・地山整形面測量図（1/200）



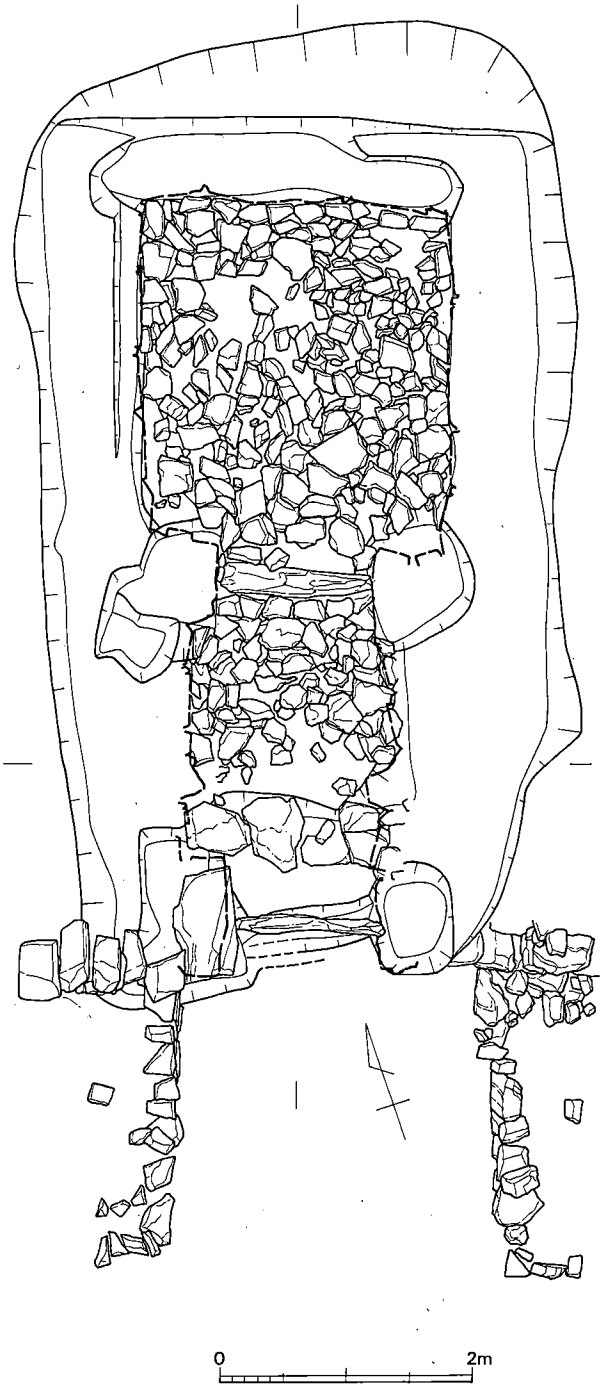






1．表土
2．茶褐色土
3．黄色砂質土
4．暗茶褐色土
5．暗茶褐色土・暗赤褐色土
6．暗茶褐色土・黒褐色土
7．暗茶褐色土・黒色土
8．黒褐色土・暗灰色土
9．黄色土
10．茶褐色土
11．暗茶褐色土
12．暗茶褐色土（礫混り）
13．暗赤褐色土
14．黄褐色土（礫混り）
15．黄褐色土
16．暗赤褐色土（礫混り）
17．暗茶褐色土・黄褐色土
18．暗黄褐色土（礫混り）
19．赤褐色土・淡黄褐色粘質土
20．黄褐色土・淡赤褐色粘質土
21．暗赤褐色・暗茶褐色粘質土
22．暗黄褐色・淡赤褐色粘質土
23．淡黄褐色土
24．暗茶褐色・赤褐色土
25．赤褐色土
26．淡茶褐色土
27．暗黄褐色土
28．赤褐色土（礫混り）
29．淡赤褐色土
30．㉙（礫混り）
31．暗茶灰色土（礫混り）

第 6 図　柿原D地区１号墳墳丘実測図（1/60）



第 7 図　1号墳石室床面と掘り方実測図（1/60）

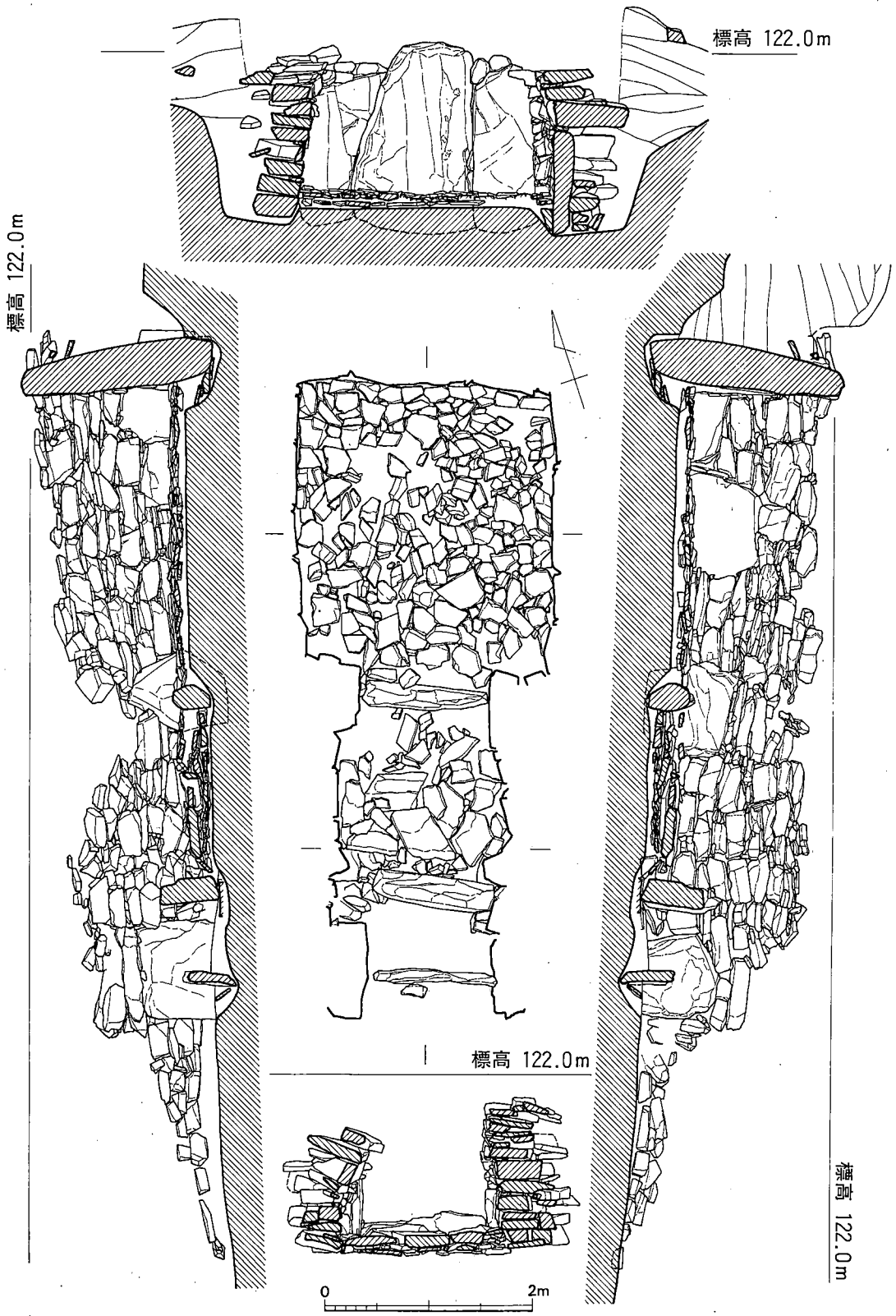
では1.0m前後の高さを保っているが，側面では１・２段積まれているだけである。さらに前面には，方2.2～2.4mで区画される列石が，左右に設けられている。この区画列石は現状では１段程度残るだけだが，区画内堆積土の観察からすると，前面側にも３段程度積まれていたものと推定できる。なお，前面列石・区画列石ともに基底部は旧表土面にくい込んで据えられている。

墳丘は，東西約12m，南北約10mの規模で，前面区画部分を加えると南北約12.5mの規模になる。墳形は，北西側の周溝部分で円形ともみれる弧状を呈するが，それ以外の周溝部分では方形になることと，墳丘上に巡る列石が方形であるので方墳である。墳丘の高さは，石室壁体の遺存状況などからみて３m以上であろう。

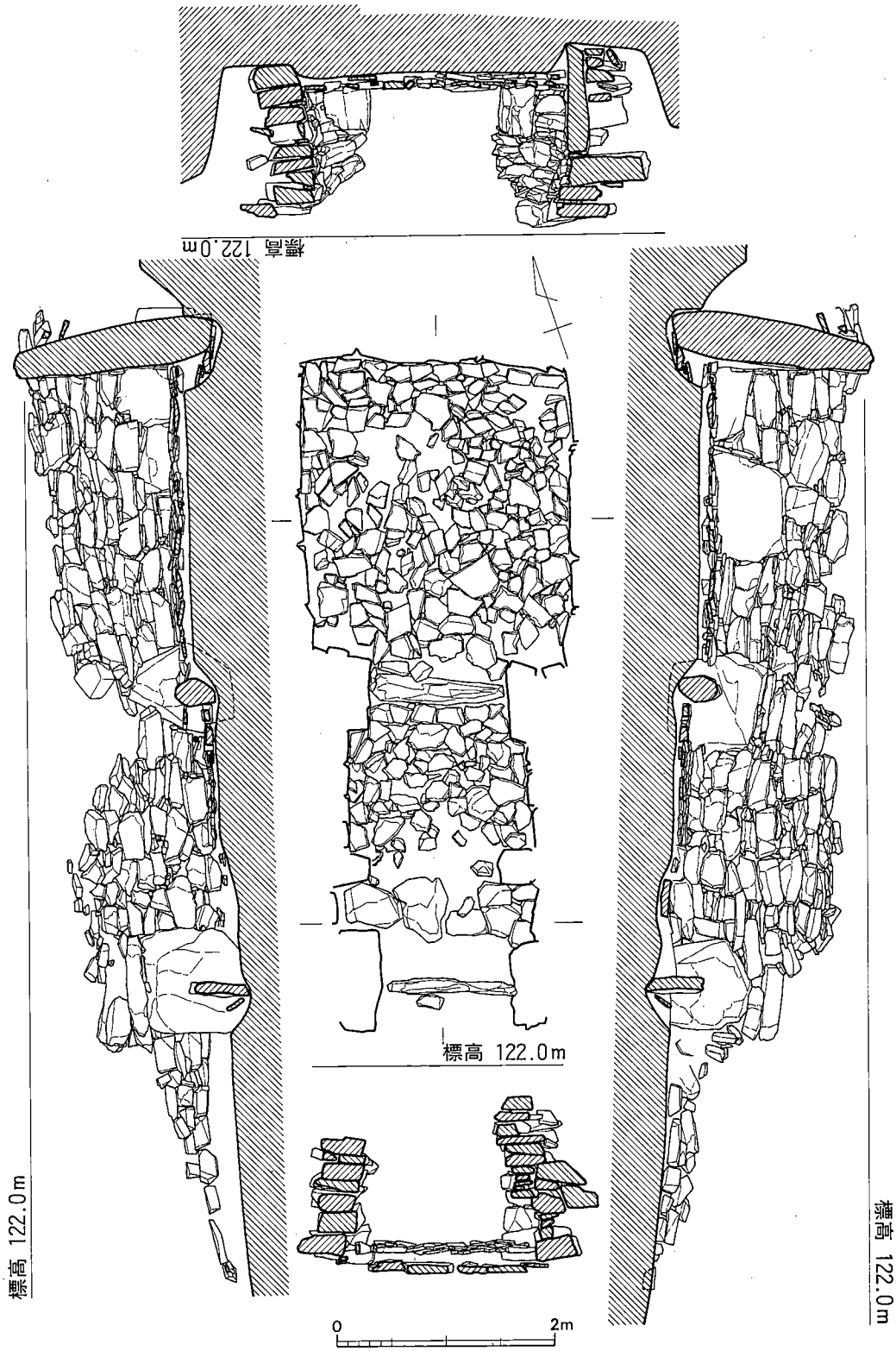
主体部（図版６～10，第７～11図）

この古墳の主体部は，主軸方位をN15°Eにとり，南南西方向に開口する単室構造の横穴式石室である。

石室の掘方は7.5m×4.4mの不整長方形プランを呈して



第 8 図　1号墳石室実測図1 (1/60)



第 9 図　1号墳石室実測図2（1/60）

いる。奥壁側では深さ0.8m程だが，前面側では浅くなっている。前面側は掘り方と盛土との区別の無いのが本来の姿かも知れない。

石室は天井部と壁体の上部を欠く。玄室は既に盗掘を受け，床面の一部も攪乱されている。

石室全長は，左側壁で6.20m，右側壁で6.00mである。また，前面区画を含めると左側壁で8.40m，右側壁で8.50mの長さになる。

玄室の長さは左側壁で2.60m，中軸線，右側壁で2.70mである。幅は奥壁で2.40m，玄門側で2.30m，中程の最大幅2.50mを測り，正方形に近いがわずかに主軸で勝る長方形プランを呈している。奥壁には3枚の緑色片岩板石が並べられている。中央の石は高さ118cm，幅68～113cm，厚さ25～45cmの大きな板石を据えて鏡石とし，両脇に高さ140～160cm，幅160cm前後の板石が据えられているが，約5°内傾している。鏡石の上には小振りの板石が小口積みされていたと推定されるが，現状では左側壁寄りに若干残る程度である。奥壁は床面から1.50m高さまでが残っている。

左側壁は，奥壁側でやや小振りの板石を立てて腰石とする部分がみられるものの，小振りの板石を小口積みして持ち送り，約9°内傾している。現状では7～8段で1.37mの高さが残っている。右側壁は中央に高さ，幅ともに50cm，厚さ20cm程のやや大振りの板石を鏡石のように据えて，奥壁側はやや小振りの板石で腰石とするが，玄門側は基底部から小振りの板石を小口積みして持ち送り，わずかに内傾している。玄門側では7～8段で1.37mの高さである。

玄門部分の袖石は，左側で高さ95cm，幅78cm，厚さ41cmの緑色片岩の板石というよりは塊石に近い石が据えられて，右側が高さ90cm，幅90cm，厚さ25cmの緑色片岩の板石が据えられていて，玄門幅は1.20mを有す。框石は左右の袖石のほぼ中ほどに，長さ120cm，幅37cm，厚さ25cmの細長い板石が玄室床面より約0.10m出る高さに据えられている。

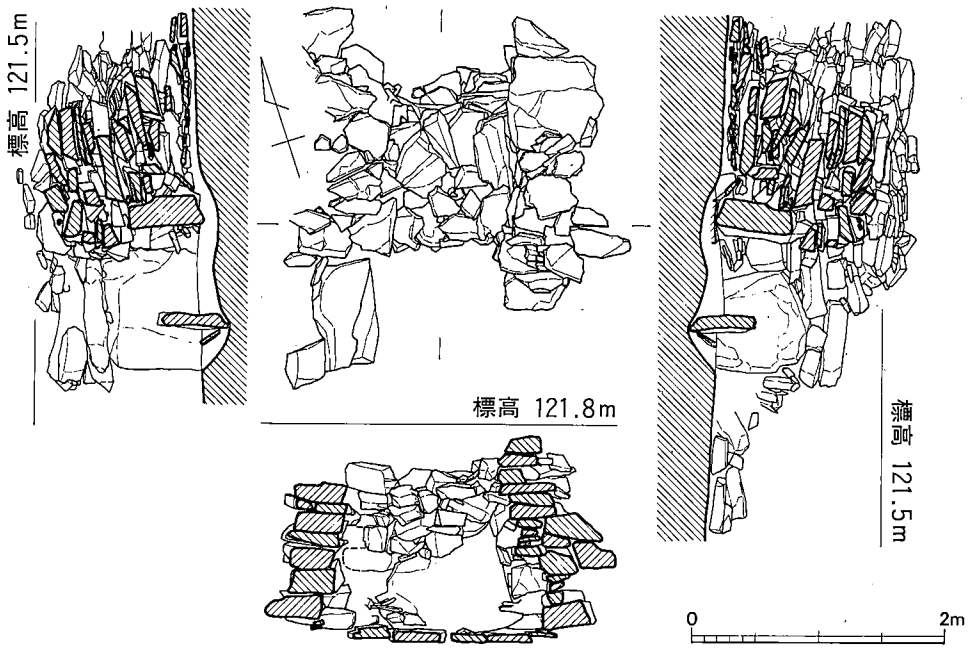
羨道は，主軸長が3.40m，幅は羨門部で1.19mであるが，中ほどでは1.55mを有する。羨門には左右ともに玄門と同じような大きな石が据えられている。羨道の側壁は左右ともに小振りの板石を基底部から小口積みされて，持ち送りで約10°内傾しているが，左側壁で8段約1.20m，右側壁で9段約1.40mの高さが残っている。なお，玄門・羨門の袖石の上には他の部分よりも広めの板石が乗っている。また全体に壁体上部の石は小振りになる傾向がある。羨道の床面では，羨門の袖石をつなぐようにして長さ120cm，幅53cm，厚さ13cmの板石を据えた仕切石がある。また，これより約0.60m内側の部分にも長さ115cm，幅50～75cm，厚さ25cmの板石が立てられている。この内側の仕切石は床面に埋め込まれるのではなく，床面より低く敷き並べられた扁平石の上に据えられている。

最終時には玄室と羨道の敷石の高さは同じであるが，羨道の敷石は玄室のそれに比して大振りの扁平石が使用されている。しかし羨道ではその下位の床面にもう1枚の敷石があり，玄室とほぼ同じ大きさの扁平石が使用されて，敷石高さは玄室より約0.20m低い。

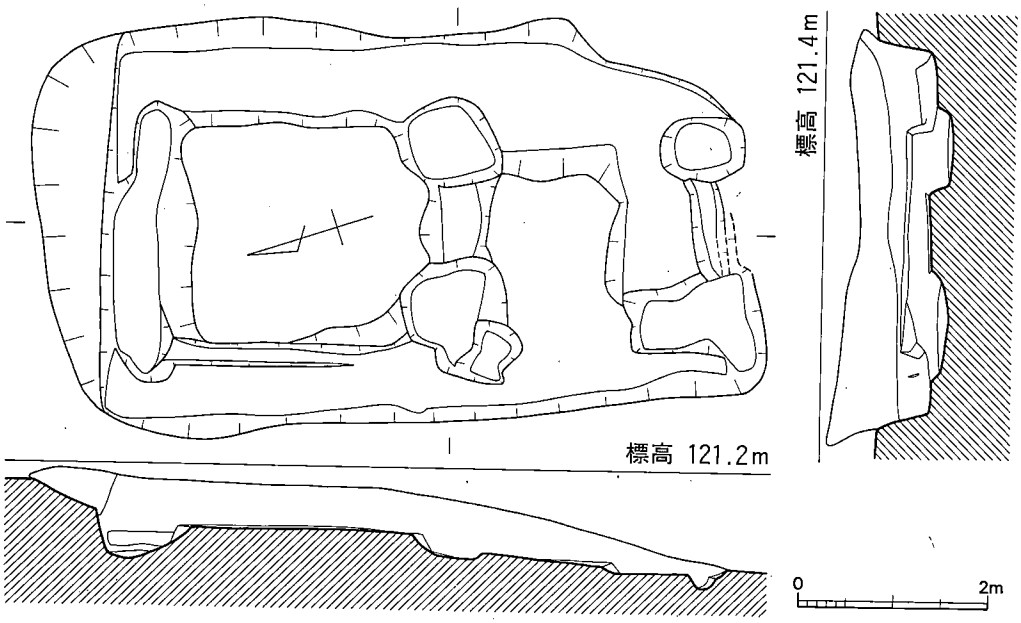
このような，仕切石の配置や敷石の相違は，追葬と関連するものであろうが，左右の側壁壁体にも中途からの補修の跡をみることができる。第9図の石室実測図には当初の壁体と下位床面を図示しているが，平面図で玄門袖石と羨門袖石との間に作られる空間は，長軸で1.80m，玄門部幅1.60m，羨門部幅1.80mの方形に近いプランであるが，左右側壁の中途に小規模な袖石状の突出がみられ，幅1.20mなので玄門と羨門の幅にほぼ相応している。右側壁では羨門袖石の約0.50m奥に小振りの石を平積みさせた袖石状施設であり，これと羨門の袖石に板石が架けられ，さらにこの板石の下に0.60m高さの小さな空間が作られている（図版8－3）。左側壁では羨門袖石の約0.40m奥に小振りの石を平積みさせた袖石状施設であり，2段上に架けた石の下に0.3m高さの小さな空間が作られている（図版7－3）。この施設は，あたかも羨道のなかに前室空間を作ろうとしたもののようであり，床面にも高低差があるので，本来はこの部分に仕切石が据えられていたのかも知れない。またこの部分には床面の敷石がない。

一方，第8図の石室実測図は追葬時の状態を図示している。羨道部の袖石状施設の羨門側に仕切石が立ち，左右両側壁の空間部分の前に平積みの壁体が追加されている。

石室閉塞は，羨道部の袖石状施設前面に据えられた2番目の仕切石から玄門側に，板石のみで小口積みされている。羨門側の前面は仕切石の上にほぼ垂直に面が揃い，玄門側も急傾斜に積まれていて，間に土砂等の充填のない丁寧な閉塞状態である。奥行きは1.40mで，高さ1.30m



第 10 図　1号墳石室閉塞状況実測図（1/60）



第 11 図　1号墳主体部掘り方実測図 (1/80)

分が残されていた。なお，閉塞と羨門の仕切石の間には奥行き0.60mの空間がある。

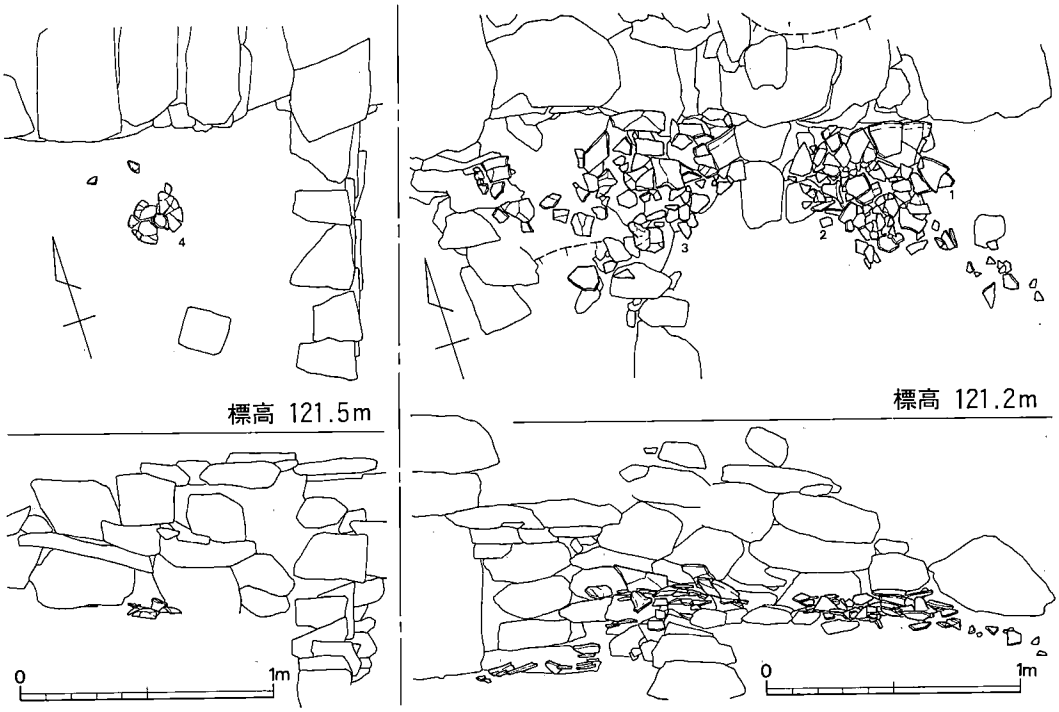
石室の外側には，羨門の袖石から両側に墳丘前面の列石がつづいている。また左側壁では羨門の袖石の裏側からそのまま前庭部に延びる列石がつづき，方向としては羨道左側壁と一直線になって，2.20mの長さをもって直角に曲がる。ただし，この先は削平のために残っていない。右側壁では羨門の袖石から0.80mさがった位置から前庭部に延びる列石が2.43mの長さでつづき，やはり直角に曲がって方形の区画を作っている。両側の列石区画に挟まれた部分は，石組墓道ともいうべき構造にもなっているが，広さとしては2.40m×2.40mの規模である。

石室を構成する石材は，全て緑色片岩や緑泥片岩であるが，奥壁の石や側壁の鏡石状の石・玄門の袖石・羨門の袖石などには，硬い質の石材が使用されている。第11図は，石室構築材を全て除去した，主体部の掘方である。玄室部分は高く削り出されていて，前述した硬い質の石材を使用する部分は深く掘り下げられている。

遺物出土状況（図版10－3・11－1・2，第12図）

この古墳は，尾根の高所にあり，天井石除去などで開口していたためであろう，精査したにもかかわらず，石室内部からは鉄滓以外の遺物の出土は皆無であった。

石室外では，左側前面区画の墳丘列石沿いで，土師器高杯が1点伏せたような状態で出土し（第12図左），右側前面区画の墳丘列石沿いで，土師器甑が2点と土師器甕が2点並んで倒置し



第 12 図　1号墳前面区画遺物出土状況実測図（1/30）

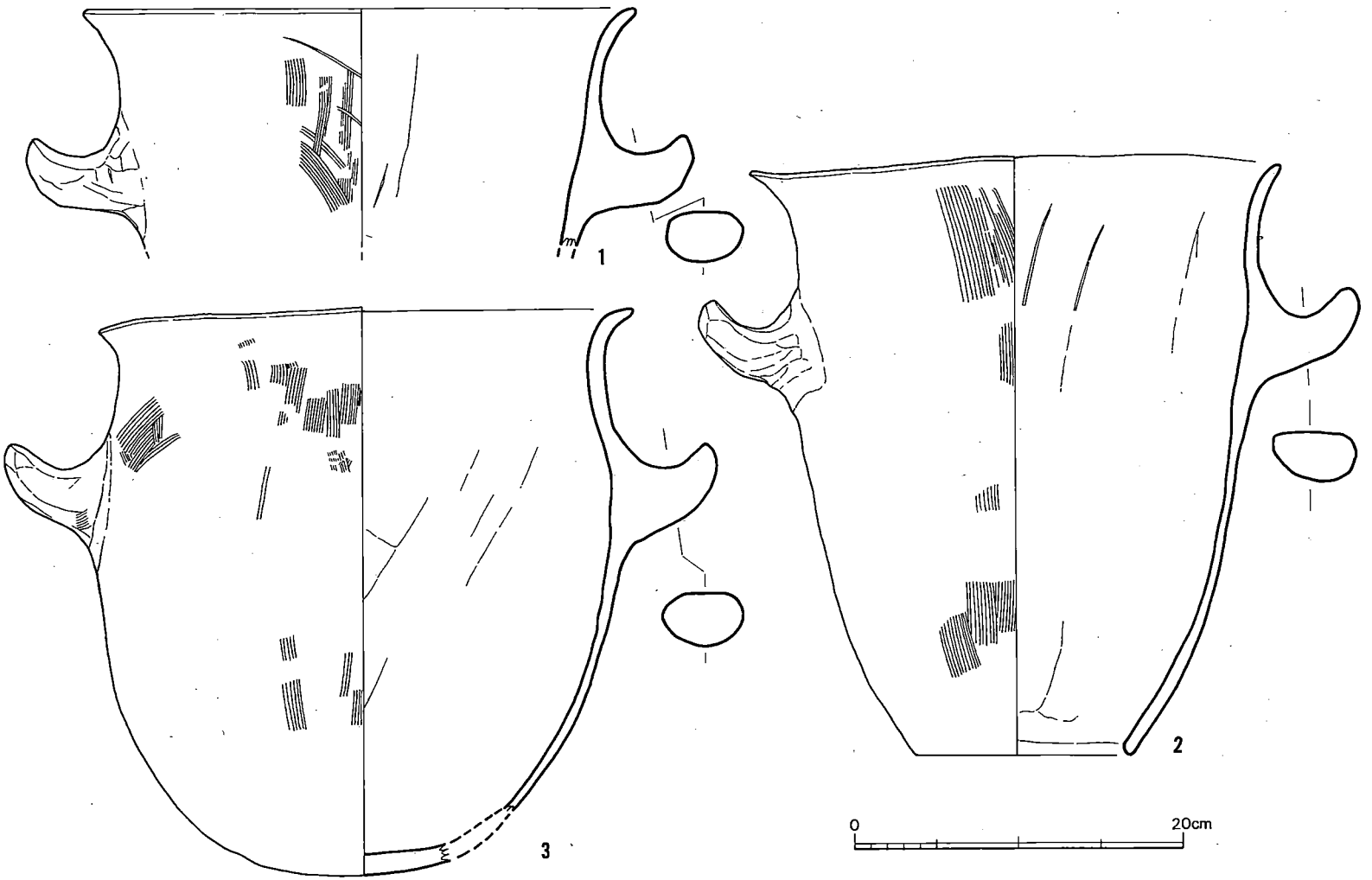
た状態で出土している（第12図右）。また，墳丘南西側の周溝（周溝Ⅰ区）から土師器高杯片と土師器甕片が出土し，墳丘北東側の周溝（周溝Ⅲ区）から鉄鑿が２点出土した。

出土遺物（図版12，第13～15図）

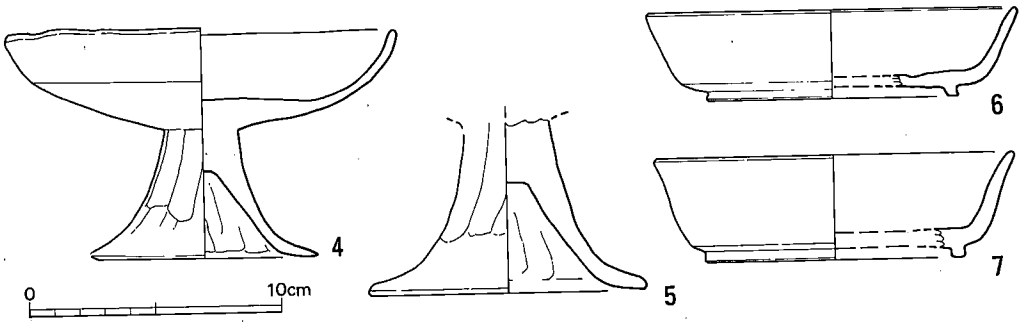
右前面区画出土土器（第13図）

土師器甑（１・２）バケツのように直線的に開く体部から口縁部が緩やかに外反する器形で，胴部上半部に牛角状の把手が対に付けられている。２点とも胴下半がうまく接合しないが，１は復原口径33.7cm，残存高14.7cmの大きさで，２は口径32.2cm，残存高25.5cmの大きさ。胴部外面はハケ目調整，内面はヘラケズリされ，口縁部はヨコナデされている。石英粒などを胎土に含み，茶褐色ないし赤褐色に焼成されている。

土師器甕(3)　器形は球形の胴部から外反する口縁部がつづき，口縁部は強めに外反する。胴上半部に牛角状の把手が対に付けられている。口径32.6cm，器高34.9cmの大きさで，胴部外面はハケ目調整，内面はヘラケズリされている。胎土に石英粒などを含み，茶褐色ないし赤褐色に焼成されているが，胴部は二次的な火を受けて桃褐色味の色調を帯びている。



第 13 図　1号墳　右前面区画出土土器実測図 (1/4)



第 14 図　1号墳左前面区画・周溝出土土器実測図（1/3）

左前面区画出土土器（第14図）

土師器高杯(4)　緩やかな丸みをもって広がる浅い杯部をもつ高杯で，脚部はなだらかに広がり裾部は薄く外反する。口径15.5cm，器高9.1cm，裾部径9.0cmの大きさで，杯部外底面にはヘラ状工具でナデたような調整痕があり，柱状部内外面はヘラケズリされている。胎土に細砂粒を含み，赤褐色ないし褐色に焼成されている。

周溝出土土器（第14図）

土師器高杯(5)　杯部を欠くが，脚部の高さ6.9cm，裾部径11.0cmの大きさで，柱状部内外面はヘラケズリされている。胎土に石英粒を含み，淡赤褐色に焼成されている。

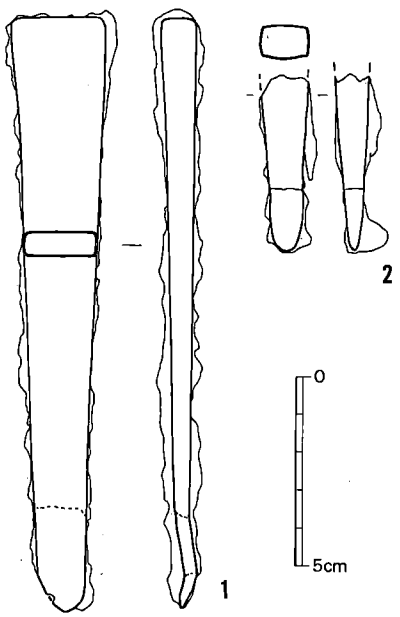
須恵器杯身(6)　高台をもつ杯身で，復原口径14.6cm，器高3.5cmの大きさだが，体部は浅めである。高台径は9.9cmで低い。胎土に細砂粒を含み，硬く焼成されている。

周辺出土土器（第14図）

須恵器杯身(7)　高台をもつ杯身で，復原口径14.3cm，器高4.1cm，高台径は9.9cmの大きさで，高台は低い。精良な胎土で灰褐色に焼成されている。

鉄製品（図版12，第15図）

鉄　鑿　1は石室後方の墳丘裾部から出土した。完形品で，15.7cmの長さをもつ先端部で若干折れ曲がっている。頭部は幅2.5cm，厚さ0.9cmだが先端部は幅1.2cm程度，厚さ0.3cm程度に尖る。



第 15 図　1号墳出土鉄器実測図（1/2）

2はIII区の周溝内から出土した。先端部の破片で全体の形状は不明。残存長4.6cmで，先端は尖るが，頭部寄りの部分で幅1.2cm，厚さ0.9cmである。1に比して厚みのある鑿である。

鉄　滓（図版12）玄室床面から1点と前室床面から1点の鉄滓が出土した。前者は親指大より一回り大きい程の大きさで，鬚が入って軽く重量は10.0gであり，後者は2.5×1.0cm程の大きさで重量3.8gである。

前面区画出土の土師器類は，小郡市干潟遺跡出土土器の分類(註1)によるII式に相当する甕・甑があり，高杯は古式をとどめている。また周辺出土の須恵器坏身は，高台が低平で6はやや外に跳ねるが7は端面が完全に地につくもので，8世紀前半ないし中頃であろう。前面区画の土師器類は，その出土状況からして，築造当時のものでないことは明らかである。これだけの遺物だけでは1号墳の築造時期は明らかにしえないが，一応，土師器類は7世紀後半以前に相当し，築造時期は7世紀後半よりも遡るものと考えておきたい。そして，8世紀中頃まで追葬があったのであろう。

（小池）

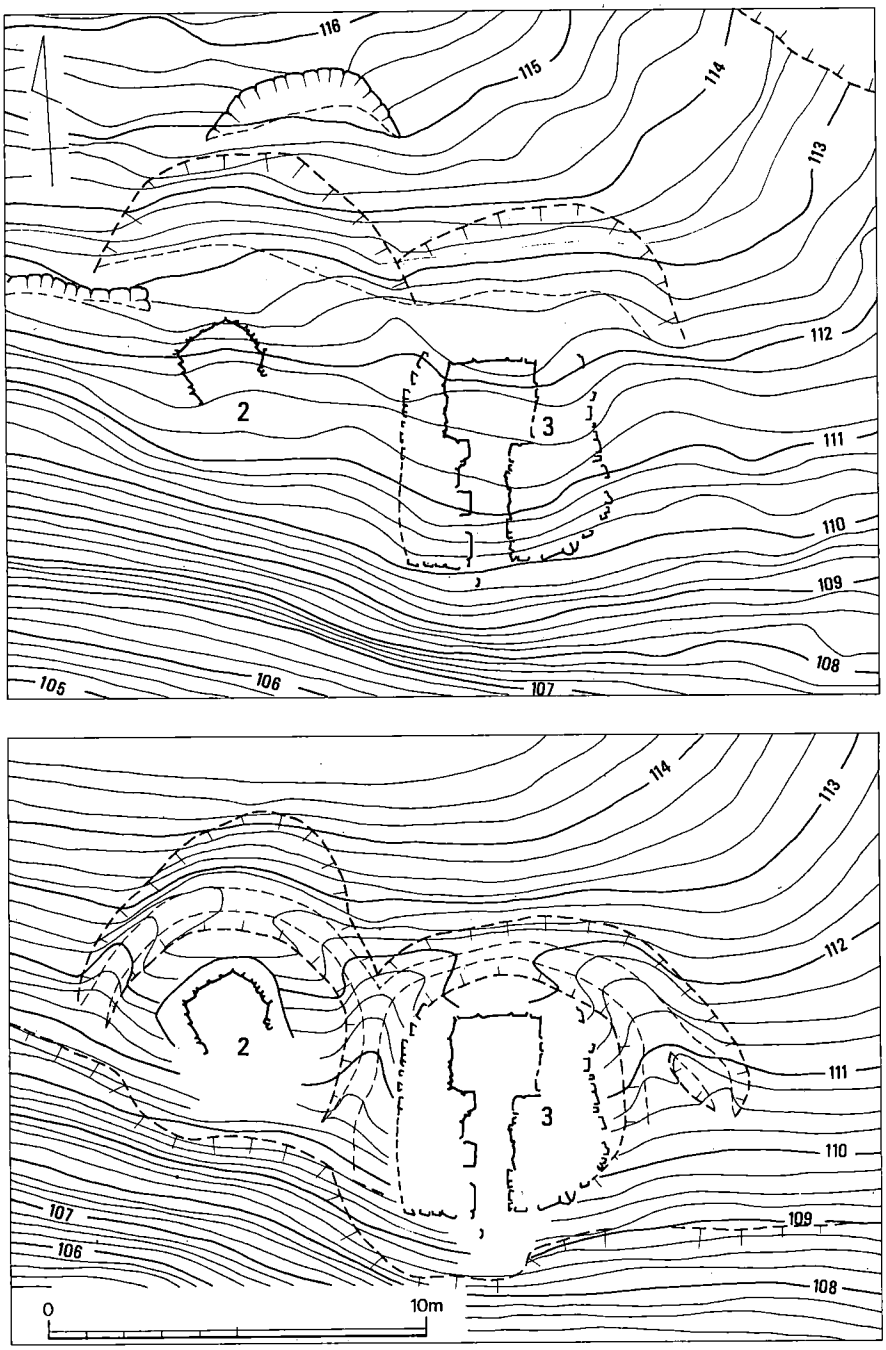
2．2号墳

墳　丘（図版13－1，第16図）

尾根の南側斜面標高110～112mで，1号墳の南東方30mに位置する。調査前の観察では，標高114m位に周溝らしい落ち込みがあり，標高112～113m位にみられる石室の陥没穴らしい落ち込みとその周囲の平坦面があるので，直径6～7m，高さ1.5m程度の規模の円墳であろうと推測された。

表土・再堆積土を除去した墳丘規模は，高さ約1.5m，直径約7mで，周溝は馬蹄形に巡る。急傾斜の斜面に構築しているために，地山の岩盤を大きく掘削して地山整形しており，岩盤の露呈する周溝底の最高所は標高112.5mである。地山整形時の斜面への盛土や墳丘の盛土には，掘削した岩盤の角礫を多く含む黄褐色土，茶褐色土，淡赤褐色土などが用いられているが，墳丘の東から南側にかけて石室壁体を含めてかなり崩壊している。

この古墳は，南東側に隣接して3号墳が築かれており先後関係が問題となる。周溝堆積土の観察では，2号墳が3号墳より後出するものと判断された。また，2号墳下の堆積土では，旧表土と考えられる堆積土が明確でなく，角礫混じりの黄褐色系の土が掘削されて階段状になった岩盤に堆積していて，3号墳構築の際に掘削されていた可能性がある。



第 16 図　2・3 号墳墳丘・地山整形面測量図 (1/200)

墳丘を巡る列石は，石室壁体崩壊の石との区別がはっきりしなかったが，奥壁から3.5mの位置に前面の列石と思える部分がある。

主体部（図版13－2，14，第17図）

この古墳の主体部はN35°30′Wにとり，南西方向に開口する横穴式石室である。石室の前側が大きく崩壊し，壁体の抜き跡痕の部分は充分に調査を成しえていないので，全体の形状については明確ではない。しかし，図版14－1に見えるように抜き跡痕らしい黒っぽく湿気を帯びた土の部分があり，その位置からしてこの古墳の主体部が単室構造の横穴式石室である可能性が高い。

石室は全長約3.70mで，緑泥片岩で石材が用いられている。玄室は隅丸方形に近いプランと推定される。長さ1.60～1.70m，最大幅1.90mを測るが，現状では図版14－2に見えるように，左側壁の玄門寄りの石が倒れて外開きになっているので，本来の幅は少し短いかも知れない。奥壁は，長さ60cm，幅30cm，厚さ15cm程度の，4枚の板石を並べて腰石とし，隙間には板石を立てて充塡している。腰石は0.15～0.20m程度埋めて据えられ，腰石の上は板石を小口積みされているが，小口積みが3～4段が残り，残存高は0.90mである。左側壁もほぼ同様に築かれているが，裏込めが不十分か，斜面下側の地滑り的な崩壊のためか，壁体は外側に倒れてしまっている。右側壁は，基底部から小口積みされており4～5段が残る。玄門は不明だが，框石と思える石は奥壁から2.15mの位置にある。この石は長さ60cm，幅30cm，厚さ8cmの扁平石である。この位置から前面にある石の大半は閉塞石を構成していた石であろうか。羨道部の幅は1.00mを上回らない程度であろうし，羨道の長さも短くて，前面区画が設けられていたことも考えられる。

遺物出土状況（図版15－1，2，第17図）

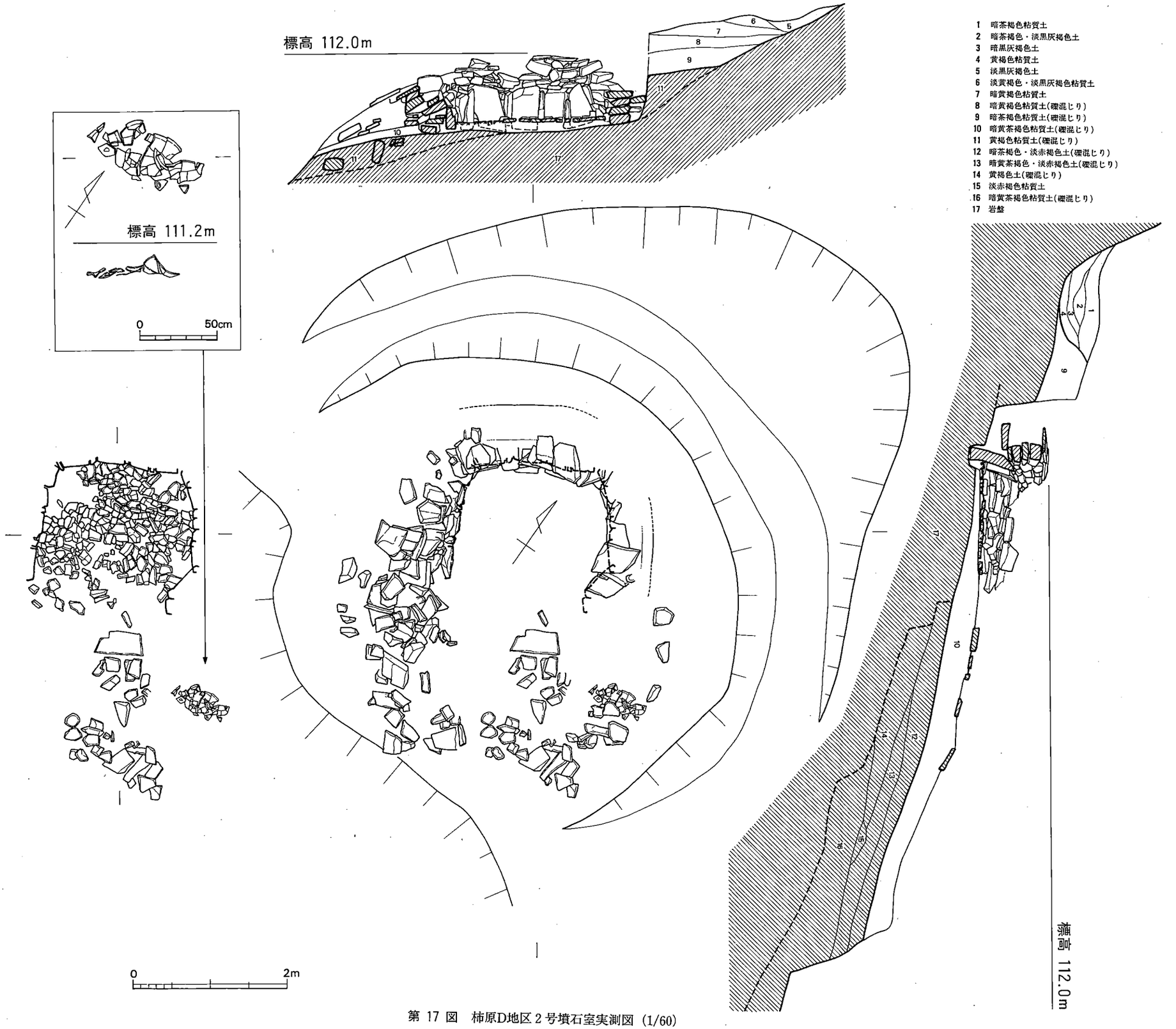
框石の右側0.40～1.10mで，框石の部分より前面側の0.40m幅に，土師器甕，甑各1個体分が転倒した状態で出土している。

出土遺物（図版15－3，第18図）

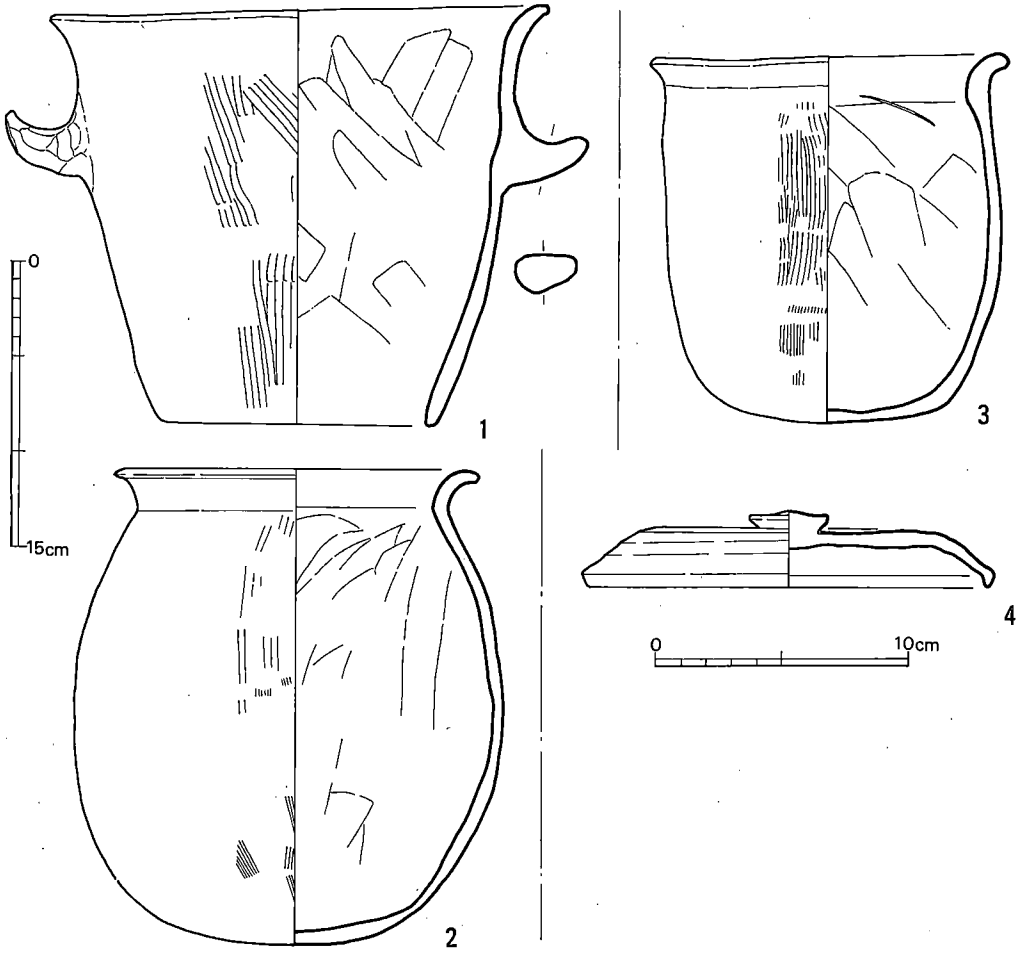
土師器甑(1)　口径26.7cm，器高22.2cm，底径14.6cmの大きさで底部から直線的に広がる体部をもち，口縁部は緩く外反する。体部上半に牛角状の把手がつく。外面は粗めのハケ目調整，内面はヘラケズリされている。胎土に石英，砂粒を多く含み，淡茶褐色に焼成されている。

土師器甕(2)　口径19.0cm，器高25.0cm，胴最大径22.5cmの大きさで，やや下膨れの体部に端部が強く外反する口縁部がつく。体部外面はハケ目調整され，内面はヘラケズリされている。胎土に石英，砂粒を多く含み，淡い茶褐色に焼成されている。

1・2は，石室右前面部分？から出土した。



第 17 図　柿原D地区 2 号墳石室実測図 (1/60)



第 18 図　2号墳前面・墳丘裾出土土器実測図（1/4, 1/3）

土師器小形甕(3)　ずん胴で丸底の体部に肥厚して外反する口縁部がつく。口縁部の外反は強い。口径14.4cm，器高14.8cmの大きさで，石英，砂粒を胎土に含み，赤褐色に焼成されている。この土器は前面に設定したトレンチから出土した。

須恵器杯蓋(4)　扁平な擬宝珠形つまみと鳥嘴状の口縁端部をもつ坏蓋で，口径16.4cm，器高3.0cmの大きさ。平坦な天井部外面は回転ヘラケズリされている。砂粒を含むが精良な胎土で，紫灰褐色に硬く焼成されている。墳丘裾Ⅰ区から出土した。

土師器甕や甑は干潟遺跡の編年（註1）でのⅡ式に近く7世紀後半ないし末頃に，土師器小形甕は8世紀前半頃に比定されよう。また，裾部出土須恵器坏蓋の特徴はやや後出するもので8世紀前半段階のものであろう。したがって，この古墳は7世紀後半頃に築造されて，8世紀前半頃まで追葬されたものと考えられる。（小池）

3．3号墳

墳　丘（図版16・17，第16図）

D地区の西方標高112m前後の尾根部南斜面にあり，2号墳の東側に隣接している。調査前の観察では尾根側に2号墳の周溝と並列して周溝が見られた。

調査の結果，周溝は西側部分を2号墳に切られているが，およそ墳丘の半分近く巡っている。外径は約10m，内径は約7mで，幅は1.0～2.9mである。周溝底の標高は概ね北側で112m，東側で110.70mで，玄室の床面が110mなので周溝底面の方が高い。

30°近い急傾斜地に立地しているため，石室構築にあたっては，岩盤を玄室中央部より50cm程前室側まで墓壙を掘削し，掘削土は前方の床面整形のための盛土や，石室裏込め土・墳丘盛土に用いている。墳丘盛土は最も残存状況の良好な部分で0.8mを測る。

列石は西側の羨道口から始まる古墳前面部のものと，羨道部中央付近から始まり奥壁付近までほぼ楕円形に巡るものがある。前者は，盛土上に板石を2～3段乱雑に積んでいる。東側部は西側に対応する所が地滑りで残っていないが，同様であっただろう。後者は，西側では前室中央付近より奥壁付近まで特に密に8～10段積み上げられている。奥壁付近には列石の掘方も見られた。石室内壁面より列石外面までは1.5～2.2mあり，この間には列石に用いられた石材と同様の石が充填されてあった。東側は，羨道中央から玄室中央付近までは特に密に2～7段積まれている。石室内壁面より列石外面は1.4～2.1mを測る。

墳丘下の東側部で，石室を巡ると思われる溝を確認したが，性格は分からなかった。

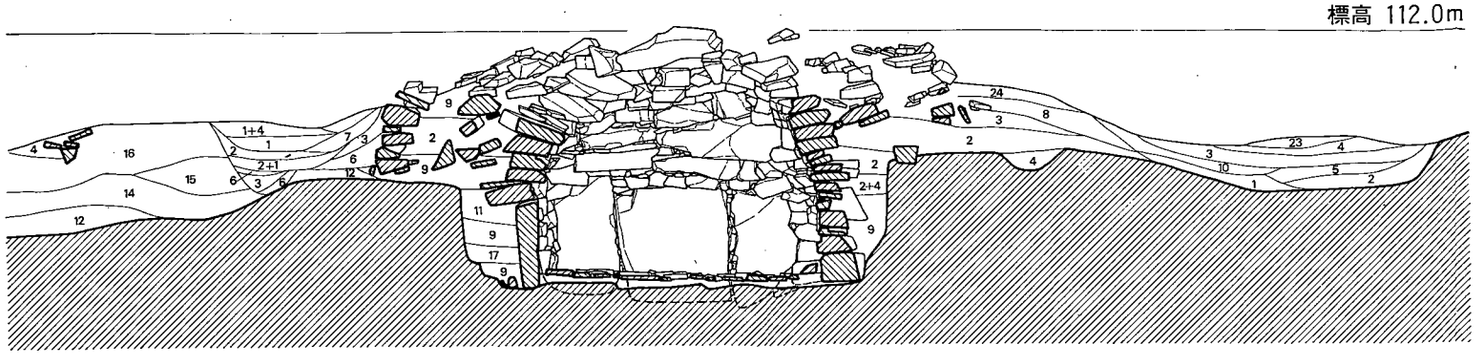
主体部（図版18・19－1・2，第19図）

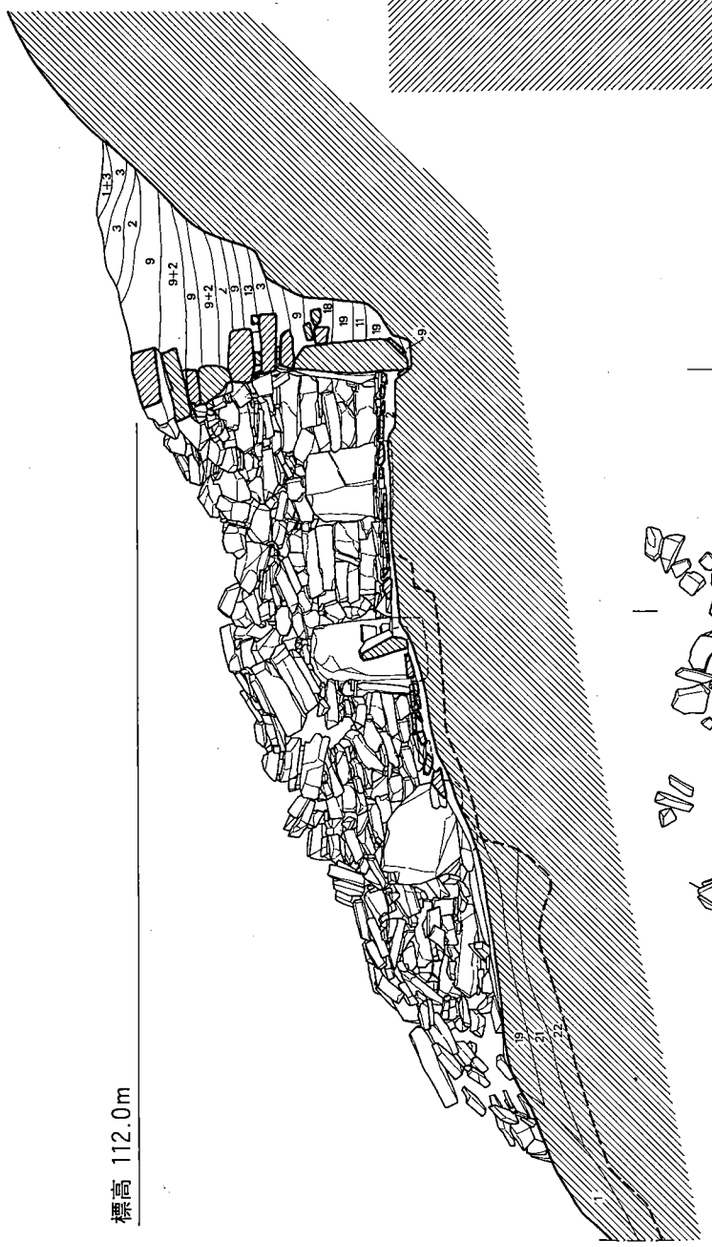
この古墳の主体部は複室構造の横穴式石室で，主軸方位をN3°Wにとり，ほぼ南に開口している。

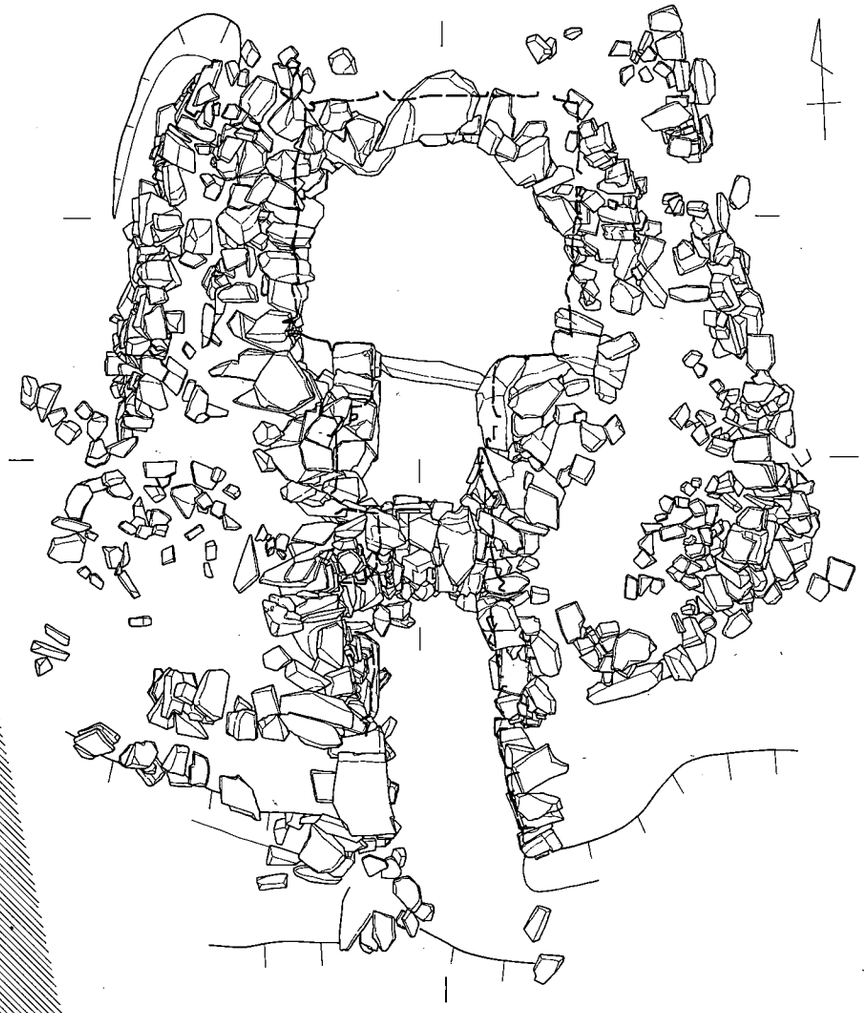
玄室は床面で長さ2.1m，幅2.3m程で方形プランを呈する。床面には20×30cm前後の角張った板石を一面に敷き詰めている。

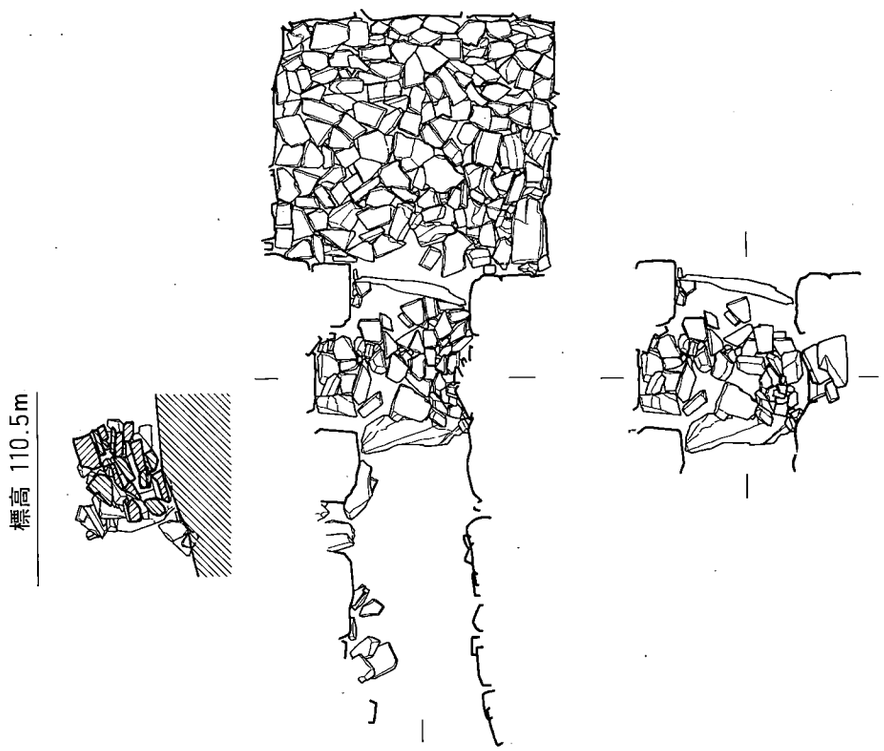
奥壁は，基底部中央に高さ95cm，幅95cm，厚さ25cm程の板石を地山を掘り込んで立てて据え，両側にも高さ100cm，幅60cm程の板石を同様に据えている。腰石から2段目まではほぼ垂直に立上がっているが3段目あたりから持ち送り気味に平積みされ，25°程度内傾する。

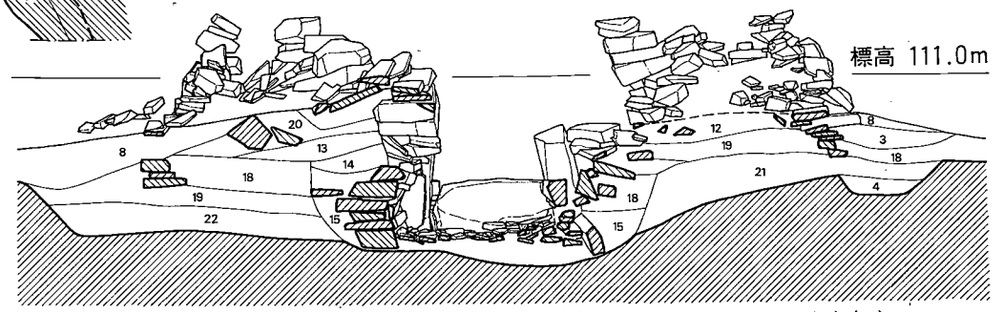
側壁は，西側壁は中央，東側壁は袖石寄りの基底部に板石を立てて据え，他の部分は厚さ20cm前後の板石を丁寧に平積み，及び小口積みしている。壁面は奥壁と同様に底面から0.80m程垂直に立上がり，その上面は大小の板石を用いてやや乱雑に持ち送りに積まれている。残存壁面高は2m程度であり，ほぼ天井に近いと推定される。











1 黒褐色土
2 小砕石混じり黄褐色土
3 小砕石混じり茶褐色土
4 黄褐色砂質土
5 黄褐色土
6 赤褐色土
7 黄色粘質土
8 赤褐色粘質土
9 砕石混じり茶褐色土
10 小砕混じり暗茶褐色土
11 茶褐色砂質土
12 小礫混じり茶褐色粘質土
13 黄褐色粘質土
14 小礫混じり黄褐色粘質土
15 礫混じり黄褐色砕石土
16 茶褐色砕石土
17 礫混じり茶褐色土
18 角礫混じり黄褐色土
19 礫混じり茶褐色粘質土
20 茶褐色粘質土
21 砕石混じり黄褐色粘質土
22 砕石礫混じり黄褐色粘質土
23 暗黄褐色砂質土
24 暗赤褐色粘質土

0 2m

第 19 図　柿原D地区 3 号墳石室実測図 (1/60)

玄門袖石は左右ともに柱状の石を立て，その間に高さ95cm，幅40cm，厚さ10cm前後の板石を横長に立てて仕切石としている。

前室は，追葬時に敷石を上面に敷いている。第一床面には20×15cm前後の角張った板石を用い，第二床面にはやや小振りの板石を敷き詰めている。東側壁は第一床面の上に羨門側に薄手の板石を立てて，その脇には小振りの板石を用いて乱雑に積み上げている。この壁面は前述の様に追葬時に改築されているが，調査時に於いても土圧によって内側に押出され，上部は残っていなかった。西側壁は基底部より小口積みされていた。築造当初は，長さ1.0m，最大幅1.4mで西側は丸味をもち膨らむが，東側は僅かに膨らむ形である。

羨門袖石は，左右ともに扁平な塊石を用いて縦長に据えられ，その間に仕切石として長さ90cm，幅30cm，厚さ10cm程の石を伏せて用いている。

羨道は，長さ2.5m，幅0.9～1.0m程で敷石はしていない。側壁は，4～5段程残っているが上部は斜面下方に動いている。

石室床面は，玄室でほぼ水平に造っているが，前室から徐々に低くなり，羨道口までに1.2mの高低差がある。また，前室床面は仕切石を境にして玄室に比べて0.15～0.30m低い。

石室の閉塞石は，玄門仕切石上から羨道部にかけて長さ0.80m，高さ0.70m程度で，板石を6段程丁寧に小口積みしている。

遺物出土状況

玄室内遺物出土状況（第20図）

玄室の側壁寄りの敷石上や敷石間より多量の釘と，仕切石近くで須恵器坏蓋が出土した。

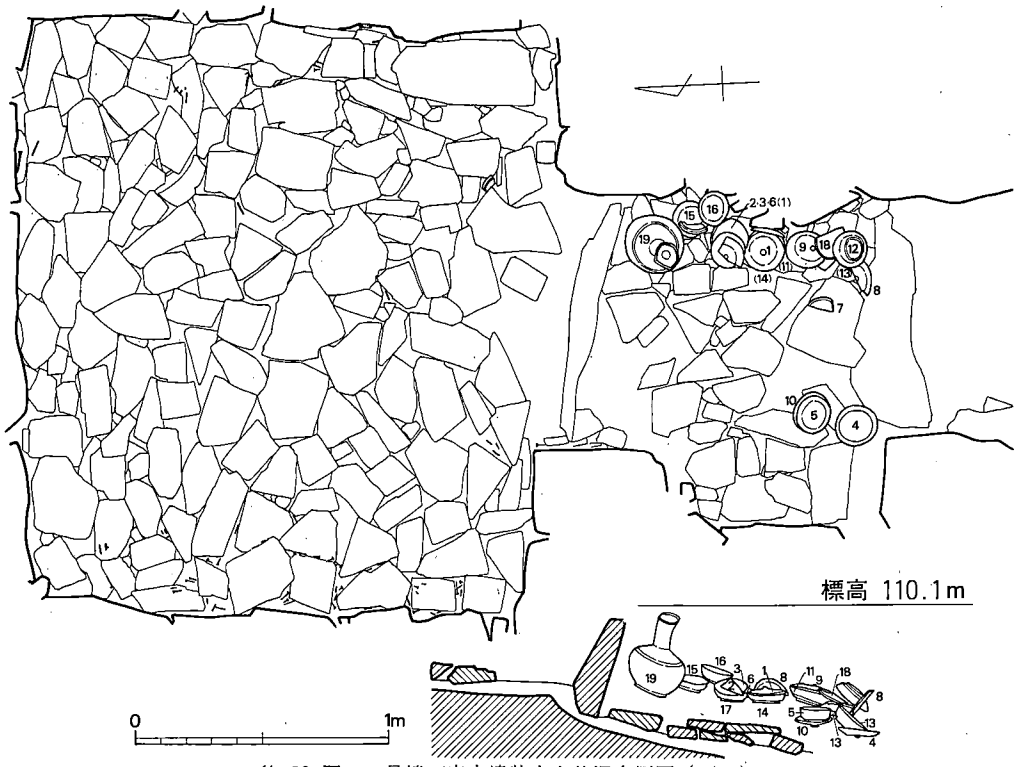
前室内遺物出土状況（図版19－3，第20図）

前室の東側壁に沿って，須恵器長頸壺1点，杯身8点・杯蓋7点と，羨門仕切石西側部に接するように須恵器杯身1点・杯蓋2点が出土した。須恵器杯身の内には，蓋のつまみを下にした状態のうえに乗せてあるものもあった。　　（日高）

出土遺物（図版20～22，第21～26図）

前室出土土器（第21・22図）

須恵器杯蓋（1～9）　口径14.6～15.7cm，器高2.5～4.0cmで，典型的な擬宝珠形つまみを付ける杯蓋である。1～5は天井部外面に左回りの回転ヘラケズリを施しており，天井部内面は不整方向ナデ調整されている。1は，平坦な天井部外面に×字のヘラ記号が付され，口縁部は外方に伸びて受け部端が口縁部よりも下方に出ている。2・4は，平坦な天井部をもち，受け部のかえりは内側に伸びている。3・5は，天井部から口縁部にかけて丸味をもって広がり，受け部かえりは短く口縁部より下に出ない。6～9は，天井部外面にカキ目調整のみられるも



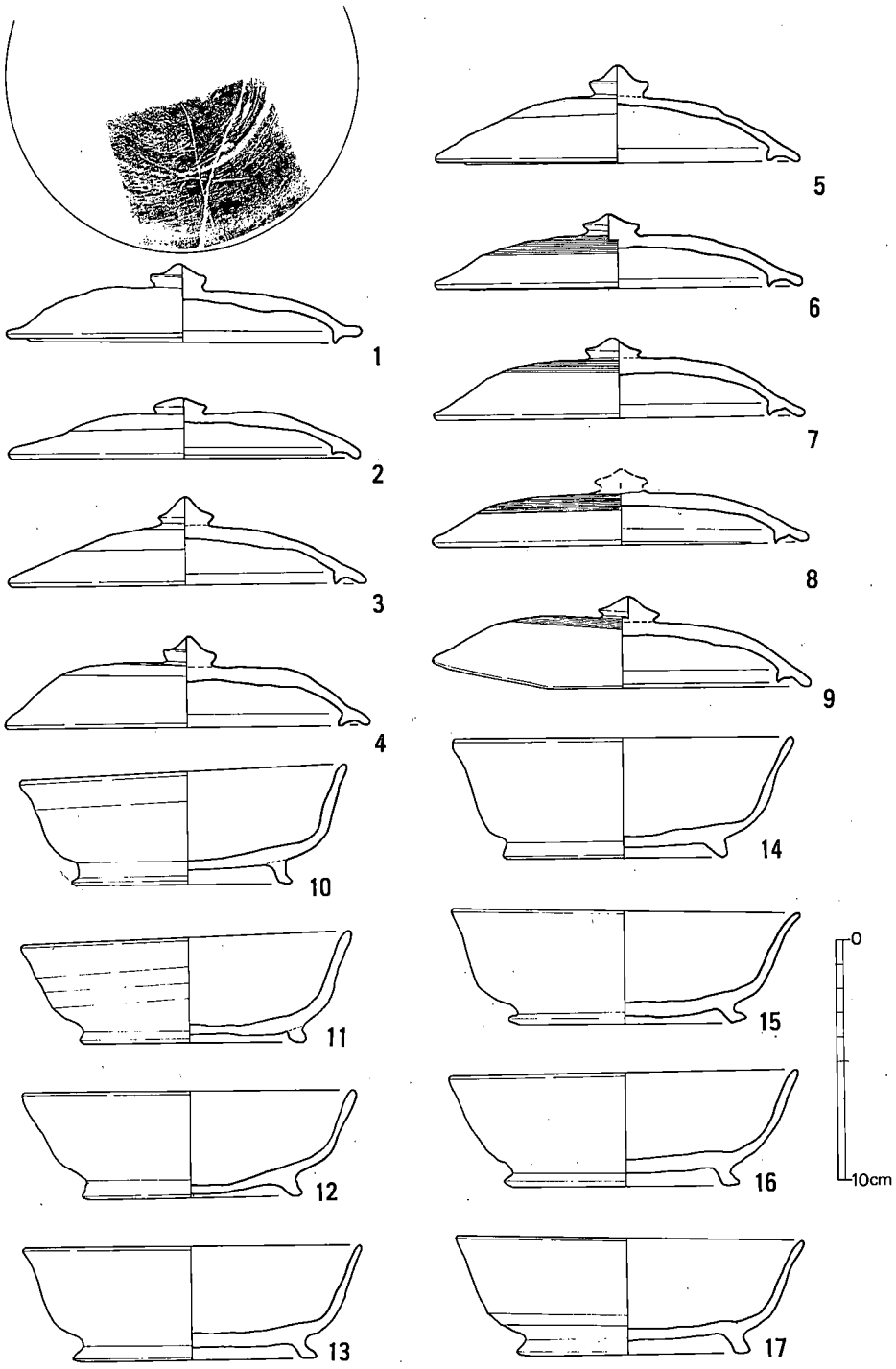
第 20 図　3 号墳石室内遺物出土状況実測図（1/30）

ので，内面は不整方向ナデ調整されている。口縁部はやや直線的に伸びて，受け部かえりは短めで口縁部より下に出ない。

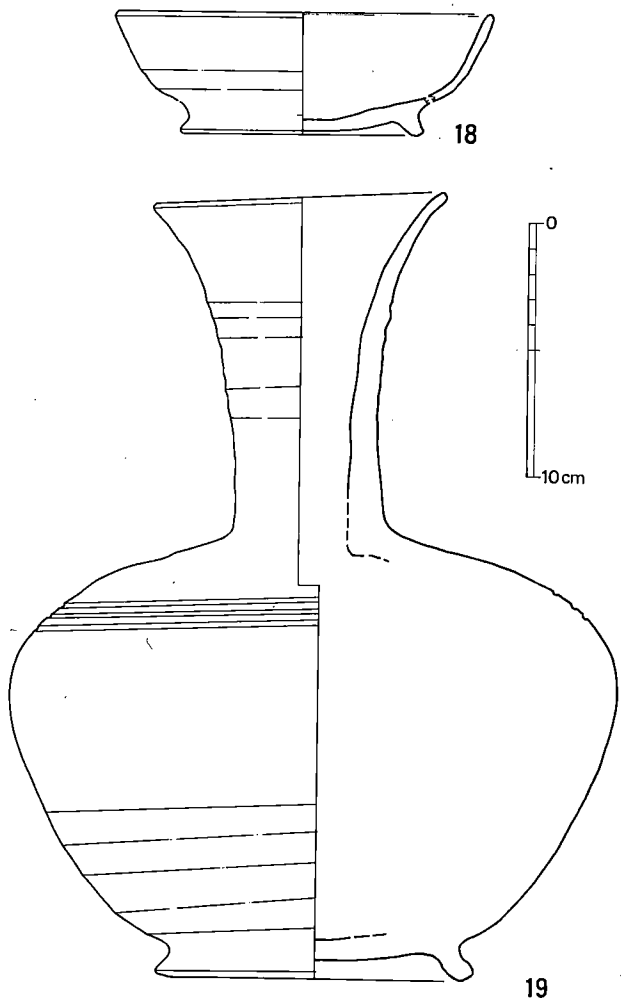
須恵器杯身(10～18)　全て高台を有する杯身である。10・12・14は軟質な焼成であるが，それ以外は堅緻に焼成されている。口径は13.6～14.2cm，器高4.5～5.0cm，高台径8.5～9.3cmの大きさである。口縁部は体部から直線的に外方に伸びているが，15・17では僅かに外反気味に伸びている。いずれも口縁部から体部にかけて回転ナデ調整され，内底面は不整方向にナデられている。外底面は，11がヘラ切離しのまま放置されているほかは，ヘラ切離しのあとナデられている。また，17の外底面には×字のヘラ記号が付されている。

須恵器長頸壺(19)　器高31.0cm，胴部最大径24.0cm，口径11.4cm，体部高13.0cm，高台径11.7cmの大きさで，頸部は直径5.6cmまで窄まる。口縁部はラッパ状に開き，体部上半に最大径の位置がある器形である。口縁部から胴部にかけては回転ナデ調整されており，肩部には3条の浅い沈線が巡る。胴下半は左回りの回転ヘラケズリで，高台部分はナデられている。胎土に砂粒を多めに含み，黒灰色，青灰色の色調に堅緻に焼成されている。

前面出土土器（第24図）



第 21 図　3 号墳石室出土土器実測図 1 (1/3)



第 22 図　3号墳石室出土土器実測図２（1/3）

須恵器杯蓋(24～26)　19・20は左前面から，21は右前面から出土した。21は小破片で復原口径を一応16.8cmに考えたが，もう少し小さいかも知れない。19・20は口径15.0cmの大きさで，20の天井部にはつまみの付いていた痕跡がある。天井部外面は回転ヘラケズリ，内面は不整方向のナデ調整されている。19・20の口縁部は外方に踏張るように広がる。

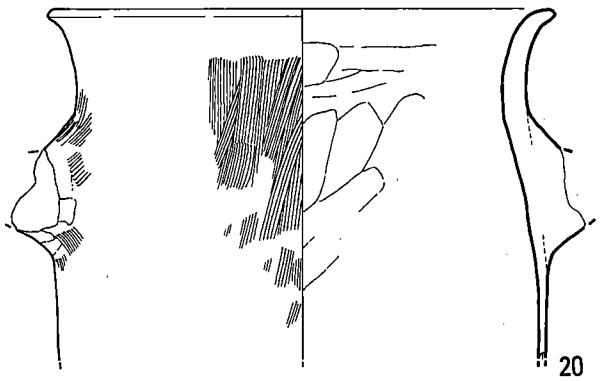
土師器甕(23)　右前面から出土した。口径14.2cm，器高14.2cm，胴最大径13.6cmの大きさで，口縁部は肥厚して短く外反する。外面はハケ目調整，内面はヘラケズリされている。胎土に金雲母・石英・砂粒を含み，淡褐色ないし淡黄褐色に堅めに焼成されている。

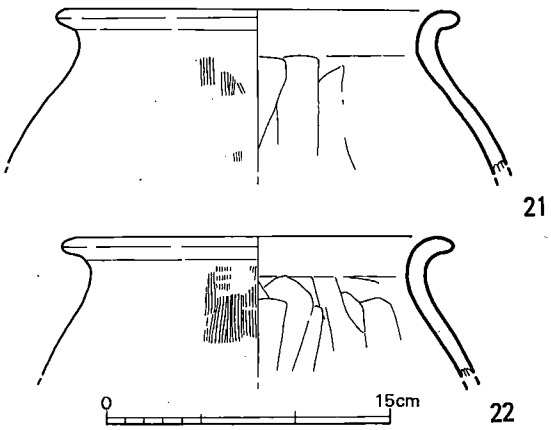
甑(20)　右前面から出土した。口縁部から胴部にかけての破片で把手が付くが，把手の先は欠損している。

復原口径29.0cm，残存器高18.4cmだが，径はやや不確実である。口縁部は外反し，胴部はやや膨らむ。口縁部はヨコナデ調整されているが，胴部外面はハケ目調整，内面はヘラケズリされており，口縁部に近い内面はヘラで横方向にナデられている。胎土に砂礫，褐色粒，金雲母を含み，明褐色ないし茶灰褐色に焼成されている。

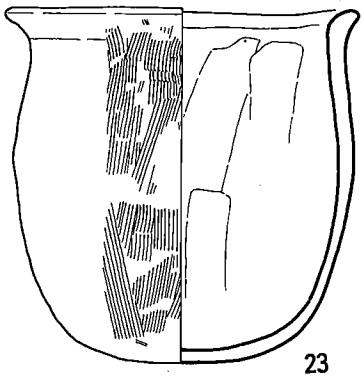
鉄製品（図版22，第25・26図）

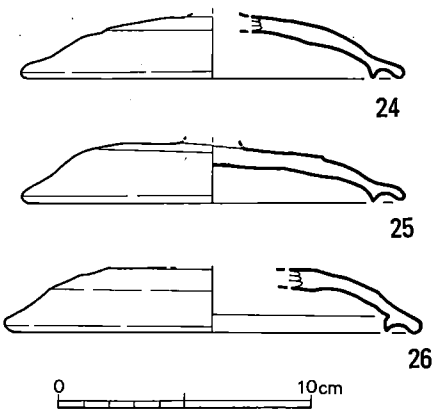
絞金具（１・２）　いずれも石室内から出土した。１は鎖の可能性があるが，断面円形の丸棒を曲げたもの。２も断面円形の丸棒を用いた輪金の基部側で，幅2.0cm，厚さ0.2cmの鉄板を曲げて環状部を作っている。





第 23 図　3 号墳前面出土土器実測図 1 (1/4)



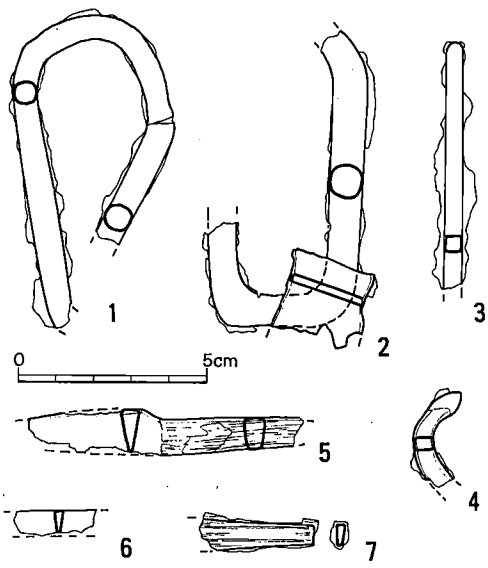


第 24 図　3 号墳前面出土土器実測図 2 (1/3)

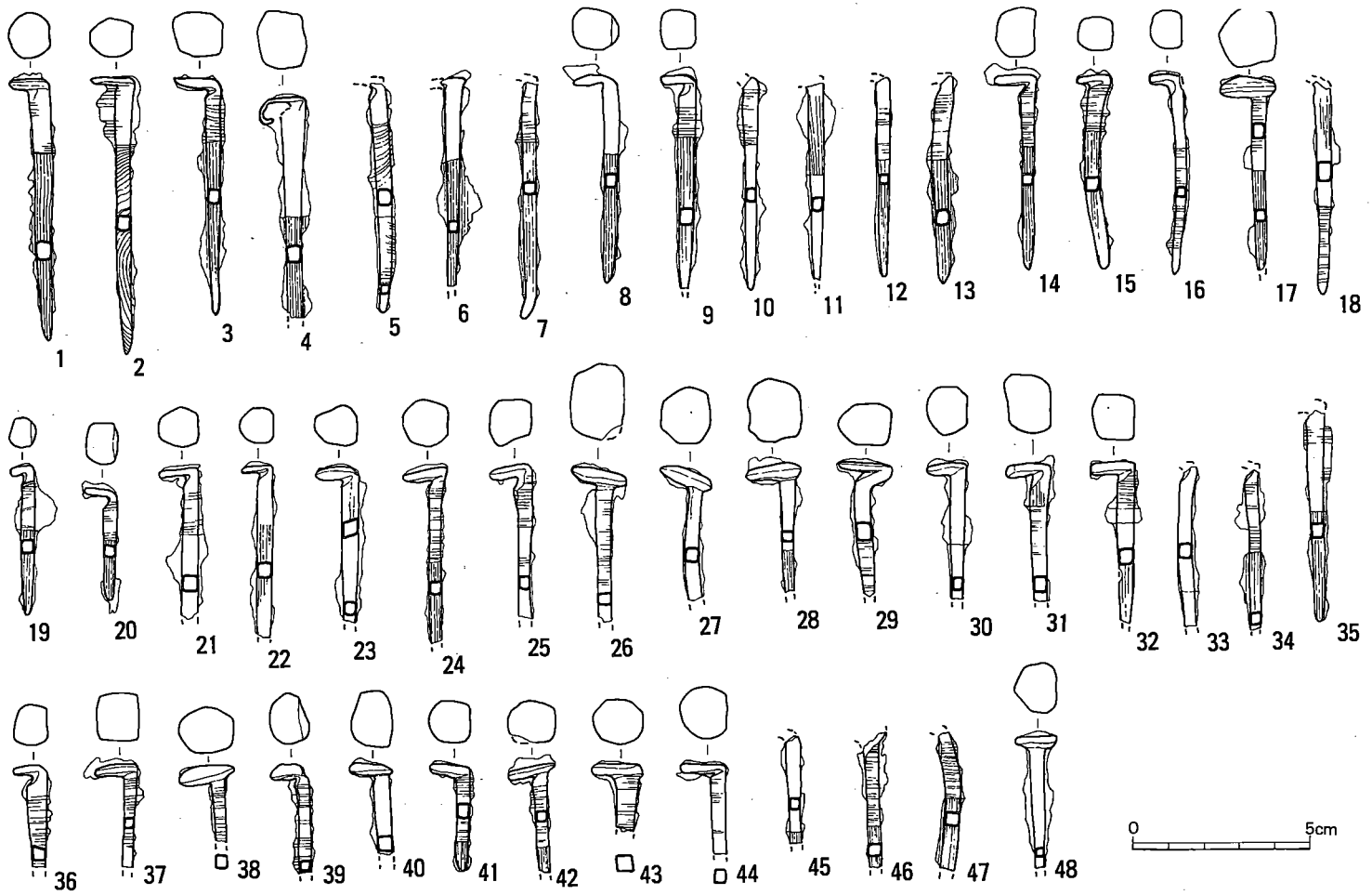
不明鉄器(3・4)　端部破片で，本来の形状は不明。3 は角棒で長さ6.5cm分が残る。4 は弧を描く破片で，端部が尖るものの錆化以前に尖るような状況に剝げたものかの区別はなしえない。

刀　子(5～7)　5 は切先，基部端ともに欠失する。現存長7.3cm，身幅1.2cm，背厚0.5cmで，茎部には木質が残存する。6 は刃部破片，7 は茎部破片であるが，木質がかなり残り，刀子の茎としては細身である。

鉄　釘（第26図）玄室床面に散乱して出土したが，正確な原位置を留めるものはないだろう。約100点の破片資料が出土した



第 25 図　3 号墳石室出土鉄器実測図 1 (1/2)



第 26 図　3 号墳石室出土鉄器実測図 2 (1/2)

が，個体数を確認しえる頭部では図示する48点のみである。体部は断面方形で先端は細くなるが，頭部は折曲がりL字形になる。頭部に平坦面をもつものが圧倒的に多く，48のようにT字形に折曲がるものもある。17・27～29・38などは，本来L字形のものが敲かれた際の衝撃のためにT字に近くなったと思われ，4のように頭部平坦面の先が曲がったものもある。

完形資料や完形に近い資料では，1～7のように7.0cm前後ないしそれ以上のもの，8～18のように6.0cm前後のもの，19・20のように5.0cm以下のものなどの長さの差がある。銹着遺存する木質では，頭部から木目の方向の変化する部分までの長さが，1.5～2.0cmのもの（1～3など）が16点，2.0～3.0cmのもの（6・8など）が13点と，3.0cm以上のもの（4・5など）が4点を数える。

石室出土の須恵器では，杯蓋に身受けのかえりがあり，杯身では高台が外に跳ねるので7世紀後半～末に相当するであろう。長頸壺も体部に丸味をもち7世紀後半頃に対比しうるものである。また，前面出土土器でも7世紀後半～末の時期が妥当であろう。　　（小池）

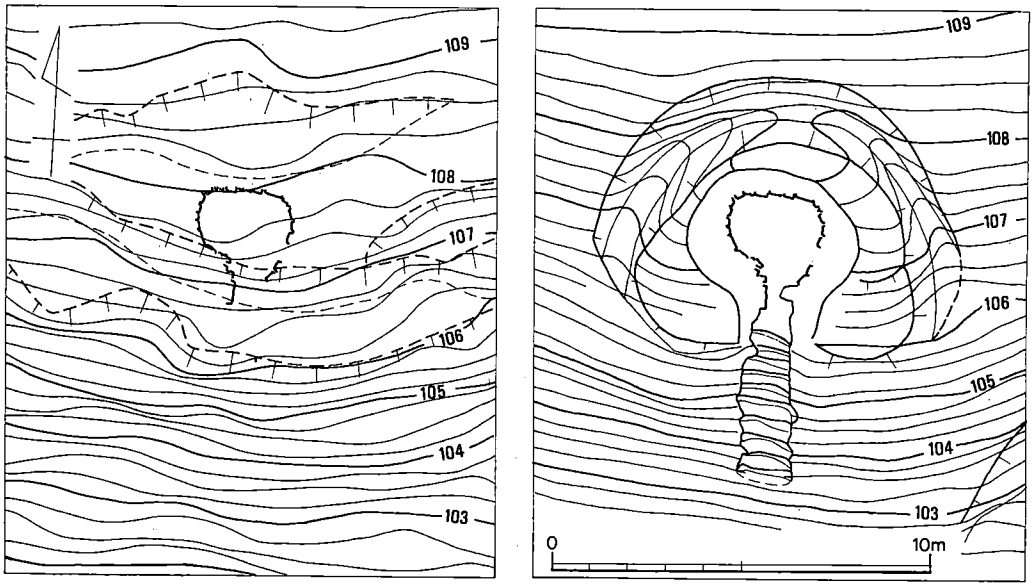
4．4号墳

墳　丘（図版22－1，第27・28図）

D地区南側斜面に面して標高103.0～108.5mに占地し，旧表土面で約23°を図るやや急な勾配の所に築造している。表土面では，墳丘や周溝等の陥没穴は認められなかったが，表土剝ぎ後，石室が等高線に略直交をなし，南に開口する古墳と判明した。墳丘の前面側が崩落や流出を受け，残存状やや不良な古墳である。

墳丘の規模は，高さ1.3m，周溝外径9.6m，周溝内径6.6m，周溝幅1.4～2.1mを測る。周溝底の最高所は玄室奥壁側で標高108mを測り，両サイドは順次低くなって半円形を呈する。地山整形時に大きく削平しているが，墳丘の盛土をなして周溝が形成されていた。

地山整形は，玄室奥壁側が最も深く掘削され1m以上にも及んでいるが，本墳の占地する場所に起因してか玄室部周辺の範囲のみ削平している。この排土の一部でもって墳丘前面側を埋め戻して平坦面を造っているが，最深部では，0.5m以上にも及ぶ。この地山整形時から墳丘盛土がなされる間に開口していたと考えられる溝状の落ち込み（土層図A～A′）が，玄室西側で地山面より深く掘り込まれているのを確認した。玄室中央より西方2.5mに位置し，上端幅は1.1m，深さは0.5mを測る。しかし，平面形態は明確に把握出来なかったが，24号墳の墳丘内に同様の



第 27 図　4 号墳墳丘・地山整形面測量図（1/200）

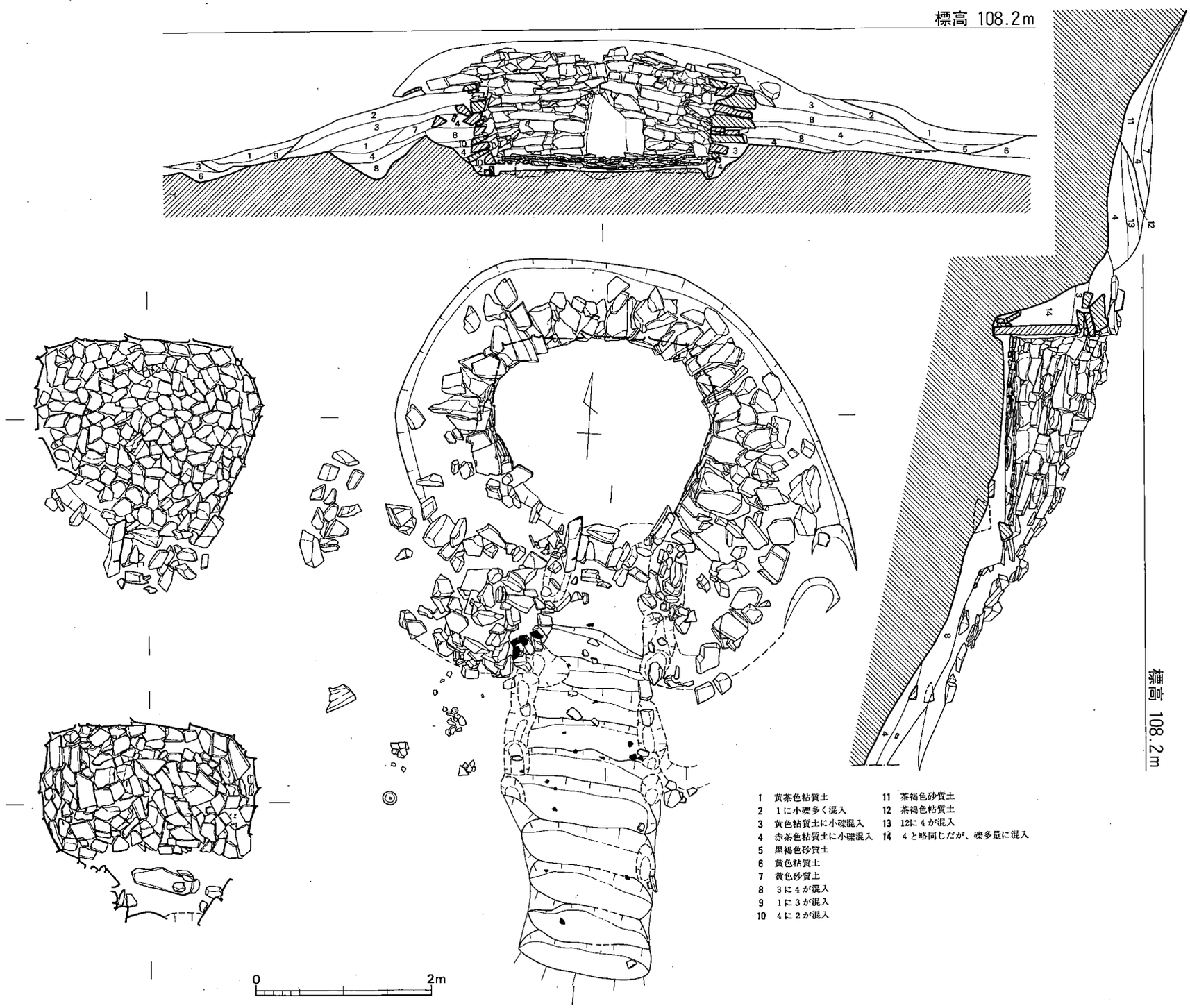
遺構を検出しており，本遺構も略同様の形態を呈していたと類推される。性格に関しても後述するが，本遺構において焼土，炭化物は認められず，遺物も何ら出土していない。埋土も墳丘盛土との差異は認められない。

墳丘盛土は地山と大差ない土を用い，岩盤ないし黄色・赤茶色粘質土の上に最高所で0.7mの盛土が認められた。当初，墳丘及び石室の実測時では，墳丘前面側が若干流動しているものの略原位置を保った状況であると判断していた。墳丘前面列石の有様や，列石内に土器片が若干認められたので，西方前面に試掘トレンチを設定した。その結果，列石の基底部は略原位置を保っているものの，上方は著しく南側に流動していることが判明した。積み石中程の３ないし４段目に，土師器の甕と甑かそれぞれ１個体分押し潰れた状態で出土し，これらは墳丘盛土の過程で埋められた状況（第28図）を呈していた。更に上方の積み石も旧態を止めているとは言い難い状況であった。

墳丘前面の列石は，右側も前述の左側と同様流動していたので，旧態を窺い知ることは出来なかった。しかし，他の古墳と同様の列石を巡らしていたことは，有様等から類推される。列右左側前面には，緩やかな勾配をなす区画が存している。多数の須恵器・土師器が出土したことより前庭部の機能を果たしていたのであろう。

主体部（図版22・23，第28図）

本墳の主体部は主軸方位をＮ３°Ｗにとり，南に開口する単室と推定される横穴式石室である。



第 28 図　柿原D地区 4 号墳石室実測図 (1/60)

石室は，全長約3.9mになる。石室の壁体は緑泥片岩を用いている。

玄室は，長さ2.15m，最大幅2.57mを測る。奥壁側が2.1mに対して，玄門側が0.9mと狭くなり，若干歪な蒲鉾形の平面形を呈す。地山整形段階において，平面形に即し，深さ10cm程の溝状の堀り込みがなされ，その中に腰石を深く据えている

奥壁中央には，長さ97cm，最大幅75cm，厚み12cmの大振りで扁平な石を鏡石として据えている。鏡石は，主軸より若干東寄りとなるが，玄門部等からの視角では中央となる。

奥壁の基底部は，当初の床面と略同じ高さか，僅かに上端が覗く程に据えている。これより上方は，1.2～1.3m残存し，扁平な石を小口積みで略垂直に積み上げられており，側壁よりも少し大きめの石材を用いている。

右側壁は，奥壁と同様の方法がとられているが，若干小振りな石が用いられる。若干外側にせり出し気味となっているが，墳丘前面側が若干流出したことに起因したものと考えられ，残存している高さまでは，略垂直に積み上げられていたと推定される。左側壁は，右側壁と全く同じ技法が執られている。玄門付近は，崩落が顕著で，基底部の石ですら玄室内に大きくせり出している。

玄門の袖石は，左側は主軸と平行となるが，右側は玄室方に広がる変則的な配置となる。袖石間は，玄室側で1m，羨道側で，0.8mを測る。袖石は鏡石より若干小振りで扁平な石を用いているが，露出している部分の2倍近くを地中に埋め安定を測っている。立地条件等から当初より崩落が予想されており，このような方法が執られたと思われる。框石は，長さ45cm，幅20cm，厚み14cmの扁平石で，左袖石に接し約半分程を埋めている。この石以外にも右袖石側にもう1個存したことも考えられ，崩落がこの所まで及び流出したのであろうか。

玄室床面は，敷石の床が2面存した。当初の床面は，扁平な石を敷き詰めているも，玄門側の幅60cmには全く見受けられない。改修時に剝ぎ取られ再利用されたと考えられる。床面上には鉄釘が13本出土したが，上方の床面敷石の真下に当たるのが半分程あり，これらの鉄釘は当初の品に帰属する。

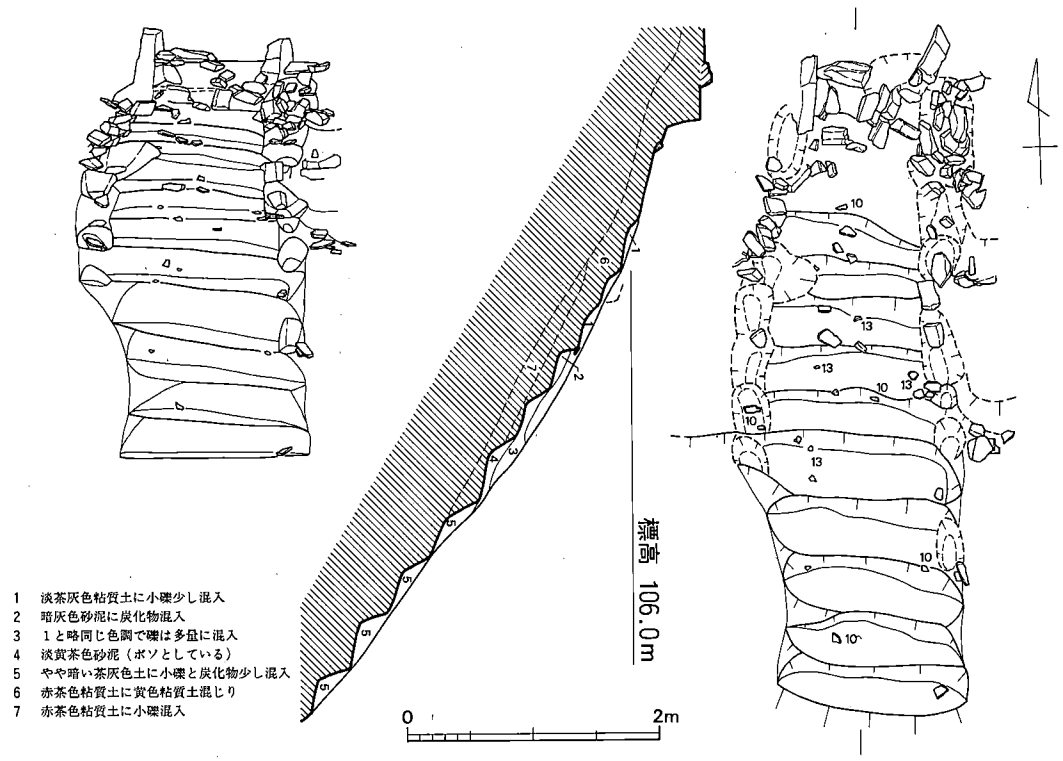
改修時の床面は，以前の床直上に敷き詰めているが，同じ緑泥片岩の扁平石を用いている。

羨道部は，側壁と墳丘全面が判然としないけれども，長さ1.5m程を測り，墳丘前方側が幅広になる台形状の平面形となろう。框石より25cm前方で，高低差25cmの段となり，緩やかな傾斜でもって墳丘裾部に至るが，ここより段状遺構が始まる。

側壁は，大半以上崩落しており，基底部の石ですら流出している。両袖石は認められず，玄門の袖石とは異なり，さほど深く据えていなかったと推定される。

段状遺構（図版22－2・23－1，第29図）

段状遺構は，羨道部の段以外に9段確認したが，最高位の段は羨道部の傾斜が続いている（土



第 29 図　4 号墳段状遺構実測図（1/60）

砂の流出を受けたた考えるのが妥当である）と思われ，明確に構築されたのは 8 段になると考えられる。遺構自体中段まで埋め戻した上に築かれているものの，土層図（第29図）の 2 に炭化物が多く含まれていた等から，似通っているものの埋土との差異が認められた。段状遺構は主軸方位と略同じ方位をなし，約35°の急勾配の斜面に造られている。踏み面は，幅130～150cmで，奥行き25～30cm，蹴上げ高20～30cmを測る。両側面に見受けられる窪みは，雨水により壁面が流出したものと思われる。この遺構からの出土品は，後述する須恵器長頸壺の口縁部・底部片と土師器の甕がある。土師器の甕は中段程に散乱していたものの，胴の一部を欠損するも略完形となる。これら遺物の出土状況から判断して，玄室改修後に埋没したと解釈できるが，築造の時期については断定できない。この種の遺構は類例に乏しく，当遺跡でも同じ形態をなすのは，5・10号墳に見られるだけである。この件については後章で再検討する。

遺物出土状況（図版24，第30図）

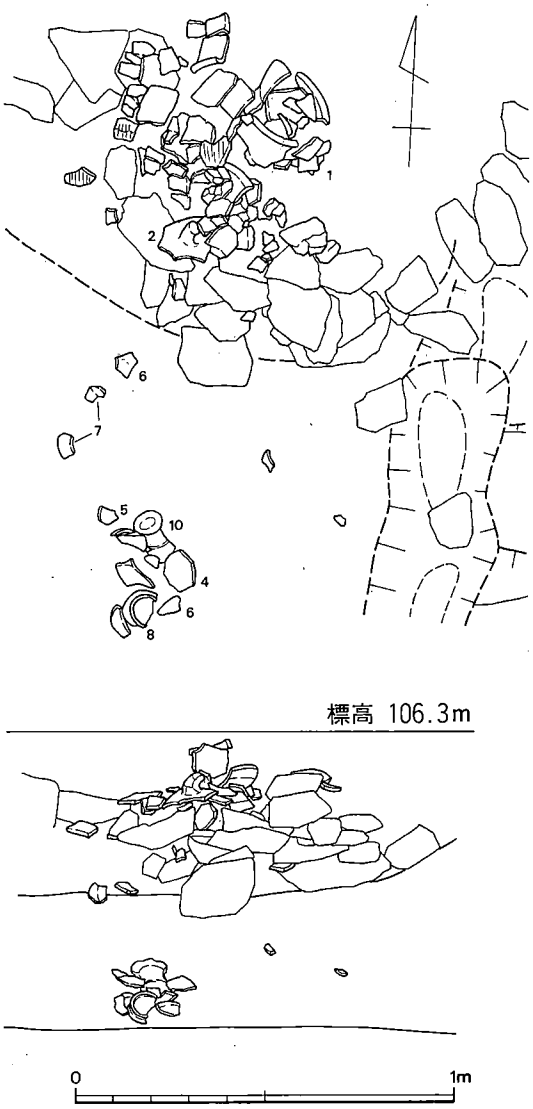
石室内よりは鉄製品が出土している。埋土中上層より土師器の杯 2 点が出土しているものの，墳丘内に混入していた品と考えられる。

墳丘内では，前述した土師器 2 点が出土したが，5 号墳にも略同様の状況が認められており，

これらを勘案すれば墳丘築造過程における祭祀行為に用いられた品と考えられる。

前庭部と段状遺構から遺物が多数出土している。左前庭部からは3～9，11，12と14が一括出土している。しかし，問題となるのは10と13の土器の出土状況である。特に10であり，大半以上は左前庭部より出土しているものの，口縁部の一部は羨道部及び段状遺構より，底部の一部も段状遺構より出土した。羨道部よりの出土品は，本体から約2m離れかつ50cmも高所に位置しており，人為的作用が働いて起こり得たと考えられる。13も同様に前庭部と段状遺構に散乱している。

4・5号墳間よりの出土品17は，4号墳が高所に位置しているので，4号墳からの流出品と考えられる。



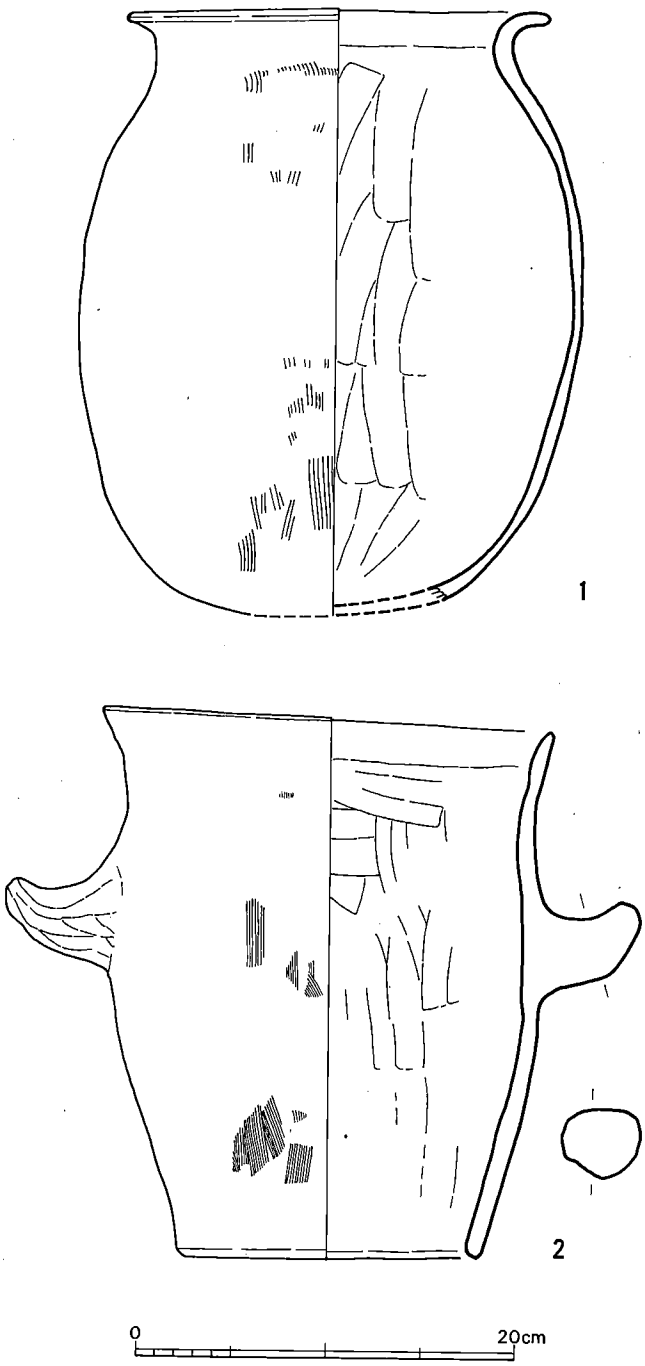
第 30 図　4号墳前庭部遺物出土状況実測図（1/20）

出土遺物（図版25，第31～36図）

墳丘内出土土器（第31図）

土師器甕(1)　口径22.2cm，復原器高32.1cmを測り，底部を欠くものの略完形品である。口縁部は大きく外反し，ナデ肩で若干丸くなる胴部に続く。外面はハケ目，内面は縦位のヘラケズリ，内外口縁部はヨコナデ調整を行う。胎土は石英粒を若干含み，赤褐色を呈す。焼成は良好である。

土師器甑(2)　口径23.9cm，底径15.4cm，器高28.4cmを測る。口縁部は僅かに外反し，胴部は略直立し，少し内弯気味となる底部に続く。外面はハケ目調整が僅かに認められ，内面は縦位のヘラケズリが主となるも，上方に横位のヘラケズリが認められる。口縁部と底部の内外面はヨコナデ調整を行い，把手はナデ調整となる。細砂粒を多く含み，赤褐色を呈する。焼成は普通である。



第 31 図　4 号墳墳丘内出土土器実測図（1/4）

前庭部及び段状遺構出土土器（第32・33図）

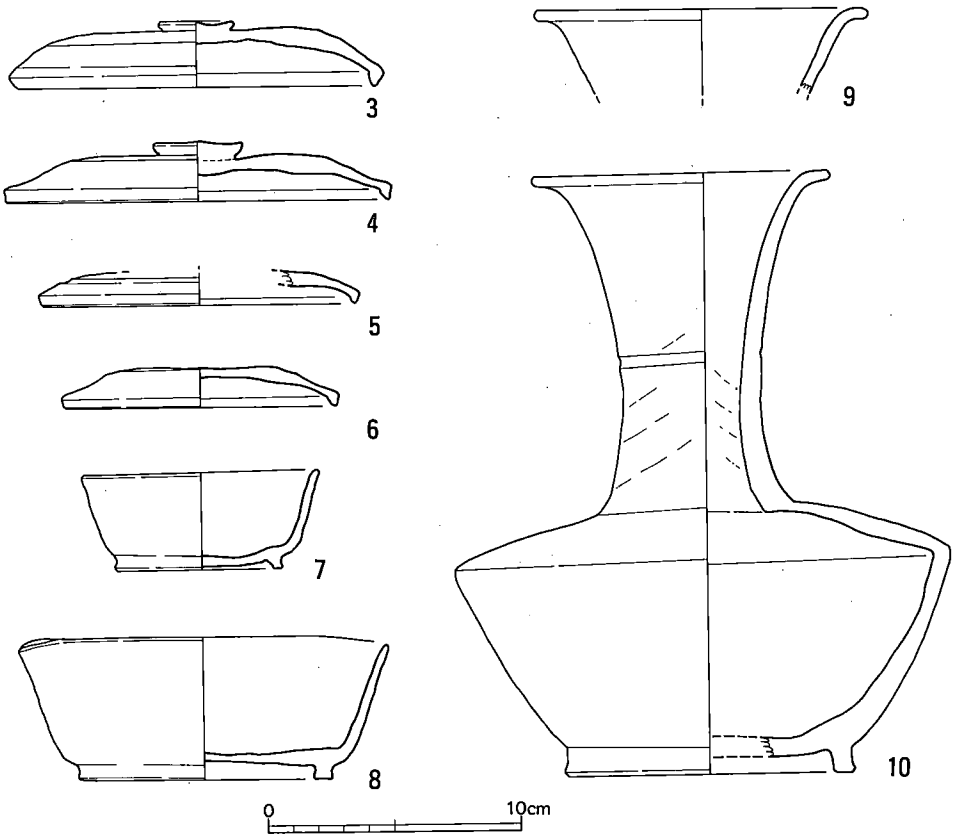
須恵器杯蓋（3～6）　口縁部は若干丸味を有す鳥嘴状をなす。3と4には扁平化したつまみを付している。天井部は平坦で，3の体部が若干丸味を有している。5は段状遺構よりの出土品で，他は前庭部より出土した。

3は口径14.2cm，器高2.6cm，つまみ径3cm，つまみ高0.35cmを測る完形品。外面天井部から体部中程にかけて回転ヘラズリ，内面天井部はナデ，他の部位は回転ナデ調整となる。胎土に粗い石英粒を僅かに含む。内面は淡灰色，外面は淡灰色ないし暗灰色を呈す。焼成は堅緻。

4は口径15.2cm，器高2.4cm，つまみ径3.6cm，つまみ高0.6cmを測る。調整は3と略同じ。胎土は細砂粒を少し含む。内外面共に青灰色を呈す。焼成は良好である。

5は復原口径12.6cmを測る小破片。天井部はヘラ切り後未調整で，他は3と同じ。内面は淡緑灰色を呈す。胎土と焼成は3と同じ。

6は口径10.6cm，器高1.6cmを測り，歪んではいるが小型の完形品。外面天井部はヘラ切り後ナデ調整となり，他は3と同じ

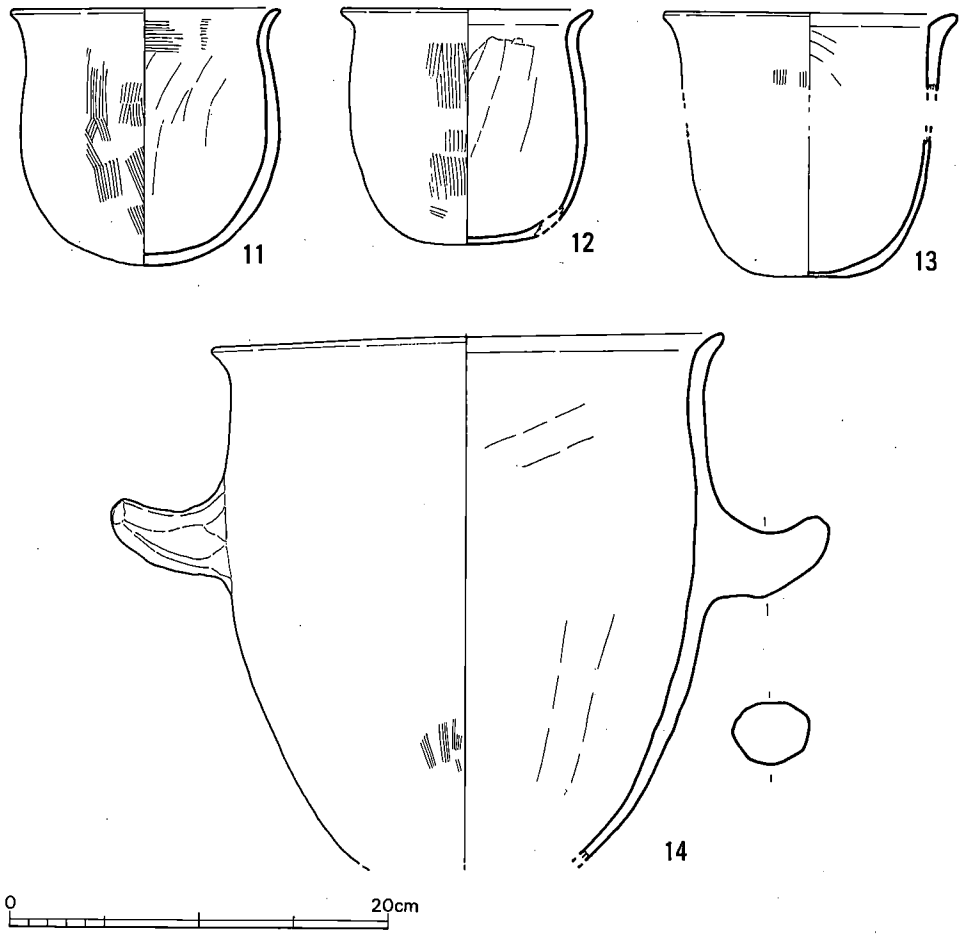


第 32 図　4 号墳段状遺構等出土土器実測図 1 (1/3)

調整。胎土に細砂粒を多く含む。青灰色を呈し，焼成は良好である。

須恵器杯身(7・8)　7は6と，8は4とセット関係になると考えられる。両品共に前庭部より出土したが，破片の一部は斜面に転落していた。7は口径9.3cm，高台径6.6cm，器高3.9cmを測る完形品。緩やかに外反する口縁部で，「ハ」字状に外反する高台を付す。底部内面が不定方向のナデ，他は回転ナデ調整となる。胎土・色調及び焼成は6と同じ。8は口径14.5cm，高台径9.9cm，器高5.6cmを測る。焼け歪みをなしているが略完形品である。体部より外反し，直立した高台を付している。外面底部はヘラおこし後丁寧なナデを施すが，他は7と同じ調整である。胎土・色調及び焼成は4と同じ。

須恵器長頸壺(9・10)　前庭部よりの出土品だが，前述した様に10の一部は羨道部と段状遺構から出土した。9は復原口径11.6cmを測る。口縁部は大きく外反し，水平に近い平坦面をなしている。回転ナデ調整で，胎土に細砂粒を僅かに含む。青味ある黒灰色を呈し，焼成は良好。10は口径11.8cm，高台径11.4cm，胴部最大径19.5cm，器高23.8cm，高台高1.1cmを測り，底部の一部が欠損した略完形品である。頸中央部が最も細く，一条の凹線が巡り，大きく外反して口



第 33 図　4 号墳段状遺構等出土土器実測図 2 (1/4)

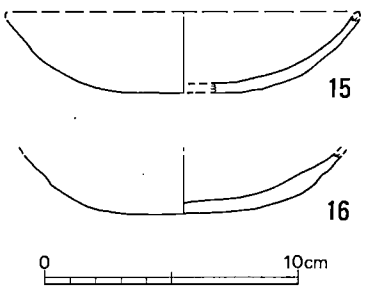
縁部へ続く。口縁部はやや鋭く屈曲し，水平な平坦面を有する。肩部は僅かに丸味を有し，鋭く屈曲して体部に続くが，稜線はさほど明瞭ではない。略直立した高い高台が付く。主に回転ナデ調整で，頸接合部はやや粗雑なナデ調整となり，頸部に絞り痕が認められる。胎土にやや粗い砂粒を含む。内面は暗緑灰色，外面は淡黒灰色を呈す。焼成は堅緻である。

土師器甕(11～14)　13が段状遺構よりの出土品で，他は前庭部より出土した。11～13は小型品で，14は把手付きの大型品である。11は口径14.2cm，器高13.4cmを測る略完形品。口縁部は緩やかに外反し，胴部は丸味を有す。内面は縦位のヘラケズリ，外面はハケ目調整で，内外共口縁部はヨコナデ調整をなすも，内面にハケ目が認められる。胎土に砂粒を多く含む。橙色を呈し，焼成は良好。12は口径13.2cm，器高12.25cmを測る完形品。口縁部はやや大きく外反し，胴部は丸味をほとんど有しない。調整は11と略同じとなる。胎土に細砂粒を多く含む。赤褐色

ないし黄灰色を呈す。焼成はやや不良。13は胴部が欠損しているが同一個体となろう。復原口径15.4cmを測り，14cm程の器高と推定される。口縁部は分厚いが鋭く外反し，胴部は11と略同じで，赤褐色を呈す。焼成はやや不良。14は口径27.05cmを測り，底部を欠損するも略完形品。口縁部はやや大きく外反し，胴部は少し丸味を有す。器面は著しく磨滅しているが，内面はヘラケズリ，外面はハケ目が認められる。口縁部はヨコナデ，把手に浅い窪みが一ケ所認められた。胎土は砂粒を多く含む。内外面共に赤褐色ないし茶褐色を呈す。焼成は良好。

玄室内出土土器（第34図）

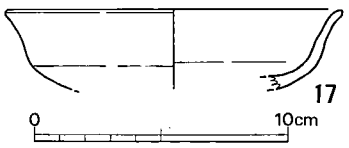
土師器杯（15・16）　埋土上層からの出土品。15は著しく磨滅しており，口縁端部が不明な略完形品。口径14cm，器高3.2cmと推定される。体部から口縁部にかけて，緩やかに外方へ開く。底部外面に粘土紐の巻上げとヘラ起こし痕が認められる。調整はナデであろう。胎土に微砂粒と雲母が含まれる。内面は黄色っぽい淡茶灰色，外面は灰褐色を呈す。焼成はあまい。16は口縁部を欠損するが，15と略同じ器形になると考えられる。底部から体部にかけて明瞭な段が認められる。整形と調整も15と略同じ。胎土は精良で，雲母を少し含む。茶色味ある淡黄灰色を呈す。焼成はややあまい。



第 34 図　4 号墳玄室内出土土器実測図（1/3）

4・5号墳間出土土器（第35図）

須恵器杯身(17)　復原口径13.4cmを測り，器高は3.15cm残存する破片である。口は大きく開き，体部下位で屈折する。回転ナデ調整で，底部内面に不定方向のナデが見られる。胎土に細砂粒をやや多く含む。淡青灰色を呈す。焼成は堅緻。　（武田）



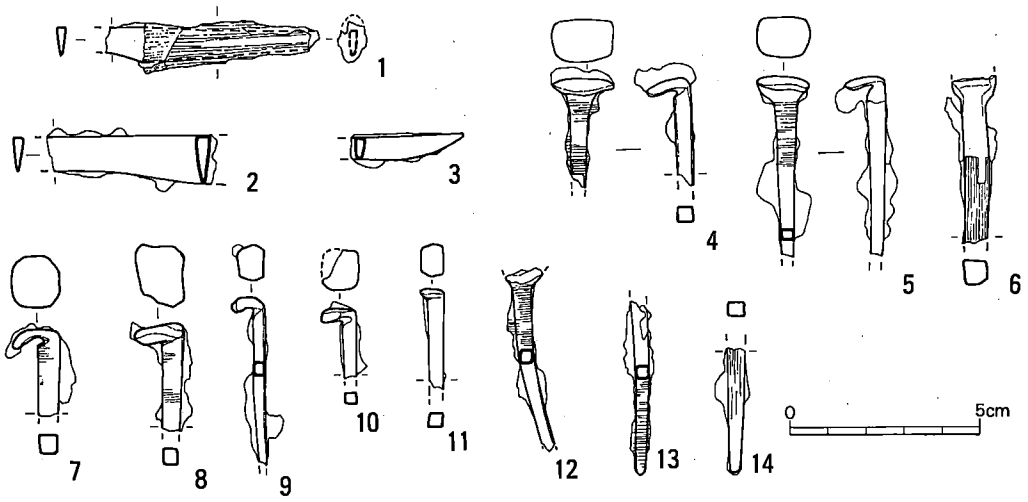
第 35 図　4・5号墳間出土土器実測図（1/3）

鉄製品（第36図）

刀　子（1～3）　1は上部床面，2・3は下部床面から出土した。1は刃部側を欠くが，現存長5.6cm，現存幅1.4cm，厚さ0.8cmで，木質の残る茎部はこのうち4.6cmの長さを占める。折損部での刃の幅は0.65cm，厚さ0.25cmだが，関部では幅が0.9cmある。2は先端も茎側も欠く刃部の破片で，現存長4.5cm，先端側の幅0.9cm，厚さ0.3cm，茎側の幅1.3cm，厚さ0.4cmを測る。

3は断面形が台形を呈し，刃がみられないので茎部の破片であろうが，木質は錆着していない。基部端は尖る。2と同一個体の可能性もある。

鉄　釘（4～14）　主に下部床面から出土し，図示しない小破片が3片ある。体部は断面方形



第 36 図　4 号墳石室内出土鉄器実測図（1/2）

で，先端は細くなる。頭部は折曲げてL字形になり，平坦面をもつ。　（小池）

石室の構造は不明な点が多々あり，築造年代を断定するまでには至らないが，古式のタイプではない。墳丘内出土品 2 点が築造時を指標するも，時期差の乏しい器種ではあるが，5 号墳段状遺構の出土品よりも若干新しいと思われ，一応 7 世紀後葉頃が考えられる。

前庭部出土品には，8 世紀前半～中頃までの品が含まれているので，追葬はこの時期まで行われていたと思われる。　（武田）

5．5 号墳

墳　丘（図版26－1・31，第37・38図）

4 号墳の東南側に，周溝間の最短距離 3 mを測る位置で，標高101～106mに占地する。調査前に主体部や周溝とおぼしき陥没穴が認められ，表土剝ぎを慎重に行った結果，主体部奥壁側は略天井石近くまで残る，比較的に残存状況良好な古墳であることが判明した。天井石は長さ 1 m程の大振りな扁平石で，玄室内に崩れ落ちていた。

墳丘の規模は，周溝外径で12.2m，同内径で7.2m，同幅で1.8～ 3 m，玄室側が最も深く1.25

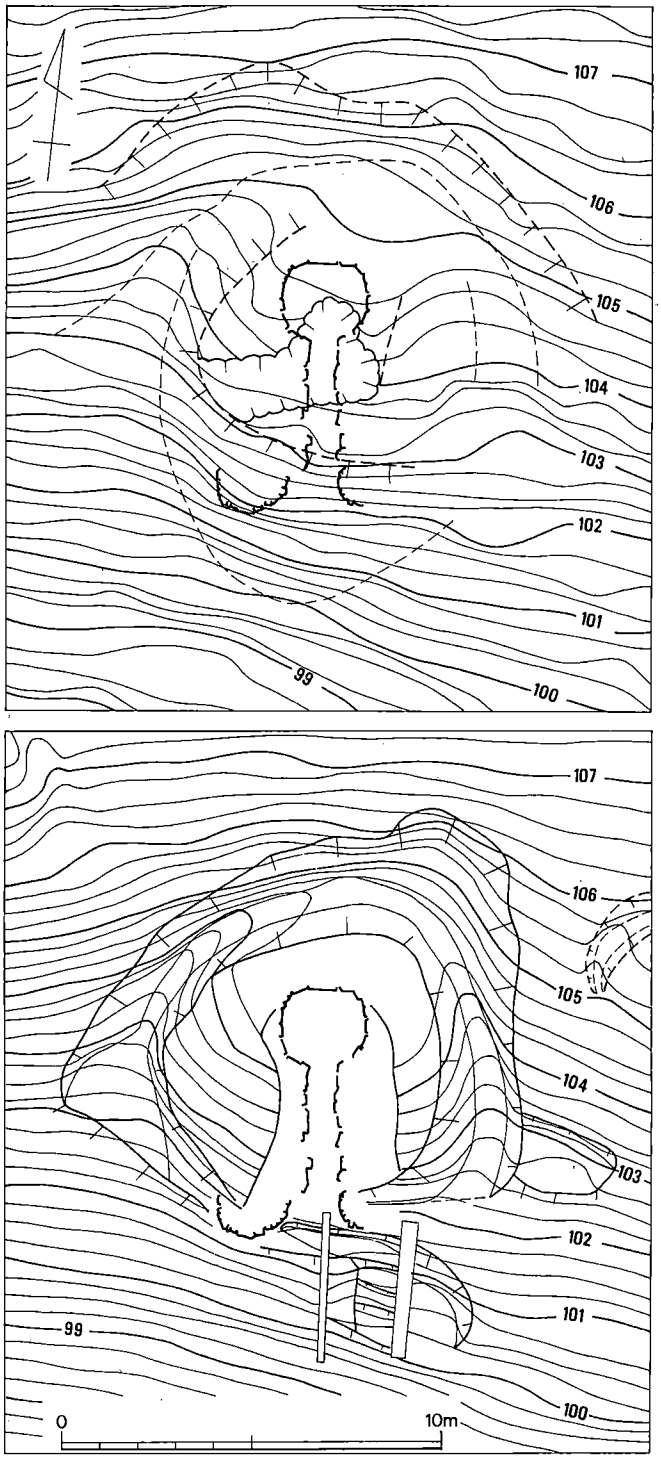
mを測る。周溝は，Ⅰ・Ⅳ区の先端側が不明となるも，平面形態は馬蹄形を呈している。周溝底の最高所は，玄室側北東部で標高104.5mとなり，両側に流れ出る。

墳丘の残存状況は，玄室側が最も良好で，床面より2.1mを測るが，前方側に向かうにつれ順次低くなり，前面で0.5～0.6mを測る。前面側の列石は，大きく流動したり崩落しているが，西側の墳丘裾部から周溝にかけての地山面より大きく流出していることに起因している。

本墳が占地する所は，地山面での勾配が，南北で約25°前後を測る急斜面である。かかる条件の下に，様々な創意工夫が墳丘築造過程で認められた。

地山整形は，玄室中央から前方5mまでが掘削を，その前方を排土の一部で盛土をなし，高低差0.7mをなす緩やかな勾配の平坦面を造っている。玄室奥側では，最深部で1.7m程掘削していた。この地山整形面における祭祀行為の痕跡は認められなかった。

地山整形後，石室架構と共に墳丘盛土をなすが，本墳には特色ある工法を同時に行っている。前述した地山掘削の南端に当た



第 37 図　5号墳墳丘・地山整形面測量図（1/200）

る位置に，墳丘内の左右に列石を配していることである。右墳丘内列石は，玄室中央から南に3.5mの位置で，羨道と直交して東へ２m伸展する。列石は，３～５段略垂直に積み上げられ0.6m程の高さとなり，東端は縦長に石を据えている。また，列石の内外では盛土も異なり，この高さまでが墳丘築造過程の一段階と考えられるが，墳丘の崩落防止の一工夫として施工されたのであろう。

左墳丘内には，内護列石として呼称出来ないまでも，中軸線から内方へ２m，玄室中央からは右側と略同じ距離の所を起点とし，内角約40°開き1.2m玄室方へ伸展する列石が存した。列石は１ないし２段で，明確に積み上げた態をなしていない。そして，石の下方より土師器の皿と甕が押し潰れた状態で出土したことから，墳丘築造過程における祭祀行為を主体とした遺構であろうか。

両墳丘内列石の設定，構築と共に，玄室方の石室架構・盛土は同時的に進行し，玄室奥側では床面より２m弱の高さまで達したと考えられる。この時点において，墳丘上に一つの面的遺構が確認された。第38図の赤線で描かれている様に石室外方を巡る列石である。石室に用いられている緑泥片岩よりも更に小振りで扁平な石材を一列配して，東側の玄門部より，西側が玄室中央付近まで連なる。この種の遺構は，桑野題２号墳（註２）にみられるが，甘木・朝倉地方にみられる内護列石（註３）との関連を重視しなければなるまい。当古墳群（註４）においても，墳丘内に数段積み上げられた例は多々見受けられるが，これらは明らかに墳丘を護る役割を担っている。しかし，本墳の場合は，奥壁側の一部が２段積まれているのみであり，墳丘の崩れを充分に防止出来るとは思われない。上記の意図も否定できないし，同じ系譜を引継いだのであろうが，墳丘築造過程における規模・形状の修正か，または上方盛土への目安にすることを主体に置いたのではなかろうか。

更に上方の盛土を行なう以前に，左墳丘前面の基底部を築いているが，平面形は「U」字状を呈し，１ないし２段残存していた。このことから，当初略旧態を保っていると思われた上方の積み石は，若干前方部へ押出されていることが判明した。右側は左側よりも甚だしく流動した状況で，東南側で周溝と接した所の列石の一部のみが旧態を保っていたことも分った。これらより，墳丘前面に「U」ないし「L」字状の列石が存在したと類推される。

これらの過程を経て墳丘を完成させているが，本墳の場合２段階以上の過程が存したと判断された。

主体部（図版28～30，第38・39図）

本墳の埋葬施設は，主軸方位N７°30′Wをとり，南に開口する単室構造の横穴式石室である。後述するが，羨道部内のやや玄室寄りに，仕切り石を深く据えており，前室的空間を意識して造ったと思われ，複室構造を意識した単室構造の石室となる。

第 38 図　5 号石室平面実測図（1/60）

石室は全長6.4mを測る。石室の壁体は緑泥片岩が用いられている。

玄室床面の規模は，最大長1.95m，最大幅2.22mを測る。平面形は，奥壁側は略直線となるが，玄門側は丸味をなし，蒲鉾形に近い円形を呈す。床面は玄門側が若干低くなる。

奥壁は，略中央に高さ95cm（床面からの高さは80cm），幅は60～80cm，厚み20cmの大振りで，略長方形の緑泥片岩を据えて鏡石としている。その両脇は扁平石を小口積みして，鏡石上端部まで略垂直に積み上げられている。鏡石の上部には大振りな扁平石が乗るが，この石が水平を保つため，奥壁側掘方は二段掘りでテラスを造り，鏡石とテラス部に架構している。その上方は大きく内に傾いた状態で現れたが，石室断面図でも判別される様に，天井石や前方部の崩落時か後に，前面に押出されている。鏡石上方２枚目の石を下方の石上端面に接した状態に復原すると，最高所の石より上方は，玄室内に崩落した量を勘案すると，天井石に近い部位であり，石室高も床面より２mを若干越す程度と思われた。

左側壁は，奥壁と同様の方法がなされ，基底部より７・８段目まで略垂直に小口積みし，その上方は持ち送りでもって内傾するが，奥壁と同じ素因でもって押出されていた。

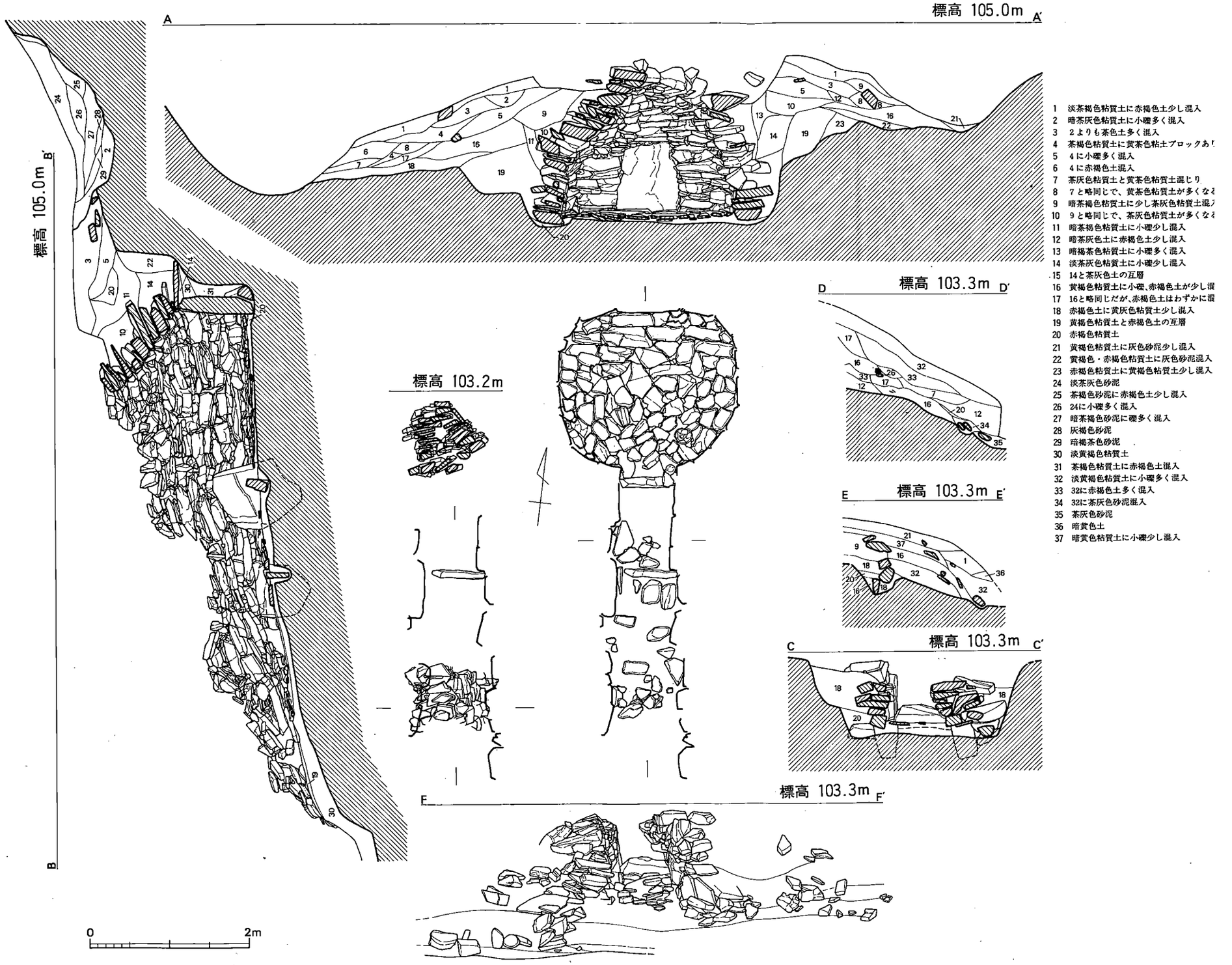
右側壁は，玄室中央までは奥壁と全く同じ状況であるが，玄門側は基底部及び３段程しか残存しない。構造や積み方は，左側壁と大差なかったと思われる。

玄門の左袖石は，最大長1.1m，最大幅0.8m，厚み28cmの不整形な扁平石を用い，約半分程を地中に埋め込み据えている。右の袖石も略同じ大きさ，方法で底の高さを揃えて据えていた。框石は，玄門袖石間70cmのぎりぎりに，長さ60cm，幅13cm，高さ27cmの扁平な緑泥片岩を，袖石中央より少し玄室側に，床面より半分程埋め込み据えている。

羨道部は，右側壁長3.65m，左側壁長4.05mを測り，前面側が少しづつ広がる平面形を呈す。玄門の框石より前方１mの所に仕切り石が存し，長さ65cm，幅10cm，高さ30cmの扁平な緑泥片岩を用い，大半以上地中に埋め込んでいる。この仕切り石を挟む両側壁に，玄門袖石より少し小振りな石が地中深く据えられていた。左側壁では，玄門袖石とこの袖石風の石の間に，小振りの扁平石を据えているが，三石を見るかぎり石の大小や据え方が極端に異なり，前述の袖石風の石は袖石と見間違う程である。右側壁も左側と略同じとなるが，袖石風の石は若干小振りとなる。これら仕切り石と両袖石風の石の存在より，長さ１m，幅0.7mを測る長方形を呈す空間は，あくまで前室を意識して造られ，かつ前室を意図していることが感受される。

左側壁は，扁平石を略垂直に小口積みして，５～８段残存している。玄門部付近は略水平に積まれており，前面にかけては大きな勾配をなして積まれた態をなすが，墳丘前面が押出されていることに起因したのであろう。右側壁も同様となるが，墳丘の流動により内にせり出した状況を呈す。

羨道部床面には，一部敷石が残存しており，鉄釘の出土状況を考慮に入れると，当初の床面



1 淡茶褐色粘質土に赤褐色土少し混入
2 暗茶灰色粘質土に小礫多く混入
3 2よりも茶色土多く混入
4 茶褐色粘質土に黄茶色粘土ブロックあり
5 4に小礫多く混入
6 4に赤褐色土混入
7 茶灰色粘質土と黄茶色粘質土混じり
8 7と略同じで、黄茶色粘質土が多くなる
9 暗茶褐色粘質土に少し茶灰色粘質土混入
10 9と略同じで、茶灰色粘質土が多くなる
11 暗茶褐色粘質土に小礫少し混入
12 暗茶灰色土に赤褐色土少し混入
13 暗褐茶色粘質土に小礫多く混入
14 淡茶灰色粘質土に小礫少し混入
15 14と茶灰色土の互層
16 黄褐色粘質土に小礫、赤褐色土が少し混
17 16と略同じだが、赤褐色土はわずかに混
18 赤褐色土に黄灰色粘質土少し混入
19 黄褐色粘質土と赤褐色土の互層
20 赤褐色粘質土
21 黄褐色粘質土に灰色砂泥少し混入
22 黄褐色・赤褐色粘質土に灰色砂泥混入
23 赤褐色粘質土に黄褐色粘質土少し混入
24 淡茶灰色砂泥
25 茶褐色砂泥に赤褐色土少し混入
26 24に小礫多く混入
27 暗茶褐色砂泥に礫多く混入
28 灰褐色砂泥
29 暗褐茶色砂泥
30 淡黄褐色粘質土
31 茶褐色粘質土に赤褐色土混入
32 淡黄褐色粘質土に小礫多く混入
33 32に赤褐色土多く混入
34 32に茶灰色砂泥混入
35 茶灰色砂泥
36 暗黄色土
37 暗黄色粘質土に小礫少し混入

第 39 図　柿原D地区 5 号墳石室実測図 (1/60)

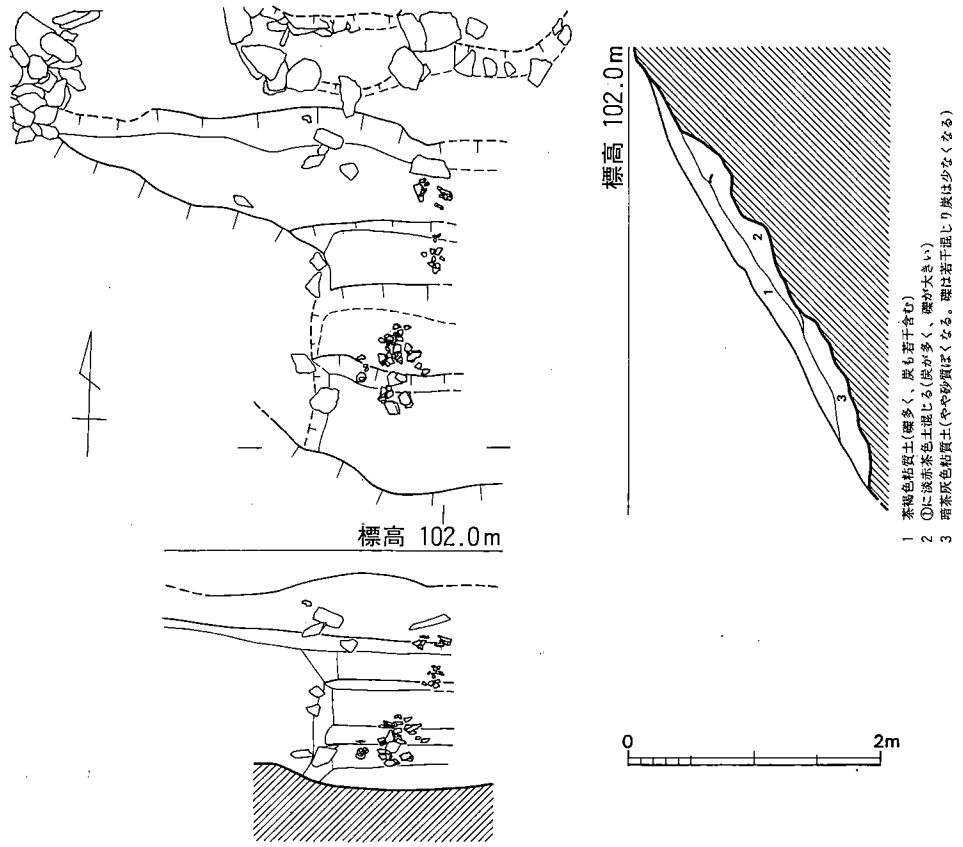
に敷石はなされていたが，追葬時に剝がされ閉塞石の一部に使用されたと思われる。

閉塞状況は，玄室中央より，3.9m地点を中心として0.8mに及び，扁平な緑泥片岩でもって0.9mの高さに羨道間を埋めていた。

段状遺構（図版26－２・27，第40図）

墳丘前面の列石確認を行なうため，試掘トレンチを設定し掘り下げた結果，地山と判断していた層より土器が出土し，土層断面より段状遺構が存すると判明した。埋土は，墳丘盛土や地山整形時の盛土と若干の差異が認められ，土師器の甕と甑１個体が小片となり散乱し，下方２段目に炭化物が床直上より出土した。

羨道部端に当る，玄室中央より5.4m地点に中軸線と同じ方位で段が始まり，４段を確認した。段状遺構の西側の一部は流出を受けていたし，東側はトレンチにより削平し不明となるも，



第 40 図　５号墳段状遺構実測図（1/60）

長さ2.2mに対して高低差1.7mとなる。石室が占地する旧地形よりも若干急勾配となるが，土層図に見られるごとく，若干段上端面が流出しているのを考慮に入れると，旧地形を充分に利用して造られたものである。

最上段は東側へ緩やかな傾斜をなして伸展し，中軸線から１～２m間に下方の段が取り付き，中軸線より若干東に振れた主軸となる。個々の段差は，19～30cmの蹴上げ高を測り，段の上端面の流出を考慮に入れると40cm前後の踏み面になると推定される。段の幅も１m前後であったろう。

土器の出土状況や，玄室内に追葬が行われたことなどを考えると，追葬後に埋没したと考えられる。築造時については，判断する材料は無いけれども，単純かつ合理的に考えるならば，古墳築造時と思われるが，断定するまでには至らない。細部の検討は後章で行なう。

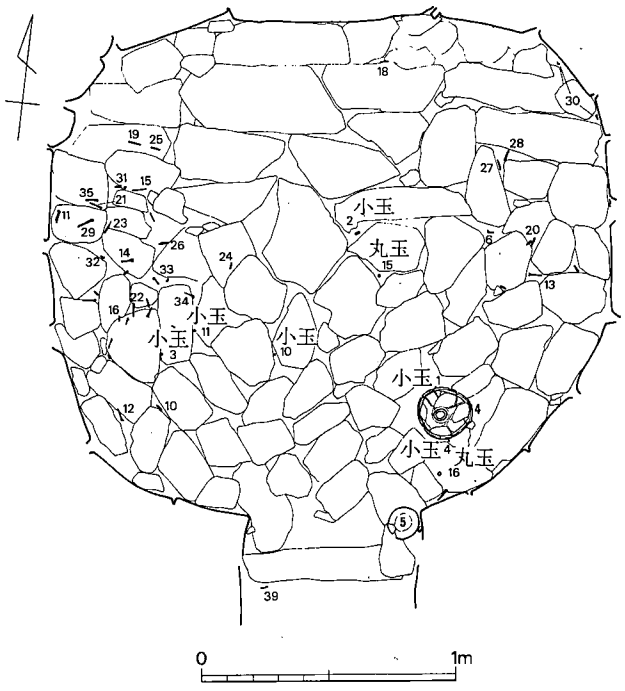
遺物出土状況（図版32，第41図）

玄室内床面より須恵器長頸壺と土師器の椀が東南隅より完形で出土した。出土地点より追葬時に供献された品か，当初の品であるのかの判断は下し難いが，追葬時の供献された品と考えるのが妥当であろう。その他には多数の鉄釘と玉類が出土している。鉄釘は広範囲に散らばっているが，中央部の両側壁際に集中していることより，棺の長軸を東西に安置していたことが窺える。その他の鉄釘については，羨道部の閉塞石付近にも散らばっていること等から，当初の棺に使用されていた品で，追葬時に隅へ寄せられたのであろう。玄室内埋土中より須恵器小片が３点出土している。

羨道部からは，釘の他に土師器の甕が出土したが，墳丘内の品に帰属するかも知れない。

墳丘前面では，左側より土師器甕の胴下半部が出土した。段状遺構より出土した土師器の甕と甑は，転げ落ちた状態を呈していることから墳丘右前面に置かれていたのであろう。

墳丘内西側列石付近及び下方



第 41 図　５号墳玄室内遺物出土状況実測図（1/30）

より，土師器の甕と皿が出土している。この皿と周溝Ⅲ区埋土中品が接合することから，祭祀を行なった後一部が北東側盛土内に混入したと考えられる。

周溝内では，Ⅱ区より須恵器杯蓋，Ⅲ区より須恵器高杯，Ⅳ区より土師器甕が出土した。

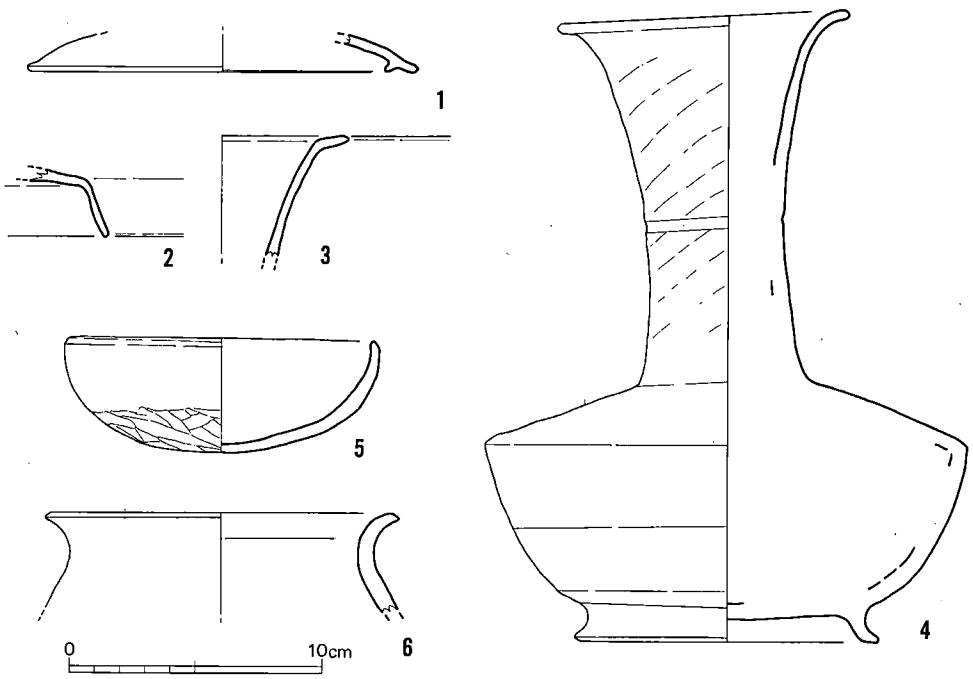
出土遺物（図版33，第42～47図）

玄室内出土土器（第42図）

須恵器杯蓋(1)　復原口径15.6cm，残高1.45cmを測る。断面三角形のかえりを付して，天井部は低く扁平となろう。磨滅しているが，一部に回転ナデ調整が認められる。細砂粒を若干，雲母を少し含む胎土である。橙褐色を呈し，焼成は不良である。

須恵器蓋(2)　壺の蓋になると思われる小破片で，残高2.6cmを測る。天井部は扁平になると思われ，大きく曲折して，外方に拡がる口縁部に続く。天井部は回転ヘラケズリ，他は回転ナデ調整である。微砂粒を多く含む胎土で，灰褐色ないしくすんだ青灰色を呈す。焼成は良好である。

須恵器長頸壺（3・4）　3は残高4.7cmを測る小破片。頸部は大きく外反し，曲折して略水平な口縁部となる。内外面とも回転ナデ調整である。精良な胎土である。内面は青灰色ないし黒



第 42 図　5号墳石室出土土器実測図（1/3）

褐色，外面は黄味ある青灰色を呈す。焼成は堅緻。4は口径11.4cm，頸部最小径5.3cm，胴部最大径18.9cm，底径11.9cm，器高24.8cmを測る完形品。外方に開くやや高い高台を付し，胴部は丸味を有して，鋭く屈曲して肩部に続く。頸部中程に一条の凹線が巡り，口縁部はあまり外反せず，また緩やかに曲折している。頸部は略全面に絞り痕が認められる。底部外面はナデ，体部中程より下半は回転ヘラケズリ，他は回転ナデ調整をなす。細砂粒を若干含む胎土となる。内面は淡黄灰色，外面は暗灰色を呈し，一部灰かぶりがある。焼成は良好。

土師器椀(5)　口径12.3cm，器高4.6cmを測る完形品。全体に丸味を有し，口縁部が僅かに内弯する。外面体中程から底部は不定方向のヘラケズリ，底部内面はナデ，他はヨコナデ調整となる。細砂粒を少し含むが精良な胎土である。赤褐色を呈し，焼成は良好。

羨道内出土土器（第42図）

土師器甕(6)　復原口径14.0cm，残高3.8cmを測る。口縁部は大きく外反するが，肩部は緩やかに膨らむ。内外面はナデ調整となる。粗砂粒を若干含む胎土である。橙褐色を呈し，焼成は良好。

段状遺構及び墳丘左前面出土土器（第43図）

土師器甑(7)　胴中程より下方を欠損するが，復原口径29.3cm，残高17.7cmを測る。口縁部は僅かに外反し，胴部は脹らまない。内外口縁部はヨコナデ，内面は縦位のヘラケズリ，外面はハケ目が認められ，把手はナデ調整となる。雲母・細砂粒を若干含む胎土となる。明茶褐色を呈し，焼成は良好。

土師器甕（8・9）　8は胴の一部を欠損するも同一個体となる。口径は21.1cmに復原される。肩部は丸味を有して大きく張り，大きく曲折して直立気味の頸部，外反する口縁部へと続く。内外面とも磨滅しているが，内面は縦位のヘラケズリ，外面にハケ目が残り，口縁部はヨコナデ調整となる。粗砂粒を若干含む胎土となる。赤褐色ないし黄褐色を呈す。焼成は普通である。

9は墳丘前面よりの出土品で，上半を欠損する。内外面ともに磨滅し，内面に縦位のヘラケズリが僅かに認められる。胎土・色調は8と略同じとなる。焼成は良好である。

墳丘内出土土器（第44図）

土師器皿(10)　復原口径17.0cmで，2.9cmの器高が残存する。底部は少し丸味をなすと思われ，やや大きく曲折し，丸味を有し内弯する口縁部へ続く。底部外面は磨滅しているもヘラケズリが認められ，他はヨコナデ，ナデ調整となる。精良な胎土で，赤褐色ないし茶褐色を呈す。焼成はやや不良である。

土師器甕(11)　胴中程より上半を欠損するが，残高5.2cmを測り，器壁は薄く，器面は磨滅している。内面は縦位のヘラケズリをなし，底部に指オサエが認められる。外面の調整は不明。細砂粒を多く含む胎土で，赤褐色を呈す。焼成は良好である。

周溝内出土土器（第45図）

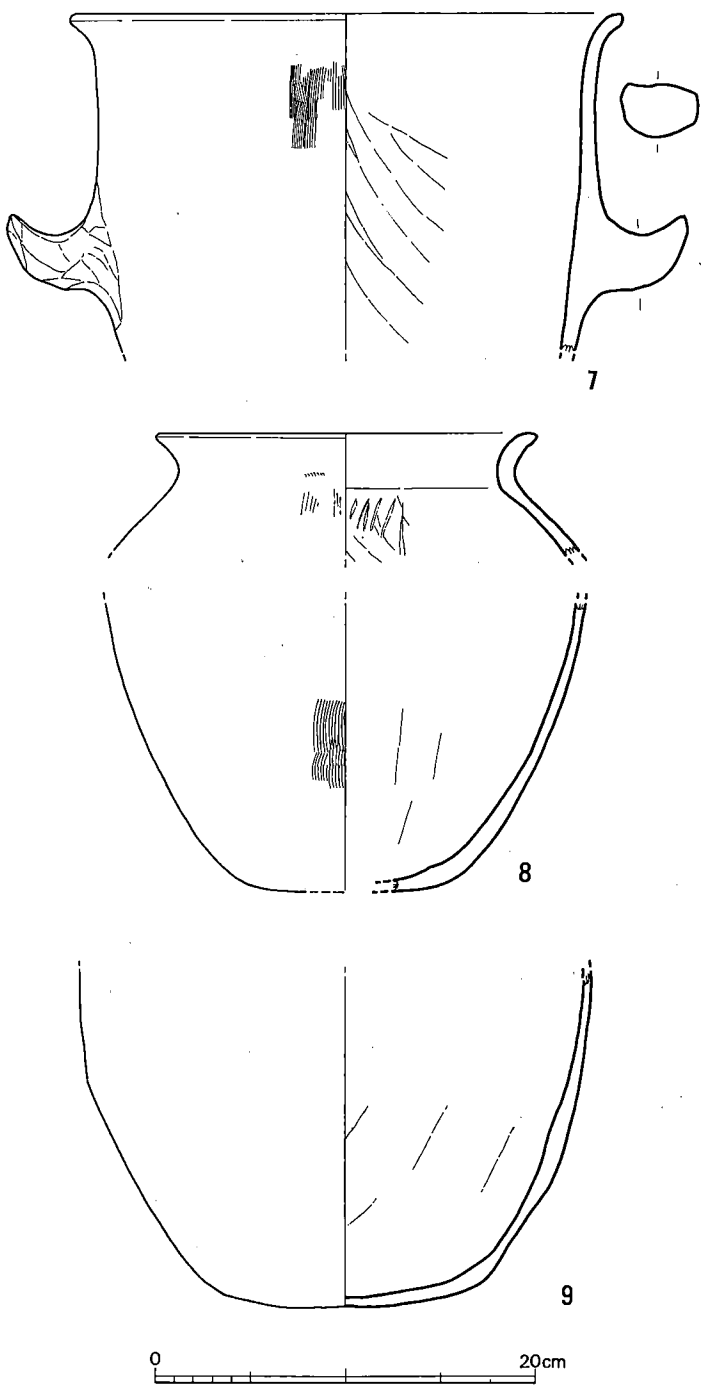
須恵器杯蓋(12)　復原口径14.4cm,器高2.1cmを測る。やや長いかえりを付しているが，天井部は扁平となる。外面天井部は回転ヘラケズリ，内面天井部は不定方向のナデ，他は回転ナデ調整をなす。細砂粒をやや多く含む胎土である。内面は灰色，外面は灰色ないし淡黒灰色を呈す。焼成は良好である。

須恵器高杯(13)　内外面をも回転ナデ調整をなす。灰色ないし緑灰色を呈す。焼成はややあまい。細砂粒をやや多く含む胎土となる。

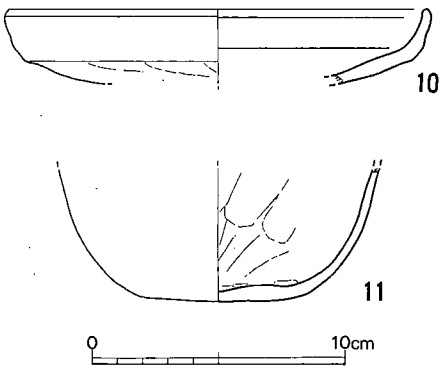
土師器甕(14)　復原口径16.2cm，を測る。胴部もさほど張らず，口縁部は緩やかに外反する。内外とも磨滅しているが，内面に縦位のヘラケズリ，外面にハケ目が認められ，口縁部はヨコナデ調整をなす。細砂粒をやや多く含む胎土である。橙褐色を呈し，焼成はややあまい。　　(武田)

鉄製品（第46図）

鉄　釘(1～40)　石室



第 43 図　5 号墳段状遺構出土土器実測図 (1/4)

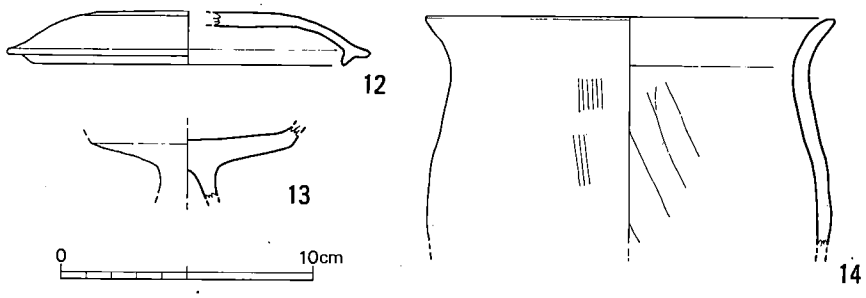


第 44 図　5 号墳墳丘内出土土器実測図（1/3）

内出土鉄釘は，個体数を数えうる頭部および頭部付近まで残る資料の35点を図示する。なお，墓道からは 5 点の鉄釘片が出土している。

1 ～28は，断面方形の体部をもち，頭部がL字形に折れ曲がり，頭面が平坦なもの。完形や完形に近い資料では，1・2のように長さが7.5cmを越すもの，20･21のように6.5～7.0cm前後のもの，12･19・22～24のように5.5～6.0cm前後のもの，18のように5.0cm以下のものなどがある。

29～35は，断面方形の体部に，T字形の頭部が付き，頭面は鋲のように扁平な円錘形をなすもの。



第 45 図　5 号墳周溝出土土器実測図（1/3）

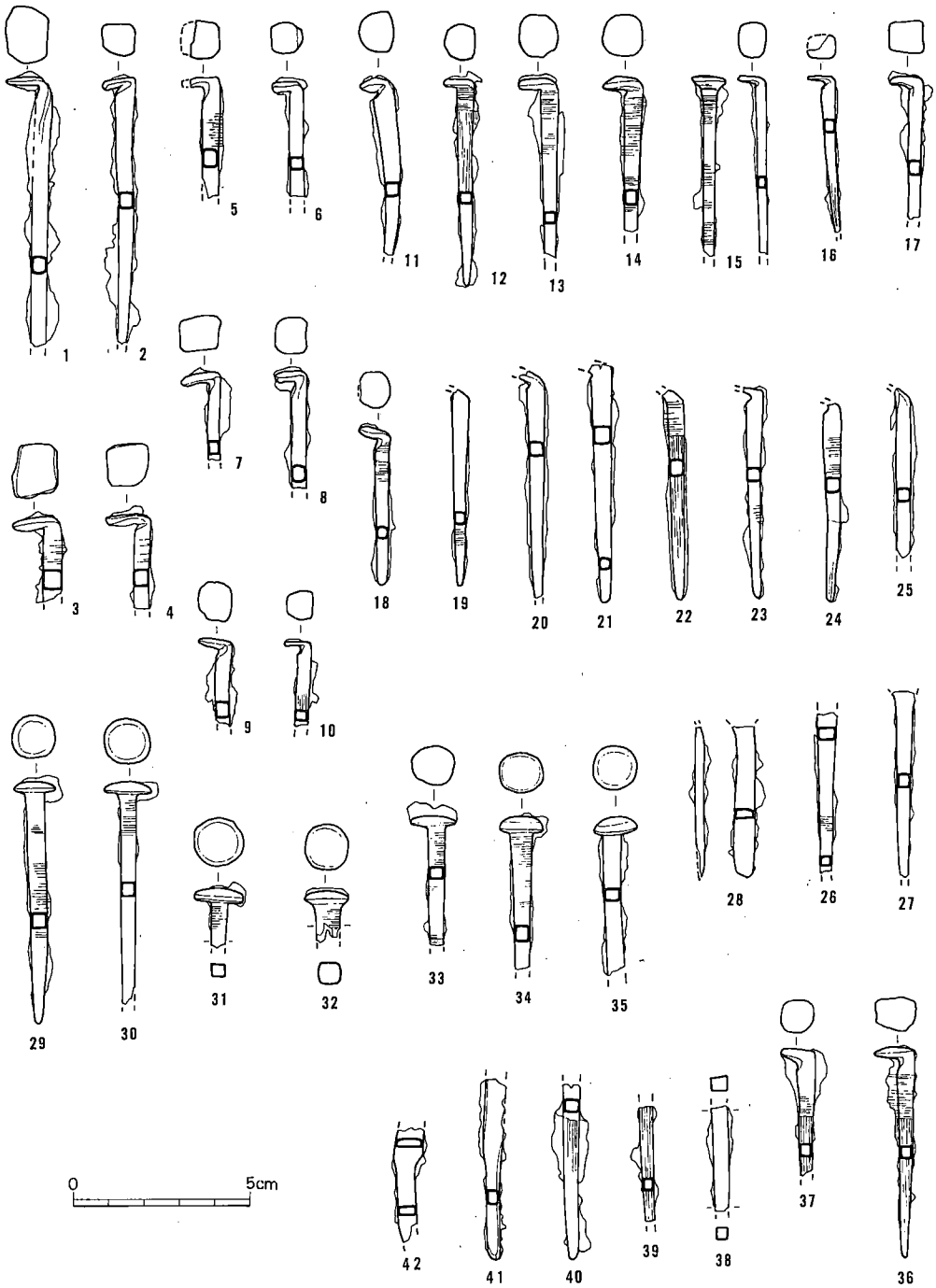
完形の29では長さ6.9cm，頭部の直径1.2cm，厚み0.3cmを測る。

36～40のうち，36は長さ5.9cmだが，銹着する木質をみると頭部から2.0cmの位置で木目の方向に変わる。37では1.9cmである。

不明鉄器(41･42)　2 点とも墓道から出土した。41は，一方の端を欠くが現存長5.0cmで，端が残る断面は不整方形を呈しており，欠損する側は幅広で扁平な体部をなしている。42は両端ともに欠損している。刀子のような形状をなすものの刃部がみられない。現存長3.2cmの大きさである。

玉類（第47図，表 2 ）

いずれも石室内から出土した。

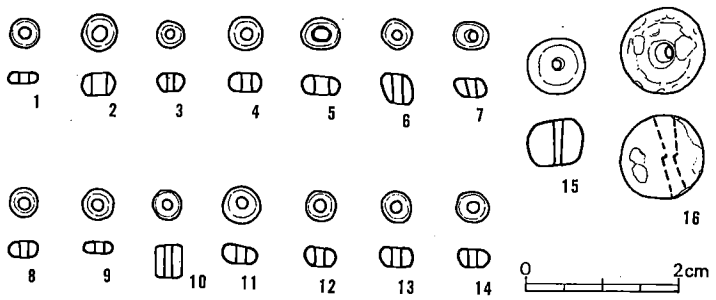


第 46 図　5 号墳石室出土鉄器実測図（1/2）

ガラス小玉(1～14)　スカイブルーを呈するものと，コバルトブルーを呈するものがある。ほぼ2：1の割合でスカイブルーの色調のものが多い。外径3.5～5.0㎜，厚さ1.5～4.5㎜の大きさで，孔径は1.0～2.1㎜である。

ガラス丸玉(15)　コバルトブルーの色調を呈している。外径7.2㎜，厚さ6.0㎜，孔径1.5㎜を測る。

瑪瑙製丸玉(16)　橙色を呈している。外径11.3㎜，厚さ10.9㎜。両側から穿孔されて，孔に若干ズレがある。比較的よく研磨されている。　(小池)



第 47 図　5号墳出土玉類実測図（実大）

表2　5号墳出土玉類一覧表

(単位㎜)

No.	種類	径	厚さ	孔径	質	色調
1	小玉	3.9	1.5	1.4	ガラス	スカイブルー
2	〃	4.6	3.0	1.9	〃	〃
3	〃	3.6	2.4	1.0	〃	暗いスカイブルー
4	〃	4.5	2.4	1.4	〃	〃
5	〃	4.2~5.0	2.7	1.3~2.1	〃	スカイブルー
6	〃	4.0	3.8	1.1	〃	〃
7	〃	3.8	2.6	1.3	〃	〃
8	〃	3.5	2.2	1.1	〃	〃
9	〃	4.0	1.7	1.2	〃	〃
10	〃	3.6	4.5	1.1	〃	暗いスカイブルー
11	〃	4.7	2.5	1.2	〃	コバルトブルー
12	〃	4.0	2.6	1.6	〃	〃
13	〃	3.9	2.7	1.3	〃	〃
14	〃	4.1	2.5	1.1	〃	〃
15	丸玉	7.2	6.0	1.5	〃	〃
16	〃	11.3	10.9	1.8	瑪瑙	橙

出土遺物より，玄室床面上の5・6が追葬時を指標し，7世紀末～8世紀前半頃に比定出来る。築造時を指標する遺物は，墳丘内より出土した10と11の土器であり，一応7世紀の後半頃に比定されよう。周溝・墳丘前面などの出土品からも妥当と考えられる。　(武田)

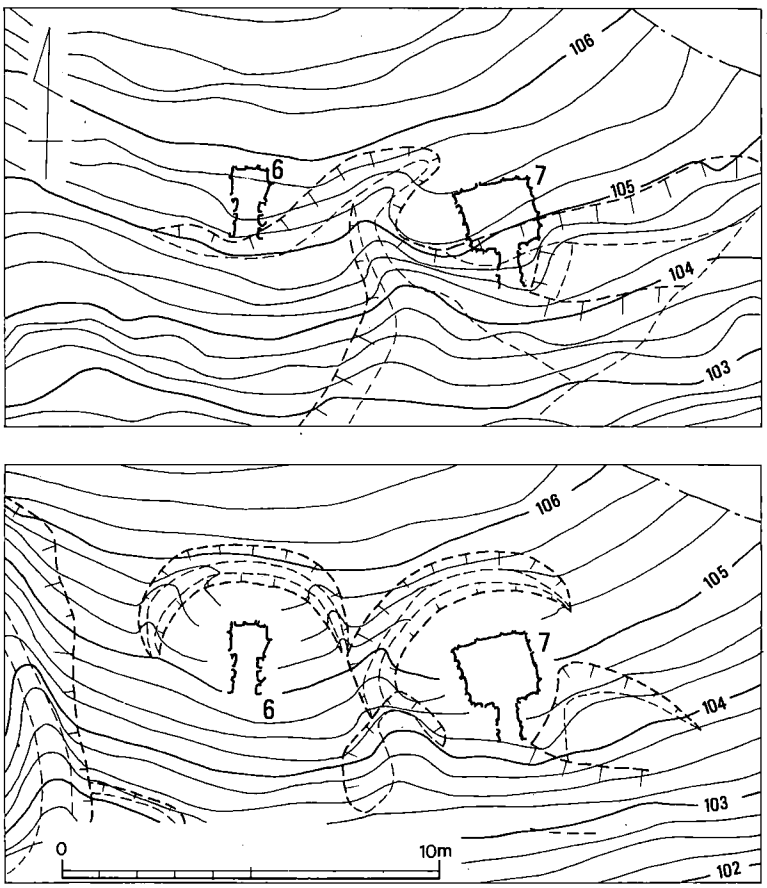
6．6号墳

墳　丘（図版34－1，第48図）

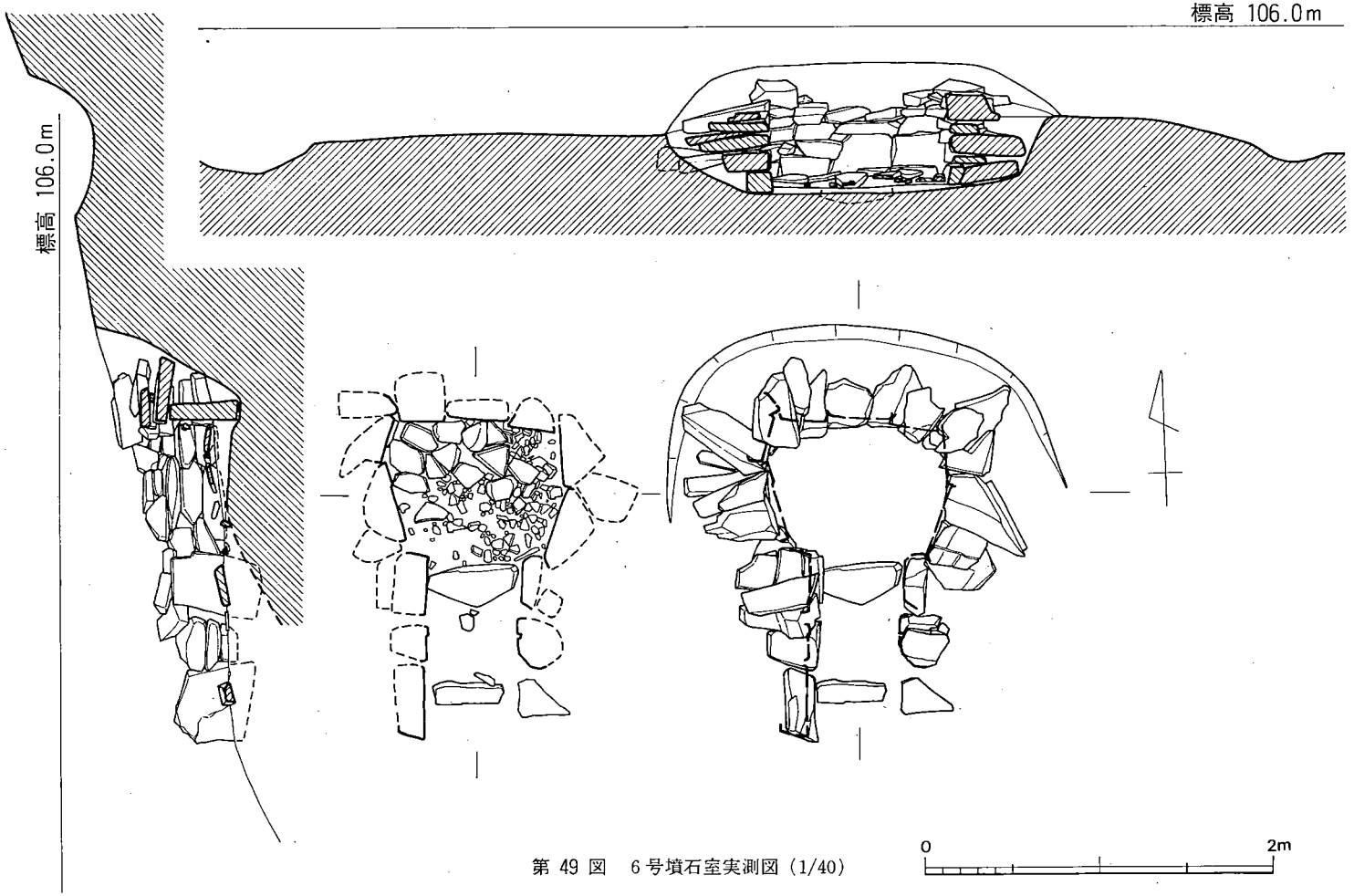
D地区斜面中段の標高105～106mの位置に築かれた古墳で，5号墳と，7号墳に挟まれている。墳丘南裾にあたる部分から7号墳にかけて地滑りによる崖面が露出しており，墳丘盛土は流失によるものか，ほとんど遺存していなかった。

周溝は，表面からの観察では不明であったが，調査の結果，主体部の背面側斜面を半円状に掘り込んでいることが判明した。周溝内径は約5.7mで，上面幅0.9m，深さ0.6mを測る。

以上のことから，墳丘を復原すると，径6mの小円墳が推定される。



第 48 図　6・7号墳墳丘・地山整形面測量図（1/200）



第 49 図　6 号墳石室実測図（1/40）

主体部（図版34－２・35，第49図）

６号墳の主体部は，主軸方位をＮ２°17′にとり，ほぼ真南に開口する単室の横穴式石室である。石室の掘り方は，玄室北半より奥壁側のみ見られ，基盤層に半方形状に掘り込んでいる。さらに底面では，奥壁鏡石基部も一段深く掘られている。石室入口前面は，急傾斜となり，墓道はみられない。

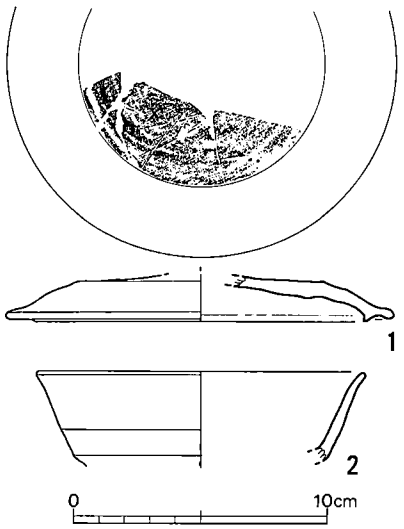
石室は，全長1.85mと小型の小石室である。玄室は，長さ0.83m，奥壁側幅１m，玄門側幅0.83m，最大幅は奥壁寄りにあって1.05mを測り，平面形は巾着形を呈する。奥壁は，中央に幅30～40cm，高さ40cmの板石を縦位に据えて鏡石とし，両脇は基底部から板石の平積みである。背面には控え積みや裏込めはみられない。奥壁の現存高は0.6mを測る。両側壁は，共に基底部から板石の平積みで，遺存の良い箇所で現存高0.6mを測る。左側壁は直に，右側壁は持ち送り気味に積まれているが，控え積みや裏込めはみられない。玄室床面は，基底部の上に小礫が敷かれ，さらにその上に扁平礫が並べられ，二次にわたる床面が確認された。

玄門の袖石は，左右とも幅0.3m程の板石を立てたもので，袖石間幅は0.55mを測る。玄門の床面には，幅広の薄板を横位に据えて仕切石としている。入口部には高さ50cm程の板石を両脇に立てて羨門として，その幅は0.55mと玄門幅と同じで，狭いものである。羨門部床面にも仕切石が据えられている。この羨門と奥壁寄りの玄門との間には0.3m程の幅があき，その部分には小さい板石が基底部から３段ほど平積みされ，羨道側壁がつくられている。以上のことから，６号墳羨道部は，複室構造をなす前室部分が退化して形式化したものと言えよう。

石室に使用された石材は，全て緑泥片岩である。

出土遺物（第50図）

６号墳からの出土遺物は，玄室内左側壁寄り床面にて重量84.6gの鉄滓が１個出土したのみで，他に石室内からの出土はない。また，入口側前面傾斜面からは，須恵器片が少量採集されており，６号墳に伴うものと思われる。



第 50 図　６号墳前面斜面
出土土器実測図（1/3）

須恵器杯蓋(1)　破片であるため天井部につまみが付くかどうか不明である。復原最大径15.3cm，復原口径13.0cm，現存高1.8cmを測る。天井部は平坦面をつくり，口縁端部には身受けのかえりがつく。かえりは口縁部端よりわずかに出る。天井部外面は回転ヘラケズリで，平坦面にはヘラ記号が付けられているが欠損している。胎土は砂粒を若干含むが精選されており，焼成は堅緻で淡灰色を呈す。

須恵器杯身(2)　底部を欠損するが，復原口径12.8cm，現存高3.5cmを測る。口径の規模からすれば，(1)の坏蓋とセットになろう。体部は直に開口し，端部は緩く外反する。胎土は砂粒を若干含むが精選されており，焼成は堅緻で淡褐色を呈している。

以上の出土遺物から，6号墳の時期は，7世紀後半頃に一端を求められよう。　　(新原)

7．7号墳

墳　丘（図版36－1，第48図）

7号墳は，6号墳の東側の標高104～105.5mに位置する。調査前の観察では，6号墳との間に小さな溝の凹みがあるものの，6号墳とともに古墳の存在は明瞭ではなかった。

表土を剝いで除去すると，約2.0m四方の石列が姿を現し，周囲に直径約7.0mの周溝が巡るので，古墳の存在が明らかとなったものである。

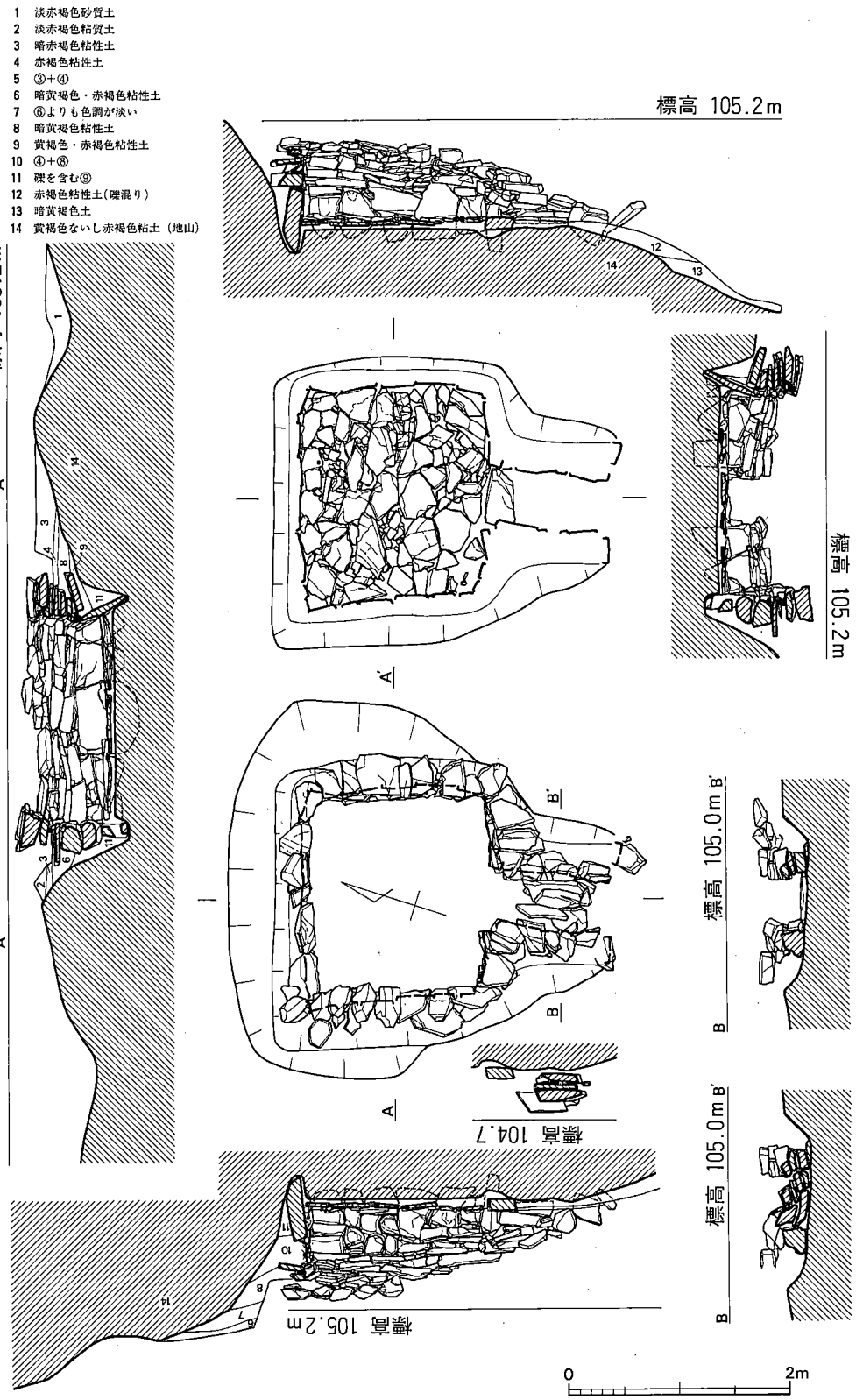
墳丘にはほとんど盛土が残らないが，石室後方などに地山と区別のつきにくい黄褐色土・赤褐色土の混じった堆積土が若干ある。墳裾は周溝内の一部に被るかたちとなるが，墳丘規模は，直径5.5～6.5mで，残存高は2.2mを測る。

周溝には，礫を含まない明るい赤褐色粘性土が堆積していて，検出面では幅1.0～1.4m，深さ0.2～0.3mである。なお，6号墳周溝と接する部分があるものの，その前後関係は不明である。

主体部（図版36－2・37・38－1・2，第51図）

この古墳の主体部は，主軸方向N17°30′Wで南南東に開口する単室両袖構造の横穴式石室である。石室は全長2.80mで，玄室は長さ1.70m，奥壁での幅2.0m，玄門側での幅1.8mを測る。また，玄門幅は0.55m，羨門幅は0.45mである。

玄室奥壁は，4枚の板石を並べて立てて据えられている。奥壁中央にあたる石が鏡石に相当する最も大きな石で，幅66cm，高さ60cm，厚さ15cmの大きさで，床面の上に35cm分の高さが出



第 51 図　7 号墳石室実測図 (1/60)

ている。これらの石の上は扁平な板石が小口積みされており，４～５段残っている。

玄室左側壁は６枚の板石が並べて立てられ，その上に小口積みもみられるものの，床面から0.5m高さまでには塊石も使用されている。左側で0.9m分の高さまで残る。

右側壁は５枚の板石が並べて立てられている。板石の上は扁平石の小口積みで５段程度残り，床面から0.8mの高さが残っている。

玄門側の壁も左右に２枚ずつ板石が立てて据えられ，その上は板石の小口積みであるが，２～３段残り，玄門の残高は0.4m弱である。玄門には，長さ50cm，幅25cm，厚さ12cmの框石が据えられている。羨道部では，左右側壁とも羨門部の石のみ板石が立てて据えられるが，玄門との間は基底部から平積みされている。

玄室内は，全面に扁平な礫で敷石されている。

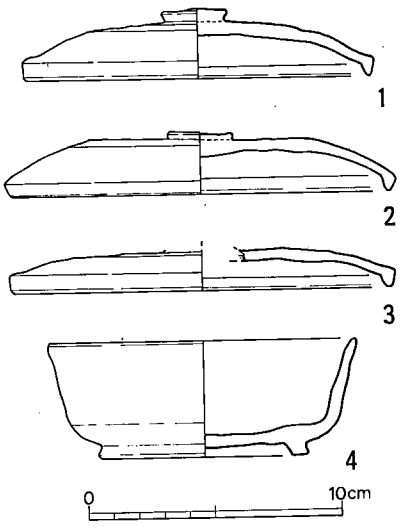
主体部掘り方は，長軸の上縁で2.2m，下端で1.8m，上縁の幅2.5m，下端の幅2.2mの玄室分に，上縁での幅1.5m，下端での幅1.1m，長さ0.8mの羨道部分が伸びている。

出土遺物（図版38－３，第52・53図）

土器類（第52図）

須恵器杯蓋（１～３）　３点共に石室検出時の墳丘表土から出土した。おおむね石室陥没穴の前面側縁部から羨道部分にかけての部分からである。１は口径13.9cm，器高2.8cm，２は口径15.4cm，器高2.5cm，３は復原口径15.2cmの大きさで，扁平な擬宝珠形つまみが付く。平坦な天井部外面は右回りとみられる回転ヘラケズリ調整され，内面は不定方向ナデ調整，口縁部は鳥嘴状をなす。精良な胎土で，堅緻に焼成されている。

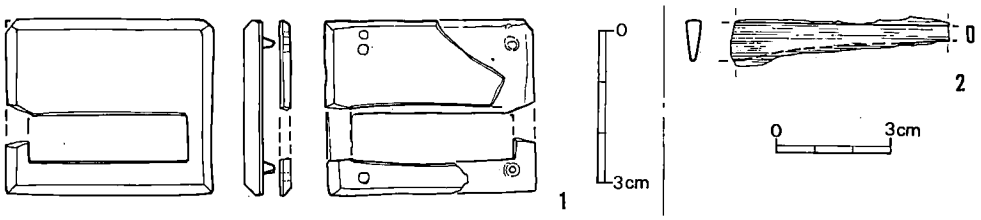
須恵器杯身(4)　周溝Ｉ区から出土した。高台を有す体部から口縁部は直線的に立上がる。良好な胎土で，黒灰色に堅緻に焼成されている。口径12.1cm，器高4.6cm，高台外径8.3cmの大きさ。



第 52 図　７号墳出土土器実測図（1/3）

金属器（第53図）

銅銙板(1)　玄室内奥壁近くの床面から出土した。錆化が進み，手に触れると緑錆が付着するが，２枚の銅板からなり，間に帯を挟んでいたと推定される。外面になる板は長さ27.8mm，幅23.1mm，厚さ2.4mmで21.0mm×6.0mmの透かし穴がある。表面は，台形断面に，４辺とも面取りされている。また，裏面の四隅には鋲釘が付いている。内面になる板は外面の板とほぼ同じ大きさであるが，保存状態が悪く，欠損した部分も多い。外面の板の鋲に対応する位置に小さな



第 53 図　7 号墳石室出土金属器実測図（実大・1/2）

穴が開いている。透かし穴の位置から幅広の側には 2 孔一対，幅狭の側は 1 孔である。

鉄刀子(2)　玄室内の床面から出土した。刀子の茎部で木質が残っている。両側ともに欠損するが，狭くなった方の茎部側端部は僅かな欠損であろう。残存長5.8cmで，刃部側では幅1.0cm，厚さ0.4cmで，茎部端は幅0.4cm，厚さ0.2cm弱である。

これらの遺物のうち，土器は 8 世紀第 1 四半期前後の年代が与えられる。　（小池）

8．8 号墳

墳　丘（図版39－1，第54図）

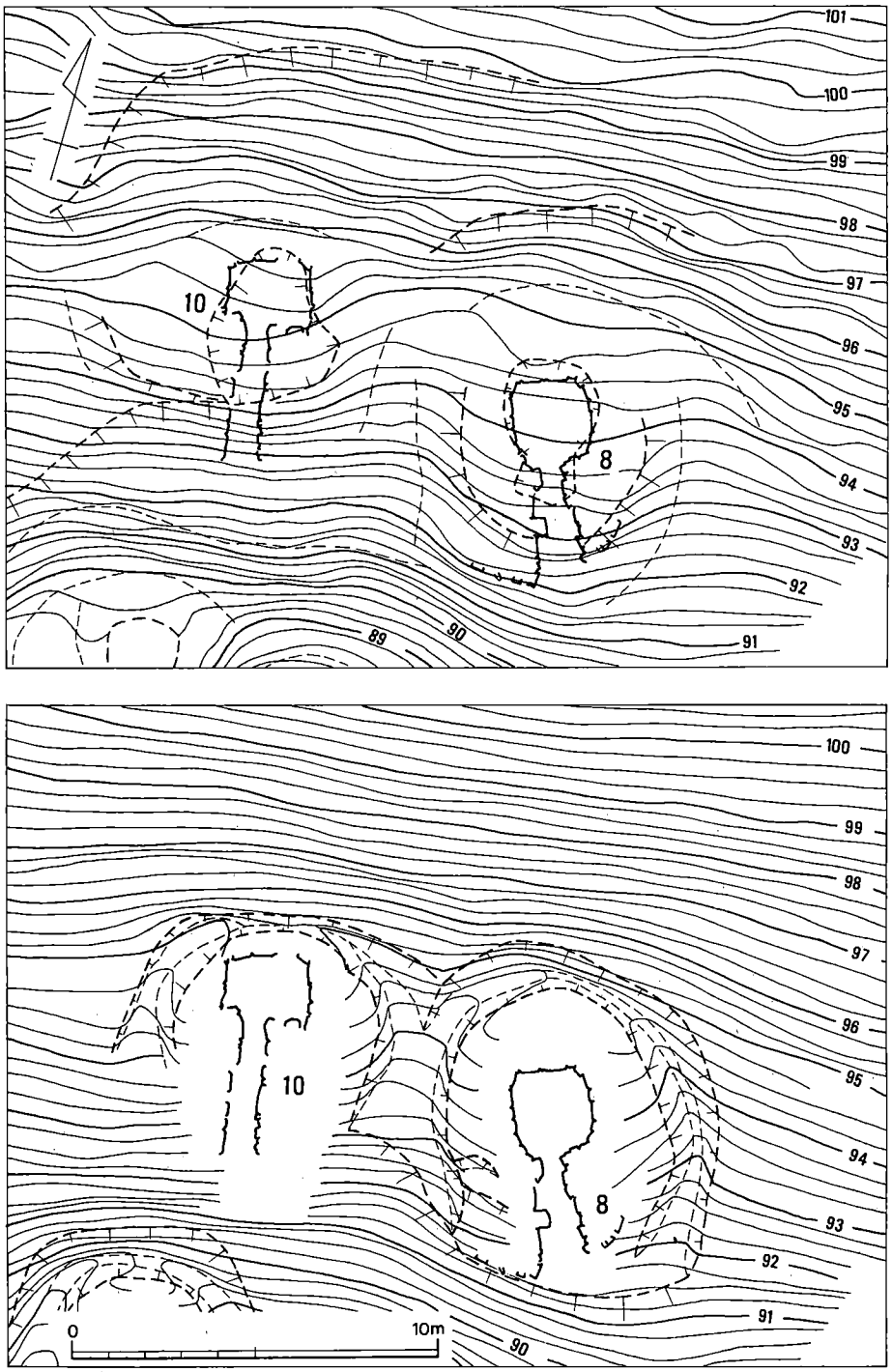
8 号墳は，D地区斜面中段の標高92～97mの間に築かれたもので，地表面からの観察では僅かな高まりと周溝が認められた。また，墳頂部には盗掘による陥没坑がみられた。なお，8 号墳の西脇には10号墳が近接して造られている。

発掘により確認された周溝は，墳丘を全周せず墓道側は切れている。また，左側壁側では10号墳の周溝と一部共有している。周溝は，内径で南北約 7 m，東西約 6 mの平面楕円形を呈し，石室主軸方向に長い。これは，西隣りに10号墳が築かれているため，その影響によるものであろう。周溝の上面最大幅は1.5m，最大深は奥壁背面側にあり0.6mを測る。墓道側には周溝は廻らず，墓道前面には一段の幅狭平坦面がつくが，その下は急斜面の崖となる。

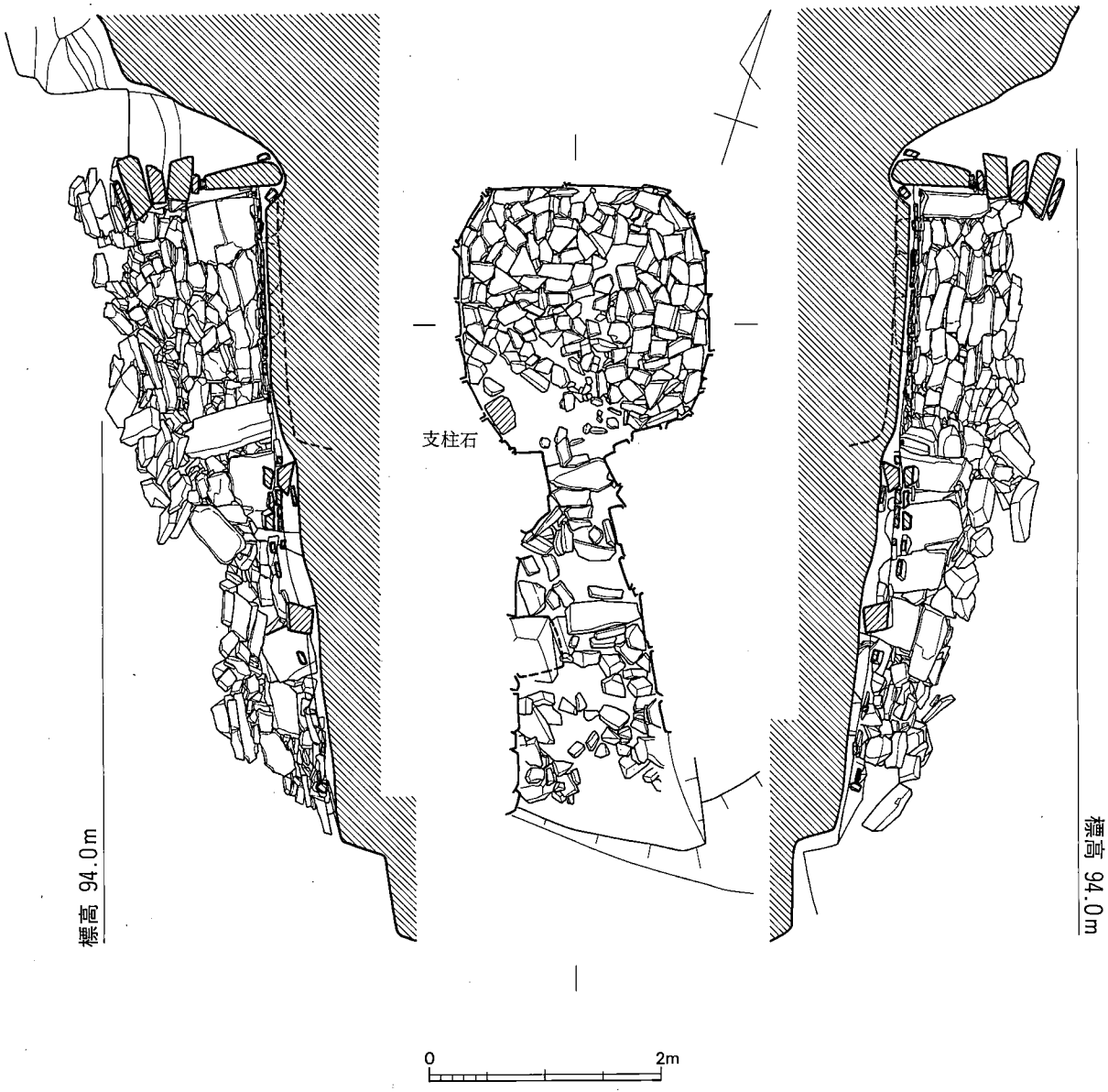
上記の所見により，8 号墳は径 6 ～ 7 m程度の楕円形をした円墳が考えられる。

主体部（図版39－2・40～42，第55・56図）

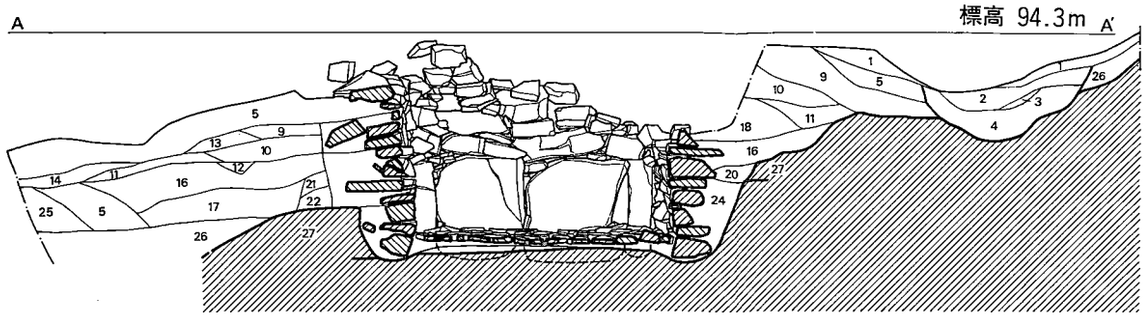
8 号墳の主体部は，主軸方位をN17°21′Wにとり，南南東に開口する複室の横穴式石室である。主体部の掘り方は，玄室奥壁寄りでは直径3.8m程の半円形であるが，羨道部側へと次第に狭くなっている。掘り方の基底面までの深さは，奥壁側で約 1 mあり，周壁の基底部付近ではさ



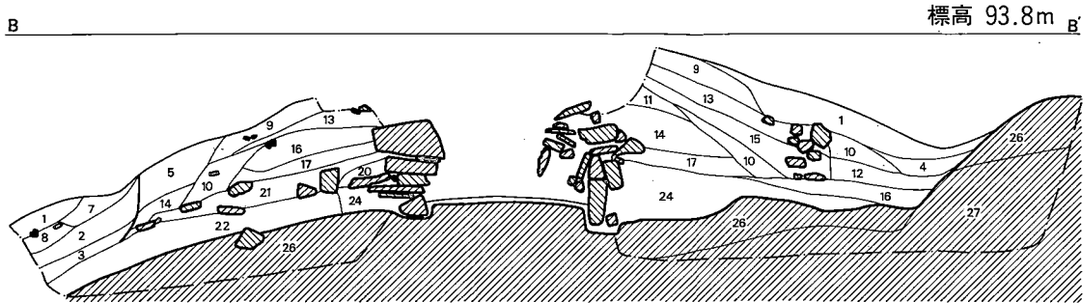
第 54 図　8・10号墳墳丘・地山整形面測量図（1/200）

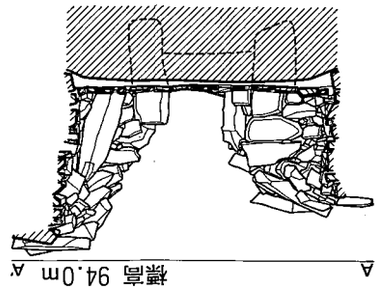


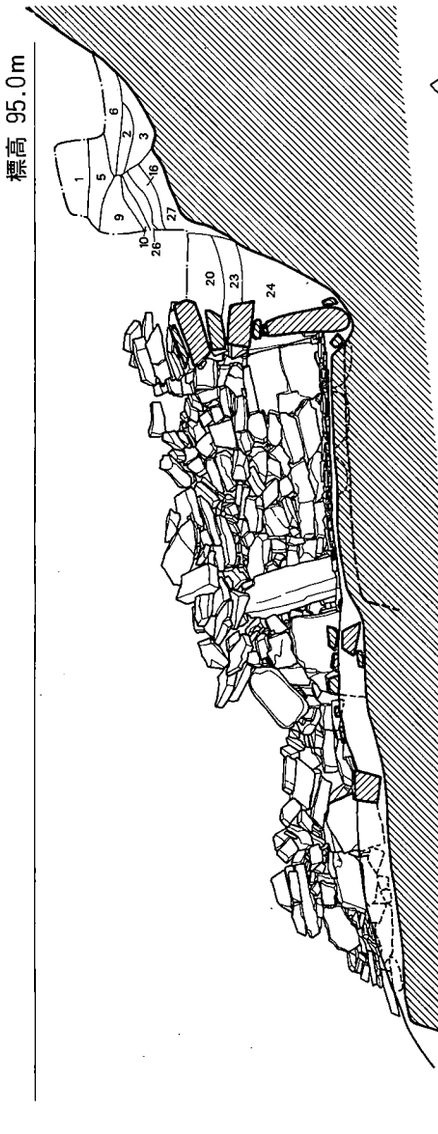
第 55 図　柿原D地区 8 号墳石室実測図 1 （1/60）

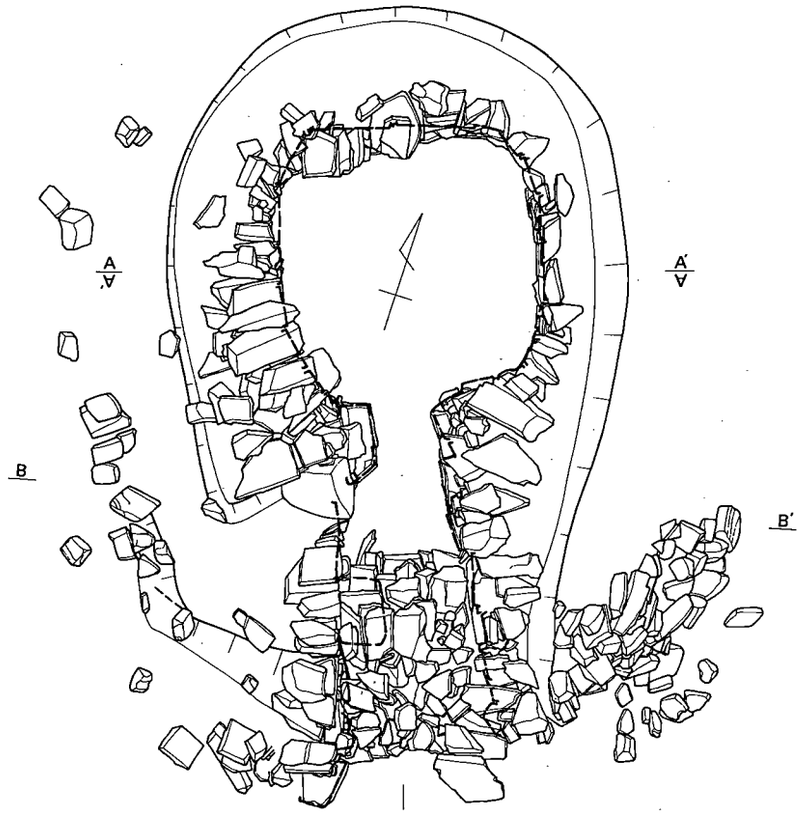


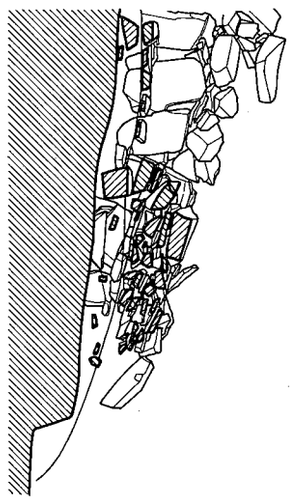
1 灰味黄色土
2 赤味暗灰色土（やや粘質）
3 灰味褐色土（やや粘質）
4 暗赤褐色粘質土
5 黄褐色土
6 暗黄褐色粘質土
7 にごった褐色土（小礫混り）
8 暗黄褐色土（小礫混り）
9 褐色土（小礫混り）
10 暗黄褐色土（やや粘質）
11 褐色土（やや粘質）
12 赤褐色粘質土
13 暗黄褐色土
14 暗黄褐色粘質土
15 ⑩+⑬
16 にごった褐色土（やや粘質）
17 黄褐色粘質土
18 ⑩+⑪
19 ⑤+⑦
20 にごった赤褐色土
21 赤味を帯びた黄褐色粘質土
22 赤褐色粘質土
23 赤褐色土
24 赤褐色土（砂・礫が多い）
25 暗黄灰色粘質土
26 暗黄色粘質土
27 赤褐色粘土

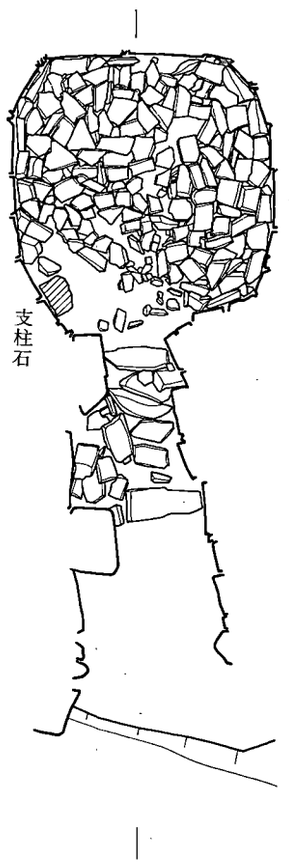


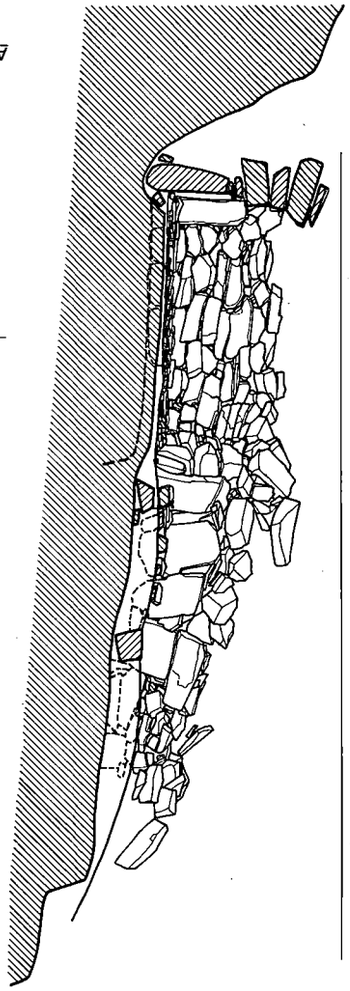


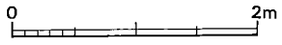












第 56 図　柿原D地区 8 号墳石室実測図 2 （1/60）

らに一段深く掘り込まれ，岩盤層にまで達している。

石室は，全長5.5mを測るが，右側壁部はやや短く作られている。玄室は，主軸長2.3m，最大幅は玄室中央にあり2.15mを測る。平面プランは，奥壁側は直であるが両側壁側は弧状に作られ，胴張り状といえる。奥壁基部は二枚の鏡石で構成され，上部は扁平割石の平積みで羨道部側へ持ち送っている。背面には裏込め等の手法はみられない。現存高1.5mを測る。玄室の右側壁は現存高１mで，基底部から扁平石が平積みされているが，最も奥壁寄りの壁にはやや大き目の石材を縦位に据えて基底部としている。左側壁も右側壁の構築とほぼ同様で，現存高1.4mを測る。この左側壁の玄門寄りの箇所では，側壁構築中に上部崩壊の恐れがあったのか，内部から崩壊部を補強するため，長さ90cm程の角柱を立てかけ，支柱石としている。

玄門は両袖で，右袖石は60cm程の一枚石の立石であるが，左袖石は適当な石材がなかったためか二段積みである。また，右袖石の基底部には根固めが施れているが，左袖石部ではみられない。玄門幅は0.55mで，幅ぎりぎりに仕切石が据えられている。玄室床面の敷石は，扁平割石を敷き詰めている。主として石室主軸にたいして縦位に配しているが，規則性はない。

前室は，明瞭に部屋をつくらないもので，羨道部と一体となった構造のものである。ただ，入口寄りの左側壁部分には，袖石に擬したと思われる片袖状の立石が据えられ，立石と右側壁との間の床面には仕切石が敷かれており，明らかに前室を意識したつくりといえる。玄門仕切石と前室仕切石の長さは約１mで，奥壁側は0.7m，羨道側は１mの幅となる。前室の右側壁基部は板石三枚の縦位に据えられているが，入口側の一枚は左側壁がわの袖石に対応するものであろう。その上部には塊石の平積みである。左側壁の基底部は，板石を横位に据え，上部は板石の平積みである。

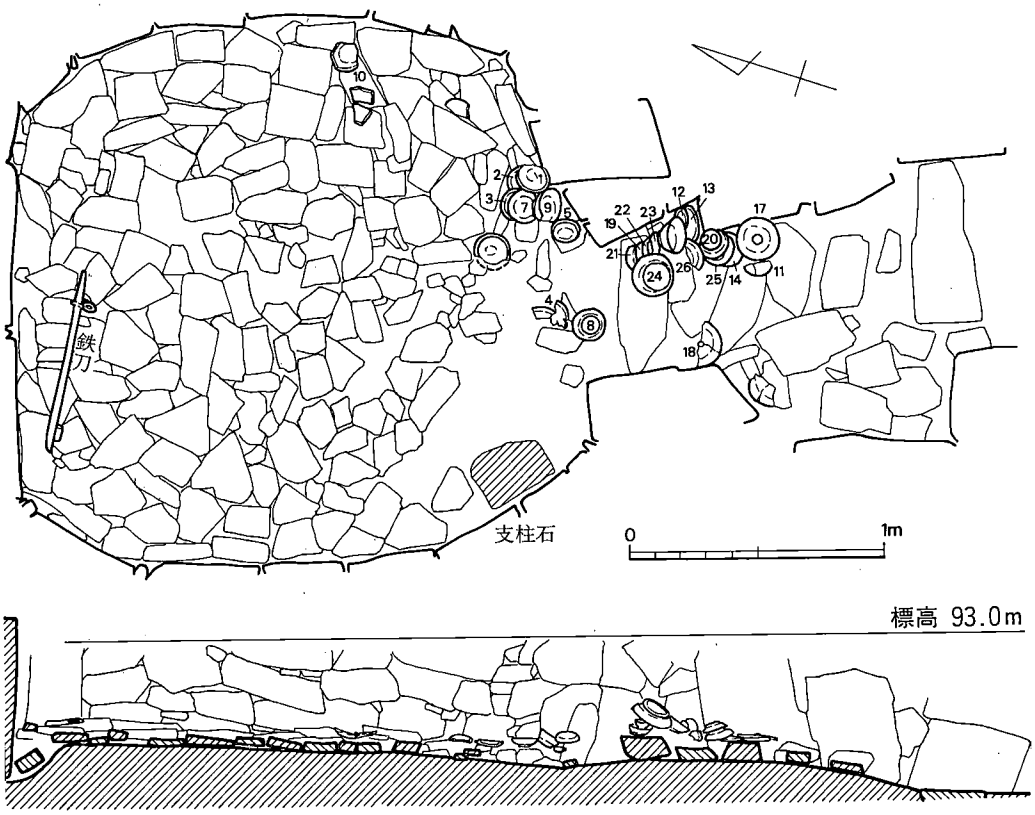
この前室から羨道部にかけては，上下二面にわたる敷石がみられた。前室の状況では，上面の敷石は玄門仕切石の上にまでなされている。下面の敷石は大き目の割石を使っている。

羨道の長さは約1.4mで，右側壁基底部は角礫の平積みであるが上部は小礫が積まれている。左側壁は小礫と角礫が交互に積まれている。この羨道部の仕切石から入口側にかけての部分に閉塞が行われている。閉塞の奥行は1.6m，幅1.1m，現存高0.5mで，奥壁側は板石が，入口側は小礫が積まれている。なお，この閉塞石基底部の下10cmの所にて，一次床面の敷石が検出された。

この８号墳に使用された石材は，ほとんどが緑泥片岩である。

遺物出土状況（図版43，第57図）

８号墳の遺物は，玄室と前室などの石室内からのものと，周溝内からのものがあるが，周溝内からの出土は僅かである。玄室出土遺物は，奥壁前面にて直刀が１本出土し，他に右側壁から玄門袖石付近にかけて，須恵器が重ね置かれた状態で出土している。また，玄門から前室に



第 57 図　8号墳石室内遺物出土状況実測図（1/30）

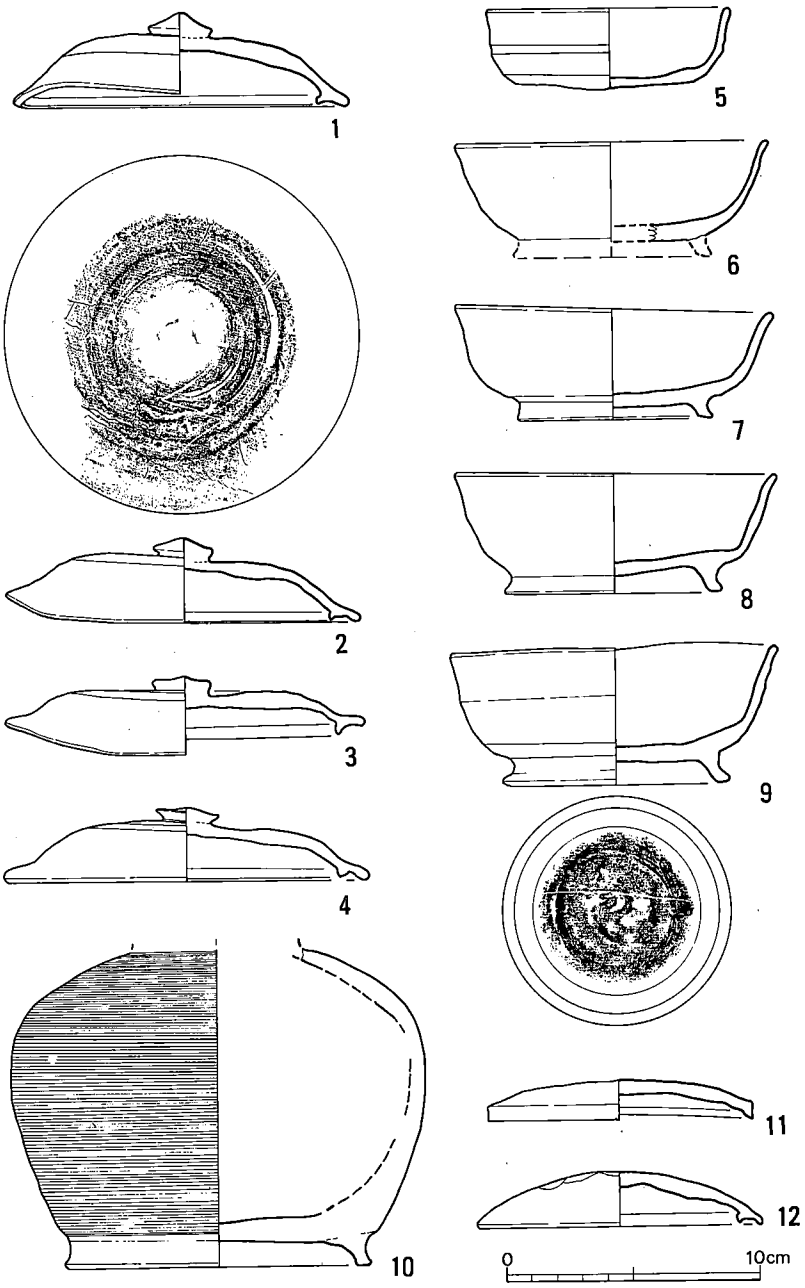
かけての右側壁側にても須恵器が重ね置かれた状態で出土している。これら須恵器のうち，最も奥壁に近い玄室内出土の高台付壺１個を除いた他は全て杯の蓋と身である。　　（新原）

出土遺物（図版44・45，第58～62図）

玄室内出土土器（第58図１～10）

玄室内からは須恵器杯蓋５点，杯身５点，壺体部１点が出土した。このうち杯蓋１点は極めて脆弱で，復原および実測が不可能であるので図示していない。

須恵器杯蓋（１～４）　図示していない１点をふくめて５点ともに天井部外面に扁平な宝珠形つまみをもち，身受けのかえりを有する杯蓋である。歪みのあるものが多い。身受けのかえりの端部は口縁端部とほぼ同じ高さである。天井部外面には回転ヘラケズリの部分があり，２の天井部外面には逆N字形のヘラ記号が付されている。１は口径12.9cm，器高3.8cmの大きさで，黄茶褐色に焼成されている。２は口径13.8cm，器高3.4cm，３は口径14.0cm，器高3.1cm，４は



第 58 図　8 号墳石室出土土器実測図 1 (1/3)

口径14.1cm，器高2.9cmの大きさで，3点とも堅緻に焼成されて，暗灰色ないし黒灰色を呈している。

須恵器杯身（5～9） 5は口径9.5cm，器高3.3cmの大きさの杯身で，平底で口縁部は直立気味に立ち上がり，体部の中ほどに1条の沈線が巡る。良好な焼成で灰色を呈している。6～9は高台を有す杯身で，6・7は丸味をもった体部から口縁部が外反し，ややあまい焼成で赤灰色・灰白色を呈している。8・9はやや直線的に立ち上がり，堅緻に焼成されている。9は外底面に単直線のヘラ記号が付されている。6は復原口径12.2cmの大きさ。7は口径12.6cm，器高4.4cm，高台径7.7cm，8は口径12.8cm，器高4.7cm，高台径8.5cm，9は口径12.9cm，器高5.5cm，高台径9.0cmの大きさである。

須恵器長頸壺(10) 口頸部を欠き体部のみが残るが，残存高12.6cm，胴最大径16.4cm，高台径12.1cmの大きさで，肩部から胴部にかけては丸味をもつ。外面はカキ目調整されている。比較的良好な胎土で，暗青灰色に焼成されている。

墓道出土土器（第58図11・12，第59図）

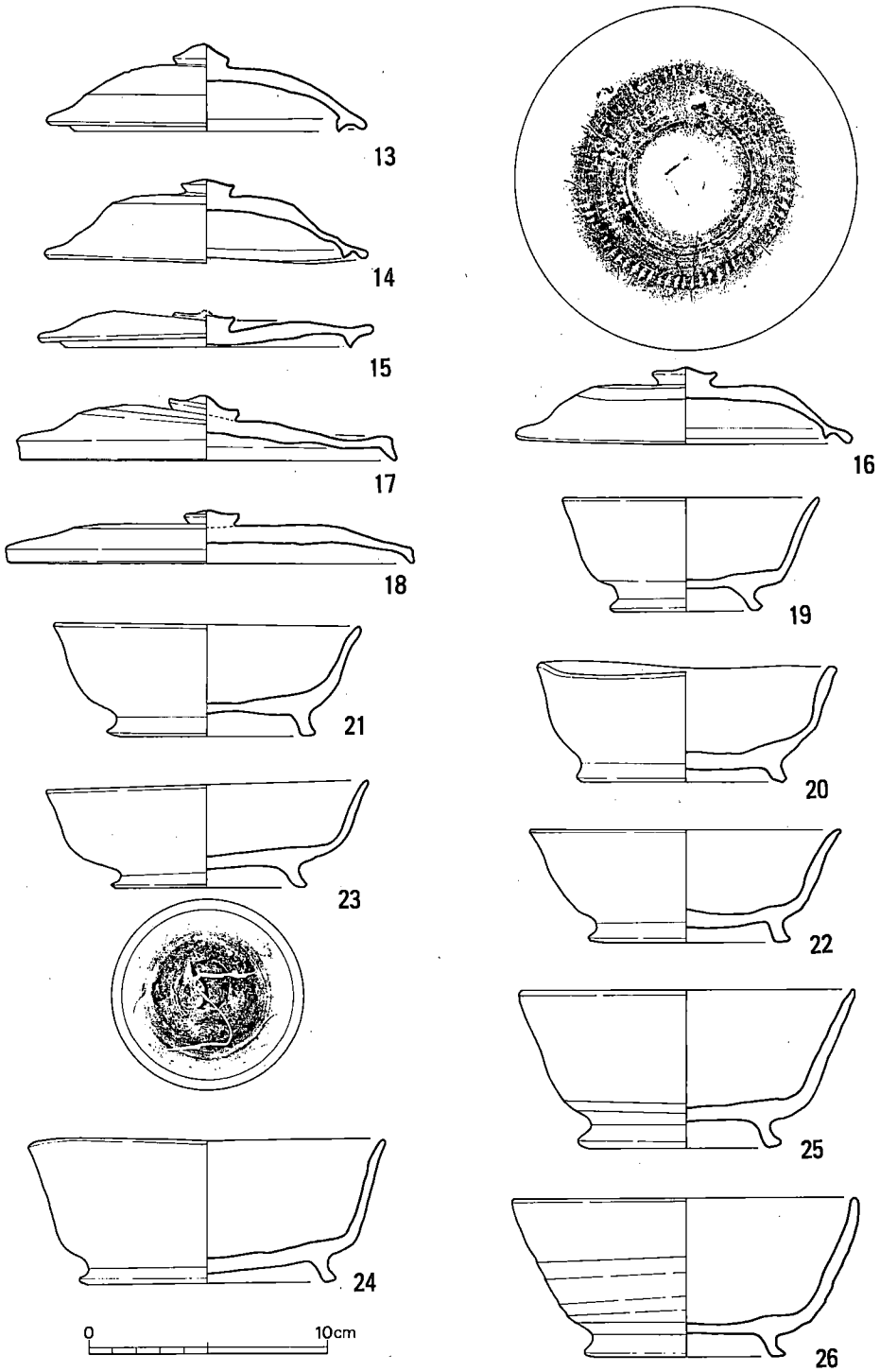
須恵器杯蓋(11～18) 11は天井部につまみの付かない小型の杯蓋で，鳥嘴状の口縁端部をもつ。口径10.5cm，器高1.5cmの大きさ。天井部外面は回転ヘラケズリされている。12も天井部につまみの付かない小型の杯蓋で，口縁部に身受けのかえりをもつ。天井部外面は静止ヘラケズリされている。口径は11.3cm，器高2.2cmの大きさで，黄灰色に焼成されている。

13～16は，天井部外面に扁平な宝珠形つまみをもち，口縁部にかえりをもつもの。かえり端は口縁部とほぼ同じ高さだが，13・15はかえり部端が口縁部下端より少し出る。14は天井部外面が平らで口縁部は外反する。13は口径13.4cm，器高3.6cm，かえり径11.1cm，14は口径13.6cm，器高3.5cm，かえり径11.5cm，15は口径14.1cm，器高1.5cm，かえり径12.1cm，16は口径14.0cm，器高3.4cm，かえり径11.8cmを測る。いずれも天井部外面は回転ヘラケズリされており，天井部外面は回転ヘラケズリのあとヘラ先を連続押圧した文様が付されている。13は軟らかめの焼成だが14～16は堅緻に焼成されている。

17・18は，天井部外面に扁平な宝珠形つまみをもち，鳥嘴状の口縁部をもつ。天井部外面は回転ヘラケズリされ，堅緻に焼成されている。17は歪みを生じているが，口径15.7cm，器高2.7cmの大きさで，18は口径16.8cm，器高2.2cmの大きさである。

須恵器杯身(19～26) 19は小型の杯身で高めの高台が付く，平底から直線的に口縁部が立ち上がる。口径10.7cm，器高4.7cm，高台径6.3cmの大きさで，堅緻に焼成されて黒灰色を呈している。

20～23は口径12～13.5cm，器高4.4～5.0cmと中くらいの大きさの高台付杯身である。口縁部はわずかに外反気味に立ち上がっている。23は口径13.5cm，器高4.4cm，高台径8.2cmの大きさで，体部はやや扁平である。また，外底面には逆N字形のヘラ記号が付されている。このヘラ記



第 59 図　8 号墳石室出土土器実測図 2 (1/3)

号は前述した杯蓋(2)の天井部外面の逆L字形に比して丸味をもって描かれている。20は口径12.5cm，器高5.0cm，高台径8.7cm，21は口径12.9cm，器高4.7cm，高台径8.7cm，22は口径13.0cm，器高4.7cm，高台径8.4cmの大きさで，堅緻に焼成されている。

24～26は，口径14.0cm～15.0cm，器高6.0cm～6.7cmのやや大型の有高台の杯身。24・25の口縁部は底面から直線的に立ち上がるが，26はやや内弯気味に立ち上がっている。25・26の胴下半外面には回転ヘラケズリ痕がみられる。24は口径14.8cm，器高6.7cm，高台径8.5cm，25は口径14.1cm，器高6.7cm，高台径8.5cm，26は口径14.5cm，器高6.6cm，高台径8.4cmの大きさ。いずれも堅緻に焼成されて，暗青灰色ないし黒灰色を呈している。

前面出土土器（第61図）

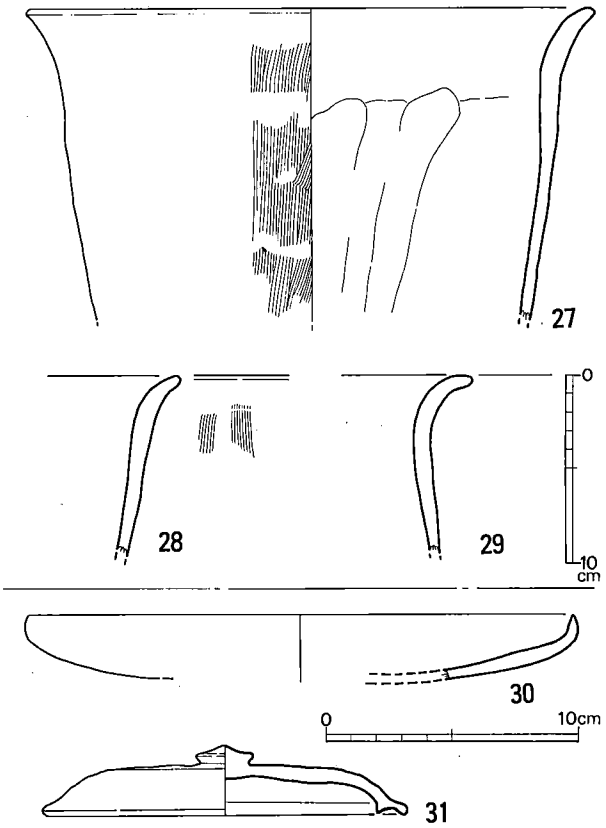
土師器甑(27・28)　口縁部のみの破片のため，甑と断定はしがたく，復原口径は不確実である。27は30cm前後の口径であろう。口縁部は緩やかに外反する。頸部以下の外面は縦方向のハケ目調整，内面は縦方向にヘラケズリされている。胎土に砂礫・褐色粒を含み，淡明褐色に焼成されている。

土師器甕(29)　これも口縁部の小破片のため全体の形は不明だが，口縁部は強めに外反する。胎土に砂礫・褐色粒・金雲母などを含み，淡明褐色に焼成されている。

周溝Ⅳ区出土土器（第61図）

土師器皿(30)　復原口径22.0cm，器高2.8cmの大きさで，口縁部は内弯して立ち上がる。器面風化のため明瞭ではないが，ナデないしミガキ調整であろう。

須恵器杯蓋(31)　天井部外面に宝珠形つまみ，口縁部に身受けのかえりをもつもので，平らな天井部から口縁部が外反気味にのびる。かえり部端は口縁端部とほぼ同じ高さである。口径14.5cm，器高2.7cmを測る。



第 60 図　8号墳前面等出土土器実測図（1/3・1/4）

石室出土鉄製品（第62・63図）

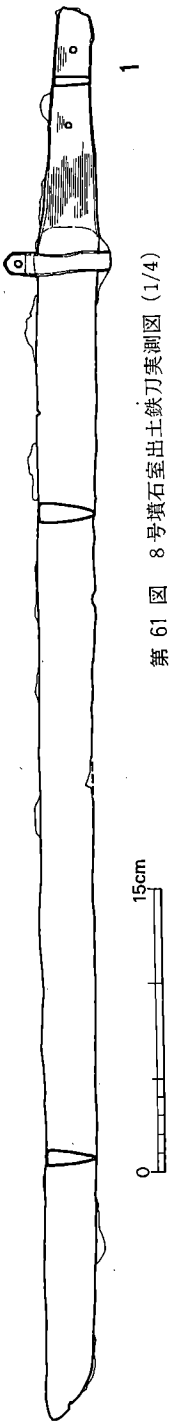
鉄　刀(1)　全長74.5cmで，このうち12cmを茎部が占める。刀身は最大幅3.2cmで，先端から2.5cm程の部分での幅は2.4cmであり，ここから先端部は急に尖る。背はほぼ真直ぐで反らない。厚みは関部付近では1.3cm程を有するが，刀身部では1.0cm内外である。また，茎部は端で幅約2.0cm，厚み0.5cmとやや薄くなっている。なお，茎部には，木質が残り，目釘穴が２ケ所に確認できる。

鍔(2)　一部を欠くが，長さ6.0cm，厚さ0.55cm，最大幅4.5cmの大きさで，倒卵形を呈する。刀身を通す穴は長径2.7cm，短径1.55cmを測る。７ケ所に円形の透かし孔が確認できるが，孔の位置からみて，背・刃側に各１孔と左右に３孔ずつの計８孔が有ったものと推定される。

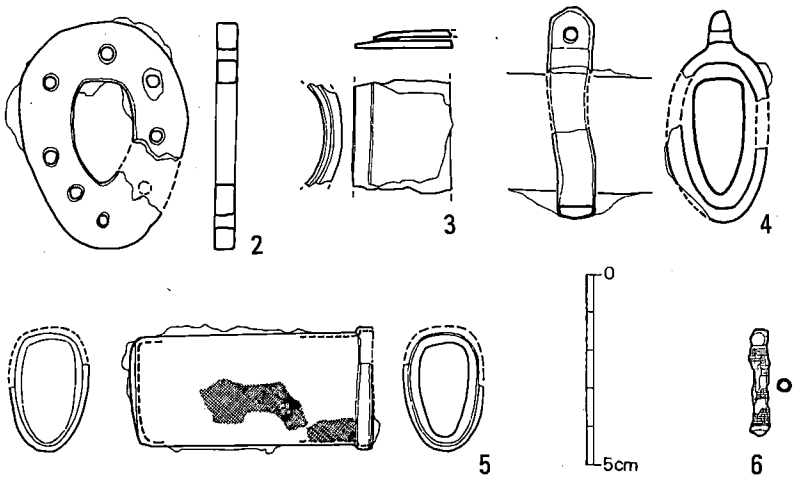
縁金具(3)　部分的にしか残らないが，２枚の板状環からなる。内側の１枚は幅2.5～2.55cmで，0.2cm弱の厚みをもつが一方はわずかに薄くなっている。外側の１枚は，内側のものよりやや薄めであるが同様の形状で幅2.1cm分が残っている。鞘口金具であろう。

足金具(4)　幅1.0～1.1cm，厚さ0.25～0.3cmの扁平な蒲鉾状断面を呈する棒状材を用いて長径4.6cm，短径2.7の長楕円形の環をつくり，上部に高さ1.0cmの釣手をつけている。釣手には円孔が１つ穿たれている。

鞘尻金具(5)　断面倒卵形の筒状を呈し，尻は塞がり，縁は少し広い。尻端



第 61 図　８号墳石室出土鉄刀実測図（1/4）



第 62 図　８号墳石室出土鉄器類実測図（1／2）

での長径は2.8cm，短径1.5cmで縁側に向かって極わずかに広がり長径3.0cm，短径1.8cm，幅3～4㎜の環が付いた縁は復原長径3.25cm，短径2.1cmを測る。内面には木質が2～3㎜厚さに残っている。また，外面には布が一部錆着している。

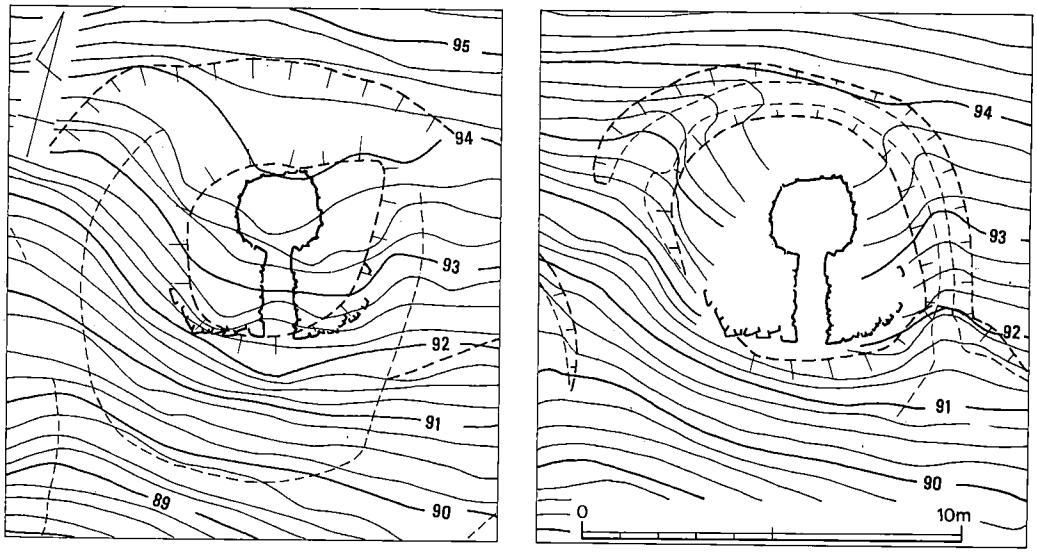
両頭金具(6)　長さ2.8cmで，このうち2.1cm分に木質が錆着している。両端は膨らみ，外径0.4～0.5cmだが，木質の付着した部分は径0.3cm程度であろう。

これらの遺物のうち，土器類では須恵器杯蓋・杯身の特徴からして，7世紀後半～8世紀初頭までの年代が考えられる。玄室内出土土器と，羨道部出土土器は同時期の所産と思えるものがはいっているので，この古墳は7世紀後半以前に築造されて，8世紀初頭頃までの追葬があったと考えておきたい。　　(小池)

9．9号墳

墳　丘（図版46－1，第63図）

8号墳の約20m東方にあたる，標高90～94mの所に位置する。調査前の観察では，直径9m程度，高低差4m程の円墳であろうと推測された。表土を剝ぐと馬蹄形周溝があり，この内側の東側寄りに主体部が構築されている。主体部の前面には列石がみられ，東側に6m程続き，西側に



第 63 図　9号墳墳丘・地山整形面測量図（1/200）

2m程続いているが，その先は崩壊している。

周溝は，一部岩盤を削って掘り込まれ，外径で11.0m，内径で8.0m前後の弧で，幅1.2～1.9m，深さ0.3～0.5mの規模で残っている。周溝底の最高所は標高93.8mを測る。

列石は，前面では基底部から板石を平積みしているが，5・6段が残っている。土圧のために左側では前方にせり出しており，右側では転落しかかっている。

主体部（図版46－2・47，第64図）

この古墳の主体部は，主軸方位をN14°50′Wにとり，南南東に向かって開口する単室両袖の横穴式石室である。主体部の掘り方は，急斜面に構築しているために，奥側では岩盤まで掘り込んでおり，斜面の低い前面側では旧地表に近い暗黄褐色・暗赤褐色土の上に盛土して，平坦面をつくっているが，長径3.5m，短径3.0m弱の楕円形プランを呈する。

石室は，緑泥片岩の石材で構築され，全長4.25mである。

玄室は，長さ1.85m，最大幅2.20mの不整円形プランを呈し，玄門部の幅は0.70mを測る。奥壁は高さ80cm（石材の高さ100cm），幅70cm，厚さ30cmの大振りの石を据えて鏡石とし，その両脇は扁平石を主にして基底部から小口積みして，持ち送りの壁体を構成している。小口積みは13～14段残るが，鏡石の上2段は広めの板石が架けられている。両側壁ともに基底部から小口積みで，持ち送りに壁体が構築されているが，右側壁は残りが悪い。奥壁から左側壁にかけては1.5m程の高さが残っている。

玄門の袖石は，左袖石で高さ50cm（石材の高さ80m），幅50cm，厚さ35cmの大きな石材が据えられている。右袖石もほぼ同じ大きさの石が用いられている。左右袖石の間には，長さ70cm，幅16cm，高さ20cm余りの石を据えて框石としている。

羨道部は，左右壁ともに前面側に少し倒れている。左側壁では羨門の石が約20°倒れているが，高さ80cm（石材の高さ97cm），幅35cm，厚さ50cm程の柱状の石が据えられていて，さらに玄門の袖石との中間に高さ50～55cm（石材の高さ70cm），幅40cm，厚さ25cmの石が立てて据えられている。この中間の石も30°程傾いている。この3つの石の間では，奥側が扁平石の小口積み，前面側が乱雑な充填で積まれている。右側壁でもほぼ同様の積み方で構築されていて，やはり前面側にすこし傾いている。この倒れは盛土の上に構築されたために地盤が軟弱なのか，地滑り的な現象を生じたのであろう。なお，両壁にみられる大振りな石の間には仕切石はみとめられない。ただ羨門部で二次的な（追葬時であろう）床面に小振りの石が少しみられたが，閉塞石の名残であろうか。

敷石は，玄室床面にはみられるが，羨道部にはみられない。玄室では，岩盤の破片と赤褐色粘土の混じる土をつき固めて高さを合わせて，小振りの扁平石を敷き詰めているが，玄門付近では敷石の抜ける部分がある。

遺物出土状況（図版48・49，第64図）

玄室内では，左袖石の内側に須恵器杯蓋が８点，杯身が４点，高杯が２点と杯蓋片が若干出土した。高杯２点は袖石奥の壁に接して有り，この近くに杯蓋が５点と杯身が１点まとまり，これらより少し奥に杯蓋・杯身各３点がまとまって出土した。なおこのうち杯蓋・杯身各１点は焼成が悪く，脆弱で復原・実測が不可能なので図示しえない。また，右側袖石付近では杯蓋が２点，杯身が３点分がまとまって出土したが，杯身１点分の破片は紛失し現存しない。埋土中からは杯蓋片１点が出土し，玄室内の敷石床面あるいは敷石の間から，中央部では銅環・耳環が，奥壁付近からガラス玉類が出土した。石室外では，前面斜面から須恵器杯蓋２点，杯身３点，土師器片などが出土している。なお，図版49－３の杯は調査中に盗難に遭い現存しない。また前面下に相当する15号墳周溝中に，転落したと思われる須恵器長頸壺などがある。

出土遺物（図版50・51，第65～68図）

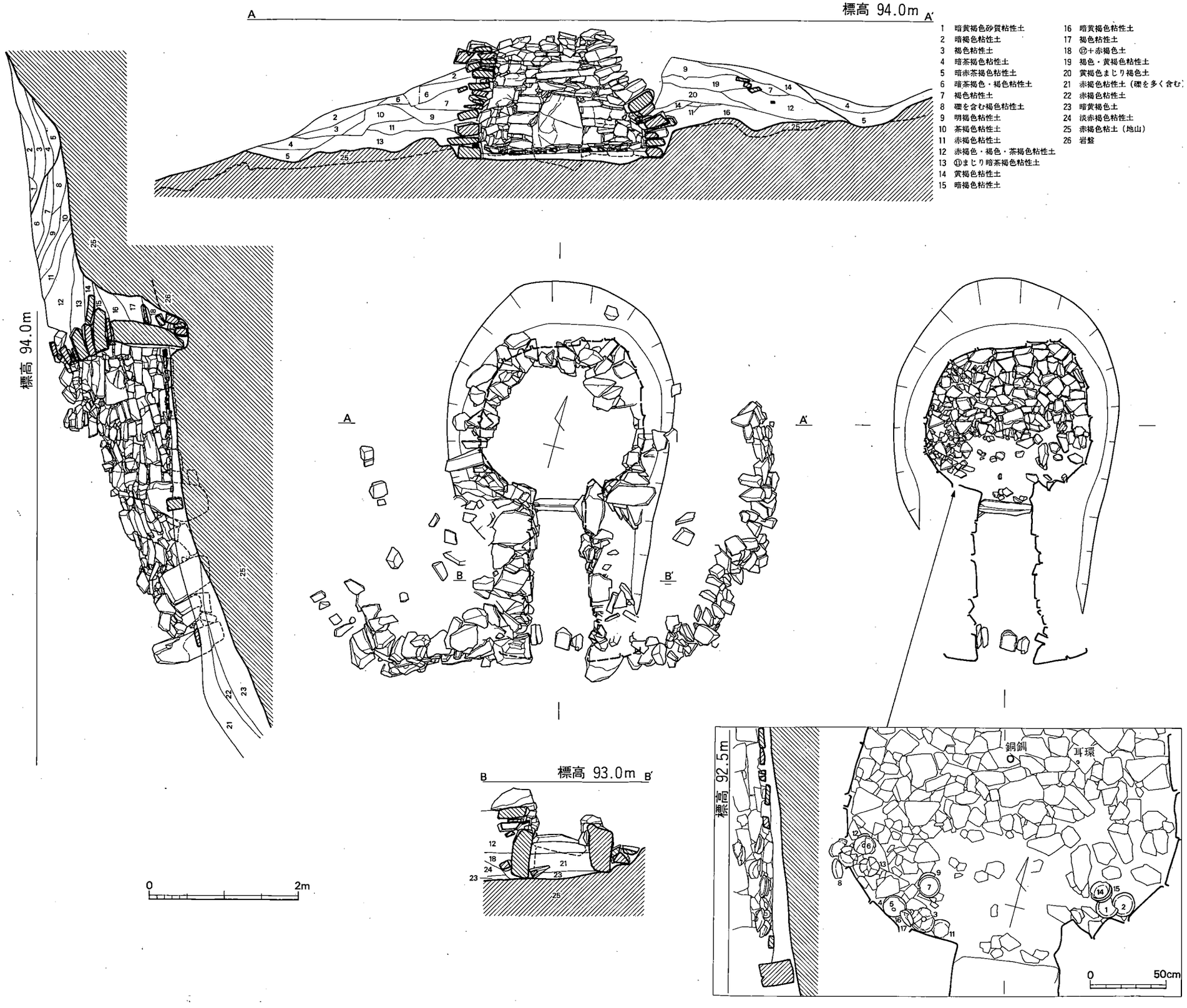
石室内出土土器（第65図）

須恵器杯蓋（１～10）　１～３は，口径15.4～16.4cm，器高3.2～3.6cmの大きさで，扁平な擬宝珠形つまみがつくもの。３は磨滅のため調整手法は不明だが，１・２の天井部外面は右回りの回転ヘラケズリされている。口縁部は外方へ広がり，身受けのかえりは口縁部下端とほぼ同じ高さに伸びる。１・３は軟質の焼成で，黄灰色ないし茶褐色を呈しているが，２は良好な焼成で，暗茶褐色を呈している。

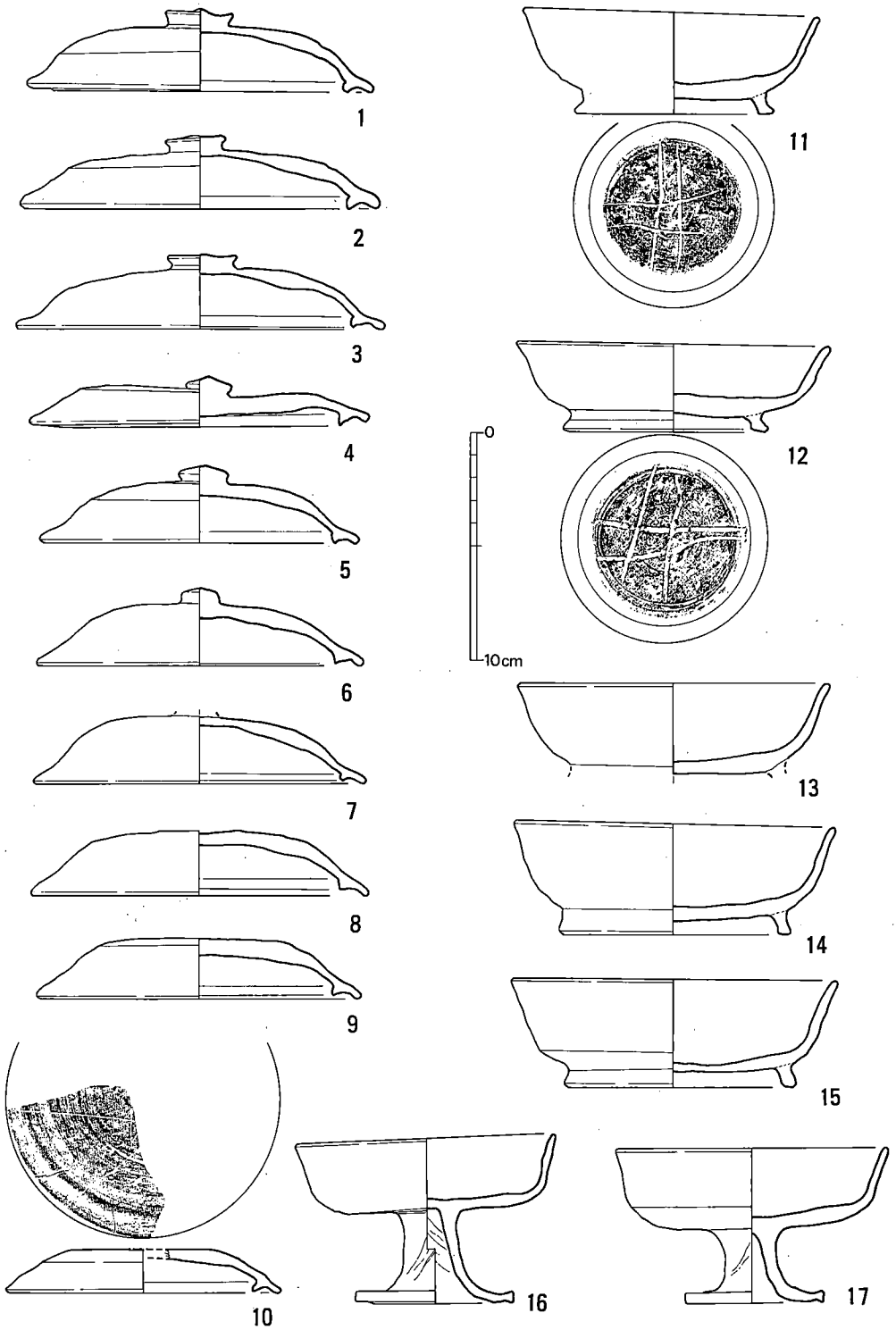
４は，口径15.1cmで，陥没した天井部に小さめの擬宝珠形つまみがつく。天井部外面は右回りの回転ヘラケズリされており，外方に広がる口縁部と身受けのかえり端がほぼ同じ高さである。細砂粒を多く胎土に含み，軟質の焼成で，内面は暗青灰色を呈するが，外面は黄茶灰色を呈している。

５～７は，口径14.2～14.8cm，器高3.4cm前後の大きさで，７ではつまみが剝げ落ちているが，小さな擬宝珠形つまみがつく。身受けのかえりは口縁部の内側に隠れる。５は天井部外面は右回りの回転ヘラケズリされ，砂粒を含む胎土で，良好な焼成。内面は青灰色，外面は茶褐色を呈している。６・７は軟質の焼成で，調整手法が不明である。６は内面黄灰色，外面淡褐色を呈し，７は淡灰色を呈している。６は土師器としたほうが妥当かもしれない。

８～10は，身受けのかえりをもつが，天井部につまみをもたない。身受けのかえりは口縁部の内側に隠れる。８は復原口径15.0cm，器高2.7cm，軟質の焼成で調整手法は不明。内面は淡灰色，外面は褐色を呈している。９は天井部外面にヘラ切り離し後のナデ調整がみられる。口径14.4cm，器高2.8cm，焼成は良好で，暗茶褐色を呈している。10は埋土から出土したもので，復原口径12.2cm，器高1.9cmの大きさ。天井部外面に回転ヘラケズリ痕がみられ，直線の交差する



第 64 図　柿原D地区 9 号墳石室実測図（1/60）



第 65 図　9 号墳石室出土土器実測図（1/3）

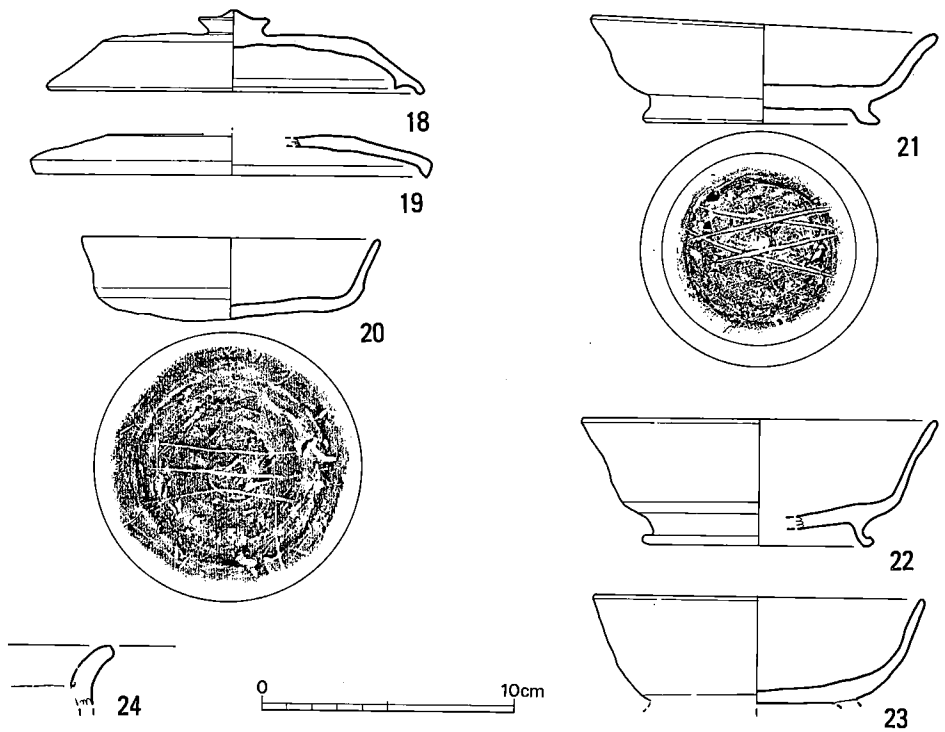
ヘラ記号が付されている。若干砂粒を含む胎土で，紫褐色を呈する良好な焼成である。

須恵器杯身(11～15)　11・12は浅めの体部をもつ有高台の杯身である。11は復原口径13.1cm，器高4.5cm，高台径8.7cmの大きさ。高台は踏張るような形で底面が外方に伸びる。外底面に井字形のヘラ記号が描かれている。12は口径13.9cm，器高4.0cm，高台径9.1cmの大きさ。外底面に井字形のヘラ記号が描かれている。11・12とも，胎土に砂粒を多く含み，堅緻な焼成で，黒灰色を呈している。

13～15はやや深めで大振りの体部をもつ有高台の杯身である。13は復原口径13.8cm，残存器高4.0cm。14は口径14.2cm，器高4.9cm，高台径9.9cm。15は口径14.5cm，器高4.9cm，高台径10.2cmの大きさ。3点とも，やや軟質な焼成で，茶灰色ないし赤茶色を呈している。

須恵器高杯(16・17)　杯部は平坦な杯底部から直線的に口縁部が立ち上がる。杯部に比して脚部の径が小さく，低めの柱状部から踏張るようにして脚裾部が広がり，端部は下方へ尖り気味である。16は口径11.6cm，器高7.3cmで，杯部高3.2cm，裾部径7.0cm。砂粒を胎土に多く含み，灰色を呈する良好な焼成である。17は口径12.0cm，器高6.9cm，杯部高3.6cm，裾部径6.2cm。細砂粒を多く含む胎土で，茶褐色を呈する良好な焼成である。

前面出土土器（第66図）



第 66 図　9号墳石室前面出土土器実測図（1/3）

須恵器杯蓋(18・19)　18は，扁平なつまみと，身受けのかえりをもつ。天井部は平坦で，回転ヘラケズリされている。かえりは口縁部下端よりも内に退化している。口径14.9cm，器高3.2cm。19は，鳥嘴状口縁部と，低平な天井部をもつがつまみは欠失する。18・19ともに，胎土に砂粒を含み，暗灰色に堅く焼成されている。

須恵器杯身(20～23)　20は無高台の杯身で，口径11.8cm，器高3.4cm。外底面はヘラ切り離しの後ナデられ，川字形のヘラ記号が付く。精良な胎土で青灰色に堅く焼成されている。

21～23は有高台の杯身である。21は口径13.7cm，器高4.1cm，高台径9.4cm。浅い体部で，口縁部は外反する。外底面には×字が2つ並ぶヘラ記号が付されている。高台は低く踏張る形である。砂粒を多く含む胎土で堅緻に焼成されている。22は復原口径14.1cm，器高5.0cmで，やや深めの体部をもち，口縁部は直線的に外方に立ち上がる。23は復原口径13.2cm，体部の高さ4.3cm。丸味をもって口縁部が立ち上がる。外底面はヘラ切り離しの後ナデられる。砂粒を多く含むが精良な胎土で，焼成は悪い。

玉　類（第67図，表3）

1～12は玄室右側奥の敷石面から出土した。13～28は敷石清掃時に出土，29～38は敷石面上の埋土中から出土したが，概ね玄室右側奥から出土した。

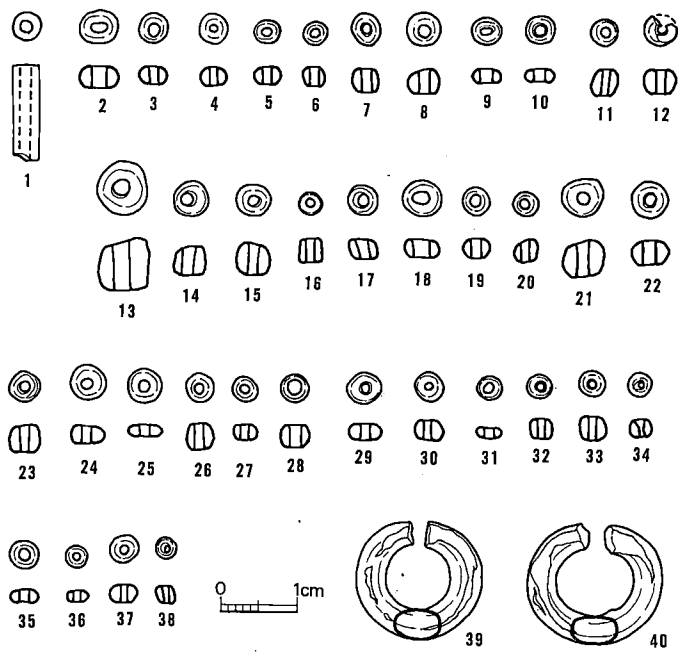
碧玉製管玉(1)　うすい灰緑色の色調を呈する。一部欠損があるものの，長さ12.6mm，外径3.7mm，孔径1.8mmで孔は一方から穿たれている。

ガラス玉(2～12，14～20，22～38)　スカイブルーとコバルトブルーの色調のものがあり，3：4の割合いでコバルトブルーが多めである。外径は2.7～4.8mm，厚さ1.4～4.3mmの大きさで大振りのものは丸玉と区別のしがたいものがある。

ガラス丸玉(13・21)　スカイブルー，コバルトブルーの色調を呈する。

銅製品（第67・68図）

耳　環　39は，敷石間の清掃中に出土したもので，出土



第 67 図　9号墳石室出土玉類・耳環実測図（実大）

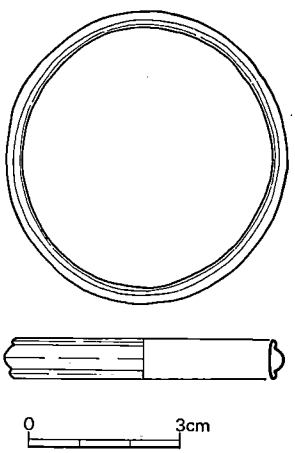
表3　9号墳出土玉類一覧表

（単位mm）

No.	種類	径	厚さ	孔径	質	色調	No.	種類	径	厚さ	孔径	質	色調
1	管玉	3.7	12.6	1.8	碧玉	うすい灰緑	20	〃	3.2	3.0	1.3	〃	〃
2	小玉	4.4~5.2	3.1	1.3~2.0	ガラス	スカイブルー	21	丸玉	5.3	4.8	1.5	〃	コバルトブルー
3	〃	3.8	2.3	1.8	〃	〃	22	小玉	4.8	3.2	1.4	〃	〃
4	〃	3.7	2.9	0.9	〃	〃	23	〃	4.1	3.9	1.2	〃	〃
5	〃	3.2~3.8	2.4	1.0~1.4	〃	〃	24	〃	4.8	2.5	0.9	〃	〃
6	〃	3.0	2.5	1.3	〃	〃	25	〃	4.5	1.6	1.3	〃	〃
7	〃	3.7~4.2	3.1	1.4	〃	コバルトブルー	26	〃	3.8	3.3	1.1	〃	〃
8	〃	4.2	3.4	1.3	〃	〃	27	〃	3.3	2.0	1.0	〃	〃
9	〃	3.9	1.8	1.0~1.9	〃	〃	28	〃	3.7	3.1	1.8	〃	スカイブルー
10	〃	4.0	1.9	1.7	〃	〃	29	〃	4.6	2.2	1.3	〃	コバルトブルー
11	〃	3.3	3.5	0.8	〃	〃	30	〃	3.7	2.9	1.1	〃	〃
12	〃	4.4	3.2	1.1	〃	〃	31	小玉	3.3	1.6	1.1~2.0	ガラス	コバルトブルー
13	丸玉	6.6	7.0	2.2	〃	スカイブルー	32	〃	3.1	2.8	0.9	〃	〃
14	小玉	4.6	4.0	1.8	〃	〃	33	〃	3.3	3.4	0.9	〃	〃
15	〃	3.9~4.6	4.3	1.2	〃	〃	34	〃	3.1	2.5	1.0	〃	〃
16	〃	3.2	3.1	1.2	〃	〃	35	〃	3.8	1.6	1.2	〃	〃
17	〃	4.0	2.9	1.5	〃	〃	36	〃	2.7	1.4	1.1	〃	〃
18	〃	4.7	2.4	1.5	〃	〃	37	〃	3.8	2.4	0.9	〃	スカイブルー
19	〃	3.8	2.2	1.4	〃	〃	38	〃	2.8	2.3	1.0	〃	〃

位置は明確ではない。外径は長径16.4mm，短径15.3mm，断面形は6.1×4.0mmの楕円形を呈する。銅地金銅張りで，剝落した部分もあるが，残された面は光沢がある。40は，玄室中央部の，銅釧の約50cm右壁寄りの敷石上から出土した。長径18.0mm，短径16.0mmで，断面形は6.1×3.8mmの楕円形を呈する。銅地金銅張りで，両面に剝落した部分があるものの，残された部分は光沢を保っている。

銅　釧（第68図）　玄室中央部から出土した。長径58.1mm，短径55.6mm，厚さ7.9mmの大きさで，2条の沈線を巡らせた蒲鉾形断面をもつ。風化して緑錆がかなり吹き出ている。



第 68 図　9号墳石室出土銅釧実測図（2/3）

石室内出土の須恵器類は，大宰府史跡SX2480出土土器に対比される（註5）もので，7世紀半～8世紀初頭頃の年代が考えら

れる。また前面出土の土器もこれと大差がないが，鳥嘴状口縁部の杯蓋１点は混入だろう。９号墳は７世紀後半頃から使用され，追葬は８世紀前半までには至らなかったと考えておきたい。

（小池）

10. 10号墳

墳　丘（図版52，第54図）

８号墳の西に隣接し，周溝Ⅳ区の一部を共有する。標高92.5～95.5mに占地し，下方の18号墳に向かって開口している。表土面で陥没穴が認められ，墳丘の残存状況も良好と思われた。

本墳は，旧地表面で約27°を測る急斜面に営まれていることから，必然的に狭い空間しか得られず，また崩れ防止のため様々な作業工程を経なければ築造不可能な所に築造している。

墳丘の規模は，玄室奥壁側が最も高く1.6mを測り，また周溝は内径上端で5.7m，周溝の最大幅は上端で，1.7mを測る。周溝の平面形は，Ⅰ・Ⅳ区の先端部が不明確となるも，約９m程の円形状になろう。占有空間の狭さに起因してか，玄室奥壁と周溝との間隔は他の古墳と比較すると極端に狭くなっている。この所が最も高所となり，95.25mを測る。

地山整形は，玄室側は岩盤を刳貫いているが，羨道部側は排土で盛土している。しかし，平坦面は玄室奥壁から３m程の範囲に止まり，この地点より墳丘前面にかけては旧地形を活かしてその上に盛土をなしている。

墳丘前面に列石を巡らし土留めをなしているが，流出していて旧態は不明で，特に右前面から周溝側にかけては基底部さえ残存していない状況であった。墳丘左側は比較的良好で，２段ないしは３段程残存し，一部張り出す歪な形状を呈しているが奥壁付近まで連なっている。このくびれている部所より墳丘内にも列石が伸展しており，また，右墳丘内においても約40cm程前方ではあるがL字状に列石を積まれており，左右共に一部壊れてはいるが0.7～0.8m程残存している。これら上記列石の形状や有り様と階段遺構の有り様を考慮すると，階段部の左右は前庭部の機能を果たしていたと考えられ，また階段部は墓道とも考えられる。

主体部（図版53～55・56－１，第69図）

埋葬施設は，主軸方位N６°Wをとり，ほぼ南に開口した単室の横穴式石室である。本墳の特色は，羨道部の一部に石積みの階段遺構を設けていることである。

主体部の掘り方は，玄室部の大半以上が岩盤を刳り抜き，羨道部側は排土でもって盛土し，略水平な平坦図を造っている。玄室西側は，側壁面より1.5m外方まで掘られていたが，これは

石室構造と大いに関連している。

石室長は5.65mを測るが，玄門より段状遺構の前面までを羨道部とすると3mとなる。

玄室は，奥壁側で2.15m，玄門側で2.35m，東壁側で1.75m，西壁側で1.30mを測り，平面形は不整な長方形を呈す。ここで前述の西壁側掘り方について検討する。奥壁側及び東壁側の基底部は，明瞭な溝状の掘り方内に据えられている。しかし，西側の溝状掘り方は，上端の幅で1.2mにも及ぶ。また，溝状掘り方の外方下端で，東西間の中央は略主軸線上に当る。これらの状況と第69図の土層図A－A′の堆積状況から判断すると，地山整形時において西側壁は前述の想定位置を予定していたと思われるが，石室架構において前面側が狭い等の要因で縮小を余儀なくされたのであるまいか。

奥壁の基底部は，鏡石の右側が崩落しているものの，大振りの石材を並べて腰石とし，上端面を揃えて据えているが，右側壁の中央付近まで同様になされている。鏡石は，奥壁の略中央に位置し，幅55cm，高さ65cm(床面より40cm)，厚み8cmの扁平な緑泥片岩を用いている。この鏡石や腰石の上端面を掘り方のテラス面に石を架け，更に上方は小口積みで積み上げているが，持ち送りをなし内角約150°の勾配となる。石材はすべて緑泥片岩である。

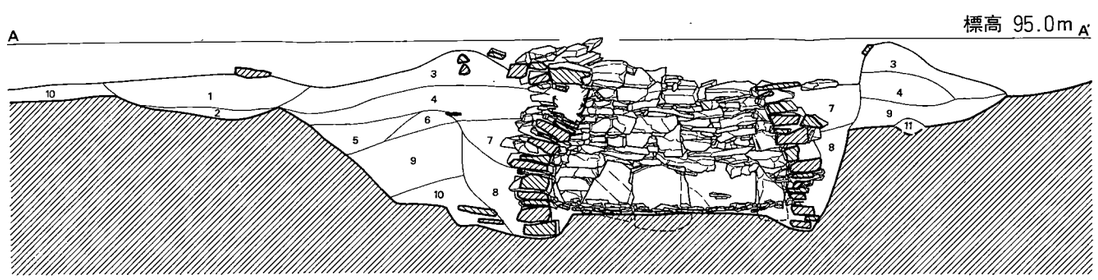
左側壁は，基底部にさほど大きな石を使用せず，略鏡石上端面まで小口積みでもって，略垂直に積み上げている。その上方は，奥壁側と略同じ方法がなされ，玄門側ではせり出したり崩れ落ちている。右側壁は，前述の腰石と玄門袖石間が左側壁と同じ積み方で，上端面の高さまで略水平となる。その上方は，やや大振りな石も混じえて，小口積みでもって持ち送りしている。

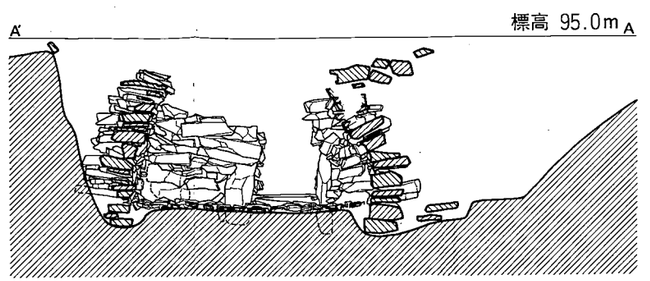
床面は，薄手の扁平な緑泥片岩を敷き詰めて，略水平をなしている。

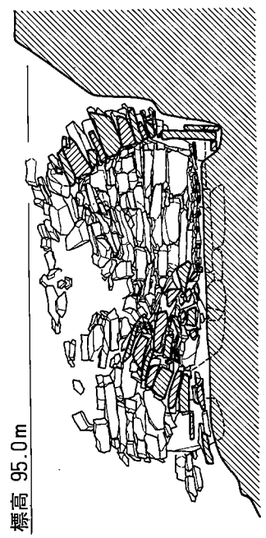
玄門間は床面で65cmを測り，左右の袖石は大振りな緑泥片岩を堅固に据えている。この袖石間いっぱいに納まっている扁平石が仕切石ではなく，追葬時に敷かれた床石ではなかろうか。仕切石はその下方の右袖石寄りの石が妥当と思われ，長さ37cm，幅15cm，厚み7cmを測り，約半分程が床面上に出ている。

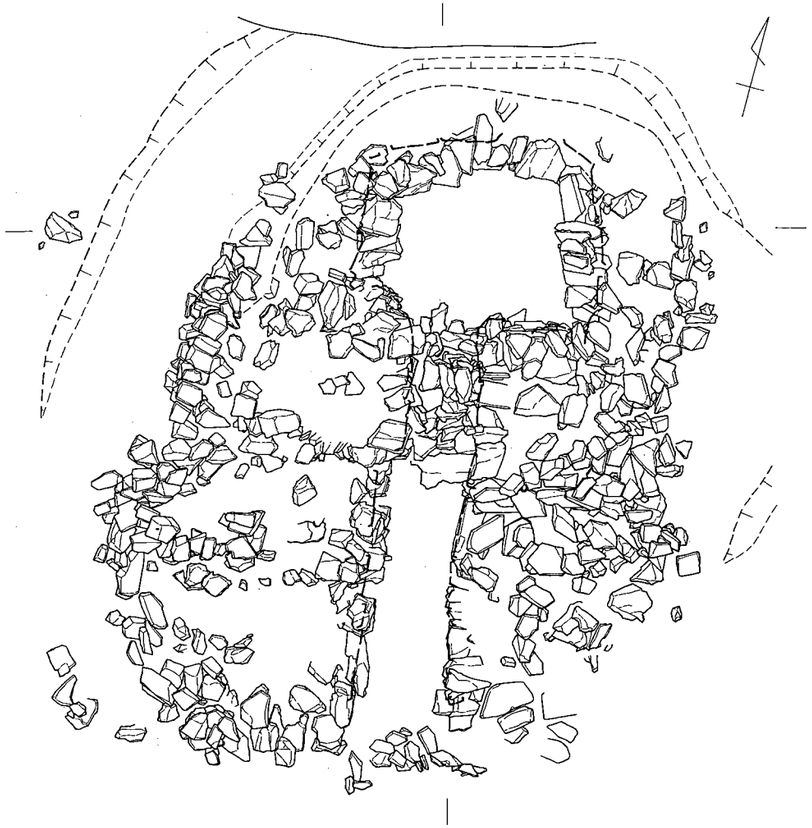
羨道部は，長さ1.25m，幅0.65mを測り，平面形は略長方形を呈す。右側壁の基底部は，やや大振りな扁平石を立てて腰石としている。その上方は小口積みで5段積み上げているが，墳丘が若干前面側に流動しているのに伴い，ずれ動いている。左側壁も同じ方法が執られているが，右側壁よりも旧態を止どめている。床面には，側壁間いっぱいに納めた扁平石を3枚配している。羨門の袖石は，玄門袖石より一回り小振りとなり，右袖石は墳丘の土圧でもって大きく傾いている。

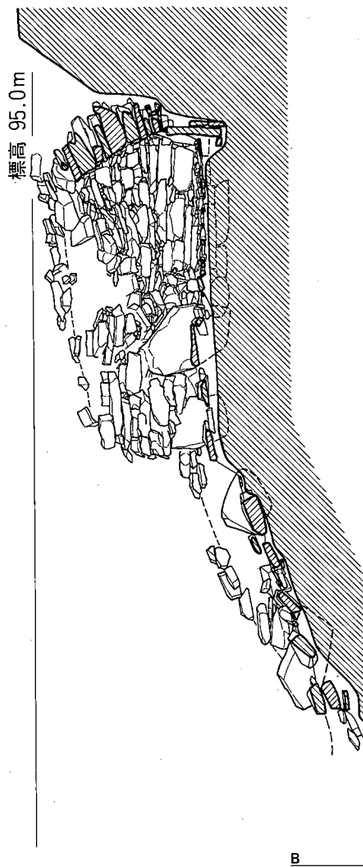
閉塞は，仕切石の手前から階段遺構まで及び，玄室中央から閉塞の中心までは1.9mを測り，緑泥片岩でもって幅1.5m，高さ0.7mに及んでいる。また，この時点で階段の上方を埋め戻した後，その上に閉塞を行っている。

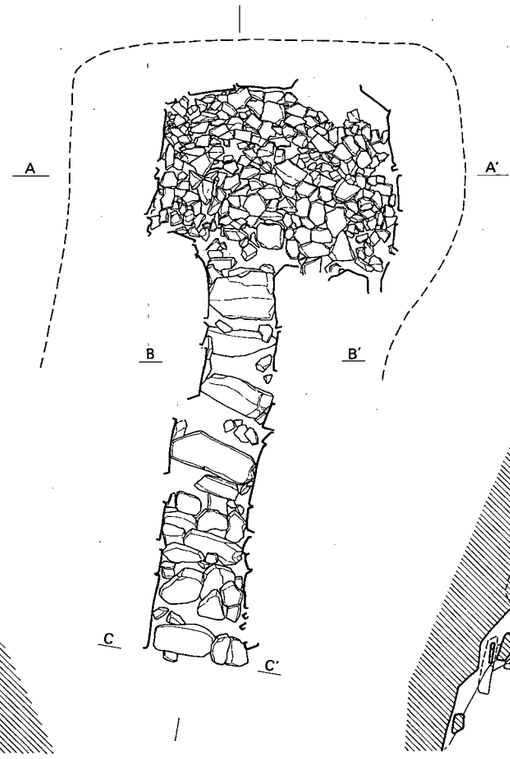


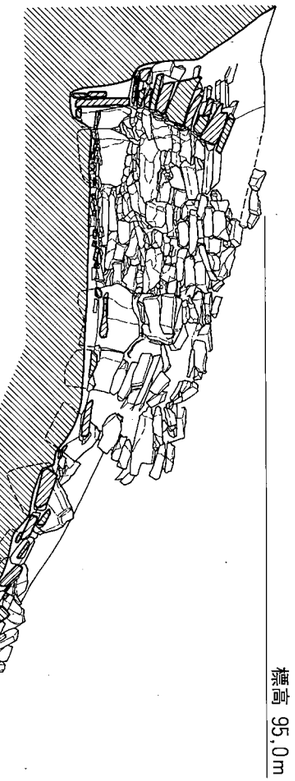


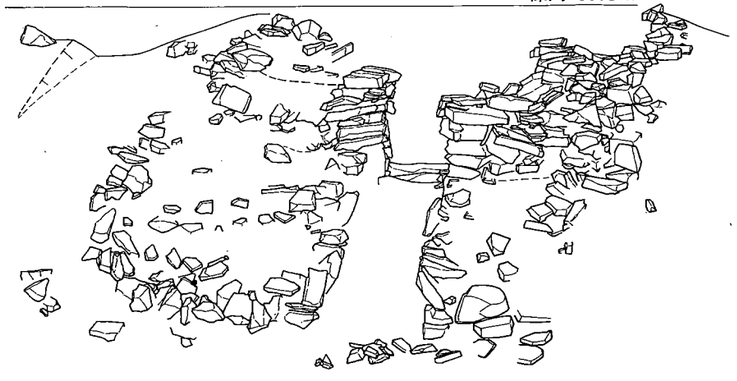


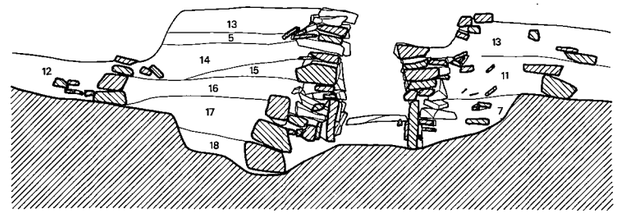


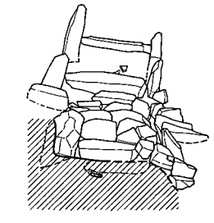


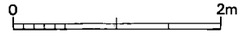












第 69 図　柿原D地区10号墳石室実測図（1/60）

階段遺構（図版53，第69図）

主軸より西方に約10°振れる中軸線となり，全長2.4mに対して比高差は1.3mとなるが，前方側は流出したとも考え若干長くなり，列石全面まで伸展していたと推定される。両側壁には，大振りの緑泥片岩を縦長に2枚ずつ略対称の位置に地中深く据えているが，土圧を受け大きく傾いた状態で検出した。縦長に据えた石の間には，小振りな石を積み上げたと思われるが基底部しか残存していない。また，列石全面にも縦長に据えていた可能性を有すが，痕跡など何等検出していない。

床の有り様は，一部流出しているものの，大半以上の石は石の長軸と中軸線が直交して，足懸りを良くするためか旧地表と平行に斜めに設置され，個々の石の間隙を詰めることで簡単な石組の階段となり得たと考えられ，前述の様々な条件に起因してかこの遺構を造り出したと思われる。

なお，後章において，墓道とも関連して再検討する。

遺物出土状況（図版56－2・3）

玄室内の南西隅床面上に須恵器杯身・蓋が横倒し，かつ蓋は裏返しの状態で出土した。

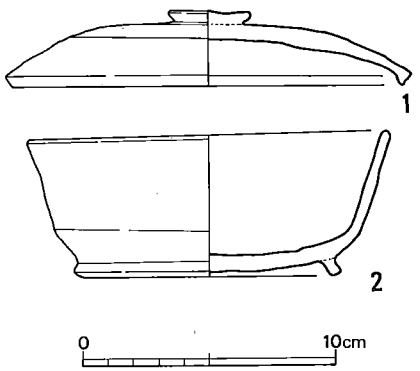
他の土器は，原位置を保っているのは少なく，転落していたり散乱した状態で出土した。本墳の占地する地形を考慮して，推定される原位置を個々順次記することにする。

出土遺物（図版57，第70～74図）

玄室内出土土器（第70図）

須恵器杯蓋(1)　口径15.5cm，器高3.1cmを測る完形品。口縁部は鳥嘴状を呈し，天井部は回転ヘラケズリを施し扁平で，擬宝珠形つまみを付している。他の部位の調整は回転ナデ及びナデを施している。石英・角閃石の細砂粒を若干含み，こげ茶色ないし淡茶灰色を呈す。焼成は良好である。

須恵器杯身(2)　1とセットとなり，口径14.1cm，器高5.6cm，高台径11.6cmを測る完形品。口縁部は若干外反する程度で，「八」字状の高台を貼付している。調整は回転ナデ及びナデであるが，底部外面はヘラ切り離し後にナデを施す。細砂粒をやや多く含み，淡黄灰色を呈す。焼成は堅緻。

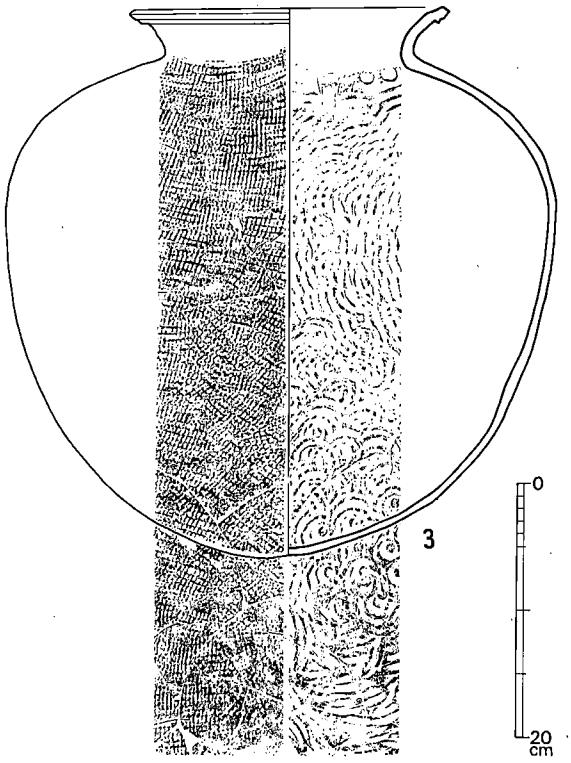


第 70 図　10号墳石室出土土器実測図（1/3）

墳丘・前庭部及び周溝内出土土器(第71～74図)

須恵器甕(3)　左側前庭部・周溝Ⅰ区と墳丘前面より出土した略完形品で，左側前庭部の周溝側に置かれていたと思われる。口径25.1cm，器高43.1cmを測る。口縁部は大きく外反し，肩が張る器形となる。胴部外面には格子目叩き，内面は同心円当て具痕が残る。砂粒を少し含み，灰色ないし淡緑灰色を呈す。焼成は堅緻である。

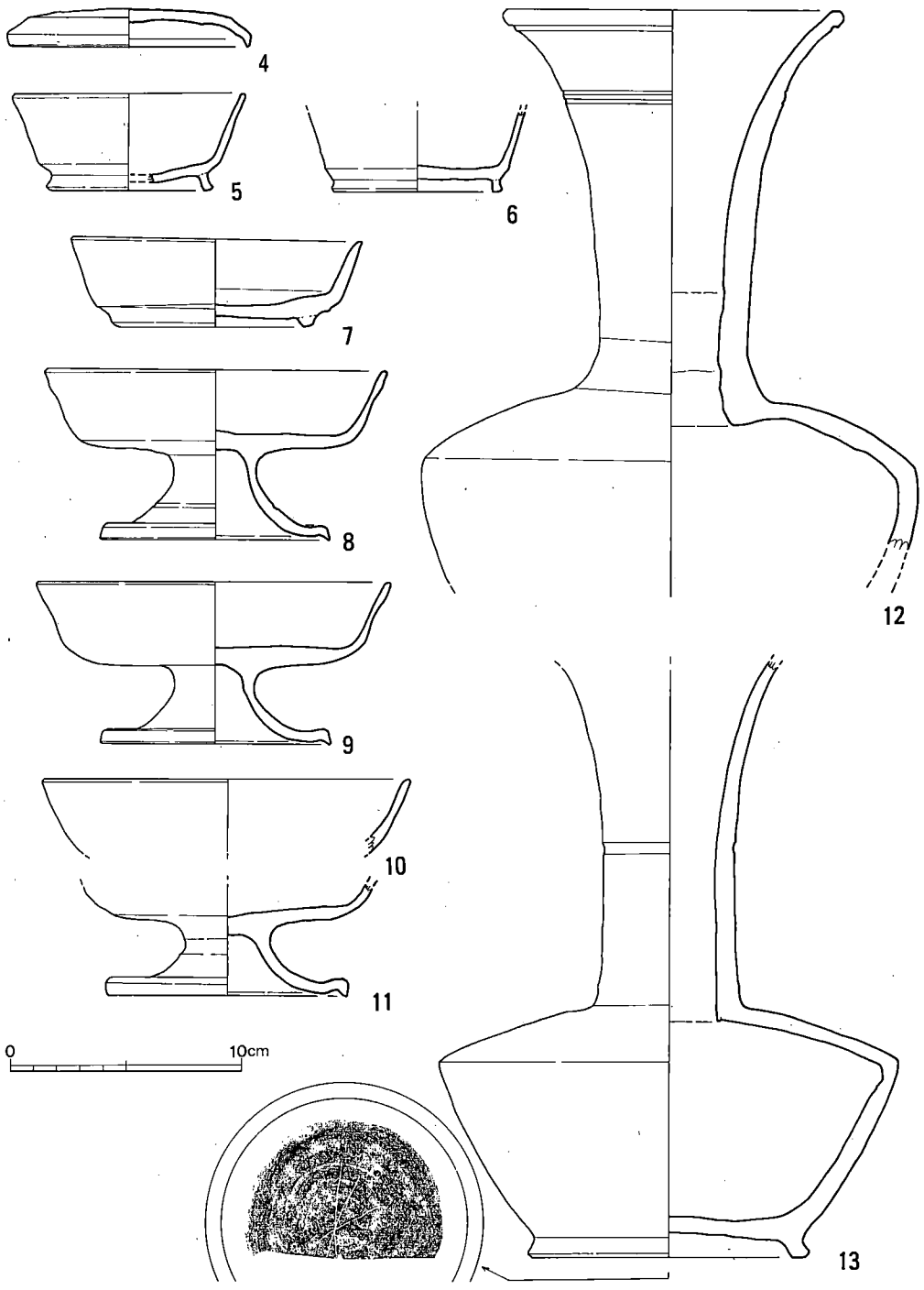
須恵器杯蓋(4)　周溝Ⅰ区より出土し，口径10.2cm，器高1.7cmを測る完形品。天井部は扁平で回転ヘラケズリを施すが，つまみを付さない。口縁部は鳥嘴状を呈し，回転ナデをなす。細砂粒を少し含み，くすんだ青褐色ないし暗褐色を呈す。焼成は良好である。



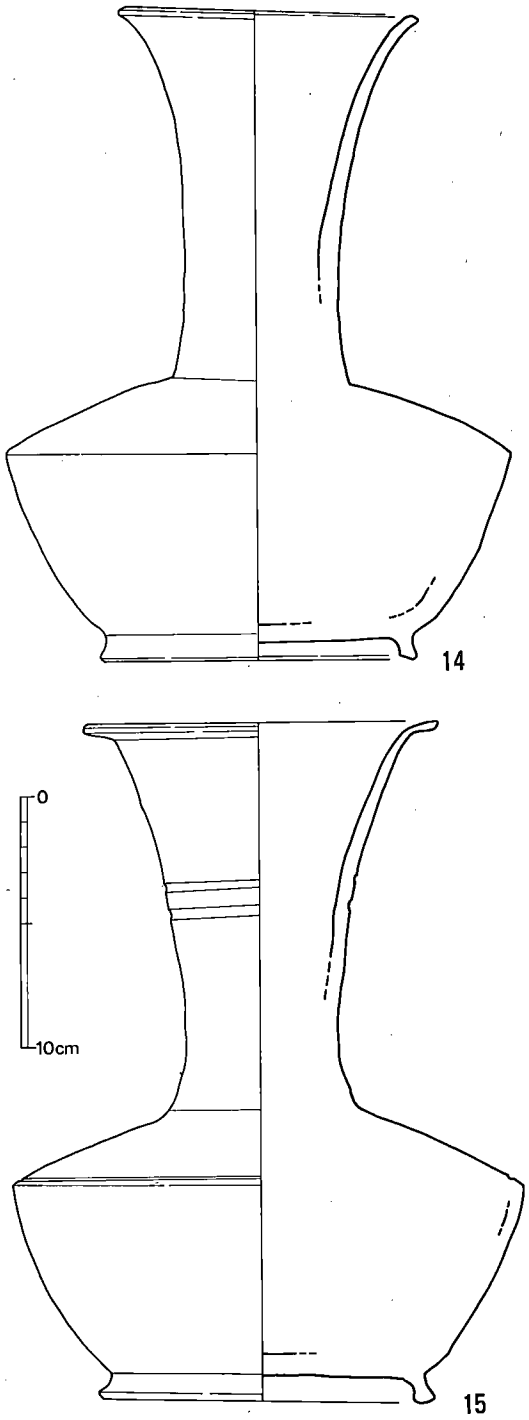
第 71 図　10号墳前庭部他出土土器実測図１（1/6）

須恵器杯身(５～７)　５は墳丘前面の傾斜面より出土したが，周溝Ⅰ区より出土の４とセットになろう。復原口径10.0cm，器高4.2cm，復原高台径7.2cmを測る。高くて大きく外反する高台を貼付している。淡茶灰色ないし暗褐色を呈し，焼成は堅緻。６は右側前庭部の列石付近より出土した品。口縁部を欠損するも，復原高台径7.4cmを測る小型品である。底部の端際に直立した高台を貼付している。淡青灰色ないしねずみ色を呈し，焼成は堅緻。７は周溝Ⅲ区出土の完形品。口径12.5cm，器高3.8cm，高台径8.8cmを測り，器壁が肥厚し器高の低い器形である。底部外面はヘラ切り離し後簡単なナデ，他は回転ナデ及びナデ調整。細砂粒を若干含み，淡青灰色を呈す。焼成は堅緻である。

須恵器高杯(８～11)　10は脚部を欠損した高杯の杯部であろう。８は左側前庭部と周溝Ⅰ区に散乱していたが，左側前庭部に置かれていたと思われる。９も前庭部よりの出土品。10は周溝Ⅱ区，11は墳丘前面斜面より出土した。杯部は口縁部が外反し，回転ナデ及びナデ調整。脚部は短く，端部が大きく屈曲し，更に下方を屈曲させ鳥嘴状を呈す。８は口径14.9cm，器高7.4cm，裾径10.0cmを測る。細砂粒を若干含み，青灰色ないし青褐色を呈す。焼成は堅緻。９は口径15.3cm，器高6.9cm，裾径9.9cmを測る完形品。微砂粒を若干含む精良な胎土である。青灰色ないし灰褐色を呈し，焼成は堅緻。10は口径15.9cmを測る。砂粒を若干含み淡灰色を呈す。焼



第 72 図　10号墳前庭部他出土土器実測図 2 (1/3)



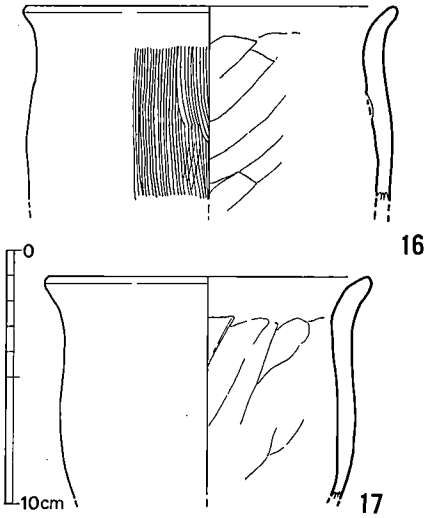
第 73 図　10号墳前庭部他出土土器実測図（1/3）

成は堅緻。11は基部径4.3cm，脚部高3.1cm，裾径10.5cmを測る。精良な胎土で，淡青灰色ないし黒灰色を呈す。焼成は堅緻。

須恵器長頸壺(12～15)　12は墳丘前面斜面と18号墳周溝III区より出土したが，前庭部付近より転落したものと思われる。底部を欠損しているが，口径14.7cm，頸部高17.2cm，胴部最大径21.4cmを測る。口縁部直下に1条と下方に2条の沈線を巡らし，口縁部は大きく外反し，端部は不整形であるが丸く仕上げられている。肩部は少し丸味を有して大きく張る器形となる。砂粒を若干含む胎土で，淡青灰色を呈す。焼成は堅緻である。13は東側墳丘内より出土し，口縁部を欠くが略完形品。底径12.1cm，胴部最大径19.8cm，残存器高25.6cmを測る。頸部中程に1条沈線を巡らす。肩部より沈線までは略直立し，その上方は緩やかに外反する。肩部と胴部の境は鋭く屈折して稜が認められる。「八」字状に張り出す高台を貼付し，底部外面に3条のヘラ記号を付す。細砂粒を若干含むが精良な胎土で，淡黄灰色ないし灰色を呈す。焼成は良好である。14は前庭部と周溝及び17号墳周溝II区と広範囲から出土したが，原位置は前庭部が考えられる。底部の一部を欠損するも略完形品に復原される。口径12.0cm，胴部最大径20.1cm，底径12.6cm，器高25.7cm，頸部高14.6cmを測る。器形は13と略同じとなり，口縁端部は屈折せず，やや丸味を有して仕上げている。細砂粒を若干含むが精良な胎土で，青灰色ないし灰褐色を呈す。焼成は良好である。15も左側前庭部と17号墳周溝II区よ

り出土し，略完形に復原された品である。口径14.2cm，胴部最大径20.2cm，底径13.3cm，器高27.2cm，頸部高15.6cmを測る。頸部中程に2条，肩部と体部との境に1条の沈線が巡る。器形は概ね13・14と類似するが，口縁部は大きく屈折して平坦面を有している。やや粗い砂粒を含み，淡黒灰色ないし黒灰色を呈す。焼成は良好である。

土師器甕（16・17）　16は右側墳丘上部より出土し、体部下半より下方を欠き、復原口径14.8cmを測る破片である。口縁部は若干外反し、体部も僅かに脹らむ器形となる。口縁部内外はヨコナデ、内面はヘラケズリ、外面はハケ目調整となる。砂粒を多く含む胎土で、暗褐色を呈す。焼成は良好である。17は周溝III区より出土し、復原口径12.9cmを測る。16と略同じ器形となり、調整も同じとなるが外面は風化している。明褐色ないし暗褐色を呈し、胎土と焼成も16と同じ。



第 74 図　10号墳前庭部他出土土器実測図 4 （1/3）

石室構造と墳丘裾及び前庭部よりの出土品から、7世紀後葉頃に築造されたと考えられる。また玄室内からの出土品は8世紀前半に比定されるので、その頃まで追葬が行なわれたのであろう。　（武田）

11. 11号墳

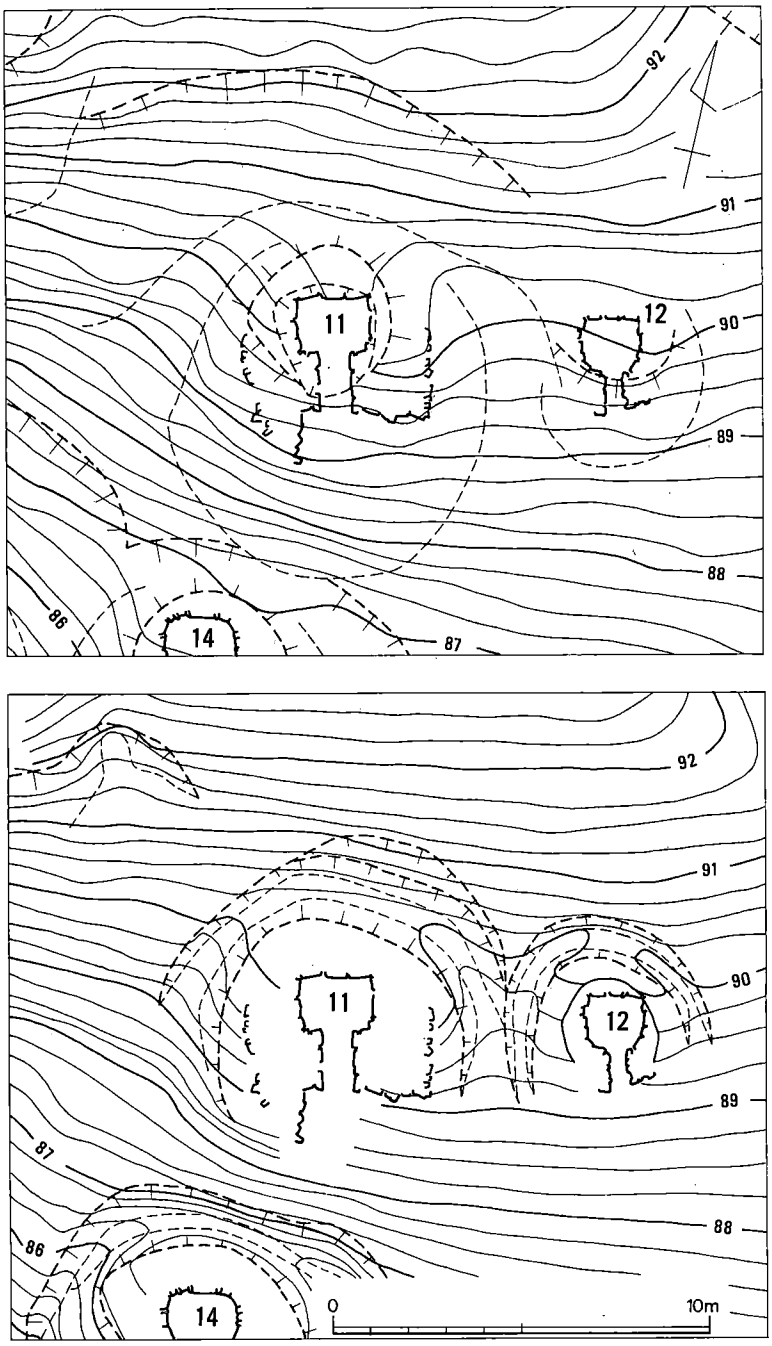
墳　丘（図版58，第75図）

9号墳の東南方向約15.0mで，標高88.0～90.5mに占地している。調査前の観察では，南北9m，東西8mの楕円形で約1.5mの高さであった。周溝は9号墳墳丘裾の標高92mのあたりからみかけの落ち込みがあり，9号墳裾から約1mの深さがあった。

表土を剥いだ状態では，外側で直径9m強，内側で直径7m強の周溝が馬蹄形にあり，周溝は幅1.3～2.0m，深さ0.5m前後で，周溝底の最高所は標高90.3mを測る。また，周溝は東側で12号墳の周溝と接しているが，表土を剥いだ段階での切合い関係は12号墳が後出する。墳丘は，

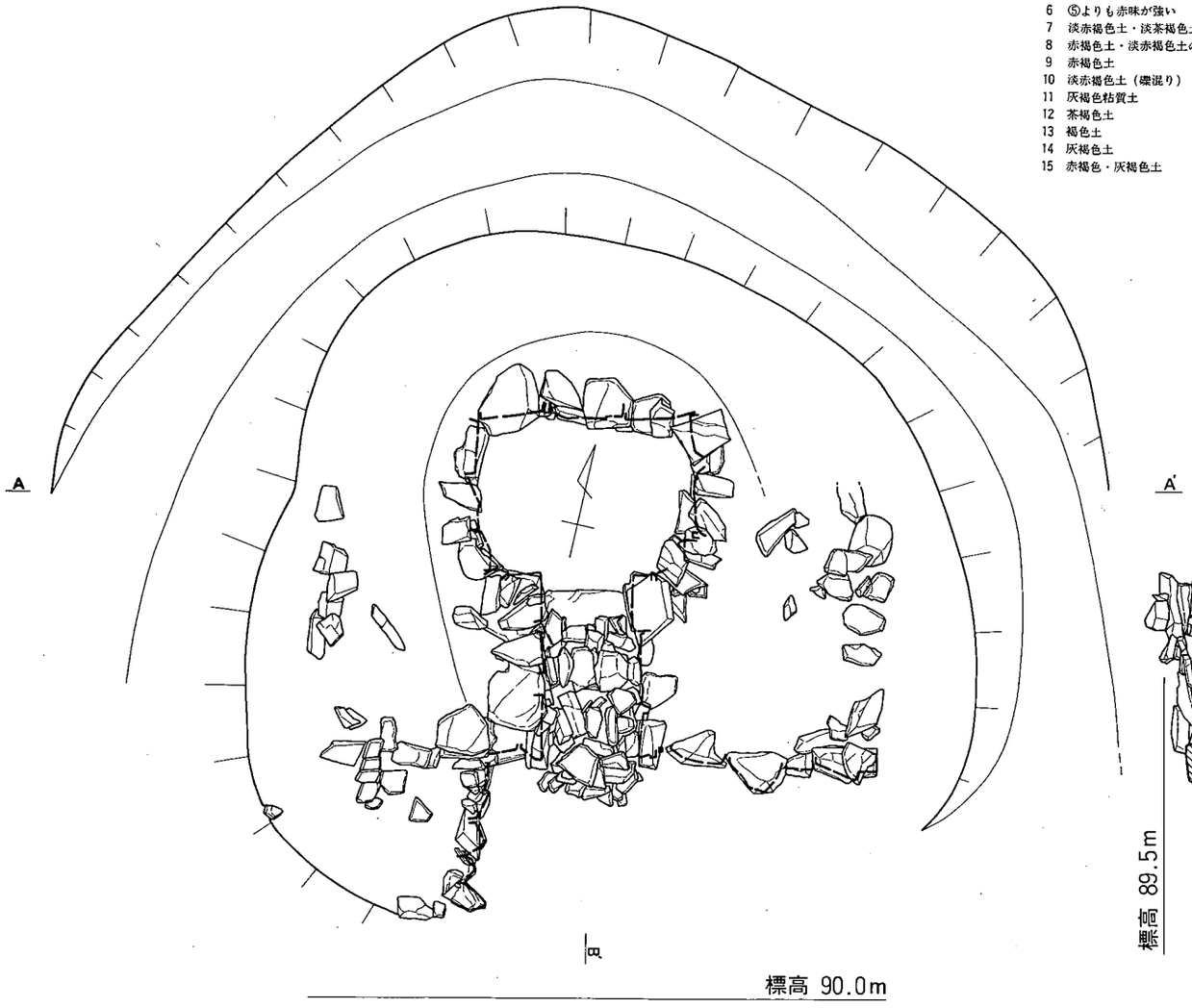
直径８m弱の円形で，前面の辺4.8mの列石があり，左右で直角に折れ曲がる列石が2.5mずつ続いている。この列石は本来後方にも続いていたのか，奥壁後方の墳丘にも列石を構成しないものの石がかなり散乱していた。

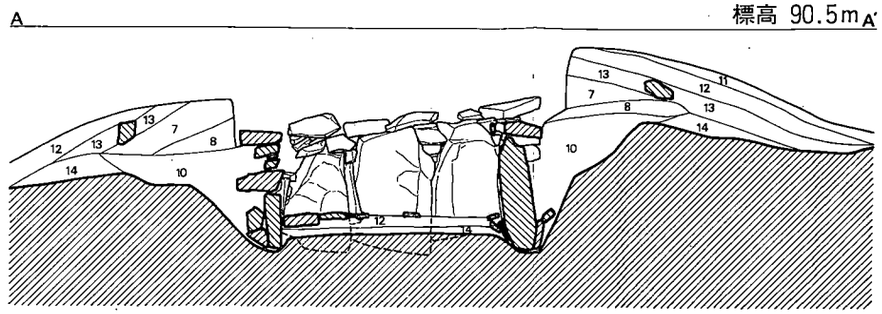
前面の列石は羨門に接する石がやや大振りな扁平石を立てて据えているが，外側には高めの位置に小振りな石が平積みされる形に続いている。残りの良い部分で３段程平積みされているが，全体に残り方は悪い。また羨門左側0.45mの位置から，直角に折れて，２段ほど塊石積みの列石が1.3m続いている。

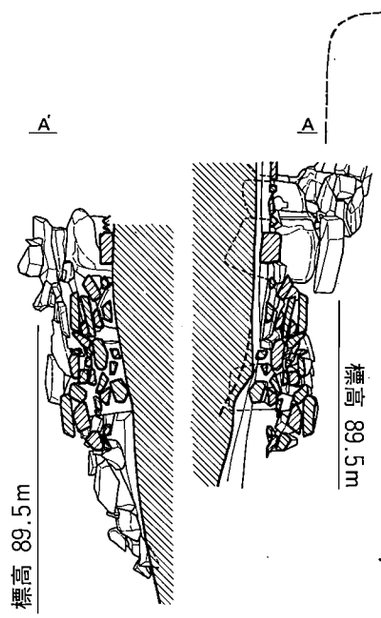


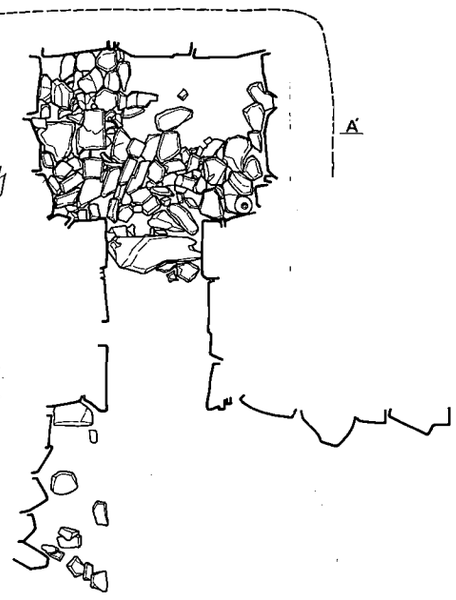
第 75 図　11・12号墳墳丘・地山整形面測量図（1/200）

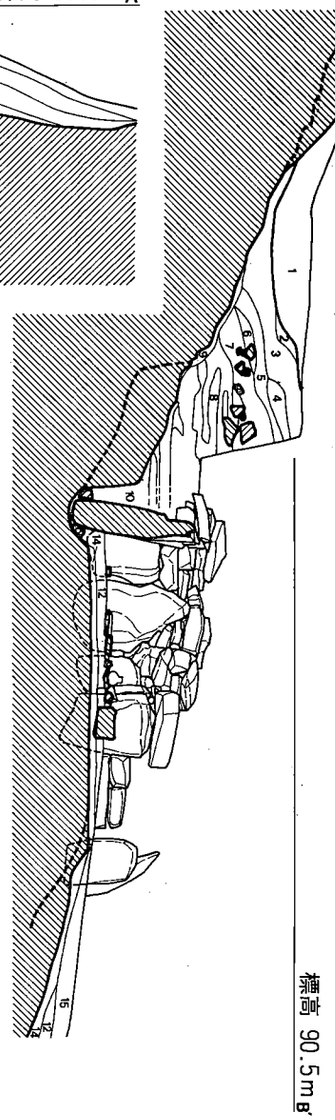
1 淡茶褐色土
2 淡茶褐色土（細礫混り）
3 茶褐色・赤褐色土（細礫混り）
4 淡茶褐色土
5 淡茶褐色・淡赤褐色土（礫混り）
6 ⑤よりも赤味が強い
7 淡赤褐色土・淡茶褐色土の互層
8 赤褐色土・淡赤褐色土の互層
9 赤褐色土
10 淡赤褐色土（礫混り）
11 灰褐色粘質土
12 茶褐色土
13 褐色土
14 灰褐色土
15 赤褐色・灰褐色土











第 76 図　柿原Ｄ地区11号墳石室実測図（1/60）

主体部（図版59～61，第67図）

この古墳の主体部は，主軸方位をN12°50′Wにとり，南南東に開口する単室の横穴式石室である。

主体部の掘り方は，充分に検出していないが，上縁部では幅4.5m，0.3～0.4m下がった高さまでは緩やかに掘り込み幅3.2mを測る。これより下は急傾斜に掘り込んでいる。掘り込みは，奥壁側では岩盤にまで達しているが，奥から約3mまでで，それよりも前面側は旧表土の上に盛土して平坦面を広げている。

石室は，全長2.95mで，前庭部の列石を含めると4.25mである。石材は全て緑泥片岩が使用されている。

玄室は，長さ1.35mだが，両側壁では1.30mを測る。中央部での幅は1.85m，奥壁での幅は1.82m，玄門側での幅1.67mで，平面プランは玄門側がややすぼむ横長の台形を呈する。

奥壁にはやや大振りな扁平石を3枚縦長に並べて据えている。鏡石にみたてる中央の石は高さ75cm（石材の高さ100cm），幅65cm，厚さ25cmの板石で，両脇の石はわずかに小さめの板石を立てている。これらの腰石の上は板石を小口積みしていて，床面から約1.0mの高さが残っている。左側壁も3枚の板石を立てて据えているが，奥壁に比べるとかなり小さめの石を使用している。左側壁でも腰石の上は板石を小口積みしており，4段程度が残っている。右側壁は中央にやや大振りの板石を立て，両脇に小振りの板石を据えている。これらの腰石は，掘り方底の溝状の部分に据えられるが，基底部はしっかりと根固めされている。

玄門の袖石は，左右共に大きめの石を使用していて，右側では高さ70cm強（床面からの高さ45cm），幅50cm，厚さ30cm弱の，左側では高さ70cm，幅40cm，厚さ30cm強の石が据えられている。そしてこの袖石の上は，他の部分よりも広めの扁平石が架けられている。両袖石間の玄門幅は0.77mで，床面には長さ77cm，幅30cm，厚さ17cmの石で框石が設けられている。

羨道部は長さ1.60m，羨門の幅は0.83mである。羨門の石には，左側で高さ50cm（石材の高さ90cm），幅55cm，厚さ20cmの大きさ，右側で高さ40cm（石材の高さ60cm），幅40cm，厚さ15cmの大きさの板石を立てて据えられている。玄門の袖石と羨門の石との間は，両側壁共に，基底部から扁平石が平積みされている。羨門に隣接する両側の列石の石は，大きめの板石が立てて据えられていて，上には平積みがみられる。またそれより先の列石は塊石積みで続いている。なお，羨門には仕切石はみられない。

閉塞は，框石の前側から羨門にかけて積まれるが，前面では羨門をはみだしている。積み方をみると，内側では主軸に平行して比較的整然と積まれる石が多いものの外側では雑然としている。

床面には，扁平石を用いた敷石があり，右側奥は敷石が抜けている。左右側壁に沿って幅0.

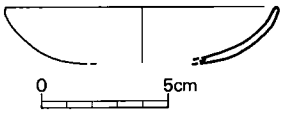
5m程の部分はやや大きめの扁平石で敷かれており，左側でみると奥壁から0.5mの部分で敷き方に変化がみられるので，玄室内を４つの部分に区切ったような状態である。

遺物出土状況（図版59－３）

玄室内右袖部の隅に，短頸壺が置かれた状態で出土したが，盗難に遭い現存しない。器高・胴部最大径共に15cm前後の大きさで，算盤玉状の胴部でわずかに稜をもち，肩部には波状文を挟む２条の沈線が巡る。口頸部は短くて口縁部が外反するが，口縁内部に低い段がみられた。底部の形は未確認だが平底であろう。なお，この土器に接して土師器皿片も出土した。

玄室の上部堆積土中からは鉄鏃片が出土し，前庭部床面からは鉄滓なども出土した。

出土遺物（図版61－４，第77・78図）



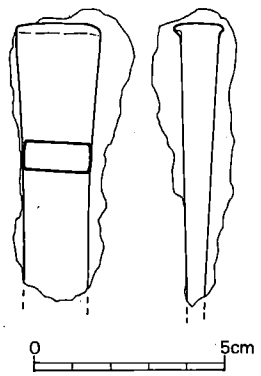
第 77 図　11号墳石室出土土器実測図（1/3）

土師器皿（第77図）　小破片のため不明確だが，復原口径10.8cm，現存高2.2cm。内外面ともに器面が磨滅しているが，丁寧なナデかミガキ調整であろう。褐色粒を含むが精選された胎土で明褐色に焼成されている。

鉄製品

鉄　鏃（第78図）　錆化でかなり膨れており，先端部を欠くが現存長7.5cm。頭部では幅2.2cm，厚み1.0cmだが，端は敲打のためにはみ出し1.3cmの厚さになっている。先端側での幅1.7cm，厚み0.5cmと細めになっている。重量の現存値は63.4gである。

鉄　滓（図版61－４）　親指大程度の大きさのものが１点と小片が３点出土している。総重量は15.5gを測る。また，ふいごの羽口小片も２点出土している。



第 78 図　11号墳石室出土鉄器実測図（1/2）

出土遺物では，細かな時期の判断はし難いが，７世紀後半から８世紀初頭頃に相当するものであろう。

石室構造では，玄室が横長な平面プランであり，前室を意識しながらも退化して羨道になっていること，玄室の壁体の構築状態や，方形に列石を組んでいることからして，１号墳に通じるものがあり，７世紀後半を考えておきたい。しかしながら，１号墳の石室や列石に比較すると簡略化されているので若干後出する時期であろう。

（小池）

12. 12号墳

墳　丘（図版62，第75図）

11号墳の周溝と一部共有する程に隣接し，D地区最東端の比較的緩やかな斜面に占地する。表土面では陥没穴など何ら痕跡は見当たらず，表土剝ぎ後に検出した小規模な古墳である。他の小規模な古墳に比べて占地する場所の地理的条件は，緩やかな斜面でもって11号墳以外の他に古墳が存しないなど良好な条件下にあると言えよう。

周溝の平面形態は半円形を呈し，規模は東西で外径上端が5.3m，内径上端が3.7mを測る。周溝の最大幅は北側で1.1mとなり，かつ最も高所となり標高90mである。

地山整形も石室より少し広めの小規模に止め，墳丘も11号墳側で20～25cmの盛土が認められたが，検出面で東側は地山が露呈していた。墳丘高の最高所は石室北側で0.7mとなる。

主体部（図版63・64，第79図）

主軸方位はN12°30′Eをとり，南に開口する単室構造で横穴式石室の形態をなしている。石室は全長が2.45mを測り小振りである。

石室は緑泥片岩の扁平石を用いて構築しているが，壁面の良好な所で7段程遺存し，床面より0.7mを測る。

玄室も小振りで，奥壁側が略直線となる蒲鉾形の平面形態を呈す。玄室長1.5m，幅1.5mを測る。奥壁中央に高さ0.72m，幅0.5m，厚み0.25mの石を立てて鏡石としている。その両脇にも同規模の石を配し，計3枚を直線的に配置している。個々の間隙とこれらの上方には，小振りで扁平な石を小口積みしている。東側壁は基部より平石を略垂直に小口積みしており，5～7段程遺存している。西側壁も略同様であるが，玄門側が少し南西方にずれ動いている。

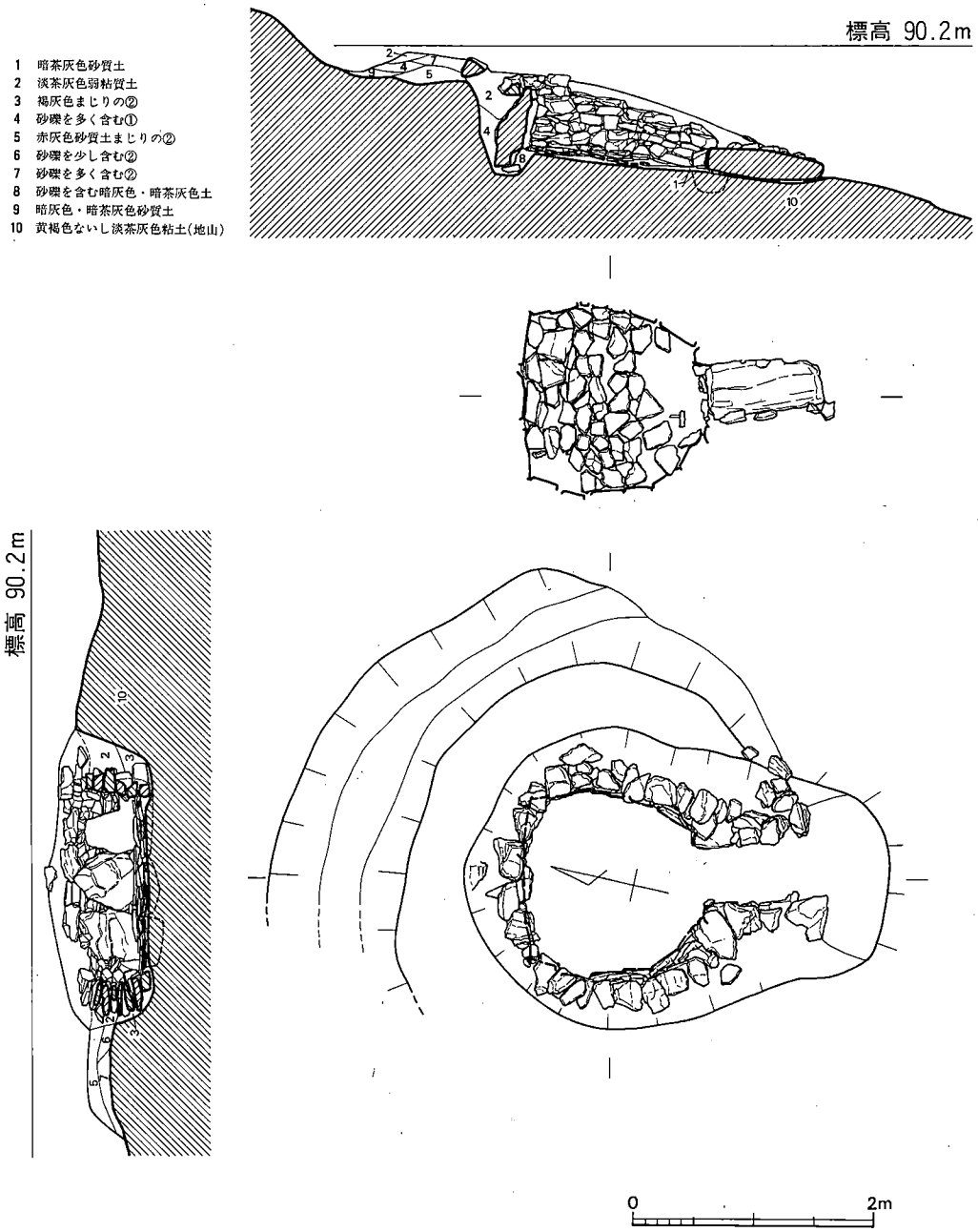
玄門袖石は鏡石等より一回り小振りな石が用いられ，床面より深く掘り込み堅固に設置している。羨道部は長さ0.95mを測り，小口積みしているが，後述する閉塞石との関係に起因してかやや粗雑な観は否めない。

玄室床面は敷石を施しているが，中程から奥壁にかけては整然と並べている。

閉塞石は長さ0.95m，幅0.46m，厚み0.24mの長方形で扁平石を壁際ぎりぎりに置いている。当初床面の石とも考えたが，玄室の規模や6・7・23号墳の有り様から，石室築造時に設置されたと判断され，閉塞石の意味をも兼ね備えていると思われる。

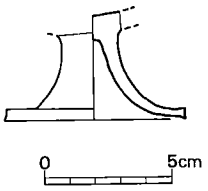
本墳の下層から不整形な土壙を検出したが，後章で説明する。

出土遺物は墳丘左側より，須恵器高杯の脚部が出土したのみである。　（武田）



第 79 図　12号墳石室実測図 (1/60)

出土遺物（第80図）



第 80 図　12号墳出土土器実測図（1/3）

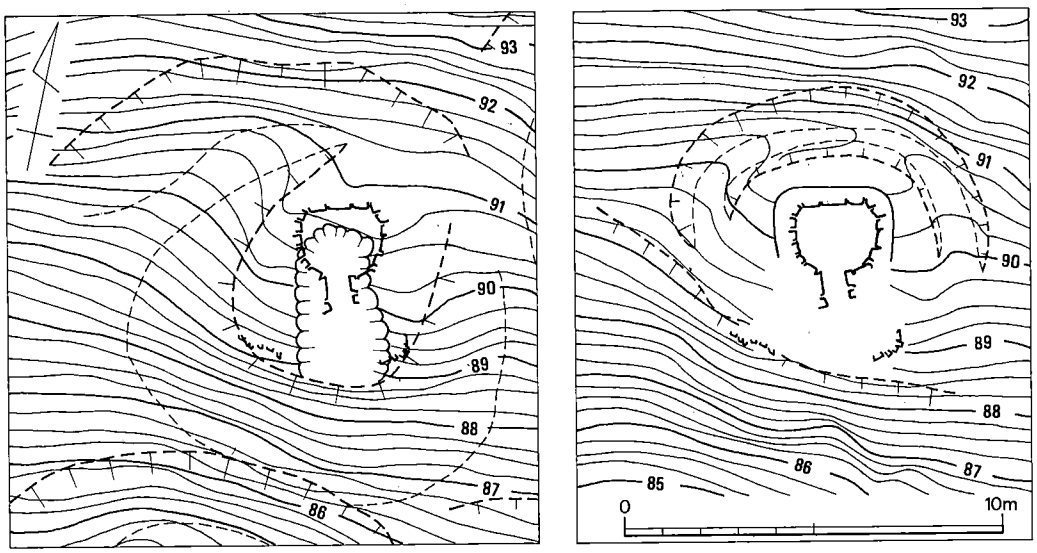
須恵器高杯　11号墳側の墳丘裾部から出土した破片で，杯部を欠く。残存高4.3cmで，脚部高3.5cm，裾部外径7.2cmの大きさ。中空の柱状部は緩やかに広がり，裾端部は，内外面・端面ともに中くぼみに整えられて角が尖る。細砂粒を含む胎土で，堅く焼成されて，淡黄灰色を呈する。7世紀後半～8世紀前半頃に比定できよう。　（小池）

13. 13号墳

墳　丘（図版65－1，第81図）

13号墳は，8・9号墳の間で少し下った部分にある。調査前には，標高80.9～90.5mにかけて大きな陥没穴があり，穴の周囲に直径5～6mの高まりがあって，斜面の上部に周溝とみられる凹みを観察することができた。なお，斜面の下には16号墳の周溝掘り込みの凹みがある。

表土を剝いだ状態では，外径8.5mの馬蹄形周溝があり，溝の幅1.3～1.8mを測る。溝の深さは0.3m前後で，最高所は北東部で標高90.6mである。墳丘は，直径6.5m，高さ1.8mの規模で



第 81 図　13号墳墳丘・地山整形面測量図（1/200）

ある。北側は地山が露呈しているが，南側はほとんど盛土であり，周溝の区別のし難い部分もある。南側と南西側の斜面下は崖になっているが，南側には，本来墳丘に巡っていたと思われる列石の一部がみられるものの，陥没穴部分は攪乱が著しい。

主体部（図版65－２・66・67－１，第82図）

この古墳の主体部は，主軸方位をN15°Wにとり南南東に開口する，横穴式石室である。玄門部より前側を攪乱で失うが，おそらく単室構造であったと推測される。前面にある列石の位置からして，石室全長は約4.0mであろう。

主体部掘り方は，奥行・幅ともに3.5m程度の隅丸方形のプランで，地山の中の岩盤にまで掘り込まれているが，前面側は盛土で平坦面を広げている。

玄室は，主軸で長さ1.75m（右側で1.80m），奥壁の幅1.70m，中央部での最大幅2.20m，玄門幅0.63mを測り，平面形は巾着形プランを呈している。

奥壁には，３枚の板石を並べて据えられているが，鏡石である中央の石は高さ80cm（石材の高さ115cm），最大幅80cm，厚さ30cmと大振りで，鏡石の両脇の石は一回り小振りの石を立てて据えている。両側壁は，直径2.20mの円弧に内面を揃えて，基底部から扁平石を小口積みしているが，床面から約0.5mまでは垂直に積み，それより上は持ち送りで積まれて，玄室の壁体は1.0～1.3mの高さに残っている。

玄門の袖石は，高さ60～80cm，幅50～80cm，厚さ15～20cmの大きさで，鏡石の両脇の石と同規模の石が据えられる。玄門の床面には，長さ64cm，高さ19cm，厚さ10cmの扁平石をわたして，框石としている。羨道部は，両側とも袖石の前側に平らに置かれた基底部の石が各１個残るだけで壁体を構成する石はことごとく除かれている。玄室天井石などを取り除いた攪乱の折に一緒に崩されたのであろう。

玄室床面には，小振りの扁平石で敷石されているが，整然とした敷き詰め方ではなくて，両袖石付近では敷石の抜けている部分もある。

遺物出土状況（図版67－２・３）

玄室内では，左袖石の少し奥側の壁沿いで須恵器の杯蓋２点・有高台杯身２点と平瓶１点が隅に片付けたような重なった状態で出土した。また。これらの土器群の玄門側で勾玉１点，框石の内側にある広めの敷石上から小玉１点，中央部の敷石上から耳環１点が出土した。

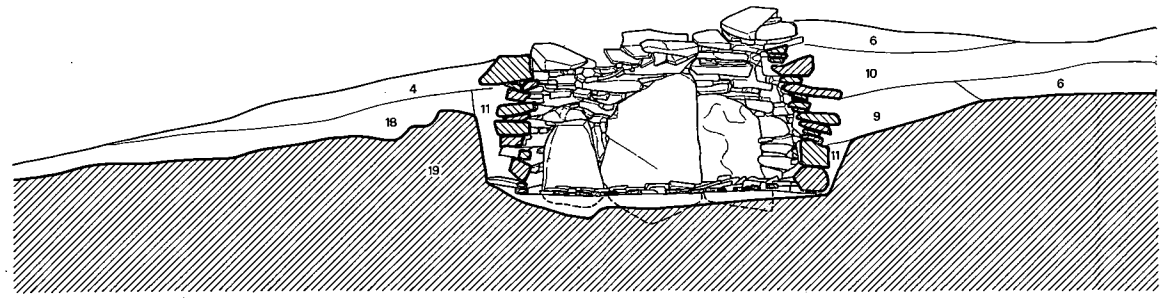
出土遺物（図版68，第83・84図）

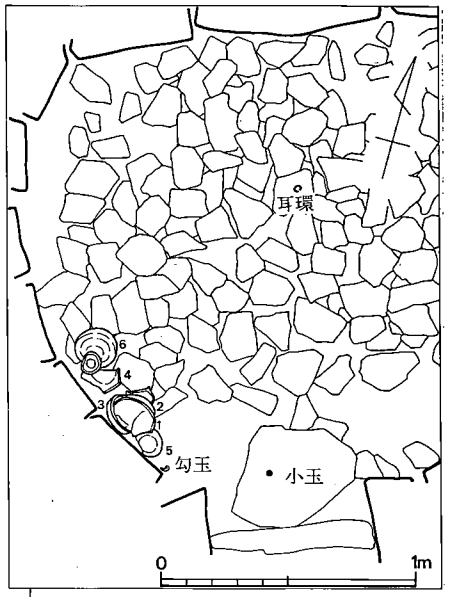
石室内出土土器（第83図）

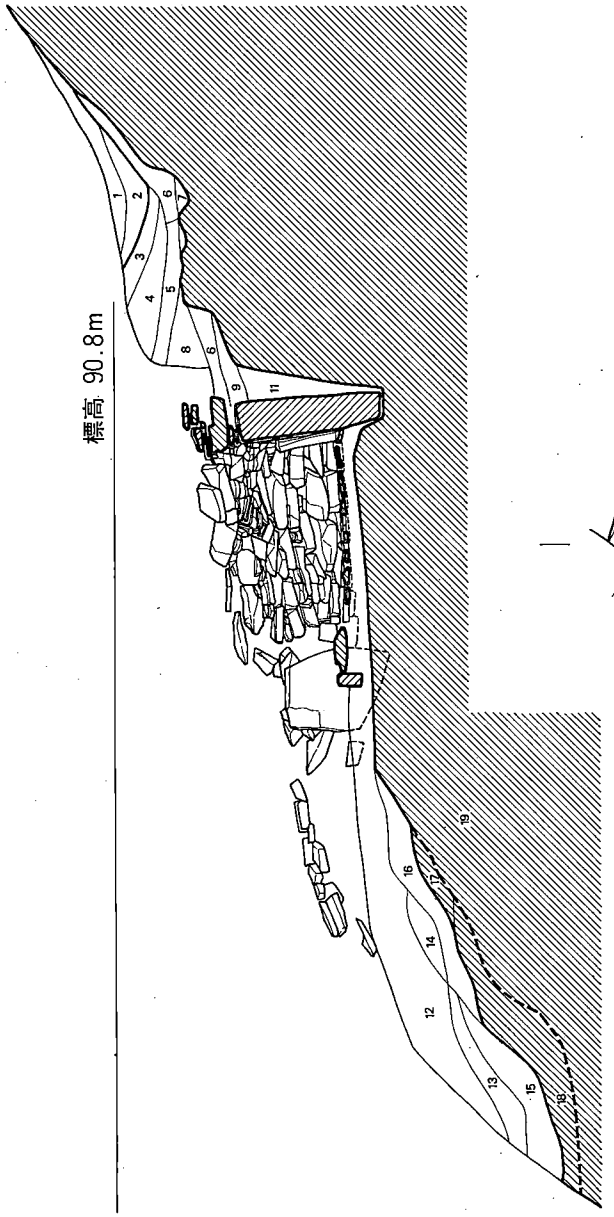
須恵器杯蓋（１・２）　宝珠形つまみと鳥嘴状口縁部をもつ扁平な杯蓋で，２点ともに堅緻に

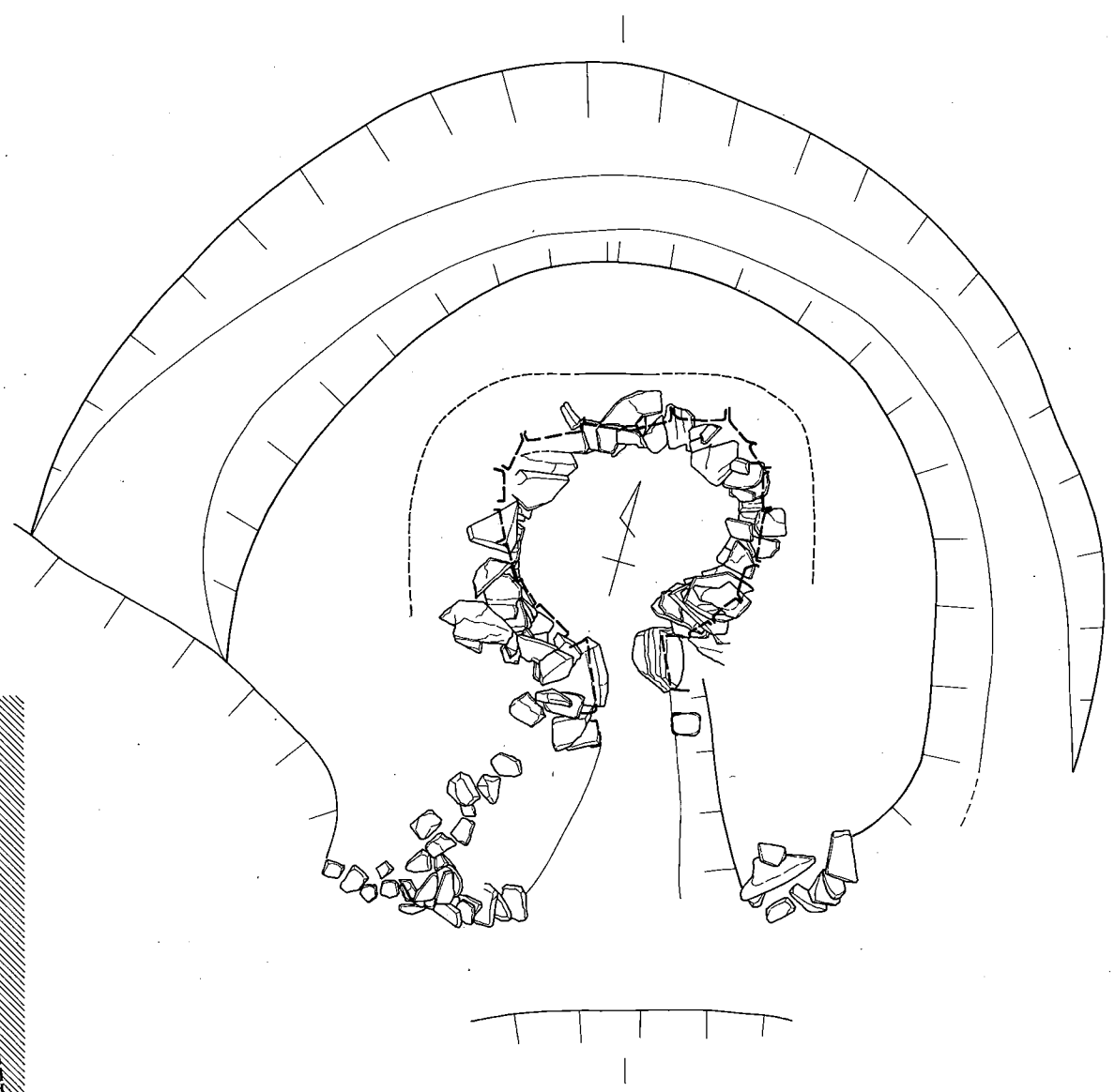
標高 90.8m

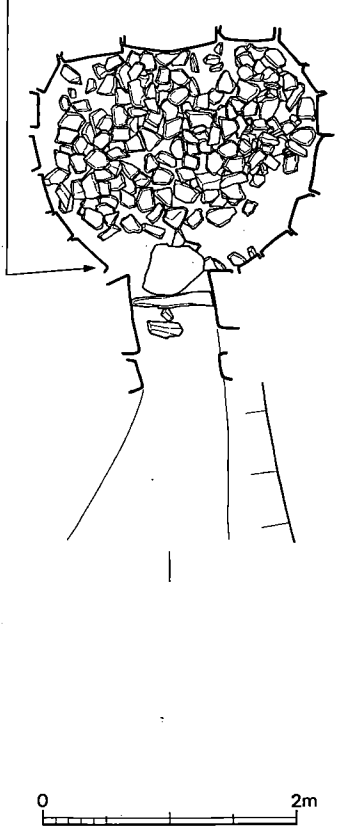
1 暗茶褐色土
2 ①＋淡黒灰褐色土
3 淡黄褐色・赤褐色土
4 暗赤褐色・淡茶褐色土(礫を含む)
5 暗黄褐色土（礫を含む）
6 暗茶褐色・淡赤褐色土
7 淡茶褐色土（礫を含む）
8 暗黄茶褐色土（礫を含む）
9 暗赤褐色・淡黄茶褐色土
10 暗黄褐色・淡赤褐色土
11 赤褐色・茶褐色・黄褐色土
12 暗黄茶褐色・赤褐色土(礫を含む)
13 暗茶褐色土
14 淡黄褐色・暗赤褐色土
15 暗黄茶褐色・淡赤褐色土
16 暗黄褐色・淡赤褐色土(炭混り)
17 淡赤褐色土
18 暗茶褐色土
19 地山の赤褐色粘土・岩盤









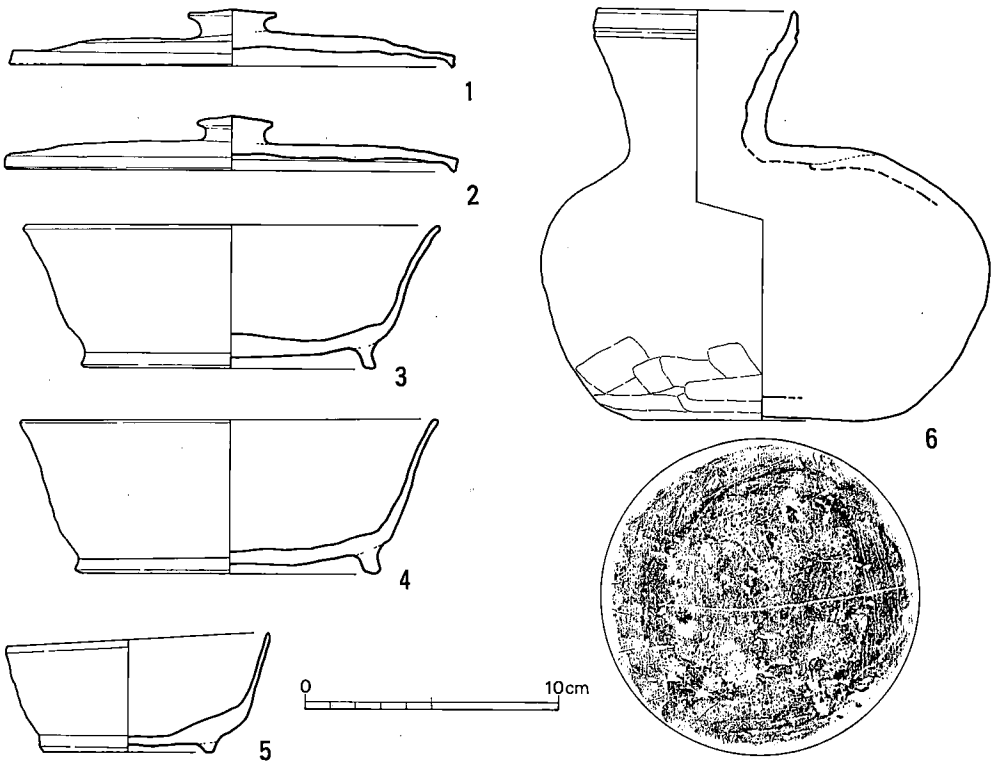


第 82 図　柿原D地区13号墳石室実測図（1/60）

焼成されている。1は，口径17.6cm，器高2.3cm，つまみ部径3.5cm，つまみ部高1.0cmの大きさ。天井部外面は回転ヘラケズリされている。2は，口径18.0cm，器高2.2cm，つまみ部径3.0cm，つまみ部高1.0cmの大きさ。こびり付いた土が取り除けず調整手法は不明。

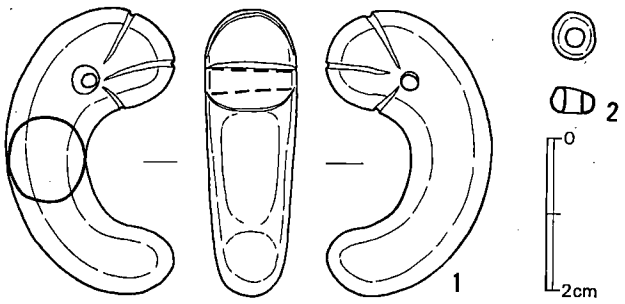
須恵器杯身（3～5） 3・4は杯蓋1・2に対応する大きさの高台付きの杯身で，高台は外方にやや踏張るように付く。体部は深めで，口縁部は外反する。2点ともに砂粒をわずかに含むが精良な胎土で，黒灰色・暗青灰色に，堅緻に焼成されている。3は，口径16.5cm，器高5.7cm，高台径11.7cmの大きさ。4は，復原口径16.6cm，器高6.1cm，高台径12.1cmの大きさ。5は，焼成不良で，淡褐色の色調を呈するが，復原口径10.5cm，器高4.7cm，高台径7.0cmの大きさ。磨滅のために器面調整は不明である。

須恵器平瓶(6) 器高16.3cmで，そのうち体部高は11.0cmを占め，最大径17.8cmの大きさ。口頸部は，口径8.0cm，頸部の径5.4cmの大きさで，体部天井の中央を高い方の端にしてとり付けられ，ラッパ状に外反して立ち上がる。口縁部は内弯気味にまとまり，口縁部下に1条の沈線が巡る。外底面はわずかに中凹みになる平底で，単直線のヘラ記号が付されている。底部から



第 83 図 13号石室出土土器実測図（1/3）

胴下半にかけては手持ちヘラケズリされている。胴部より上は回転ナデ調整されている。砂粒を含むが，青灰色に堅緻に焼成されている。



第 84 図　13号墳石室出土玉類実測図（1/1）

装身具（第84図）

瑪瑙製勾玉(1)　丁寧につくられた丁字頭の勾玉で，長さ37.2㎜，高さ22.0㎜，重量11.1gを測る。頭部は幅13.6㎜，厚さ12.1㎜で，尾は幅・厚さともに9.1㎜の大きさ。頭部の孔は，孔径2.0～3.5㎜，片方から主に穿たれている。

ガラス小玉(2)　スカイブルーを呈する。外径6.0×6.3㎜，孔径2.2㎜の大きさである。なお，耳環は紛失し現存しない。

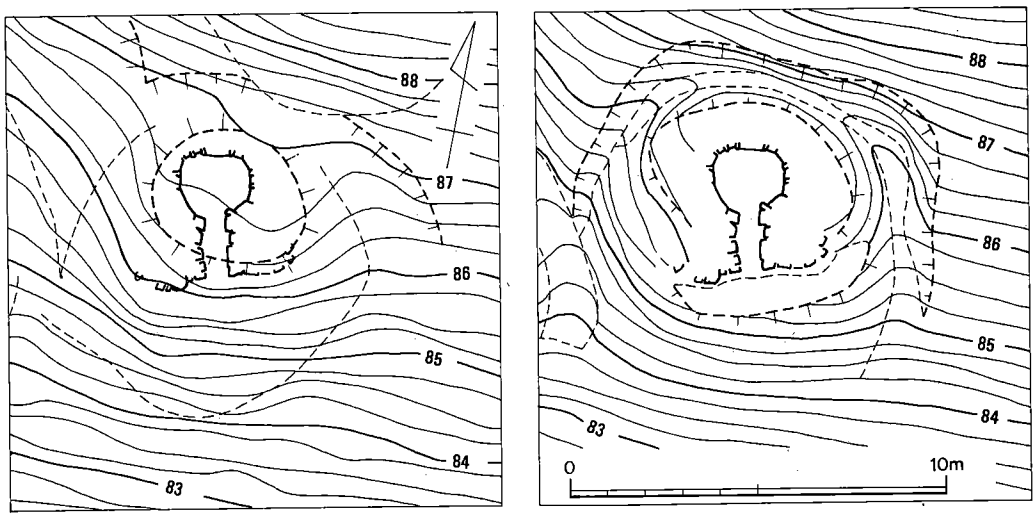
出土土器では，須恵器杯蓋が扁平であることに特徴があり，高台付杯身では３・４は踏張り気味に高台が付くものの，５は低く完全に地に着く高台である。８世紀第１四半期から第２四半期にかけての時期に比定される。また，前面出土土器は７世紀後半頃に比定されるものである。７世紀後半から８世紀中頃までの古墳の使用を考えておきたい。　（小池）

14．14号墳

墳　丘（図版69－１，第85図）

11号墳の南側で，11号墳の墳丘斜面下に位置する古墳。標高85～86mに占地している。調査前には，標高87mから84.5mにかけてふくらみがあり，直径８m，高低差2.5m程度の墳丘が観察できた。表土を剝ぐと，外径で10.0m規模の馬蹄形周溝が巡り，直径約8.0m，高低差2.0mの墳丘があり，北側寄りに主体部が構築されている。周溝は，幅1.0～2.0m，深さ1.0m前後としっかりしたもので，溝底の最高所は標高86.3mである。なお，墳丘の南側には，約4.5mの距離にわたる列石があり，前庭部もみられる。

地山整形では，やや傾斜が緩やかな部分に占地しているために，極端な掘削・盛土を行っていないが，主体部掘り方と奥側の周溝を掘る際に岩盤まで掘り込み，前庭側に盛土をして平坦



第 85 図　14号墳墳丘・地山整形面測量図（1/200）

面を広げている。また，横断面土層図にみるように，主体部掘り方と周溝の間に幅0.50m前後，深さ0.10m程度の溝を掘り込んでいる。この溝は石室壁体を中途まで構築した段階での墳丘盛土によって埋まるが，前面の列石の端につながる可能性もある。築造初期段階の排水を目的とするのかもしれない。

主体部（図版69－２・70・71，第86図）

この古墳の主体部は，主軸方位をN13°30′Wにとり南南東に開口する，単室構造の横穴式石室で，石室全長3.30mである。

主体部掘り方は，上縁での幅2.7mで，奥では岩盤の部分を深さ約1.0m掘り込み，前面側を盛土調整して平坦面を広げている。奥行2.5m分を確認した。

石室は，緑泥片岩の板石を主に用いて構築されている。玄室は，左側壁で長さ1.70m，右側壁での長さ1.55m，奥壁での幅1.50m，中央部での最大幅1.80m，玄門部での幅0.55mで，巾着形の平面プランを呈する。

奥壁では，中央に高さ75cm（石材の高さ103cm），巾65cm，厚さ18cmの板石を据えて鏡石としている。この鏡石の両脇は基底部から扁平石を小口積みし，鏡石の上は厚めの板石が積まれる。玄門の袖石は塊石状の大きめの石を立てて据えられる。左袖石では高さ60cm（石材の高さ90cm），幅35cm，厚さ30cmの石を，右袖石では高さ35cm（石材の高さ50cm），幅40～60cm，厚さ25cmの石が据えられている。左側壁は基底部から数段にわたって長めの扁平石を渡していて，左側壁は角張った壁面を成す。右側壁でも，鏡石と袖石の上面に相当する面より下部は比較的広めの板石を使用していて，膨らみ気味に積み上げられる。それより上は，左右側壁ともにやや

小振りな石を小口積みで，持ち送りに積まれる。壁体は右側奥で最も良く残り1.25mの高さが残る。玄室床面は，扁平石で完全に敷き詰められている。

玄門は，床面で幅0.60mだが，右袖石が内側に倒れて，幅0.55mになっている。玄門には，長さ55cm，幅30cm，厚さ10cmの扁平石を置いて，框石としている。

羨道部は，左側壁で1.60m，右側壁で1.70mの長さで，羨門部では幅0.67mを測る。羨門部は扁平石の小口積みで築かれる。左右側壁とも，羨門から0.45m内に入った所には；玄門の袖石より一回り小さめの塊石が立てて据えられている。右側では高さ25cm（石材の高さ50cm），幅50cm，厚さ20cmの石である。この石の間は0.65mで，床面に長さ65cm，幅30cm，厚さ6cmの扁平石が置かれて仕切石のようにしている。また，この石の奥側は幅0.80mと広めになり，壁は基底部から小口積みされていて，前室を意識した構造をなしている。袖石と羨道中途の袖石状の石の上には，長めの扁平石を渡して架けられていて，さらに上はやや雑な積み方になっている。なお，羨道部の壁体は約1.0mの高さで残っている。

羨門からは左右に列石が続いており，小口積みで5～6段残っているが，緩い弧を描いて後方へ反り，端の方は積み方が少なめになっていく。

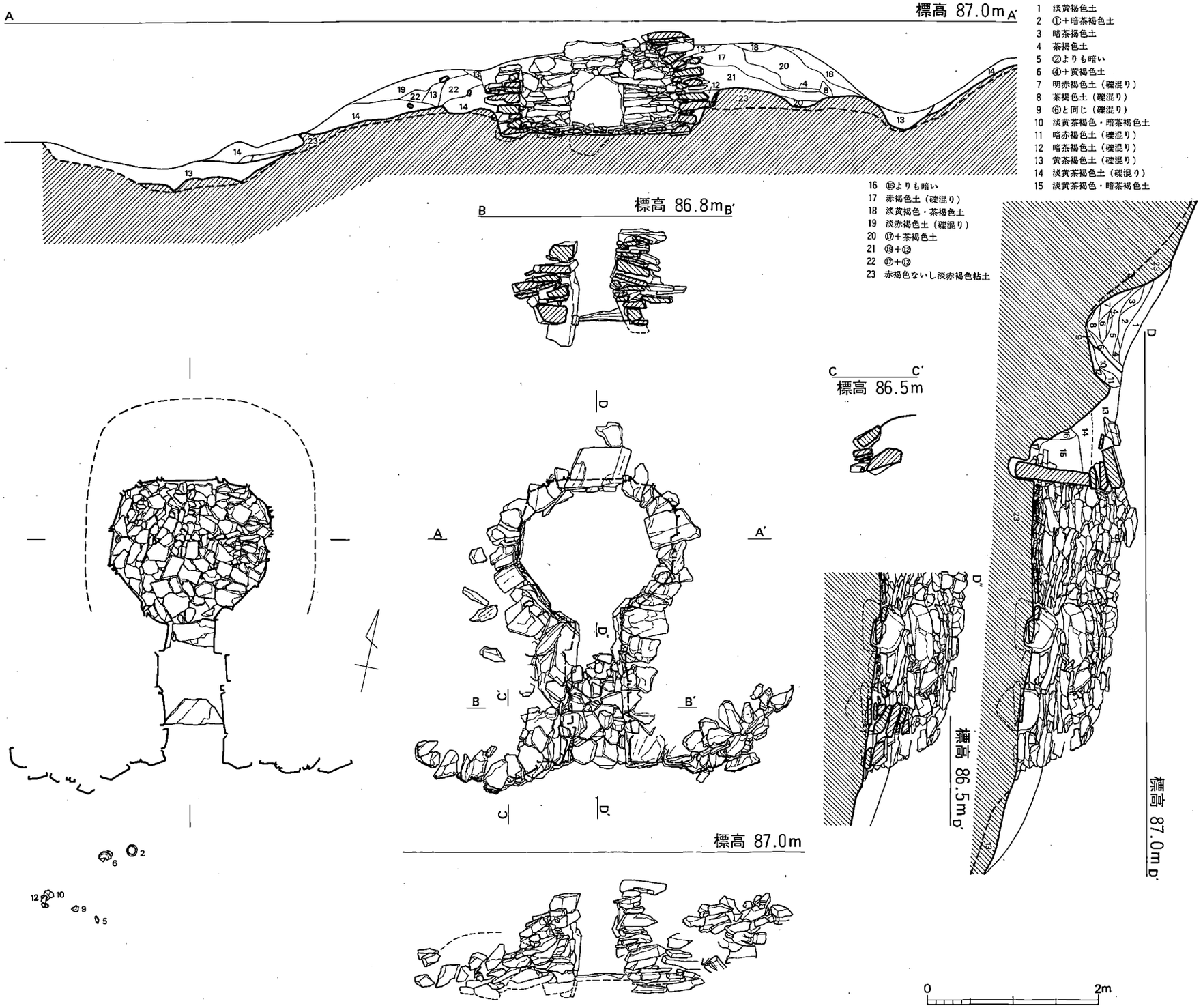
閉塞は，主に羨門側の仕切石の上から羨門にかけて積み上げられ，高さ0.50m程残っている。内側の崩れたような石は前室風の部分の中途にまで及んでいる。間に土砂を含まない丁寧な積み方の閉塞である（図版71）。

出土遺物（図版72，第87・88図）

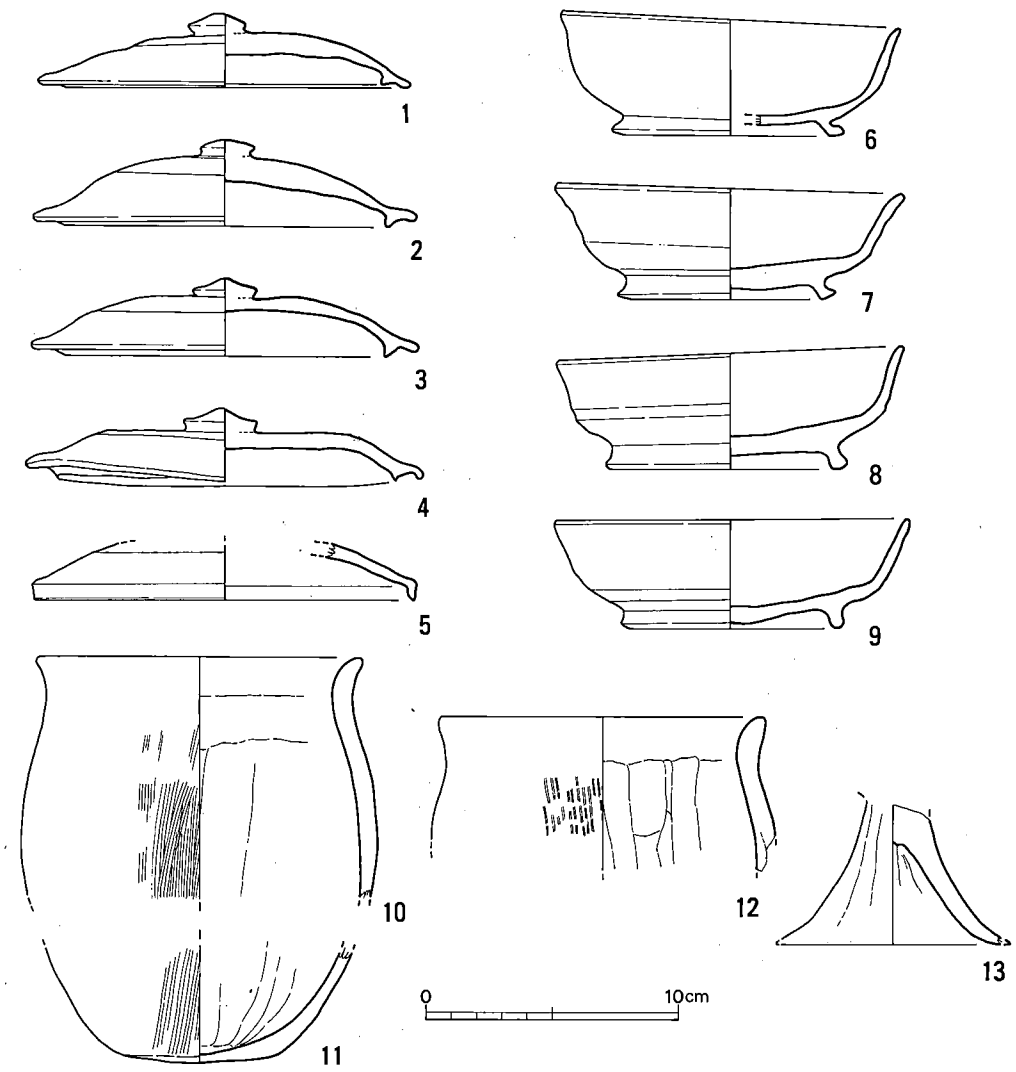
石室内からはガラス小玉1点のみ出土し，前庭部の左側で列石の前面から0.8～1.8mの部分に，須恵器杯蓋・杯身，土師器甕片などが散在していた。

前庭部・周溝出土土器（第87図）

須恵器杯蓋（1～5）　5点ともに前庭部左側から出土した。1～4は，口縁部に身受けのかえりがあり，宝珠形のつまみが天井部につく杯蓋で，天井部外面は回転ヘラケズリされている。1は口径14.8cm，器高3.0cm，かえりの径12.6cmで，かえりの端は口縁部端とほぼ同じ高さである。胎土に砂粒を含み，堅緻な焼成で暗灰色を呈する。2は口径15.3cm，器高3.4cm，かえり径12.8cmで，受け部端は口縁部端より少し下に出る。やや軟かい焼成で青灰色を呈する。3は口径15.4cm，器高3.1cm，かえり径12.8cmで，かえり端は口縁部端より少し下に出る。胎土に砂粒を含み，堅緻な焼成で暗灰色を呈する。4は平坦な天井部に扁平なつまみが付く。口径15.8cm，器高3.1cm，かえり径13.5cmで，口縁部は外方にせり出す。胎土に砂粒を含み，堅緻な焼成で黒灰色を呈する。5は，天井部を欠くが鳥嘴状口縁部をもつ杯蓋で，復原口径15.2cmの大きさ。天井部外面は回転ヘラケズリ痕が見られる。細砂粒を多く含み，堅緻な焼成で青灰色を呈する。



第 86 図　柿原D地区14号墳石室実測図（1/60）



第 87 図　14号墳前面出土土器実測図（1/3）

須恵器杯身（6～9）　いずれも高台の付く杯身である。6・7は外方へ反り気味に，8・9は踏張り気味に高台が付いている。6は，口径13.5cm，器高4.6cm，高台径9.2cmの大きさ。ややあまい焼成で，灰色の色調を呈する。7は，口径13.9cm，器高4.4cm，高台径9.7cmの大きさ。堅緻な焼成で，暗青灰色の色調を呈する。8は，口径13.8cm，器高4.6cm，高台径9.6cmの大きさ。体部に沈線状の凹みが巡る。胎土に細砂粒を多めに含み，堅緻な焼成で暗青灰色を呈する。

9は，口径14.1cm，器高4.3cm，高台径8.9cmの大きさ。焼成は悪く暗黄灰色を呈する。

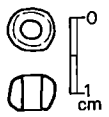
土師器甕(10～12)　前庭部左側から出土した小形甕。接合はしないが10・11は同一個体の可能性がある。10は，復原口径13.0cm，残存高9.4cm，胴最大径14.2cmの大きさで，口縁部は肥厚せずに外反する。口縁部はヨコナデされ，胴部外面は縦方向のハケ目調整，内面はヘラケズリされている。11は，残存高4.5cmの底部破片で，レンズ状の丸底で底径は6.1cm，外底面はナデ調整，外面は縦方向のハケ目調整，内面はヘラケズリされている。胎土に砂粒・褐色粒を含み，やや良好な焼成で淡褐色を呈する。

12は，10の口縁部よりも肥厚気味で，外反は緩めである。復原口径13.0cm，残存高6.0cmの大きさで，胴部外面は縦方向の粗いハケ目調整，内面はヘラケズリされている。褐色粒を胎土に含み，良好な焼成で淡褐色を呈する。

土師器高杯(13)　周溝II区から出土した脚部破片で，復原裾径9.3cm，残存器高5.6cm。径2.0cmの柱状部から緩やかに裾が広がる。外面はヘラミガキというよりはヘラケズリで，内面にはシボリ痕がみられる。褐色粒を含む精良な胎土で，淡い明褐色に焼成されている。

石室出土玉類（第88図）

ガラス小玉　玄室内床面から出土した。外径は5.5×6.2mm，厚さ4.7mm，孔径2.1×2.7mmの大きさで，コバルトブルーを呈する。



第 88 図　14号墳石室出土玉類実測図（実大）

出土遺物のうち，須恵器杯蓋・身では7世紀後半に含まれるものが多いものの，5の杯蓋などは8世紀にかかる可能性がある。7世紀後半頃から使用され，8世紀まで続いたとみるべきであろう。　（小池）

15．15号墳

墳　丘（図版73－1・74，第89図）

15号墳は，斜面下段の標高82～86mの位置に築かれ，東には14号墳が，西には16号墳が接している。この14～16号墳は，斜面下段に築かれる古墳群の中では中段のグループに属する。

墳丘より斜面上方側には，切通し状の周溝が掘られるが，奥壁背面側のみで全周しない。周溝の外径は約13m，上面幅は2.5m，深さ0.3～0.4mで，周溝底の最高所は奥壁背後にあり，標高85mを測る。また，周溝端は東西両脇に所在する14･16号墳周溝端と切合うが，前後関係は分

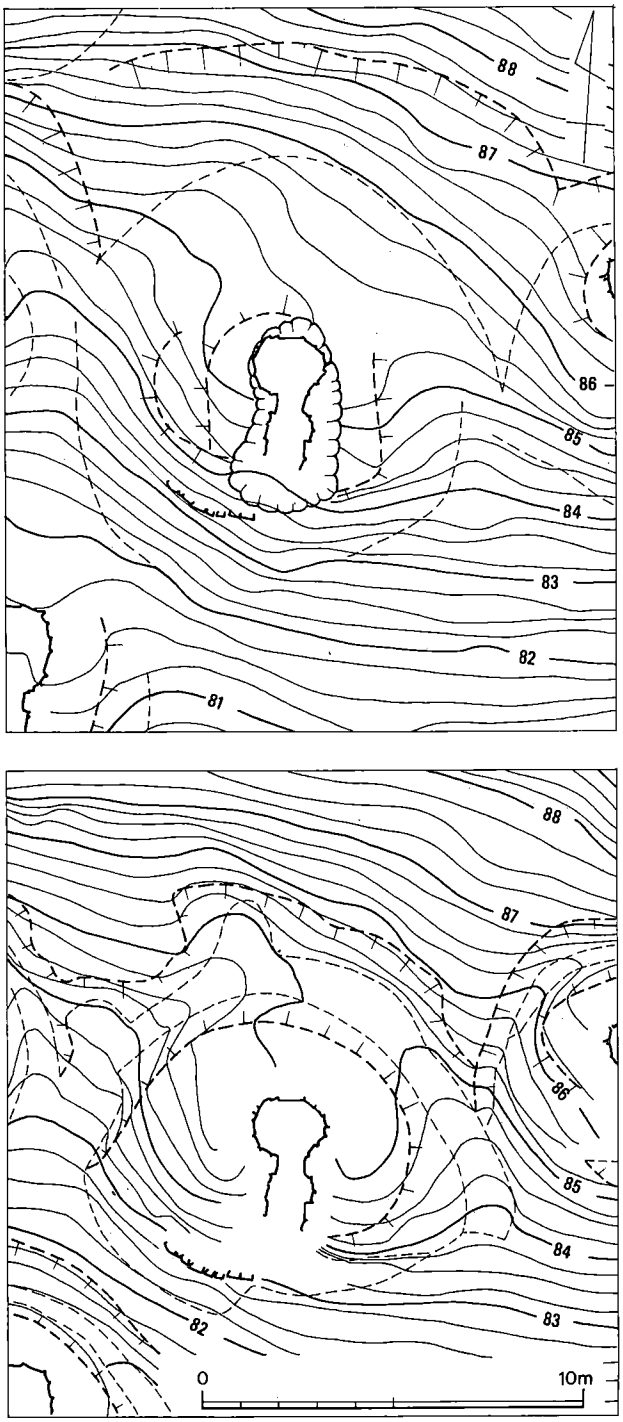
らない。

墳頂部は盗掘により陥没しているが，斜面下方側裾からの高さは約３mを測る。墳丘裾部はほぼ全周しており，直径は東西方向で約10mを測る。

主体部（図版73－２・75・76，第90図）

15号墳の主体部は複室の横穴式石室で，主軸方位をN６°20′Wにとり，ほぼ南に開口する。石室の掘り方は，不整長方形であるが，石室前面側までは掘られていない。奥壁側は1.5mの深さを測るが，奥壁基底部ではさらに一段深くなっている。

玄室は，天井部を全く失っているが，全長3.8mを測る。玄室は長さ1.43m，最大幅1.87mで，平面形は横長の扁円形を呈する。玄室奥壁は高さ80cm，幅60cmの大きい板石を立てて鏡石としている。鏡石の上部は大きい板石の平積みであるが，鏡石が石室内へ倒れているため鏡石の背面にのっかっている。奥壁現存高は1.3mを測る。左右の側壁は，基底部から板石の平積みであるが，上部のものほど大きめの石が使われている。側壁下半は水平に積まれているが上半は斜位の積みである。両壁とも断面はほぼ直立している。現存高は1.2～1.



第 89 図　15号墳墳丘・地山整形面測量図（1/200）

4mで，基底部から10～11段目まで遺存している。床面敷石は扁平割石が使われ，配列に規則性はみられないが，中央部では横位に，周壁部では縦位に並べられている。また，右袖石前面では大きな板石もみられる。玄門の袖石は，左右とも板石を立てたもので，両袖とも内傾している。玄門長0.55m，袖石間幅は0.69mを測る。玄門床面には菱形の扁平石が据えられ，仕切石としている。

前室は長さ0.57m，最大幅1.16mと狭小なもので，平面形は右側壁は弧状であるが，左側壁は直線的である。両側壁は基底部から小板石の平積みで，上部のものほど大きい。現存高は0.40～0.60mで，５～６段目まで遺存している。前室の袖石は，幅50cmほどの板石を縦位に据えているが，右側のものは中位にて折損している。現状では，裾石の上部には石積みはみられない。袖石間幅は最大１mを測るが，仕切石はない。

羨道部は短く，前室袖石に接して側壁の石が一枚平積みされているだけである。

閉塞は前室にて行われている。扁平割石を雑然と積んだもので，基底部での長さは0.60mを測り，現存高は４～５段積みで0.20mほどである。

石室の前面には列石が二重に廻っている。右側のものは羨道端より前室側壁背後にかけて築かれ，内護列石状に基底部から高く築かれている。左側のものは，羨道端と墳丘裾から延びており，羨道からのものは玄室背面まで，墳丘裾のものは2.5mほど直線的に延び，そこで石室側へ屈折して1.5mほど奥壁側へ延びている。前者は内護列石，後者は墳丘裾部の土留めであろうか。

これら石室，および列石に使用された石はほとんど緑泥片岩である。

遺物出土状況（図版77，第91・92図）

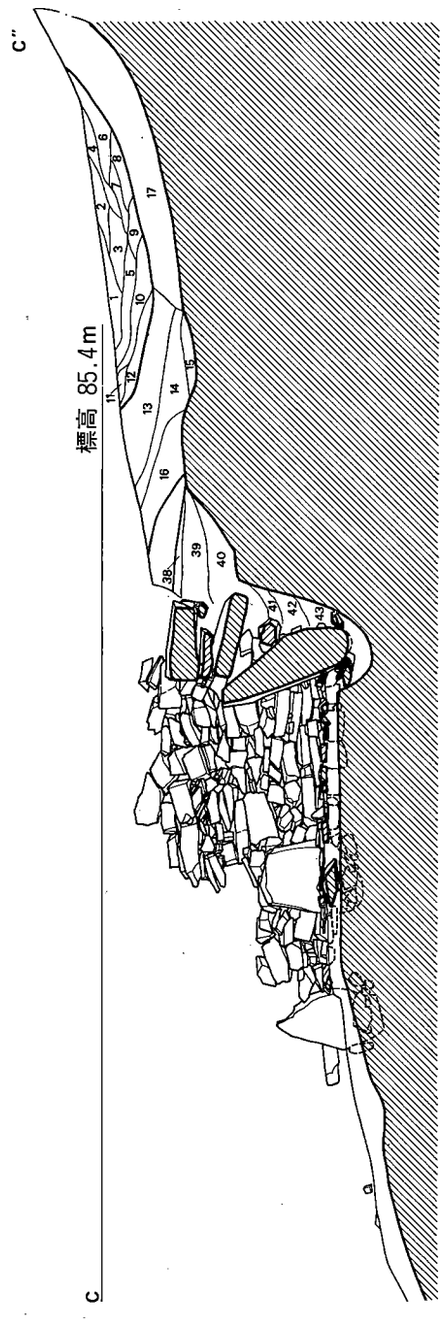
15号墳の出土遺物は，鉄刀子と土器類があり，石室・墳丘・周溝から出土している。石室内出土品は，玄室が開口していたためほとんど前室からのもので，刀子も前室からの出土である。墳丘出土品は土師器甑片で，石室左壁側の内護列石背後にて出土した。周溝内出土のものは主として石室左背後のII区出土で，一部の破片は９・16・23号墳出土破片と接合するものもある。

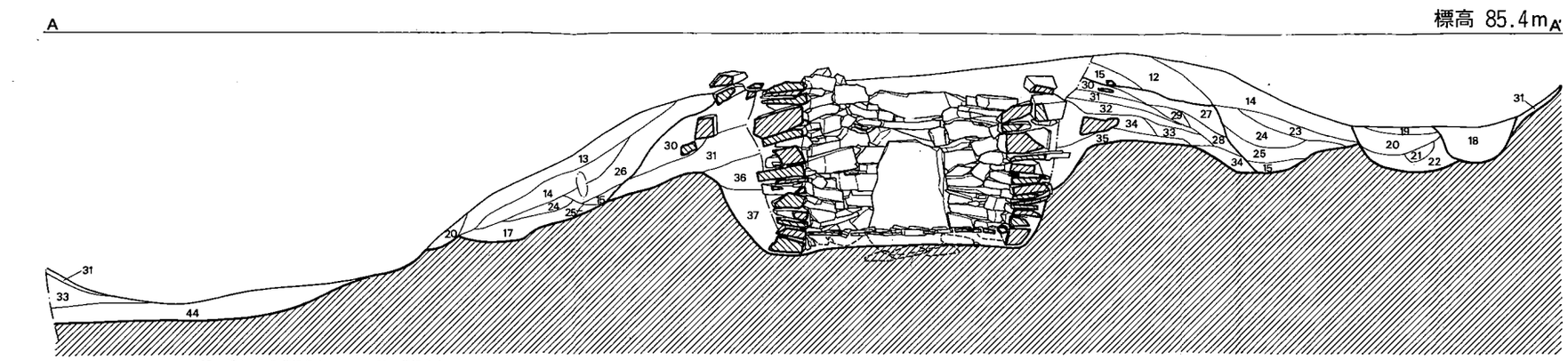
前室からは供献土器が計23個出土しており，盗掘はこの箇所には及ばなかったものであろう。主として玄門袖石と閉塞の間から出土し，一部壊れた閉塞石の下から出土したものもある。これらを種別に列挙すると次のようになる。

須恵器平瓶１　　須恵器杯蓋７　　須恵器杯身６
土師器杯蓋４　　土師器杯身４　　土師器皿１

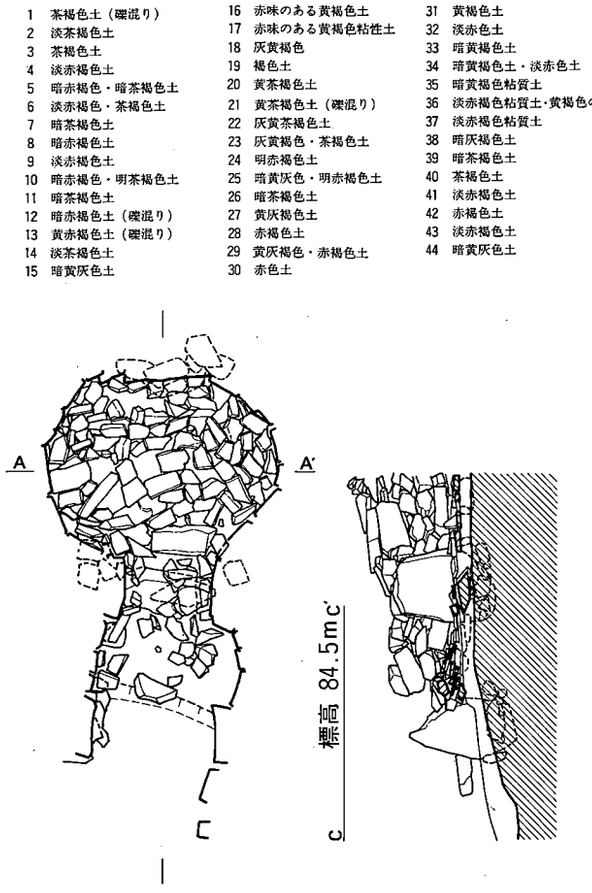
また，蓋と身を組合せると，都合10セット分ができる。　　（新原）

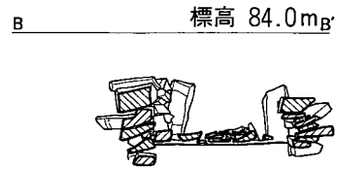
出土遺物（図版78・79，第93～97図）

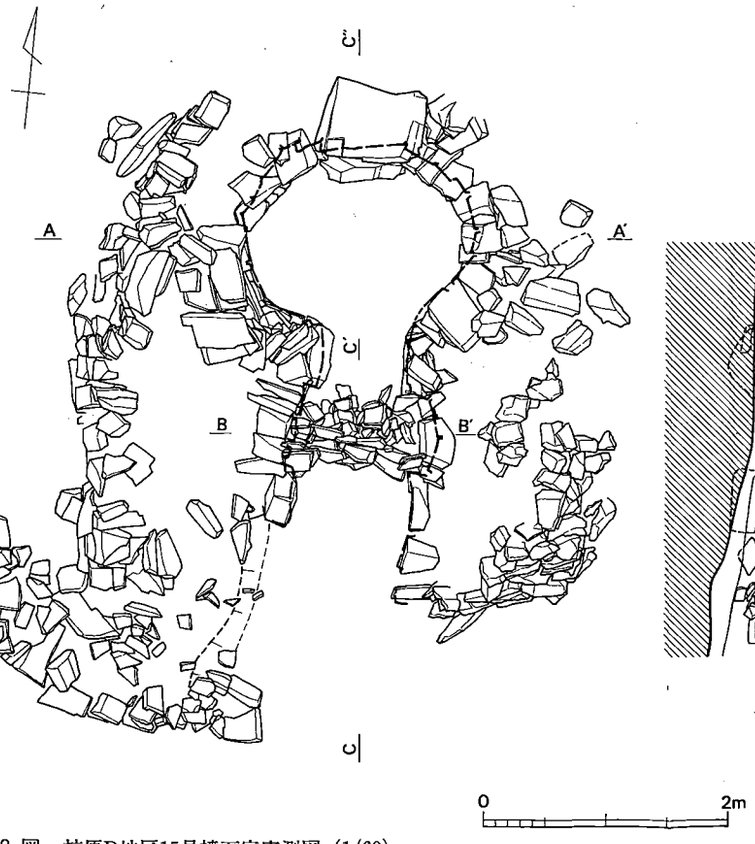


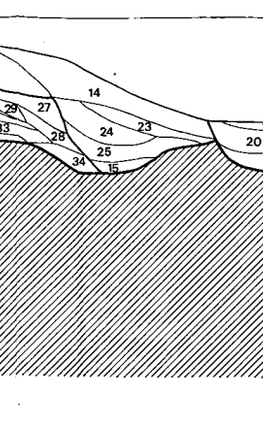


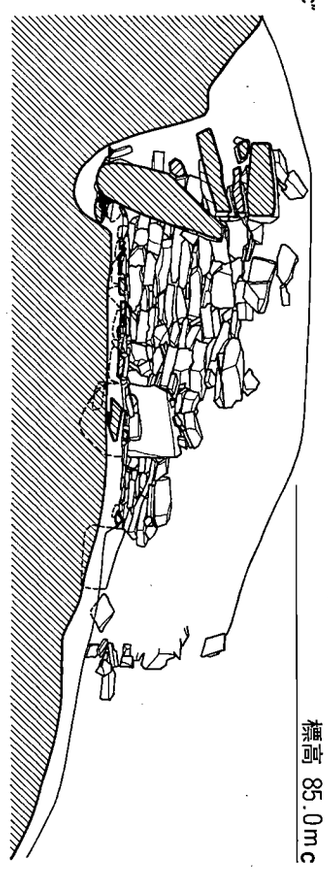
1 茶褐色土（礫混り）
2 淡茶褐色土
3 茶褐色土
4 淡赤褐色土
5 暗赤褐色・暗茶褐色土
6 淡赤褐色・茶褐色土
7 暗茶褐色土
8 暗赤褐色土
9 淡赤褐色土
10 暗赤褐色・明茶褐色土
11 暗茶褐色土
12 暗赤褐色土（礫混り）
13 黄赤褐色土（礫混り）
14 淡茶褐色土
15 暗黄灰色土
16 赤味のある黄褐色土
17 赤味のある黄褐色粘性土
18 灰黄褐色
19 褐色土
20 黄茶褐色土
21 黄茶褐色土（礫混り）
22 灰黄茶褐色土
23 灰黄褐色・茶褐色土
24 明赤褐色土
25 暗黄灰色・明赤褐色土
26 暗茶褐色土
27 黄灰褐色土
28 赤褐色土
29 黄灰褐色・赤褐色土
30 赤色土
31 黄褐色土
32 淡赤色土
33 暗黄褐色土
34 暗黄褐色土・淡赤色土
35 暗黄褐色粘質土
36 淡赤褐色粘質土・黄褐色の互層（礫混り）
37 淡赤褐色粘質土
38 暗灰褐色土
39 暗茶褐色土
40 茶褐色土
41 淡赤褐色土
42 赤褐色土
43 淡赤褐色土
44 暗黄灰色土



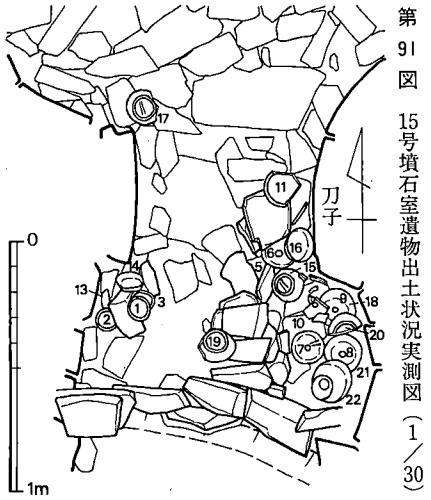




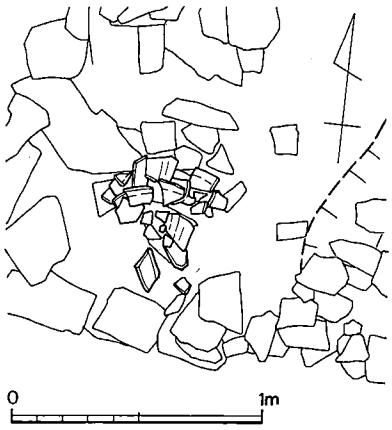




第 90 図　柿原D地区15号墳石室実測図（1/60）



第91図　15号墳石室遺物出土状況実測図（1／30）



第92図　15号墳左側列石遺物出土状況実測図（1/30）

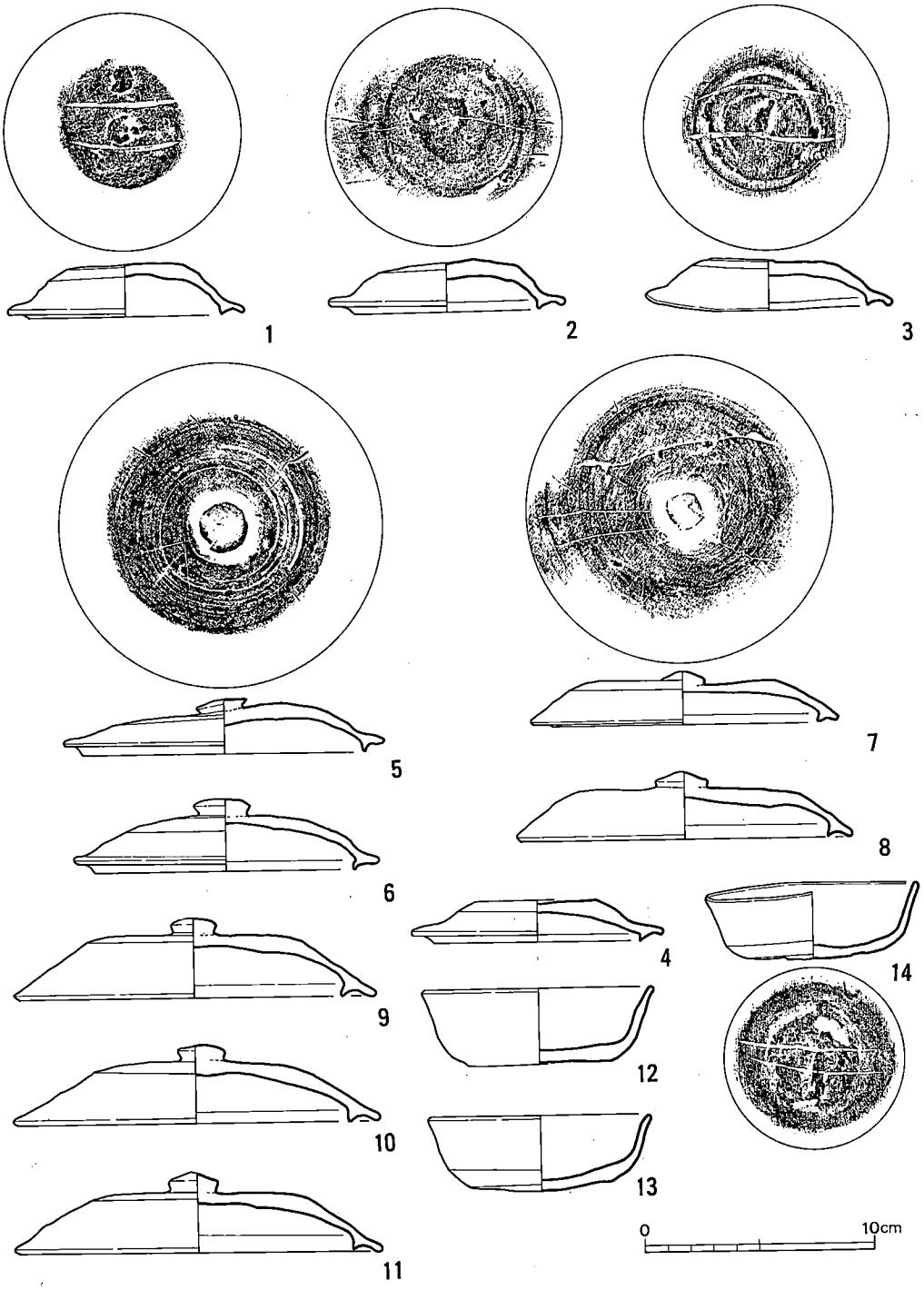
石室内出土土器（第93・94図）

須恵器杯蓋（1～7）　1～4は小形の杯蓋で，口縁部に口縁端より下に出る身受けのかえりがある。天井部外面につまみがなく，ヘラ切り離しの後ナデが加わっているが，3はやや雑なナデ。1・3は二本線のヘラ記号，2は単直線のヘラ記号が付されている。いずれも細砂粒を含む胎土で，堅緻に焼成されている。1は口径10.3cm，器高2.3cm，かえり径8.4cm，2は口径10.4cm，器高2.3cm，かえり径8.1cm，3は口径10.7cm，器高2.3cm，かえり径8.6cm，4は口径11.0cm，器高1.9cm，かえり径9.0cmの大きさである。

5・6は，口縁部に口縁端より下に出る身受けのかえりがあり，天井部に扁平な宝珠形つまみが付く。回転ヘラケズリされる天井部には丸味がある。堅緻に焼成され青灰色を呈している。5は口径14.0cm，器高2.5cm，かえり径12.3cmの大きさで，天井部外面に×字のヘラ記号が付されている。6は口径13.3cm，器高3.2cm，かえり径11.4cmの大きさである。

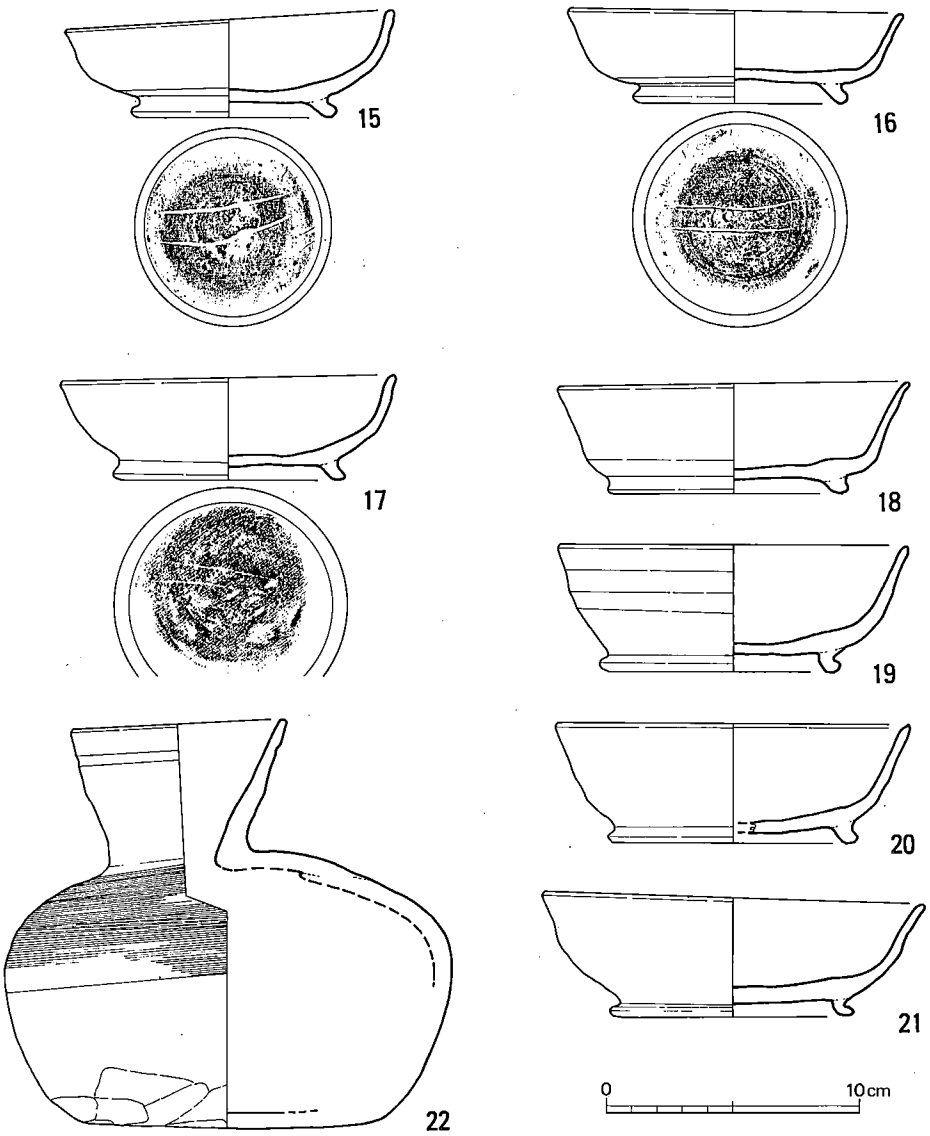
7は身受けのかえりが口縁端と同じ高さで，天井部に小さめの宝珠形つまみが付く。天井部は平坦である。口径13.5cm，器高2.3cm，かえり径11.7cmの大きさで，天井部外面に二本線のヘラ記号が付され，堅緻な焼成で灰色を呈している。

似非須恵土師器杯蓋（8～11）　平坦な天井部外面は回転ヘラケズリされ，内面は不定方向のナデ，つまみが小さめである点以外須恵器と同様なつくりである。しかし，胎土がより精良であり，土師器としては良好な焼成だが赤褐色を呈していて，須恵器の焼成としては稚拙である。8は口径14.7cm，器高2.9cm，かえり径12.6cmの大きさ。器面が風化して調整手法は不明。9は復原口径15.8cm，器高3.5cm，かえり径12.9cm，10は口径16.0cm，器高3.5cm，かえり径12.9cm，11は口径16.1cm，器高3.5cm，かえり径13.0cmの大きさである。



第 93 図　15号墳石室出土土器実測図 1 (1/3)

須恵器杯身(12～22)　12～14は小形の杯身で，１～４の杯蓋に対応するものであろう。口縁部は外反する。外底面はヘラ切り離しの後ナデが加わるものの，13・14はやや雑でヘラ先でナデつけたようになり，12は板状圧痕が，14は二本線のヘラ記号が付いている。12は口径10.2cm，器高3.3cm，13は口径9.8cm，器高3.3cm，14は口径9.3cm，器高3.3cmの大きさ。いずれも堅緻に焼成され，青灰色を呈しているが，14には焼け歪みがある。



第 94 図　15号墳石室出土土器実測図２（1/3）

第 95 図　15号墳周溝II区出土土器実測図１（1/6）

15～17は，高台付き杯身で丸味のある体部はやや浅めである。外底面に二本線のヘラ記号が付されている。15は口径13.0cm，器高4.1cm，高台径8.2cm，16は口径13.4cm，器高3.7cm，高台径8.5cm，17は口径13.3cm，器高4.0cm，高台径9.2cmの大きさ。15･16は堅緻に焼成され青灰色を呈し，17はややあまい焼成で灰色を呈している。

非須恵土師器杯身(18～21)　高台付き杯身で，調整手法は須恵器と変らないが，胎土は精良で，赤褐色・明赤褐色を呈する焼成である。18はやや角張った浅めの体部をもち，口径13.9cm，器高4.3cm，高台径9.5cmの大きさ。19～21は丸味のあるやや深めの体部をもつ。器面風化のため調整手法は不明。19は口径13.8cm，器高5.0cm，高台径9.5cm，20は口径14.0cm，器高4.8cm，高台径9.8cm，21は口径15.1cm，器高4.8cm，高台径9.6cmとほぼ同規模の大きさである。

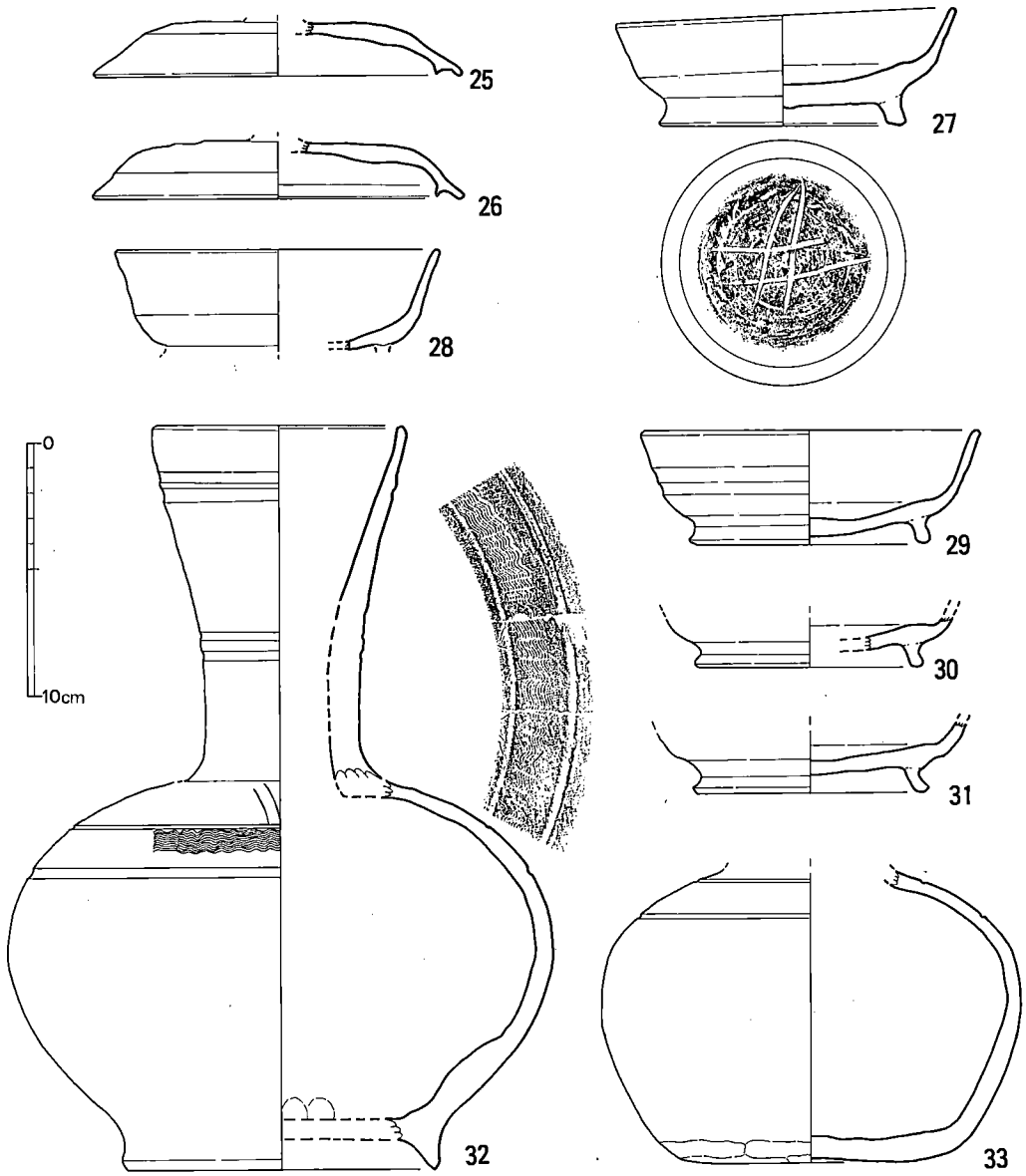
須恵器平瓶(22)　器高16.1cmのうち11.0cmを体部が占める。胴最大径は17.7cmで体部天井の真中より少し下がった部分に口頸部が付される。口径は8.6cm，頸部径は5.5cm。口縁部下に１条の沈線が巡る。体部は上半がカキ目調整，下半はヘラケズリの後ナデられているようだが，底部には手持ち静止ヘラケズリ痕がみられる。胎土に砂粒を多く含み，暗茶褐色を呈する堅緻な焼成である。

周溝出土土器（第95・96図）

須恵器甕(23・24)　23は復原器高62.2cm，口径38.6cm，胴最大径53.7cmに推定できる中形甕で，口頸部は大きく外反して開く。口縁部下に１段の凸帯を巡らせているが，頸部までは回転ヨコナデ調整されている。胴部は器高のほぼ中位に最大径の位置があり，肩はさほど強く張らない。外面は格子目状の縦方向平行タタキ，内面は同心円当て具痕がみられる。胎土に小さな砂粒を多く含み，暗灰色・灰白色を呈する堅緻な焼成だが，焼け歪みがある。

24は，胴上半と下半がうまく接合しないが図上復原した。復原器高48.4cm，口径25.0cm，胴最大径45.0cmの大きさで，胴最大径は器高の中位よりやや上にある。口頸部は大きく開くが長くはない。口縁部下に１段の凸帯を巡らせるが，口縁部上面を少しつまみ上げたようにしているので，わずかに内弯気味にまとまる。口頸部は内外面ともに回転ナデ調整されているが，凸帯下に十字形と个形のヘラ記号が付されている。肩部外面は平行タタキ目のあとカキ目調整，胴部下半の外面は平行タタキ目のあとカキ目がかるく入り，回転ナデのようになっている。内面は肩で同心円タタキ目と，胴最大径の部分では太めの平行タタキと同心円タタキが重なり，胴下半は平行タタキ，内底面は平行タタキ目の原体小口部を用いたタタキ目（圧痕）がみられる。胎土に砂粒を若干含み，堅緻な焼成で暗灰褐色を呈している。

須恵器杯蓋(25・26)　口縁部に身受けのかえりをもつが短い。天井部は平坦で外面は回転ヘラケズリされている。つまみは付くが，この破片では欠失している。25は復原口径14.6cm，残存器高2.2cm，26は復原口径14.8cm，残存器高2.3cmの大きさ。２点ともに砂粒を若干含み，堅緻に焼成されている。



第 96 図　15号墳周溝II区出土土器実測図 2 (1/3)

須恵器杯身(27～31)　いずれも高台を有す坏身だが，28は高台が剝離している。27・28は焼成が軟らかく非須恵土師器に近いが，胎土・調整などは須恵器と変わらない。27は，肉厚の底部から直線的に口縁部が立ち上がり，体部は低めである。外底面はヘラ切り離しのまま放置され井字形のヘラ記号が付されている。復原口径13.5cm，器高4.4cm，高台径9.8cmで，緑灰色を呈する。28は復原口径12.8cm，残存器高3.9cmで，茶褐色を呈する。

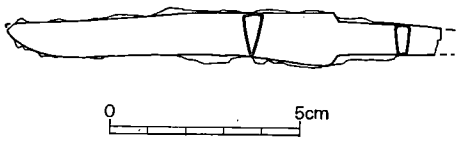
29～31は堅緻に焼成されている。29はやや深めの体部をもち，復原口径13.5cm，器高4.5cm，高台径9.5cmの大きさ。31は外方に反り気味の高台が付く。

須恵器長頸壺(32)　器高29.7cmで，口頸部の高さ14.0cm，口径10.0cm，胴最大径21.7cm，高台径12.6cmの大きさの長頸壺である。口頸部は径6.0cm余りの頸部から緩やかに口縁部が広がって立ち上がり，口縁部はわずかに内弯する。ヨコナデ調整されて口縁部下と頸部に各2条の浅い沈線が巡らされている。体部は扁球形を呈していて，高さ1.0cm余りの高台が付く。全体にヨコナデ調整され，肩部に2条の浅い沈線と，沈線間に板状原体小口による波状文が巡る。また肩部沈線から頸部に向かう2条の細いヘラ描き沈線がある。ヘラ記号であろうか。胎土には砂粒を多く含む。焼成にムラがあり，淡青灰色ないし緑灰色を呈している。

須恵器壺(33)　口頸部を欠くが，細頸壺であろう。23号墳周溝Ⅳ区出土破片とも接合した。残存器高11.7cm，胴最大径16.6cm，底径11.1cmの大きさで高台は付かない。肩部に2条の沈線が巡る。体部外面は回転ヨコナデ調整され，底部は静止ヘラケズリされている。わずかに内窪みになる底面にはナデが加わっている。砂粒を若干含む胎土で，焼成良好，淡い黄灰色ないし灰色を呈している。

鉄製品

鉄刀子（第97図）　右袖石の近くから出土した。基部端を欠くが，残存長12.5cm，刃部長8.7cm，関幅1.3cm，刃部幅1.0cm強，背の厚さ0.3～0.5cm。刃部はわずかに内反り気味である。関から明瞭な段をなして幅0.7～0.9cm，厚さ0.4cmの茎部に続くが，茎部に木質は遺存しない。



第 97 図　15号墳石室出土鉄器実測図（1/2）

鉄　滓（図版79）　周溝Ⅱ区北西部出土の，親指大の鉄滓1点がある。重量13.9gを測る。

石室出土須恵器では，口径が小さくつまみをもたない杯蓋・身があり7世紀中頃に比定される。それ以外のもの7世紀後半から末に比定されよう。また周溝Ⅱ区出土土器も7世紀後半から末の時期に比定されるが，9号墳前面に相当する位置にあるので，周溝出土遺物はむしろ9号墳からもたらされたと考えるべきであろう。　（小池）

16. 16号墳

墳　丘（図版80，第98図）

群集する古墳群の略中央部に位置し，標高85.5～83.0mに占地する。表土面でも明瞭な陥没穴が認められ，比較的残存状況良好な古墳である。

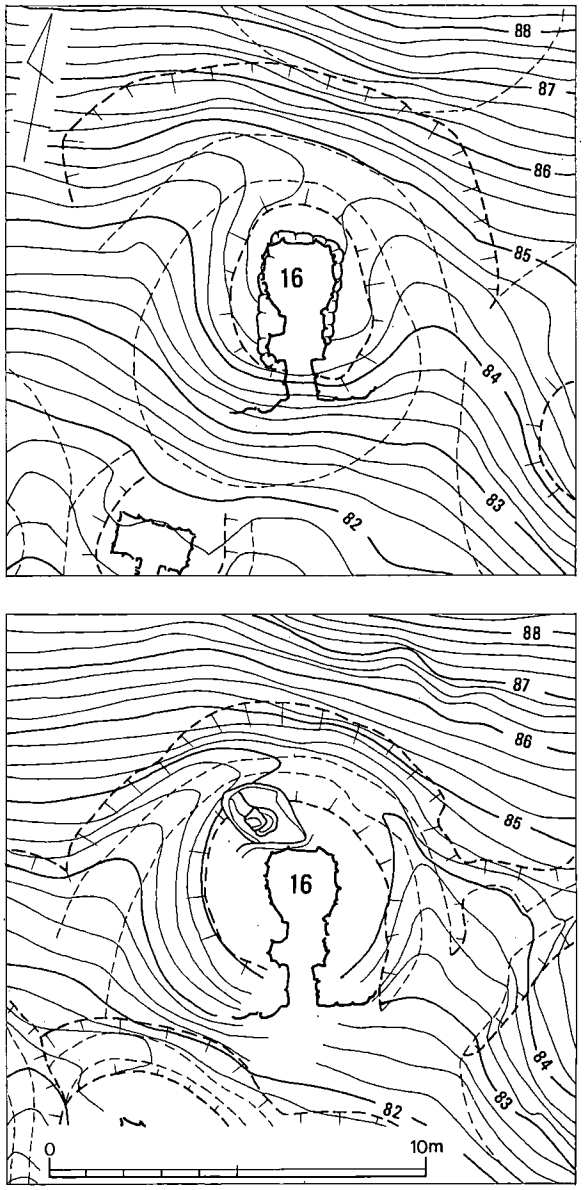
墳丘の規模は，周溝外径の上端で10.5m，周溝内径上端で5.5m，周溝幅は1.8～3.6mを測る。墳丘の高さは，玄室奥壁側が最も高く約２mとなる。周溝の平面形態は半円形を呈し，Ⅳ区の先端部は15号墳と共有している。周溝底の最高所も玄室奥壁側で標高84.1mとなる。

地山整形は大規模に施工されているが，最深部は1.7m程掘削し平坦面を造っている。また玄室奥壁側は，石室架構を意識してかテラス状の段を造っている。

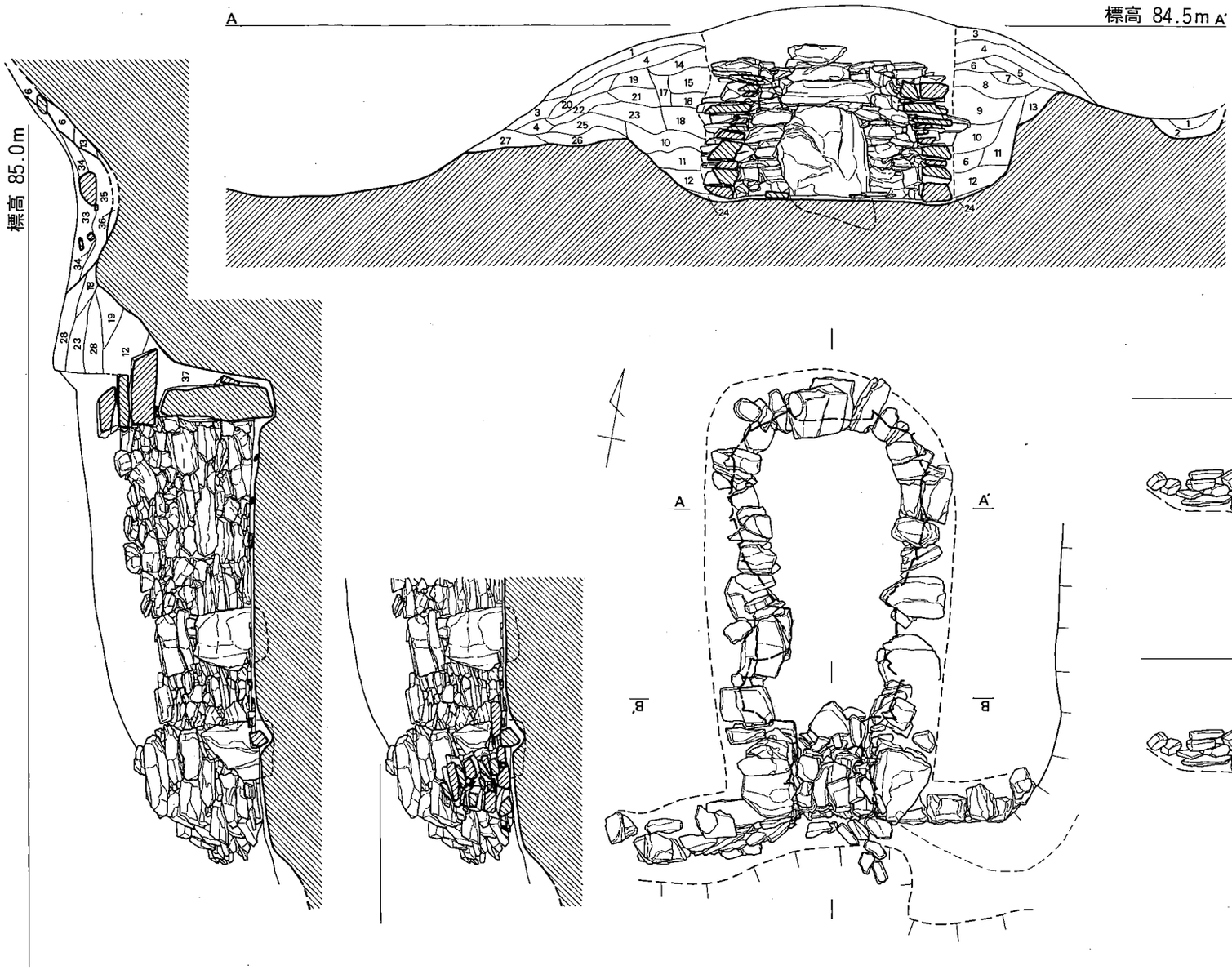
墳丘盛土は排土をあてているが，標高83.8～84.2mにかけて上下に盛土の相違が若干認められる。

主体部（図版81～83，第99図）

主軸方位N10°Wをとり，南に開口する複室構造の横穴式石室である。石室全長は4.4mを測り，使用している石材のほとんどが緑泥片岩で，袖石の一部に砂質の緑泥片岩か結晶片岩を用いている。



第 98 図　16号墳墳丘・地山整形面測量図（1/200）



1 淡黄褐色土（礫混り）
2 淡黄褐色土（礫混り）
3 淡茶灰色土
4 淡黄灰色土
5 ④＋黄灰色粘質土
6 茶褐色土
7 ⑥＋淡茶灰色粘質土
8 ⑥＋③（礫混り）
9 ⑦よりも粘性あり（礫混り）
10 淡黄灰色・茶灰色粘質土
11 淡黄灰色・茶褐色粘質土
12 茶褐色土（礫混り）
13 暗茶灰色土
14 ④＋淡褐灰色土
15 ⑭より粘性あり
16 黄褐色・灰褐色粘質土
17 黄褐色・灰褐色砂質土
18 淡茶灰色・淡赤褐色粘質土
19 淡茶灰色・褐色土
20 ⑲＋淡黄褐色粘質土
21 淡黄褐色・淡褐灰色土
22 淡褐灰色・淡黄灰色粘質土
23 茶灰色・褐灰色粘質土
24 淡茶灰色粘質土
25 淡灰褐色・淡黄灰色粘質土(礫混り)
26 淡黄褐色・褐色土
27 淡黄褐色・褐色粘質土（礫混り）
28 茶灰色粘質土（礫混り）
29 暗茶褐色土（礫混り）
30 ㉙＋褐色土（礫混り）
31 ㉙＋淡茶灰色粘質土
32 ㉙より褐色土を多く含む
33 明淡黄灰色土（礫混り）
34 淡茶褐色土
35 灰褐色土（礫混り）
36 茶灰色土
37 明茶褐色土

第 99 図　柿原D地区16号墳石室実測図（1/60）

玄室は，長さが1.86m，幅は奥壁側で1.60m，中央で1.92m，玄門側で1.13mを測り，円形に近い蒲鉾形を呈す。奥壁は，高さ95cm（石材は113cm），幅90cmの緑泥片岩の板石を中央に据えて鏡石としている。その上には，鏡石より一回り小振りの板石を乗せているが，端部は前述のテラスに架けている。更に上方は，順次小振りとなる板石を積み上げている。鏡石の両脇は，扁平石を基底部より小口積みして，持ち送りの壁体をなしている。最高所で1.5mに達している。左側壁も基底部より小口積みして，内弯気味に持ち送りした壁体となる。基底部より4～5段目までが比較的大振りな扁平石を使用し，10段程で1.3m程の高さとなる。右側壁は左側壁と略同様であるが，壁面は丸味を有して内弯する。床面は敷石が存したと思われるが，僅か一部しか旧態を保っていない。

左袖石は，高さ55cm（石材は73cm），幅60cm，厚み40cmの砂質の緑泥片岩を据えている。袖石の上方にも同じ石材でもって，玄室側壁よりも大振りな扁平石を積み上げている。右袖石は崩落しているが，数個の根石が残存し，両袖石間は約0.65m程となろう。框石は約半分程に割れたと思われ，長さ33cm，幅8cm，高さ4cmが残存していたが，さして堅固に据えているとは言い難く，無きに等しい。

前室は，長さ0.70m，最大幅1.57mの広さで，中央部が突出する長方形の平面形態を呈す。左側壁は基底部より扁平な緑泥片岩を小口積みして，上部が若干内方にせり出しているものの内弯気味の壁体となる。右側壁は左側と略同じであるが，玄門袖石の崩落により一部崩れ落ちている。床面は薄手の緑泥片岩をやや粗雑に敷いている。

前室左袖石は，高さ50cm（石材は72cm），幅63cm，厚み30cmの砂質の緑泥片岩を堅固に据えている。右袖石は，高さ46cm（石材は75cm），幅43cm，厚み38cmの角張った結晶片岩を据えている。両袖石間は0.64mを測る。框石は，高さ10cm（石材は20cm），長さ64cm，幅15cmの緑泥片岩を袖石間ぎりぎりに堅固に据えている。

羨道は，長さ0.98m，最大幅0.80mの広さで，長方形の平面形態を呈す。両側壁共に，基底部より扁平石を小口積みして，略垂直な壁面をなしている。基底部よりも上方が大振りな石材を使用している。

羨道に直交して墳丘前面に列石が左右に延び，左側が1.90m，右側が1.55m伸展している。最も良好な箇所で9段残存し，高さは1.15mに達している。

閉塞は，墳丘前面列石から框石までの長さ0.70mに及ぶ。扁平な緑泥片岩を8段積み上げて，高さは0.70mを測る。閉塞に使用された石材の一部は前室側にも崩れ落ちていたが，羨道部を略埋め尽した状態であった。

玄室北西隅から北方に伸展する不整形な土壙を墳丘下より検出したが，石室構築時に本墳と関連した遺構である可能性を残すけれども，決め手を欠くため項を改めて説明を加えたい。

遺物出土状況

玄門内床面は若干荒らされていたが，鉄製品，丸玉・小玉４点と須恵器高杯片が出土した。

前室からは玄室内の高杯と接合する須恵器の他に，左側壁際に須恵器壺と土師器椀が壊れた状態で出土した。

周溝Ⅲ区からは，略完形となる壺と土師器の甕が若干出土した。　　（武田）

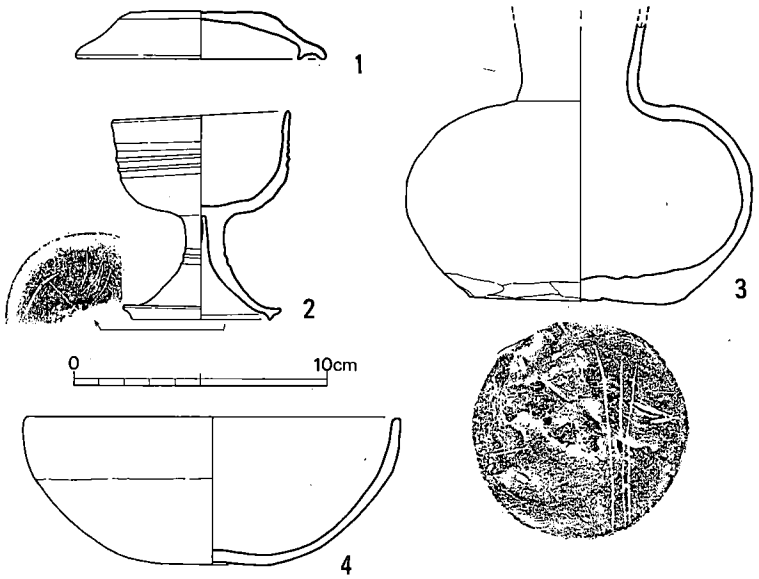
出土遺物（図版84，第100～104図）

石室内出土土器（第100図）

須恵器杯蓋(1)　身受けのかえりをもつ小形の杯蓋で，つまみはない。天井部は平坦で，外面はヘラ切離しの後ナデが加わる。口径9.9cm，器高1.9cmの大きさ。砂粒をやや多めに含む胎土で，堅緻に焼成されている。前室から出土した。

須恵器高杯(2)　小形の高杯で，椀形の深い杯部とラッパ状に開く脚台部からなる。6.2cmの器高の内4.0cmを占める杯部は，筒状に口縁部が立ち上がり口径7.1cmを測る。杯部のほぼ中位に４条，脚部の中位に２条の浅い沈線が巡る。脚部は直径1.5cmの柱状部から裾を開き，裾端部はつまみ出したように尖る。裾部内面に川字状と×字状のヘラ記号が付されている。裾部外径は6.2cmを測る。胎土に砂粒を含むが，堅緻に焼成されて黒灰色を呈している。脚部は玄室から，杯部は前室から出土した。

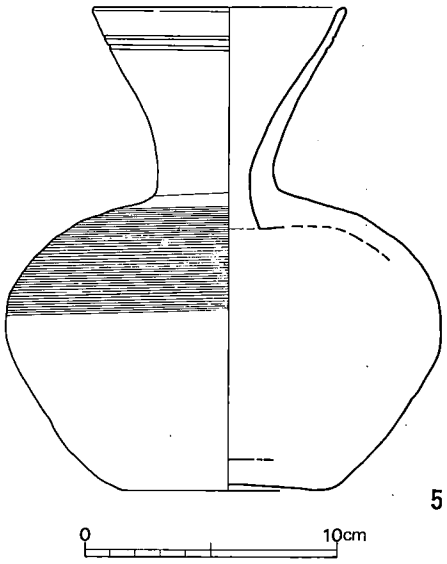
須恵器細頸壺(3)　口縁部を欠くが，残存器高11.0cm。体部は高さ8.0cmの扁球形を呈し，最大径は13.7cm。底部は平底で，底径8.5cm。頸部は直径4.6cmまですぼむ。体部は回転ナデ調整で，頸部にはシボリ痕もみられる。外底面は，ヘラ切離し後の凹凸をヘラで雑にナデて，直線３条のヘラ記号を付している。胎土に砂粒を含むが，堅



第 100 図　16号墳石室出土土器実測図（1/3）

緻に焼成されて黒灰色を呈している。

土師器椀(4)　復原口径14.9cm，器高5.8cm，底径4.2cmの大きさ。口縁部は内弯気味に立ち上がりやや肥厚する。底面はわずかに上げ底になる。器面は磨滅しているが，胴部外面は縦ないし斜め上がり方向にヘラミガキされているようだ。胎土に褐色粒を含み，明褐色ないし淡褐色に焼成されている。



第 101 図　16号墳周溝出土土器
実測図１（1/3）

周溝出土土器（第101・102図）

須恵器細頸壺(5)　器高19.1cm，復原口径8.6×10.1cm，胴最大径15.3cm，底径8.1cmの大きさのほぼ完形品。体部は11.8cmの高さを占める。頸部は直径4.6cmまですぼまり，口縁部に向かって大きく開くが，口縁部は片口に似た形に歪みを生じている。底部はわずかに上げ底で，胴下半は直線的に開き肩部は丸味をもつ。口頸部は回転ヨコナデ，肩部はカキ目調整され，胴部はカキ目も残るが，回転ヘラケズリにナデが加わる。外底面はヘラ切離しの後ナデが加わる。胎土に砂粒を多めに含み，硬い焼成で灰褐色ないし黒色を呈している。周溝II区の埋土下層から出土した。

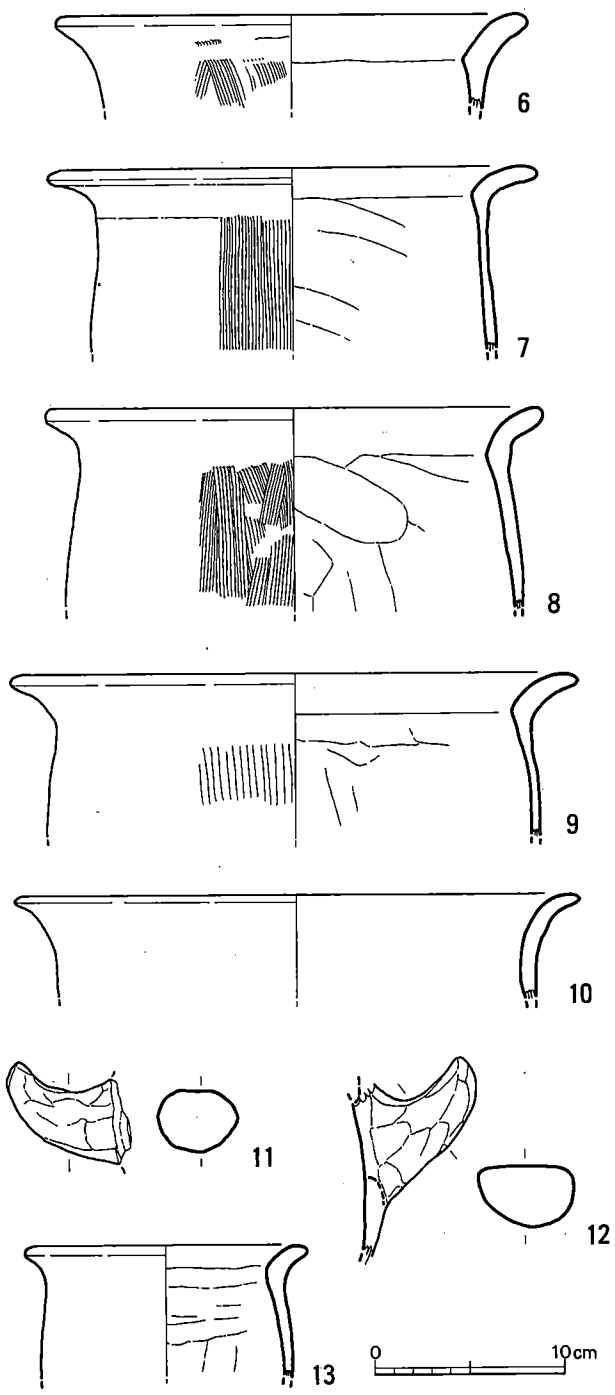
土師器甕(６～10)　かなりの量の土師器片が出土しているものの，うまく接合しないので特徴的な口縁部のみを図示した。いずれも周溝II区埋土下層から出土したが，８はやや上位から出土した。

６は復原口径24.8cmで，肥厚する口縁部がさほど外反しない。７は口縁部が強く外反し復原口径25.8cm，８・９は強めに外反する。８は復原口径26.2cm，９は復原口径29.8cm。６～９の胴部外面は縦方向のハケ目，内面はヘラケズリされていて，９のハケ目は粗めである。胎土に砂粒・金雲母・褐色粒・角閃石などを含み暗黄褐色に焼成されている。

10は，肥厚せずに緩やかに外反する口縁部破片で，甕か，あるいは甑であろう。30cm前後の口径であろうか。内外面ともに磨滅していて，調整手法は不明。胎土に砂粒・金雲母を含み暗黄褐色に焼成されている。

土師器把手(11・12)　11は墳丘裾II区の墳丘盛土にくい込んで出土し，12は周溝II区の埋土下層から出土した。２点ともに胴部にソケット状に挿入するタイプのもので，11は断面形が楕円形を呈して，12は上側が平坦な扁平楕円形断面を呈している。

土師器小形甕(13)　周溝III区の黒色土層から出土した。復原口径14.9cm，残存器高7.0cm。肥



第 102 図　16号墳周溝出土土器実測図 2 (1/4)

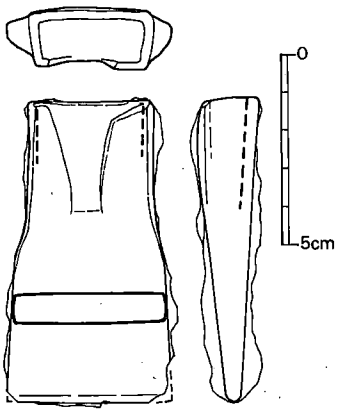
厚した口縁部は緩やかに外反する。外面は調整手法不明，内面は胴下半が縦方向のヘラケズリ，胴上半が横方向のヘラケズリである。

胎土に砂粒・褐色粒・角閃石を含み暗褐色ないし暗黄褐色に焼成されている。

鉄製品（第103図・104図１）

鉄　斧（第103図）　周溝II区寄りのＩ区から出土した。長さ8.0cm，刃部幅4.3cm，刃部の厚み0.4～1.0cm。刃部端から両側縁は緩やかにすぼまり，端から4.0cmの位置で幅3.9cmを測る。頭部は両側から袋状に折り曲げられ，幅3.3cm，厚さ1.5～1.6cm，袋の内側の幅2.6～2.8cm，厚さ約1.0cmを測るが，袋の内側は錆のためによく分からない。

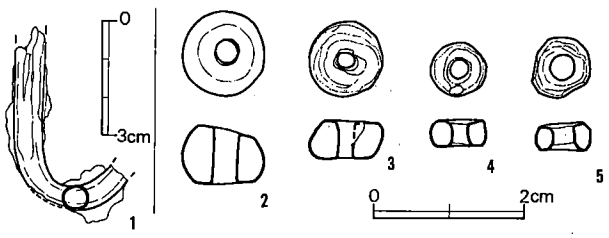
用途不明鉄製品（第104図１）玄室内右奥の床面から出土した。



第 103 図　16号墳周溝出土鉄器実測図 (1/2)

直径0.6～0.8cmの丸棒が曲げられているが，中実の部分と中空の部分がある。両端とも欠損していて，本来の形状は不明。鎖のようなものであろうか。

鉄　滓　周溝II区の埋土下層から出土した。4.5×3.0×2.0cm程度の大きさで重量43.6gを測る。一部に植物質の銹着がみられる。



第 104 図　16号墳石室出土鉄器・玉類実測図（1/2・実大）

玉　類（第104図２～５，表４）

ガラス丸玉（２・３）　２点とも玄室床面から出土した。３はやや扁平で風化が進み，淡い黄緑色を呈している。

表４　16号墳出土玉類一覧表

（単位mm）

No.	種類	径	厚さ	孔　径	質	色　調
2	丸玉	10.7~11.0	7.5	3.0	ガラス	暗い緑
3	〃	9.5~9.7	5.0	1.9~2.1	〃	淡い黄緑，風化進む
4	小玉	6.7~7.4	3.5	2.5	〃	銀　風化進む
5	〃	7.5~8.1	4.2	3.0	〃	乳白

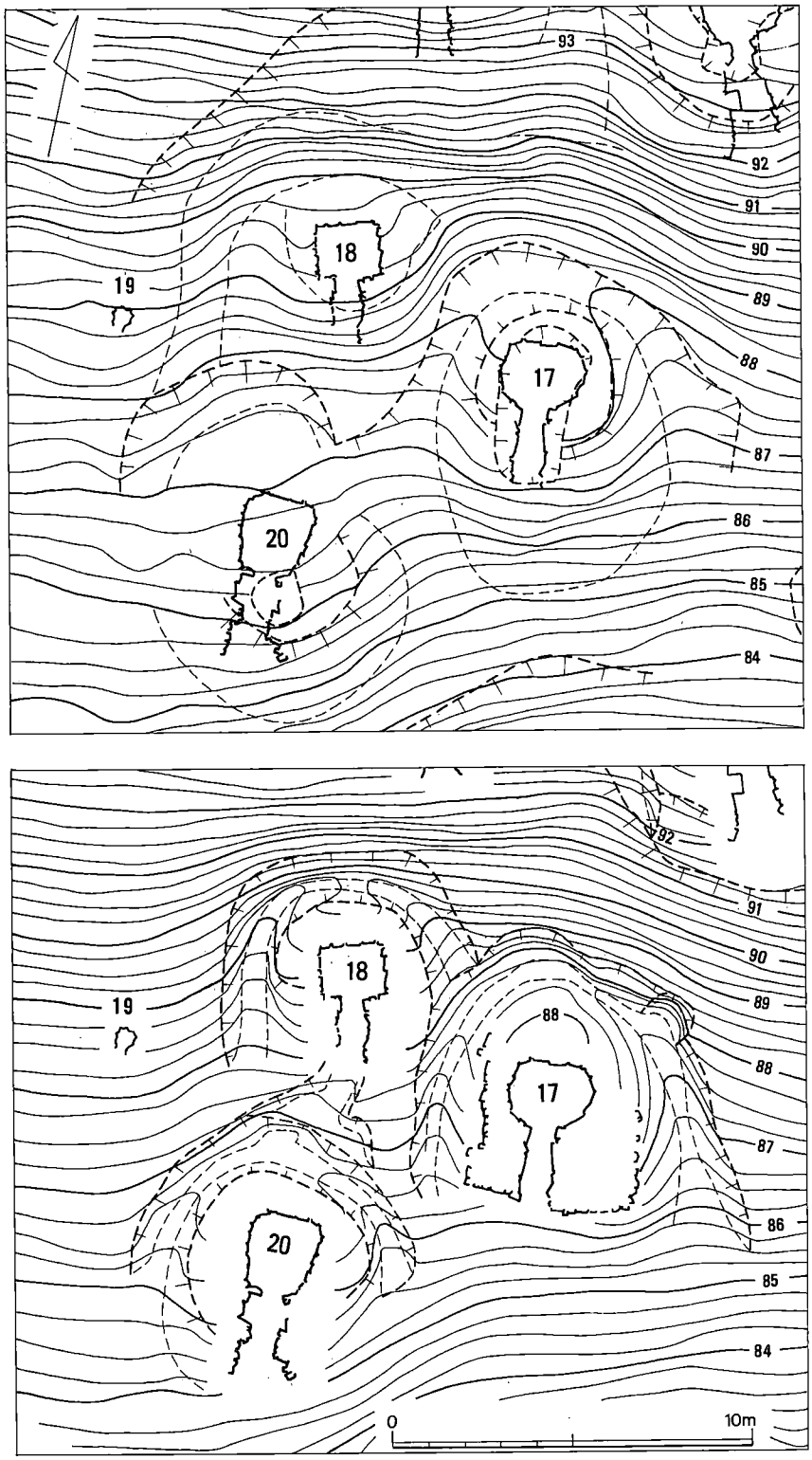
ガラス小玉（４・５）　２点とも玄室床面から出土した。銀色ないし乳白色を呈し，表面は手に触れるとぼろぼろと崩れる。素材のガラスを扁平に巻付けてつくられたものである。

石室出土土器では，須恵器高杯に７世紀初頭前後の特徴をみることができ，須恵器杯蓋は７世紀中頃ないし後半にかかる時期であろう。土師器椀も７世紀後半前後であろう。須恵器長頸壺では時期の特定をしえないが，須恵器高杯・杯蓋などの示す時期に石室の使用を考えておきたい。（小池）

17．17号墳

墳　丘（図版85・86－１，第105図）

17号墳は８号墳の南，10号墳の東南に位置する古墳で，西側には18号墳，南西側には20号墳が接している。調査前には，標高88.3mを頂点に85.5m位にまで３m程度の高低差をもつ墳丘と4.0×2.0mの大きさの陥没穴があり，古墳であることが明確に判断しえた。この際の墳丘は，南



第 105 図　17～20号墳墳丘・地山整形面測量図（1/200）

北8.0m，東西6.5mの楕円形にも，直径6.0mにも見えた。背後が比較的急傾斜の斜面であり，すぐ上に８・10号墳の墳丘裾があるために，周溝の上端がどこであるのかも判断しにくい状態であった。表土を除去すると，主体部の石室壁体はかなり石が抜き去られて，石室前面から両側に伸びる列石がみられた。周溝は，馬蹄形にめぐり，後方の弧に比して両側はかなり緩やかな弧を描いている。後方での外径7.0mで，前面側での外径9.0mの規模である。墳丘は，前面での列石が直線的に並ぶので全体の形は砲弾形に近い形をなし，前後に8.0m，前面の幅6.5m，残高2.5mの規模である。

前面の列石は東西幅4.7mで，左側に1.6m，右側に2.4m伸びている。西側端で折れ曲がった列石は北に4.3m続くが，1.2m北に進むと0.2mほど内にくびれる。東側では崩れがみられるものの，東端で折れ曲がり北へ約3.0m続く。こちらも北へ1.6m程進んだ所でわずかにくびれている。西側は５～６段の積み石がよく残るが，東側では前方へせり出したようになっていて，西側に比して残りが悪い。

主体部（図版86－２・87－１・２，第106図）

この古墳の主体部は，主軸方位をＮ２°45′Ｗにとり南に開口する，単室構造の横穴式石室である。石材には緑泥片岩の板石が使用されている。石室全長は左側壁で3.80mである。右側では4.20mになっているが，前面にせり出している分を差引けば左側と同様の長さである。

玄室は，巾着形の平面形を呈し，左側壁での長さ1.80m，右側壁での長さ1.60mで，奥壁の幅1.70m，中ほどの最大幅2.25m，玄門幅0.65mを測る。奥壁は，高さ70cm余り，幅98cm，厚さ30cmの大きさの板石を中央に立てて据えて鏡石としている。現状ではこの石は節理面で割れて間隙も生じているが，本来は１枚の石で，土圧もしくは石材を抜取り時の破壊で割れたのであろう。鏡石の左右は，厚みのある扁平石などを基底部から小口積みして，持ち送りの壁体を築いているが，右側で1.0m，左側で0.5m前後の高さに残る。床面には敷石が全く残されていない。玄室埋土には敷石に使用されたと思える小振りな扁平石も含まれていたので，攪乱を受けた際に全て外されたのであろうか。

玄門には，やや大振りの扁平石を立てて据えているが，土圧のせいか内側にかなり倒れている。左側では高さ75cm，幅55cm，厚さ20cm程度の石が，右側では高さ85cm，幅40cm，厚さ20cm程度の石が使用されている。玄門の幅は現状では0.60m余りを測るが，框石に使用された長さ63cm，幅31cm，厚さ８cmの扁平石が，玄門石が倒れて挟まれたまま傾いている。

羨道は，左側で長さ2.05mを測り，羨門部幅は0.75mである。羨道部側壁では，両側ともに玄門袖石の羨門側に，玄門と同様な石を立てて据えているのが特徴的である。この石の羨門側では基底部から厚めの石を小口積みしている。羨門は，前面に広い面を向けた扁平石が据えられるが，右側は土圧で前に倒れている。羨道部には仕切石はなく，閉塞石と区別しうる敷石もみ

られなかった。

閉塞は，羨門石の内側から框石付近にかけてみられるが，前側では約0.3mの高さに残って面をなしているが，奥側は散乱した状態であった。

遺物出土状況（図版88－３）

羨道部からは須恵器杯身３点が出土した。閉塞石か敷石かの区別をし難いものの整った敷石ではないので，散乱した閉塞石と判断としている部分の上から２点出土した。追葬時に置かれたのか，玄室攪乱時に放置されたものかはっきりしない。もう１点は框石付近の埋土から出土した。玄室内では，鏡石の右端付近の床面から耳環１点が出土し，上位の埋土に混じって須恵器杯蓋・杯身各２点分の破片が出土した。また，前面斜面から土器片が出土したが，まとまったものはなく，散乱した状態であった。

出土遺物（図版89，第107～109図）

石室内出土土器（第107図）

須恵器杯蓋（１・２）　２点とみに玄室埋土上層からの出土品である。身受けのかえりをもつ杯蓋で，天井部につまみをもたない。天井部は平坦で，外面はヘラ切り離しの後ナデが加わり，キ字状のヘラ記号が付されている。口縁部端は外方へ反り，身受けのかえり部端は口縁部からわずかに出る程度である。石英粒などを含むものの精良な胎土で，堅緻に焼成されて暗灰色を呈している。１は口径11.5cm，器高2.0cm，かえりの径9.4cm，２は復原口径11.6cm，器高2.2cm，かえりの径9.6cmの大きさ。

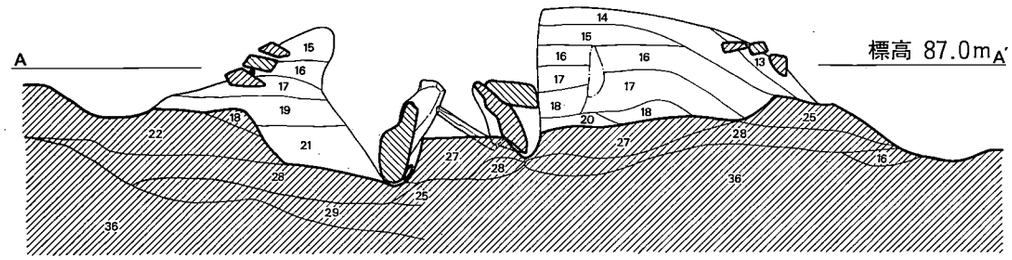
須恵器杯身（３～７）　３・４は玄室埋土，５は框石付近，６・７は閉塞石上から出土した。

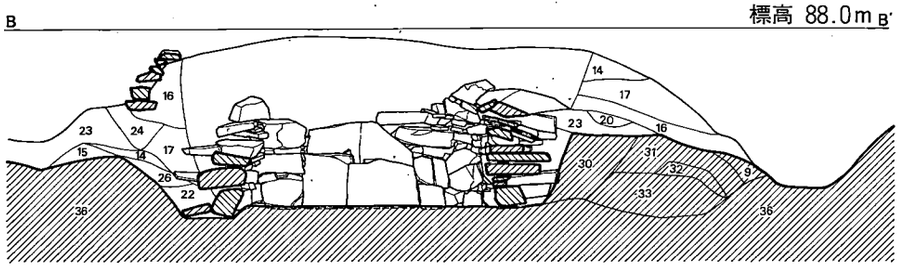
３～６は，高台が付かない杯身。３～５の外底面はヘラ切離しの後ナデが加わりキ字状のヘラ記号が付されている。１・２に対応する類で，同様の胎土・焼成で，黒灰色を呈するものもある。３・５は，口縁部が直線的に立ち上がり口縁端部が厚めにまとまる。４は破片資料だが残された口縁部では外反し端部は薄めにまとまっている。３は口径11.0cm，器高3.3cm，４は復原口径11.4cm，器高3.4cm，５は復原口径10.9cm，器高3.5cmの大きさである。

６は，焼成時の焼けぶくれと歪みの激しいもので，耳杯のような形に変化しているが，本来の形は５の様に直線的に口縁部が立ち上がるのであろう。外底面は静止ヘラケズリ調整されており，ヘラ記号はない。平均的な口径は11.0cm強で器高3.4cm前後の大きさである。

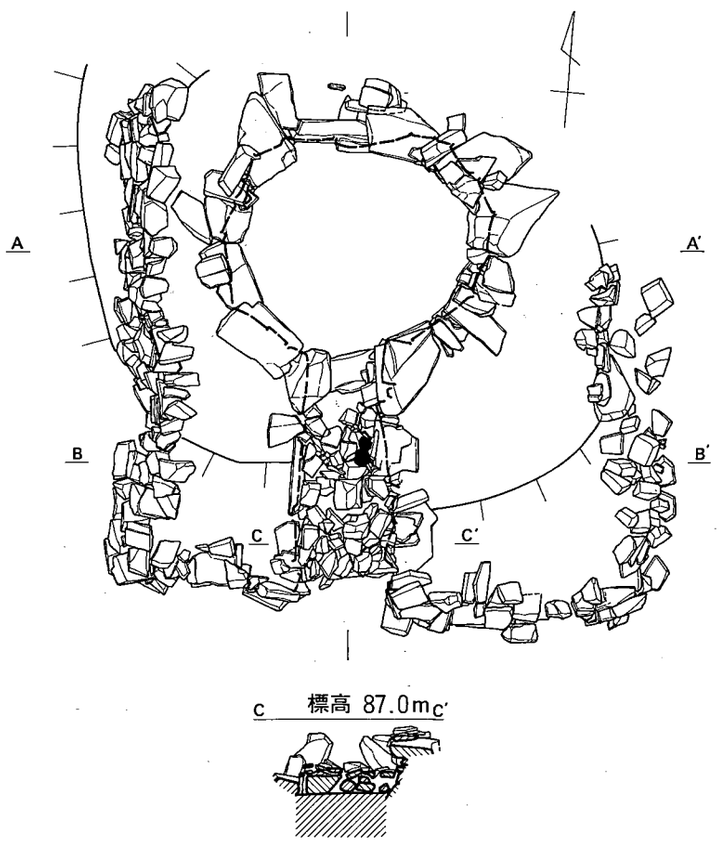
７は，高台をもつ杯身で，口径14.5cm，器高5.5cm，高台外径9.6cm。高台は外方へやや踏張り気味に付き，口縁部はわずかに外反する。やや焼成不良で淡茶褐色ないし暗緑茶色を呈している。

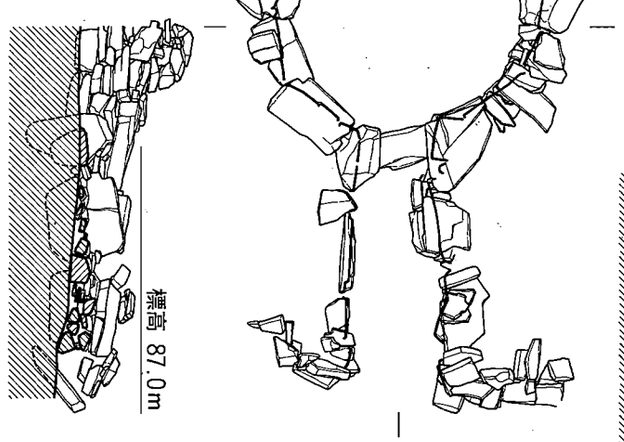
前庭部・前面出土土器（第108図）

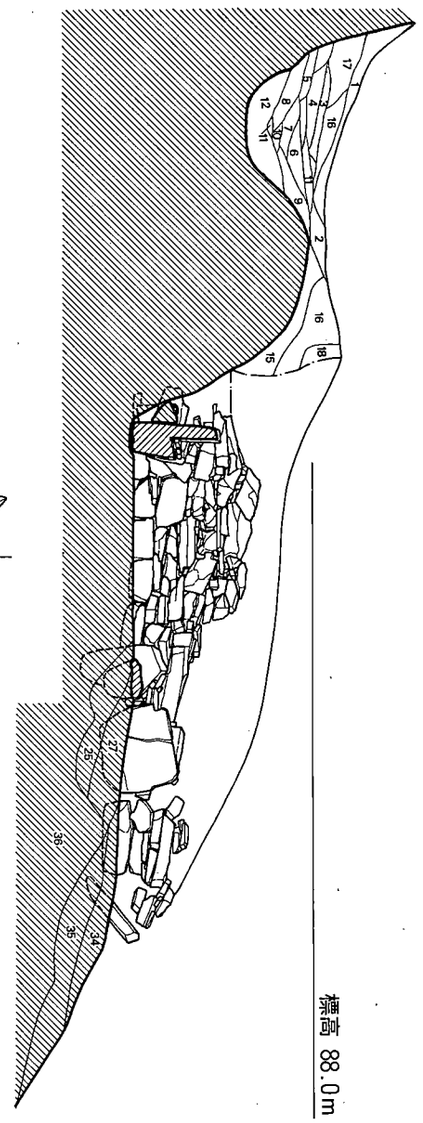


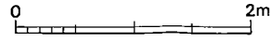


1 淡黄茶褐色土
2 淡茶褐色土
3 淡黄茶褐色・暗茶褐色土
4 淡めの暗茶褐色土
5 黄茶褐色・淡茶褐色土
6 暗茶褐色土・黒色土
7 淡茶褐色土
8 黄茶褐色土
9 淡赤褐色土（礫混り）
10 淡黄褐色色・黒色土
11 淡黄茶褐色土
12 黄茶褐色土
13 淡茶褐色土
14 黄茶褐色土
15 茶褐色土
16 暗茶褐色土
17 淡黄茶褐色土
18 暗黄褐色土
19 淡茶褐色土
20 暗茶褐色土
21 淡茶褐色土
22 暗黄茶褐色土
23 明茶褐色土
24 暗褐色土
25 淡黄褐色土
26 赤褐色・黄褐色土
27 明赤茶褐色土
28 暗黄茶褐色土（礫混り）
29 黄茶褐色粘性土
30 茶褐色・黒灰土
31 黄褐色・黒灰土
32 赤黄茶褐色・黒灰土
33 黄茶褐色粘性土（礫混り）
34 淡黄茶褐色土
35 赤茶褐色土（礫混り）
36 赤茶褐色粘性土

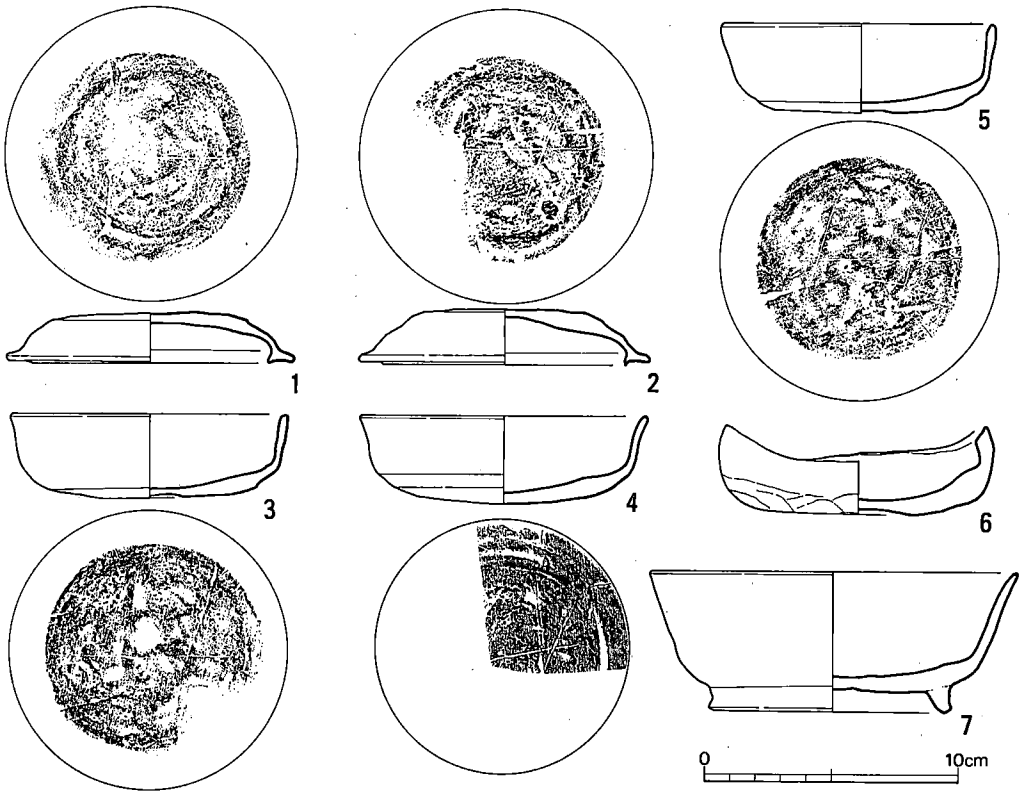








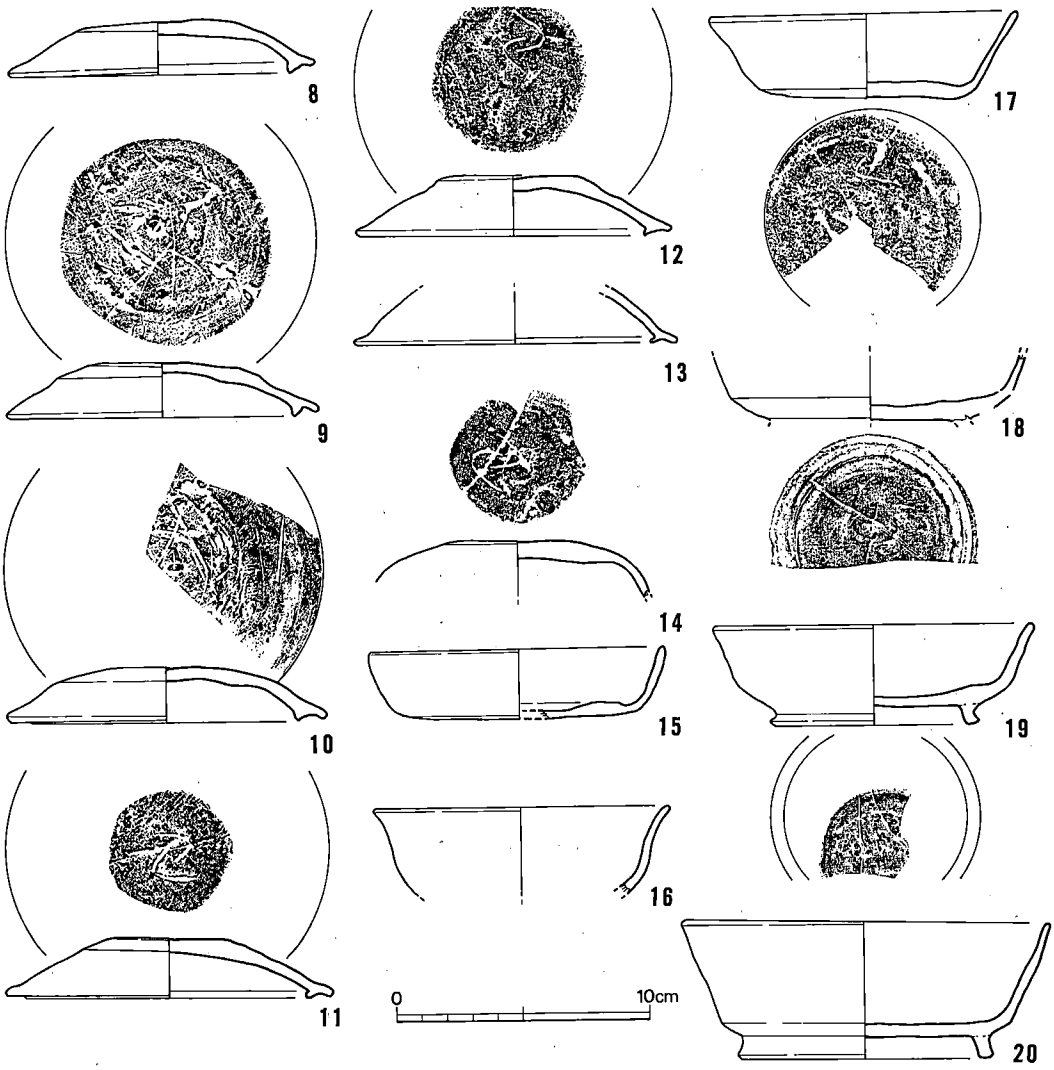
第 106 図　柿原D地区17号墳石室実測図（1/60）



第 107 図　17号墳石室出土土器実測図（1/3）

須恵器杯蓋（8～14）　8～10は前面，11～13は左前面から出土した。いずれも身受けのかえりをもつ杯蓋だが，天井部につまみは付かない。口縁端部はやや外方へせり出し，下端とかえり部端の高さはほぼ同じである。砂粒を胎土に含むが，堅緻に焼成されている。8は，外天井がヘラ切離しの後ほとんど調整されていない。復原口径12.1cm，器高2.2cm，かえりの径10.6cmの大きさ。9～12の外天井はヘラ切離しの後ナデが加わっている。9・10はC字に単直線を加えたヘラ記号が，11・12はC字と逆C字を組合わせたヘラ記号が付されている。9は口径12.4cm，器高2.2cm，かえりの径10.4cm，10は復原口径12.6cm，器高2.2cm，かえりの径10.4cm，11は口径13.0cm，器高2.5cm，かえりの径11.2cm，12は復原口径12.5cm，器高2.4cm，かえりの径10.4cmの大きさである。14は口縁部を欠くが外底面にC字と逆C字を組合せたヘラ記号が付されている。

須恵器杯身（15～20）　このうち15～18は左前面から出土した。15～17は高台の付かない杯身で，いずれも胎土に砂粒を含むが堅緻に焼成されている。15は口縁部が直線的に立ち上がり，端部は肥厚気味にまとまる。外底面はヘラ切離しの後ナデられるが，板目圧痕状の痕跡がわず



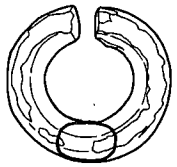
第108図　17号墳前庭部・前面出土土器実測図（1/3）

かにみとめられる。復原口径11.8cm，器高2.8cmの大きさ。16は復原口径11.8cmの大きさで，口縁部は外反する。17は口縁部が外方へ直線的に広がる器形で，復原口径12.2cm，器高3.4cmの大きさでC字と逆C字を組合わせたヘラ記号が付されている。

18～20は，高台をもつ杯身。胎土に砂粒を含むが堅緻に焼成されている。18は高台が剝げ落ちているが，外底面に単直線のヘラ記号が付されている。19は体部が浅めで，高台は踏張るように付く。復原口径12.8cm，器高4.0cm，高台径8.3cmの大きさ。20は体部が深めで口縁部は直線的に伸び，高台は踏張り気味に付く。口径14.6cm，器高5.6cm，高台径10.1cmの大きさ。

装身具（第109図）

耳　環　玄室奥壁付近から出土した。長径22.0㎜，短径20.0㎜で，断面は8.0×4.9㎜の楕円形を呈する。銅地金銅張りで，白銅色を呈して光沢もあるが，剝落している部分もある。重量の現存値は10.7gを測る。



第 105 図　17号墳出土耳環実測図（実大）

石室内出土土器のうち，玄室内上層の土器に古式の様相があり７世紀中頃に相当する。羨道部の土器に有高台杯身があり７世紀後半以降であろう。前面の土器にみられるC字と逆C字を組合せたヘラ記号は大宰府史跡SX2480でも出土している（註5）。また杯蓋につまみがなくかえりが退化しているので７世紀後半頃であろう。このことから，この古墳は７世紀中頃から使用され始め，７世紀末頃まで追葬があったものと考えておきたい。（小池）

18．18号墳

墳　丘（図版90，第105図）

10号墳の南，17号墳の西に位置する古墳で，20号墳が斜面の南下にある。17号墳と周溝が重複し，調査時には，前後関係は明瞭ではないものの，17号墳周溝が後出するものと判断して掘り下げた。調査前には，標高88.0～90.0m位に直径５m前後のふくらみがあり，中央部に陥没穴がみられた。表土除去後の墳丘は一辺５mの隅丸方形に近いプランをなしており，1.5m程度の高さに残っている。前面に列石の一部がみられる。周溝は外縁で東西７m以上，南北６m前後のコ字形に掘り込まれていて，幅1.3～1.8m，深さ0.5～0.7mの規模である。最高所は標高88.9mを測る。

主体部（図版91～93，第110図）

この古墳の主体部は，主軸方位をN13°Wにとり南南東に開口する，単室構造の横穴式石室である。石室全長は3.75mで，このうち奥壁から羨門までの長さは3.0mを占める。

玄室は，左壁で1.37m，右側壁で1.40mの長さで，奥壁で1.70m，玄門部側で1.68mの幅を測る。やや横長の不整方形プランを呈している。奥壁は，５枚の板石を並べ立てているが，中央の石は高さ50㎝，幅45㎝，厚さ10㎝程で最も大きい。左壁は６枚の板石，右側壁は４枚の板石

を立てて据えられている。このように並べて立てられた石の上は板石を小口積みして持ち送りの壁体をなしている。現状では，天井石が抜きとられた後に崩れ落ちた石がかなりあって，小口積みの石は，5段程度残るだけで，最も良く残る所で0.80mの高さである。

玄門幅は0.65mで，玄門の袖石は奥壁中央の鏡石に次ぐ大きさの板石が用いられている。なお玄室左側壁と左袖石との間に，1枚の板石が玄室に面して立てられ，右側袖石と玄室右側壁との間には2枚の板石が立てられていて，右袖側が広めになっている。玄門床面に，長さ63cm，幅20cm，厚さ14cmの石を渡して据え，框石としている。

玄室床面には，小振りの扁平石が敷き詰められている。奥壁から0.40mの所に奥壁に平行して，細長い石を主に揃えた部分があり，一つの区画がつくられている。また，右玄門から右側壁に平行した幅0.60mの部分も比較的整った敷き方になっているので，区画を意図したものかも知れない。

羨道は，長さ1.30m強で，羨門幅0.60mだが，羨道中ほどに最大幅0.90mの部分があり胴張りになっている。羨門には比較的大きめの板石が立てられるが，玄門との間は小さめの石が立てられている。また，これらの腰石状の石の上には，5・6段扁平石による小口積みがみられ0.80m程の高さが残る。羨道部も，扁平石で敷石されるが，羨門部床面に仕切石を思わせるような石はみられない。

右側壁では，石組墓道のような列石が0.90m分が伸びて，羨門から左右に伸びる列石は，左側で1.00～1.30mの所に扁平石を3段程度積んだ列石の一部が残り，右側では羨門から0.6m程度の列石が残っている。

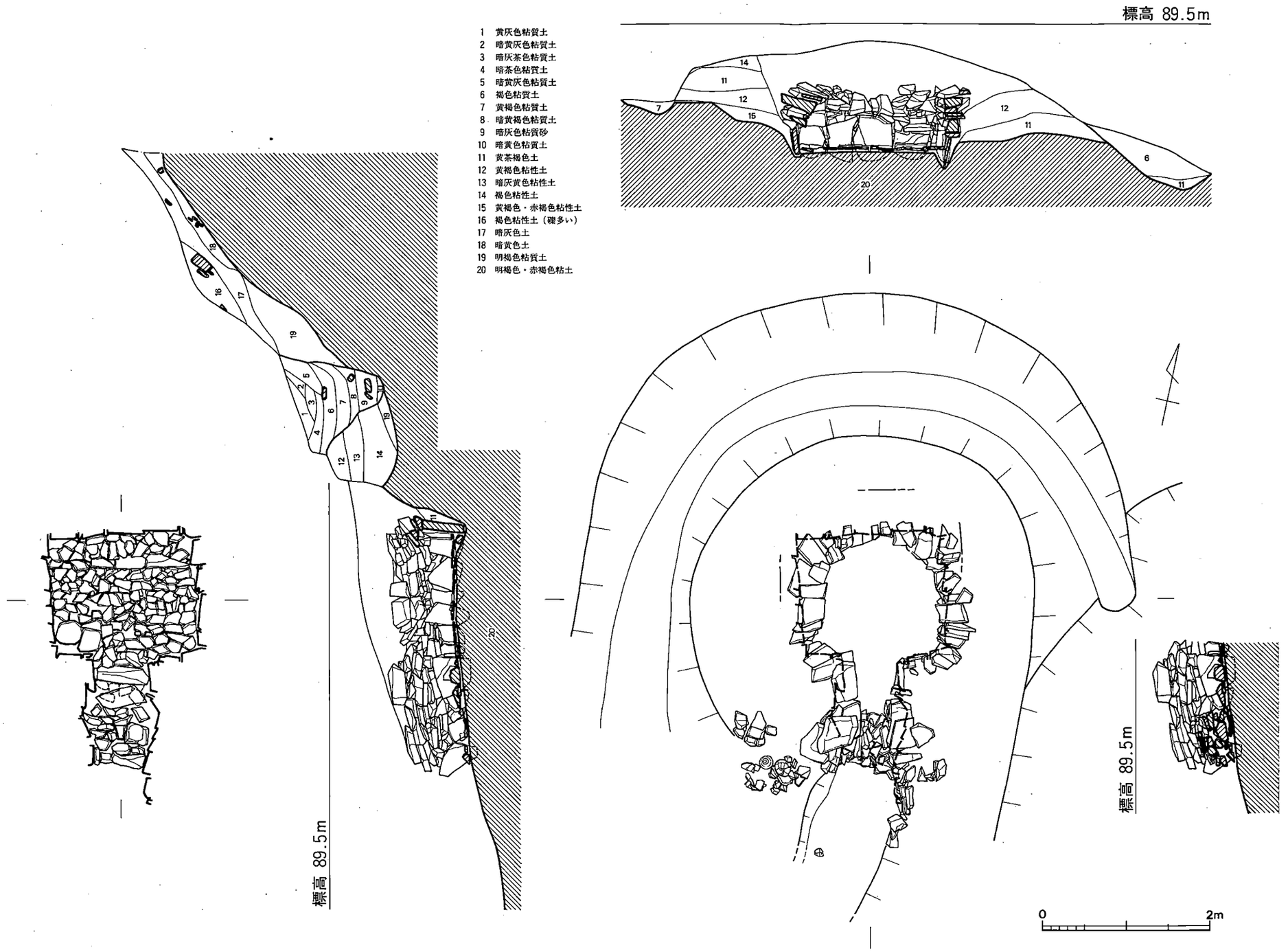
閉塞は，羨門から奥へ0.65mの長さに，高さ0.45m程度残っていたが，図版94にみられるように，平石を主軸方向に平行するようにして積まれた石が多く，中に土砂などをほとんど含まない積み方であった。

遺物出土状況（図版94－1）

石室内から遺物の出土はみられなかった。

石室左前面列石の前の部分では，須恵器平瓶・土師器皿・土師器高杯などがまとまって出土した。これらの土器は列石から崩れ落ちたとみられる石とともに出土したが，土師器皿などは石の上に乗っかって出土した。前庭部から出土した須恵器長頸壺口縁部は，17号墳周溝Ⅰ区から出土した頸部破片，22号墳周溝Ⅱ区北よりから出土した体部破片と接合する。

一方18号墳周溝Ⅱ・Ⅲ区から，多数の土器片が出土したが，出土須恵器片のなかに10号墳前庭部から出土した破片と接合するものがある。このため，18号墳周溝Ⅱ・Ⅲ区出土土器は本来10号墳に属したものと考えられる。

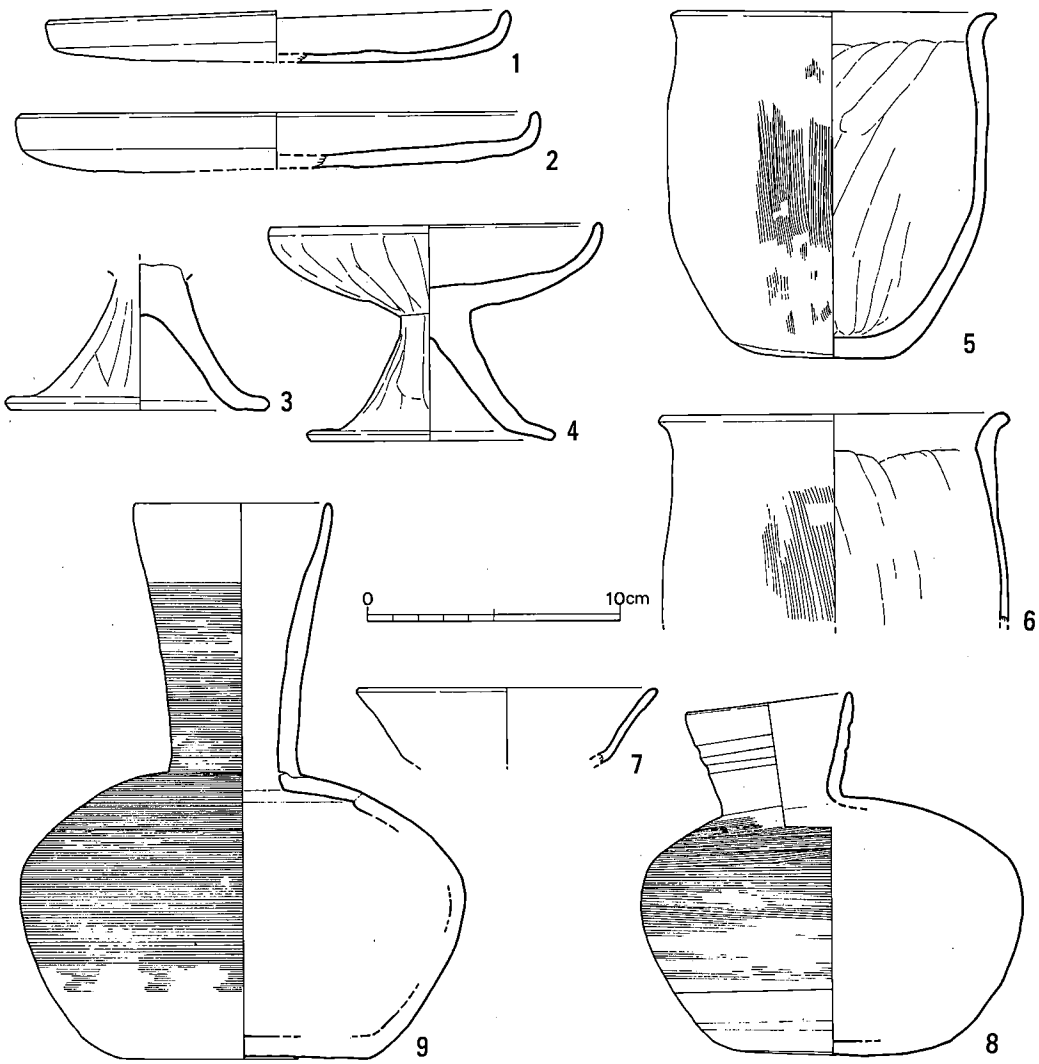


第 110 図　柿原D地区18号墳石室実測図（1/60）

出土遺物（図版94－２，第111図）

前面・周溝出土土器

土師器皿（１・２） 扁平な皿で，口縁部は内弯気味に立ち上がる。口縁部はヨコナデ調整されるが，内底面はヘラミガキ，外底面はヘラケズリされてている。細砂粒を少し含むが精良な胎土で，やや軟かめに焼成され，褐色ないし淡褐色を呈している。１は復原口径18.4cm，器高2.0cm，２は復原口径20.8cm，器高2.3cmの大きさ。



第111図　18号墳前面・周溝出土土器実測図（1/3）

土師器高杯（3・4）　3は高杯脚部破片で，復原裾径10.1cm，残存器高5.7cm。柱状部外面は縦方向のヘラミガキ，内面はヘラケズリの後ナデられている。脚裾部は外反する。胎土・焼成とも1と同様で淡褐色を呈する。4は復原口径13.2cm，器高8.5cm，復原裾径9.9cmの大きさで，杯部は内弯気味に立ち上がる。脚部裾は外反するが端部は踏張り気味である。杯部から柱状部の外面はヘラミガキされるが，杯部内面は丁寧なナデであろう。柱状部内面はヘラケズリの後ナデが加わる。細砂粒を少し含むが精良な胎土で，硬めに焼成され，黄褐色ないし明褐色を呈している。

土師器小形甕（5・6）　口縁部が肥厚気味に短く外反し，口径と胴部最大径が同程度の大きさのもの。体部外面はハケ目調整，内面はヘラケズリされている。砂礫・褐色粒などを胎土に含み，淡褐色ないし明褐色に焼成されている。5では口径12.9cm，器高13.7cm，胴最大径12.6cm，底径6.4cmで，わずかに丸味をもつ外底面はナデ調整されている。6は復原口径14.0cm，残存器高8.2cm，胴最大径13.8cmの大きさ。2点とも周溝II区のI区よりから出土した。

須恵器杯身(7)　小破片のため傾きにも確実性を欠くが，外反する口縁部をもち，復原口径12.0cm，残存器高3.0cmの大きさ。胎土に砂礫を若干含むが硬く焼成されて，淡灰色を呈している。

須恵器平瓶(8)　口径6.7cm，器高16.4cm，胴最大径15.1cm，体部高10.2cmの大きさ。口頸部は直線的に開き外面に2条の沈線が巡る。頸部から胴部にかけてはカキ目調整され，胴下半は回転ヘラケズリで底面はナデが加わる。胎土に細砂粒・石英粒を若干含み，堅緻に焼成されて灰黒色ないし暗灰色を呈している。

須恵器長頸壺(9)　器高23.8cmで，このうち口縁部が12.5cmを占める。復原口径7.8cm，頸部径5.0cm，胴最大径17.5cm，底径9.7cmの大きさ。体部は真中よりやや上に最大径の位置があり，全体にカキ目調整されるが，回転ナデ調整される口縁部は内弯気味にまとまる。胴下半もカキ目がナデ消されている。また，平底の外底面はナデられるが凹凸がめだつ。胎土に細砂粒を含み，堅緻に焼成されて黒褐色ないし暗灰褐色を呈している。

周溝II区出土鉄滓・ふいご羽口（図版94－2）

周溝II区から鉄滓が2点出土した。1点は長さ6cm，幅3cm，厚さ2cm程度で49.5gの重さがあり，あと1点は親指大程度で16.5gと軽い。ふいご羽口小片は1点で長さ3.5cm，幅3.5cm，厚み1cm強の大きさで18.6gを測る。鉄滓・ふいご羽口は，10号墳から転落してきた可能性があり，土師器小形甕もその可能性を否定できない。

前面出土土器のうち，須恵器平瓶・長頸壺は7世紀中頃から後半に比定できるものであり，須恵器杯身はやや時期が下降するであろう。また，土師器小形甕や皿・高杯は7世紀後半から8世紀初頭前後のものであろう。石室内からの出土遺物がないものの，前面出土遺物から7世紀中頃ないし後半からの石室使用を考えるべきであろう。　（小池）

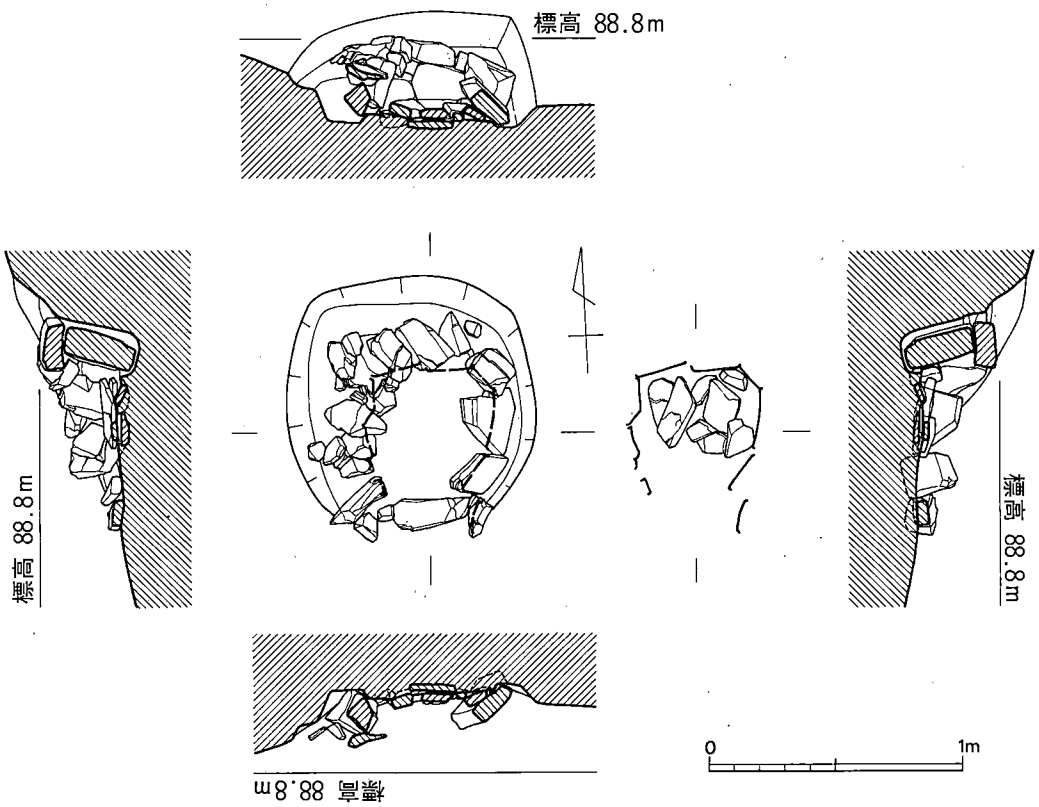
19. 19号墳

18号墳の西南西，20号墳の北西に位置する古墳で，標高88.5～89.0m位に位置する。調査前では，18号墳周溝の西側で標高88.5mの等高線が若干幅広になってふくれてはいるが，墳丘と言える程のものではなく，古墳の存在は表土を剝ぎ小石室が現れるまで全く分らなかった。

周溝については，表土を剝いでも確認することができなかった。

主体部（図版95，第112図）

この古墳の主体部は，主軸方位N 2 °30′Eにとり南に開口する，単室構造の横穴式小石室である。前面側は削平されているものと思われるが，石室には緑泥片岩の石材が使用され，石室全長は0.65mである。



第 112 図　19号墳石室実測図（1/30）

主体部掘り方は，幅0.80～1.00m，長さ1.00m，最も深い所で0.45mの深さがある。掘り方は，岩盤の地山に掘り窪められているが，この内側ぎりぎりに石室を構築している。

袖石に相当する石がはっきりしないが，框石と考えられる石をもとに想定すれば，玄室は長さ0.45m，幅0.47m，玄門幅0.30m程度の規模であろう。玄室奥壁は，２枚の扁平石(高さ，幅とも20～30cm，厚さ10cm程度）を立てて据えた上を扁平石の小口積みで築いているが，残存高は0.30m強である。左側壁も，奥壁寄りは扁平石を立てて据えているが，袖石側は基底部から小口積みであろうか。右側壁は扁平石を３枚立てて据えている。框石は，長さ30cm，幅12cm，厚さ５cm程度の大きさである。

玄室内は，奥壁側半分に扁平石の敷石がみられるものの，玄門側に敷石はない。なお，羨道部については，削平を受けているために，不明である。

石室内外からの遺物の出土は全くみられなかった。　　（小池）

20．20号墳

墳　丘（図版96－１，第105図）

D地区の東方，標高86m前後の南斜面中段にあり，斜面北側上位に17号墳･18号墳が隣接している。

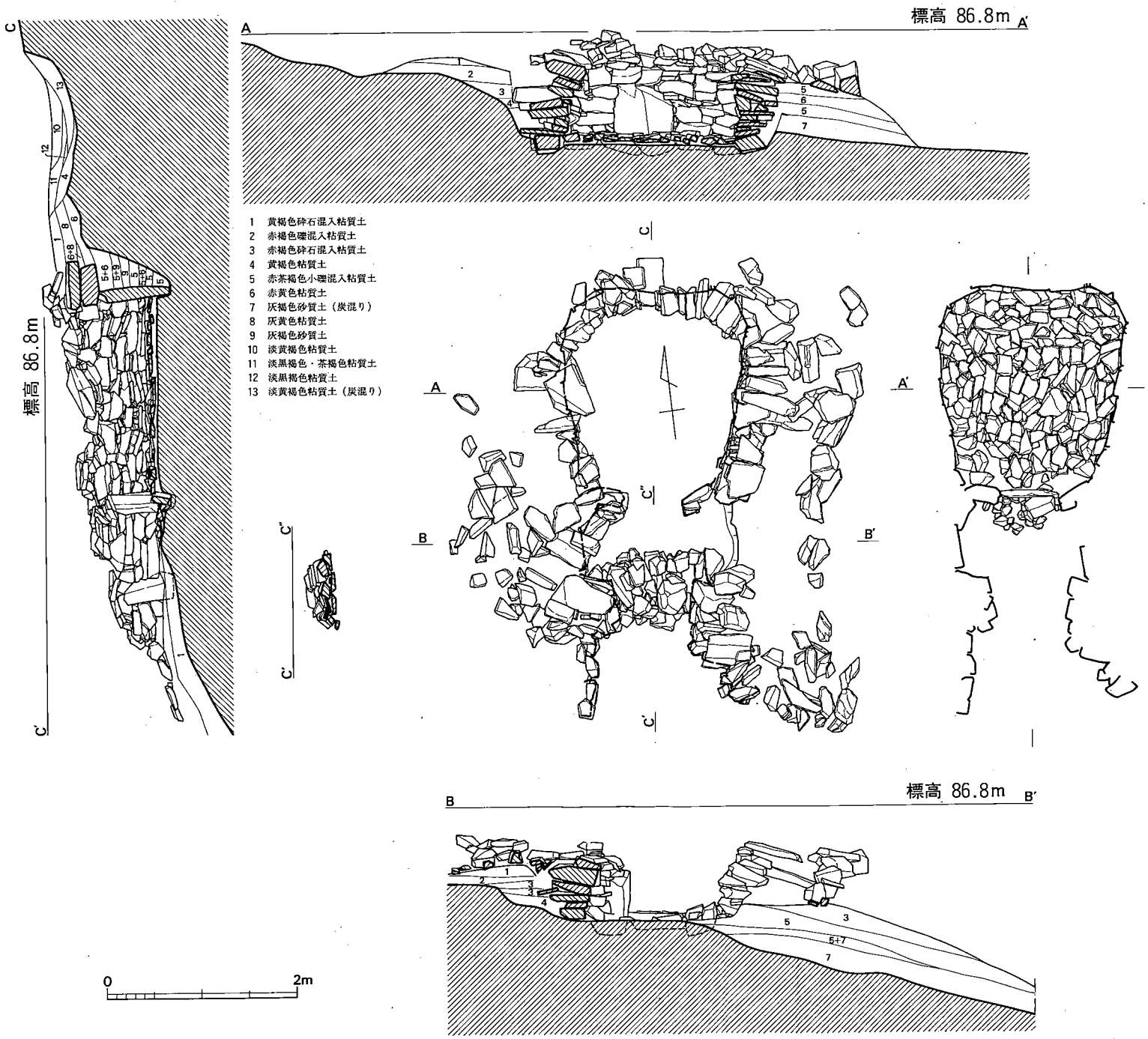
調査前の観察で，北側の斜面上位に径6.00m位の周溝と，南側に径4.00m位の墳丘上端線と径7.00m位の墳丘下端線が見られた。また墳丘上には径1.50mの盗掘溝と思われる陥没があった。

調査の結果，周溝は調査前に見られた部分と，その下端部分が現われ，墳丘の斜面上側に半分近く巡っている。外径は約7.50m，内径約5.00m，幅は1.20～1.50mである。

この古墳は，20°近い傾斜地に立地しているため，石室構築にあたっては，前室中央部付近まで墓壙を掘削し，掘削土は前方部の床面整形のための盛土や，石室裏込め土，墳丘盛土に用いている。墳丘盛土は最も残存状況の良好な部分で0.70mを測る。

列石は，西側部分では，羨道中央から玄室中央付近まであり，東側は，羨道口より直交して1.00m程東側にのび，それから北側にはほぼ直線に玄室中央付近まであるが，疎らに点在し，積み上げているようではない。

主体部（図版96－２・97・98，第113図）



第 113 図　柿原D地区20号墳石室実測図（1/60）

この古墳の主体部は複室構造の横穴式石室で，主軸方位をＮ７°Ｗにとり，ほぼ南に開口している。

玄室は床面で長さ2.10m，奥壁は直線部で幅1.20m，コーナーは丸味を帯びて広がり，最大幅1.90mとなり，玄門にかけて徐々に挟まり，最少幅1.40mとなる。床面には15×20cm前後の角張った板石を一面に敷き詰めている。

奥壁は，基底部中央に高さ75cm，幅60cm，厚さ10cm程の板石を地山に掘り込んで，立てて据え，両側には基底部より幅30cm，厚さ15cm前後の板石を持ち送り気味に平積み及び小口積みしている。側壁は，両壁とも基底部に厚みのある板石を掘り込んで据え，その上に厚さ５～10cm程度の板石を床面より0.60m前後までほぼ垂直に積み，その上面より持ち送りに積み上げている。残存壁面高は1.00m程度で，残りが悪い。

玄門袖石は，西側部は柱状の石を0.15m程度掘り込んで据えている。東側部は上部が残っていないが，残存部から推定して西側と同様の石材を用いている。玄門石の間には，高さ60cm，幅20cm，厚さ10cm程の板石を横長に立てて，仕切石としている。

前室は長さ0.90m，幅1.20mでほぼ方形を呈す。壁面は，東壁は羨門部付近が僅かに残っている程度である。西壁は基底部より20°程度内傾し，２段ほど平積みし，３段目から小口積みしている。

羨門袖石は左右とも盛土を地山近くまで掘り込んで柱状の石を立てて据えている。羨道は長さ1.30～1.40m，幅0.70～1.50m程で敷石はしていない。側壁は羨門付近より徐々に低くなっている。

石室床面は，玄室ではほぼ水平に造っているが，前室から徐々に低くなり，羨道口までに40cm程度の高低差がある。また前室床面は仕切石を境に７～15cm低い。

石室の閉塞石は，前室中央よりやや羨道寄りから羨道口にかけて，長さ0.80m，高さ0.35m程度残存しており，概ね板石を小口積みしている。

遺物出土状況（図版99，第114図）

石室内では，遺物の出土は皆無であったが，周溝Ⅱ・Ⅲ区で３群に別れて出土した。

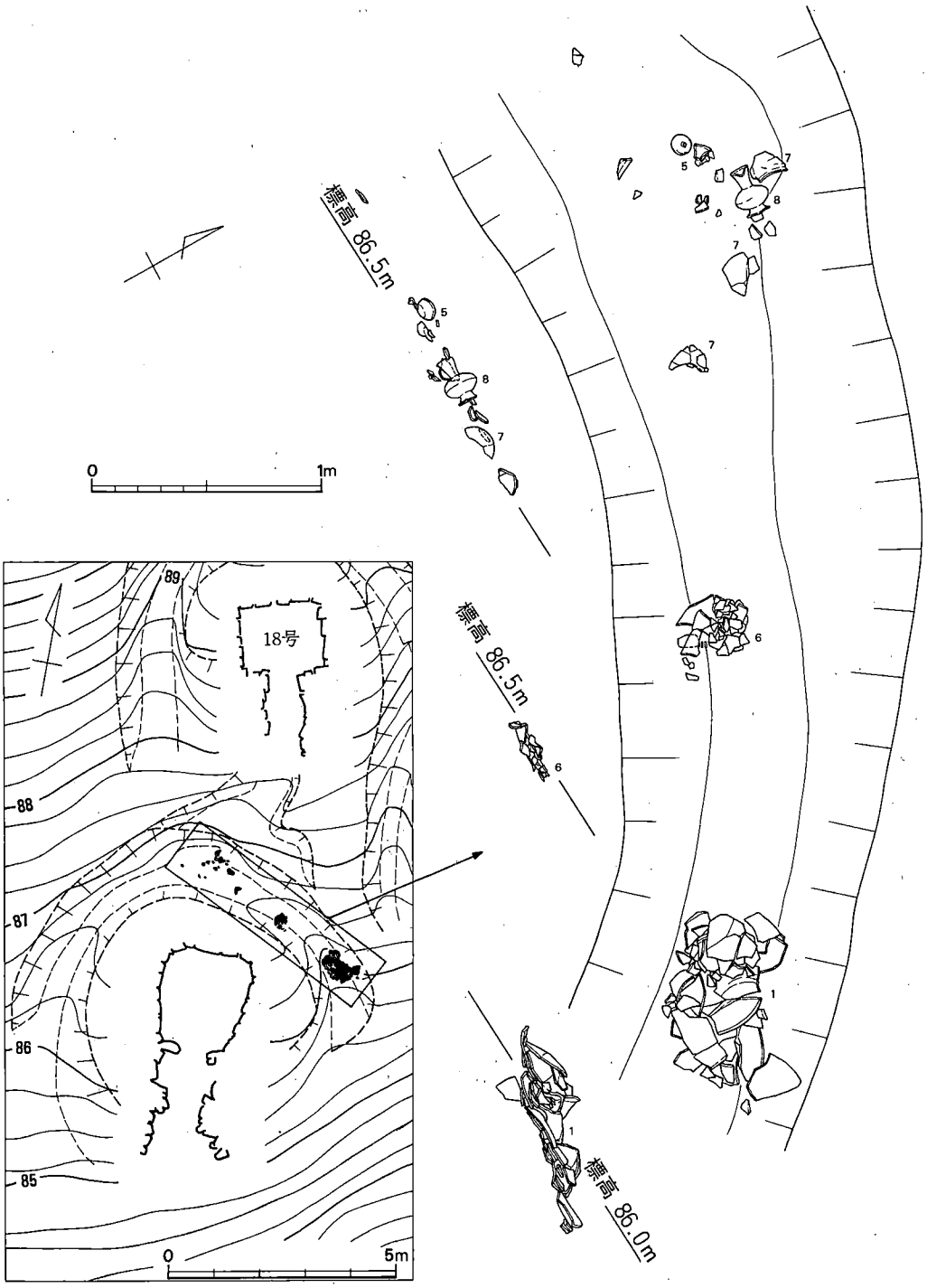
周溝Ⅱ・Ⅲ区に跨る奥壁後方の一群には土師器長頸壺１・土師器壺１，須恵器瑯１点が出土し，その東側の二群からは同一個体の須恵器甕１，土師器甕１点などが出土した。

（日高）

出土遺物（図版100－１，第115・116図）

周溝Ⅲ区出土土器

須恵器甕(1)　口径38.1cm，復原器高61.0cm，胴最大径54.4cmの大きさの大形の甕。体部は器

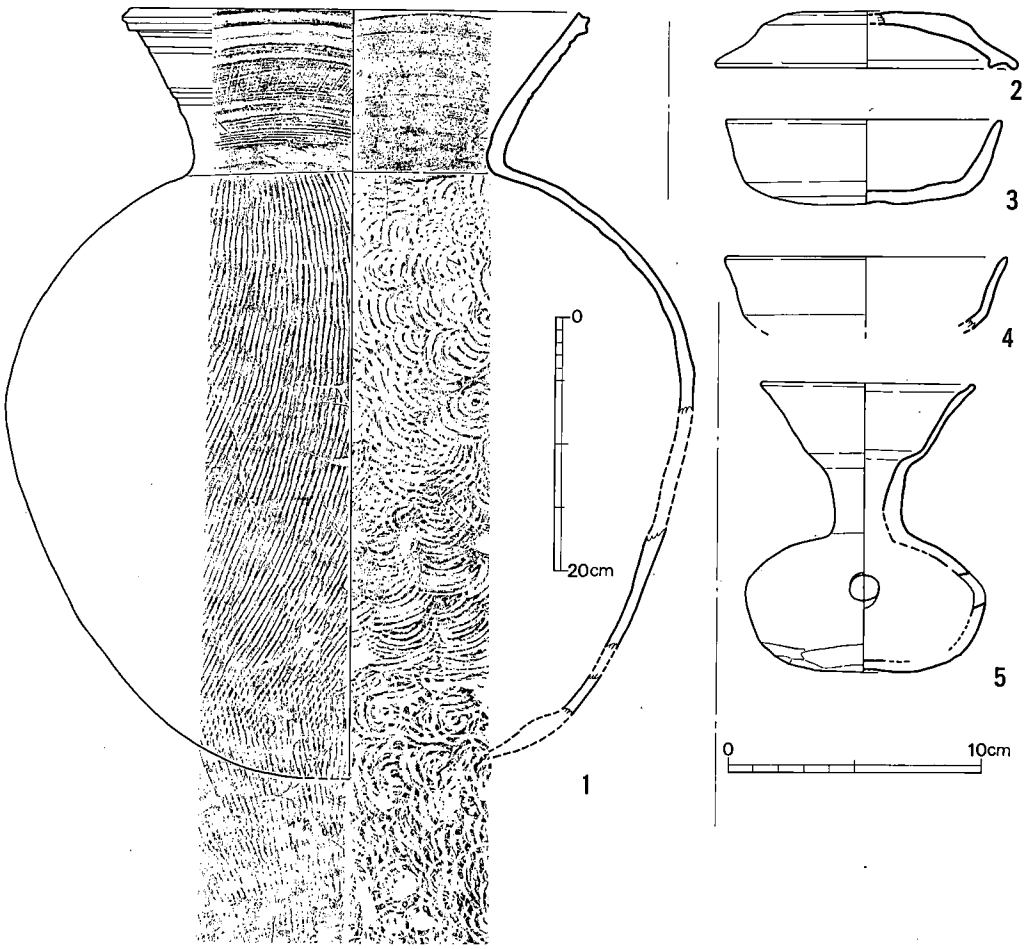


第 114 図　20号墳周溝Ⅲ区遺物出土状況実測図（1/30、1/150）

高の約８割の高さを占める。口縁部は径24.7cmの頸部から直線的に開き，口縁部下に１条の段状凸帯がつく。この凸帯の下と口頸部中ほどにそれぞれ２条の浅い沈線が巡り，上下の沈線の間には沈線を繋ぐようにして連続斜線文が付されている。胴部は寸づまりの卵形を呈し，外面は縦方向の平行タタキ目，内面は同心円当て具痕が全面に付く。胎土に砂礫を含み，硬めの焼成で，灰色ないし暗黄灰色を呈している。

須恵器杯蓋(2)　天井部外面につまみが付かず，口縁部に身受けのかえりをもつ杯蓋で，復原口径12.0cm，器高2.2cmの大きさ。身受けのかえりは短めでずんぐりとしている。天井部外面はヘラ切離しの後ナデられている。やや軟らかめの焼成で，茶褐色を呈している。

須恵器杯蓋(3)　復原口径11.0cm，器高3.4cmの大きさで，２の杯蓋に対応するものであろう。



第 115 図　20号墳周溝Ⅲ区他出土土器実測図１（1/6, 1/3）

ヘラ切離しの後ナデられる外底面をもち，口縁部は直線的に立ち上がる。軟らかめの焼成で，暗褐色を呈している。

須恵器瓶(5)　口径8.5cm，器高11.5cm，胴最大径9.5cmの大きさの瓶で完形品。外反気味に開く二重口縁で，端部は内弯気味にまとまる。頸部は2.6cm程度の高さで外径も2.6cmにすぼまる。体部は扁球形を呈し，胴最大径の位置に直径1.3cmの円孔がわずかに上向に穿たれている。わずかに中凹みになる底部は，静止ヘラケズリされているが，胴部から上は回転ナデ調整で仕上げられている。胎土に砂礫を若干含むが堅緻に焼成されて暗灰色を呈している。

土師器甕(6)　復原口径21.9cm，残存器高28.3cm，胴最大径25.7cmの大きさの甕で，口縁部は肥厚せず緩やかに外反する。胴外面は縦方向のハケ目，内面はヘラケズリされている。胎土に石英・砂粒・金雲母を若干含み，淡茶褐色ないし明褐色に焼成されている。

土師器壺(7)　復原口径13.3cm，残存器高13.3cm，胴最大径19.2cmの大きさの壺で，風化が進み，うまく接合しないものの破片の量からして完全に一個体分あったと思われる。口縁部は短く緩やかに外反する。調整手法は不明だが，口縁部はヨコナデ，胴部外面はミガキであろうか。胴部内面はヘラケズリされ，頸部下で器壁の厚みに段がみられる。褐色粒を含むが精選された胎土で，明褐色に焼成されている。

土師器台付長頸壺(8)　算盤玉形の体部に直線的に開く口頸部と，外弯して踏張る脚台が付く。口径8.5cm，器高20.5cm，胴最大径15.1cm，裾部外径10.4cmの大きさで，体部の高さは器高の4割程を占める。口頸部は縦方向のヘラミガキで部分的に横方向のヘラミガキが加わる。胴上半は斜方向のハケ目にも似た細かなミガキ，胴下半はヘラケズリに似た横方向のヘラミガキ，脚台部もヘラケズリに似た縦方向のヘラミガキで仕上げられている。内面は口頸部はナデであるが，他の部分もナデであろう。細砂粒を含む精良な胎土で，淡赤褐色に焼成されている。

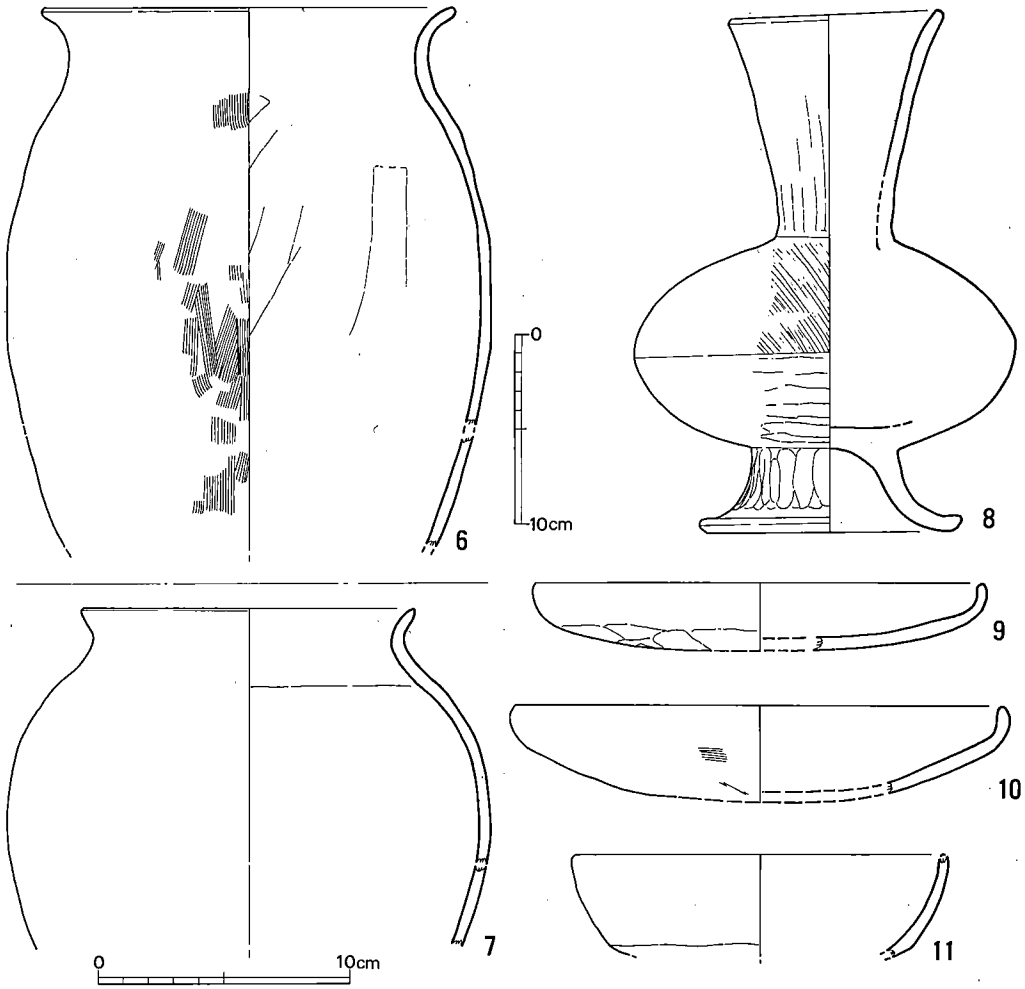
土師器皿(10)　復原口径19.8cm，残存器高3.8cmとやや深めに復原したが，もう少し浅いのかも知れない。口縁部と内面はヨコナデ，胴部外面はミガキ・ケズリの可能性があるものの不明でハケ目らしい痕跡が若干残る。胎土に褐色粒・砂礫を含み，淡明褐色に焼成されている。

左前面出土土器

須恵器杯身(4)　底部を欠くが復原口径11.2cmの大きさで，口縁部は外反気味に立ち上がっている。硬い焼成で淡緑灰色を呈する。

土師器皿(9)　復原口径18.0cm，器高2.7cmの大きさで，平坦な底部から内弯して口縁部が立ち上がる。内面と口縁部外面はヘラミガキか丁寧なナデ，底部外面はヘラケズリに似た雑なヘラミガキである。褐色粒を含む精良な胎土で，淡褐色に焼成されている。

土師器椀(11)　復原口径15.0cm，残存器高4.0cmの大きさで5.0cm前後の器高であろう。口縁部は内弯気味に立ち上がり横方向にヘラミガキされているが，底部側は縦方向のヘラケズリないしはヘラによるナデらしく，境目に稜がある。褐色粒を含むが精良な胎土で，明褐色に焼成



第 116 図　20号墳周溝Ⅲ区他出土土器実測図 2 (1/3, 1/4)

されている。

周溝Ⅲ区出土鉄滓

親指大より少し大きめで16.4gの重さ。一部に植物質の錆着がみられる。

周溝Ⅲ区出土土器は，須恵器甕や杯蓋・身，土師器台付長頸壺などからみて，７世紀後半でも古式の段階であろう。一方左前面出土土器は７世紀前半ないし中頃に比定しうるものである。20号墳に伴うものとしては左前面のものを考えるべきであり，周溝Ⅲ区出土土器はむしろ18号墳に伴う可能性が高いと言えよう。　(小池)

21．21号墳

D地区古墳群の南斜面では西端にあり，20号墳南方の標高82.0～82.8mに位置する古墳で，調査前には墳丘らしいものも確認できなかったので，古墳の存在は，表土を剝いで石室が現れるまで全く分らなかった。東側には22号墳がある。

また，周溝は表土を剝いでも確認できなかった。

主体部（図版100－2，第118図）

この古墳の主体部は，主軸方位をN 6°30′Eにとり，ほぼ南に開口する単室の横穴式石室であるが，緑泥片岩の主として板石を用いて構築されている。

石室は，前面側は削平を受けて残りが悪いが，残存する石室全長は1.58mを測る。

玄室は，奥壁左側がせり出し，右袖石部を失うが，横に長い巾着形の平面プランを呈し，床面で長さ0.78m，奥壁での幅1.50m弱だが，両側壁がわずかに膨らみ最大幅1.55mを測る。玄室内部の床面は攪乱を受けており，左側に敷石の一部と思われる石が散在している。

奥壁は，中央に高さ・幅ともに40cm前後，厚さ15cm強の板石を立てて据え，両脇は基底部から小口積みしていて3段程度残っている。左側壁・右側壁とも基底部から小口積みないし平積みして，持ち送り気味の壁体をなしているが，左側壁で4段程度，約0.40mの高さに残っている。玄門袖石は左側のみ残る。高さ50cm，幅30cm，厚さ25cm程の石を立てて据えているが，前面側に倒れている。右側の袖石は抜き取られているが，玄門幅は0.40～0.45m程度であろう。玄門には，長さ33cm，幅12cm，厚さ7cm程の石が框石のように横たわるが，框石としては小さく，閉塞石の一部かも知れない。

羨道は，左側壁で0.80m分続き，幅0.45mの広さである。左側壁では基底部に平積みの石がみられるが，右側壁ではやや大振りな石が据えられている。

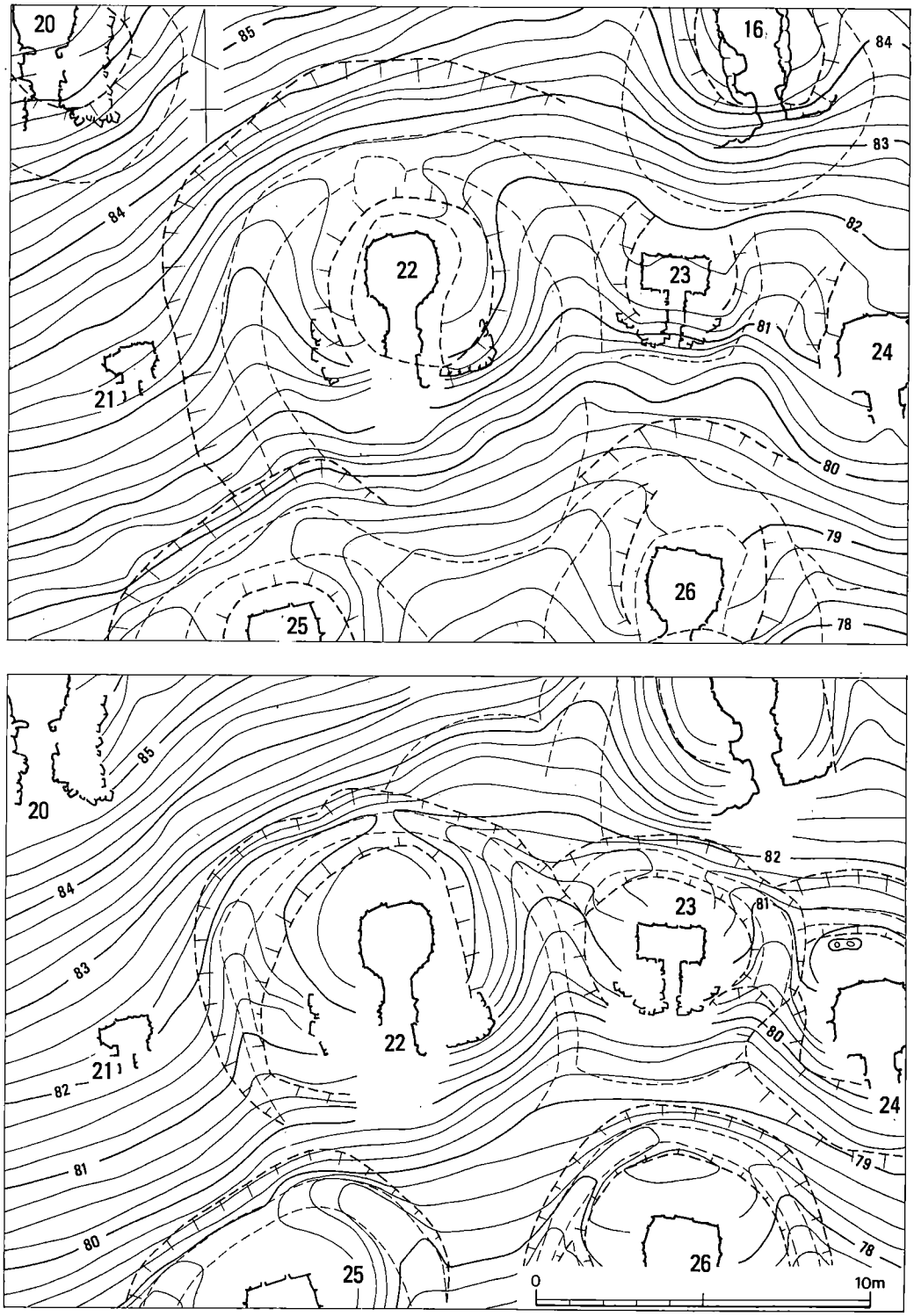
閉塞は，羨道部全体に及ぶが，攪乱を受けて整然としない。

石室内攪乱土から須恵器杯蓋・身片，石室外の西側2mの位置で土師器甕片が出土した。

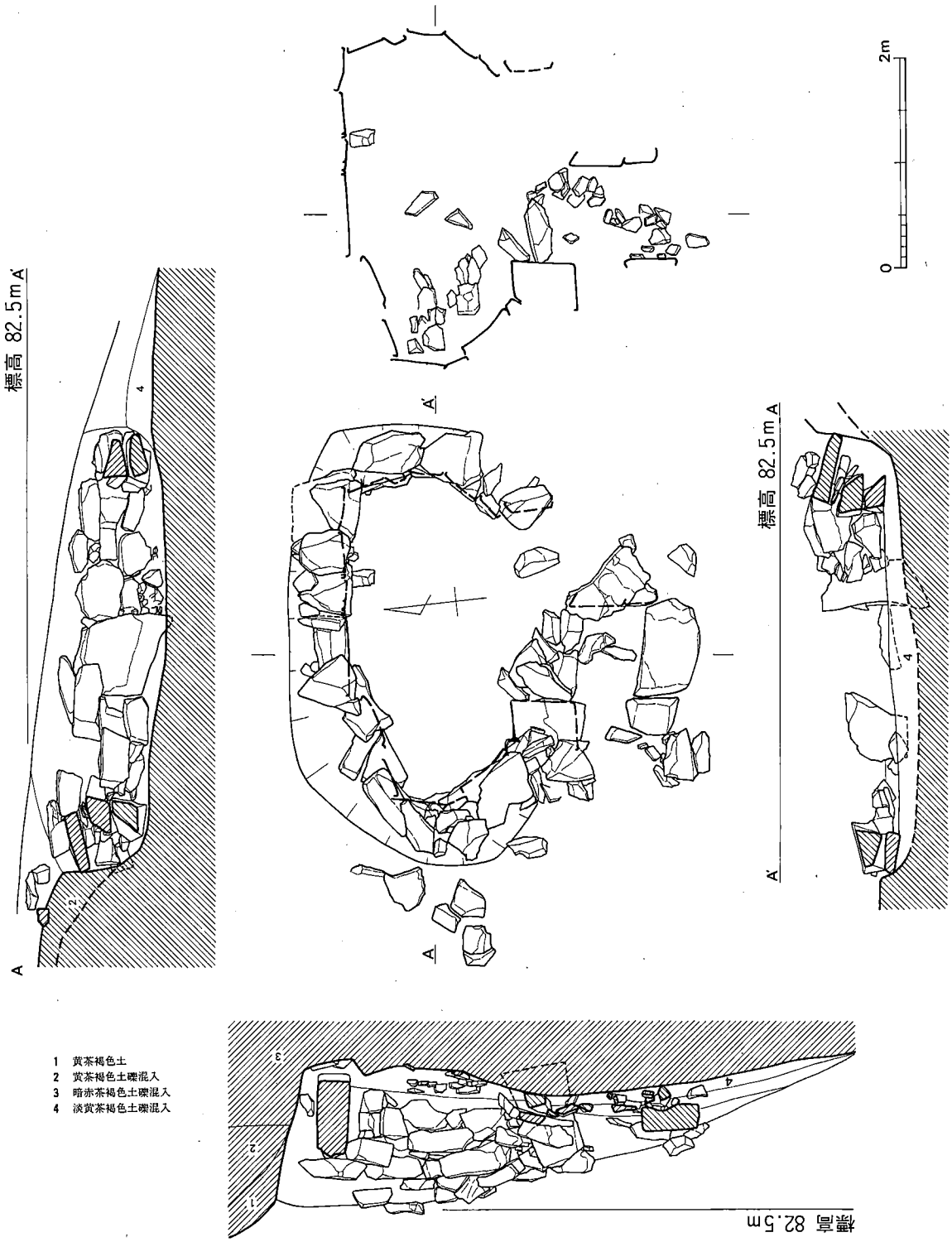
出土遺物（第119図）

須恵器杯蓋(1)　天井部の破片だが，口縁部を失う。天井部外面はヘラ切離しの後ナデられているが，ヘラ記号の一部だけ残る。硬い焼成で青灰色を呈している。

須恵器杯身(2)　高台の付く杯身の底部破片で，口縁部を失う。外面下半に回転ヘラケズリ痕がみられる。硬い焼成で暗灰色を呈している。



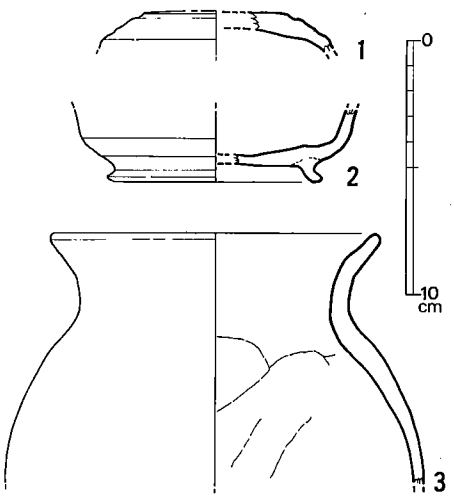
第 117 図　21～23号墳墳丘・地山整形面測量図（1/200）



第 118 図　21号墳石室実測図（1/30）

土師器甕(3)　復原口径13.0cm，残存器高9.8cm，胴最大径16.4cmの大きさ。口縁部は肥厚せず緩やかに外反して，端部内面がわずかに内弯気味である。口縁部はヨコナデ，胴部外面は磨滅して調整の痕跡不明，内面にはヘラケズリ痕がみられる。胎土に褐色粒を含み，淡い明褐色ないし黄褐色に焼成されている。

出土土器では，須恵器杯身が7世紀後半頃に比定されるものである。土師器甕は，20号墳前面から延長した位置の出土であり，21号墳よりむしろ20号墳に伴う可能性がある。　　(小池)



第 119図　21号墳出土土器実測図 (1/3)

22. 22号墳

墳　丘 (図版101－1，第117図)

22号墳は，D地区斜面下段の標高79～83mの位置にあり，周辺には切り合う状態で多くの古墳がつくられている。しかし22号墳はこれらの中では最も大型墳である。墳丘頂部は盗掘により大きく陥没しているが，斜面下方側からの墳丘高は3.50mと高い。また，現状では，標高84.0mから82.5m付近にかけて周溝が掘られ，石室前面を除く三方に巡っている。周溝外周の径は約14m，内底径は9mを測り，断面での傾斜はゆるいものである。

墳丘断面土層図をみると，左側壁側では側壁内面より3mの箇所にて幅1mの断面U字状を呈する落ち込みがみられるが，落ち込み内の堆積土は墳丘盛土のものとは明らかに異なっている。古墳に伴うものかどうかはっきりしない。右側壁側では，当墳の周溝を切って23号墳の周溝がつくられている。奥壁側では，深い掘り込みはみられず，斜面を円形状に整形しただけのものである。

主体部 (図版101－2・102・103－1・2，第120図)

22号墳の内部主体は複室の横穴式石室で，主軸方位はN 4 °Wとほぼ真南に開口している。主体部の掘り方は，奥壁側がやや幅広の長方形で，羨道側では開口する。奥壁側での幅は3.3m，

深さ１mを測る。

横穴式石室は盗掘のため天井石を全く失っている。石室は前室袖石部まで約4.50m，羨道部端まで6.30mである。

玄室は平面扁円球状で，奥壁と両側壁の境は明瞭ではない。左側壁側はやや直線的につくられている。玄室規模は，長さ2.12m，幅2.16mである。奥壁は幅75cm，高さ100cmの大きく分厚い板石を縦位に据えて鏡石とし，その上部には小さい割石を平積みしている。奥壁現存高は1.40mである。左右の側壁は，基底部から板石の平積みであるが，奥壁寄りには大きめの石が選ばれている。また，基底部より0.60mほどの中段から上は，やや小振りの板石が使われている。右側壁は現存高1.40m，13段前後の積み，左側壁は現存高1.50mで，15段前後の積みである。両側壁はともに直に積まれている。床面には割石が敷かれ，主として縦位に配置されている。玄門の幅は狭い箇所では0.81m，長さは0.70mである。左右の袖石は，板石を縦位に据えたもので，右袖が0.90m，左袖が0.70mの高さを有している。さらに，左袖石上部は２～３段の割石が平積みされているが，右袖石上部には大きな塊石が一段積まれている。玄門部の床面には，玄室内寄りの部分に長さ25cm，幅89cmの仕切石が埋められている。

前室は長さ0.70m，幅1.10mと狭小なもので，平面形はわずかに胴張りとなる。右側壁は基底部から割石の平積みで，左側壁は上部を欠損するが基底部は割石の平積みである。右側壁は現存高1.00mで10段目まで遺存し，上段が外へ開くように積まれている。前室の袖石は，左壁は欠損し根石を残すのみで，右壁のものは倒れかけてはいるが辛うじて遺存している。高さ0.80m，幅0.65mで縦位に据えられている。また，右袖石外端から墳丘方向に内護列石状の石垣が3.00mほど延びている。この石垣の遺存の良い所では，６段0.80mほどの高さである。左側壁側では，石室寄りの箇所では欠損しているが，墳裾側では良く遺存している。

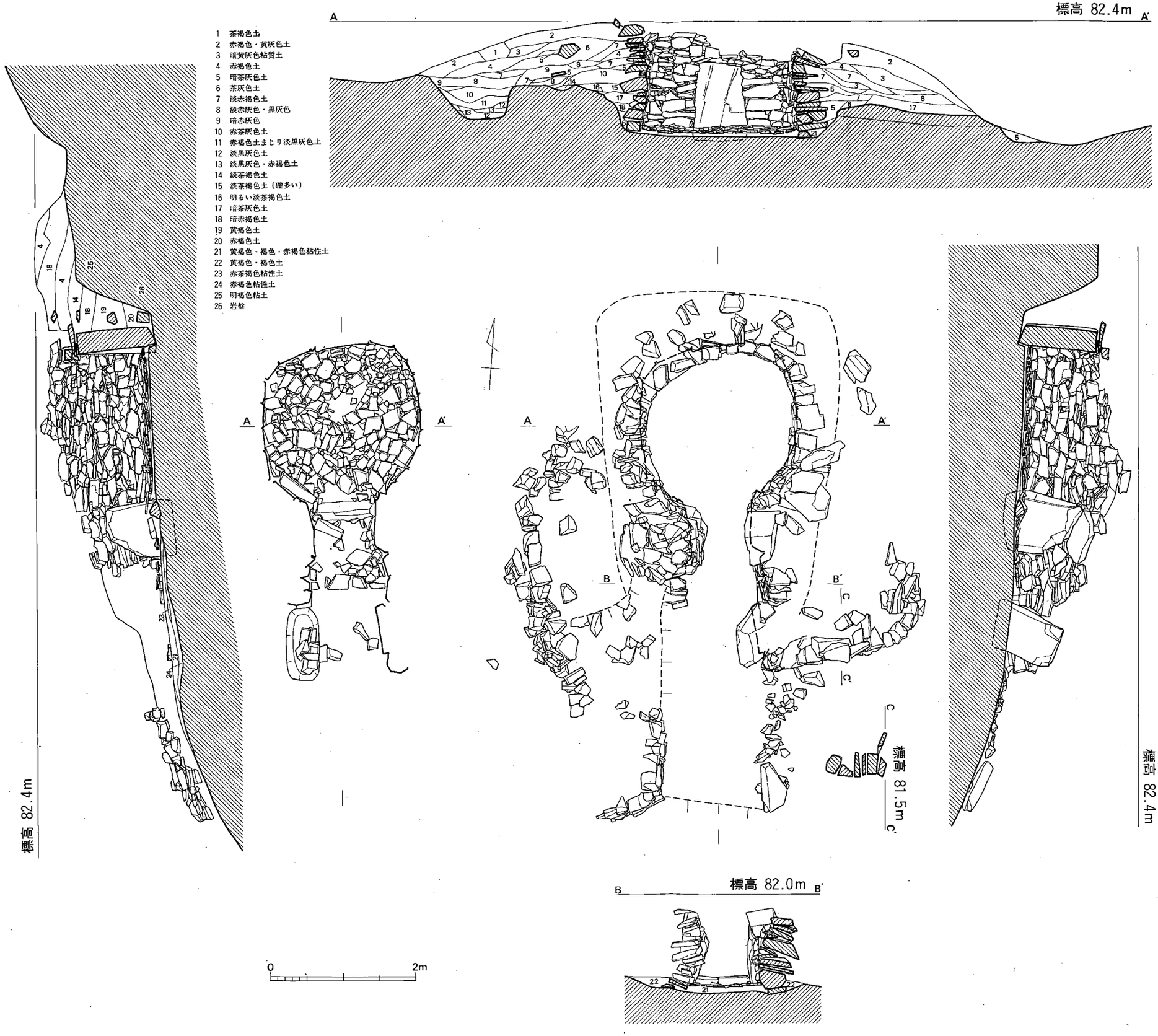
羨道は長さ2.00mで，入口側床面は急激に下降している。壁体は右側壁の石室寄りの部分がわずかに遺存する程度で，その他は基底部のみしか遺存していない。左壁側では，外端部が外へ屈折して築かれている。

石室および列石に使われている石材は，ほとんどが緑泥片岩である。

遺物出土状況（図版103－３・104－１，第121図）

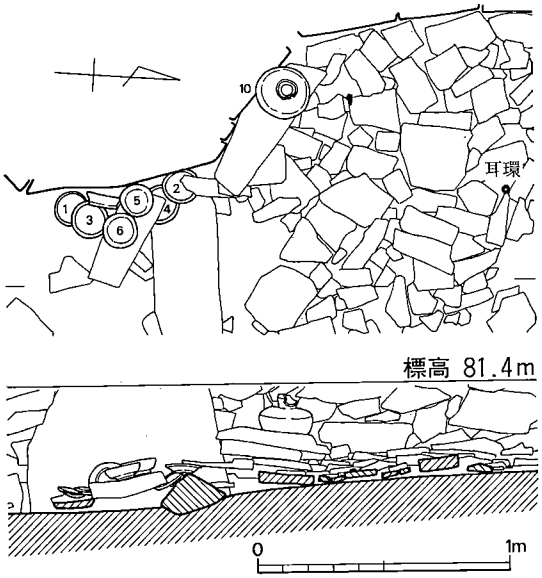
22号墳からの遺物は，石室と周溝から出土している。石室内出土遺物は，耳環１，鉄鏃片１，刀子片１，ガラス玉50と，多数の土器類がある。耳環類は動いているが，土器類は左玄門袖石付近に寄せ集められた状態で出土している（第121図）。これら土器類は９個あり，全て須恵器である。内訳は，平瓶１，杯蓋４，杯身４で，蓋は全て裏返し，身は１個を除いて正立に近い状態で出土した。その他に，石室羨道部から須恵器高坏１も出土している。

周溝内からも多数の土器類が出土している。主として石室左壁側のⅠ区とⅡ区周溝からの出



第 120 図　柿原D地区22号墳石室実測図（1/60）

土で，Ⅰ区のものは石室前庭部出土のものも含む。また，出土破片のなかには，近接する17・18・25・26号墳周溝出土の破片と接合するものもある。（新原）



第 121 図　22号墳石室遺物出土状況実測図（1/30）

出土遺物（図版104－2・105，第122～128図）

石室内出土土器（第122図）

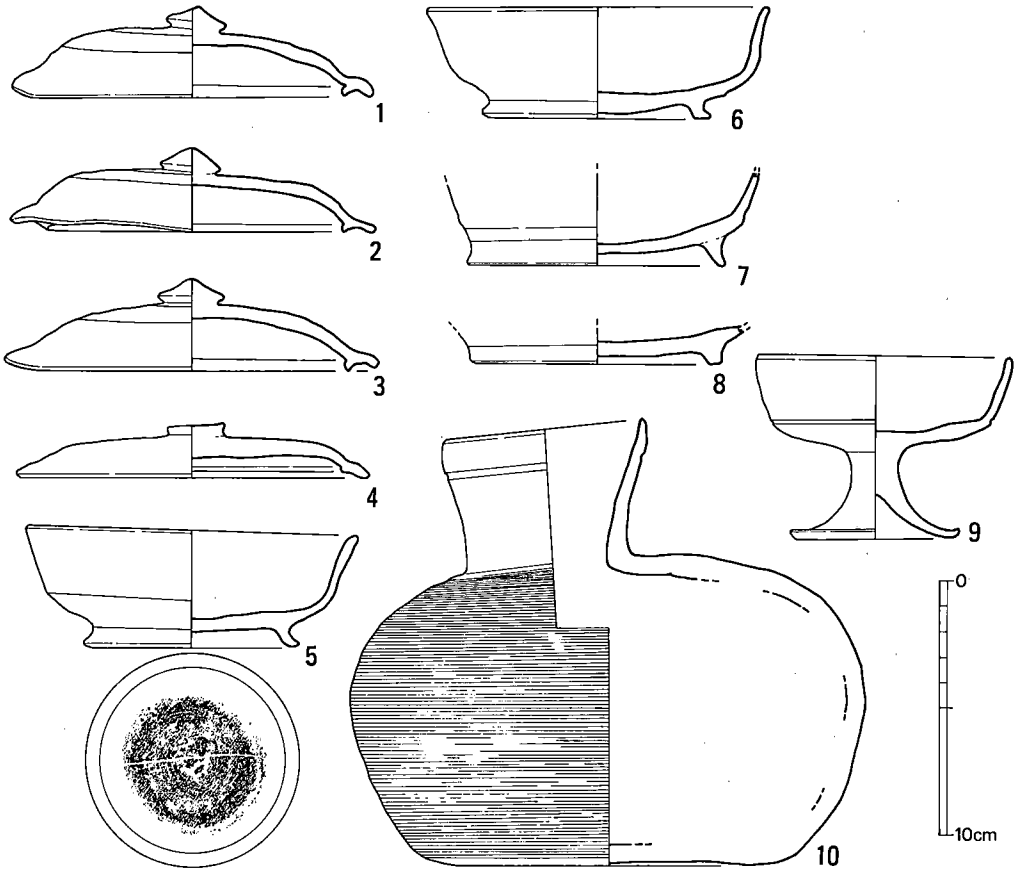
須恵器杯蓋(1～4)　1～3は擬宝珠形つまみをもち，口縁部に身受けのかえりをもつもの。口縁部は外方へせり出し，口縁部端とかえりの端がほぼ同じ高さである。天井部外面は回転ヘラケズリされ，内面は不定方向にナデ調整される。1は口径14.2cm，器高3.7cm，かえりの径11.9cm，2は口径14.4cm，器高3.3cm，かえりの径11.8cm，3は口径14.8cm，器高3.6cm，かえりの径12.3cmの大きさ。3点ともに砂粒を含むが精良な胎土で堅緻に焼成されている。

4は扁平な天井部に低平なつまみが付き，口縁部内側に身受けのかえりがある。復原口径13.9cm，器高2.1cmの大きさで，焼成が悪く磨滅して，調整痕は不明。

須恵器杯身(5～8)　いずれも高台をもつ杯身だが，7・8は底部破片である。5・6は外反気味に口縁部が立ち上がり，高台は外方に踏張るように付く。外底面はヘラ切離しの後ナデられている。5は口径13.1cm，器高4.6cm，高台径8.5cmの大きさで，外底面に単直線のヘラ記号が付されている。やや軟質な焼成で灰色を呈している。6は口径13.5cm，器高4.4cm，高台径9.0cmの大きさ。堅緻な焼成で暗青灰色を呈している。7は体部の下端からさほどくびれずに高台が付き，高台径10.2cmの大きさ。外底面はヘラ切離しの後ナデられる。8は高台が低めである。軟質な焼成で調整痕がはっきりしない。

須恵器高杯(9)　前室と墓道出土の破片が接合した。器高7.3cm，口径10.1cm，裾外径6.6cmの大きさ。杯部は3.5cmの高さで，口縁部は直線的に立ち上がり口縁部端は内弯気味にまとまる。杯部下端に1条の浅い沈線が巡る。中実の柱状部は直径1.8cmで裾に向かって緩やかに大きく広がり，裾端部は外反する。全体に回転ヨコナデ仕上げされ，杯部内底面は不定方向ナデがみられる。細砂粒を含む胎土で堅緻に焼成され暗緑灰色を呈している。

須恵器平瓶(10)　器高17.5cm，胴最大径20.4cmの大きさの平瓶。体部の高さは12.3cmで外面全



第 122 図　22号墳石室出土土器実測図（1/3）

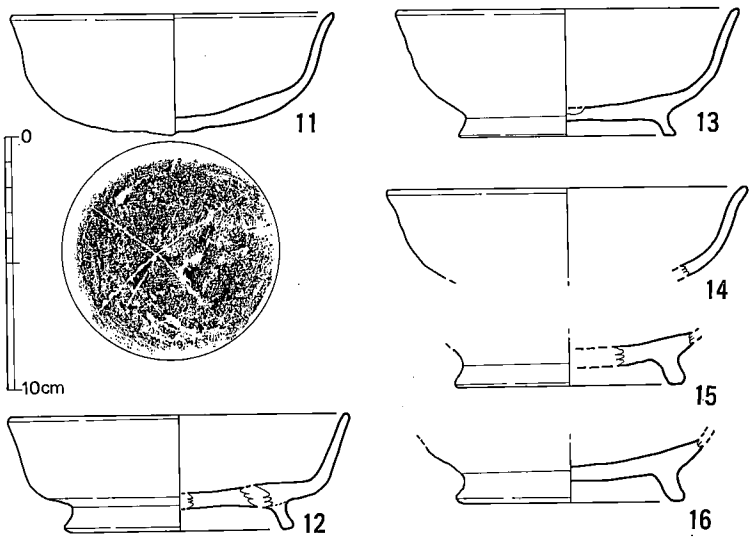
体にカキ目がみられる。底径14.6cmの底部は平底で，外底面はナデ調整されている。口頸部は高さ5.4cm，径6.4cmの頸部からわずかに広がり気味に立ち上がり，口径は7.2cmである。ヨコナデで仕上げられ，口縁下に１条の沈線が巡る。砂粒を多く含む胎土で，堅緻に焼成されて黒灰色を呈す。

前庭部・周溝Ｉ区出土土器（第123・124図）

須恵器杯身(11～16)　11は前庭部出土。復原口径12.9cm，器高4.7cmの大きさで，高台は付かない。丸底の底部から口縁部が外反気味に立ち上がる。外底面はヘラ切離しのままで，細い沈線による×字形のヘラ記号が付されている。細砂粒を含む胎土でやや軟質に焼成され淡緑灰黄色を呈している。

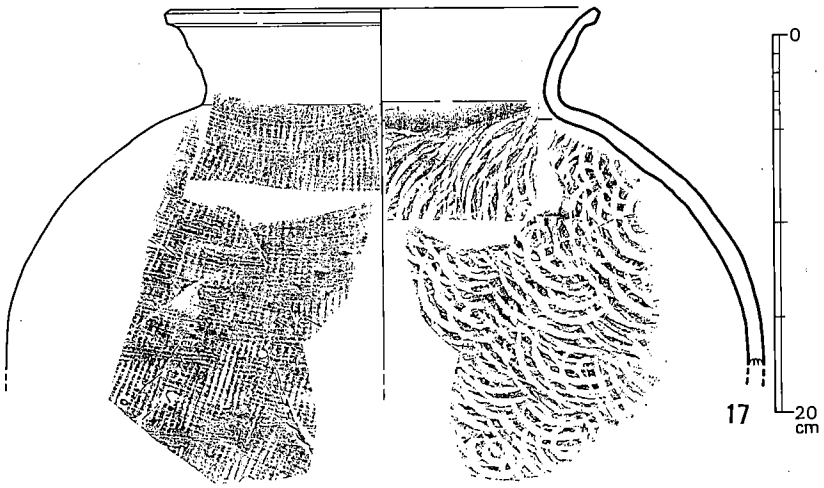
12～16は周溝Ｉ区出土。口縁部破片で高台の有無が分らない14以外は，高台をもつ杯身である。12は復原口径13.5cm，器高4.5cm，高台径9.0cmの大きさ。平坦な底部から口縁部が直線的

に立ち上がるが，体部は浅めである。高台は外方に踏張るように付く。やや軟質な焼成で茶褐色を呈している。13・14は口縁部が外反気味に立ち上がり，体部は深い。13は口径13.6cm，器高5.0cm，高台径8.6cmの大きさで，高台は外方に踏張るように付く。14は復原口径14.3cm，残存器高3.5cmの大きさ。硬めの焼成で黒灰色ないし暗紫灰色を呈している。15・16は高台部の破片だが，高台は外方に踏張るように付く。焼成は悪い。

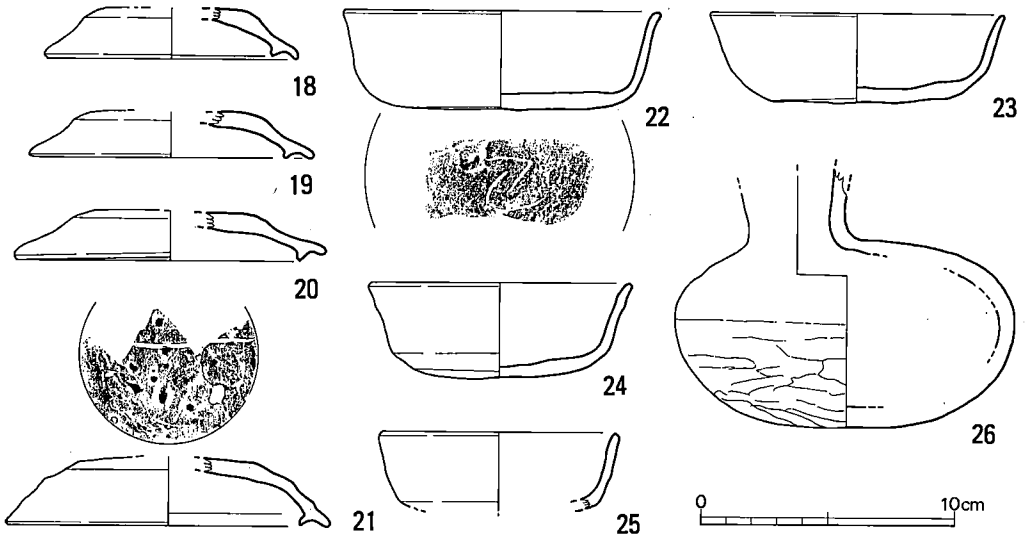


第 123 図　22号墳前庭部・周溝Ⅰ区出土土器実測図（1/3）

須恵器甕(17)　周溝Ⅰ区出土破片と25号周溝Ⅲ区出土破片で，同一個体である。復原口径23.0cm，残存器高19.0cm，胴最大径40.2cmの大きさの中形甕である。口縁部は径18.6cmの頸部から短く外反し，口縁端部の外面に低い１条凸帯をつくりだしている。胴部外面は縦方向の平行タタキ目のあと部分的にカキ目状のヨコナデが加わる。胴部内面は同心円当て具痕がみられる。



第 124 図　22号墳周溝Ⅰ区出土土器実測図（1/4）



第 125 図　22号墳周溝II区出土土器実測図1（1/3）

胎土に砂粒を多く含み硬く焼成されている。外面は黄灰褐色ないし黒色，内面は紫褐色を呈している。

周溝II区出土土器（第125・126図）

須恵器杯蓋(18～21) いずれも平坦な天井部につまみが付かないが，口縁部の身受けのかえりがある。天井部外面はヘラ切離しの後ナデられ，20・21は雑なナデである。18は復原口径10.0cm，器高2.0cm，19は復原口径11.3cm，器高1.8cm，20は復原口径12.3cm，器高2.0cm，

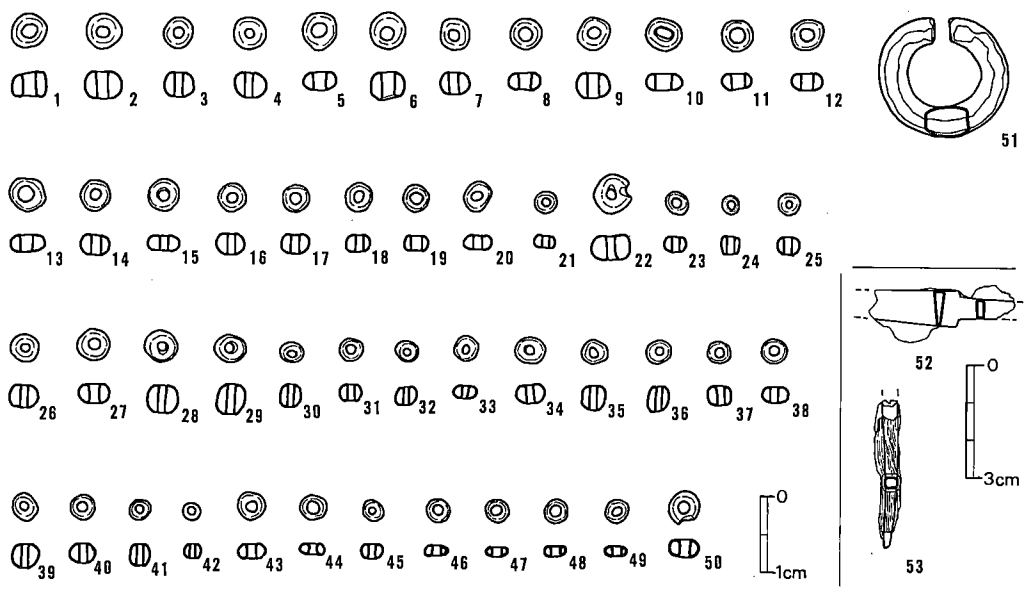
第 126 図　22号墳周溝II区出土土器実測図2（1/4）

21は復原口径13.0cm，器高2.7cmで天井部外面に単直線？のヘラ記号が付されている。いずれも硬い焼成で，黒灰色ないし灰色を呈している。

須恵器杯身(22～25)　いずれも高台の付かない杯身。22は復原口径12.6cm，器高3.9cmの大きさ。平坦な底部から口縁部が直線的に立ち上がり，端部はわずかに外反する。外底面はヘラ切離しの後ナデられ，C字と逆C字を組合わせたヘラ記号が付されている。23は口径11.6cm，器高3.5cmの大きさ。平坦な底部から口縁部が直線的に立ち上がる。外底面はヘラ切離しのあと未調整である。24は復原口径10.4cm，器高3.8cmの大きさ。ヘラ切離しの後ナデられる底部から口縁部が直線的に立ち上がり，端部はわずかに外反する。25は復原口径9.6cm，残存器高3.0cmで3.5cm程の器高であろう。いずれも硬く焼成されている。

須恵器平瓶(26)　26は，口縁部を欠くが，残存器高10.1cm，体部高7.4cm，胴最大径13.4cmの大きさで，口縁部の欠損はわずかであろう。体部は扁平な楕円形で，底部は丸底。胴部下半から底面にかけて静止ヘラケズリされている。肩部から口縁部にかけては回転ヨコナデ仕上げである。胎土に細砂粒を含み，硬めの焼成だが黄灰色を呈している。

土師器甑(27)　復原口径30.6cm，器高29.8cm，復原底径13.6cmの大きさの甑。口縁部は肥厚せずに緩やかに，かつ短く外反する。また胴下半から底端にかけては丸味をもってすぼまる。胴部最大径28.8cmは器高の１／３の位置にあり，断面扁平楕円形の牛角状把手が一対付けられている。体部外面は縦方向のハケ目調整，内面はヘラケズリで，口縁部下の内面に横方向のハ



第 127 図　22号墳石室出土装身具・鉄器実測図（実大，1/2）

ケ目がみられる。胎土に砂粒を含むが，良好な焼成で橙褐色の色調を呈している。

土師器甕(28)　周溝Ⅲ区側で出土した。口縁部破片で，復原口径24.5cmの大きさ。口縁部は強く外反して肥厚する。胴部外面はハケ目調整のようだが，磨滅してはっきりしない。

石室出土装身具（第127図，表５）

ガラス小玉（１～50）　１～25は床面発見，26～50は床面に近い埋土から出土したもの。コバルトブルーと，スカイブルーの色調を呈するものがあり，22はスカイブルーの濃い色調を呈する。また，10・18・25は風化が進んでいる。外径2.7～5.2㎜，厚さ1.3～4.0㎜の大きさである。

耳　環(51)　銅地金銅張りの耳環で，長径17.2㎜，短径15.7㎜の大きさ。楕円形断面の丸棒を環にし，２㎜強の隙間が開く。外縁と内縁は光沢をもっているが，楕円形断面の長軸両端に

表５　22号墳出土玉類一覧表

（単位㎜）

No.	種類	径	厚さ	孔径	質	色調	No.	種類	径	厚さ	孔径	質	色調
1	小玉	4.6～5.2	3.8	1.5～2.2	ガラス	コバルトブルー	26	小玉	3.9	3.1	1.1	ガラス	スカイブルー
2	〃	4.9～5.1	3.8	1.3	〃	〃	27	〃	4.5	2.6	1.3	〃	〃
3	〃	3.8～4.5	3.5	1.2	〃	〃	28	〃	4.3	3.8	1.3	〃	〃
4	〃	4.6	3.4	1.1	〃	〃	29	〃	3.8	3.7	3.0	〃	〃
5	〃	4.5～5.0	2.3	1.7	〃	〃	30	〃	3.0	3.0	1.1	〃	〃
6	〃	5.0	4.0	1.3	〃	〃	31	〃	3.2	2.3	1.2	〃	〃
7	〃	3.9～4.5	3.1	1.2	〃	〃	32	〃	2.7	2.5	1.1	〃	〃
8	〃	4.6	2.3	1.6	〃	〃	33	〃	3.4～3.8	1.7	1.0～1.4	〃	〃
9	〃	4.3	3.5	1.5	〃	〃	34	〃	3.5～4.1	2.4	1.1	〃	コバルトブルー
10	〃	4.5～5.1	2.2	1.0～2.0	〃	〃 風化進む	35	〃	3.6	3.3	1.1	〃	〃
11	〃	4.5	2.3	1.7	〃	〃	36	〃	2.8	3.3	1.0	〃	〃
12	〃	4.2～4.7	2.3	1.6	〃	〃	37	〃	3.0	2.7	1.1	〃	〃
13	〃	4.7～5.0	2.3	1.7	〃	〃	38	〃	3.5	2.2	1.1	〃	〃
14	〃	4.2	2.7	1.3	〃	〃	39	〃	3.5	3.2	1.0	〃	〃
15	〃	4.4	2.1	1.2	〃	〃	40	〃	3.5	2.5	1.1	〃	〃
16	〃	3.9	2.8	1.3	〃	〃	41	〃	3.0	2.9	1.0	〃	〃
17	〃	4.0	2.4	1.3	〃	〃	42	〃	2.5	2.0	0.9	〃	〃
18	〃	4.0	2.3	1.2	〃	〃 やや風化	43	〃	3.9	2.1	1.2	〃	〃
19	〃	3.6	2.2	1.3	〃	〃	44	〃	3.6	1.5	1.2	〃	〃
20	〃	3.7～4.2	1.9	1.2	〃	〃	45	〃	3.1	2.0	0.9	〃	〃
21	〃	2.8	1.7	1.0	〃	〃	46	〃	3.2	1.7	1.1	〃	〃
22	〃	5.1	3.4	1.3	〃	濃いスカイブルー	47	〃	3.2	1.4	1.2	〃	〃
23	〃	3.2	2.1	1.1	〃	スカイブルー	48	〃	3.2	1.5	1.2	〃	〃
24	〃	2.8	2.4	1.1	〃	〃	49	〃	3.0～3.2	1.3	0.9～1.3	〃	〃
25	〃	3.2	2.2	1.0	〃	〃 風化進む	50	〃	4.3	2.7	1.2	〃	〃

なる面は剝落していて現存値6.1㎜である。なお短軸の厚みは3.7㎜を測る。

石室出土鉄製品（第127図）

鉄刀子(52)　両端を欠き，現存長3.8㎝，関部幅1.0㎝，刃部厚み0.3㎝弱の大きさ。茎部に木質は遺存しない。

鉄　釘(53)　現存長3.8㎝の先端部破片。0.3×0.3㎝の方形断面をもち，木質が錆着する。

羨道出土鉄滓

長さ3.0㎝，幅・厚さともに2.0㎝程度で，重量22gを測る鉄滓が１点出土している。

周溝出土鉄滓

周溝Ⅲ区から１点出土している。長さ4.0㎝，幅3.0㎝，厚さ2.0㎝，重量15.9gを測る。

石室内出土の須恵器杯蓋・身及び高杯では，７世紀中頃から後半にかけての時期が与えられる。また，周溝Ⅰ区の土器もほぼ大差のない時期のものであろう。しかし，周溝Ⅱ区出土の土器では，須恵器杯蓋・身，平瓶ともに７世紀前半に比定しうるものがある。なお，18号墳前面出土土器片と，17号墳周溝Ⅰ区・20号墳周溝Ⅱ区及び，22号墳周溝Ⅱ区出土土器片が接合した例があるので，22号墳周溝Ⅱ区の遺物は17・18号墳からもたらされた可能性があろう。（小池）

23．23号墳

墳　丘（図版107－１，第117図）

23号墳はD地区斜面下段の標高80～82mの間に築かれ，下段に群集する古墳のなかでは中位に位置している。当墳より上方北には16号墳が，下方南には26号墳がつくられており，また東西は24・22号墳に挟まれ，狭い場所にひっそりと築かれている。

調査前の状況は，わずかな高まりが認められる程度で，墳頂は陥没壙もなく，周溝は完全に埋没していた。現況での墳丘計測値は，東西５m，南北4.5mで，高さは1.5mである。小型の円墳である。墳丘除去後，周溝が石室入口側と22号墳がある西側を除く北と東の２方向で半円状に検出された。奥壁背面側での計測では，幅１m，深さ0.4mを測り，断面はV字状をなしている。東西間での周溝内径は５m，外径は８mであった。また，周溝は東側で，24号墳丘周溝を切っており，この部分の底面にて多数の塊石とともに遺物が出土している。なお，墳丘内に列石等の遺構は確認されなかった。

主体部（図版106－２，107・108，第128図）

23号墳の主体部は，単室の横穴式石室で，主軸方位はＮ４°Ｗのほぼ真南にとり，斜面下位側に開口する。石室の掘り方は，傾斜角度約30°の急斜面を奥行２m，幅３mの方形に掘り込んだもので，奥壁側周縁はさらに一段深くなっている。この部分での深さは0.65mを測る。

横穴式石室は上半部が盗掘のため破壊され，その石材が石室内へ埋没していた。また，石室入口付近は断層による地滑りのため陥没し，一部が損壊していた。

石室は全長2.78mで，全体の平面形は「T字形」を呈している。玄室は長さ0.94m，最大幅2.00mで１：２の比を示す横位の長方形をなす。玄室奥壁は，主軸中央に当墳では最も大きい割石を立てて鏡石とし，両脇には15cm前後の割石を２枚づつ配して奥壁としている。奥壁は基底部より５～６段目まで遺存し，0.75mを測る。石積みは下半は平積みであるが上半は縦位に近い積みである。壁面は直であるが上部がやや外開きとなる。

左右の側壁は，基底部から割石の平積みで，６～７段目まで遺存し，最高で0.65mを測る。石積みは奥壁側に比べると雑で，石積みの隙間には粘土を充塡している。壁面はほぼ直立している。床面は一部欠失しているが全面に敷石がみられる。薄い板石が使われ，主軸と同方向の縦位に配している。床面は，奥壁側が高くなっている。天井石は遺存しないが，石室の規模からするとそう高いものは考えられず，せいぜい1.5m前後の低いものであったろう。

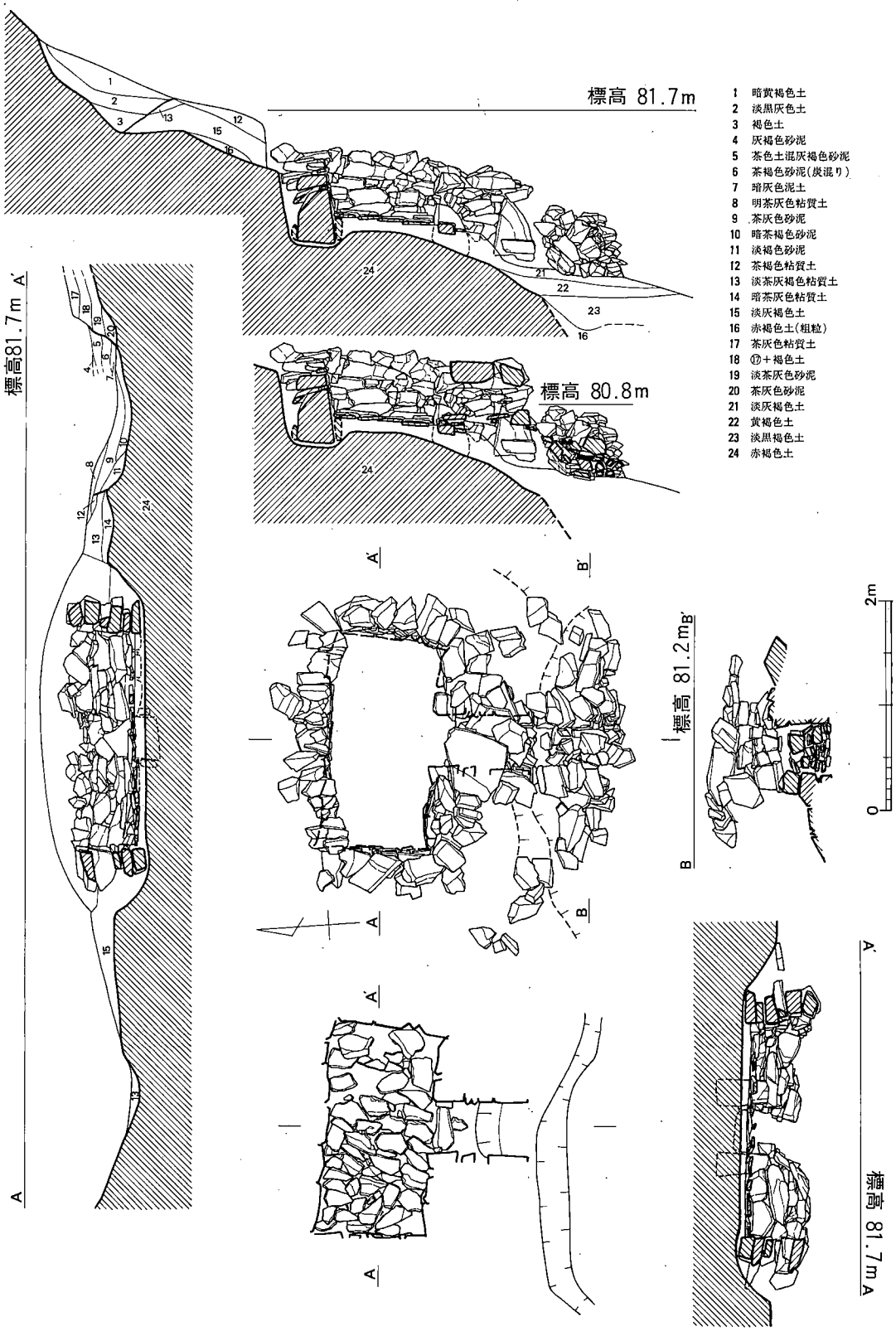
羨道部は，長さ1.84m，幅0.50m前後の幅狭のもので，入口付近はやや広くなる。玄室に接する部分は三角形の割石を縦位に据えて玄門とし，玄門から0.30m程入口側の側壁も玄門と同様な三角形割石を立てている。そして両者の間は基底部から板石の平積みによる側壁がつくられている。また，玄門部と縦位に据えた側壁部の床面にはそれぞれ仕切石が埋め込まれており，この箇所は複室の前室部分が構造状退化したもので，石積みの技法にのみ複室の意識が残存したものと思われる。羨道部入口付近の側壁は割石が斜位に積まれている。玄門部には天井石一個が遺存しており，一部分でも天井石が遺存したいたのは柿原古墳群で発掘した約80基の横穴式石室のうち当23号墳のみである。その部分の天井石までの高さは0.36mと低いもので，極めて狭少な羨道といえる。

閉塞は羨道入口部分にて行われていたが，やはり断層により陥没していた。閉塞石は板石によるもので，主軸方向に平行になるように据え，４～５段積みの0.40m高が残っていた。

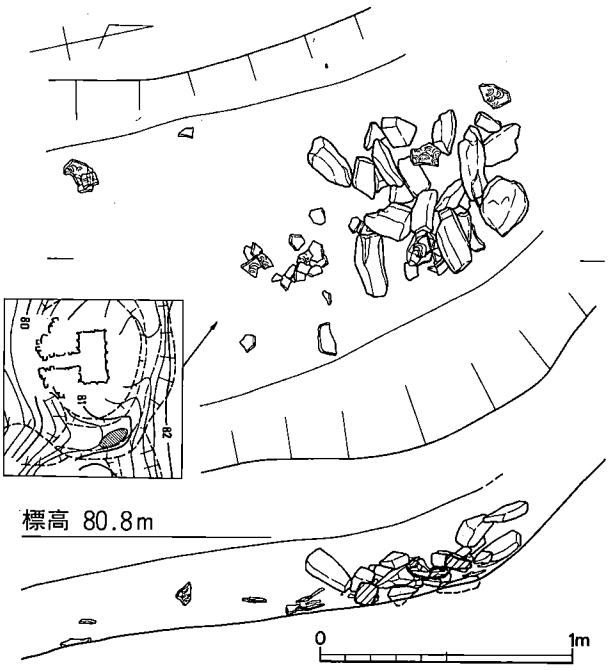
石室，敷石および閉塞に使われた石材はほとんど緑泥片岩である。

遺物出土状況（図版109－１，第129図）

23号墳からの遺物は，石室と墳丘内列石付近，それに石室前面の斜面と東側周溝内から出土している。石室内のものは，鉄鏃と鉄釘の小片，土器破片があり，列石付近では須恵器杯がみ



第 128 図　23号墳石室実測図（1/60）



第 129 図　23号墳周溝遺物出土状況（1/30）

られる。石室前面と周溝内出土のものは，動いているものが多く，ほとんどが小片での出土である。また，完形に近い須恵器高杯も１点みられるが，これは23号墳の下方にある26号墳周溝出土の破片と接合してほぼ完形になる。その他上方の古墳からの流入とみられる破片も出土しており，周溝出土土器は注意を要する。

出土遺物（図版109－２，第130～132図）

石室・墳丘内出土土器（第130図）

須恵器杯蓋(1)　墳丘内左内護列石背後にて出土したものである。口径9.4cm，器高3.3cm，天井部は丸味をもち体部は直立するが，口縁部はわずかに外反する。天井部外面付近は回転ヘラケズリであるが，他はナデられている。大粒の砂粒を多く含む胎土は良い。焼成は堅緻で灰色を呈す。外面天井部にはヘラ記号が印される。

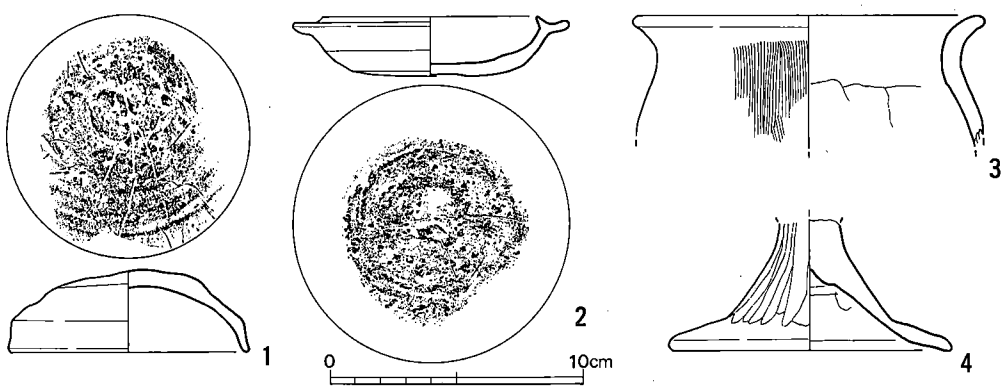
須恵器杯身(2)　墳丘内右内護列石背後出土品で，口径8.6cm，かえりの径10.7cm，器高2.4cmの完形品である。外底部は平坦面に近く，ナデ仕上げで，ヘラ記号が印される。胎土は大粒の砂粒を多く含む。焼成堅緻で暗灰色を呈す。

土師器甕(3)　玄室内床面出土品で，口縁部のみの小片である。復原口径14.0cm，器壁は薄く，口縁部は直立して外反する。体部外面は縦位のハケ目，内面ヘラケズリである。砂粒を少量含むが胎土は良好で，焼成も良い。暗黄褐色を呈す。

土師器高杯(4)　石室内埋土出土で，下半部の破片である。現存高5.1cm，裾部復原口径11.4cm。柱状部外面はヘラケズリされ，裾部はゆるく外反しヨコナデである。内面頂部のヘラケズリは粗い。胎土・焼成ともに良好で，淡褐色を呈す。

石室前面出土土器（第131図）

須恵器杯身（５・６）　ともに蓋の受け部を有するもので，５は半分遺存するが６は口縁部小片である。両者とも復原口径8.0cm，受け部径11.0cm前後の小型品である。５は器高2.5cmを測

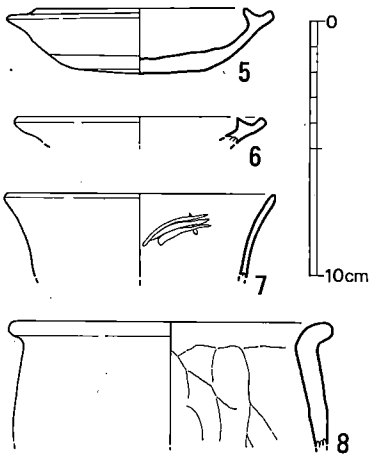


第 130 図　23号墳石室・墳丘内出土土器実測図（1/3）

り，外底面はヘラケズリされ狭い平坦面をつくる。砂粒を多く含むが焼成は堅緻である。灰色を呈す。なお，受け部端には重ね焼きしたと思われる坏蓋の痕跡がみられる。6は胎土・焼成ともに良好で，紫灰色を呈す。

須恵器平瓶(7)　口縁部の小片で，器種を特定できないが，ここでは平瓶口縁部片として報告する。内面に暗文風のヘラ記号がみられる。

土師器甕(8)　復原口径13.0cmの小型甕破片である。口縁部は短く屈曲し，体部は直である。体部該面は縦位のハケ目，内面はヘラケズリであるが不明瞭である。胎土には大粒の砂粒を含むが良好で，焼成も良い。明褐色を呈す。



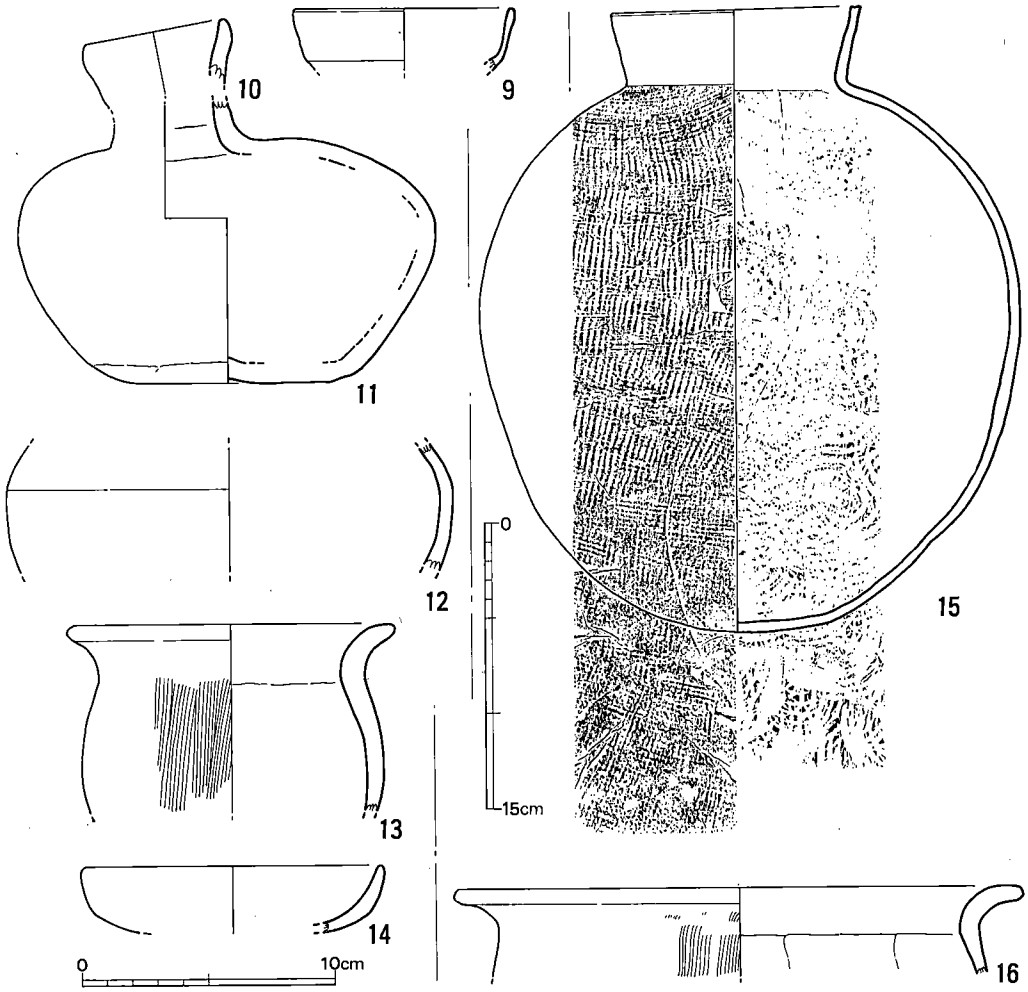
第 131 図　23号墳石室前面
出土土器実測図（1/3）

周溝内出土土器（第132図）

須恵器杯身(9)　口縁部のみの小片で，復原径8.8cmを測る。高杯かもしれない。体部は直に外反し，端部は肥厚する。胎土・焼成ともに良く紫灰色を呈す。

須恵器平瓶(10・11)　11と12は同一個体であろうが，直接接合しない。復原口径6.0cm，胴最大径16.5cm，復原器高14.4cmを測る。焼成が悪く生焼けで，器壁が風化している。体部と底部の境はヘラケズリされる。軟質で砂粒を多く含み，黄灰色を呈す。

須恵器壺(12)　壺の胴部付近と思われる破片である。両面ともヨコナデ調整されている。胎土は精選され焼成も良い。淡黄灰色を呈す。



第 132 図　23号墳周溝III区出土土器実測図（1～6は1/3，7･8は1/4）

土師器甕(13)　小型甕の口縁部破片で，復原口径13.0cmを測る。胴の張りはゆるやかで，口縁部は強く外反する。砂粒を多く含むが胎土は良好である。焼成も良い。淡褐色を呈す。

土師器椀(14)　小片で，復原口径12.0cmを測る。胎土は精選され，明褐色を呈す。

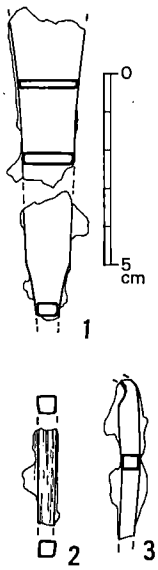
須恵器直口壺(15)　出土状態を図示した23号墳III区周溝内出土品である。ほぼ完形品であるが一部は26号墳周溝内出土破片と接合した。口径13.0cm，器高33.0cmで，胴部最大径は中位にあり28.0cmを測る。口縁部は多少歪むが，短く直に外反し，端部上面は中凹みの水平面をつくる。体部は長胴の球形で，底部は丸底である。口縁部は内外面ともヨコナデ，体部外面は格子目のタタキで，その後上半部はカキ目，下半部はナデ調整されている。内面は底面まで大きい青海波のタタキである。胎土は精良で焼成も堅緻である。灰白色を呈す。

土師器甕(16)　口縁部のみの小片で，復原口径30.0cmを測る。口縁部の外反は強い。体外面は縦位のハケ目，内面はヘラケズリされている。胎土・焼成も良好。暗黄褐色を呈す。　　(新原)

鉄製品（第133図）

鉄　鏃(1)　方頭斧箭式と思われる鏃で，先端部と茎部それに中途の部分も欠くが，先端側の幅2.0cm，茎部分との境の幅1.2cm，厚さ0.2～0.3cm，茎部欠損面での幅は，0.6cm，厚さ0.33cmを測る。玄室内から出土した。

鉄　釘(2・3)　2は玄室内出土のもので，頭部を欠くために釘か否かははっきりしない。4～5㎜角の棒状で，軸に平行した木目の木質が錆着していることから，釘あるいは鏃の基部かも知れないが，1の鏃で茎部欠損面が偏平な断面形なので，ここでは釘の可能性も考えておく。3は前面斜面から26号墳周溝II区にかけての位置から出土した。頭部平坦面と先端部を欠くが現存長4.2cm，幅・厚さ0.4cmの大きさで，木質は錆着していない。



第 133図　23号墳石室出土鉄器実測図（1/2）

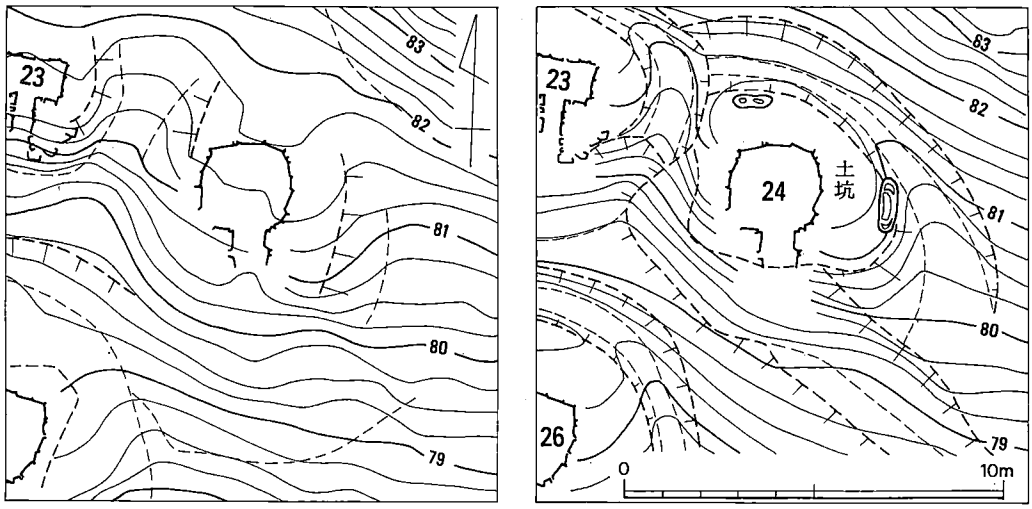
石室出土土器では，前期の判断は難しいが，墳丘内出土土器は，7世紀前半ないし中頃に含まれるが，前面出土土器は7世紀中頃～末のものを含んでいる。一応，この古墳の時期としては，7世紀中頃以降に築造され，7世紀末まで使用されたと考えておきたい。　　(小池)

24．24号墳

墳　丘（図版110－1，第134図）

D地区の斜面中程よりやや下方に位置し，標高80.00～81.75mに占地する。本墳の西方に22・23墳が略同じ標高で隣接しつつ築造されている。表土面では，周溝及び墳丘の一部で僅かに変換線が認められ，墳丘前面に明瞭な段差が確認された。表土剝ぎ後，石室前面を斜めに横断する亀裂が走り，左側壁が著しく崩壊した古墳と判明した。墳丘の規模は，西側を23号墳の周溝が深く造られているため一部不明となるが，玄室中央から東側周溝外径上端は4.9m，同じく内径は2.8mを測る。墳丘高は，玄室奥壁側が最高所となり，1.2mを測る。検出分の周溝から，馬蹄形の平面形態になると推定され，周溝底の最高所は玄室奥壁側で標高81.25mである。

地山整形は，玄室奥壁が最も深く掘削し約1m程に及んでいるが，南側に僅かに低くなる平坦



第 134 図　24号墳墳丘・地山整形面測量図（1/200）

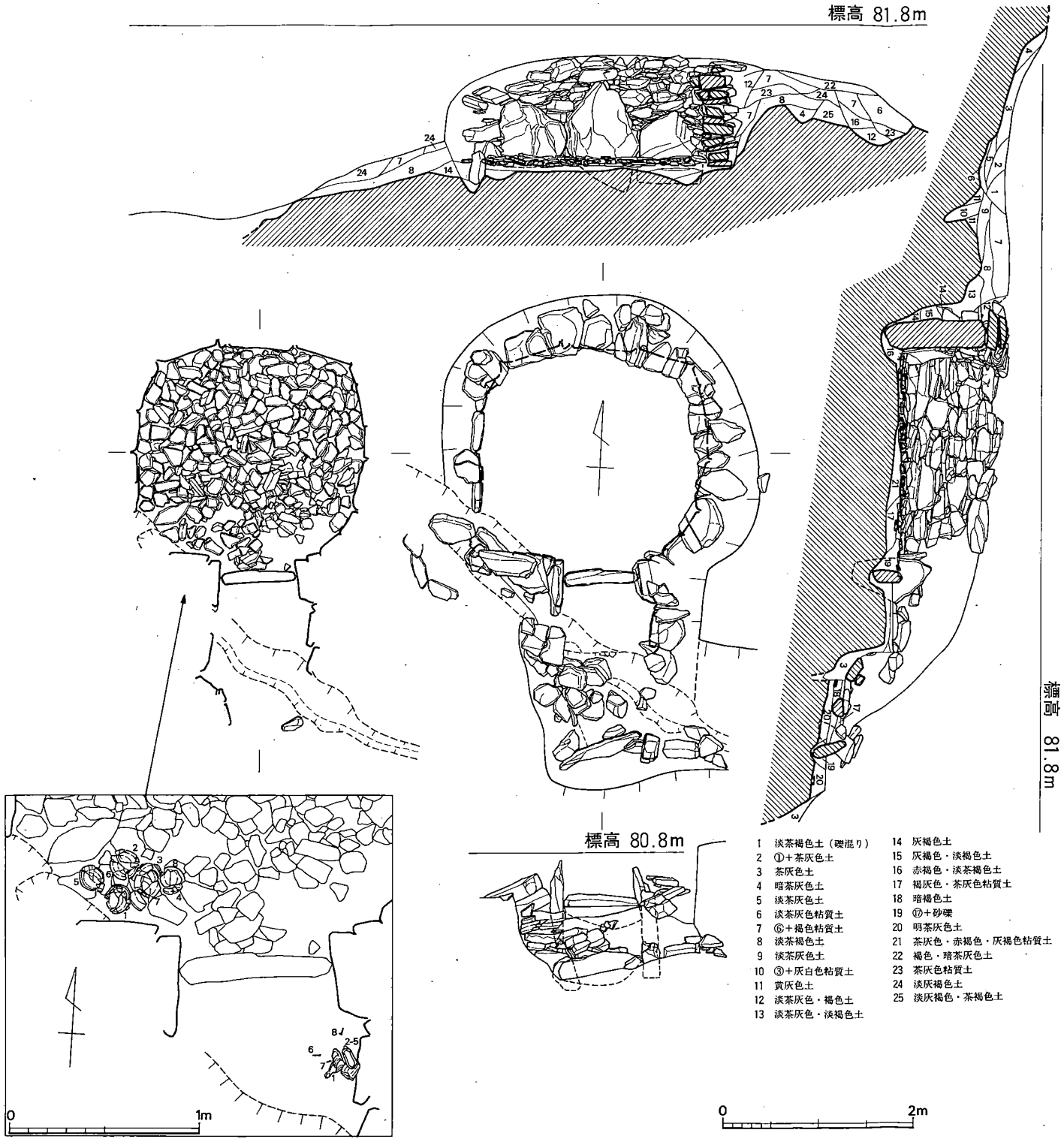
面を造り出している。

墳丘盛土は，地山と大差ない排土が用いられ石室築造に伴い順次盛土がなされている。ここで問題となるのは，東側墳丘内の土坑状遺構（第135図）であり，4号墳などにも同様の遺構が存したと思われる。東西の土層図作成時に落ち込みを確認し，石室の実測終了後墳丘を剝ぎ取りプランを検出するに至ったが，一部掘りすぎたため平面形態は土壙状を呈している。長軸1.45m，短軸0.45m，深さ0.25mを測り，テラス面を有した長楕円形の平面形態を呈す。壙内の有り様や埋土には何ら特色を認められず，祭祀行為が執り行われたとは考え難い。墳丘土層図より西側上端は墳丘内から発しており，墳丘盛土過程に存した遺構と判断できる。その他検出時に一部掘りすぎたことなどを勘案すると，本来の平面形は周溝状を呈したと推定され，最も深く掘り込まれた所を検出したとも考えられる。これらから，本遺構は墳丘築造過程で開口していたと思われ，周溝的な機能を果たしていたと推定される。

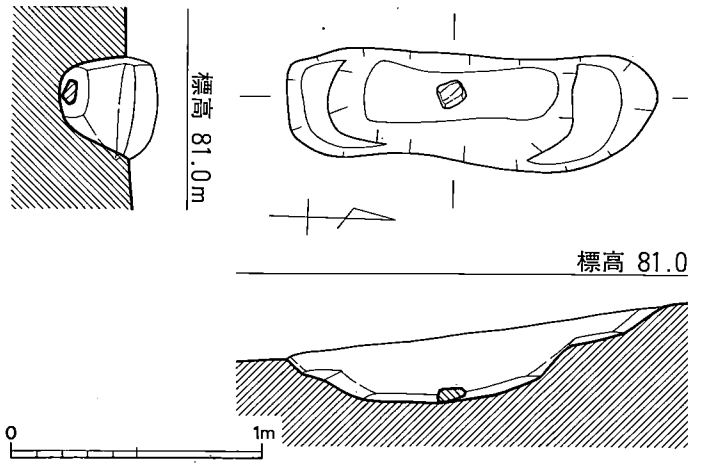
主体部（図版110－2，111・112－1，第136図）

主軸方位はN 2°30′Eをとり，南に開口する単室構造となる横穴式石室である。石室は先述の地滑りによる陥没で西南部が著しく崩落している。石室の全長は，羨道部中程で陥没しているも約3.9mに復原出来る。

玄室は，主軸よりも僅かに西偏するが，長さ2.22m，最大幅2.40mを測り，略円形に近い平面形を呈す。奥壁に，高さ85cm（石材は115cm），幅78cm，厚み31cmで大振りな砂質の緑泥片岩を中央に据えて鏡石としている。その両脇にも鏡石より少し小振りな扁平石を孤を描く様に据え，



第 136 図　柿原D地区24号墳石室実測図（1/60）



第 135 図　24号墳墳丘下土坑実測図（1/30）

3石でもって奥壁を構成する。3石の間隙より上方へ扁平石を小口積みして，最高所約1mの略垂直な壁体をなしている。石材は緑泥片岩と砂質の緑泥片岩である。右側壁は，基底部より扁平石を小口積みして，持ち送りの壁体をなしている。奥壁側と玄門側に若干大振りな石を配し，最高所は10段で1mに達している。左側壁は，殆どが崩れ落ち，僅かに腰石の3石が原位置を保っていた。玄門側の腰石は西端が移動し，その前方も崩れ落ちた跡が認められた。腰石の上方は小口積みしていたことが窮い知れ，数石が原位置に保っている。床面には，小振りで扁平な緑泥片岩を，玄門側が若干まばらながらも略くまなく敷き詰めている。

玄門袖石は，薄手ながらも大振りな砂質の緑泥片岩を略半分程地中に埋め，堅固に据えている。框石は，長さ78cm，高さ12cm(石材は31cm)，幅13cmの緑泥片岩を両袖石間ぎりぎりに設置している。

羨道部は，中程より以南にかけて亀裂により南へ0.40m，約0.50m下方に陥没しているが，長さ1.68m，幅0.88mで，平面形も長方形に復原できる。右側壁は，玄門際が僅かに2段のみ旧態を止どめ，小口積みしていたのが窺い知れる。左側壁は，玄門際壁は若干移動しているも踏止まっており，右側壁と同様の壁体をなしていたと考えられる。羨門の袖石は，玄門の袖石に比べ小振りな扁平石を縦長に据えている。框石は長さ85cm，高さ20cm(石材は35cm)，幅13cmの緑泥片岩を使用している。袖石と框石も陥没により僅かにズレた状態を呈していた。床面に敷石が施していたとは考え難く，亀裂付近の石は閉塞石か側壁の石かの判別は出来なかった。

玄室奥壁側の墳丘下層から並んだ3個の柱穴状遺構を検出した。検出面から0.10～0.17mの深さと若干浅いけれども，位置などから石室架構に関連する遺構と推測される。

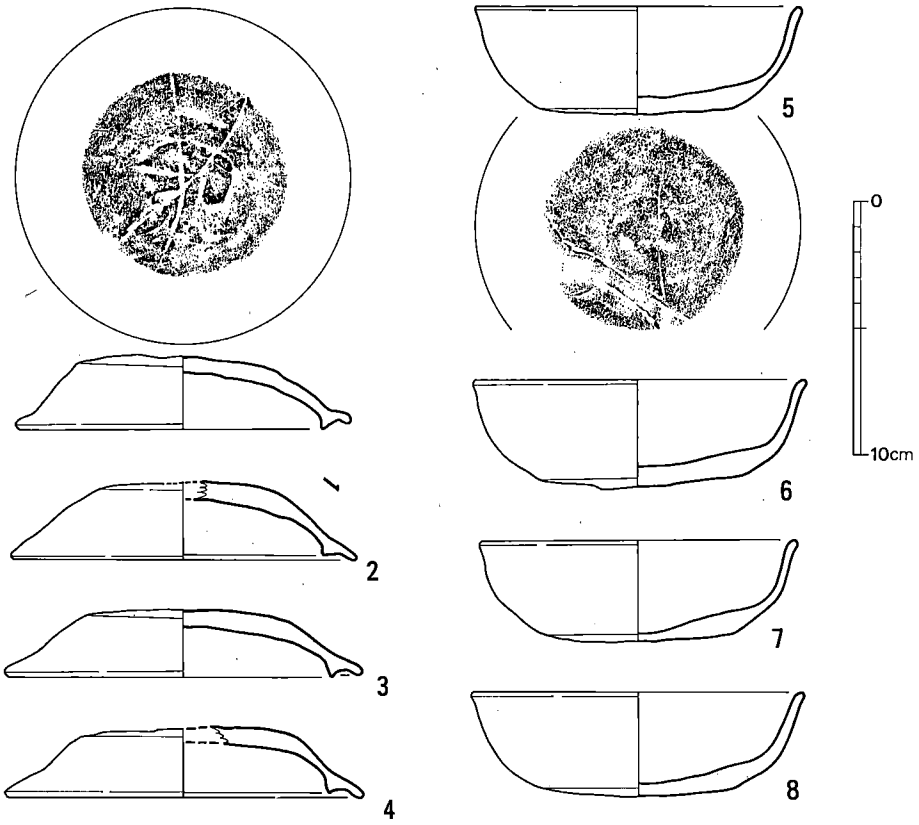
遺物出土状況（図版112－2・3，第136図）

玄室内床面の左袖石付近より須恵器杯が4セット出土した。全て完形もしくは完形に復原できる品で，押し潰れた状態であったが，これは壁体の崩落に起因するものであろう。羨道部床面直上の右側壁際より鉄製品が出土している。周溝Ⅲ・Ⅳ区からは土師器甕2個体分が小破片で出土した。

出土遺物（図版113，第137～139図）

石室出土土器（第137図）

須恵器杯蓋（1～4）　4点ともに断面三角形のかえりを付しているが，かえりは口縁部の下方に出ないけれども，1と3は歪つであり一部下方に出ている。天井部は扁平となり，外面がヘラ切離し後ナデ，内面もナデ調整。体部と口縁部は回転ナデ調整を施す。胎土は細砂粒，粗砂粒をやや多く含む。1は口径13.4cm，器高2.85cmを測り，暗灰色ないし黄色味のある灰褐色を呈す。天井部外面にやや太い1条のヘラ記号を付す。2は口径13.7cm，器高3.05cmを測る。



第 137 図　24号墳石室出土土器実測図（1/3）

3は口径14.2cm，器高2.65cm，4は口径14.3cm，器高2.8cmとなる。2～4の色調は1と略同じ。焼成は4点ともやや不良である。

須恵器杯身（5～8）　底部はヘラ切離し後ナデ調整をなし扁平である。体部はやや大きく外反するが，口縁端部は更に外反し，回転ナデ調整を施す。胎土・色調・調整は杯蓋と略同じである。5は口径13.1cm，器高4.2cm，底径7.7cmを測り，出土状況から蓋の2とセットになる。底部外面に1条のヘラ記号を付している。6は口径13.2cm，器高4.25cm，底径8.1cmを測り，蓋の1セットになる。7は口径12.65cm，器高4.1cm，底口径7.7cmを測り，蓋の3とセットとなる。8は口径13.2cm，器高4.25cm，底径8.2cmを測り，蓋の4とセットとなる。

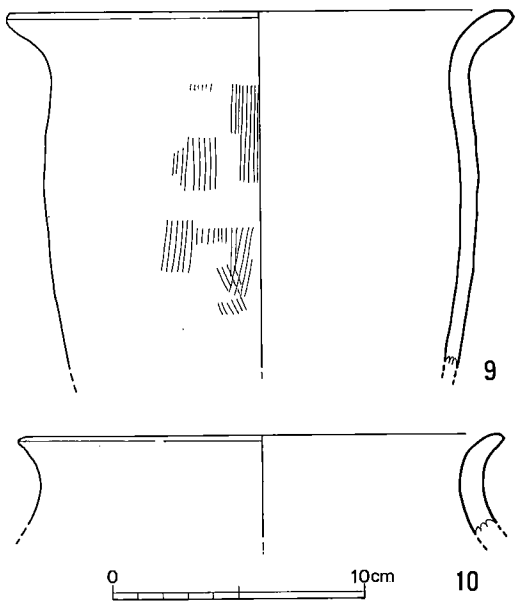
周溝出土土器（第138図）

土師器甕（9・10）　9は復原口径20.0cmを測る。口縁部は大きく外反するが，頸部から胴部にかけては僅かに膨らむ。口縁部内外はヨコナデ，内面はヘラケズリ，外面はハケ目調整となるが著しく磨滅している。胎土は粗砂粒を少し，雲母など微砂粒をやや多く含む。橙色味ある茶灰色を呈し，焼成は良好である。10は復原口径19.5cmとなる小破片で，胴部がやや丸くなる

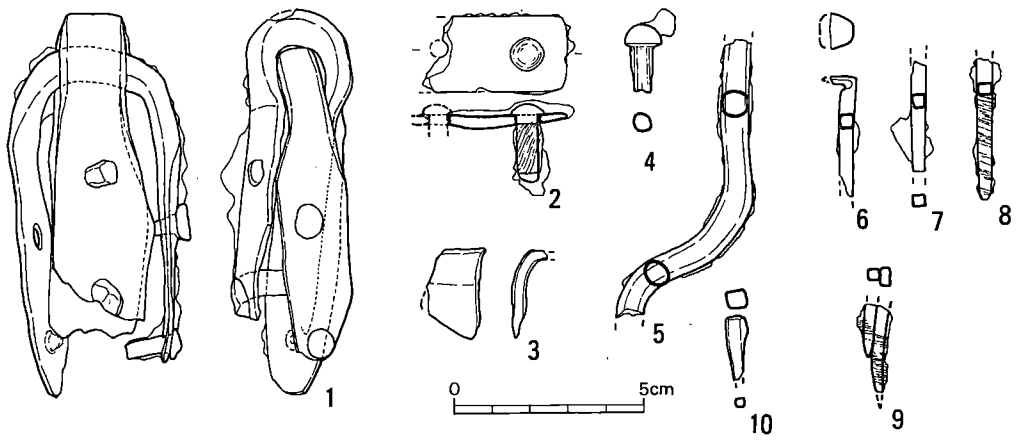
甕の口縁部である。調整はヨコナデである。粗砂粒を若干含み，暗褐色を呈す。焼成は良好。　（武田）

鉄製品（第139図）

馬　具(1～5)　1は木心鉄張り鐙を繋ぐ金具であろうか。木質は錆着程度に残るのみで，丸鋲の打込まれる鉄板の間隙からして，木質部分は3.0cm程度の幅と2.0cmの厚みがあり，もう一方は幅2.5cmで厚みが1.5cm程度である。両側縁の鉄板にはそれぞれ2個ずつの鉄丸鋲が打たれ，連結部分は幅狭になっている。もう一方の鐙？を受ける側の鉄板にみられる鉄丸鋲は片方から打ち込まれ反対側の孔でかしめた状態になっているので，厚い革帯のようなものを留めたのであろうか。2は片側を欠くが幅2.0cm，厚さ0.3cm程の鉄板に2.4cmの間隔で丸鋲が打たれたもの。鋲は2.2cmの長さで，このうち1.3cmの長さに木質の錆着がみられ，先端には木質が錆着しない。1と同様のものないしは一連の部品であろうが，鋲と鋲の間隔は1に比して短めである。3は小破片で全体の形状は不明だが，鉄板の欠損する側に曲がっている。4は丸鋲の頭部片である。5は両端を欠損する丸棒片で蛇行している。紋具の一部であろうか。



第 138 図　24号墳周溝出土土器実測図（1/3）



第 139 図　24号墳石室出土鉄器実測図（1/2）

鉄　釘(5～10)　鉄釘と思われる破片はうまく接合せず，頭部は6の1点のみである。頭部はL字形に曲がり平坦面をもち体部は断面方形を呈している。6・7・10では木質がはっきりしないが，8・9では体部軸に交差する木目がみられる。9は先端部が2点錆着している。また10は釘としてやや太めだが断面方形を呈するので一応釘に含めた。　(小池)

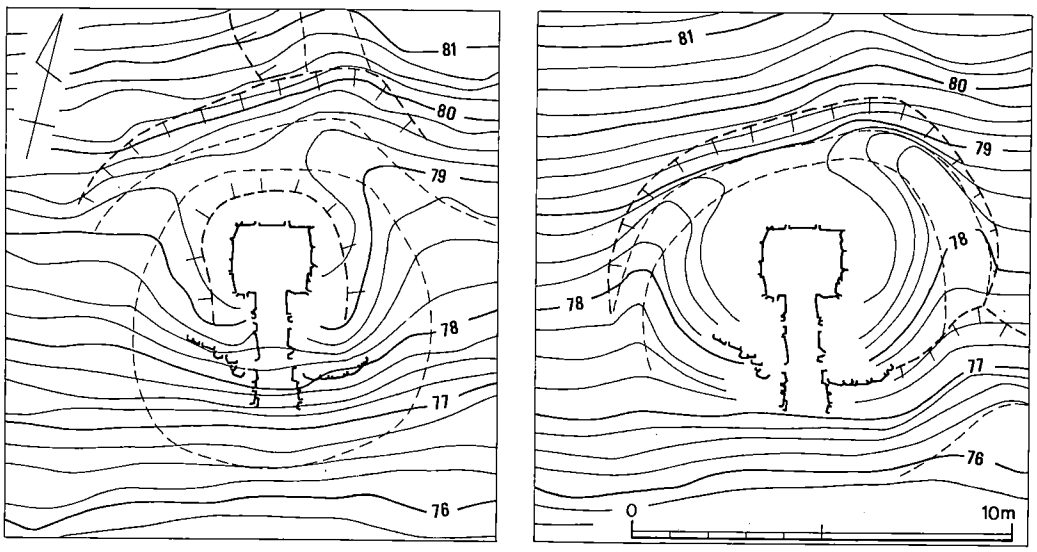
石室は単室構造であり，築造時期をさほど古期には比定出来ない。玄室内出土品が7世紀後半後に比定されるので，古く遡らせても前述の時期より少しも古い年代となろう。　(武田)

25. 25号墳

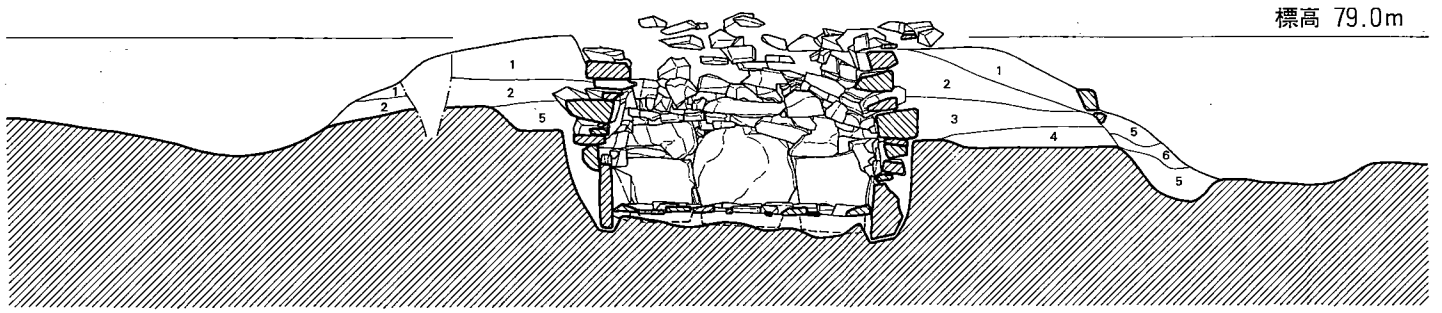
墳　丘（図版114－1，第140図）

D地区南斜面の西端部にあり，21号墳・22号墳南側の斜面下に位置する。

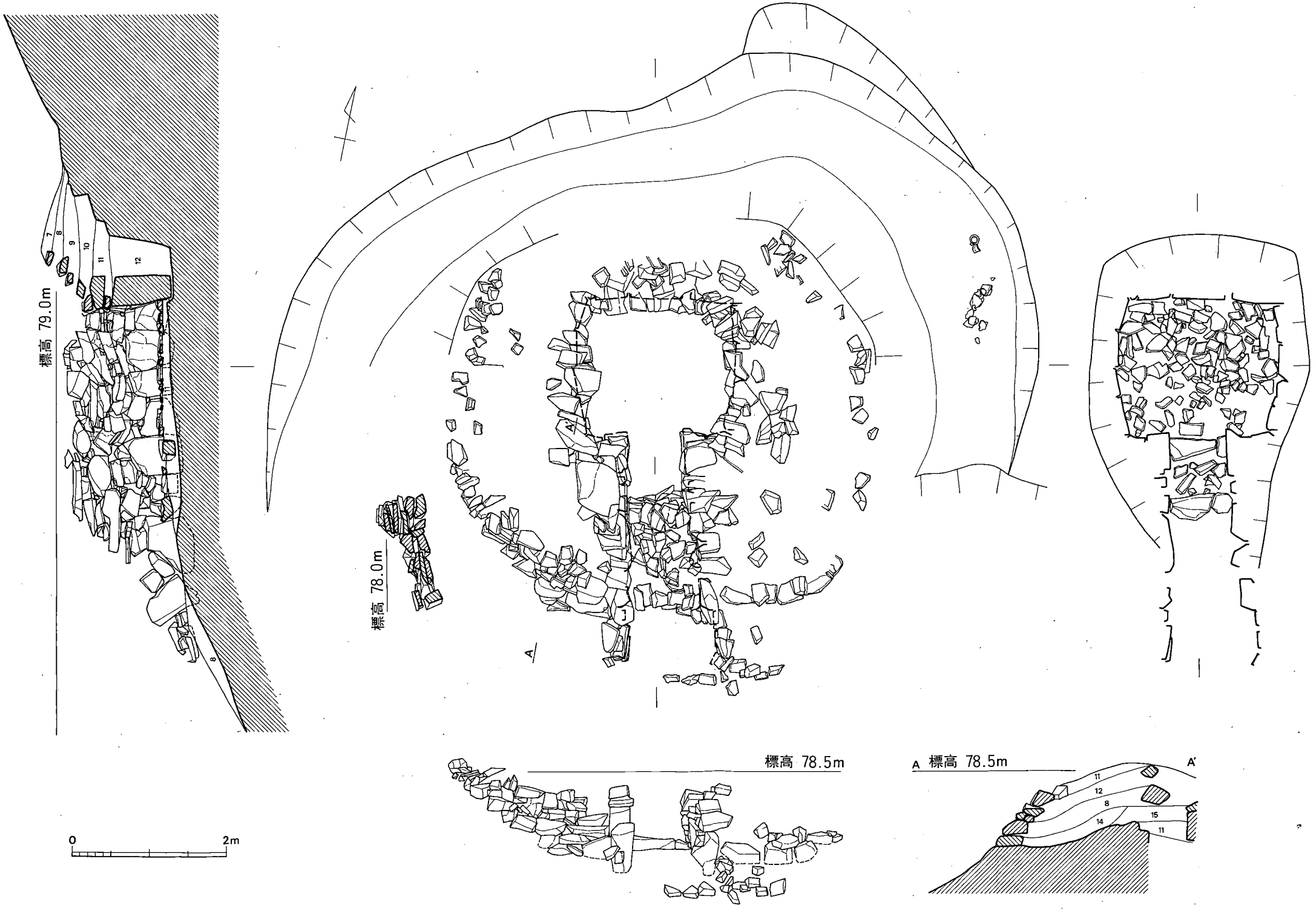
調査前の観察で，標高80m位に周溝の背面が，標高79m位に径4m程度の墳丘上端線と，標高76.5～79m位に径8m程の墳丘下端線がみられた。斜面下からみると3.5m程の高さである。また，墳丘頂部に3.5m×2.5mの陥没穴もみられた。



第 140 図　25号墳墳丘・地山整形面測量図（1/200）



1 淡茶褐色・赤褐色粘質土
2 暗黄褐色粘質土
3 暗赤褐色・暗茶褐色土（礫混り）
4 暗茶褐色・淡黒灰褐色土
5 暗茶褐色粘質土
6 暗赤褐色・暗黄褐色粘質土
7 赤褐色・黄褐色粘質土
8 暗茶褐色・淡赤褐色粘質土（礫混り）
9 赤褐色・黄褐色粘質土（礫混り）
10 暗茶褐色土（礫混り）
11 暗黄褐色・淡赤褐色粘質土
12 黄褐色・淡赤褐色土（礫混り）
13 淡黄褐色粘質土（礫混り）
14 淡赤褐色粘質土
15 暗茶褐色・赤褐色粘質土



第 141 図　柿原D地区25号墳石室実測図（1/60）

表土を剝ぎ除くと，周溝は外径10.5m，内径8.0mで後方から両側に馬蹄形に巡り，墳丘盛土は，長径8.0m弱，短径6.0mの楕円形で約0.8mの高さに残り，前面側には径5.5m程の列石が墳丘を8割程度巡るように続いている。

墳丘断面土層図でみられるように，石室右側壁から外の東側に2～3mの所に幅0.8m，深さ0.3m程のU字形溝がある。西側ではみられなかったが，このような溝はD地区の他の古墳でも幾つかみられるものである。

列石は，両側の羨門石から左右にそれぞれ続き，両側縁から背面側に向かうに従って積み方が疎らになっている。残りの良い西側の前面では平積みないし小口積みで50°程の傾斜に4・5段積み上げられ，0.8m程の高さをもっている。また，前面の区画ともいえるような，小振りの割石で2・3段積まれる列石が，羨門石から前面側に向かい0.7m程伸びて，右側ではそこから直角に折れて0.9m程列石が続く。列石に使用される石はほとんどが緑泥片岩である。

主体部（図版114－2，115～117，第141図）

この古墳の主体部は，主軸方位をN11°50′Wにとり南南東に開口する単室構造の横穴式石室である。

石室の掘り方は，上縁幅2.80m長さ約4mに，奥側では岩盤まで掘り込んで1m程の深さをもつ。奥壁中央で0.4m程の隙間が空くものの，下端幅は2.40mで下端ぎりぎりに，基底部分を溝状に深く掘り下げている。

石室は，天井部と壁体の上部を失っているが，壁体に使用される石はほとんどが緑泥片岩である。石室全長は4.00mで，前面区画の列石分を加えると4.70mの長さである。

玄室は，両側壁がわずかに胴張りになるが，正方形に近い平面形を呈している。床面での規模は，左側壁の長さ1.75m，右側壁の長さ1.65m，奥壁の幅1.85m，玄門側の幅1.80m，中ほどの最大幅2.05mを測る。奥壁には3枚の扁平石が並べられている。中央には高さ80cm，幅80cm，厚さ30～40cmの石を据えて鏡石とし，両脇には高さ・幅が50～60cmの石が据えられて，それぞれ約10°内傾している。両脇の石の上には鏡石とほぼ同じ高さになるように厚めの石が乗せられ，これの上には板石を小口積みないし平積みして持ち送り気味の壁を築いているが，残りの良い部分で1.20m程の高さである。左右の壁は，各4枚の板石を並べて腰石のように据えて，その上は扁平石を平積みないし小口積みで持ち送っている。残存高は約1.20mである。玄室内床面には，小さな割石を用いた敷石がみられるが，整然とした敷き方ではない。

玄門は，袖石に奥壁鏡石より少し小さめの石が立てて据えられ，玄門幅0.72mを測る。床面には，長さ60cm，幅30cm，厚さ20cm弱の石をわたして，不足分を小振りな石で補って，框石としている。

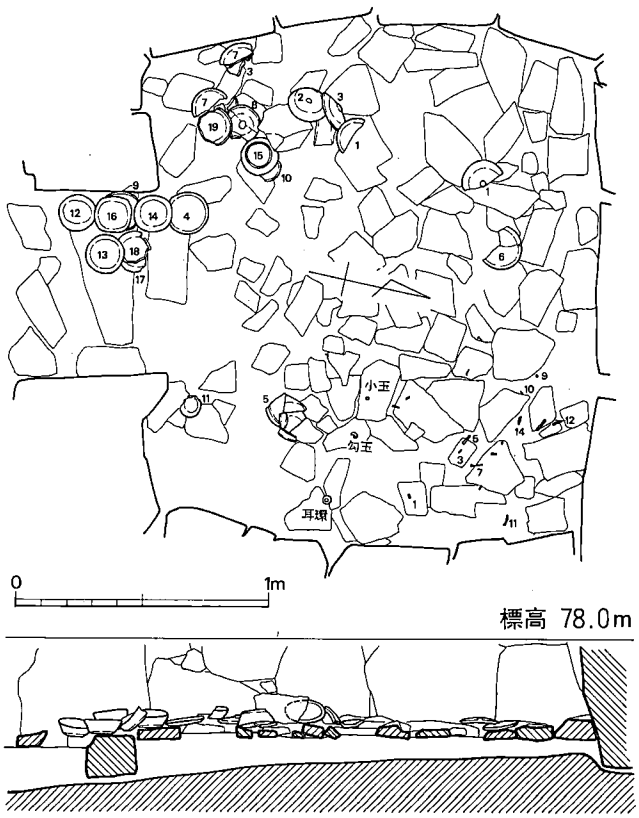
羨道は，主軸長が2.30m，羨門での幅0.90mだが，羨門より少し内に入った所で0.74mと狭く

なっている。羨門には，玄門袖石よりも少し小さめの石が据えられているが，左側壁では前面側に倒れている。また，羨門より内側に玄門袖石くらいの石が据えられ，この石と玄門袖石の間は基底部から小振りな割石で積まれていて，前室を意識した構造になっている。袖石上面から上の部分には大きめの板石などで積み上げられて，前室風部分の左側壁では残っている壁体のすぐ上に天井石が架かるくらいであろう。1.30mの残存高である。床面の敷石は，前室風の部分にみられ，羨門から1.20mの所に仕切石とも思える石が横たわっている。

石室閉塞は，羨門から仕切石らしい部分までの長さにみられる。奥側は主として主軸に平行し内部に面が揃うような垂直に近い積み方で，高さ0.65m分残っている。前側では前室袖石状の部分までによせられたような積み方で，少し空間をもって羨門に列をなしたような3段程の積み石がある。羨門での積み石のなかには主軸に直交する方向の石が下部に一つあり，あるいは仕切石の役割を果たしていたのかも知れないが，調査中に，単に閉塞石と判断して不用意に取外してしまった。

遺物出土状況（図版115－3・118，第142図）

玄室内では，左袖石に接し框石にのるように須恵器杯蓋2，杯身6，左袖の内側から須恵器杯蓋6，杯身2，右袖の内側から須恵器杯蓋・身各1，奥壁鏡石の前から須恵器杯蓋片2が出土した。このうち左袖奥の杯蓋片と鏡石前の杯蓋片が接合するので，合計して杯蓋10，杯身9点が出土したことになる。蓋では天井部が上になるものや下になるもの，斜めになっているものがあり，身でも裏がえしのものや斜めのものがある。なお，左袖石付近に身が多く蓋は少し離れた所にあること，おそらくセットになると思われる



第 142 図　25号墳石室内遺物出土状況実測図（1/30）

蓋と身が右袖石付近と左袖石付近に別れていることからして，隅に片付けることと，玄門に身を並べる行為があったかも知れない。また，玄室右奥では，鉄釘片が散乱して出土し，鉄釘片の部分より前側からは玉類・耳環といった装身具が出土した。

前面の区画部からは遺物の出土はみられなかったが，前面の斜面からは須恵器杯蓋・杯身・壺片などか出土している。

周溝では，II区の一部からIII区にかけて須恵器甕片が散乱して出土した。また周溝III区では須恵器杯蓋・杯身・平瓶・長頸壺などの破片がまとまって出土した（図版116－3）。

出土遺物（図版119・120，第143～148図）

石室出土土器（第143図）

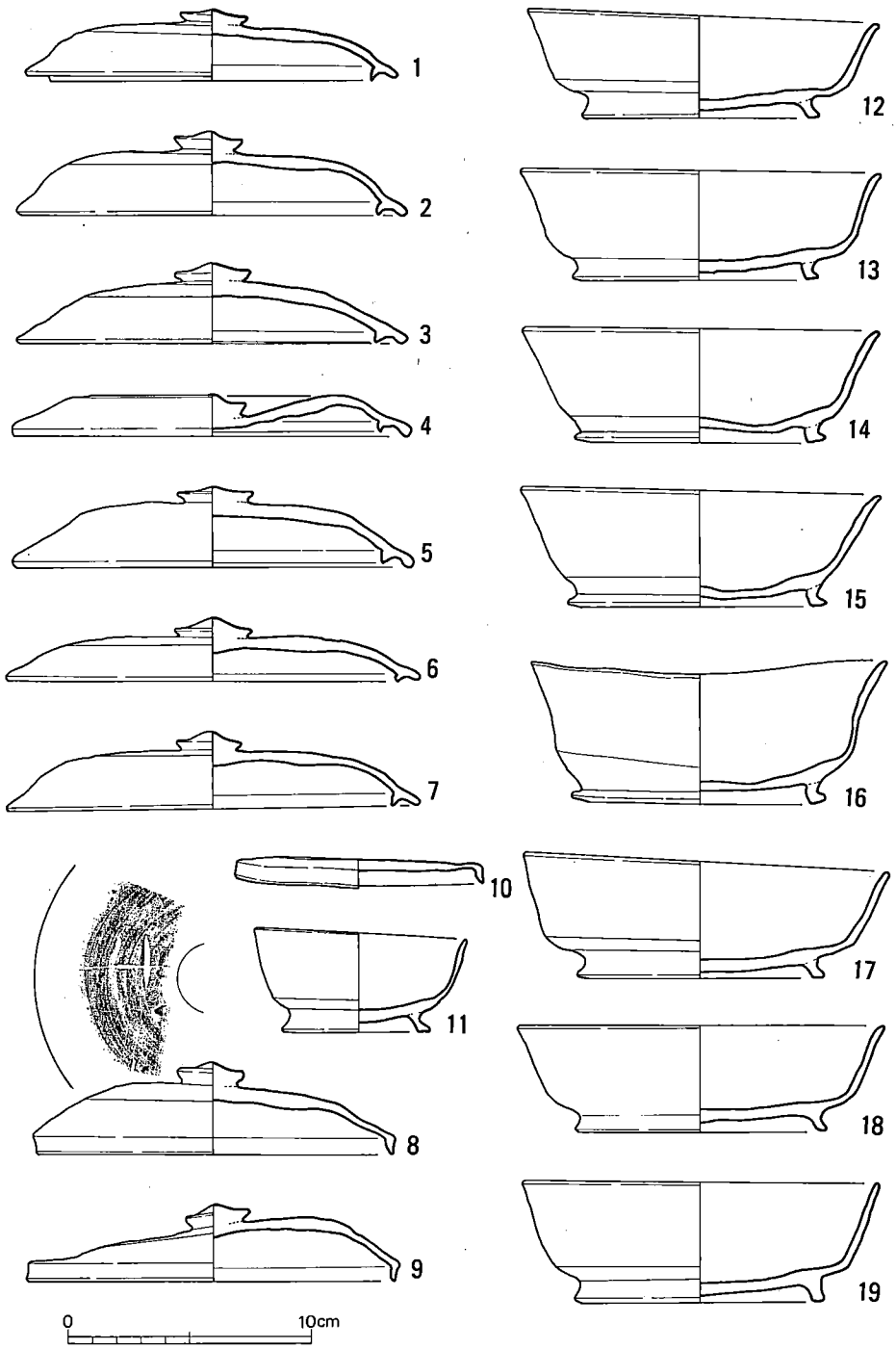
須恵器杯蓋（1～10）　1～7は天井部に扁平な宝珠形つまみがつき，口縁部に身受けのかえりをもつもの。天井部は平坦で，回転ヘラケズリされている。1は口径15.4cm，器高3.0cm，かえりの径13.3cm。やや焼成があまく，暗灰色を呈している。2は口径16.0cm，器高3.5cm，かえりの径13.6cm。硬い焼成で茶褐色を呈している。3は口径16.2cm，器高3.3cm，かえりの径13.6cm。硬めの焼成で緑灰色を呈している。4は天井部が陥没して歪んでいる。口径16.5cm，器高1.7cm，かえりの径14.0cm。堅緻に焼成され緑灰色ないし暗茶色を呈している。5は口径16.6cm，器高3.3cm，かえりの径14.0cm。あまい焼成で赤褐色を呈している。6は復原口径17.0cm，器高2.6cm，かえりの径15.1cm。ややあまい焼成で茶褐色を呈している。7は口径17.0cm，器高3.2cm，かえりの径14.8cm。ややあまい焼成で茶褐色を呈している。

8・9は天井部に扁平な宝珠形つまみがつき，口縁部が鳥嘴状を呈するもの。天井部外面は回転ヘラケズリされている。8は口径15.0cm，器高3.8cmの大きさで，堅緻に焼成され暗紫色ないし青灰色を呈している。天井部外面にヘラ記号らしい長さ2cmの短沈線が付いている。9は焼け歪みを生じているが，口径15.3cm，器高3.2cmの大きさで，堅緻に焼成され暗青灰色を呈している。

10は小形の杯蓋。平らな天井部につまみがなく口縁部は鳥嘴状を呈する。天井部外面はヘラ切離しのあとナデられる。口径10.3cm，器高1.2cmの大きさで，堅緻に焼成され暗紫色を呈している。

須恵器杯身（11～19）　11は小形の杯身。踏張る形の高台が付く。口径8.8cm，器高4.3cm，高台径5.1cmの大きさで，堅緻に焼成され青灰色を呈している。

12～19は高台をもつ杯身。このうち12～16は口縁部がわずかに外反し，高台は外反して跳ねるように付く。外底面はヘラ切離しの後ナデられている。いずれも堅緻に焼成されて青灰色などの色調を呈している。12は口径14.4cm，器高4.3cm，高台径9.7cm，13は口径14.7cm，器高4.5cm，高台径10.1cm，14は口径14.7cm，器高4.7cm，高台径10.3cm，15は口径14.8cm，器高4.8



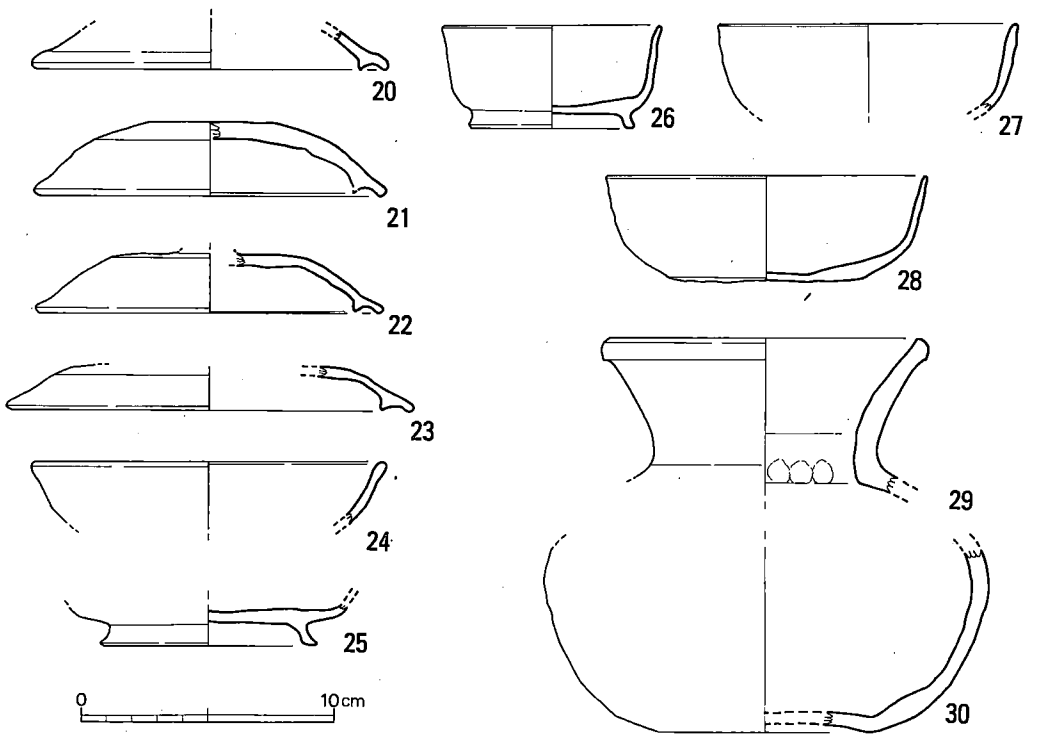
第 143 図　25号墳石室出土土器実測図（1/3）

cm，高台径10.6cm，16は口径14.6cm，器高6.1cm，高台径10.4cmの大きさ。17～19は口縁部がやや直線的にのびる。外底面はヘラ切離しの後ナデられて外反する高台が付けられ，体部下位に回転ヘラケズリの痕がみられる。ややあまい焼成で赤褐色などの色調を呈している。17は口径15.1cm，器高5.0cm，高台径10.2cm，18は口径15.1cm，器高4.4cm，高台径10.3cm，19は口径14.7cm，器高5.0cm，高台径10.3cmの大きさである。

前面出土土器（第144図）

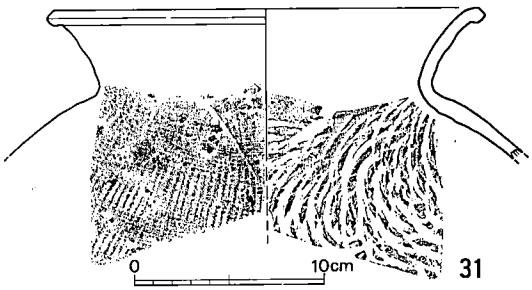
須恵器杯蓋(20～23)　身受けのかえりをもつ杯蓋。21はヘラ切離しの後未調整の天井部外面につまみが付かない。復原口径14.0cm，器高2.9cmの大きさ。あまい焼成で黄灰色を呈している。22は天井部外面に回転ヘラケズリ調整とつまみの痕跡がみられ，復原口径13.8cm，残存器高2.4cmの大きさ。硬い焼成で黒灰色を呈している。20･22は小破片ではっきりとしないが，23はつまみが付くものであろう。

須恵器杯身(24～28)　26は小形の杯身で，復原口径8.7cm，器高4.1cm，高台径6.6cmの大きさ。砂粒を含み，堅緻な焼成で暗青灰色を呈している。28は高台の付かない杯身。復原口径12.8cm，器高4.1cmの大きさで，体部は丸味をもつ。ヘラ切離しの後未調整の外底面に×字形のヘラ記号が付されている。ややあまい焼成で，緑黄灰色を呈している。



第 144 図　25号墳前面出土土器実測図（1/3）

須恵器壺(29・30)　同一個体の可能性があるものの接合しない。29の口頸部は，高さ5.0cmで口縁部が外反して復原口径13.0cmの大きさだが，口縁端部は丸くおさまる。30の体部下半は，復原胴最大径17.6cm，復原底径8.5cmの底部はやや凹む。全体に回転ナデ調整されるが，外底面はナデ調整されている。硬い焼成で黒灰色を呈している。



第 145 図　25号墳周溝出土土器実測図1 (1/4)

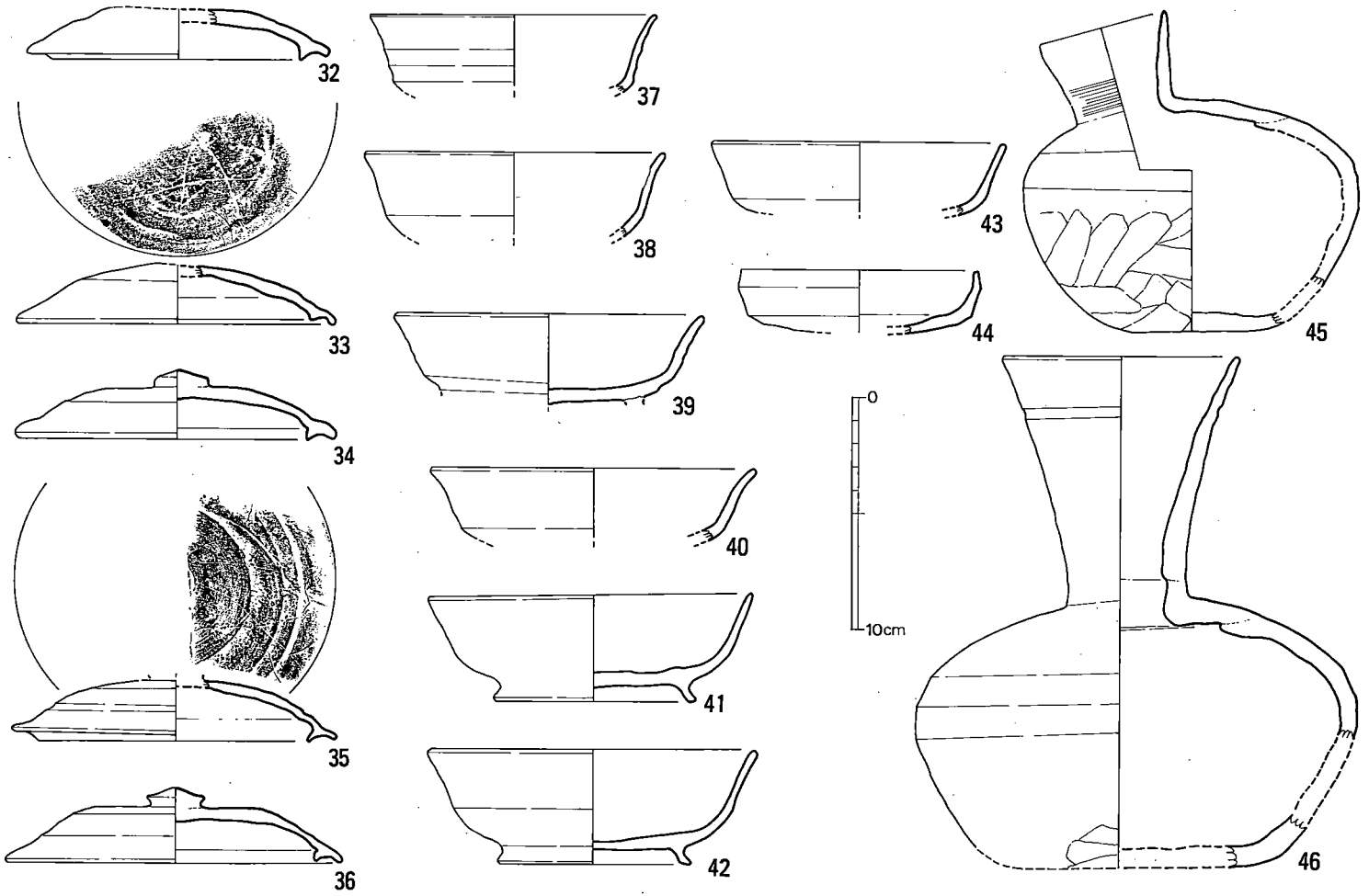
周溝Ⅲ区出土土器（第145・146図）

須恵器甕(31)　胴部破片も若干あるが，口縁部のみ図示する。復原口径23.0cmの大きさで，短く外反する口縁部は回転ヨコナデ調整されており，端部は低い三角形の凸帯状に肥厚する。胴部外面は格子目タタキ，内面は同心円当て具痕が付いている。砂礫を若干含むが堅緻に焼成されて黒灰色ないし暗灰色の色調を呈している。

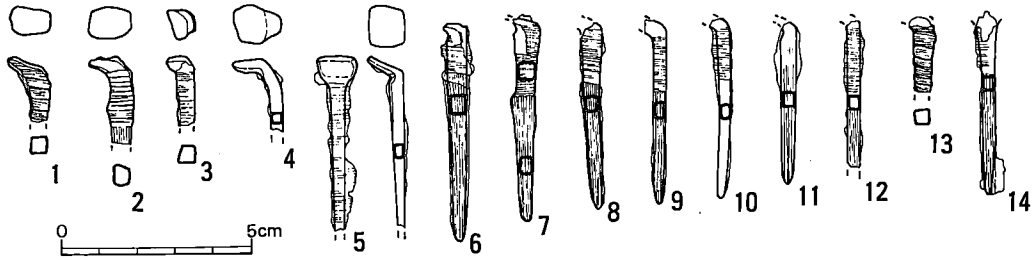
須恵器杯蓋(32～36)　いずれも身受けのかえりをもつ杯蓋。33は天井部につまみが付かないもので，ヘラ切離しの後ナデられる天井部外面に×字形のヘラ記号が付されている。かえりは短く鈍い。復原口径13.8cm，器高2.6cmの大きさで堅緻に焼成されている。34～36はつまみの付くもので，天井部外面は回転ヘラケズリされている。34は復原口径13.9cm，器高3.0cmの大きさで硬く焼成され，36は口径14.5cm，器高3.2cmの大きさで焼成がややあまい。35は細い３本線が放射状に描かれるヘラ記号が付され，つまみは剝げている。復原口径14.0cm，残存器高2.6cmの大きさで堅緻に焼成されている。

須恵器杯身(37～44)　破片資料ではっきりとしないものもあるが，39・41・42は高台をもつ杯身で39は高台が剝げ落ちている。外底面はヘラ切離しの後ナデられ，39の口縁部は外反しており，37・38・40・43の口縁部も外反する。41・42は口縁部が直線的に開き，体部はやや深めである。39は復原口径13.3cm，残存器高3.9cm，砂粒を胎土に含み堅緻に焼成されている。41は復原口径14.0cm，器高3.7cm，高台径8.6cmの大きさで，焼成はややあまい。42は復原口径14.3cm，器高5.0cm，高台径10.4cmの大きさで，焼成がややあまい。44の破片は口縁部が内弯するもので，外底面は回転ヘラケズリされている。復原口径10.4cm，器高2.7cmだが蓋の可能性もある。堅緻に焼成されて黒灰色を呈している。

須恵器平瓶(45)　やや肩の張る扁球形体部に小さめの口頸部が付き底部は丸味のある平底。器高13.9cm，胴最大径14.4cmで，体部高は10.0cmを占める。口縁部は斜め外に短く直に開き復原口径5.7cmの大きさ。上半部は回転ヨコナデされるが，頸部付近にカキ目，肩部に回転ヘラケズリの痕跡がみられ，下半部は手持ちヘラケズリされている。砂粒を胎土に含み，堅緻な焼成で暗灰色を呈している。



第 146 図　25号墳周溝出土土器実測図 2 (1/3)



第 147 図　25号墳石室出土鉄器実測図（1/2）

須恵器長頸壺(46)　肩の張る扁球形体部にラッパ状に開く口頸部が付く長頸壺。体部下半がうまく接合しないが，復原器高22.1cm，口頸部高10.5cm，口径10.2cm，胴最大径18.9cmの大きさ。外面全体に回転ヨコナデされるが，底部付近に手持ちヘラケズリの痕跡がみられる。頸部は直径5.0cmから緩やかに開いた口頸部では，口縁部下に１条の沈線が巡る。細砂粒を胎土に含み，硬い焼成で暗灰色を呈している。

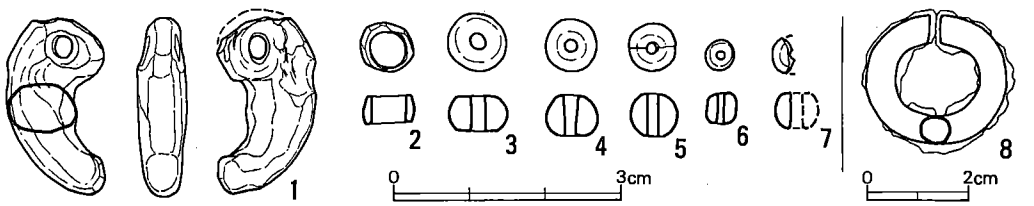
石室出土鉄製品（第147図）

鉄　釘(1～14)　石室内からは40点余りの鉄釘片が出土している。このうち頭部で14個体を確認した。体部は断面方形で先端に向かって細まるが，頭部はL字形に折れ曲って方形ないし長方形の平坦面をなしている。完形品はないが，６～11は頭部平坦面のみが欠失するだけで概ねの長さが知れる。おそらく4.5～6.0cm程の長さであろう。１～３・６～８などはやや太めの体部をもつが，４・５・10などは細めである。錆着する木質では，２・６・８・９・14は頭部から1.5cm前後，７は2.0cm前後の所で木目の方向が変わる。

石室出土装身具（第148図，表６）

ガラス勾玉(1)　乳白色に風化が進んでいる。頭部は幅広だが，腹側があまり凹まず，尾は細い。長さ23.0mm，厚さ6.8mm，幅5.0～10.3mm，孔は2.1×2.8mmの楕円形である。

ガラス小玉(2～7)　６点出土している。ライトブルーの色調を呈するもの，風化が進むものの緑色を呈するもの，風化が進んで乳白色を呈するものがある。２は4.3mmの孔径をもち扁平な形のもので，外径6.9mm，厚さ3.5mmの大きさ。その他のものは外径4.0～7.5mm，厚さ4.0～5.7mmの大きさである。



第 148 図　25号墳石室出土装身具実測図（1～7は実大、8は2/3）

耳　環(8)　鉄地金銅張りの耳環であったと思われるが，鉄地だけになり錆が広がっている。
長径6.0㎜，短径5.0～5.8㎜の楕円形棒を環にしたもので，外径は長径27.3㎜，短径は25.2㎜の大きさである。

表6　25号墳出土玉類一覧表

（単位㎜）

No.	種類	径	厚さ	孔　径	質	色　調
1	勾　玉	－	6.8	2.1～2.8	ガラス	乳白　風化進む
2	小　玉	6.9	3.5	4.3	〃	〃　〃
3	〃	7.5	4.7	1.9	〃	〃　〃
4	〃	6.8	5.3	1.4～2.0	〃	緑　やや風化
5	〃	6.2	5.7	1.5	〃	〃　風化進む
6	〃	4.0	4.0	1.0	〃	ライトブルー
7	〃	約6.0	4.6	約2.0	〃	緑　風化進む

石室出土土器では，須恵器杯蓋・身は概ね7世紀後半から末頃に比定されるが，大宰府史跡SX2480，SK388出土土器に対比でき，それらの土器類は7世紀末に考えられている(註5)。25号墳周溝Ⅲ区出土土器は22号墳に伴うものであろうが，これもほとんど同じ時期であろう。　（小池）

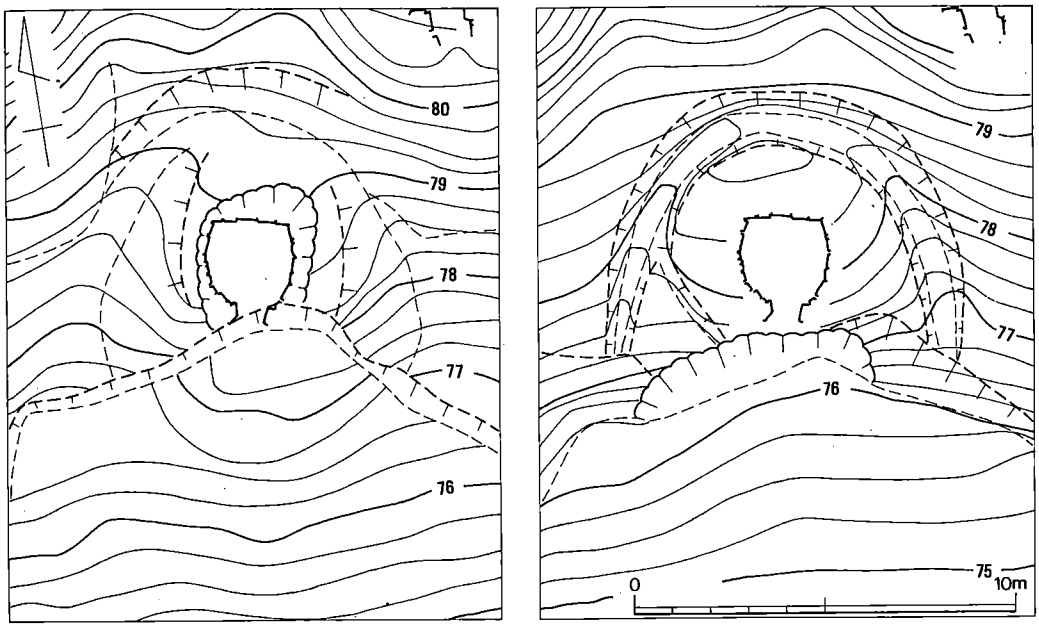
26．26号墳

墳　丘（図版121－1，第149図）

この古墳は，D地区南斜面のやや下方に位置し，標高77.5～79.0mに占地している。23号墳・24号墳の墳丘裾下に相当して，調査前の観察では，直径5m程の墳丘上縁線と直径8m強の墳丘裾線がみとめられ，周溝は23号南東裾側に下端変換線が現れている。墳丘上には3m四方程の陥没穴があるが，南西側は地滑りによる約1mの崖になっている。表土を剝ぐと，石室は玄室部分が残るものの前半は地滑りによって大きく崩壊していた。

周溝外径は9.5m，内径は7.0m強で，墳丘の高さは約1.0mを測る。周溝は馬蹄形に巡るが前面側に開き加減で，周溝底の最高所は標高78.35mである。

地山整形では，斜面の谷部に相当する地形で，岩盤はみられず褐色粘土の広がる地山を奥側で約1m掘り下げ，石室前面側に盛って平坦面を得ている。墳丘盛土は西側を中心にみられるが暗褐色と暗黄褐色の混じる粘質土である。なお，地山部分を掘り下げ下層を観察すると，断面土層図（第150図）に示すように，トレンチ西端下部で赤褐色粘質土で同じ土質にもかかわらず，隙間を生じていて容易に剝がれる面がみとめられた。おそらく地滑りの痕跡であろう。滑



第 149 図　26号墳墳丘・地山整形面測量図（1/200）

り落ちた南東側には岩盤の礫を含んだ赤褐色・明褐色の粘質土がみられ，地滑りの亀裂部とみられる部分には暗い色調の粘性土が堆積し，これらを覆うように乗っている褐色粘質土を主体部掘り方が掘り込んでいるのが分かる。したがって，古墳築造以前にも既に地滑り現象が起こっていたがことも考えられる。

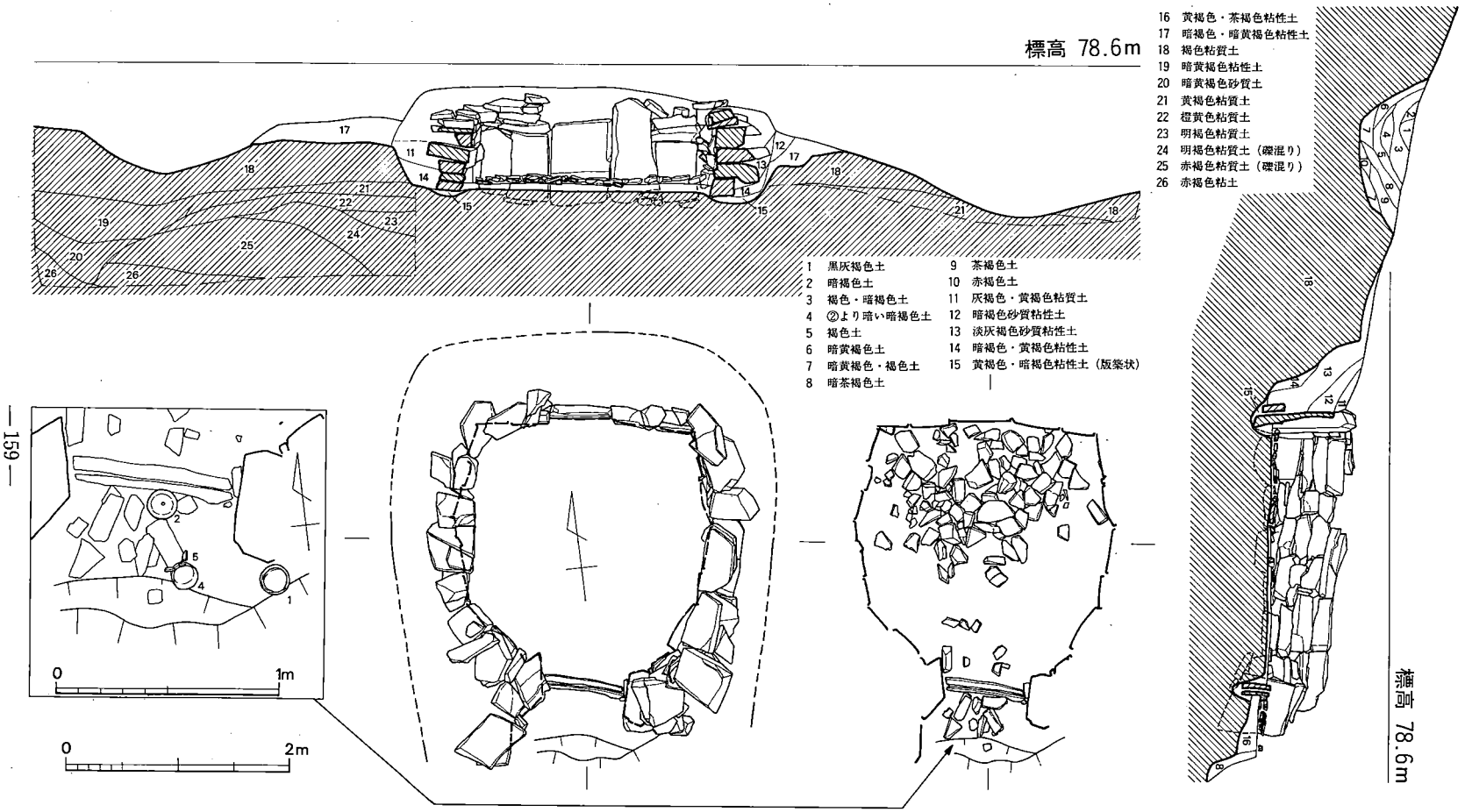
主体部（図版121－２・122，第150図）

この古墳の主体部は，主軸方位N６°50′Eにとりほぼ南に開口する横穴式石室で，玄室部分とわずかに前室らしい部分の一部が残り，現存長は3.15mである。

主体部掘り方は，上縁で3.45m幅をもつが，奥行４m弱，深さは0.60～1.00mある。下端では，石室壁体内面と0.5m程の幅をもって0.20m程深い溝状に掘り下げ，この溝状の部分に壁体を築いて，空間は版築状に土を固めて壁体を支えている。壁体に使用される石材は主に緑泥片岩の扁平石だが，緑簾片岩に近い硬めの材や雲母片岩に近い材も含まれている。

玄室は，やや胴張りになる巾着形の平面プランで，床面では左壁側の長さ2.10m，右壁側の長さ2.20m，奥壁の直線部分の幅1.95m，最大幅2.30m，玄門内側の幅0.8mを測る。

奥壁は，５枚の扁平石を立てて据えられ，その上に扁平石が平積みされている。中央の鏡石は高さ57cm（石材の高さ75cm），幅55cm，厚さ10cm程で，左右には鏡石をより少し幅狭な板石を並べている。左側壁は，奥壁寄りと玄門寄りに比較的大きめの石を据えて，胴の張る部分には



第 150 図　26号墳石室実測図（1/60）

扁平石を基底部に平積みして高さを合せ，それらの上に扁平石を平積みないし小口積みして持ち送りに築いている。右側壁は，奥壁寄りに大きめの石を据えて，玄門側に下がる傾斜に，比較的大きさの整った石で平積みないし小口積みされているが，地滑りの影響を受けて玄門寄りで間隙を生じている。壁体の残りの良い部分での高さは0.75mである。

玄門袖石は，左側で幅60cm，高さ65cm，厚さ30cm程の石，右側で幅55cm，高さ60cm，厚さ20cm程の石を立てて据えているが，床面下に約0.30m埋め込まれる。玄門幅0.75mの床面には，長さ70cm，高さ25cm，厚さ10cm程の板石を高さの半分以上埋めた框石がある。

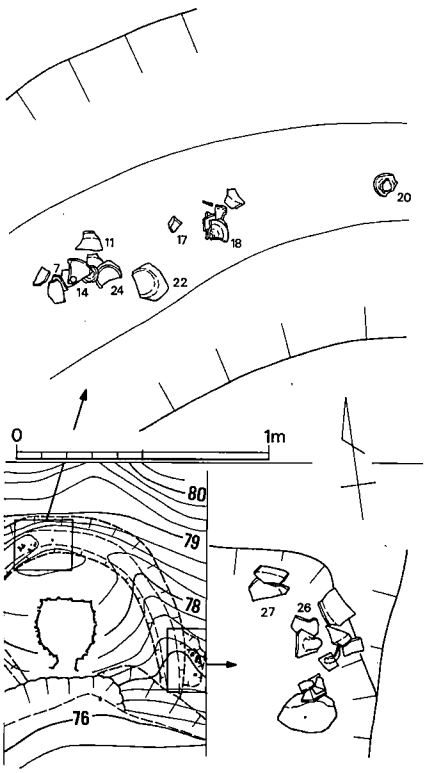
前室ないし羨道の部分は，一部残るだけだが，左側壁で袖石より開いていることと，右側袖石の前に土器が出土することから，おそらく幅1.25m程度と推定される前室の一部が残ったものであろう。

床面敷石には小さな緑泥片岩の割石が用いられ，玄室内奥側半分にまとまった敷石がみられるものの，玄室前側半分や前室部分には若干割石が散在する程度である。

遺物出土状況（図版123，第150・151図）

石室内では，玄室床面の中央から右奥にかけての敷石に混じって5点の鉄滓が出土した。また，前室床面の玄門右袖石の前からと框石に接して須恵器杯蓋が各1点，框石の前側で須恵器杯身が2個体分出土した。なお，前室床面にあって前面の崖に転落した須恵器杯蓋・身が各1点ある。

周溝では，Ⅰ区と前面の崖から出土した須恵器平瓶ないし壺の胴下半部片は接合するが22号墳前面にも相当する位置でもある。また，周溝Ⅱ区の東寄りからは須恵器杯蓋・身，高杯，壺などの破片が多数出土したが，杯蓋と高杯が他の器種よりも卓越する。この位置はまた23号墳の前面に相当する位置である。周溝Ⅳ区の東側に広がった部分では土師器甕の破片が出土した。ここはまた24号の前面の延長に相当する。



第151図　26号墳周溝遺物出土状況実測図（1/30）

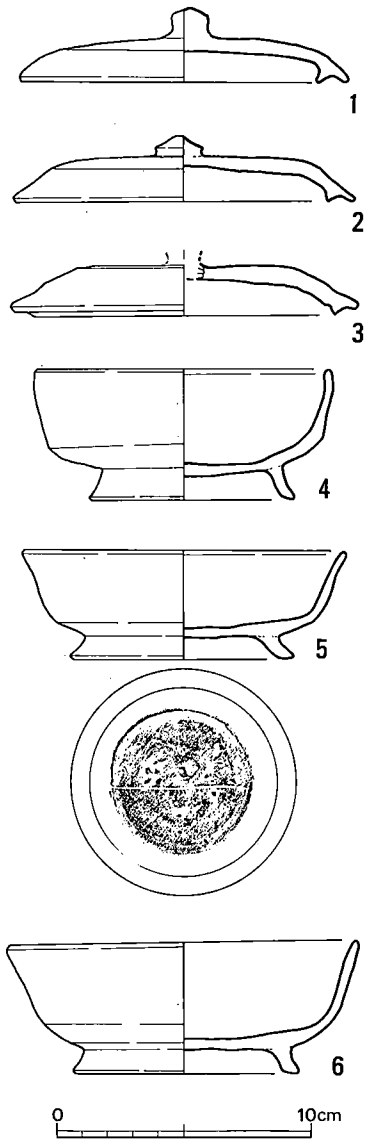
出土遺物（図版124・125，第152～155図）

石室出土土器（第152図）

須恵器杯蓋（1～3）　平坦な天井部な小さな宝珠

形つまみが付き，口縁部には身受けのかえりかある。天井部外面は回転ヘラケズリされている。いずれも胎土に砂粒を含み，堅緻な焼成で黒灰色を呈している。1は口径13.0m，器高2.45cm，つまみの径1.5cm，つまみの高さ1.2cm，2は口径13.5cm，器高2.6cm，つまみの径1.9cm，つまみの高さ0.8cm，3は復原口径13.8cm，残存器高2.0cmの大きさである。

須恵器杯身（4～6） 外方に踏張るような高めの高台をもつ杯身。体部外面はヨコナデ，外底面はヘラ切離しの後ナデられる。4は口径12.1cm，器高5.1cm，高台径8.1cmの大きさで，体部下半に稜をもち直に立上がる口縁部はやや内弯する。胎土に細かめの砂粒を含み，堅緻な焼成で茶灰色ないし黒灰色を呈している。5は口径13.0cm，器高4.3cm，高台径8.9cmの大きさで，口縁部はやや外反する。底面に単直線のヘラ記号が付されている。胎土に細かめの砂粒を含み，堅緻な焼成で緑灰色を呈している。6は口径13.9cm，器高5.25cm，高台径8.9cmの大きさで焼け歪みがある。胎土に砂粒を含み，堅緻な焼成で暗灰褐色を呈している。

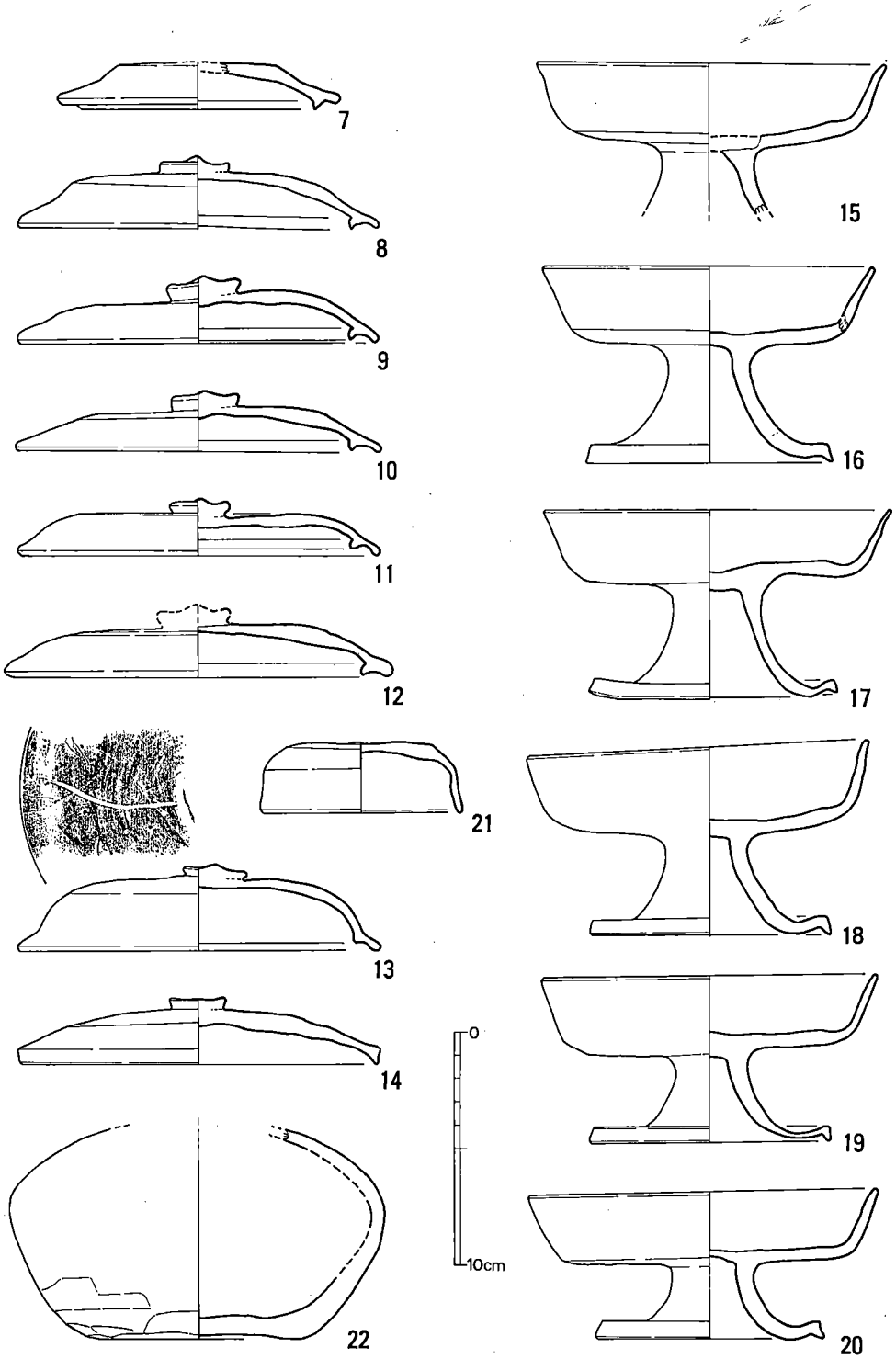


第 152 図　26号墳石室出土土器実測図（1/3）

周溝出土土器（第153・154図）

須恵器杯蓋（7～14） 7は平坦な天井部と身受けのかえりをもつ杯蓋。口径12.2cm，器高2.0cm，かえりの径10.0cmの大きさ。天井部外面はヘラ切離しのあと軽くナデられる。細砂を胎土に含み硬い焼成で暗緑灰色を呈している。

8～13は天井部に扁平な擬宝珠形つまみが付き，口縁部に身受けのかえりをもつ杯蓋。天井部外面は回転ヘラケズリされるが，8～12の天井部は低く，13は天井部が高く，1条線のヘラ記号が付されている。11・13はつまみがやや小さく，かえりが口縁部の内側に短く付く。胎土に砂粒を含み，硬く焼成されている。8は口径15.5cm，器高3.1cm，9は口径15.7cm，器高3.2cm，10は口径15.8cm，器高2.6cm，11は口径15.7cm，器高2.5cm，12はつまみを欠損するが口径16.7cm，残存器高2.3cm，13は口径15.6cm，器高3.8cmの大きさである。



第153図　26号周溝II区出土土器実測図1 (1/3)

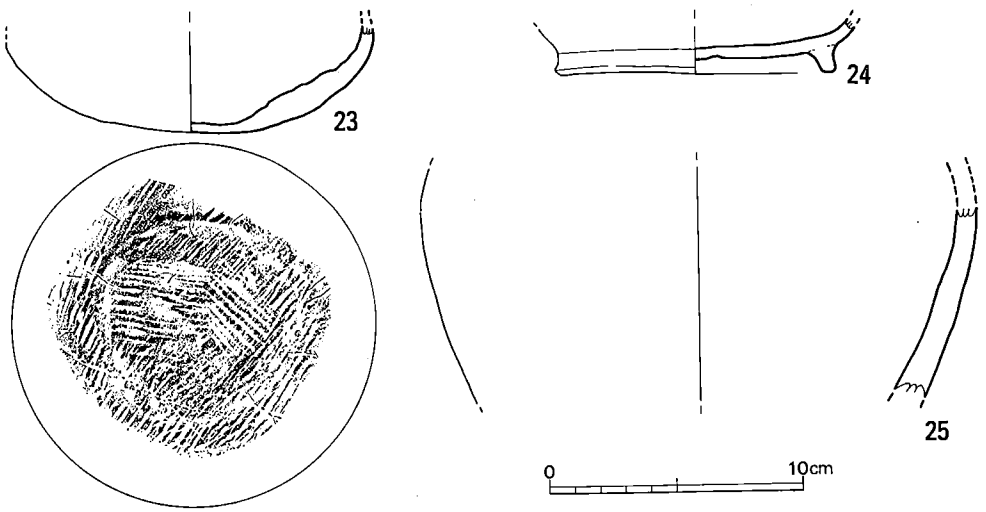
14は天井部に扁平な擬宝珠形つまみが付き，鳥嘴状口縁部をもつ杯蓋。天井部外面は回転ヘラケズリされる。口径15.7cm，器高2.9cmの大きさで，硬く焼成されて黒灰色を呈している。

須恵器高杯(15～20)　脚部が太く短いタイプの高杯。15は脚部を欠くが，杯部はやや丸味をもって立ち上がり口縁部は外反気味である。復原口径15.0cm，杯部高3.7cm。わずかに残る脚部は，太めで柱状部に透かしの切込み入るようである。細砂を含む胎土で暗緑泥片岩灰色を呈している。16・17は，杯部が器高の２／５程度を占め，口縁部は外反気味，脚裾部は鳥嘴状の端部をもつ。16は口径14.3cm，器高8.5cm，裾部径10.6cmの大きさで，砂粒を若干含み淡灰色褐色ないし黒灰色を呈している。17は復原口径15.0cm，器高8.2cm，裾部径10.7cmの大きさで，淡黒灰色を呈している。

18～20は，杯部と脚部の高さが同じくらいで，口縁部は直線的にのび，脚裾端部は鳥嘴状を呈している。18は口径14.7cm，器高8.2cm，裾部径10.4cmの大きさで，砂粒を若干含み淡黒灰色を呈する。19は口径14.5cm，器高7.2cm，裾部径10.4cmの大きさで，砂粒を若干含み暗緑灰色を呈する。20は口径15.0cm，器高6.4cm，裾部径9.7cmの大きさで，砂粒を含み暗灰色をないし黒灰色を呈する。

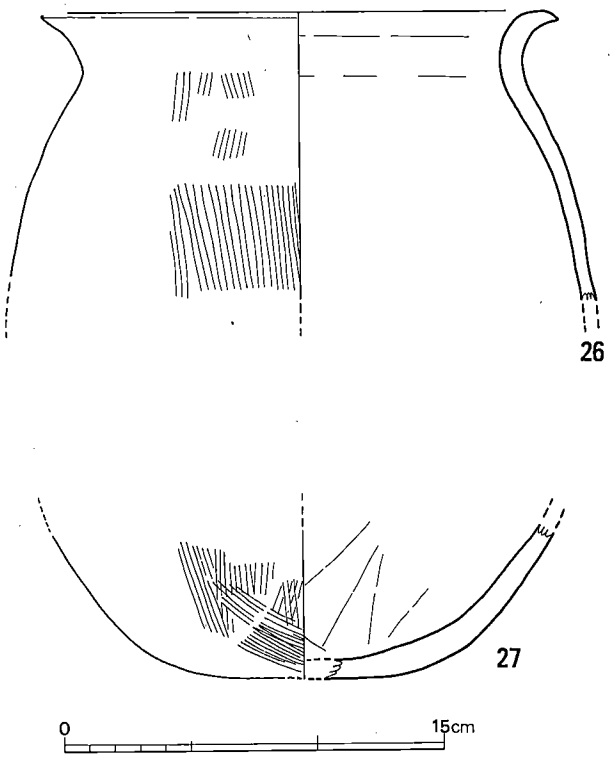
須恵器蓋(21)　口径8.8cm，器高3.1cmの大きさで，天井部外面はヘラ切離しのまま未調整である。砂粒を胎土に含み硬い焼成で暗灰褐色を呈している。

須恵器壺(22)　口頸部を欠くが，残存器高9.0cm，胴最大径16.1cm，底径9.8cmの大きさの体部が残る。雑にナデられるやや中凸みの底面をもち，底部付近は手持ちヘラケズリされている。砂粒を胎土に含み，硬い焼成で黒灰色を呈している。



第 154 図　26号墳周溝II区出土土器実測図２（1/3）

須恵器底部(23～25)　23は全体の形を判断し辛いが壺の底部であろうか。丸底で最大径14.6cmに広がる。外底面には平行タタキ目が明瞭につき，胴部は回転ヨコナデ調整されている。内底面の中央部にも平行タタキ目がみられる。堅緻な焼成で紫がかった黒灰色を呈している。24は高台をもつ破片で，杯身の底部であろうか。底径11.2cmの大きさで，硬く焼成されて灰色を呈する。25は壺が平瓶の底部に近い胴下半であろう。胴最大径22.0cmに復原できるが，器壁がやや厚く，硬い焼成で灰褐色を呈している。



第 155 図　26号墳周溝Ⅳ区外出土土器実測図（1/3）

周溝Ⅳ区外出土土器（第155図）

土師器甕(26．27)　26は口縁部，27は底部破片で，接合しないが同一個体であろう。口縁部はあまり肥厚しないで，強めに外反するが口径は20.6cm。胴部外面は縦方向のハケ目調整，内面は磨滅しているがヘラケズリされているようだ。底部はやや平らな丸底で，器高は30cmかそれを少し下回る程度であろう。胎土に砂粒を含み，橙褐色ないし淡褐色を呈している。

石室出土鉄滓　5点あるがいずれも小塊で，鬚が入っている。総重量は26.5gである。

周溝Ⅱ区出土ふいご羽口　2点あるが接合しない。小さな破片では赤く焼けた面があり，大きな破片には溶解してタール状になった部分がみられる。

石室出土土器では，須恵器杯蓋に身受けのかえりがあり，杯身体部に丸味があるので，7世紀後半頃に比定されよう。また周溝Ⅱ区出土土器では，杯蓋に身受けのかえりをもつものがほとんどで，鳥嘴状口縁の付くものが1点あり，高杯も脚部が太く短いタイプであるので，7世紀後半から7世紀末ないし8世紀初頭頃に相当するであろう。　（小池）

27. 27号墳

墳　丘（図版126－1，第156図）

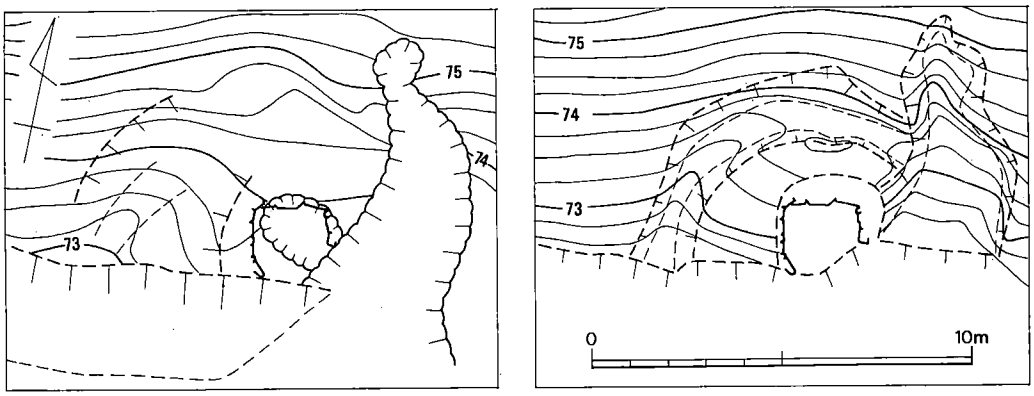
D地区南斜面の中段に群集している古墳群のなかでは南西隅にある古墳。調査前の観察ではブドウ畑の開墾で削られた崖と，地滑りによって生じたと思われる亀裂で斜面を刻む谷の角になる部分で，陥没穴があり一部石材が露出していたので古墳の存在は確認できた。陥没穴の斜面上4～5mの所で標高75m位に周溝の上縁部とみられる変換線と，西側1～2mに墳丘上端の変換線が観察できた。表土を剝ぐと，墳丘上縁は径6.5mの孤を描き，最も高い所で標高73.8mを測る。墳丘盛土は石室の西側部分にのみみられるが，盛土の下に旧表土はみられない。周溝幅は1.2～1.8mで上縁外径は9.0m強，周溝底の最高所は標高74.6mである。

主体部（図版126－2・127－1・2，第157図）

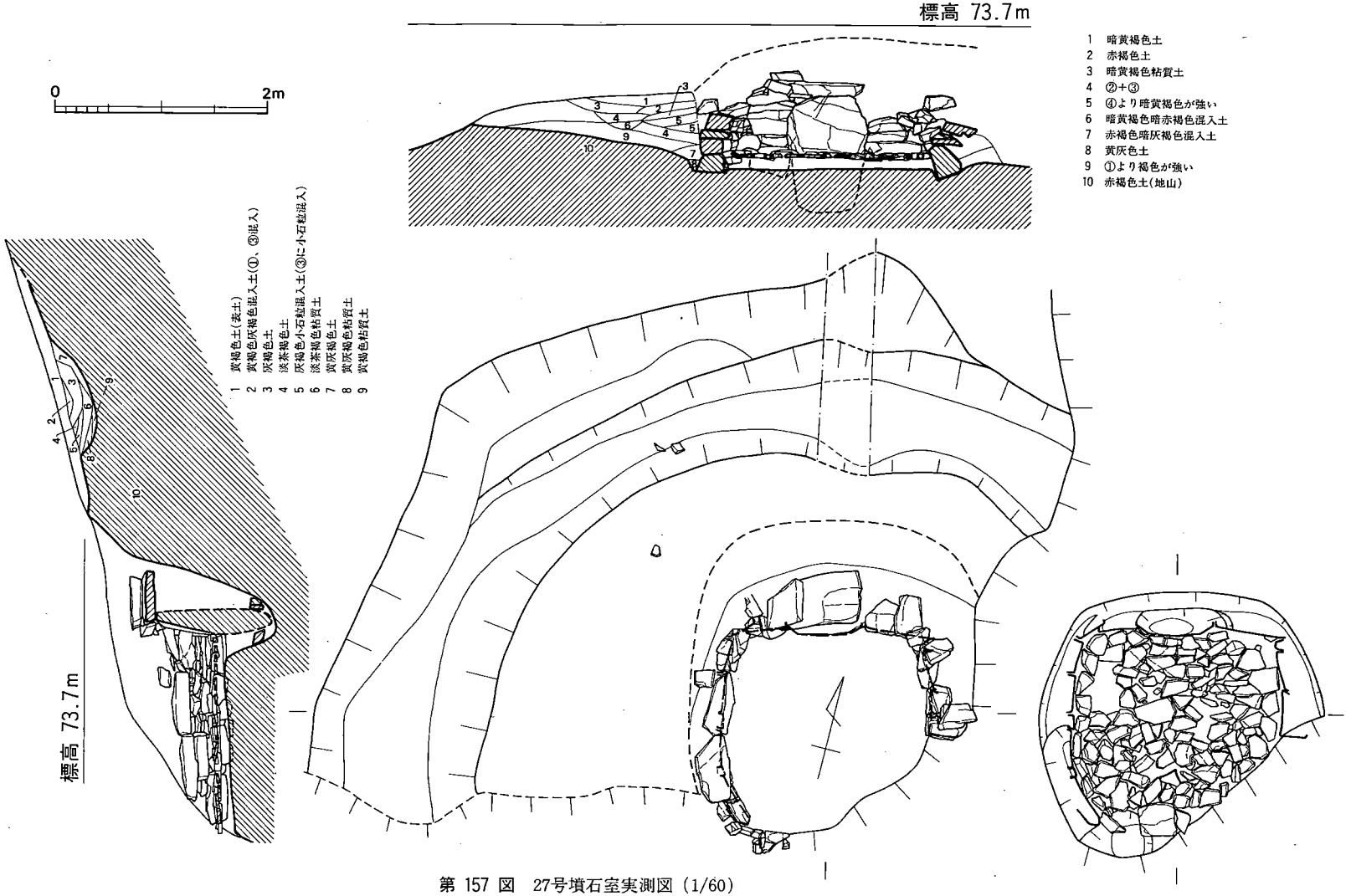
この古墳の主体部は，主軸方位N13°40′Wにとり南南東に開口する横穴式石室である。いま玄室部分のみ残っているので，単室が複室かの区別はなしえない。この古墳に使用される石材は緑泥片岩の扁平石がほとんどである。

玄室は巾着形の平面形をなすようで，現存長は1.90m，奥壁の幅1.80m，胴張りの部分での最大幅1.96mだが，玄門の幅は分からない。

奥壁は中央に高さ55cm（石材の高さ110cm），幅76cm，厚さ23cmの扁平石を立てて据え鏡石とし，両脇には基底部から平積みで下部に厚めの石，上は扁平石を積み，鏡石の上には広い扁平



第 156 図　27号墳墳丘・地山整形面測量図（1/200）



第 157 図　27号墳石室実測図（1/60）

石が架けられている。最も残りの良い部分では，7段分高さ0.70mに残っている。左側壁は基底部に厚めの石を据えて，その上は扁平石を平積みで持ち送り気味に築いている。右側壁もほぼ同様の積み方だが，玄門側を失って残りは悪い。

玄室床面には，小さな割石が敷き詰められているが，周壁に沿った部分はやや丁寧に並べられている。

主体部掘り方は，赤褐色の地山を掘り込んでいるが，上縁での幅は1.35mで，石室後方の上縁は標高73.7cm位にあり南東側に傾斜して低くなっているので，おそらく石室前面側は盛土で床面調整していたものと思われる。下端の幅は2.70m，現存長3.20mで，鏡石部分に0.40m強，南西隅部に0.30m弱の掘り込みがある。おそらく南西隅の掘り込みは左袖石の据えられていた部分であろう。

遺物出土状況（図版127－3，第158図）

玄室左袖石があったと推定される部分の内側の床面敷石上から，須恵器蓋6，杯身4，椀4がまとまって出土した。重なったものや裏返ったものがある。

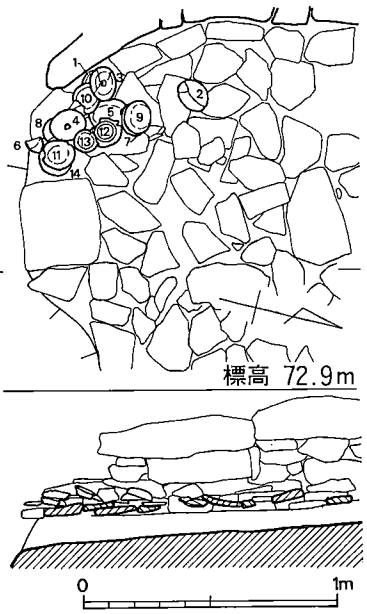
周溝では，II区から須恵器の甕破片と杯蓋1点，長頸壺の肩部らしい破片など，III区から須恵器甕の破片が出土した。また，東横の亀裂部分から須恵器大形ないし中形甕の破片が出土した。

出土遺物（図版130，第159・160図）

石室出土土器（第158図）

須恵器蓋（1～6）　1・2は身受けのかえりをもつもので，平坦な天井部につまみが付かない。天井部外面はヘラ切離しの後ナデが加わっている。1は口径12.7cm，器高2.1cm，受け部かえりの径10.6cm，2は口径12.7cm，器高2.0cm，かえりの径10.5cmの大きさで，2点とも砂粒を少し含み堅緻に焼成されて黒灰色ないし暗灰色を呈している。

3～5は身受けのかえりをもつもので，平坦な天井部に小さなつまみが付くもの。天井部外面は回転ヘラケズリされている。身受けのかえりはややシャープなつくりである。つまみの上面がやや窪み，高さは0.8cm，径は1.6～1.8cm程度。3は口径12.7cm，器高2.8cm，かえりの径10.6cm，4は口径12.9cm，器高2.8cm，かえりの径10.8



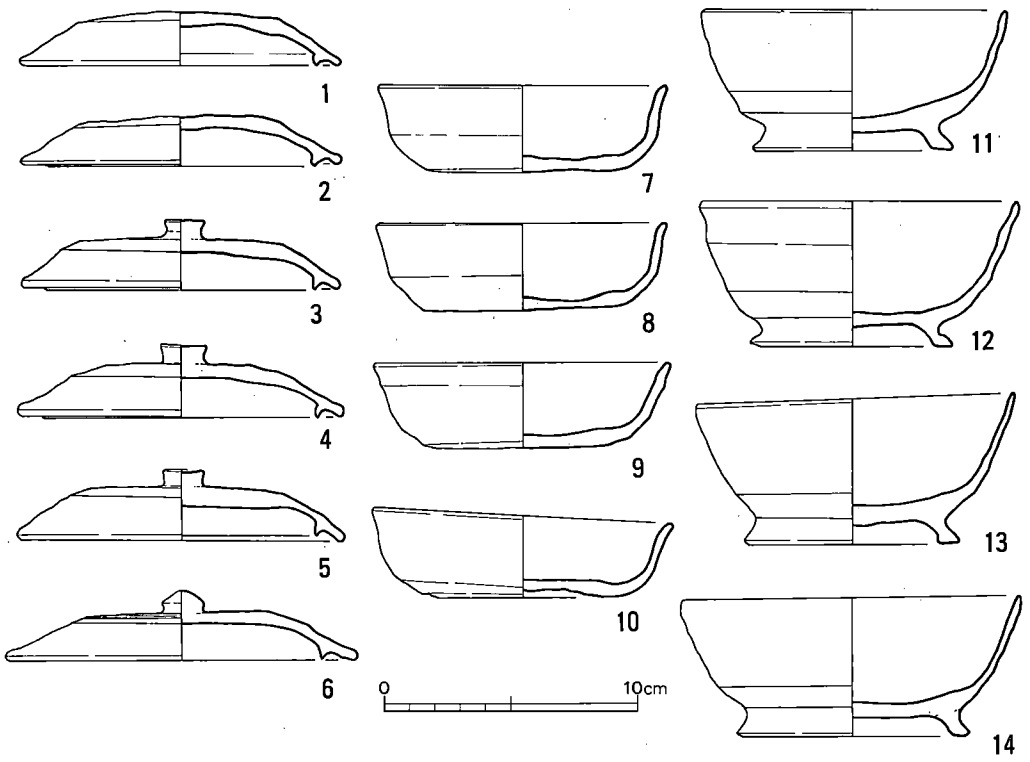
第 158 図　27号石室遺物出土状況実測図（1/30）

cm，5は口径12.9cm，器高2.8cm，かえりの径10.6cmの大きさ。細砂粒を含むが良好な焼成で，外面黄茶褐色，内面赤褐色を呈している。

6は身受けのかえりをもつもので，平坦な天井部に小さな宝珠形つまみが付くもの。天井部外面は回転ヘラケズリされるが，カキ目調整のようになっている。口径13.9cm，器高2.8cm，かえりの径11.1cm，つまみは高さ0.9cm，径は1.6cmの大きさ。細砂粒を含むが良好な焼成で，外面暗茶褐色，内面橙褐色を呈している。

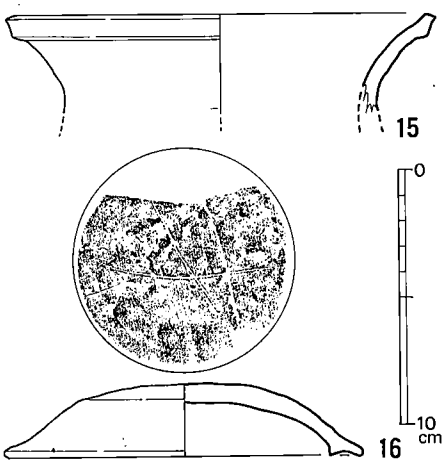
須恵器杯身（7～10）　7～14は高台が付かない杯身。外底面はヘラ切離しの後軽くナデられる。底部から丸味をもって立ち上がる口縁部はわずかに外反する。石英など砂粒を含み堅緻に焼成されて暗灰色・緑灰色・黒灰色などの色調を呈する。7は口径11.5cm，器高3.5cmの大きさで，色調と重なり具合からはすると2の杯蓋とセットとみられる。8は口径11.6cm，器高3.6cm，9は口径11.8cm，器高3.4cm，10は口径12.0cm，器高3.4cmの大きさである。

須恵器椀（11～14）　口縁部は直線的に立ち上がり，高台は外方に踏張るように付いている。口縁部は回転ヨコナデされるが，体部下半に回転ヘラケズリの痕がみられ，外底面はヘラ切離しの後ナデて高台を貼り付けている。細砂粒を含みやや軟らかな焼成で，淡緑灰色・橙褐色な



第 159 図　27号墳石室出土土器実測図（3/1）

いし暗褐色の色調を呈する。11は復原口径12.1cm，器高5.5cm，高台径7.9cm，12は口径12.7cm，器高5.8cm，高台径8.1cm，13は口径12.7cm，器高5.8cm，高台径8.6cmの大きさである。色調と重なり具合からして，それぞれ3・4・5の蓋とセットであろうと思われる。14は復原口径13.5cm，器高5.4cm，高台径9.2cmの大きさで，高台の貼り付け部分にヘラ先を連続押圧した痕跡がみられる。6の蓋とセットになろう。



第 160 図　27号墳周溝出土土器実測図(1/3)

周溝出土土器(第159図)

須恵器甕(15)　周溝II区から出土した。外反する口縁部破片で，端部外面に1条の三角凸帯をつくり出し，端部内面はやや凹む。復原口径17.0cmの大きさ。砂粒を含むが硬い焼成で淡緑灰色を呈している。

須恵器杯蓋(16)　周溝II区から出土した。身受けのかえりをもつが，天井部につまみが付かない杯蓋で，ヘラ切離しのまま外天井に×字のヘラ記号が付けられている。砂粒を含みやや軟らかな焼成で淡緑灰色を呈している。

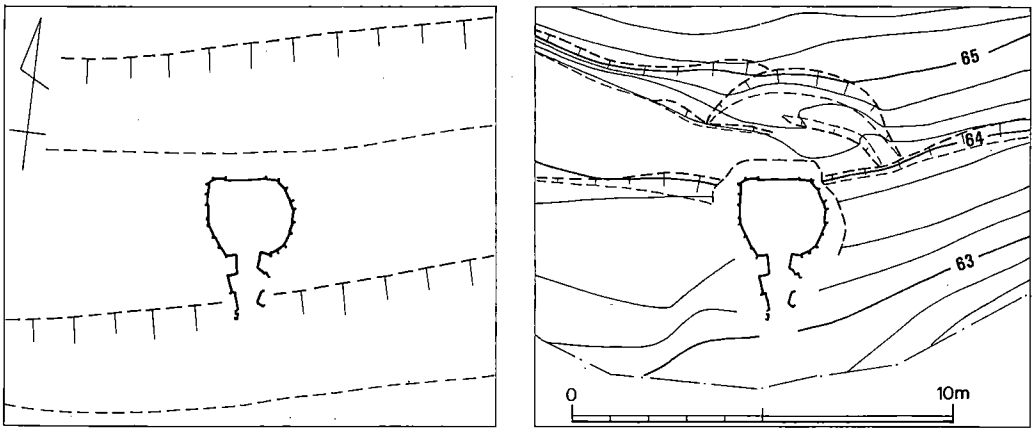
なお，須恵器長頸壺・大形甕の破片は図示しえない。

石室出土土器では，蓋に身受けのかえりがあり，鳥嘴状口縁部をもたないことから7世紀後半から末までの間の時期が考えられる。　(小池)

28. 28号墳

墳　丘(図版129－1，第161図)

調査区南端の斜面下部にあり，ブドウ栽培の段々畑に隠れていた古墳である。表土を剝ぐと標高64～65mの部分に周溝の掘り込みがあり，上縁での最大幅1.50m，下端の幅0.40m，溝底の最高所は標高64.6mを測る。また，主体部の石室が標高63～64mの部分にみられたが，石室奥壁から前の部分は開削の段で削られている。墳丘と呼べるような盛土はほとんどみられず，石室前面列石の裏側に地山と大差のない土が一部堆積している程度である。周溝は主体部の後方に



第 161 図　28号墳墳丘・地山整形面測量図（1/200）

巡るのみで，それより前方は削平されて残らない。いま残る部分から推定すると周溝底の内側で直径5.50m程度の規模であったと思われる。

主体部（図版129－２・130・131，第162図）

この古墳の主体部は，主軸方位をＮ７°10′Ｗにとりほぼ南に開口する，複室構造の横穴式石室である。石室全長は3.50mで，石材には緑泥片岩の板石が用いられている。

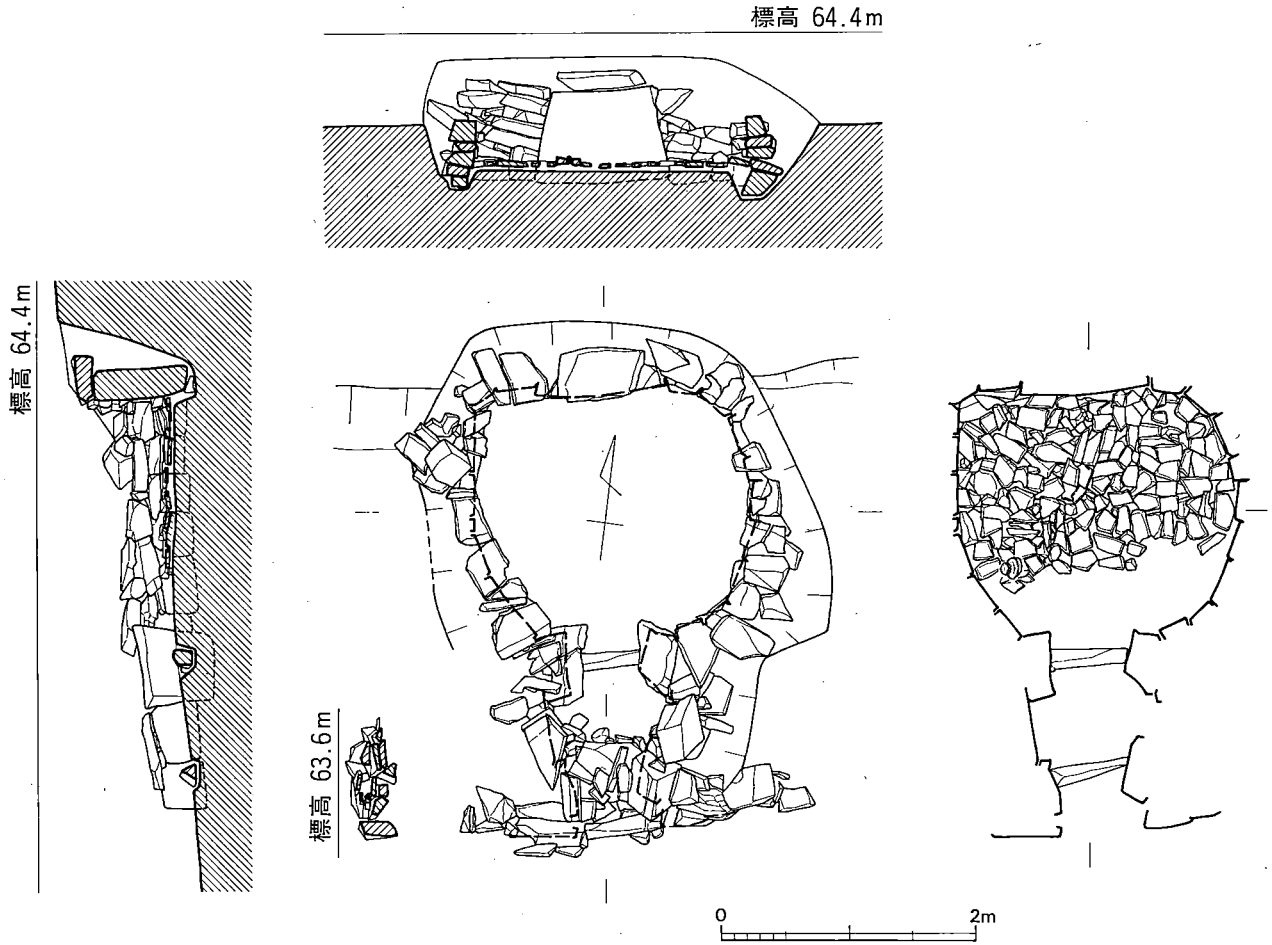
玄室は，長さ1.90m，最大幅2.20mを測る。奥壁は幅2.00mで，左側が直線的だが右側は弧を描く。玄門側の幅は1.10mで，両側壁は胴張りになるものの左右対称ではなく，左側壁では巾着形，右側壁では円弧の平面形を呈している。地山整形時に掘り込まれた主体部掘り方内ぎりぎりに，玄室平面形に合せた深さ20cm程の溝状の掘り込みを巡らせて，その中に腰石を据えている。

奥壁は，中央に高さ75cm，最大幅106cm，厚さ24cmの大振りな板石を立てて鏡石とするが，石が前側に倒れないように小さな扁平石を左前側にかませている。鏡石の両脇には基底部に厚みのある石を腰石にし，その上は扁平石の平積みないし小口積みしている。左右の側壁も基底部に厚みのある石を腰石に，腰石の上はやや厚めの扁平石を平積みないし小口積みしている。

玄門の袖石は，高さ60cm，幅50～60cm，厚さ20～30cm程の石を立てて据えている。袖石間の玄門幅は，玄室側で0.66m，前室側で0.59mを測る。框石は，長さ60cm，幅15mm，厚さ17cmの石を，玄門幅いっぱいにわたして，半分以上埋め込んで据えている。

玄室床面には，小振りな割石の敷石がみられるが，奥側２／３に限られて，玄門側にはみられない。

前室は，最大幅1.00mを測り，左側での玄門袖石と羨門袖石間の長さ0.50m，框石間の長さ0.



第 162 図　28号墳石室実測図（1/60）

79mだが，右側はやや短い。前室床面にも敷石はみられない。

羨門の袖石は，高さ・幅ともに40～50cm，厚さ20～25cm程の石を据えている。袖石間の幅は，前室側で0.70m，羨門側で0.50mを測る。框石は，主軸方向に対して約10°振って右側が内に入る袖石の配置に即して，長さ60cm，幅・厚さ14cmの石を据えている。

前面の列石は，羨門袖石から左側に0.90m，右側に1.40m分直線的にのびているが，割石を1・2段積んだものである。

石室閉塞は，羨門袖石の部分で框石を覆うように，長さ0.80～1.00m，高さ0.30m分が残っていた。特に規則的な積み方はしていないが，前面側では一部列石前面を覆うような形に並べられていた。

遺物出土状況（図版132－2，第162図）

石室内では，玄室敷石の左袖石に最も近い位置で須恵器平瓶が1点出土している。石室外では羨門より1.80m前の位置で須恵器杯身が1点出土しているが，これより前の斜面は調査区域外である。

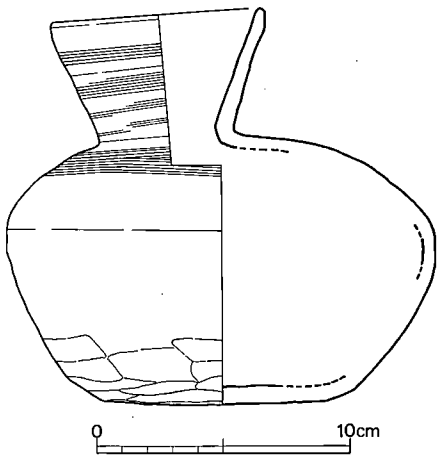
出土遺物（図版132－3，第163・164図）

石室出土土器（第163図）

須恵器平瓶(1)　器高15.7cm，口径8.5cm，体部高10.7cm，胴最大径17.0cm，底径8.9cmの大きさ。口頸部は直線的に開き口縁部はわずかに内弯する。体部は扁球形で底部は平底。口頸部と胴部は回転ヨコナデ調整されるが頸部付近はカキ目調整がみられる。底部付近は手持ちヘラケズリ調整されている。胎土に砂粒を多く含み，堅緻や焼成で暗灰色を呈している。

前庭部出土土器（第164図）

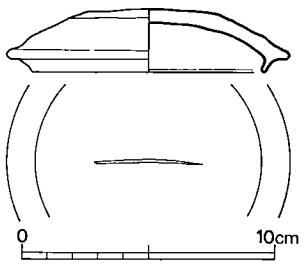
須恵器杯蓋(2)　身受けのかえりをもつもので，口径11.2cm，器高2.5cm，かえりの径9.2cmの大きさ。外天井は手持ちヘラケズリされ，内天井に単直線のヘラ記号が付されている。胎土に砂粒を含み，堅緻な焼成で淡灰褐色を呈している。



第 163 図　28号墳石室出土土器実測図（1/3）

石室出土の須恵器平瓶は，大宰府史跡SX2480，SK388出土の土器に対比できるもので，それらの土器は7世紀末に考えられている(註5)。また前庭部出土須恵器杯身は蓋受けのかえりをもつ小形のも

のであるので，7世紀前半から中頃にかけてのものであろう。したがってこの古墳の時期の使用開始をこの時期まで遡らせて考えることが可能であろう。そして7世紀末頃までの追葬を考えておきたい。（小池）



第 164 図　28号墳石室前面出土土器実測図（1/3）

29. 石棺墓

13号墳と16号墳・17号墳の周溝に挟まれた，斜面の標高約87mに位置する。また斜面上方の8号墳の前面斜面に相当し，8号墳の主軸線上にあたる位置でもある。調査前の観察では，17号墳の周溝の上縁変換線の横で，傾斜がわずかに緩やかになる部分であったので，何らかの遺構が存在するのではという予想はされたものの，不明瞭であった。表土を慎重に剝ぐと，割石のまとまりがあり石室の一部かと思われたが，大きな石は全く含んでおらず周囲に周溝らしい部分もみられなかった（第165図）。

主体部（図版132，第166図）

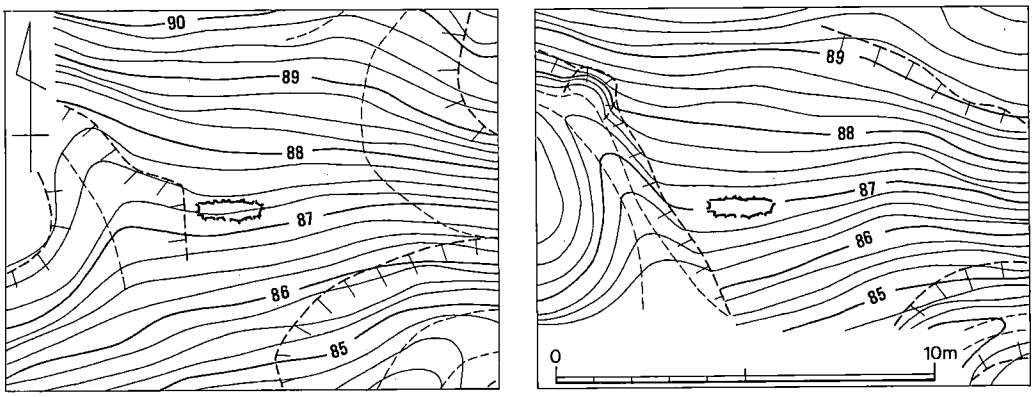
主軸方位N80°Wにとり，頭位が西側の石棺墓で，緑泥片岩割石を用いている。上部は削平を受けて，大半を失っている。

主体部掘り方は，斜面に直交する方向に主軸をとり，現存する部分での長軸2.4m，斜面上側には主軸中央より0.7mに上縁がある。下端では長さ1.85m，幅0.7～0.8m規模の隅丸長方形に，岩盤の石が部分的に露呈する地山を掘り込んでおり，盛土の床面調整はみられない。

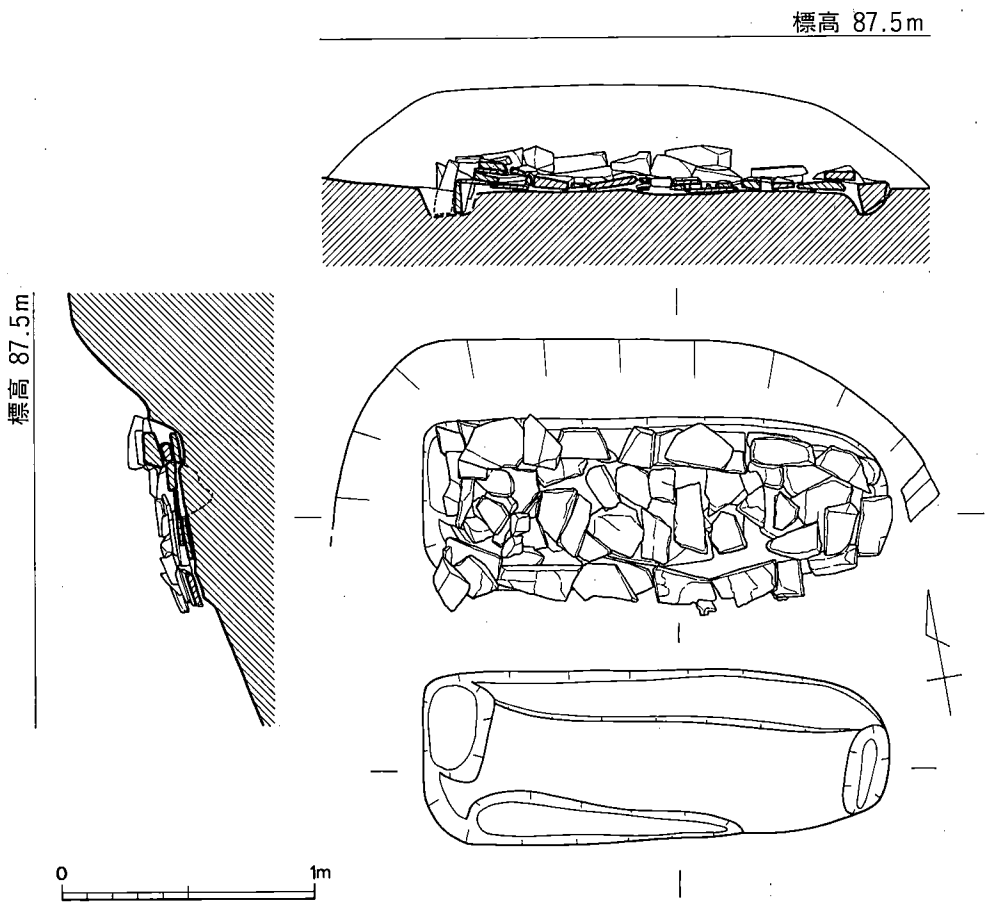
石棺内法は，長さ1.57m，最大幅0.42m，最小幅0.25mを測る。東端がやや幅狭の長方形プランである。小口は，床面は約0.10m掘り込んで，西側に板石が立てて据えられ，東側は厚めの石がわたされている。両側壁は，床面をわずかに掘り込み，基底部から平積みされる部分が多いものの，西端では一回り大きな石を据えている。北側壁では0.20m程の高さに残るものの，南側は残りが悪く，基底部の石にも一部滑り落ち気味のものがみられる。

床面は，扁平石で敷石されているが，規則的な敷き方をしておらず，凹凸がある。敷石が転落石かの区別の難しいものがあり，図示した中には転落石も混ざっているかも知れない。

石棺墓内外からの遺物の出土はみられなかった。（小池）



第 165 図　石棺墓周辺地形測量図（1/200）



第 166 図　石棺墓実測図（1/30）

30. その他の遺構と遺物

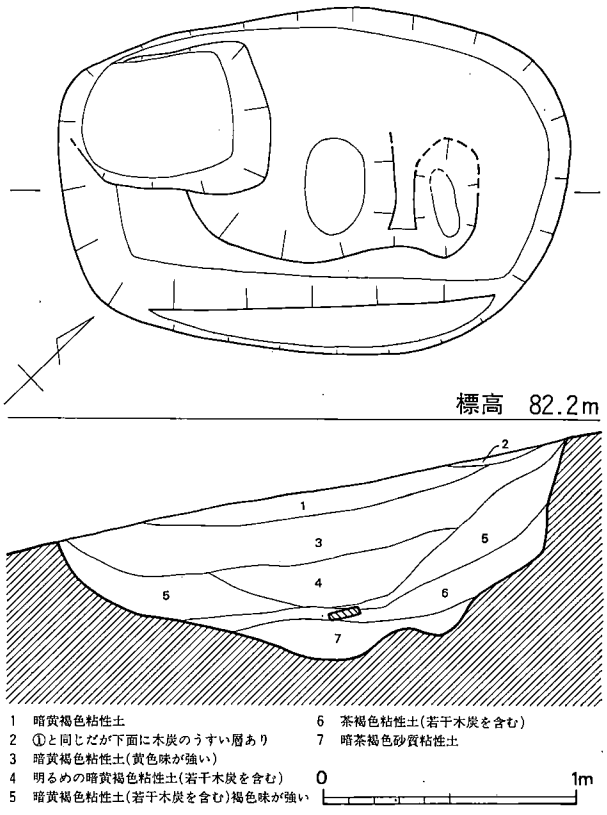
土　坑

1号土坑（第167図）

12号墳墳丘下層から検出した土坑で，玄室内西南部から西南方に長軸が伸展する。長軸方位はN44°Eをとる。

平面形態は長楕円形を呈し，長軸上端が2.02m，短軸上端が1.35m，最深部の深さ0.68mを測る。埋土は地山と大差ない黄褐色粘質土が主となるが，上面から中層にかけて若干木炭片を含む。壁面は北側が急勾配の立ち上がりとなるが，東南側は二段掘りでやや急勾配をなし，南西部はやや緩やかな立ち上がりとなる。坑底は凹凸を有すが，西南隅部の一部は掘り過ぎである。

遺物は何ら出土せず，陥し穴状遺構とも形状を異にするので，本遺構の性格は判断を下し難い。しかし，16号墳墳丘下の2号土壙や24号墳墳丘下の柱穴状遺構の存在と，本遺構の所在地点を考慮すれば，12号墳の墳丘・石室築造に関連する遺構となる可能性があることを指摘しておきたい。



第 167 図　1号土坑実測図（1/30）

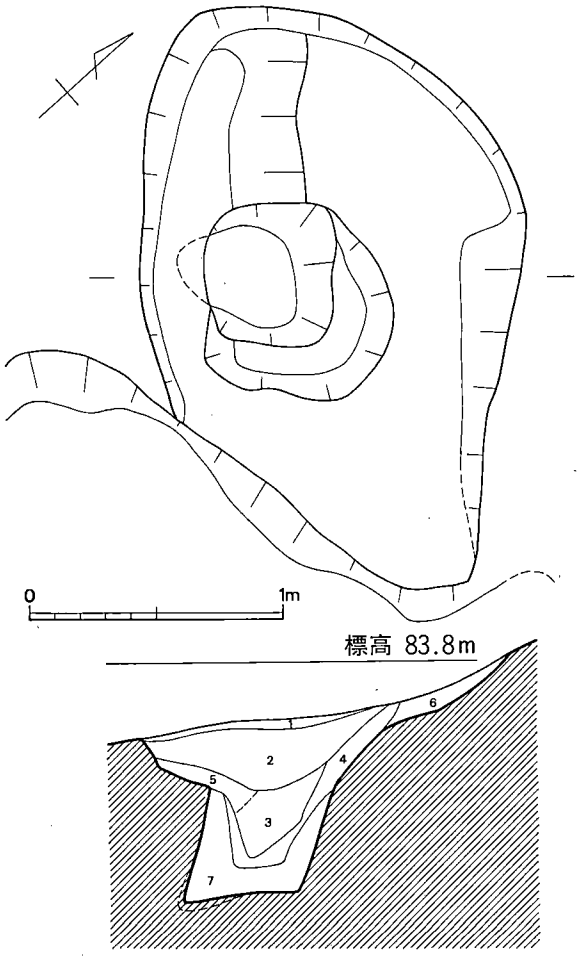
2号土坑（第168図）

16号墳墳丘下層から検出した。玄室奥壁北西隅から北西に伸展し，南側は玄室方に拡がっていたのかも知れない。長軸方位はN48°Wをとる。

平面形態は長楕円形と推定される。規模は長軸が2.3m以上，短軸上端が1.5mを測る。北側が二段掘りの形をなすが，南方に至って同一の平坦面となる。坑内の略中央部に，上端面で0.50m程の方形プランで柱穴状を呈す掘り込みが存す。埋土は地山と

大差なく茶褐色粘質土が主で，開口していた期間は僅かと考えられる。

遺物は何ら出土していない。性格については，24号墳墳丘下の柱穴状遺構の方がより類似していると考えられる。柱穴と考えるならば，16号墳石室架構（鏡石の設置）に関連したと言えなくはないが，現時点においては性格及び時期不詳と言わねばなるまい。（武田）



1 淡茶褐色土
2 淡い暗茶褐色土（多く砂利混入）
3 暗茶褐色土＋②（やや粘質、やや砂利混）
4 暗茶褐色土（やや粘質）
5 やや淡い暗茶褐色土（砂利混、礫混）
6 茶褐色土＋少し暗茶褐色土盤片混
7 ④＋礫混

第 168 図　2号土坑実測図（1/30）

包含層出土・表採遺物（第169図）

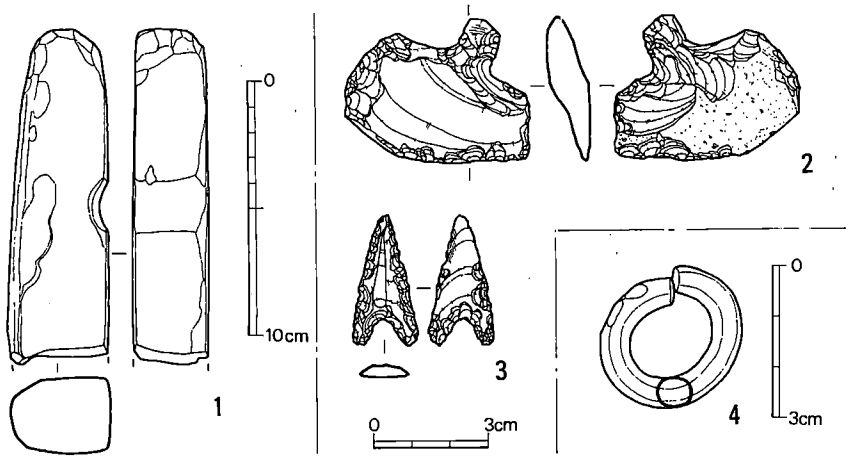
石　斧(1)　14号墳と15号墳の周溝が接する部分から出土した。頁岩製の磨製柱状石斧で，刃部を欠損する。現存長13.2cm，幅3.0cm，厚さ4.0cmで，体部に抉りがある。頭部には敲打痕がみられる。弥生時代の遺物である。

石　匙(2)　15号墳の墳丘下から出土した。漆黒色黒曜石の原面を残す剝片を素材にして，打瘤部付近の剝離面・原面を調整剝離してつまみを作り出しているが，刃部の調整剝離は少ない。長さ3.8cm，幅4.9cm，厚さ1.0cm，重量15.7gを測る。縄文時代の遺物であろう。

石　鏃(3)　26号墳の西側周溝が出土した。漆黒色黒曜石の縦長剝片を素材にした打製石鏃で，剝片の先端側を鏃の先端に利用したもので，主要剝離面では先端部の加工はない。長さ3.4cm，幅1.7cm，厚さ0.3cm，重量1.55gを測る。縄文時代後・晩期のものであろう。

耳　環(4)　D地区東南斜面で採集した。銅地の耳環で，緑錆がふいている。少し捩れていて，外径は長径2.83cm，短径2.55cm，5.8㎜×6.3㎜の円形に近い楕円形断面を有している。開墾時にどこかの古墳を壊してもたらされたものであろう。

なお，D地区斜面の包含層からは，縄文時代後・晩期，弥生時代の石器が出土しているもの



第 169 図　包含層出土・表採遺物実測図（1/3, 1/2, 2/3）

の，この時期の土器類は出土していない。D地区斜面先端部の蓮池畔では弥生時代中期初頭を中心とした遺物が多数採集されている。縄文時代の遺物も周辺から若干採集されているので，斜面先端部との関連が考えられ，古墳築造時以前に将来された可能性を考えておきたい。

（小池）

註 1　福岡県教育委員会　1980　干潟遺跡 I　福岡県文化財調査報告書第59集
2　新吉富村教育委員会　1989　桑野廻古墳　新吉富村文化財調査報告書第 4 集
3　朝倉町教育委員会　1972～1974　県営宮野地区開拓パイロット事業地区遺跡調査報告書 I ～III　朝倉町文化財調査報告書第 2 ～ 4 集
4　福岡県教育委員会　1986　九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告 －6－
5　九州歴史資料館　1975～1989　大宰府史跡昭和49～63年度発掘調査概報

Ⅳ　おわりに

1．段状遺構について

1　はじめに

3基の古墳に段状遺構が認められ，本文の不備を補充しつつ段状遺構が内包する墓道にも若干論及して行きたい。特に10号墳は段状遺構と石室構造が深く係わりを持っていると思われるので，本文中で判断し難い箇所の再検討を行いたい。各論へ移る前にD地区の有り様を，私が感受した点を若干述べておきたい。

D地区の古墳群は東西に走る尾根筋の南斜面に28基全て築造されていた。28基の古墳は位置及び標高などの視覚から4つに大別出来よう。西端に位置し標高12mと最も高所に1基だけ造られている1号墳と，2～7号墳が東西に幅広く配列しているのと，8～27号墳の20基が中腹に群集し，南端の斜面下部にある28号墳の4グループである。1号墳は単独で異彩を放つが，最も近い2号墳でも30mの距離を隔て，標高差も8m近く存す。他の古墳の被葬者より高い階層者を埋葬しているのであろうか。ここで問題とするのは，1号墳の前面より南北に走る小さな尾根筋が存し，この尾根はE地区の古墳群にも通じていることである。またD地区の古墳群のみならずE地区の古墳群との関連性が若干なりとも存するのではなかろうか。指摘するだけに止めておく。

8～27号墳の20基について先ず述べる。標高95mまでの中腹に位置する。一見して分るように，この大群の墳丘の規模が大小様々，石室構造も種々入り混じっている。しかしこの項で問題とするのは，この群の西端で南北に走る小さな尾根状筋である。この尾根筋には古墳を築造していないし，また大半以上の古墳が尾根に平行な主軸方位をなし南に開口している。上記より尾根筋が何らかの役割を担っているとも考えられ，後章に墓道の項を設けて考えてみたい。

この尾根筋の上方に5号墳が位置する。5号墳が属すグループは標高102～113m間に，幅60mに渡って横長に点在している。群をなしていると言うよりは，2基が1単位と思われる程に偏った配置となる。28号墳は単独に存しているが，畑の造成等で相当数の古墳が破壊されたとも考えられて，単独に存したとは考え難い。全容不祥であり推測の域を出ない。

上記がD地区を視覚より感受した事象であり，西端と中央の尾根筋を後章で述べる。

2　10号墳の羨道部について

先ず10号墳から述べる。本文中にも述べたが，占地する位置と地形が石室構造を左右した古墳である。東側に位置する８号墳との関係は，周溝の切り合い関係は不明であり，周溝を共用する態をなしてはいるが，石室構造等より８号墳が古いと考えられる。また，南に位置する18号墳との新旧関係では，石室構造等より18号墳が若干前出すると考えられる。これらから，10号墳が許容される空間は大きく限定され，拡大可能となるのは西方及び北方側となる。西方側については本文中にも述べたが，玄室内の西側壁側には玄室を拡大しようとする意図が汲取れる。一方の主軸方では，玄室奥壁から羨道部方約３m地点まで略水平な地山整形を行なっている。その地点より南は盛土をなしている。仮に羨道部前面まで略水平な地山整形を行なうとすると，同規模の古墳を築造する場合には検出した地山より更に1.4m程深く掘削しなければならない。相当な労力と時間を必要とする。斯かる理由より，勾配をなす特殊な羨道部を造る方法が勘案されたと考えられる。

一方別の視点から考えてみる。玄室より墳丘前面の列石までを石室と明確に意識し，段状遺構を羨道部としてではなく，主目的を墓道と意識して築いたとする考え方である。この考え方だと，前述した「地山整形……1.4m程深く掘削しなければならない。」云々は何ら問題とはならないし，残存する墳丘や石室構造の有り様からも妥当と思われる。また段状遺構に側壁を立てることで前庭部は創造され，視覚では他の古墳と規模は何ら変わらなくなろう。

上記から，この急勾配の地形に即応した築造法であり，段状遺構を築くことでより簡単な登り下りが可能となる。段状遺構の主軸が東偏していることから，18号墳の西側周溝をつたい下りるルートが墓道と想定される。これらの理由及び推測から，段状遺構は墓道を主目的として築かれ，墳丘の規模や石室構造は従目的となろう。

最後に段状遺構を復原してみる。略半分程の石が旧態を止めているが，最下方の様に上位の石材が滑り落ちた状態であった。また検出時には，石室及び前庭部の石材が崩落して段状遺構の上面に多く存した。これらの石材を取り除く時，滑り落ちている石材の一部も混じって排除したことは歪めない。上記のことを勘案すると，石材の存しない所は若干移動したか滑り落ちたのであろう。側壁の有り様がこのことを傍証している。よって段状遺構は前庭部の前方まで存したと思われ，全長は約2.75mに達しよう。また，石組は上方より設置して下方の石を僅かに重ね合せる方法と，斜面に沿って敷き詰めていく方法が考えられる。検出状況では前者が考えられるけれども，移動したり滑り落ちたことを考慮に入れるならば後者も否定することは出来ない。高低差をつけたり重ねることで足懸かりが良くなるのは明白である。

3　4・5号墳の段状遺構について

10号墳の段状遺構が石組となるが，4・5号墳の段状遺構は素掘りとなる。先ず5号墳より整理する。試掘トレンチで東端を喪失し，また流失した部位も存するので復原することより始めたい。断面観察時で明瞭に段状をなしていたのは上方の2段だけで，下方は踏み面の上端部が大きく流失した状態であった。平面プランにおいては，一部掘りすぎも歪めないが，踏み面を部分的であったが確認された。その結果，下方より蹴上げ高は19cm，30cm，20cm，25cmを測るが，下方側の流失が甚大なことを考慮すると約25cmの蹴上げ高となろう。一方の踏み面は，下方より40～48cm，35～43cm，50～60cmを測り，蹴上げが勾配をなしていると想定して約40cmの踏み面が考えられる。上記の様に復原したが，下方について不備な点が多いことは否定出来ない。

傍証資料として出土品の検討を行ないたい。出土した土師器片の大半以上が，埋土下層の上面に相当し，一部が踏み面直上に当る。このことは，段状遺構が流失している時及び相当流失した後の期間内に土器が混入したことになる。ある程度長期間に渡って存した遺構と考えられるし，また修復を必要とするものではなかったのであろう。逆に言うならば，必要とするのは限られた期間となり，所謂墓道として存続したと思われる。かなり厳しい斜面に古墳を築いているし，また追葬もなされていることから斯かる遺構を必要としたのであろう。

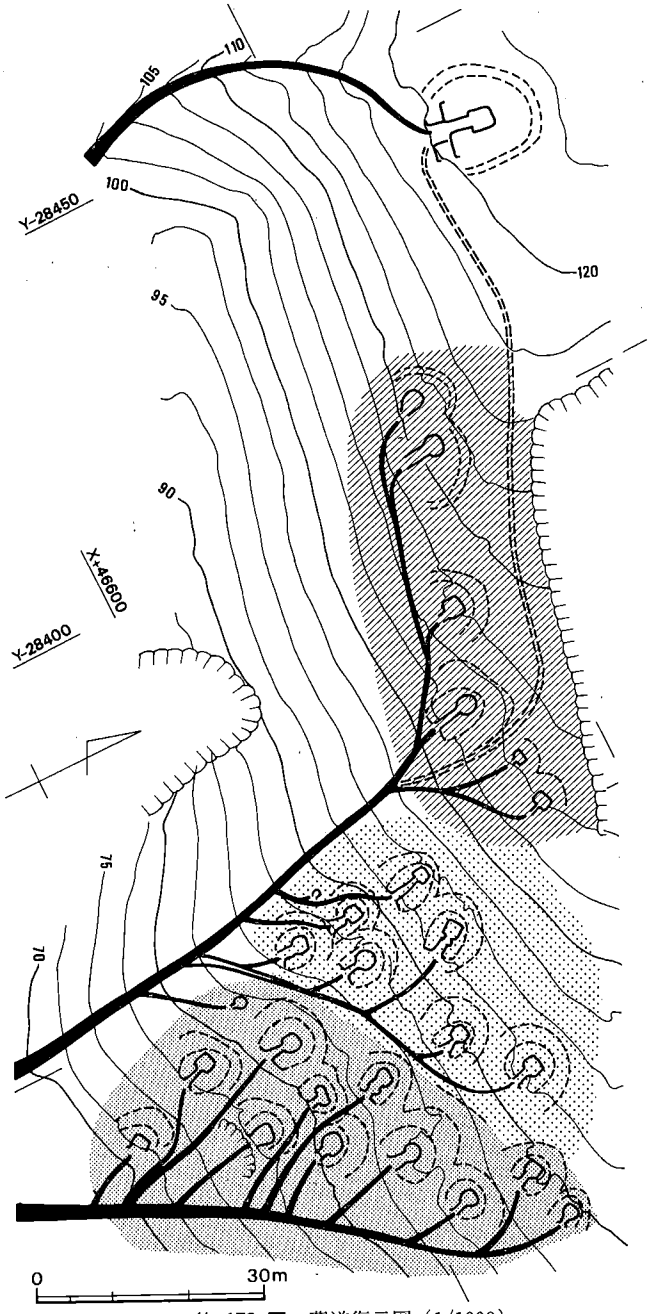
墓道とした場合，水野氏の言う茎道（註1）に当たり，段状遺構より先は何れかに伸展することになる。後で述べるが，南北に走る尾根筋がこの段状遺構に通じている。また断を下すのは早計となるが，段状遺構は築造時は不明ながら墓道としても用いられたのであろう。

次の4号墳の段状遺構について述べる。前述の5号墳より更に急勾配の斜面に築造されている。築造法は略同様となるが，5号墳よりは踏み面がやや狭いのと比較的残存の良いのが特徴となる。急勾配な場所でもあり，5号墳より短期間に埋没したとも想定される。性格についても5号墳と同じ考えられて，茎道として用いたのであろう。この段状遺構より東に位置する5号墳周溝を経て枝道に至るルートが考えられる。

また本文中にも問題点として取り上げたが，須恵器の長頸壺の出土状況を再度考えてみたい。4号墳の玄室には床面は2面存する。また，口縁部の一部は羨道部床面上より出土したが，この場所は本体が出土した前庭部より高所に位置する。上記より勘案すると，壺は当初の床面上に置かれていた品であり，搬出される際に壊れて羨道部に落ちたと推定される。落ちた一部の4点が段状遺構の中・下段に流出したと思われる。このことから，段状遺構は玄室修復時に造られた可能性が高くなろう。埋没した時期は前述した通りである。

4　墓道について

1の項で大略な古墳群の位置関係や有り様に触れたが，この項では尾根筋に注目して考えを進める。特に，5号墳の主軸方向に当たる小さな尾根筋である。この尾根筋の東側には19基の大半以上の古墳が周溝を共有あるいは切り合いをなして群集している。また，主軸方位は若干の振れをなしているものの，全ての古墳は南に開口している。そして，概ね下方に位置する古墳は複室構造となり当古墳群では古い時期となる。一部の例外を除いて基本的には上方及び東方に順次伸展するに従って新しくなる傾向が認められる。各古墳の検討は後に述べられると思われ，ここでは省略し本題の墓道を考えて行きたい。上記の様な基本的築造順（古い古墳間に築造する例もある）をなして，何ゆえ古墳の位置が尾根筋東側の狭い範囲内に限定されているのであろうか。尾根筋やその付近又は南下方の斜面には，南に開口した古墳を築造できる空間がまだ残されていると見受けられる。そこでまず尾根筋側から的を絞っていく。この場所では最低でも5基の古墳が築造出来る空間が存する。何ゆえに狭い古墳群間や上方及び東方へ築造して行くのであろうか。古墳の被葬者の関係から生じた現象かもしれないが，



第 170 図　墓道復元図（1/1000）

この尾根筋付近には古墳を築造出来ない事象が存したとも考えられる。この事象は相当な規制力を持っていたことになるし，他律的規制が共有するものとなるのは墓道ではなかろうか。葬送儀礼の墓道ならば強力な他律的規制となろう。これが視覚より感受したことから想定された。この尾根は20基の古墳群とは配置関係等で明らかに異なる上方のグループに通じている。この両者間には石室構造に差異は殆ど見受けられず，同一の古墳築造集団の手による可能性が強いと思われる。では何ゆえに隔てて築造したのであろうか。被葬者間の関係に起因したとも考えられて，上方の6基を一つの群と想定出来る。また下方の20基についても，7世紀前半も僅かに存し，7世紀中頃から同後半そして後葉・末と連綿と続く2つの群に分けることが可能となる。墓道復元図に記した破線内の群である。この両者間に若干間隔が認められることから，群単位が想定され墓道も図の様に推定して，群単位で枝道を共有したと思われる。下方の群にもこの考えは該当しよう。

28号墳の付近に相当数の古墳が存したとするならば，別な幹道あるいは枝道が存したとも考えられる。全容不明であり，墓道復元図からも削除する。

上記の様に復元した群や墓道の根拠としたのは空間であり位置関係だけであり，確たる根拠とは言い難い。しかし，墓道を検出し得なかったことから，平面的に古墳群を把握して述べた次第である。

5　おわりに

大いに飛躍した点が多々あり，ここで若干まとめを行ないたい。

段状遺構は茎道に通じる遺構と考えられ，10号墳については18号墳の西側周溝が茎道になり得たと考えている。急斜面に築造したことが素因となり，斯かる段状遺構を造り上げたが，下方から眺めると更に一回り以上巨大に見える側面も有していよう。

下からの視覚を重視するならば，1号墳は古墳群中でも最たるものである。墳丘規模の大きさのみならず，石室に用いられた石材も他の古墳より巨大である。しかも，占地する所はD·E地区の尾根筋が合流する位置となる。この様な特異な古墳を築造した時期は古く考えても7世紀後半頃に比定される。この時期にこの様な古墳を造り出した社会背景は甚だ疑問であり，今後の課題として行きたい。

また，尾根筋を枝道または幹道と仮定したが，根拠としたのは築造可能な空間が存しているのに築造していない現象を取り上げて論じたものである。根拠に乏しい点は自認しており，各古墳の比較（築造時及び追葬の有様）と当古墳群の有り様を再検討して行く次第である。

（武田）

註1　水野正好　1975　群集墳の構造と性格，古代史発掘6　講談社
本文中に多く用いた根道・幹道・枝道・茎道は上記より引用したものである。

2．石室の形態と年代

1　はじめに

柿原D地区では，横穴式石室古墳28基を調査した。いずれも天井部を失い，また約３割の古墳が地滑りなどの影響を受けているものの，石室の平面形態のわかるものが多く，列石や段状遺構を伴うものもある。柿原遺跡群の発掘調査では，未報告のL地区分もあわせて約80基の横穴式石室を発掘したが，最も遺存状況の良好な地区がこのD地区であろう。そして今回の報告で，E～I地区分と合せて総数の大半が報告済みとなる（註１）。総括的なまとめはL地区の報告時に合せて行いたいが，ここではD地区の各古墳の石室形態と，時期的な問題に触れてみたい。

2　石室の形態

柿原D地区では，複室構造の石室と，単室の石室があり，玄室の平面形では胴張りのもの，円形のもの，方形のものなどがあり，いくつかに分類することができる。

A類　複式構造で，玄室・前室が丸味を帯び，前室は玄室より小さい。奥壁の鏡石が小形化して，袖石を除いて基底部から平積みされる石室。16号墳・20号墳がそれである。20号墳は，玄室の平面形で隅角状部分をもち隅丸長方形に似ている。

B－１類　A類の複室構造が退化したもので，玄室・前室ともに小振りになる。５号墳・９号墳・15号墳・22号墳をこの類に分類する。15号墳は，玄室がやや横長の円形で前室は矮小化している。16号墳よりも後出するタイプとみてよいだろう。22号墳も前室が矮小化して単室構造と区別し難くなっている。５号墳・９号墳は玄室平面は円形で，前室を意識しながらも単室構造をとっている。

B－２類　複室構造の退化した石室で，玄室・前室ともに小振りになる。B－１類では奥壁の鏡石・袖石を除いて基底部から平積みされるが，この類は平積みの部分が減少し，奥壁や退化した前室部分の側壁基底部に板石を立てている。８号墳・24号墳があげられる。８号墳は玄室の平面形が隅丸方形に近く，奥壁は辺をなしている。

C－１類　複室構造の退化した石室で，B－１類に比して玄室の長さが減少する。奥壁は辺をなして，玄室平面形は巾着形を呈する。奥壁の鏡石・袖石を除いて基底部から平積みされている。４号墳・14号墳・17号墳・27号墳・28号墳がこの類に含まれる。28号墳は，玄室奥壁に隅角状部分をもち前室は矮小化しているものの複室構造を保っているので，この類では古い要素を残すことになろう。

C－２類　C－１類石室に比して平積みの部分が減少し，奥壁や側壁の一部で基底部に板石を

立てている。12号墳・13号墳・26号墳をあげられる。このなかで26号墳は複室構造をとどめている可能性があり，12号墳は規模が一回り小さい。

D類　1号墳をあげる。1号墳は明らかな複室構造ではなく前室の退化した形である。隅角のある玄室は長方形の平面形である。奥壁は3枚の大きな石が立てられ，右側壁に鏡石状に据えられた石があって，袖石などの石を除けば基底部から平積みされている。

E－1類　3号墳をあげる。3号墳は複室構造で，玄室は方形。奥壁に3枚の石と左側壁中央に1枚の石が立っているので，1号墳の玄室を寸詰まりにしたような石室である。

E－2類　10号墳・25号墳をあげる。E－1類と玄室平面形は似るが，10号墳は奥壁と右側壁の一部の基底部で板石を立てており，平積みの部分もみられる。25号墳では奥壁中央に鏡石があり，それ以外の基底部にも板石が立てて並べられている。側壁はやや胴張りを呈している。羨道は長めである。

E－3類　11号墳は，寸詰まりになった石室で，玄室奥壁・側壁ともにやや厚めの板石が立てて据えられる。羨道部の長さは玄室の長さとあまり変わらない。

E－4類　2号墳・18号墳をあげる。玄室は正方形に近く，2号墳の場合前面側を失うのではっきりしないが胴張りのようにもみえる。周壁基底部には板石を立てて並べている。18号墳では羨道部が玄室の長さとおなじ位で前室の名残りをとどめている。

E－5類　7号墳は，E－4類に比して羨道部の退化がみとめられ，玄室長さの半分程の長さであり，幅も狭い。

F類　玄室平面形が横長長方形ないしこれに似た形を呈する単室横穴式石室で，奥壁の鏡石・袖石を除いて基底部から平積みされている。羨道部は短く狭い。21号墳・23号墳がこの類に分類する。

G類　玄室平面形が方形ないしこれに似た形を呈する小形横穴式石室で，奥壁の鏡石・袖石を除いて基底部から平積みされている。羨道部は短く狭い。6号墳・19号墳をこの類に分類する。19号墳は前面側を失うので羨道部については不明。

以上のように分類したが，柿原遺跡群G～I地区での石室平面形による分類（註2）との対比は次のように対比できよう。

A類 …… （VA類）
B－1類・B－2類・C－1類・C－2類 …… （VB類）
D類・E－1類・E－2類・E－3類・E－4類 …… （Ⅶ類）
E－5類・F類 …… （ⅥA類・ⅥB類）
G類 …… （特に分類なし）

表7　古墳計測表

（単位mm）

No.	墳丘規模					玄室				前室			羨道					出土遺物	
	外径	内径	石室形態	主軸方向	主軸方位	床面絶対高	長さ	最大幅	高さ	長さ	最大幅	高さ	長さ	幅	高さ	閉塞	石室全長	石室内	石室外
1	17.0	12.0	単室横穴式		N15°E	120.60	2.70	2.50					3.40	1.55		○	6.20	鉄滓	須恵器，土師器
2		7.0	単室横穴式		N35°30′W	111.10	1.7+	1.90											須恵器，土師器
3	10.0	7.0	複室横穴式	斜面直交	N3°W	110.00	2.10	2.30		1.00	1.40		2.50	1.00		○	6.05	須恵器，鉄刀子，絞金具，鉄釘	須恵器，土師器
4	9.6	6.6	単室横穴式	斜面直交	N3°W	106.70	2.15	2.57					1.50	0.90			3.90	土師器，鉄刀子，鉄釘	須恵器，土師器
5	12.2	7.2	単室横穴式	斜面直交	N7°30′W	102.60	1.95	2.22	1.8+				3.40	0.82		○	5.90	須恵器，土師器，玉類，鉄釘	須恵器，土師器
6		5.7	単室横穴式	斜面直交	N2°17′E	105.10	0.83	1.05					1.05	0.55			1.85	鉄滓	須恵器
7	7.0	6.5	単室横穴式	斜面直交	N17°30′W	104.30	1.70	2.00					1.15	0.45		○	2.80	銅銙板，鉄刀子	須恵器
8		7.0	複室横穴式	斜面直交	N17°21′W	92.60	2.30	2.15		0.90	1.00		1.40	0.72		○	5.50	須恵器，鉄刀	須恵器，土師器
9	11.0	8.0	単室横穴式	斜面直交	N14°50′W	92.30	1.85	2.20					2.45	0.75		○	4.25	須恵器，玉類，耳環，銅釧	須恵器
10		5.7	単室横穴式	斜面直交	N6°W	93.40	1.75	2.35					3.00	0.65		○	5.65	須恵器	須恵器，土師器
11	9.0	7.0	単室横穴式	斜面直交	N12°50′W	89.00	1.35	1.85					1.60	0.85		○	2.95	須恵器，土師器，鉄鑿	鉄滓
12	5.3	3.7	単室横穴式	斜面直交	N12°30′W	89.30	1.50	1.50					1.00	0.53		?	2.45		須恵器
13	8.5	6.5	横穴式	斜面直交	N15°W	89.05	1.75	2.20									4.0?	須恵器，玉類，耳環	
14	10.0	8.0	単室横穴式	斜面直交	N13°30′W	85.70	1.70	1.80					1.70	0.67		○	3.30	玉類	須恵器，土師器
15	13.0	10.0	複室横穴式	斜面直交	N6°20′W	83.60	1.43	1.87		0.57	1.16		2.30	0.93		○	4.80	須恵器，土師器，刀子	須恵器，鉄滓
16	10.5	5.5	複室横穴式	斜面直交	N10°W	83.00	1.86	1.92		0.07	1.57		0.98	0.64		○	4.40	須恵器，土師器，鉄斧，玉類	須恵器，土師器
17	9.0	8.0	単室横穴式	斜面直交	N2°45′W	86.70	1.80	2.25					2.25	0.75		○	3.80	須恵器，耳環	須恵器
18	7.0	5.0	単室横穴式	斜面直交	N13°W	88.05	1.40	1.70					1.30	0.60		○	2.90		須恵器，土師器
19			単室横穴式	斜面直交	N2°30′E	88.55	0.45	0.47									0.70		
20	7.5	5.0	複室横穴式	斜面直交	N7°W	85.60	2.10	1.90		0.90	1.20		1.40	0.60		○	4.50		須恵器，土師器
21			単室横穴式	斜面直交	N6°30′E	81.95	0.78	1.55					0.80	0.45		○	1.58	須恵器	土師器
22	14.0	9.0	複室横穴式	斜面直交	N4°W	81.30	2.12	2.16		0.70	1.10		2.00	0.8?		○	4.50	須恵器，鉄刀子，鉄釘，玉類	須恵器，土師器
23	8.0	5.0	単室横穴式	斜面直交	N4°E	80.70	0.94	2.00					1.10	0.50		○	2.78?	土師器，鉄鏃	須恵器，土師器
24	4.9	2.8	単室横穴式	斜面直交	N2°30′W	80.30	2.22	2.40					1.68	0.88		○	3.90?	須恵器，馬具，鉄釘	土師器
25	10.5	8.0	単室横穴式	斜面直交	N11°50′W	77.65	1.75	2.05					2.30	0.90		○	4.00	須恵器，耳環，玉類，鉄釘	須恵器
26	9.5	7.0	複室横穴式	斜面直交	N6°50′E	77.35	2.20	2.30									3.15+	須恵器，鉄滓	須恵器，土師器
27	9.0	6.5	横穴式	斜面直交	N13°40′W	72.40	1.9+	1.96									1.96+	須恵器	須恵器
28		5.5	複室横穴式	斜面直交	N7°10′W	63.30	1.90	2.20		0.50	1.00		0.45	0.50		○	3.50	須恵器	須恵器

3　石室の企画性と推定尺度

石室の企画性については，柿原古墳群のG～I地区とE･F地区でそれぞれ平面図をもとに検討され，使用された単位尺の推定と石室構築にあたって何らかの企画性が有ったと推定されている。そして使用尺として23cm，24cm，25cm，26cm，27cm，30cmが推定され，７世紀での30cm尺登場が問題の一つとなっている。ただし，凹凸の多い石室では計測値の取扱いをはじめ，単位の設定も主観的に陥りやすく，使用尺の推定は数学の遊びの観をまぬがれない。

しかし，時期的に近接した群集墳でのこのような検討は必要不可欠とも考えられるので，今回も1/20石室実測図，22～30cmの１cm刻みの方眼と数字を駆使した表をもとに，この推定に一応挑戦した。その結果は表８に示す通りで，使用推定尺には22・23・24・26cmがみられる。

22cmが１単位になるもの……13号墳

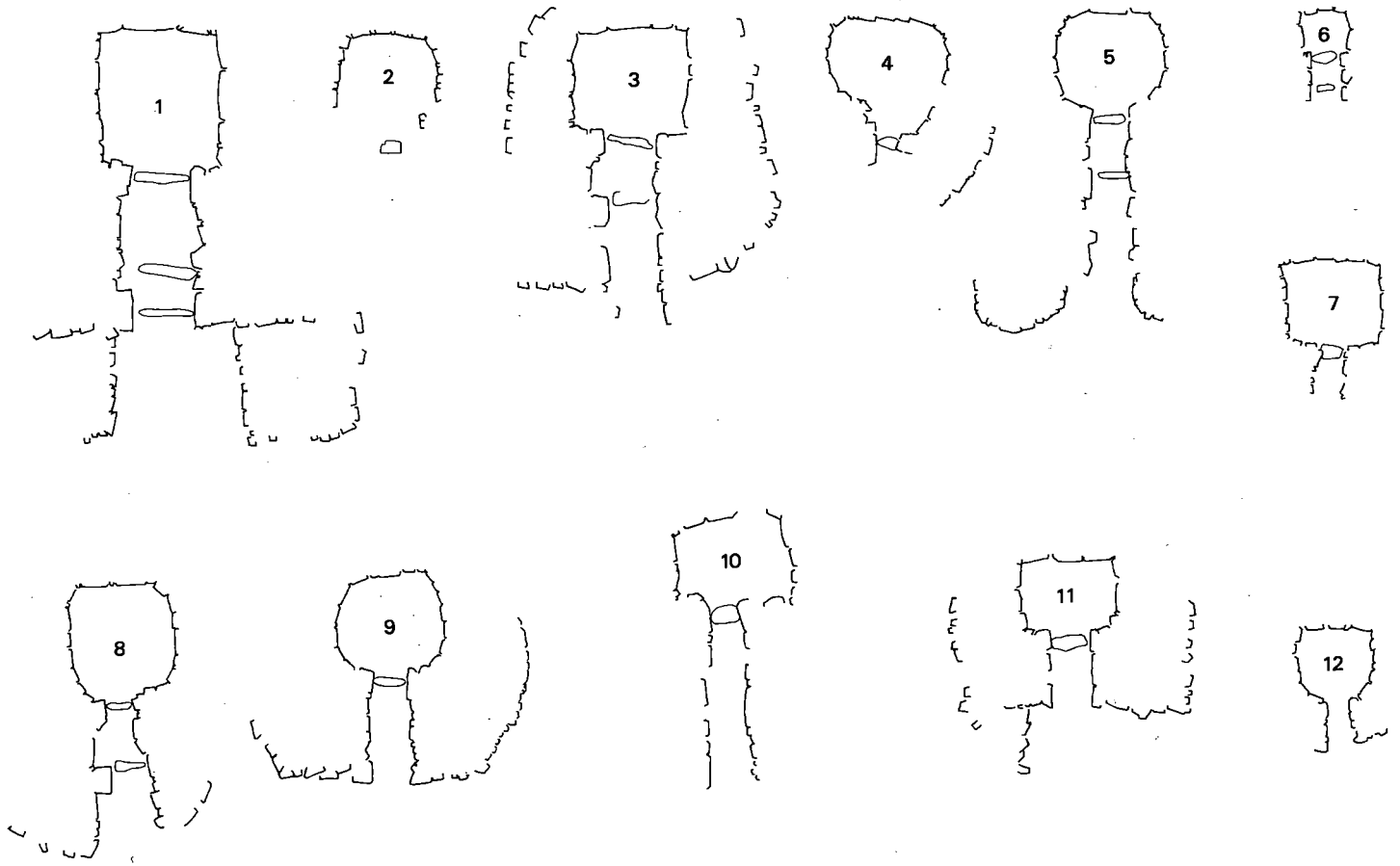
23cmが１単位になるもの……17号墳・18号墳・19号墳・21号墳

24cmが１単位になるもの……１号墳・５号墳・８号墳・９号墳・12号墳・14号墳・15号墳・16号墳・20号墳・22号墳～28号墳

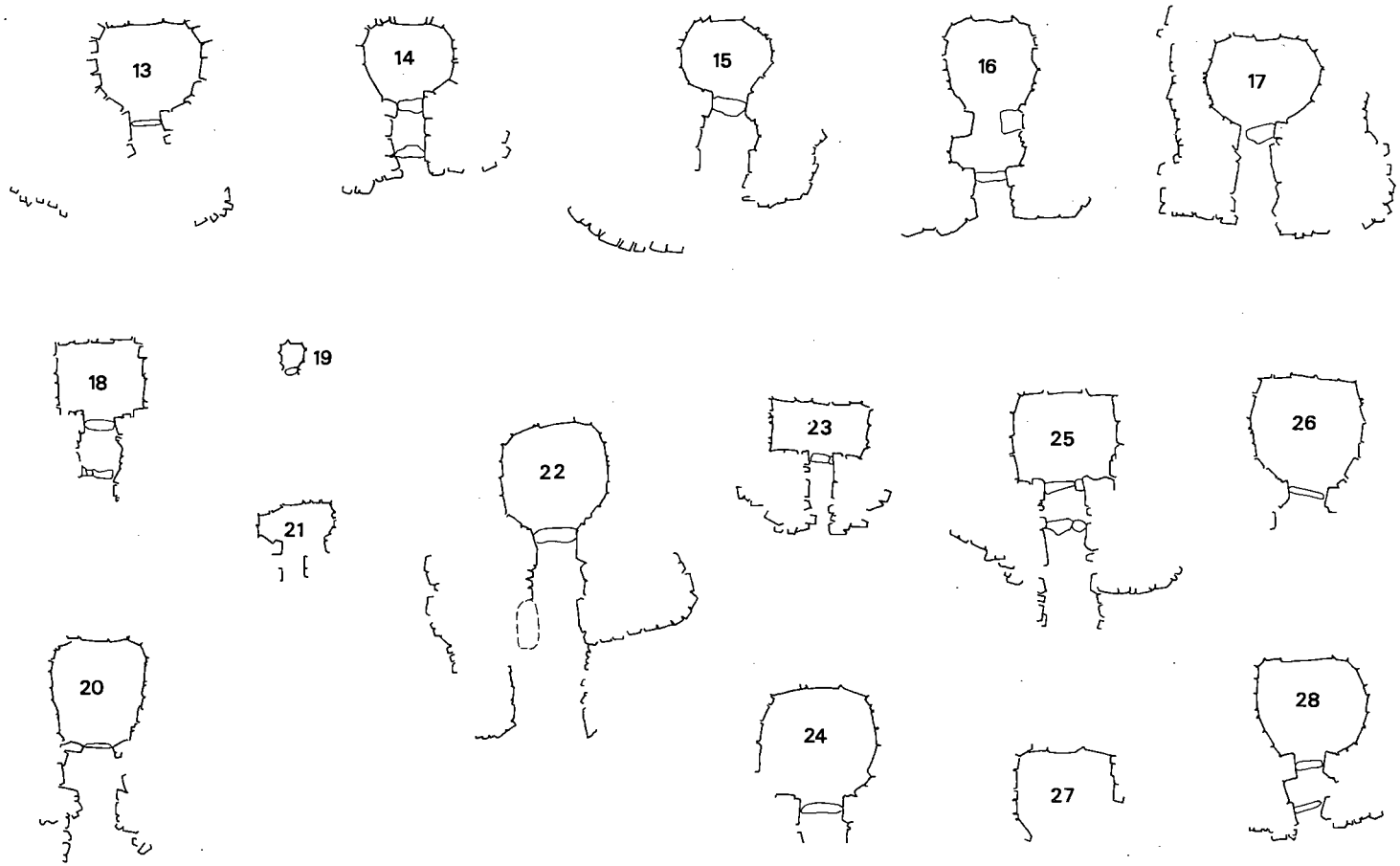
26cmが１単位になるもの……３号墳・４号墳・６号墳・７号墳・10号墳・11号墳

表８　石室各部計測値と各所の比率・推定尺度

	石室全長	a	玄室幅	b	玄室長	c	玄門幅	d	前室幅	e	前室長	f	羨門幅	g	推定尺度	d：b	e：f	b：c	a：c	c：d
1号墳	6.20	26	2.50	10	2.70	11	1.20	5					1.19	5	24	5：10		10：11	26：11	11：5
2号墳	3.70？	15？	1.90		1.70＋															
3号墳	6.05	21	2.30	9	2.10	8	1.00	4	1.40	5	1.00	3	0.90	3	26	4：9	5：3	9：8	21：8	8：4
4号墳	3.90	16	2.57	9強	2.15	8	0.80	3					0.90	3	26	3：9		9：8	16：8	8：3
5号墳	5.30	24	2.25	9	1.95	8	0.70	3弱					0.82	3.5	24	3：9		9：8	24：8	8：3
6号墳	1.85	7	1.05	4	0.80	3	0.55	2					0.55	2	26	2：4		4：3	7：3	3：2
7号墳	2.80	11	2.00	7	1.70	6	0.55	2					0.45	2	26	2：7		7：6	11：6	6：2
8号墳	5.50	22.5	2.15	9	2.30	9.5	0.55	2	1.00	4	0.90	4	0.72	3	24	2：9	4：4	18：19	45：19	19：4
9号墳	4.25	18	2.20	9	1.85	8	0.70	3弱					0.75	3	24	3：9		9：8	18：8	8：3
10号墳	5.65	17	2.35	9	1.75	6	0.65	2					0.68	2.5	26	2：9		9：6		6：2
11号墳	2.95	11	1.85	7	1.35	5	0.77	3					0.85	3.5	26	3：7		7：5	11：5	5：3
12号墳	2.45	10	1.50	6	1.50	6	0.50	2					0.53	2	24	2：6		6：6	10：6	6：2
13号墳	4.0？	19	2.20	10	1.75	8	0.63	3							22	3：10		10：8	19：8	8：3
14号墳	3.30	14	1.80	8	1.70	7	0.55	2強					0.67	3	24	2：8		8：7	14：7	7：2
15号墳	4.80	15	1.87	8	1.43	6	0.69	3	1.16	5	0.57	2.5	0.93	4	24	3：8	2：1	8：6	15：6	6：3
16号墳	4.40	17	1.92	8	1.86	8	0.7？	3	1.57	7	0.70	3弱	0.64	2.5	24	3：8	7：3	8：8	17：8	8：3
17号墳	3.80	17	2.25	9	1.80	8	0.65	3					0.75	3強	23	3：9		9：8	17：8	8：3
18号墳	2.90	13.5	1.70	7	1.40	6	0.65	3					0.60	2.5	23	3：7		7：6	27：12	6：3
19号墳	0.70＋	3	0.47	2	0.45	2	0.30	1強							23	2：3		1：1	3：2	3：2
20号墳	4.50	19	1.90	8	2.10	9	0.60	2.5	1.20	6	0.90	3	0.72	3弱	24	5：16	2：1	8：9	19：9	18：5
21号墳	1.58	7	1.58	5	0.78	3.5	0.46	2					0.45＋	2	23	2：7		2：1	2：1	7：4
22号墳	4.50	19	2.16	9	2.12	9	0.81	3.5	1.10	4.5	0.70	3			24	7：18	3：2	9：9	19：9	18：7
23号墳	2.78？	11	2.00	8	0.94	4	0.47	2					0.50	2	24	2：8		8：4	11：4	4：2
24号墳	3.90？		2.40	10	2.22	9	0.78	3強							24	3：10		10：9		9：3
25号墳	4.00	17	2.05	8	1.75	7	0.72	3					0.90	4	24	3：8		8：7	17：7	7：3
26号墳	3.15＋		2.30	10	2.20	9	0.80	3強							24	1：3		10：9		9：3
27号墳	2.00＋		1.96	8	1.90＋	8＋									24			1：1		
28号墳	3.50	15	2.20	9	1.90	8	0.59	2.5	1.00	4	0.50	2	0.50	2	24	5：18	4：2	9：8	15：8	16：5



第 171図　石室平面図 1 （1/150）



第 172 図　石室平面図 2（1/150）

推定尺度別にみると、23cmを単位とする古墳はC－１類の17号墳とE－４類の18号墳、F類の21号墳、G類の19号である。一方26cmを単位とする古墳はC－１類の４号墳、E－１類の３号墳、E－２類の10号墳、E－３類の11号墳、E－５類の７号墳、G類の６号墳である。各古墳の位置からみると23cmを単位とするものは20号墳を取囲むように分布し、26cmを単位とするものは斜面の上位に分布する傾向がみられる。さらに24cmを単位とする古墳は比較的斜面の下位に分布し、B－１類の５号墳・９号、B－２類の８号墳、D類の１号墳などが斜面の上位に位置している。

各古墳の時期の問題は後述するが、この古墳群のなかでも新しい要素のある石室として考えられる小形石室や玄室が横長な平面形になる石室などで、各単位尺度が使用されていることにもなる。また、複室構造をとどめる石室では24cmを単位尺度とするものが多く、３号墳で26cmの単位尺度が使用されている。

以上のことから、傾向としてではあるが24cm尺が古く、やや遅れて26cm尺が加わることになり、さらに遅れて23cm尺が出現することが考えられる。そして、それぞれの尺度を伝統的に使用するグループがあった可能性を示唆している。

しかし、玄室幅と玄室長に約30cmの差のある例として５号墳・６号墳・７号墳・９号墳・18号墳・25号墳・28号墳があり、約60cm差のある例で10号墳、約105cm差の例に23号墳がある。玄室平面形で、胴張りのものや巾着形を呈するものはとにかく、方形・長方形に近い形を呈する７号墳・10号墳・18号墳・23号墳・25号墳では約30cmの単位尺度を使用している可能性も否定しない。７号墳・25号墳の玄室平面の測定値が近似値であること、10号墳と25号墳の玄室幅は約30cm差で玄室長が近似値であること、７号墳と23号墳の玄室幅が近似値で玄室長が約75cm差であることに、約30cmの単位尺の存在と、これらの古墳の企画性をみとめることができる。

柿原D地区の全古墳の石室平面図（第171・172図）にみるように、10号墳と25号墳は羨道部を長めに保つが、７号墳・18号墳・23号墳は羨道部が短めであり、F類の23号墳を除いて、E－２～－５類に分布したように若干の差異があるものの平面形や基底部に板石を立てて並べることで酷似している。

F類の23号墳の壁体は基底部から偏平石を平積みしているが、このような壁体はA類、B－１類、C－１類にもみられる。筑後から甘木・朝倉地域の６世紀後半に盛行する、いわゆる胴張りの石室に普遍的で、方形プランの肥後タイプ石室にもみられる構築方法である。すなわち、このような積み方は柿原D地区古墳群よりも先行する石室構築手法が継承されたものとみてよいだろう。追葬不能な単葬墓たる小石室にもこの構築手法が採用されていることも、当該地域で主流をなす形態であることを示唆している。

そして、E－２～－５類の板石を立てる石室と偏平石を平積みする石室の中間形態とも考えられる、B－２類、C－２類、さらにD類、E－１類の石室は、他地域で普遍的な腰石を据えるタイ

プの石室と胴張りの石室と融合して成立した可能性がある。

4　古墳の年代

各古墳の所属年代については、それぞれ出土した土器類から、おおよその年代を窺うことができるが、柿原遺跡群のD地区全体をみても、6世紀代に含まれる土器は全くみられず、古墳の石室内・外から出土した土器は7世紀から8世紀におさまるものであった。前章で各古墳の所属時期について記述したが、ここでは石室の分類毎に時期を検討しておこう。

A類に分布した16号墳は石室出土土器で7世紀第3四半期で、前面に相当する23号墳の周溝出土土器にも第4四半期的な様相はない。また、23号墳の墳丘内出土の7世紀中頃に属す土器は、16号墳に伴っていたものが新たに築造された古墳の墳丘内に混入したとすればこの時期との矛盾はない。20号墳は左前面や22号墳の周溝II区出土土器から7世紀中頃に近い時期であろう。周辺でもこれらの土器より先行する土器がみられないので、D地区の複室構造石室使用は7世紀中頃よりも遡らないことになろう。

B－1類の、5号墳では7世紀第3四半期に築造されているようであり、9号墳は7世紀第3四半期と第4四半期がみられるので5号墳よりは後出するのであろうか。この頃に複室から、前室を意識しながらも単室構造になる石室が出現する。15号墳は9号墳よりも小振りな杯蓋・身が使用当初の土器で、7世紀第3四半期に築造されている可能性がある。22号墳も石室内出土土器では第3四半期と第4四半期にまたがる様相がみられる。

B－2類の、8号墳も7世紀第3四半期に築造されている可能性がある。24号墳は中頃に近い第3四半期の時期があたえられよう。

C－1類の、4号墳・14号墳は7世紀第4四半期に築造されている可能性がある。17号墳・27号墳・28号墳では7世紀第3四半期の土器がみられるので、4号墳・14号墳よりも先行して使用されている。28号墳の複室構造を保っていることからも7世紀第3四半期頃に前室の省略化が起こっていることが知れる。また、17号墳出土土器にみられるC字と逆C字を組合わせたようなヘラ記号は太宰府史跡SX2480出土土器にもみられる。SX2480のものは宝珠形つまみをもつ杯蓋で、17号墳はつまみのない杯蓋と高台のない杯身であるが、供給地が同一の可能性があろう。

C－2類の、12号墳は土器から判断しえないが、13号墳は7世紀第4四半期から末頃、26号墳7世紀末頃の土器が出土している。26号墳は前室のあった可能性もあるが、前室部分から前を失っている。

D類の1号墳は、D地区古墳群の最高所に、他の古墳とやや離れて占地する古墳である。前面区画出土土器は土師器のみで7世紀後半頃であろうが、石室は、前室が退化した構造で、A類よりも後出するにしても、B類・C類で前室の省略化がみられる7世紀第3四半期を下だることの

ない時期だと考える。

E－1類の3号墳は、出土土器から7世紀第4四半期に入る時期があたえられる。石室の構造は1号墳玄室より寸づまりの玄室で、辛うじて前室を保つ複室構造であるので、第3四半期から大きく離れない時期の築造を考えたい。

E－2類の10号墳・25号墳・E－3類の11号墳、E－4類の2号墳は7世紀第4四半期～8世紀初頭に含まれるが、18号墳前面の20号墳周溝III区出土土器は7世紀第3四半期のものである。前節での墓道復原にも示されるように18号墳墓道は西側に反るので、20号墳周溝III区はむしろ17号墳左前面からの転落を考えるべきなのであろうか。いずれにしても急斜面での群集墳では周溝内遺物の帰属の判断が困難であると痛感させられた。このことはF類の23号墳でも言えることであり、古墳の占地からすると、周囲の16号墳・22号墳・24号墳よりも後出すると判断できるが、前面出土土器などに周囲の古墳から将来されたものが含まれている可能性もある。

E－5類の7号墳では8世紀第1四半期に属す土器が出土し、G類の6号墳からは7世紀第4四半期に属す土器が出土している。

前項でE－2～－5類、F類の石室で約30cmの単位尺度が使用されている可能性について述べたが、これらの古墳の築造時期は、7世紀第3四半期に積極的な例がないので、7世紀第4四半期に入ってからということになろう。

ところで、柿原E・F地区2号墳・21号墳も方形プランの石室で、2号墳は今回のE－4類ないしはE－5類に、21号墳はF類に分類されるが、2号墳では約30cmよりやや短めの単位尺度、21号墳は約30cmの単位尺度が推定される。いずれも遺物の出土がなく時期を決め難い。また、12号墳も板石が立てて並べられる石室であるが、残りが悪くプランはよく分からない。12号墳では6世紀代より伝世したような玉類が出土している。E・F－10号墳では7世紀第3四半期頃に同様の玉類が出土し、古墳の占地では13号墳は2号墳・21号墳よりも先行すると思われる位置にあるが10号墳よりは条件の悪い位置である（註3）。したがって、E・F地区でも7世紀第4四半期以降にE－2～－5類・F類石室が構築されたと推定しても大きな矛盾はなく、約30cm尺の出現もこのあたりに考えておきたい。

この地域で主流を占めていた胴張りプランで平積みの壁体をもつ石室が、方形プランで腰石をもつ石室と融合する要因のひとつとして、斉明天皇の朝倉行幸をはじめとして、朝鮮半島の緊迫した状況とこの地域の関連を想定しておきたい。（小池）

註1　福岡県教育委員会　1984・1986・1987　柿原古墳群Ⅰ・Ⅱ・柿原遺跡群III　九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告－4・6・12－
2　前掲　1986　柿原古墳群II
3　前掲　1987　柿原遺跡群III

図　　版

柿原遺跡周辺航空写真（パシフィック航業撮影）

1　調査前の柿原遺跡群　　2　調査前の柿原遺跡D地区

1

2

1　柿原遺跡D地区全景（南から）　　2　柿原D遺跡地区全景（東から）

柿原遺跡D地区全景空中写真

1

2

1　1号墳全景（南から）

2　1号墳石室全景

1　1号墳石室全景（西から）　　2　1号墳石室全景（南から）

1

2

3

1　1号墳玄室奥壁

2　1号墳玄室左側壁

3　1号墳前室左側壁

1

2

3

1　1号墳玄室右側壁

2　1号墳前室右側壁

3　1号墳前室右側壁
細部

1

2

1　1号墳左側壁細部

2　1号墳石室閉塞状況（外側）

3　1号墳石室閉塞状況（内側）

3

1

2

3

1　1 号墳左前面区画
（南から）

2　1 号墳左前面区画
（東南から）

3　1 号墳左前面区画
遺物出土状況

1

2

3

1　1号墳右前面区画
遺物出土状況

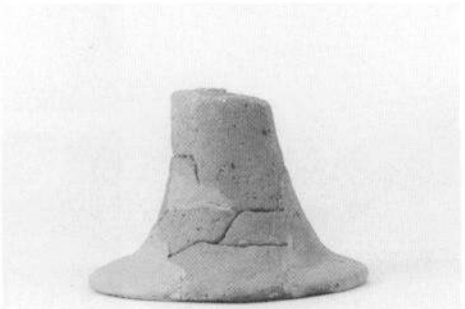
2　1号墳右前面区画
遺物出土状況

3　1号墳石室掘り方
（南から）

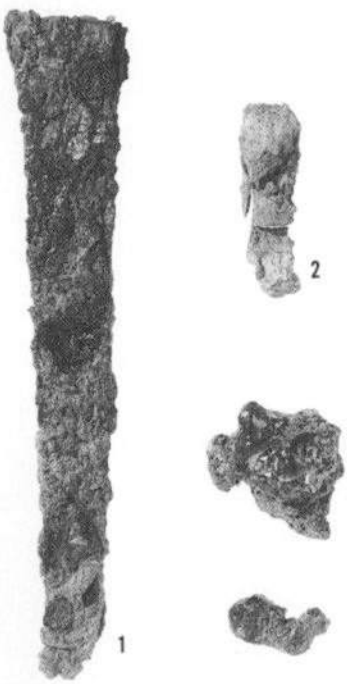
1

4

2


5

3


1 2

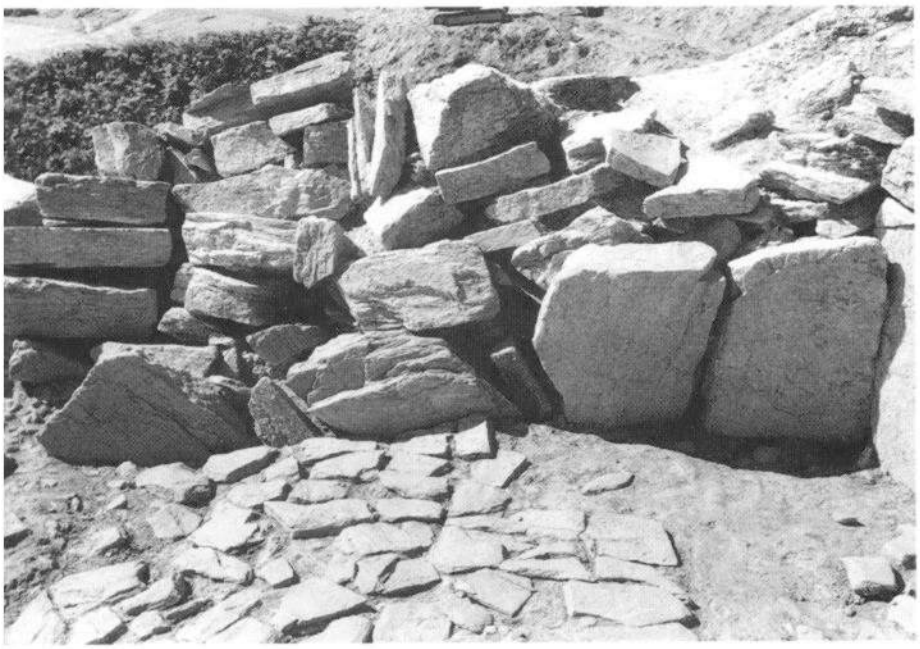
1 号墳出土土器，鉄器

1

2

1　2号墳全景（南から）　　2　2号墳石室全景（西から）

1



2

3

1　2号墳玄室奥壁

2　2号墳玄室左側壁

3　2号墳玄室右側壁

1

2

1

2

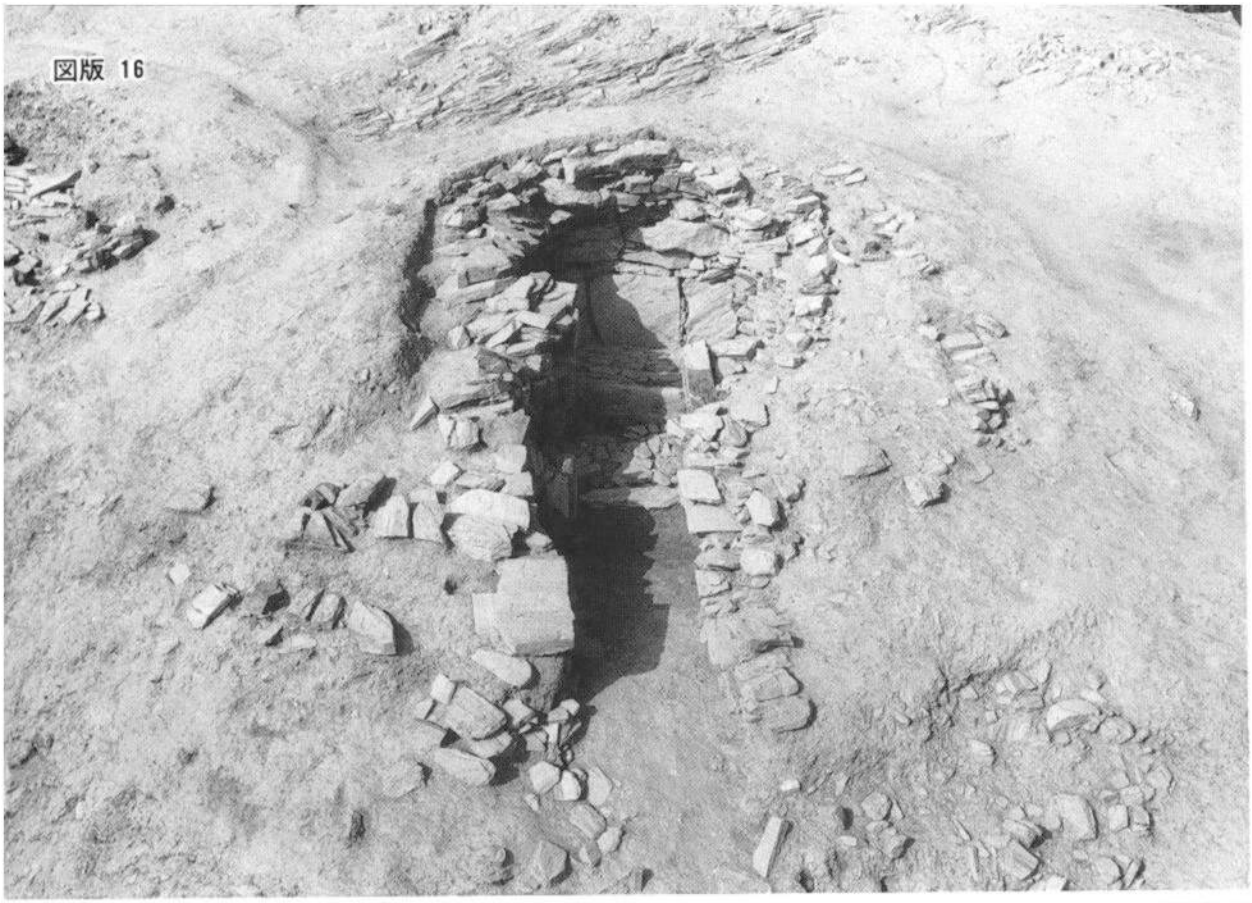
4

3

1　2号墳前面遺物出土状況

2　2号墳前面遺物出土状況

3　出土土器



1

2

1　3号墳全景（南から）　　2　3号墳石室全景（南から）

1

2

1　3号墳左側列石
（西から）

2　3号墳左側列石
（北西から）

3　3号墳右側列石
（東から）

3

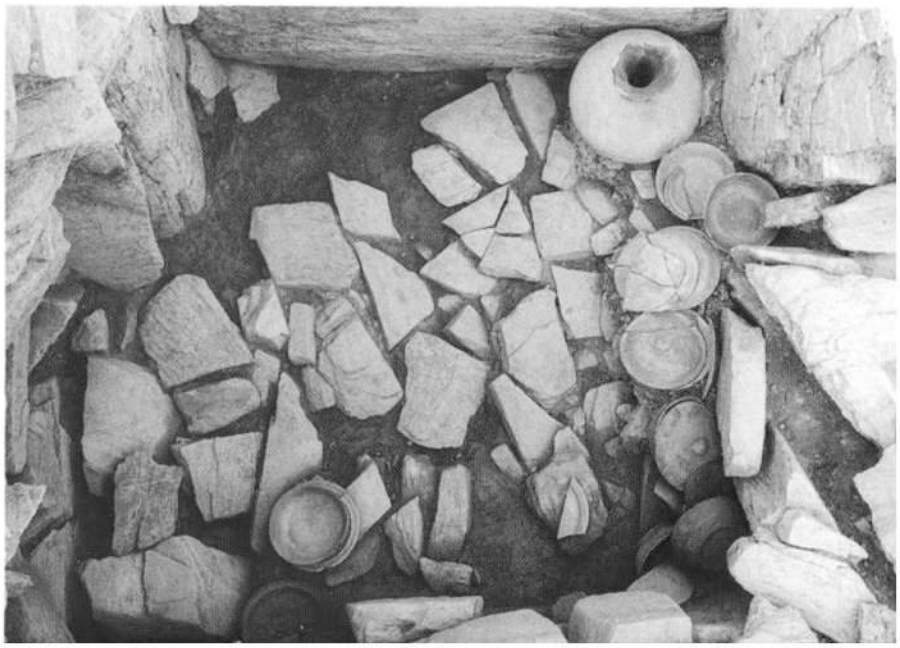
1

2

1　3号墳玄室奥壁　　2　3号墳玄室右側壁

1

2

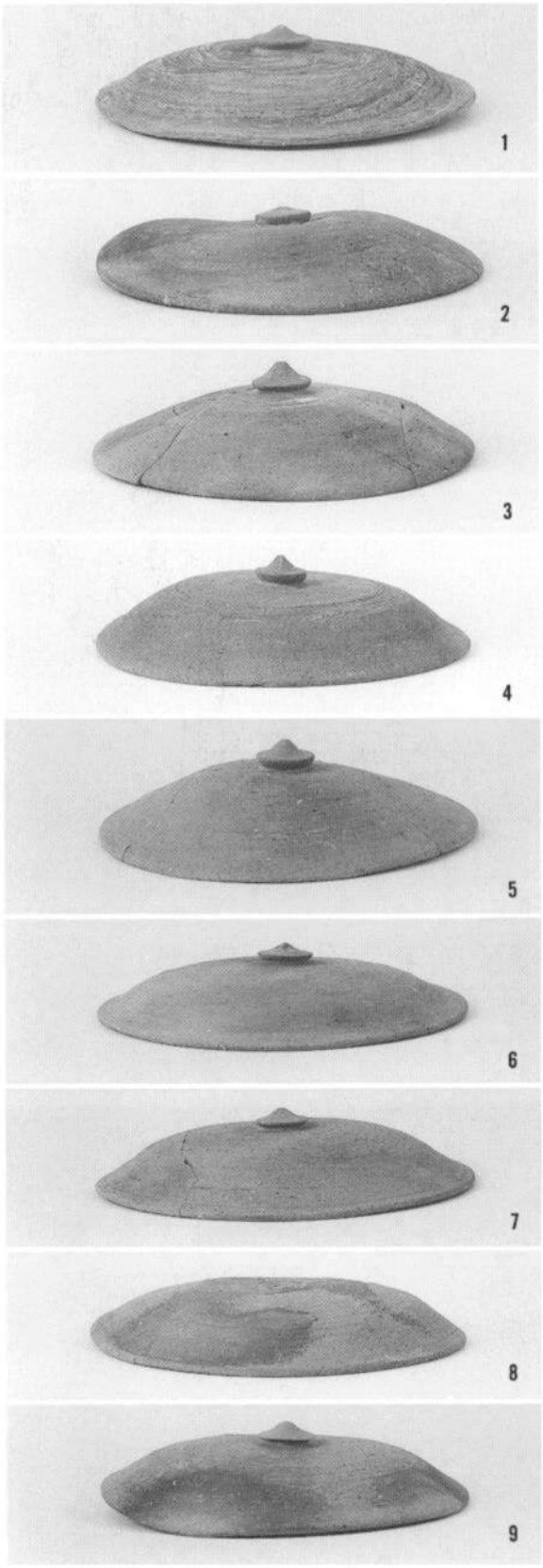


3

1　3 号墳石室閉塞状況
（外側）

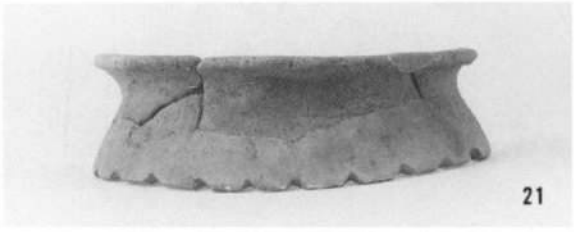
2　3 号墳石室閉塞状況
（内側）

3　3 号墳前室
遺物出土状況

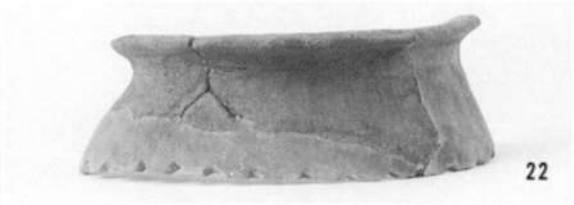


3 号墳出土土器 1

17


21

19

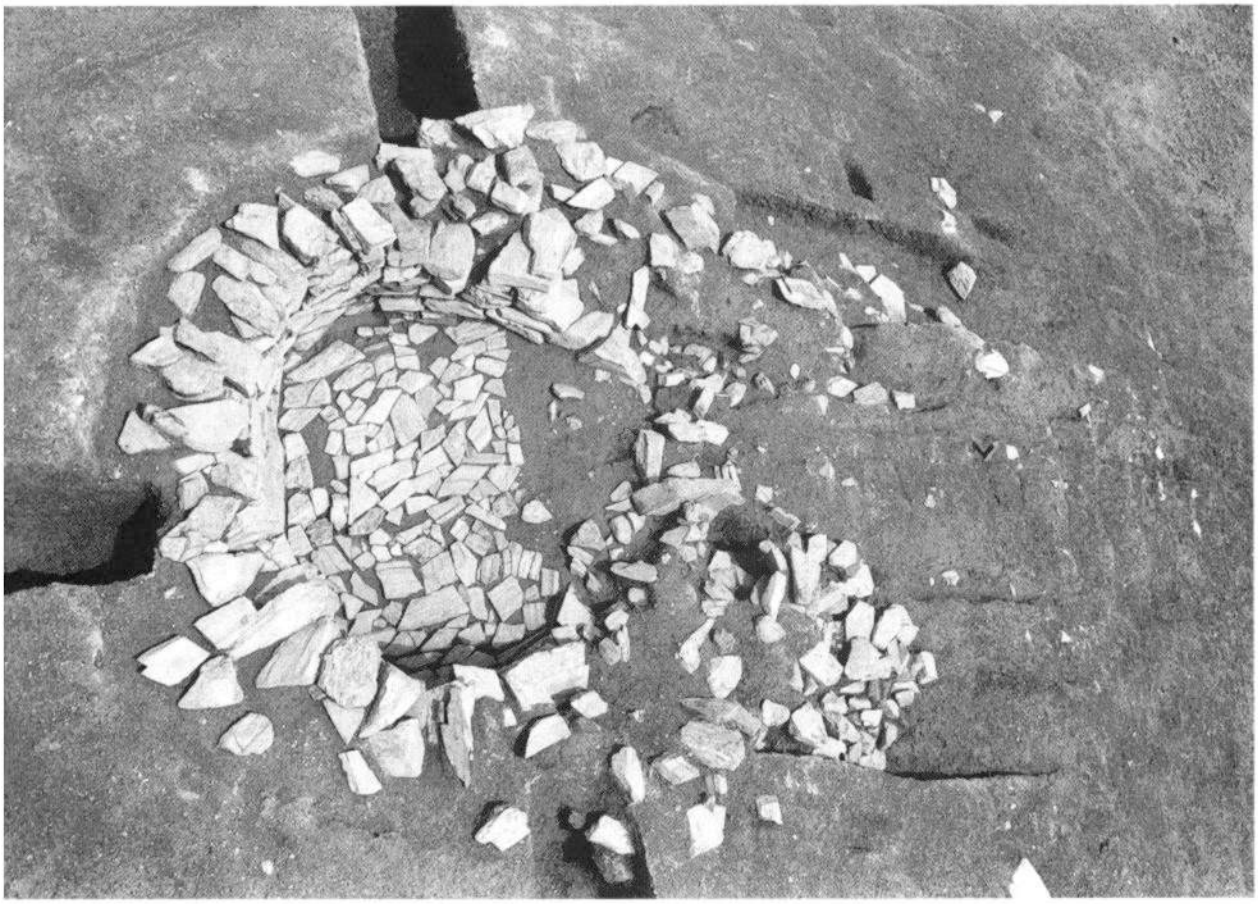

22

23

1
2
3
4
5
6
7
1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12
13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24
25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36
37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48

3号墳出土土器2，鉄器

1



2

1　4号墳全景（南から）　　2　4号墳石室と段状遺構（西から）

1

2

3

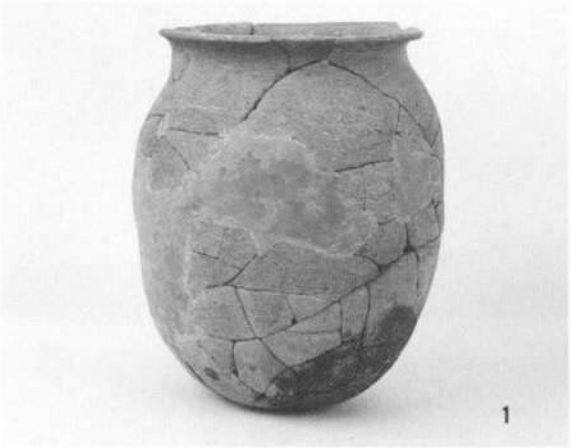
1　4 号墳前面の
段状遺構（西から）
2　4 号墳石室全景
（南から）
3　4 号墳玄室奥壁

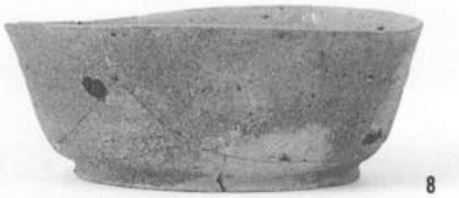
1

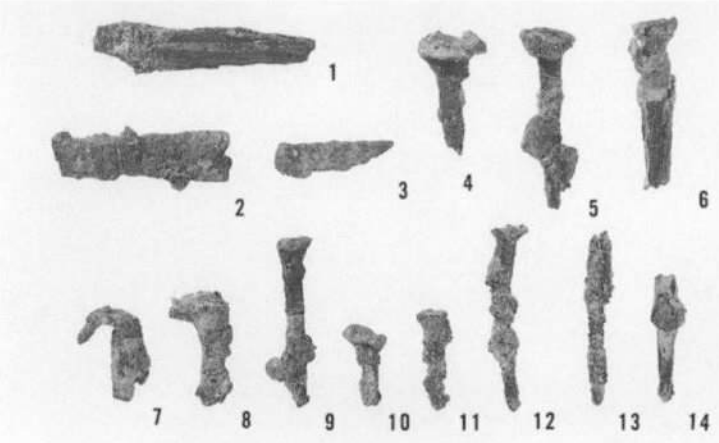
2

3

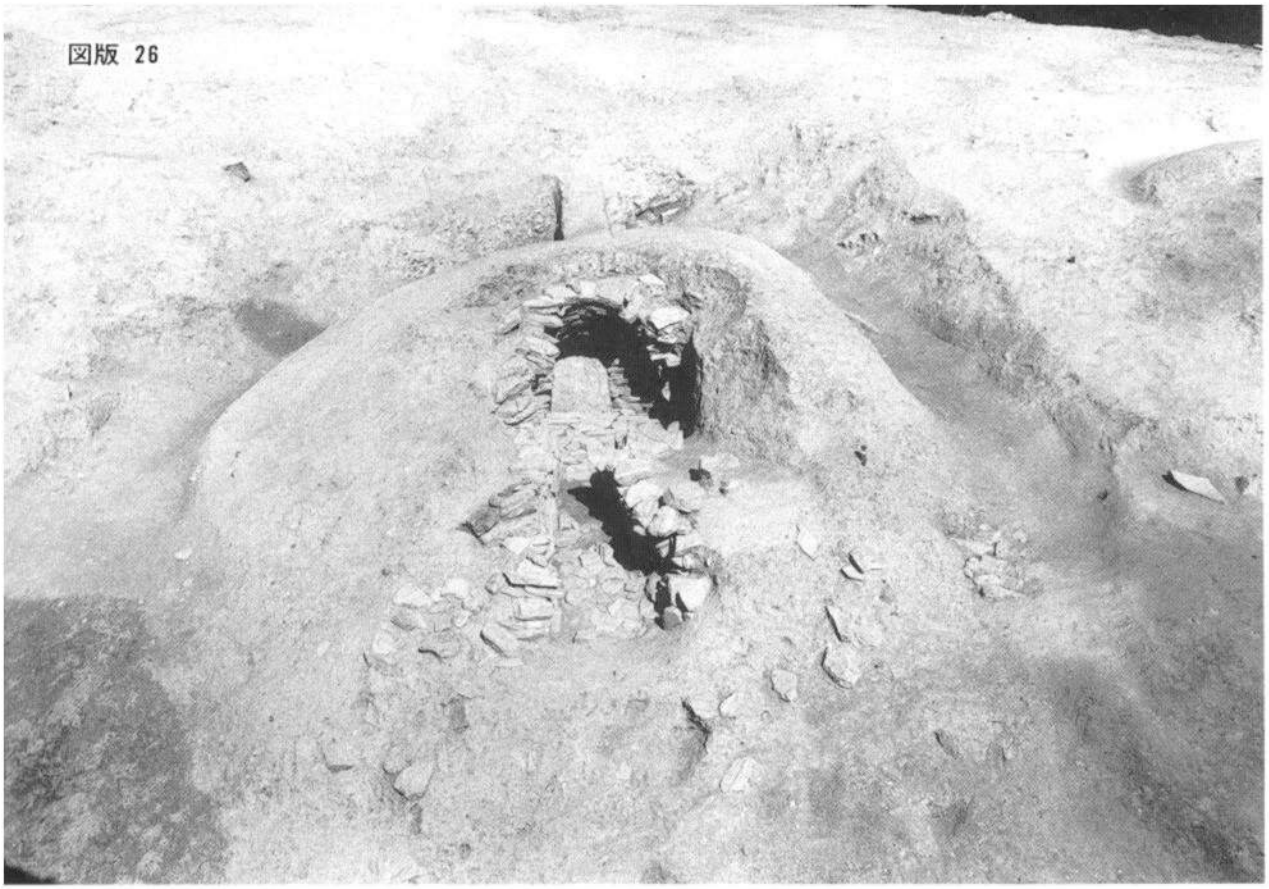
1　4 号墳段状遺構
　　遺物出土状況
2　4 号墳前面
　　遺物出土状況
3　4 号墳前面
　　遺物出土状況







4 号墳出土土器，鉄器



1

2

1　5号墳全景（南から）　　2　5号墳石室と段状遺構（南から）

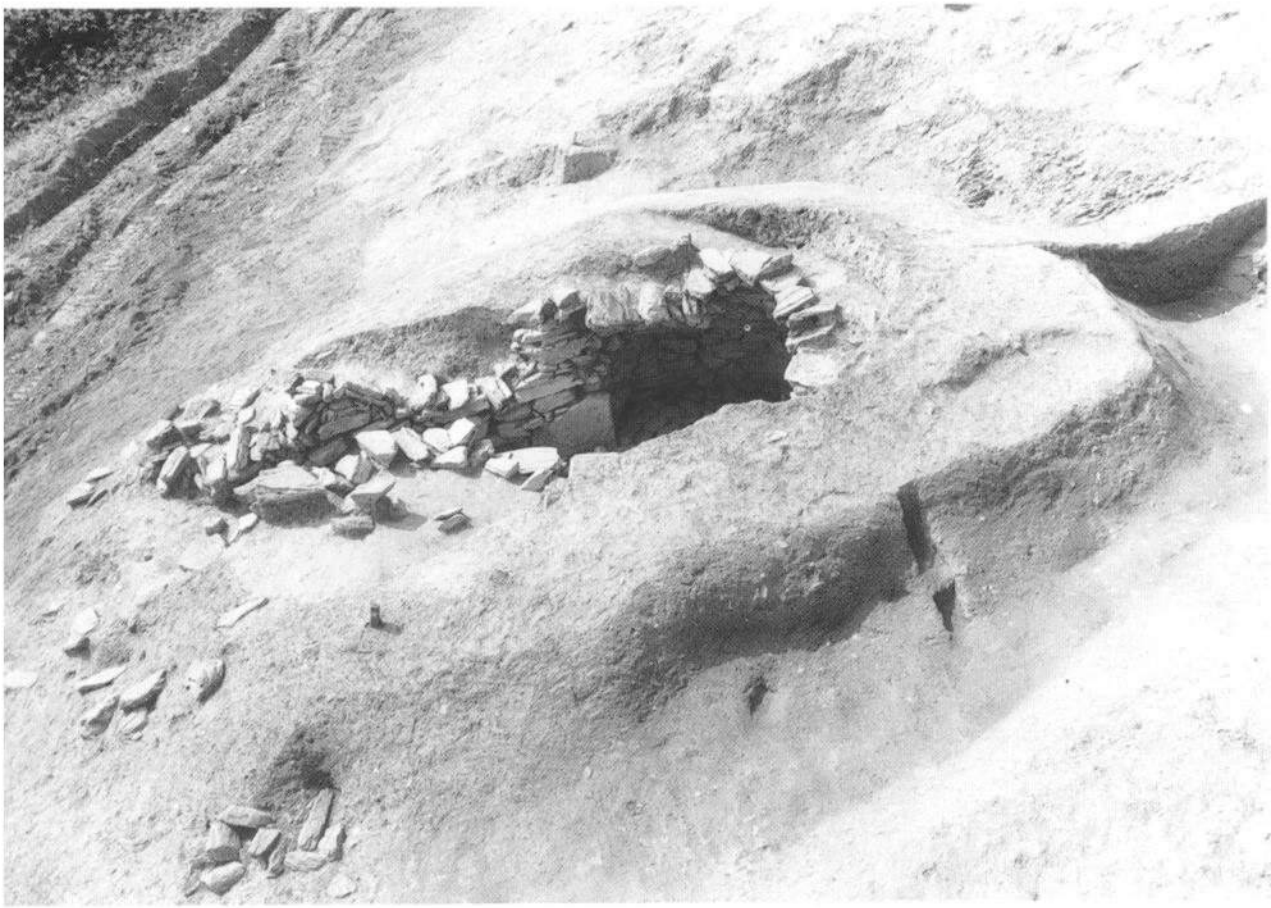
1

2

3

1　5号墳段状遺構（南から）
2　5号墳段状遺構（東から）
3　5号墳段状遺構（南東から）

1



2

1　5号墳石室全景（南から）　　2　5号墳石室全景（東から）

1

2

3

1　5号墳玄室奥壁
2　5号墳玄室左側壁
3　5号墳羨道左側壁

1

2

3

1　5号墳石室玄門
2　5号墳石室閉塞状況（外側）
3　5号墳石室閉塞状況（内側）

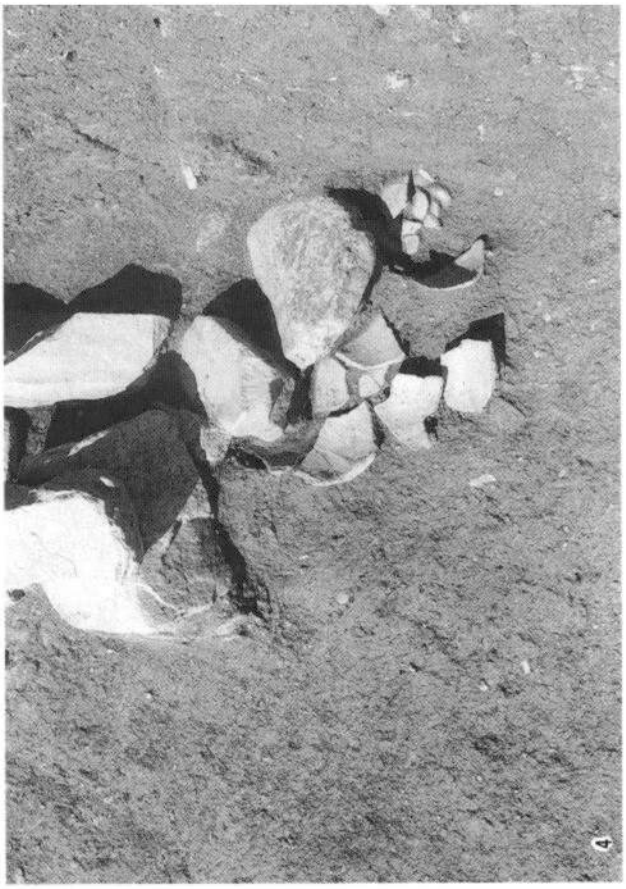
1

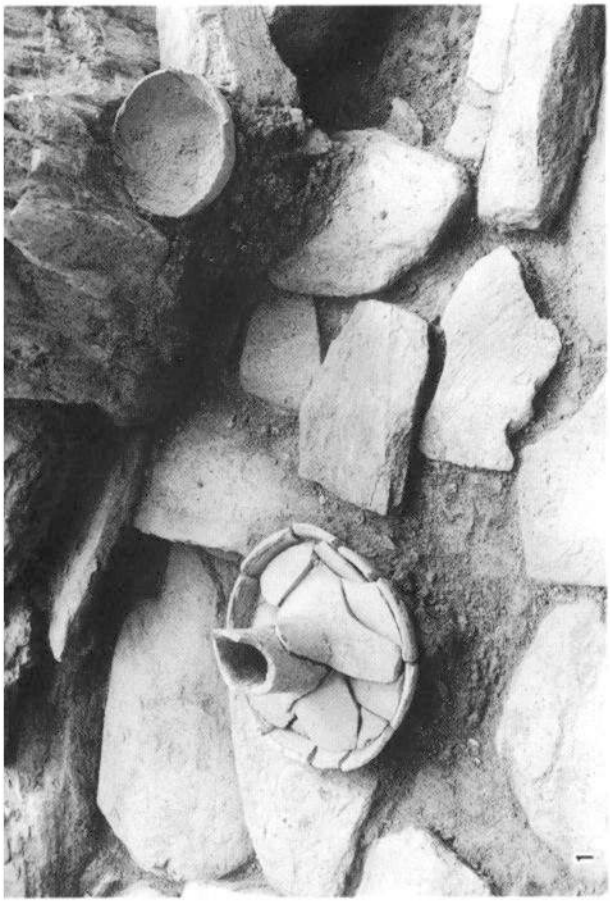
2

3

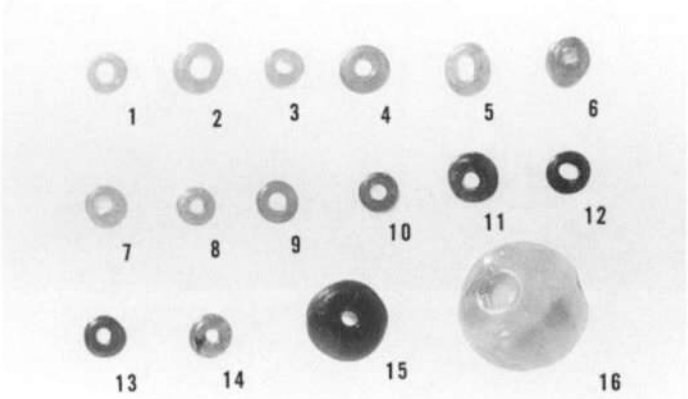
1　5号墳左前面区画（南から）
2　5号墳左前面区画（東から）
3　5号墳右前面（南から）

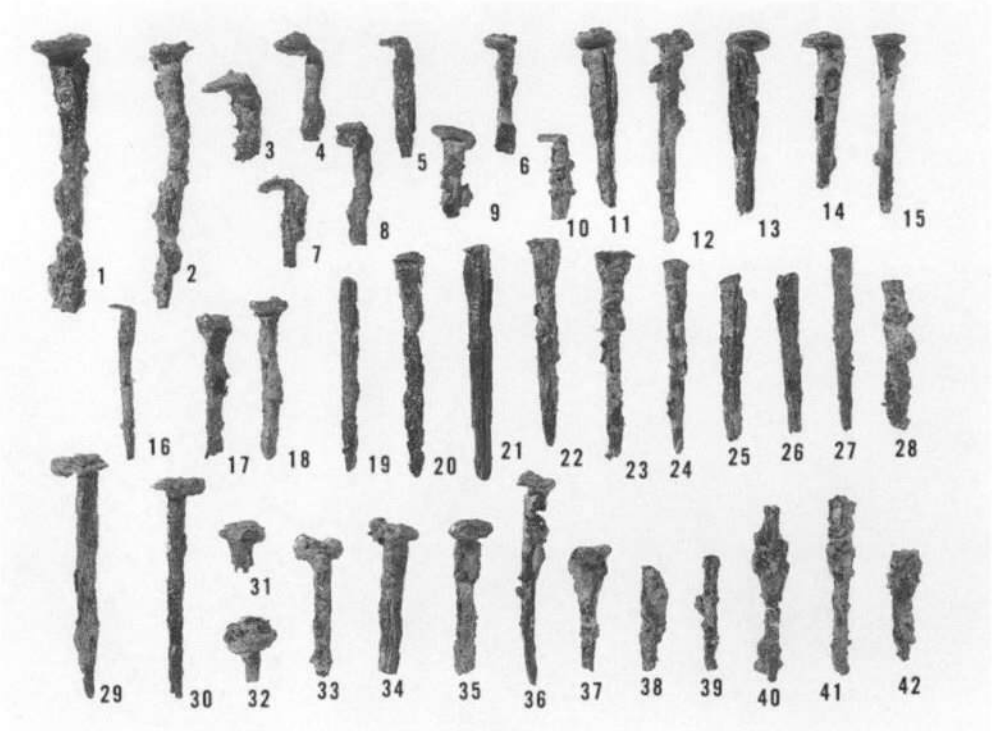
図版 32





1　5号墳玄室遺物出土状況
2　5号墳玄室遺物出土状況
3　5号墳段状遺構遺物出土状況
4　5号墳段状遺構遺物出土状況





5号墳出土土器，鉄器，玉類

1

2

1　6号墳全景（南から）　　2　6号墳石室全景（南から）

1

2

3

1　6号墳玄室奥壁
2　6号墳石室左側壁
3　6号墳石室右側壁

1

2

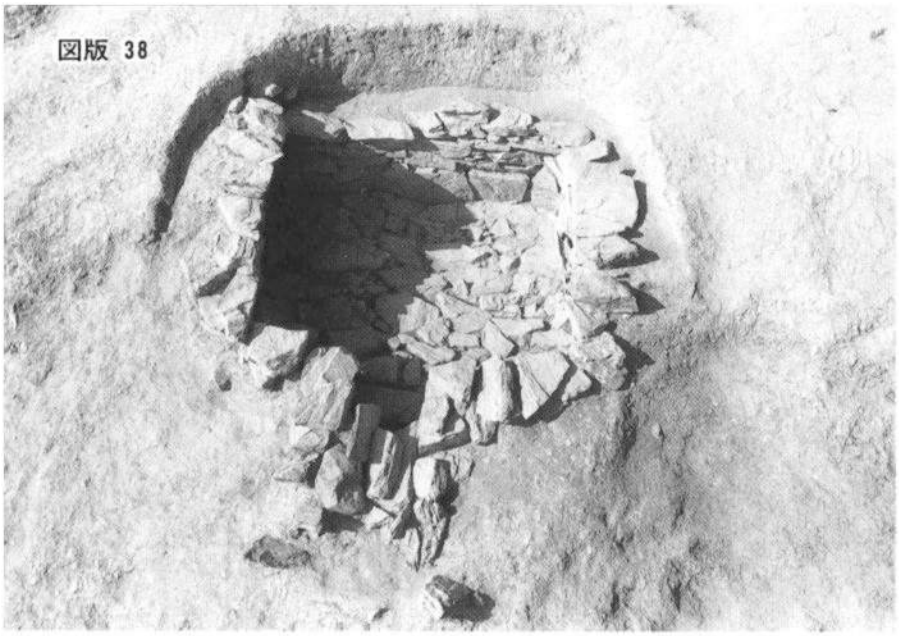
1　7号墳全景（南から）　　2　7号墳石室全景（西から）

1

2

3

1　7号墳玄室奥壁
2　7号墳玄室左側壁
3　7号墳玄室右側壁

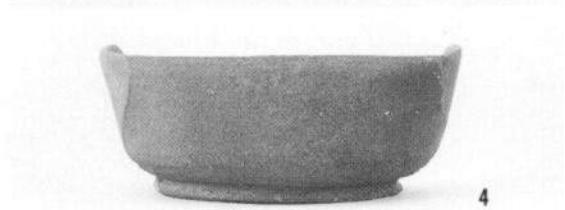


1

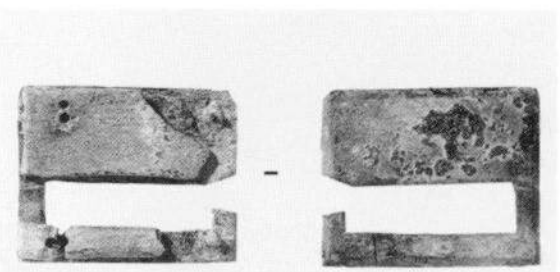
2

1

2



4



1

2

3

1　7号墳石室閉塞状況　　2　7号墳石室閉塞状況（内側）　　3　出土遺物

1

2

1　8号墳全景（南から）
2　8号墳石室全景（南から）

1

2

3

1　8号墳玄室奥壁
2　8号墳玄室左側壁
3　8号墳玄室右側壁

1

2

1　8号墳石室玄門
2　8号墳羨道左側壁
3　8号墳玄室

3

1

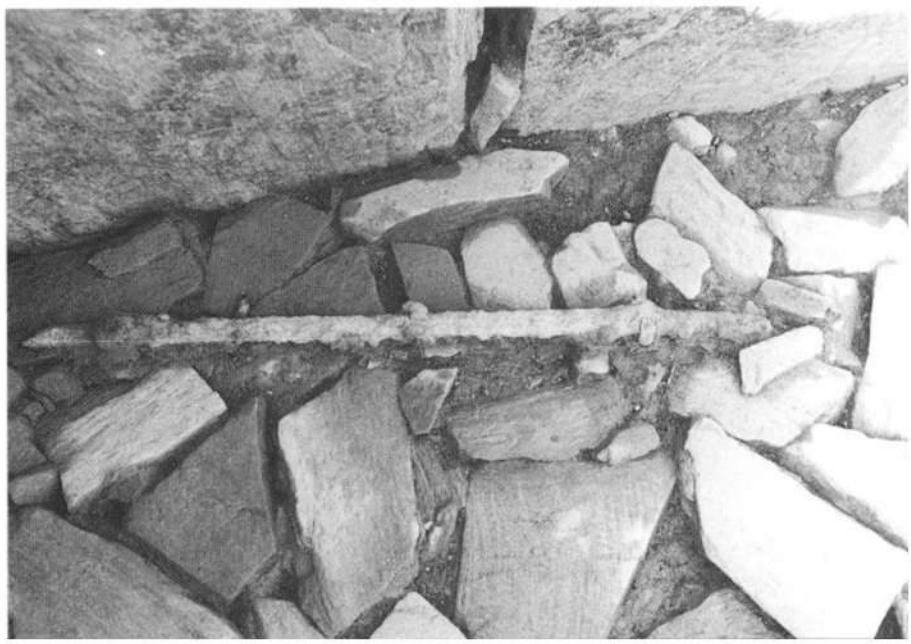
2

3

1　8号墳石室閉塞状況（上から）
2　8号墳石室閉塞状況（外側）
3　8号墳石室閉塞状況（内側）

1

2

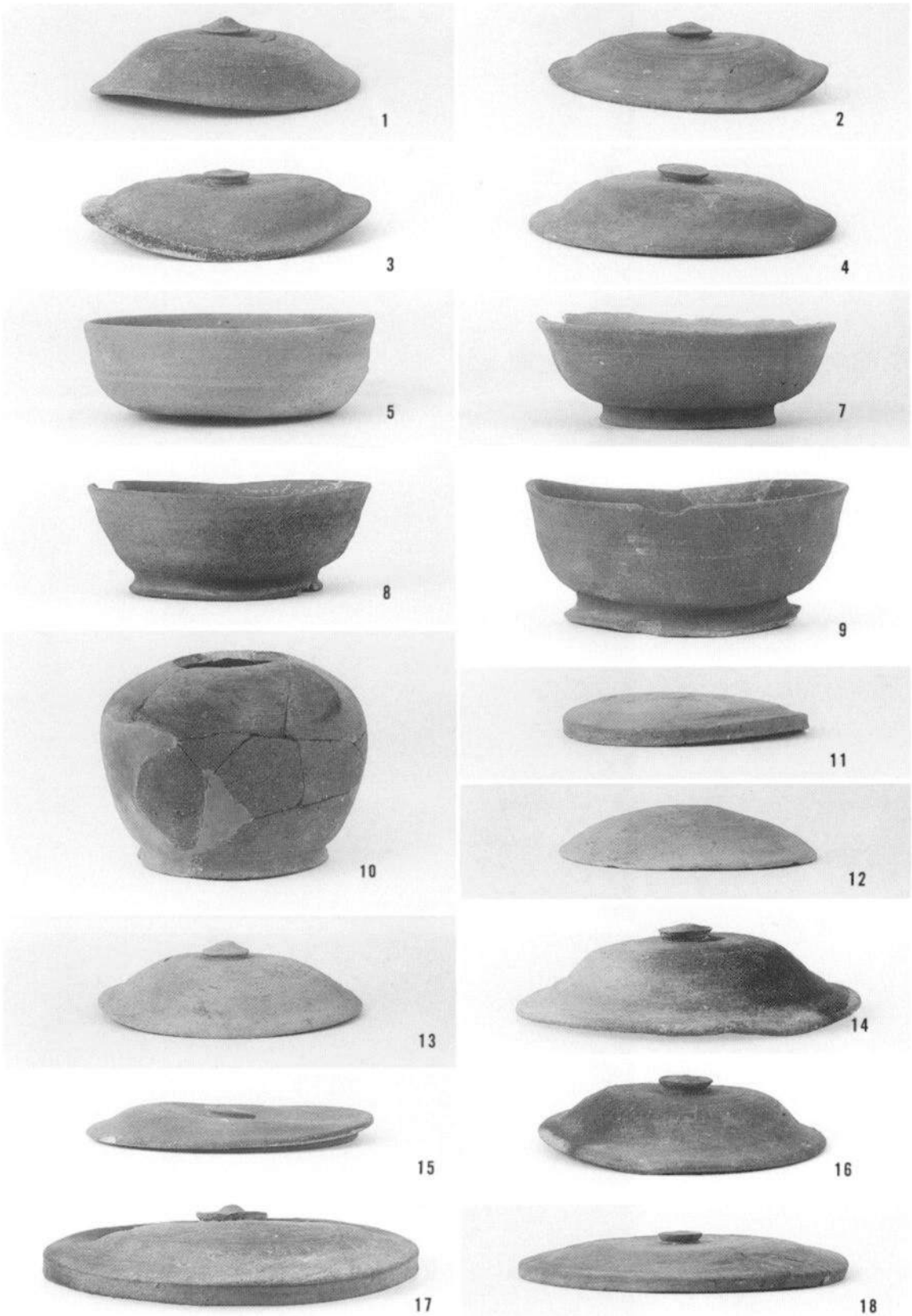


3

1　8号墳玄門付近
遺物出土状況

2　8号墳玄門付近
遺物出土状況

3　8号墳奥壁付近
遺物出土状況



8 号墳出土土器 1

19

20

21

22

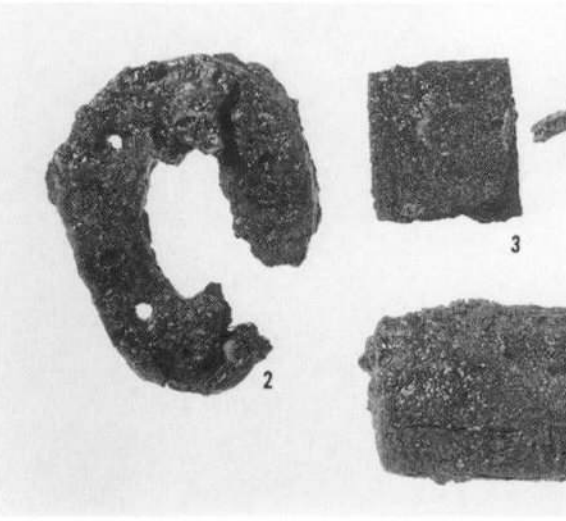
23

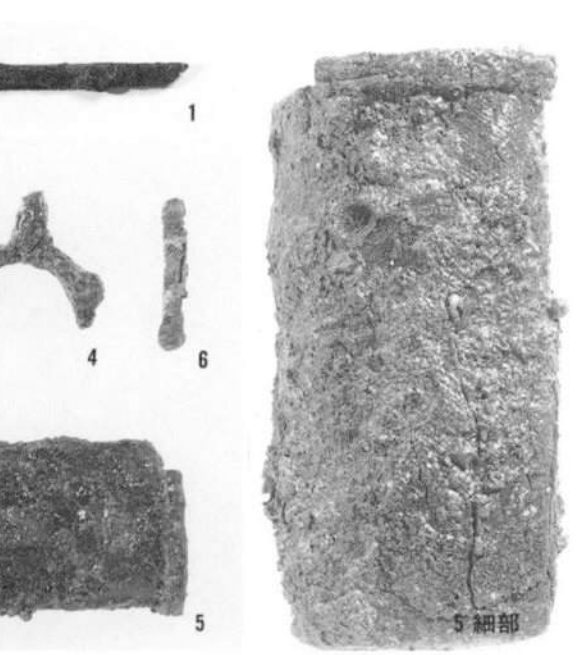
24

25

26

1


2 3 4 6 5


5 細部

8号墳出土土器2，鉄器

1

2

1　9号墳全景（南から）　　2　9号墳石室全景（東から）

1

2

3

1　9号墳玄室奥壁
2　9号墳玄室左側壁
3　9号墳玄室右側壁

1

2

3

1　9 号墳玄室遺物出土状況
2　9 号墳玄室遺物出土状況
3　9 号墳玄室遺物出土状況

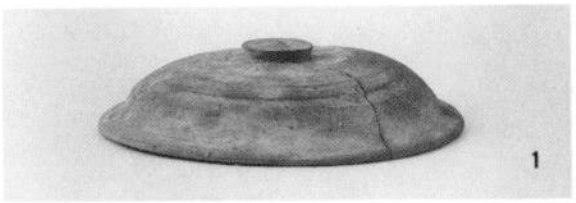
1

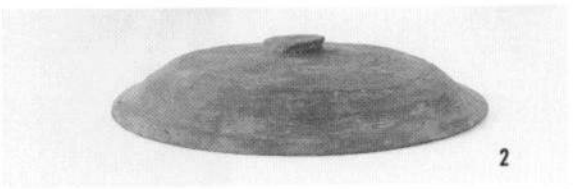
2

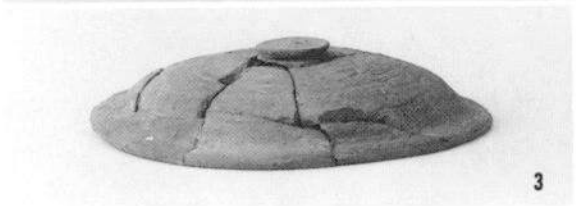
3

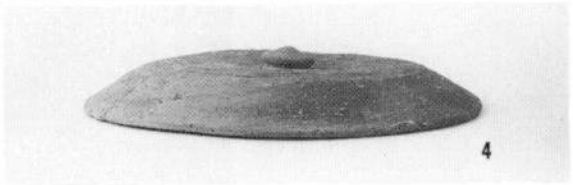
1 ～ 4
9 号墳前面
遺物出土状況

4

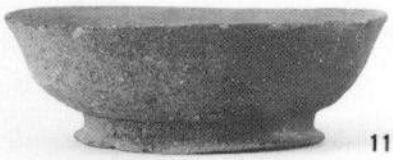

1

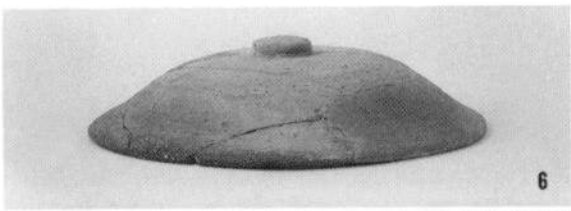

2

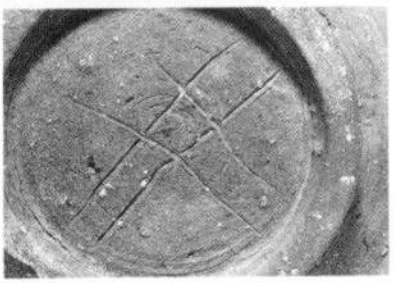

3

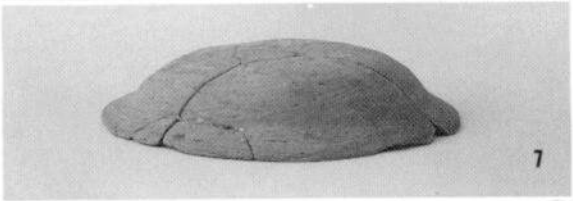

4

5

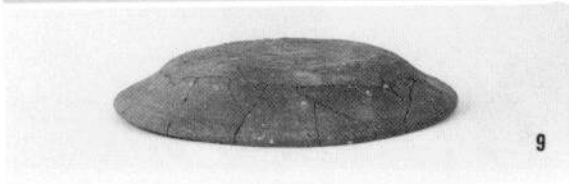

11

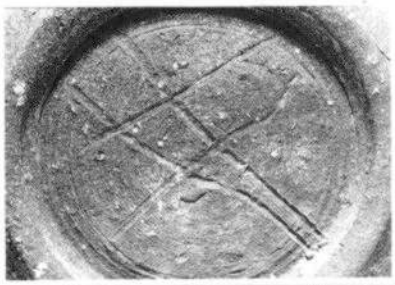

6

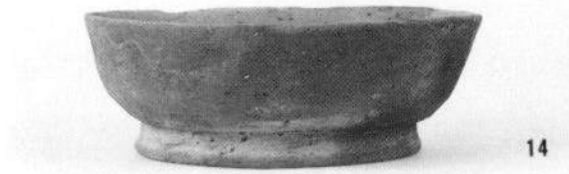



7

12


9

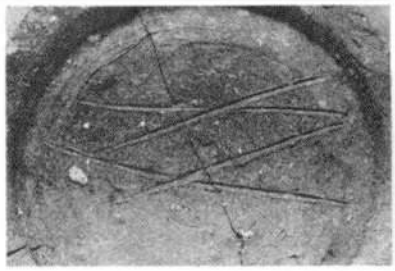


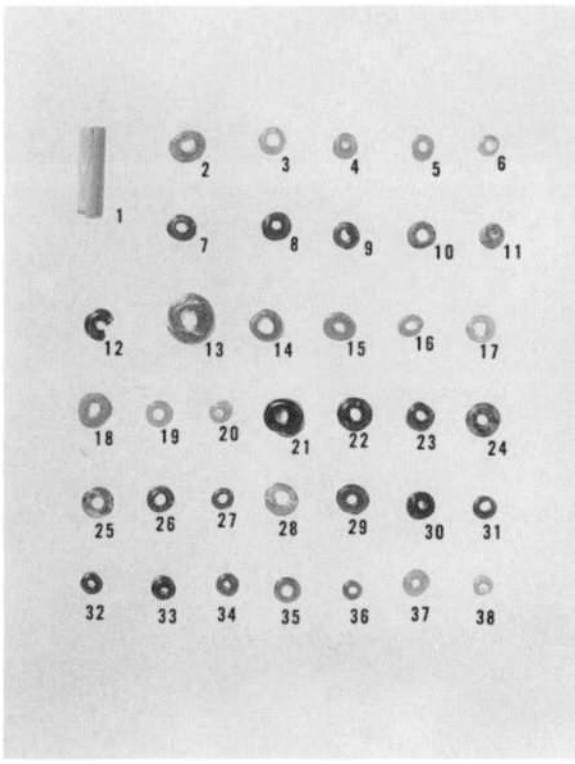

14

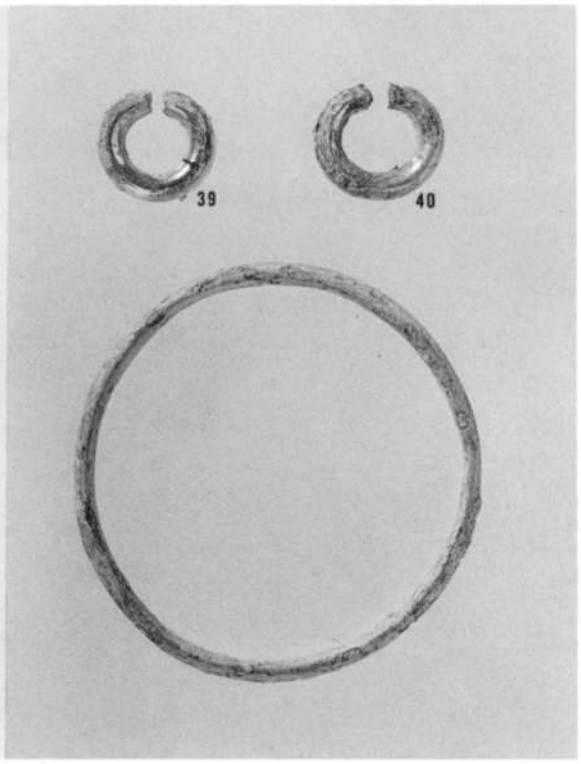
16

15

9 号墳出土土器 1







9号墳出土土器2，玉類，銅製品

1

2

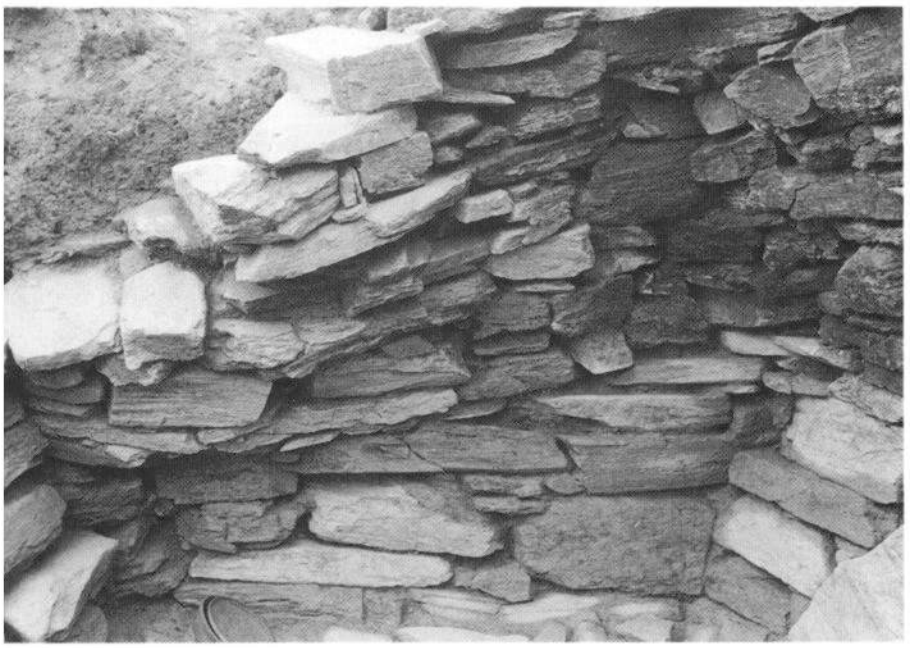
1　10号墳全景（南から）　　2　10号墳全景（南から）

1

2

1　10号墳石室全景（南から）
2　10号墳石室全景（南から）

1



2

3

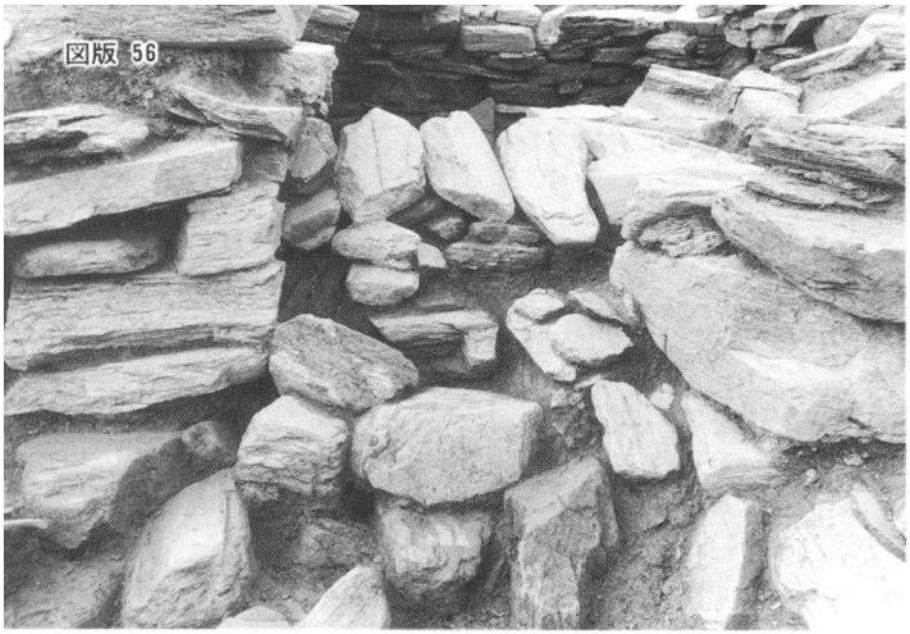
1　10号墳玄室奥壁
2　10号墳玄室左側壁
3　10号墳玄室右側壁

1

2

1　10号墳玄室前壁
2　10号墳玄室前壁と閉塞状況
3　10号墳石室閉塞状況（上から）

3



1

2

3

1　10号墳石室閉塞状況
（外側）
2　10号墳玄室
遺物出土状況
3　10号墳前面
遺物出土状況

1

2

3

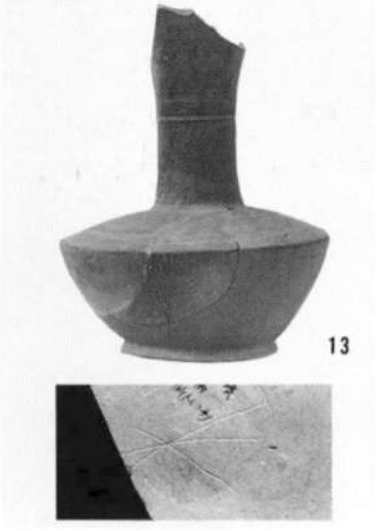
7

8

9

4

5


13

12

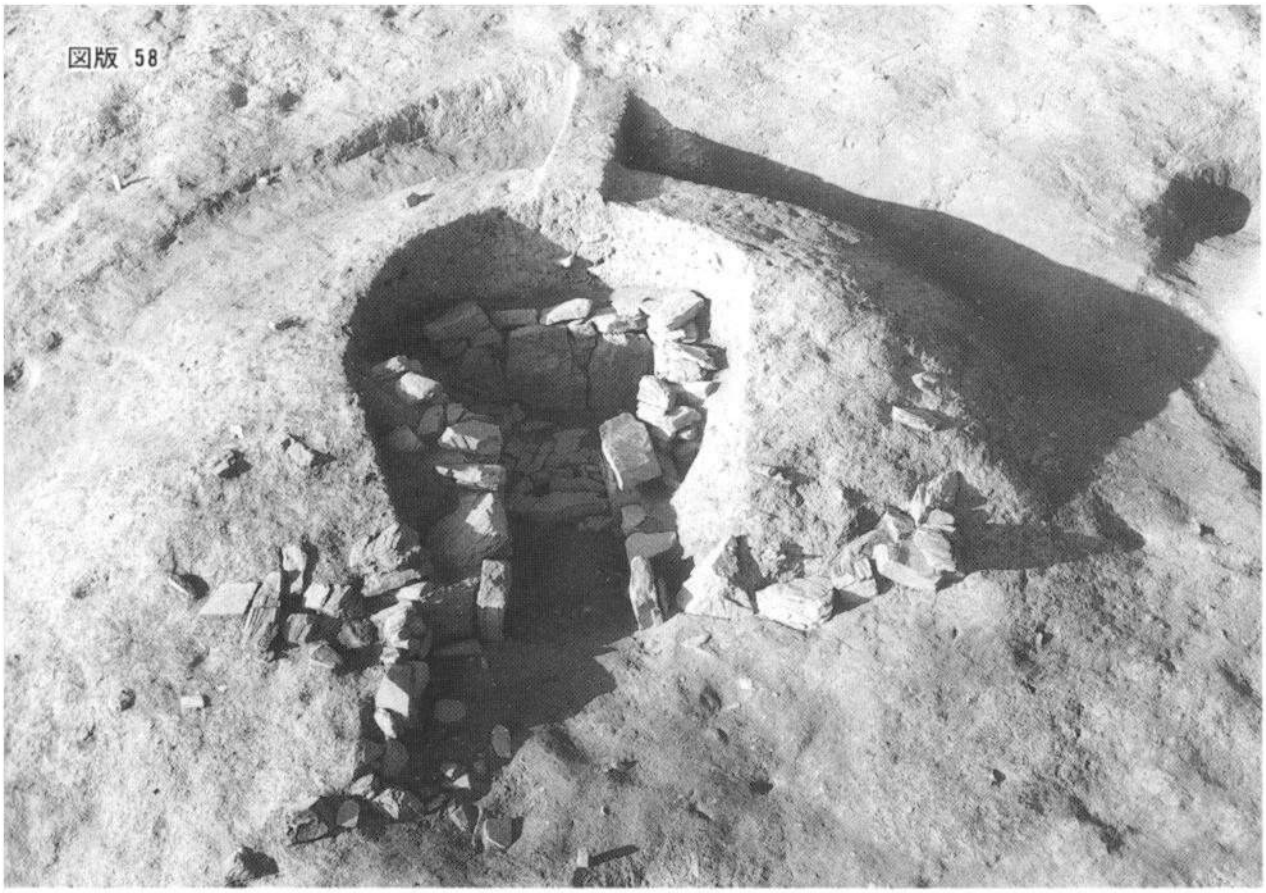
14

11

16

15

10号墳出土土器



1

2

1　11号墳全景（南から）　　2　11号墳全景（西から）

1

2

3

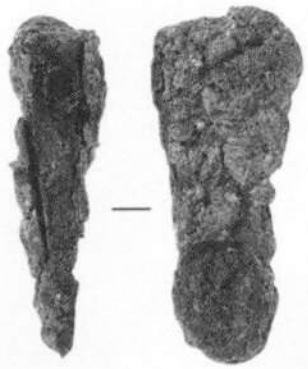
1　11号墳石室全景（南から）
2　11号墳石室全景（西から）
3　11号墳玄室遺物出土状況

1

2

3

1　11号墳玄室奥壁
2　11号墳玄室左側壁
3　11号墳玄室右側壁



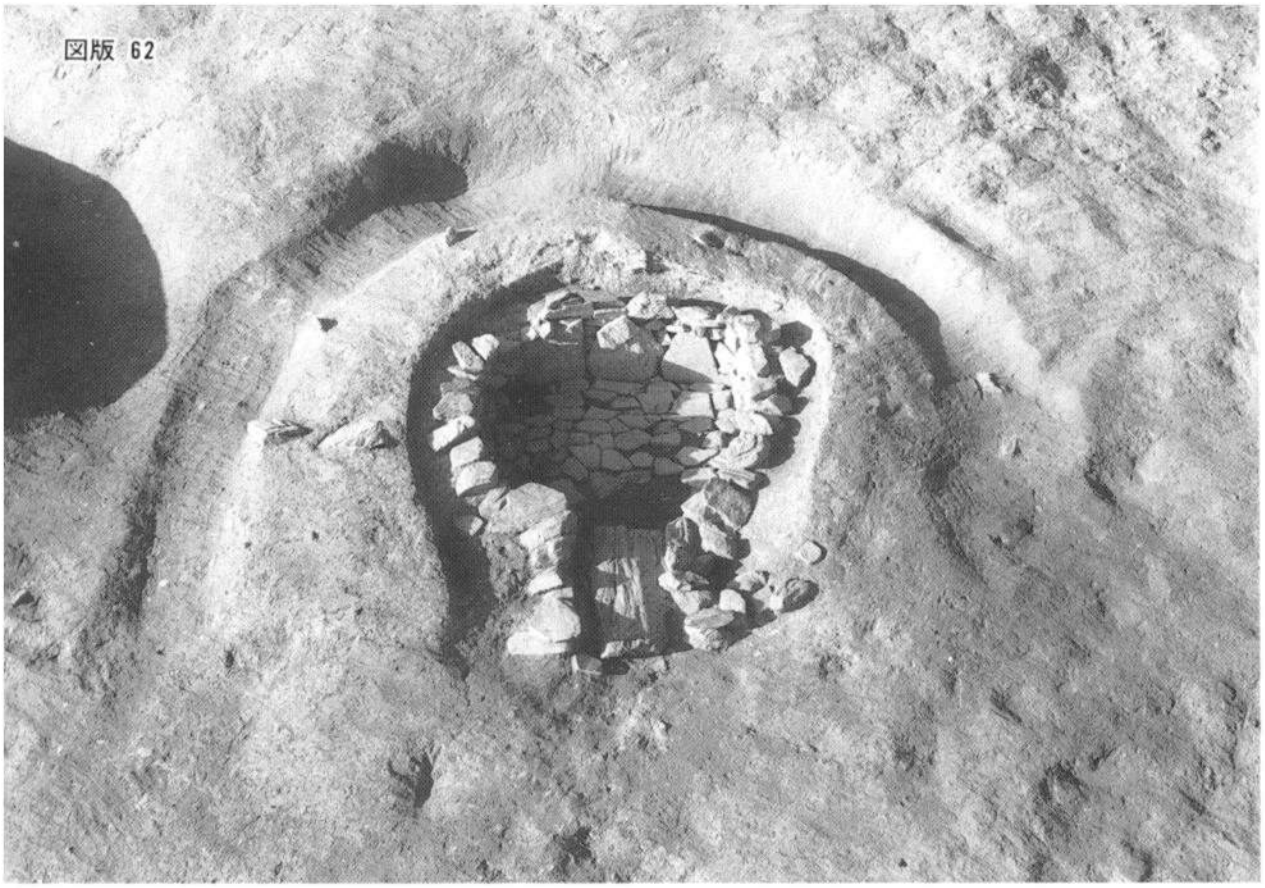
4

1

2

1　11号墳石室閉塞状況（外側）
2　11号墳石室閉塞状況（上から）
3　11号墳石室閉塞状況（内側）
4　11号墳出土鉄器，鉄滓

3



1

2

1　12号墳全景（南から）　　2　12号墳石室全景（東から）

1

2

1　12号墳石室（南から）
2　12号墳玄室奥壁
3　12号墳玄室左側壁

3

図版64

1

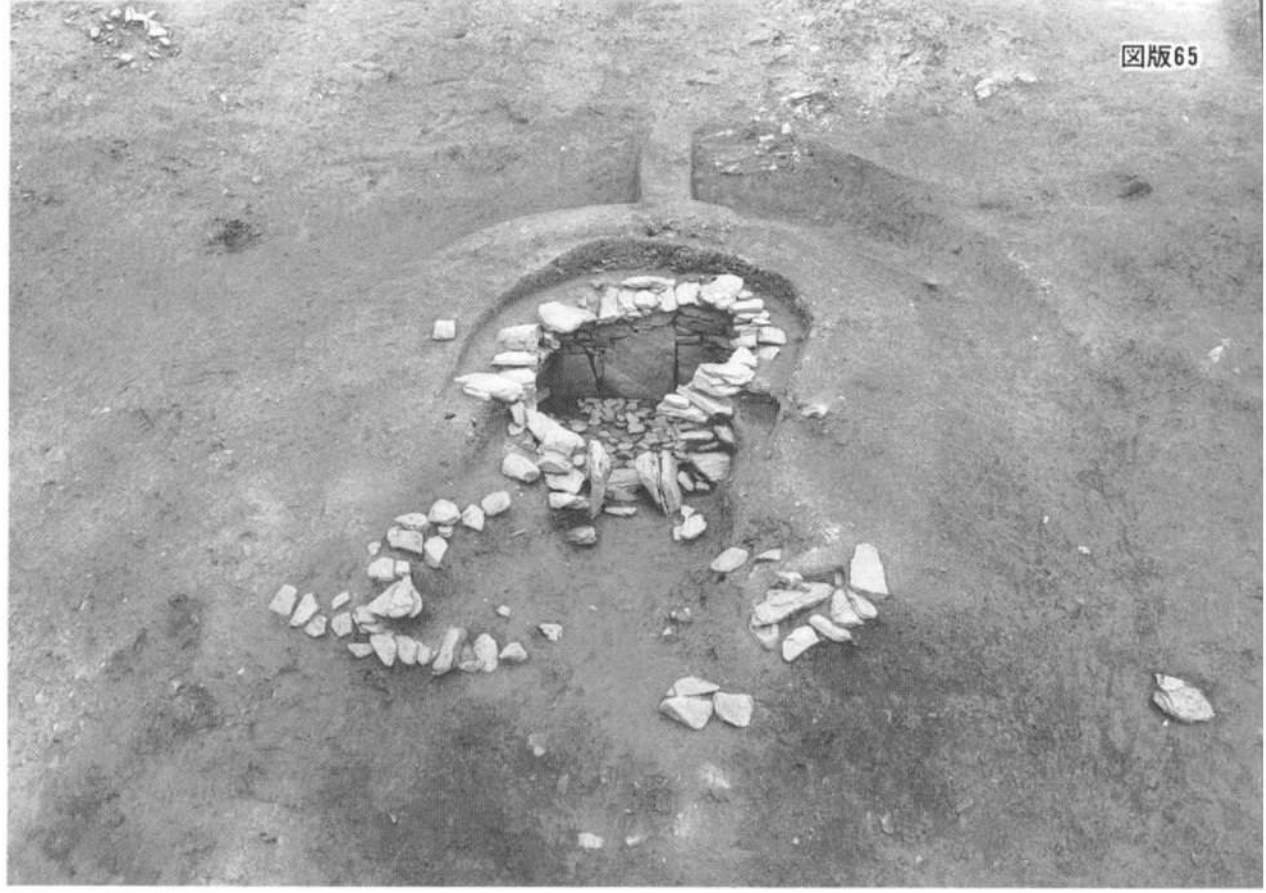
2

3

4

1　12号墳玄室右側壁
2　12号墳羨道部（上から）
3　12号墳羨道部（内側から）
4　12号墳墳裾出土土器

1



2

1　13号墳全景（南から）　　2　13号墳石室全景（東から）

1

2

3

1　13号墳石室（南から）
2　13号墳玄室奥壁
3　13号墳玄室左側壁

1

2

3

1　13号墳玄室右側壁
2　13号墳玄室遺物出土状況
3　13号墳玄室遺物出土状況

1

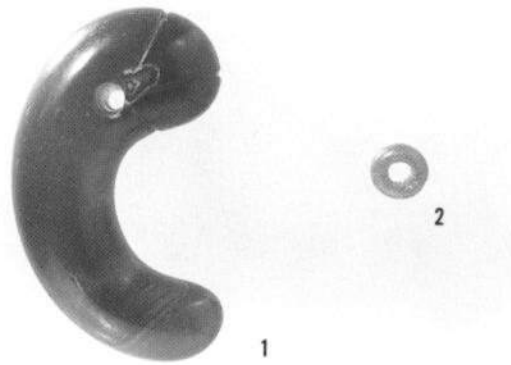
2

3

4

5

6


1 2

13号墳出土土器，玉類

1

2

1　14号墳全景（南から）　　2　14号墳玄室（上から）

図版70

1

2

3

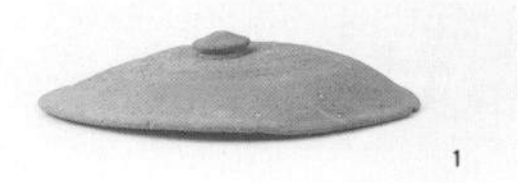
1　14号墳玄室奥壁
2　14号墳玄室左側壁
3　14号墳玄室右側壁

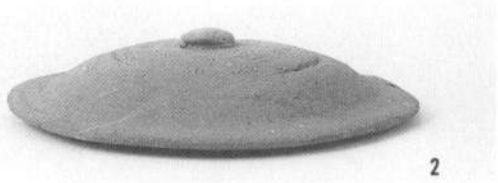
1

2

1　14号墳石室閉塞状況（外側）
2　14号墳石室閉塞状況（上から）
3　14号墳石室閉塞状況（内側）

3


1

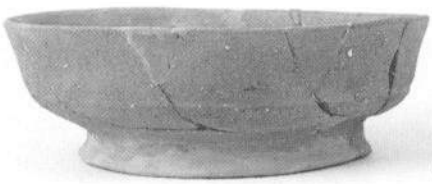

2

3

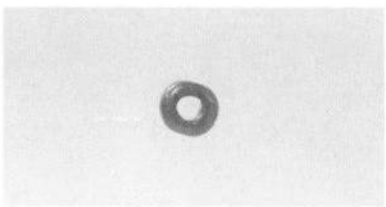
4

6

7


8

9

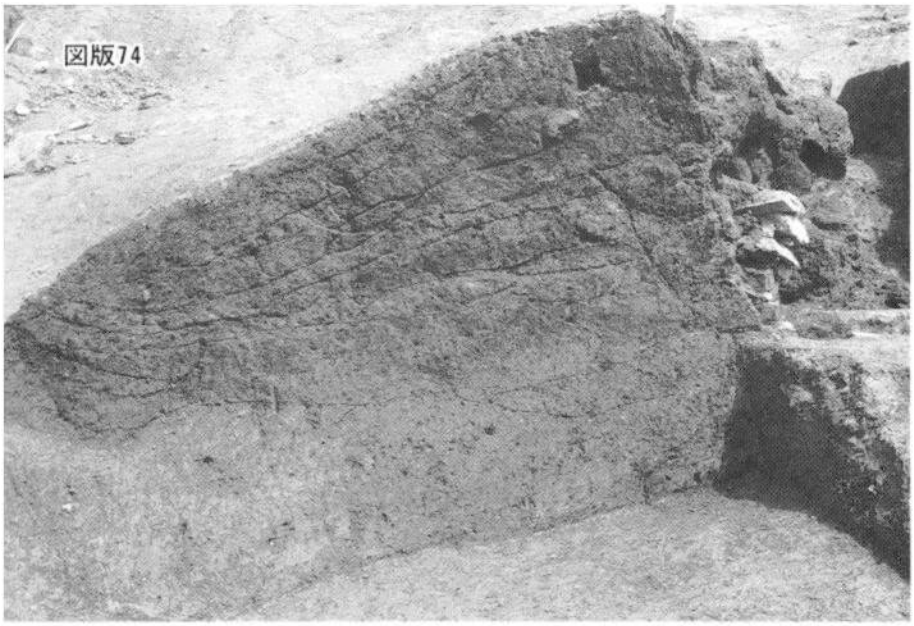


14号墳出土土器，玉類，調査風景 1

1

2

1　15号墳全景（南から）　　2　15号墳石室（西から）



1

2

3

1　15号墳墳丘堆積状況
（石室後方）
2　15号墳墳丘堆積状況
（石室左側）
3　15号墳墳丘堆積状況
（石室右側）

1

2

1　15号墳石室（南から）
2　15号墳石室（東から）
3　15号墳石室（北から）

3

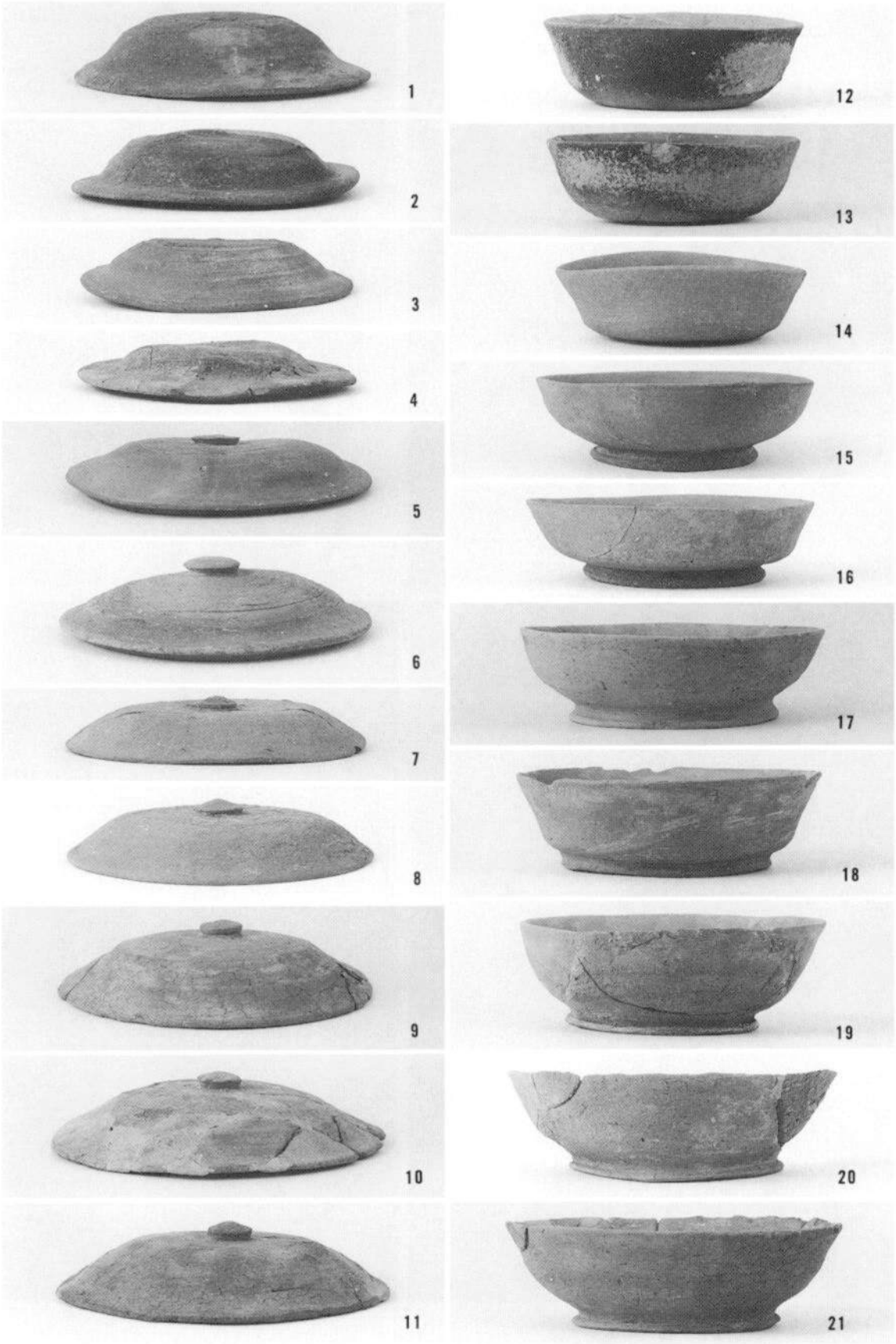
1

2

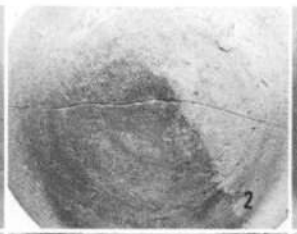
3

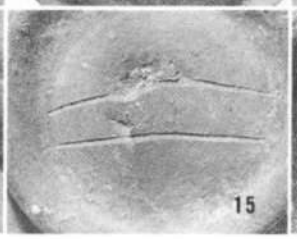
1　15号墳玄室奥壁
2　15号墳玄室左側壁
3　15号墳玄室右側壁

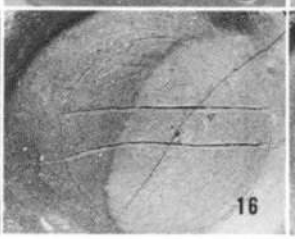
1～4　15号墳前室遺物出土状況

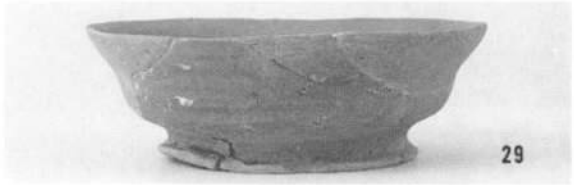


15号墳出土土器 1

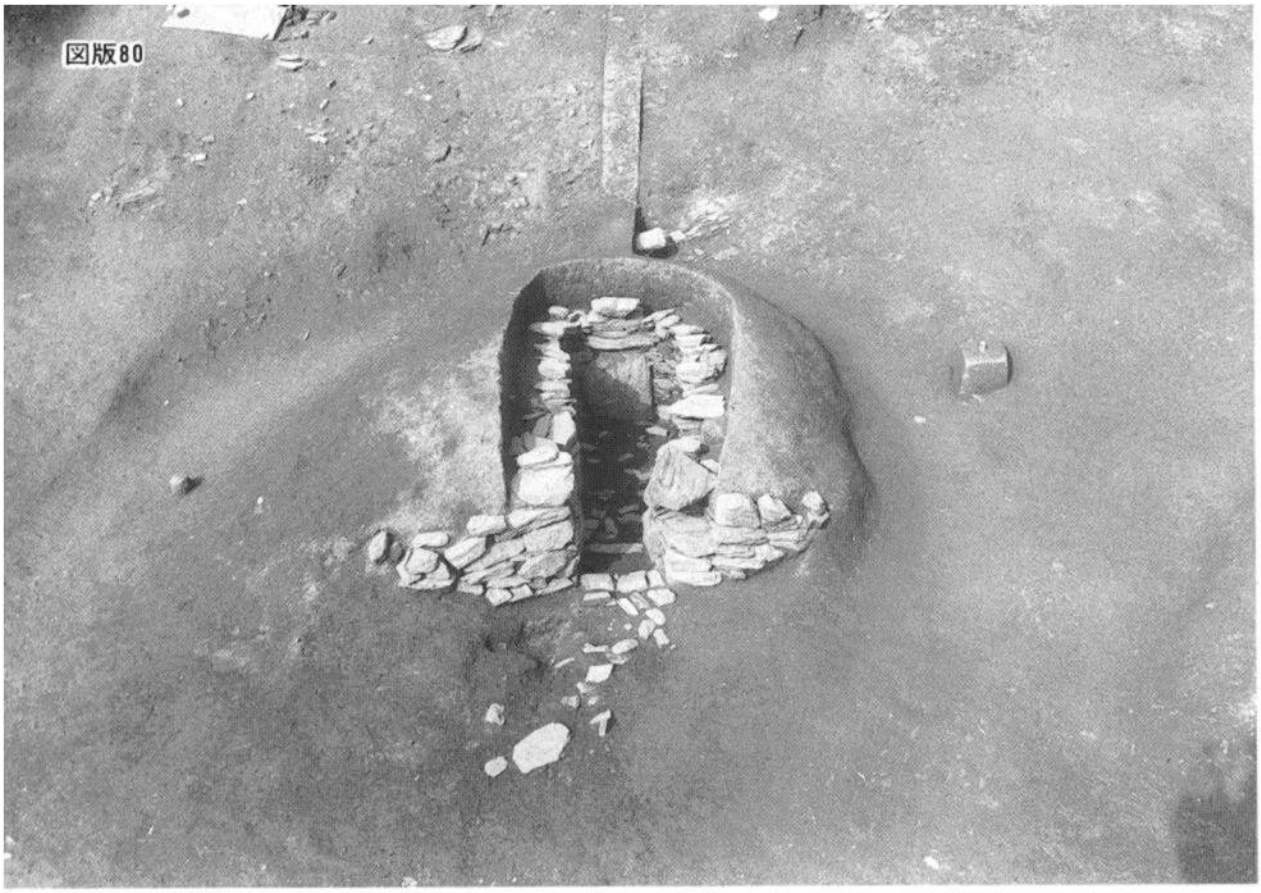




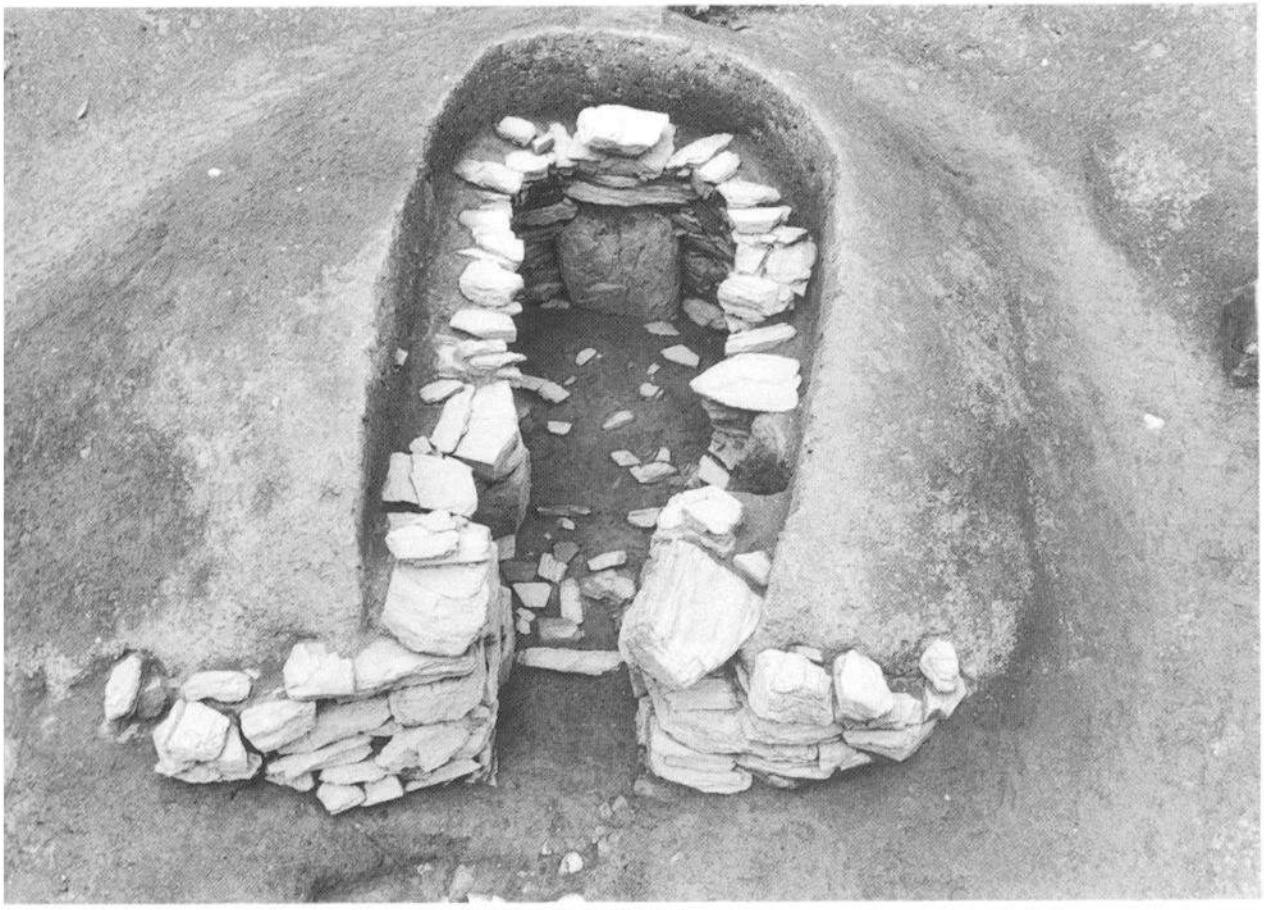




15号墳出土土器２，鉄器



1



2

1　16号墳全景（南から）　2　16号墳石室（南から）

1

16号墳石室（東から）　　2　16号墳石室（閉塞時）

1

2

3

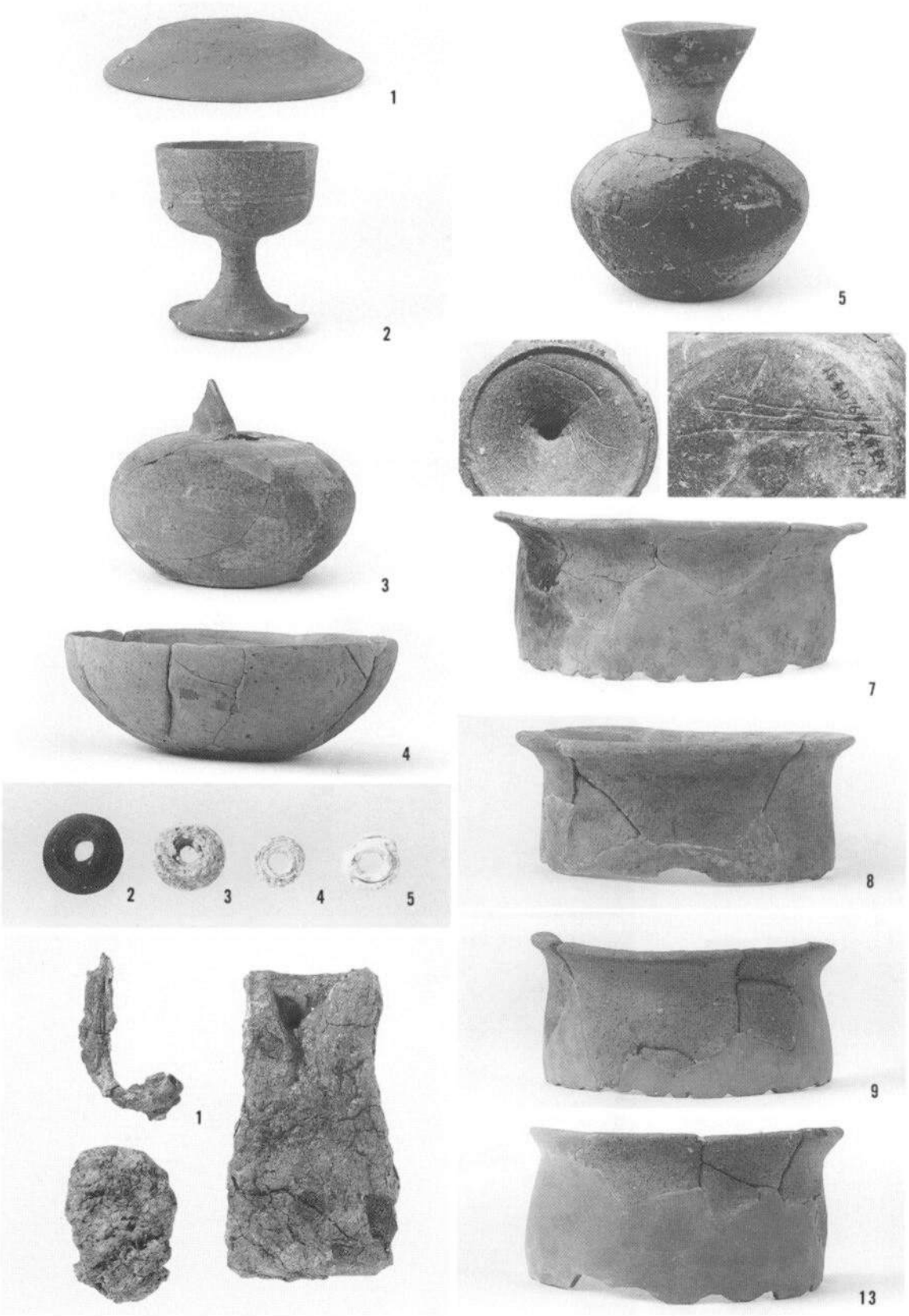
1　16号墳玄室奥壁
2　16号墳玄室左側壁
3　16号墳玄室右側壁

1

2

1　16号墳前室左側壁
2　16号墳石室閉塞状況（上から）
3　16号墳石室閉塞状況（内側）

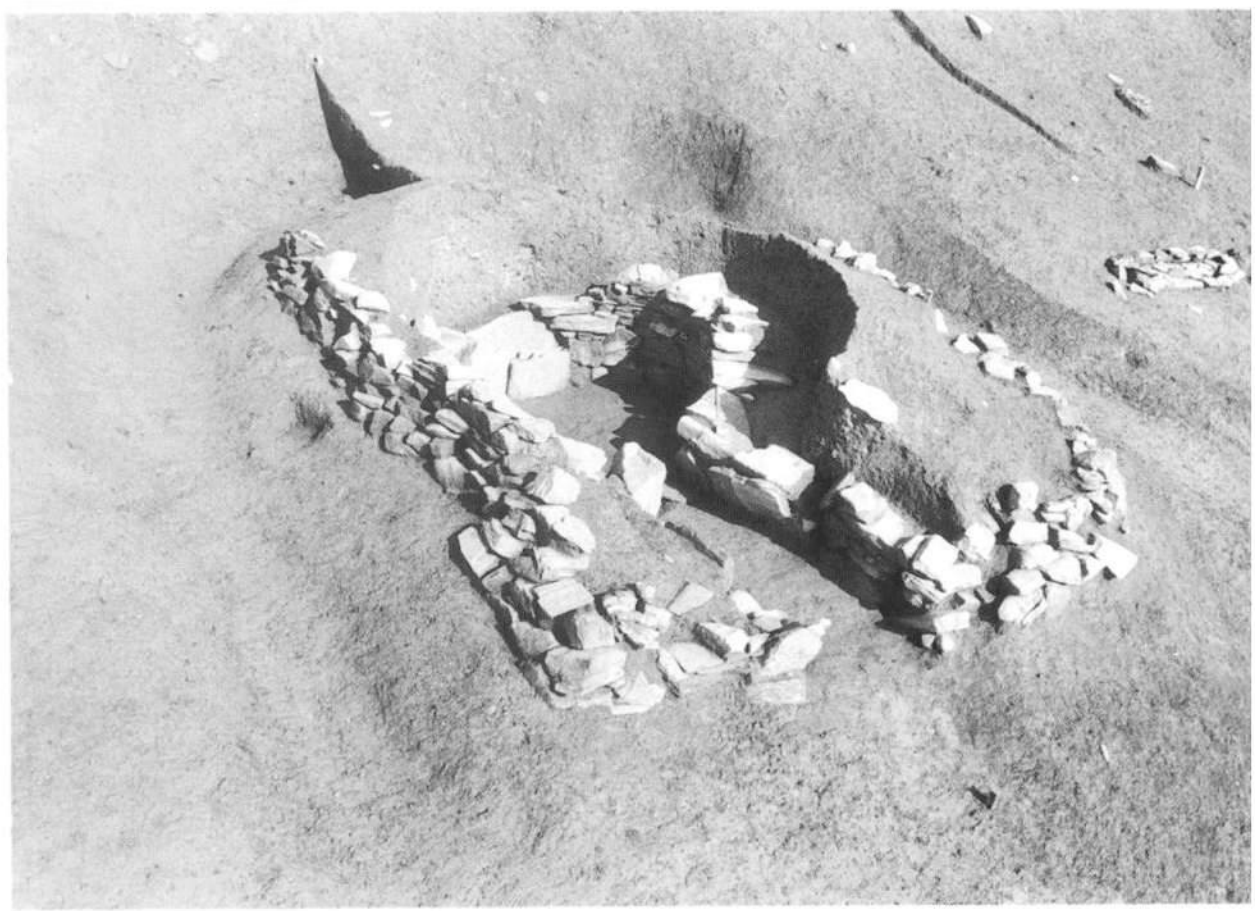
3



16号墳出土土器，鉄器

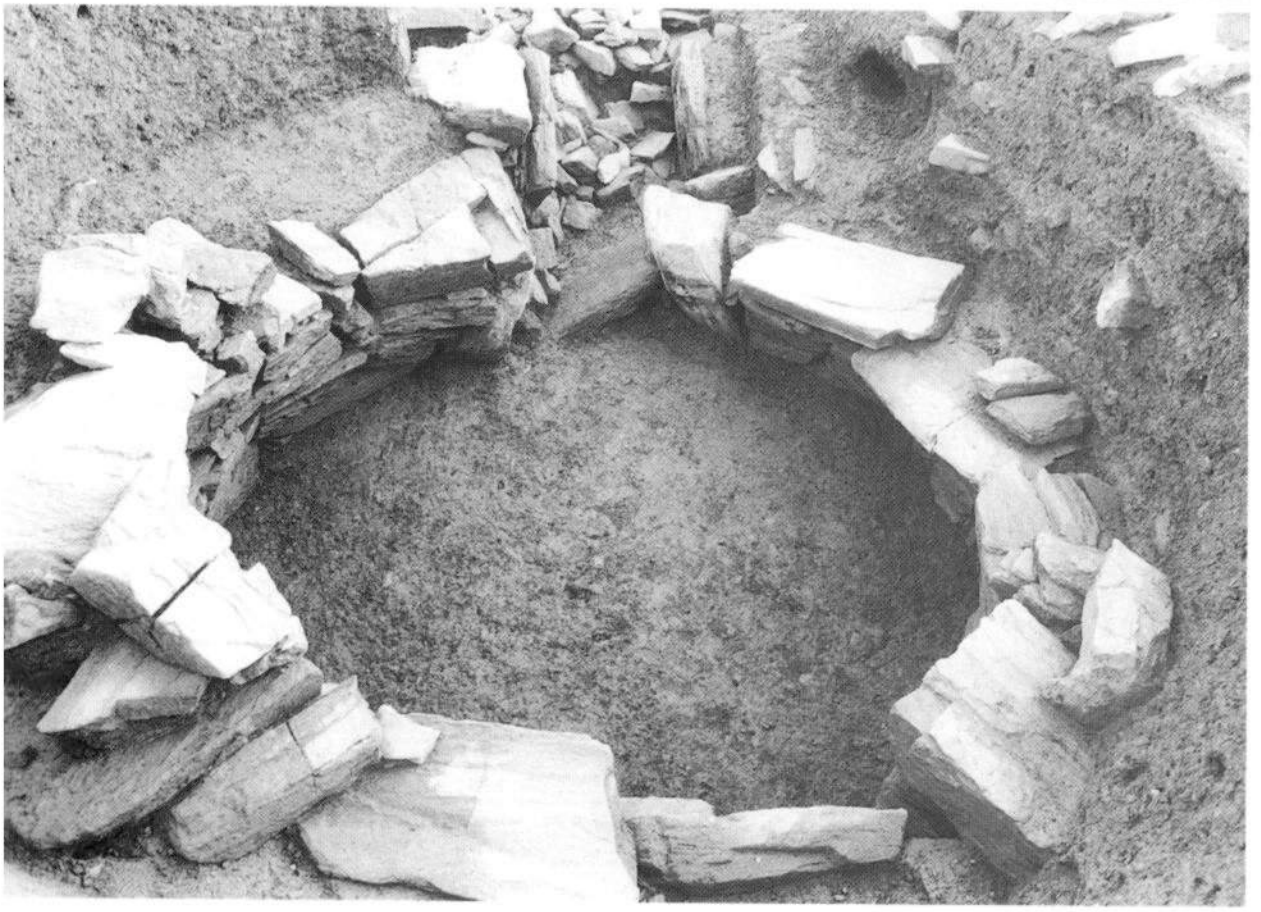
1

2



1　17号墳全景（南から）　　2　17号墳全景（南西から）

1



2

1　17号墳全景（西から）　　2　17号墳石室（北から）

1

2

3

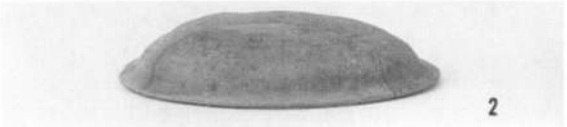
1　17号墳玄室奥壁
2　17号墳玄室左側壁
3　17号墳玄室右側壁

1

2

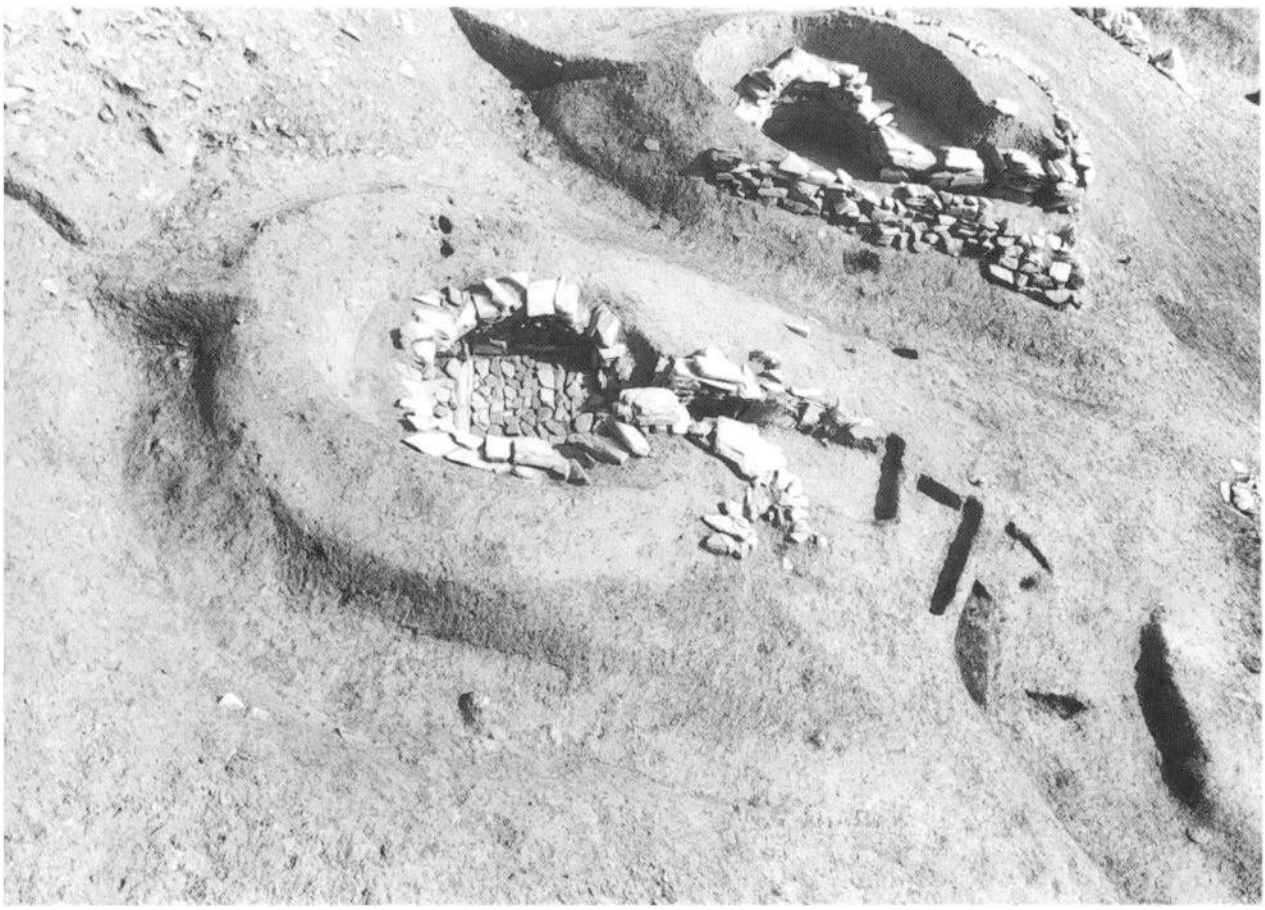
3

1　17号墳石室閉塞状況
（外側）
2　17号墳石室閉塞状況
（上から）
3　17号墳石室遺物
出土状況



17号墳出土土器，耳環

1



2

1　18号墳全景（南から）　　2　18号墳全景（西から）

1

2

3

1　18号墳石室（西から）
2　18号墳石室（北から）
3　18号墳玄室（東から）

図版92

1

2

3

1　18号墳玄室奥壁
2　18号墳玄室左側壁
3　18号墳玄室右側壁

1

2

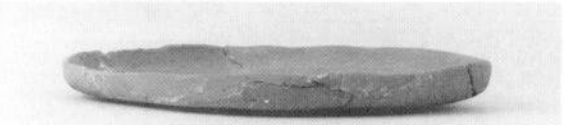
3

1　18号墳閉塞状況（外側）
2　18号墳閉塞状況（上から）
3　18号墳閉塞状況（内側）

図版94

1

1



2

3

4

5

6

8

9

2

1　18号墳石室前面遺物出土状況　　2　18号墳出土土器，鉄滓，ふいご羽口

1

2

1　19号墳石室（南から）　　2　19号墳石室（東から）

1

2

1　20号墳全景（南から）　　2　20号墳石室（西から）

1

2

3

1　20号墳玄室奥壁
2　20号墳玄室左側壁
3　20号墳玄室右側壁

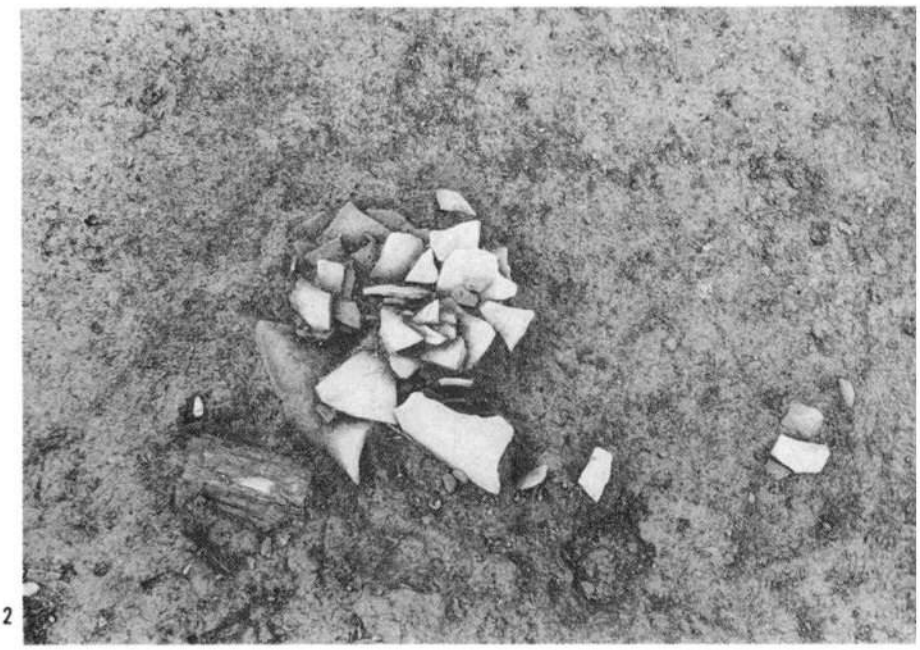
1

2

3

1　20号墳前室左側壁
2　20号墳石室閉塞状況（外側）
3　20号墳石室閉塞状況（上から）

1



2

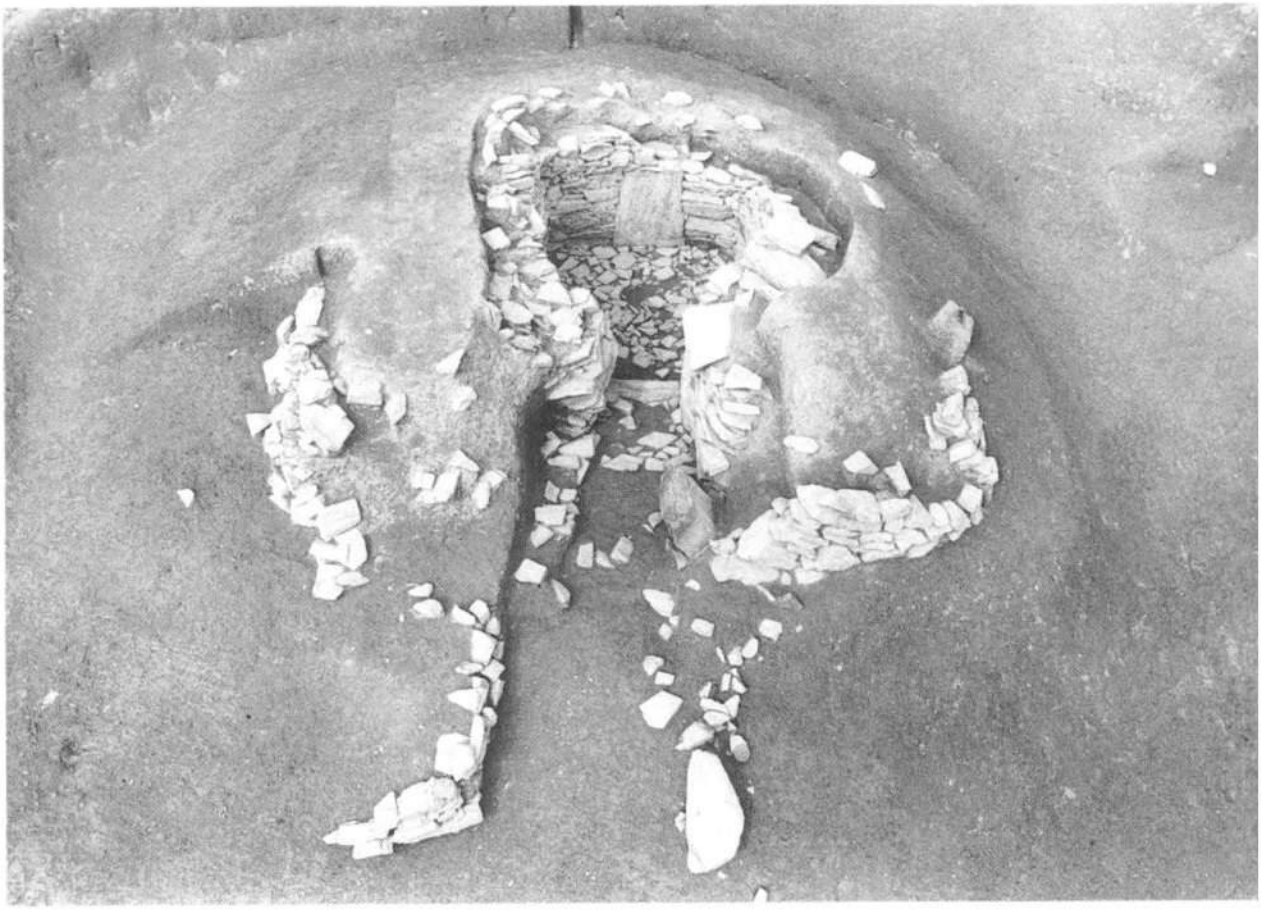
3

1　20号墳周溝II区
　　遺物出土状況
2　20号墳周溝III区
　　遺物出土状況
3　20号墳周溝III区
　　遺物出土状況

1

2

1 2 21号墳石室（南から）
20号墳出土土器



1　22号墳全景（南から）　　2　22号墳石室（南から）

1

2

3

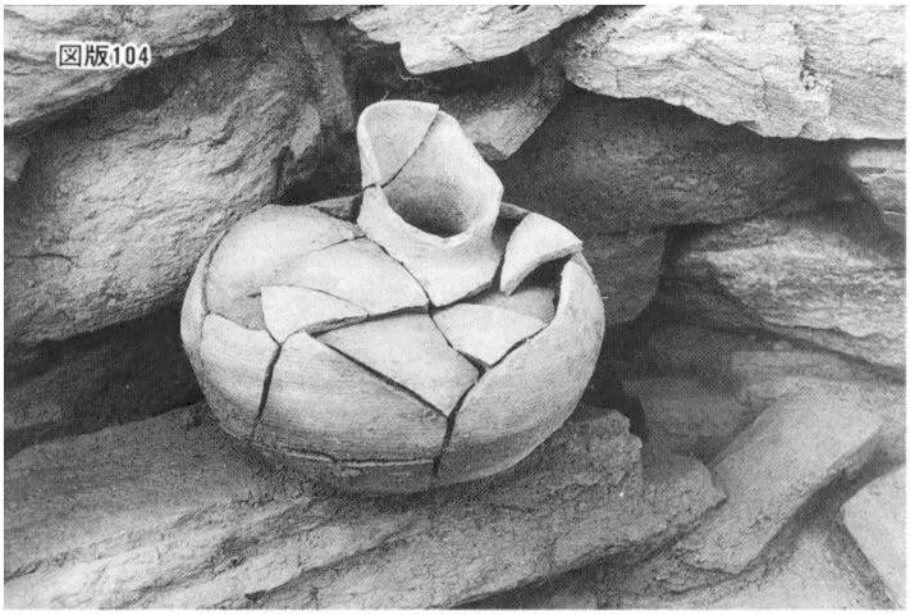
1　22号墳石室（東から）
2　22号墳玄室奥壁
3　22号墳玄室左側壁

1

2

3

1　22号墳玄室右側壁
2　22号墳石室玄門
3　22号墳玄室付近
　　遺物出土状況

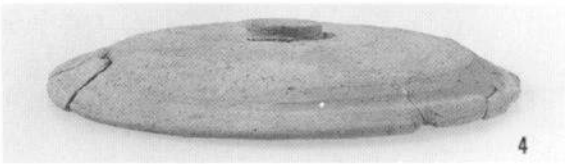


1

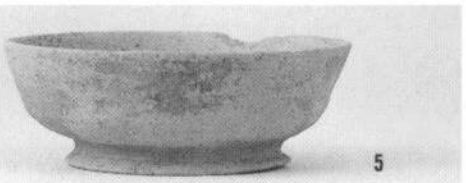
1

2

3



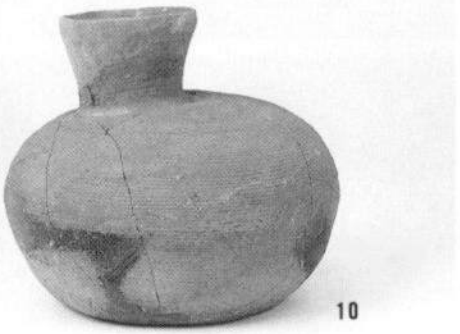
4



5

6

9



10

12

11

13

2

1　22号墳玄室遺物出土状況　　2　22号墳出土土器 1

17

20

21

22

23

24

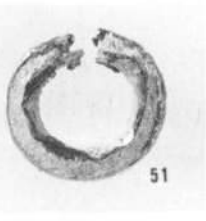
26

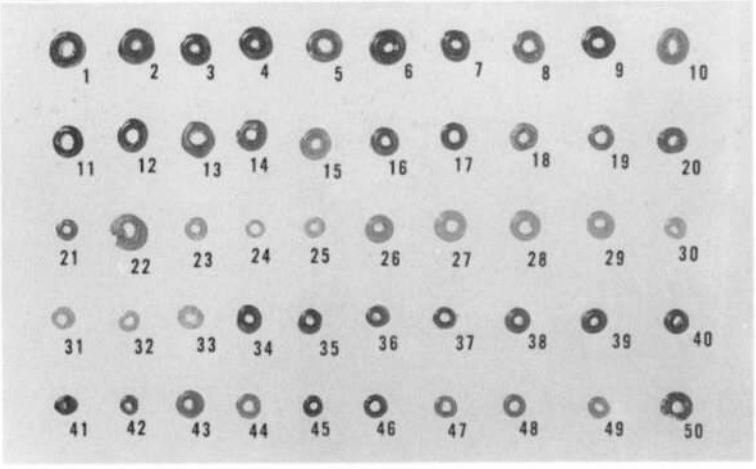
27

5

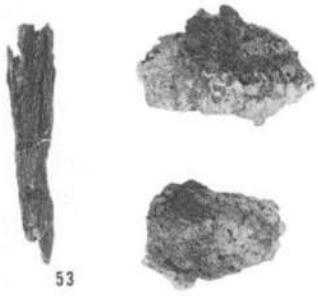
11

22

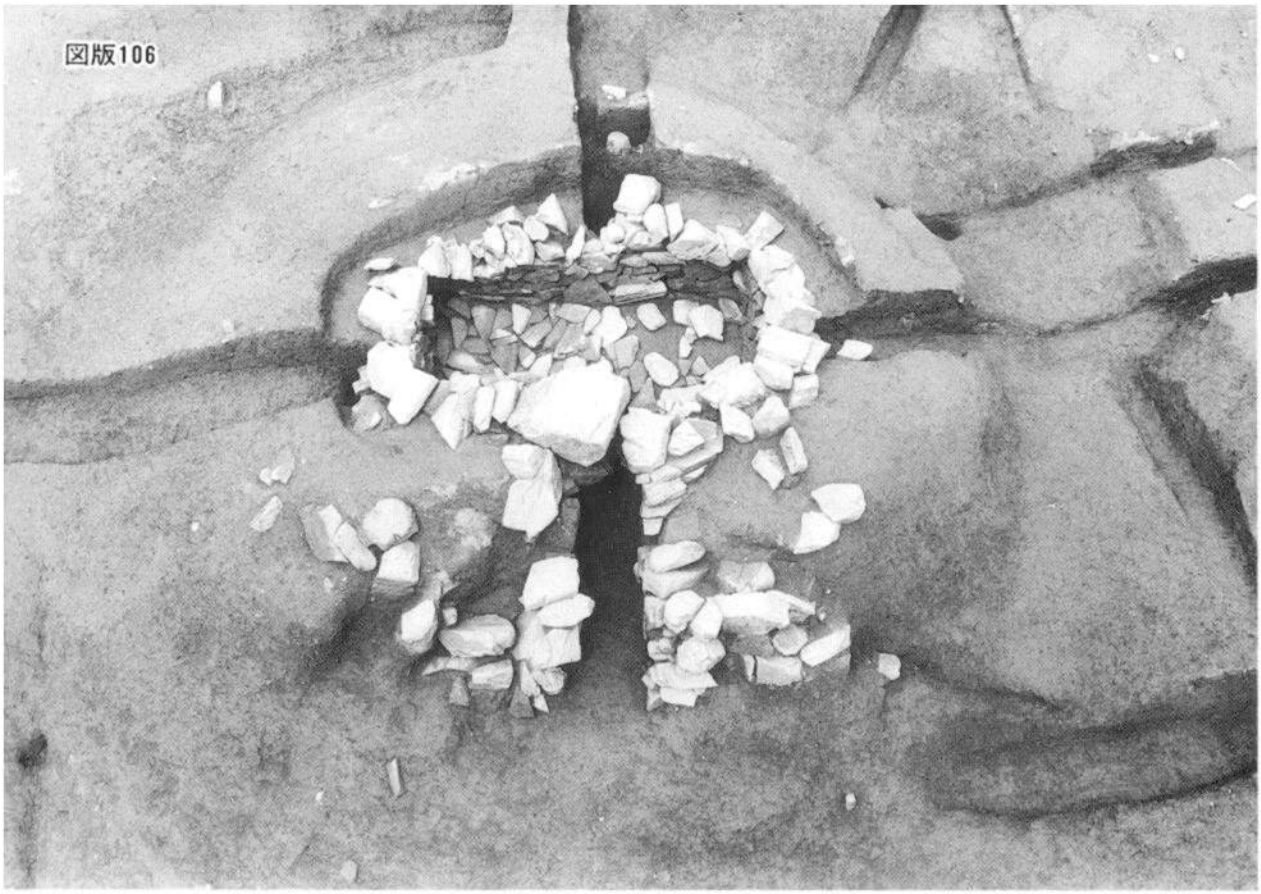

51



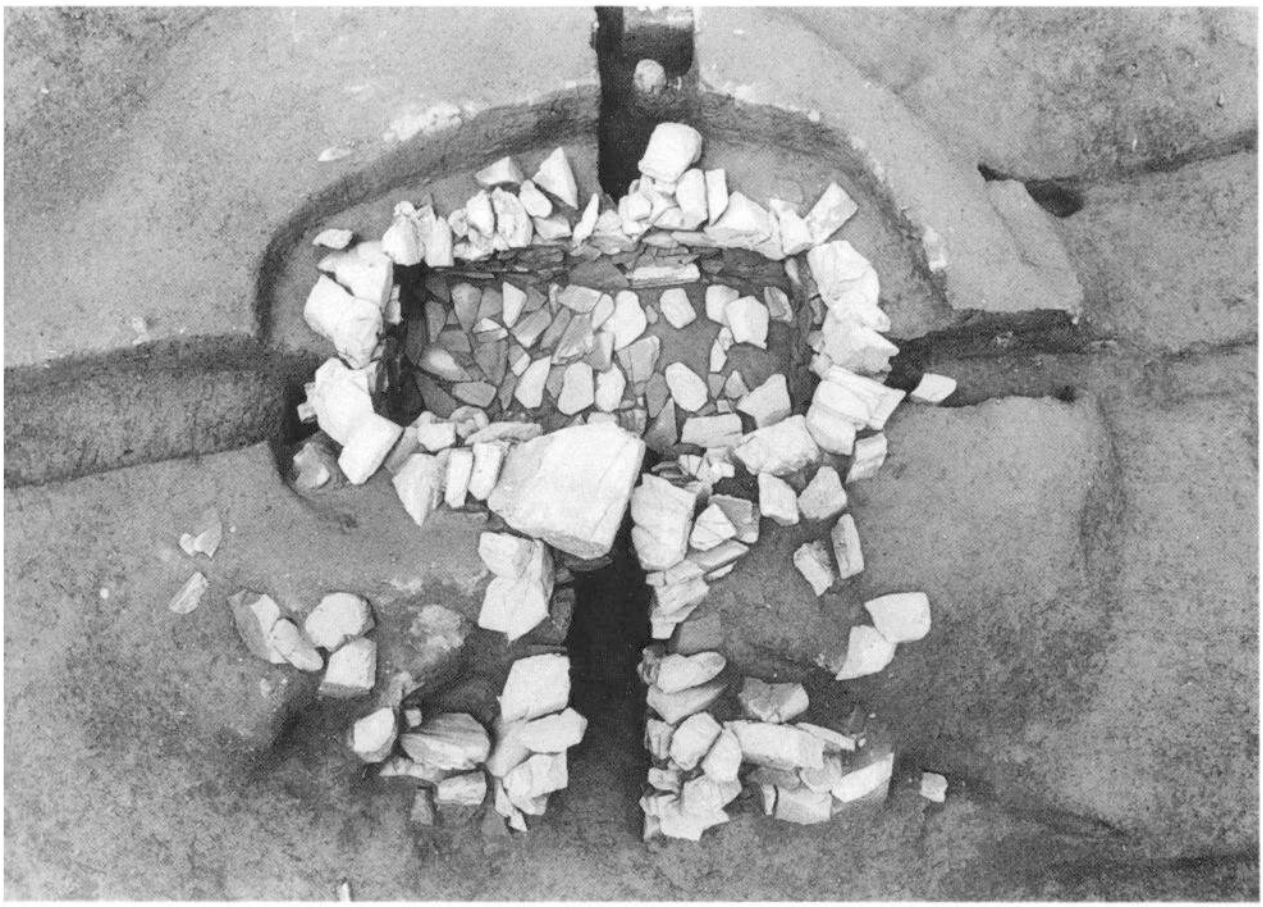
52


53

22号墳出土土器２，鉄器，玉類



1



2

1　23号墳全景（南から）　　2　23号墳石室（南から）

1

2

1　23号墳石室（東から）
2　23号墳石室前面
3　23号墳玄室奥壁

3

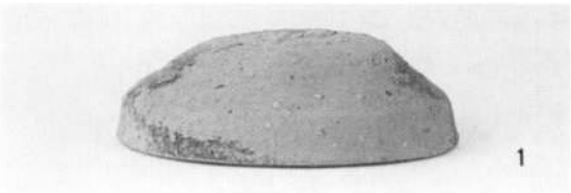
1

2

3

1　23号墳玄室左側壁
2　23号墳玄室右側壁
3　23号墳玄室前壁

1



1

5

2

11

15

1

2

2

1　23号墳周溝III区遺物出土状況　　2　23号墳出土土器，鉄器

1

2

1　24号墳全景（南から）　　2　24号墳石室（西から）

1

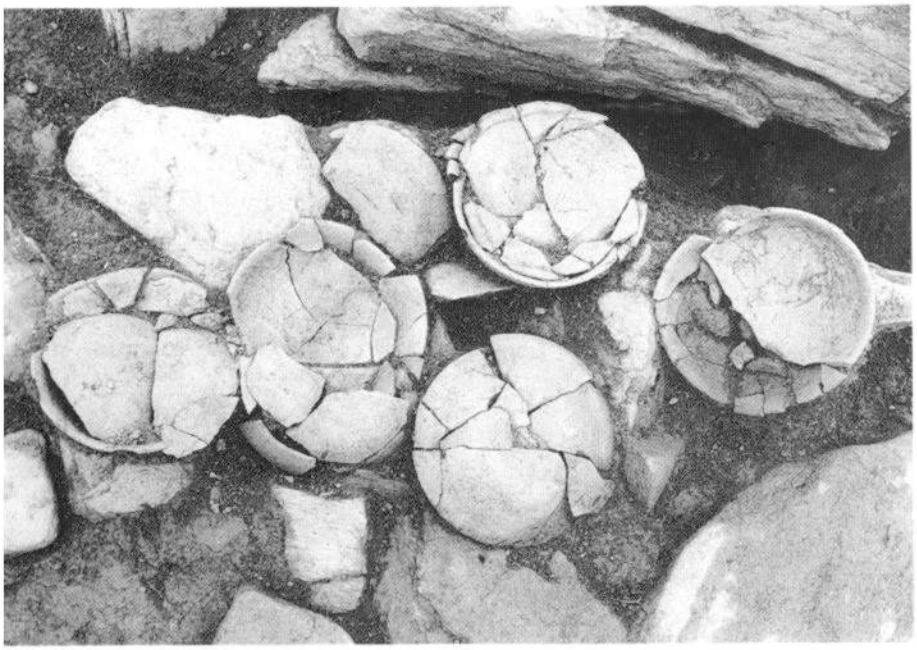
2

1　敷石除去後の
　　24号墳石室（南から）
2　敷石除去後の
　　24号墳石室（西から）
3　24号墳玄室奥壁

3

図版112

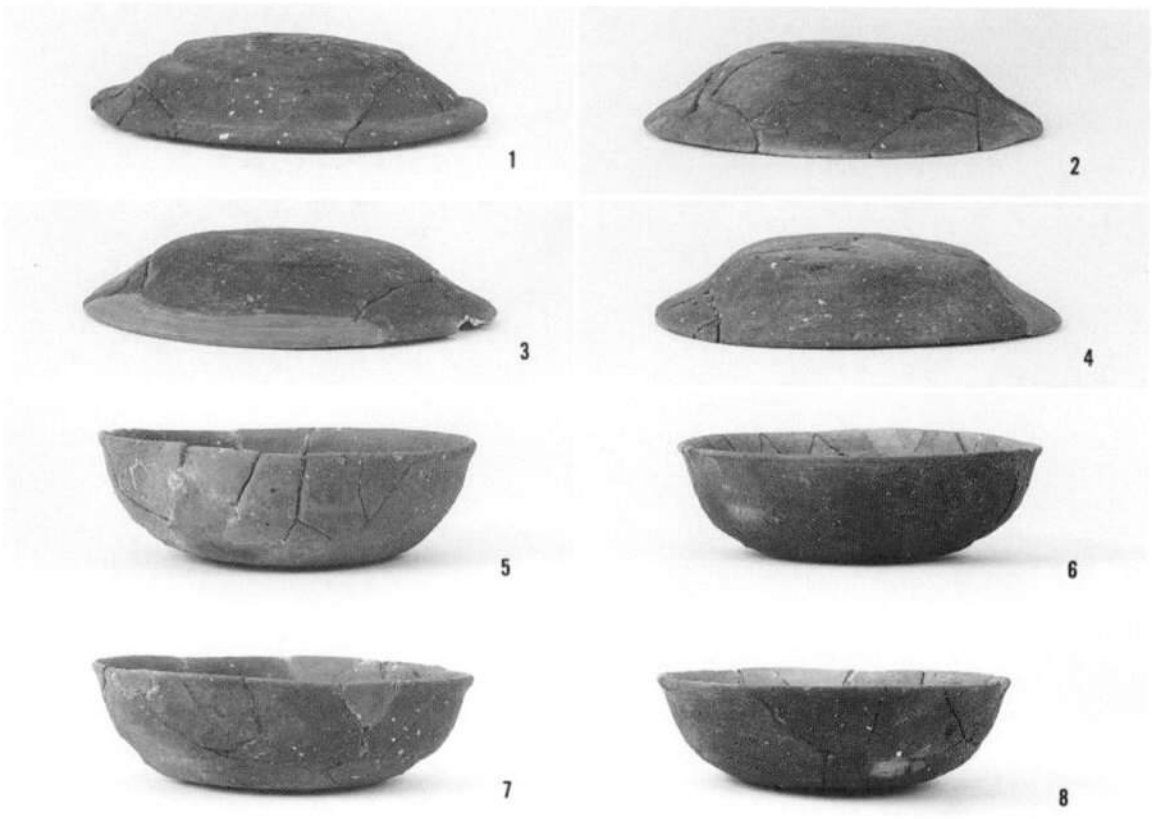
1

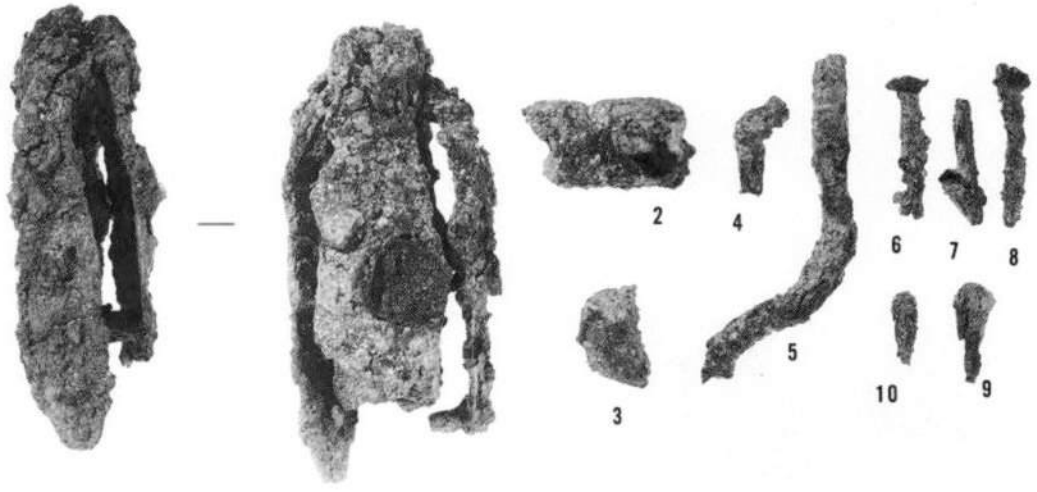


2

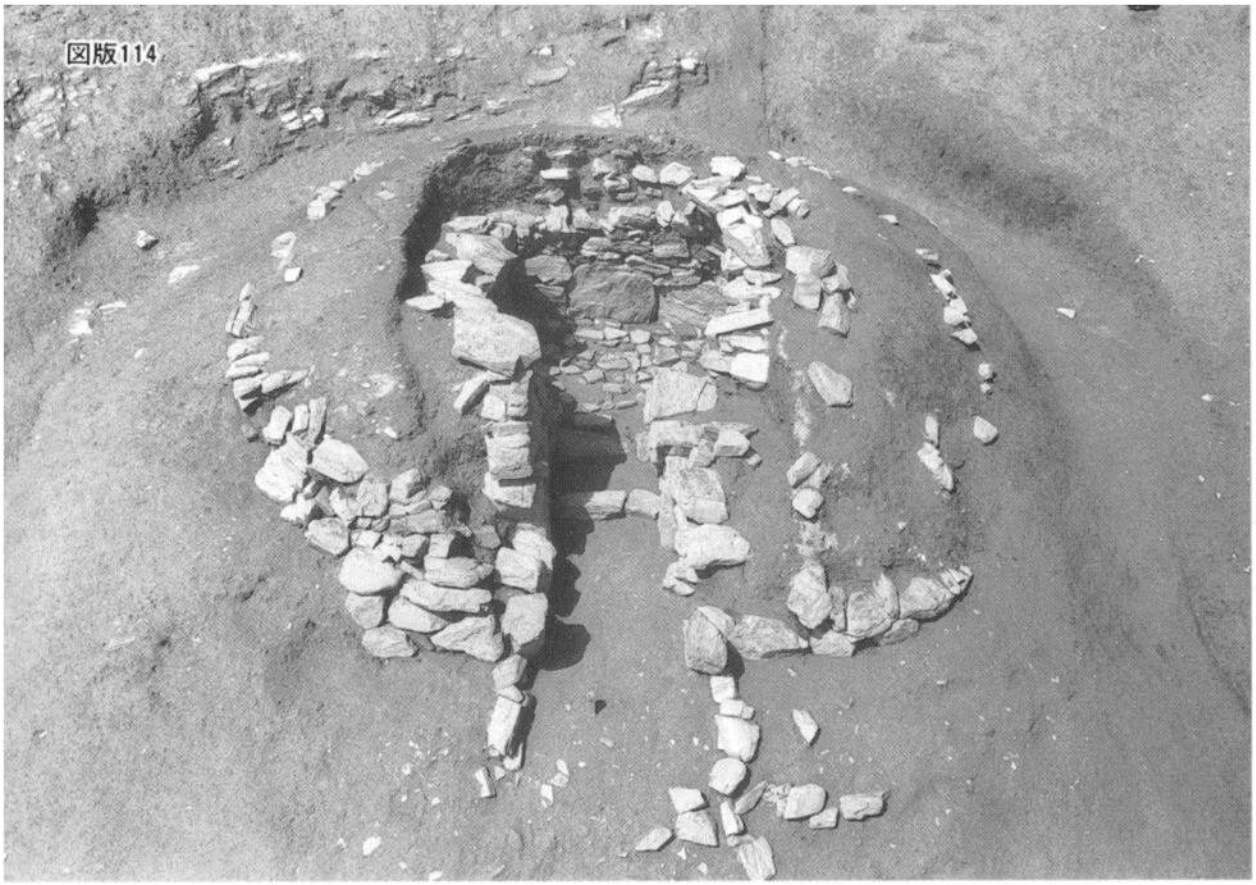
3

1　24号墳玄室右側壁
2　24号墳玄室遺物
　　出土状況
3　24号墳前室遺物
　　出土状況





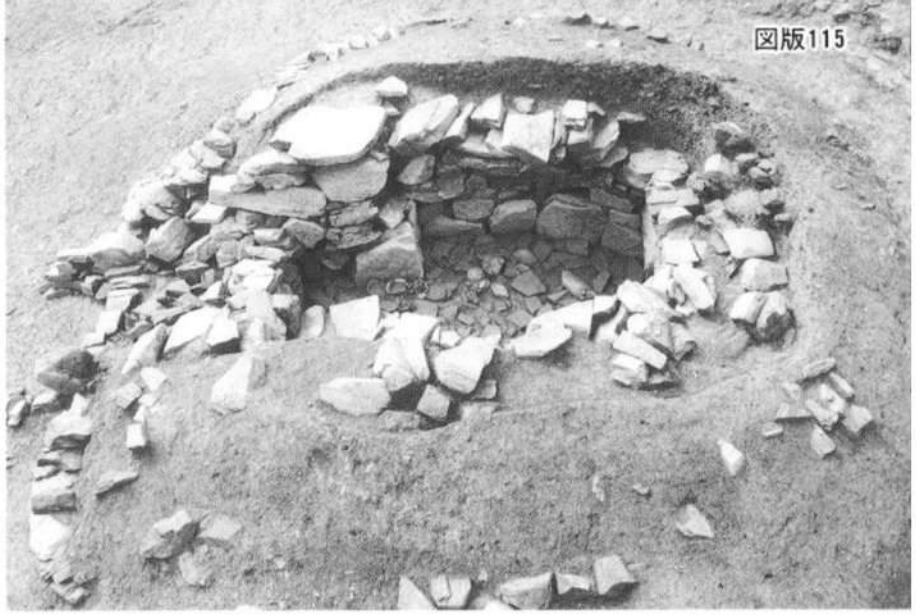
24号墳出土土器，鉄器



1

2

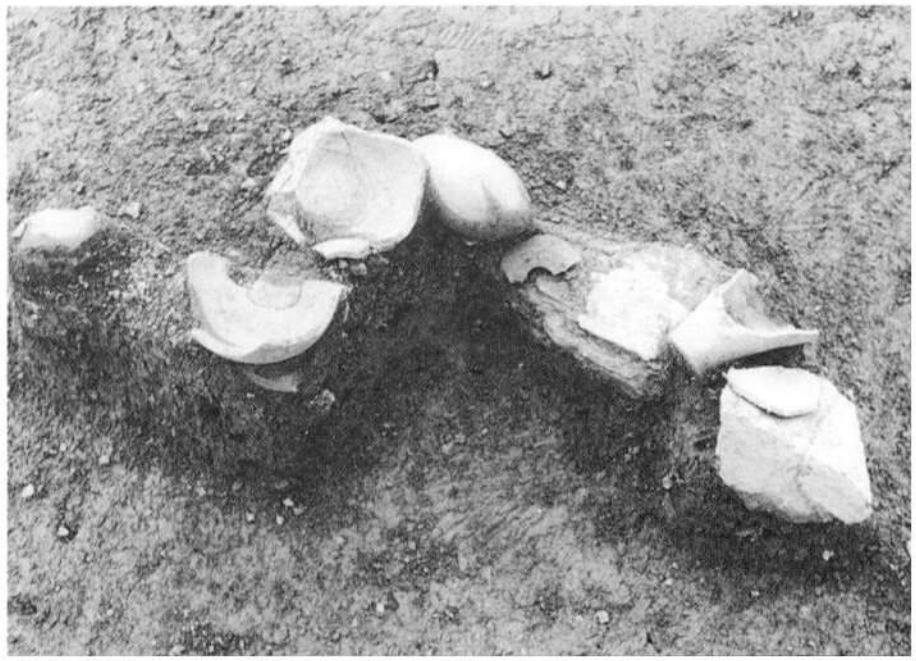
1　25号墳全景（南から）　　2　25号墳石室（南から）



1

2

1　25号墳石室（東から）
2　25号墳左側列石
3　25号墳周溝遺物出土状況



3

1

2

3

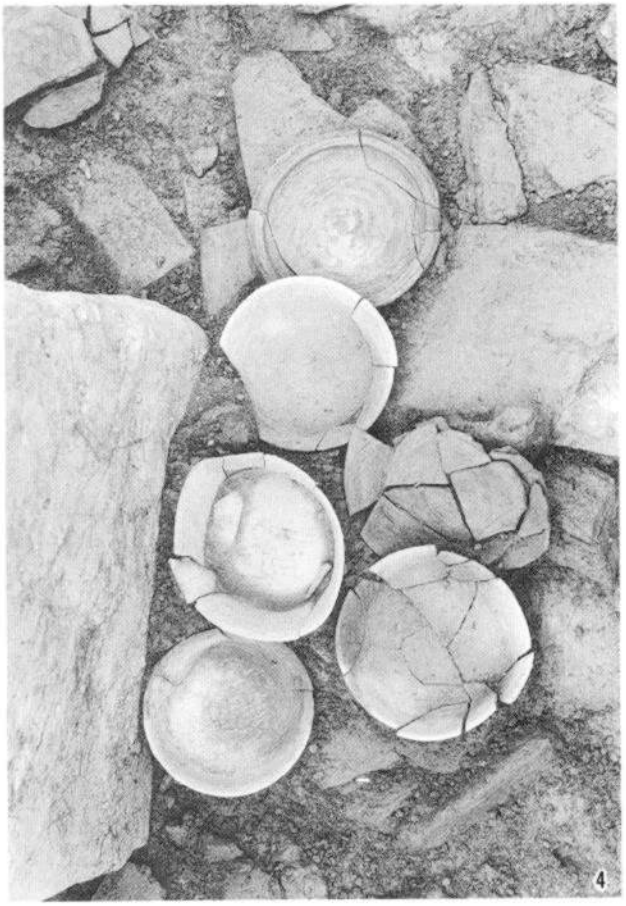
1　25号墳玄室奥壁
2　25号墳玄室左側壁
3　25号墳玄室右側壁

1

2

1　25号墳石室玄門と閉塞
2　25号墳石室閉塞状況（上から）
3　25号墳石室閉塞状況（外側）

3



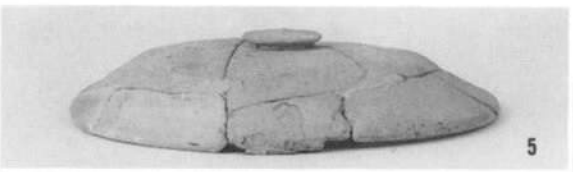
1～4　25号墳石室遺物出土状況

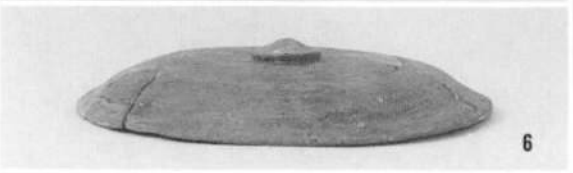
1

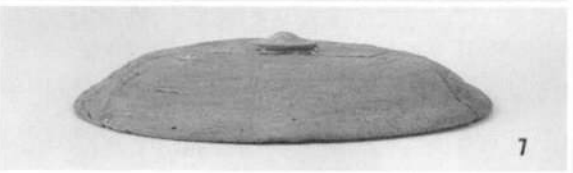
2

3

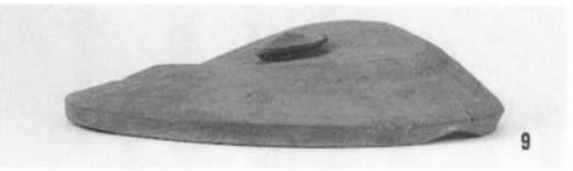
4


5


6


7

8


9

10

11

12

13

14

15

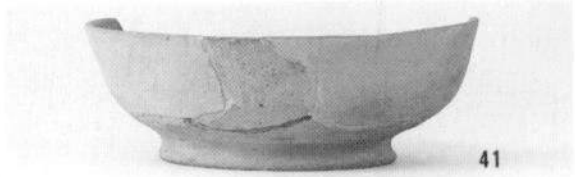
16

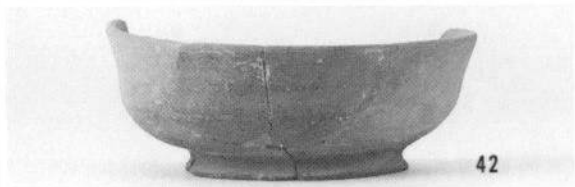
17

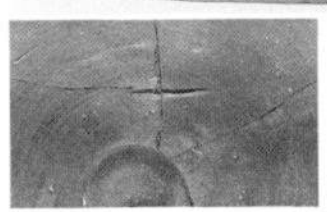
18

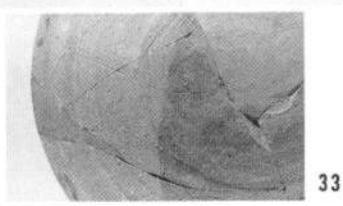
19

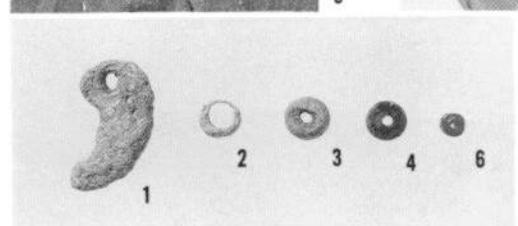
25号墳出土土器 1

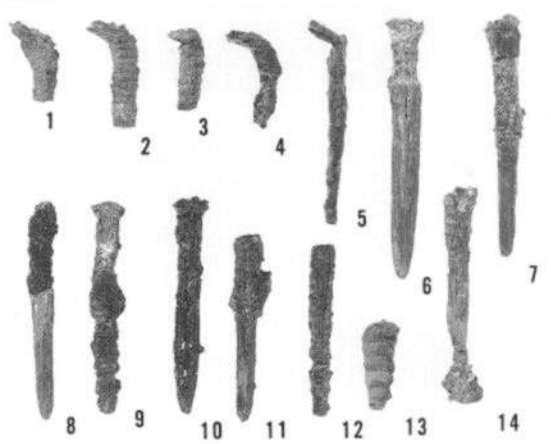




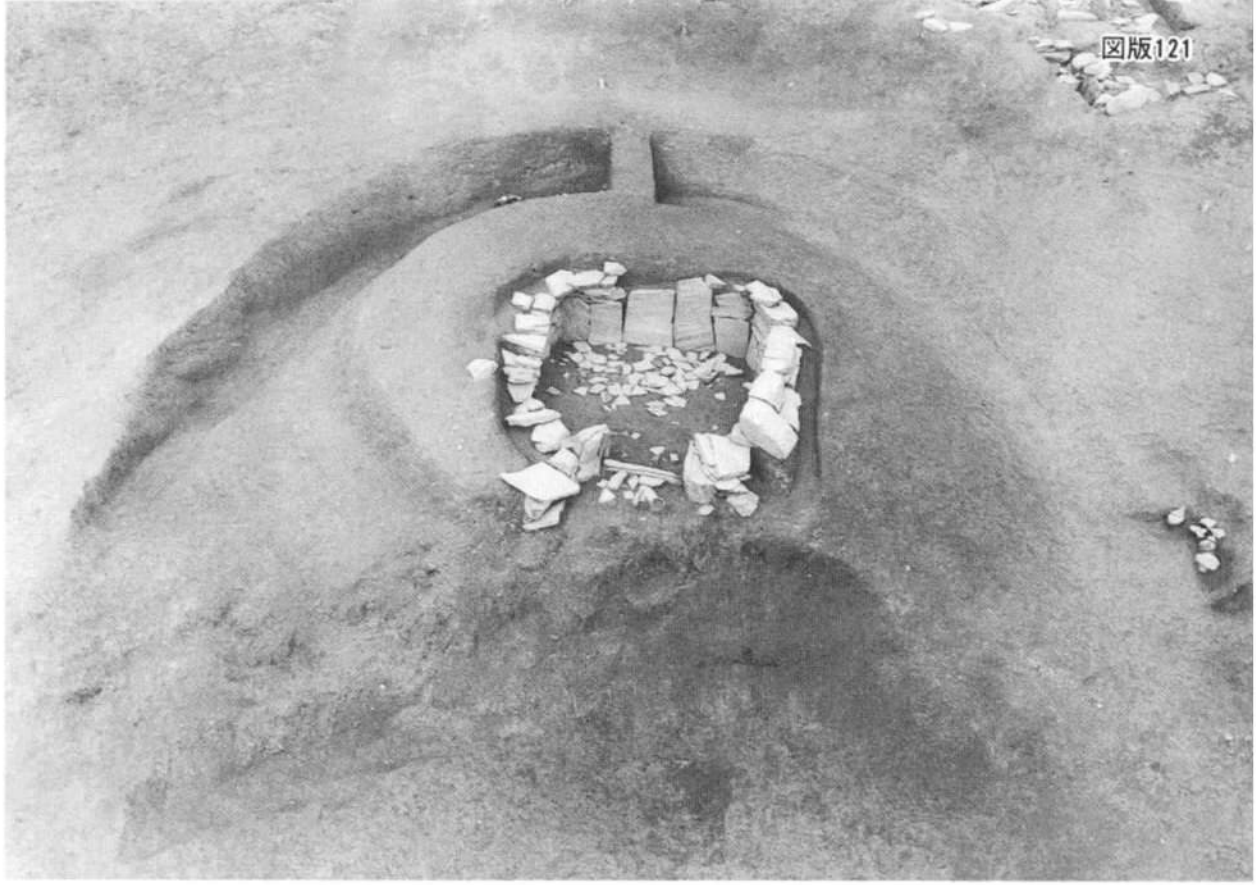




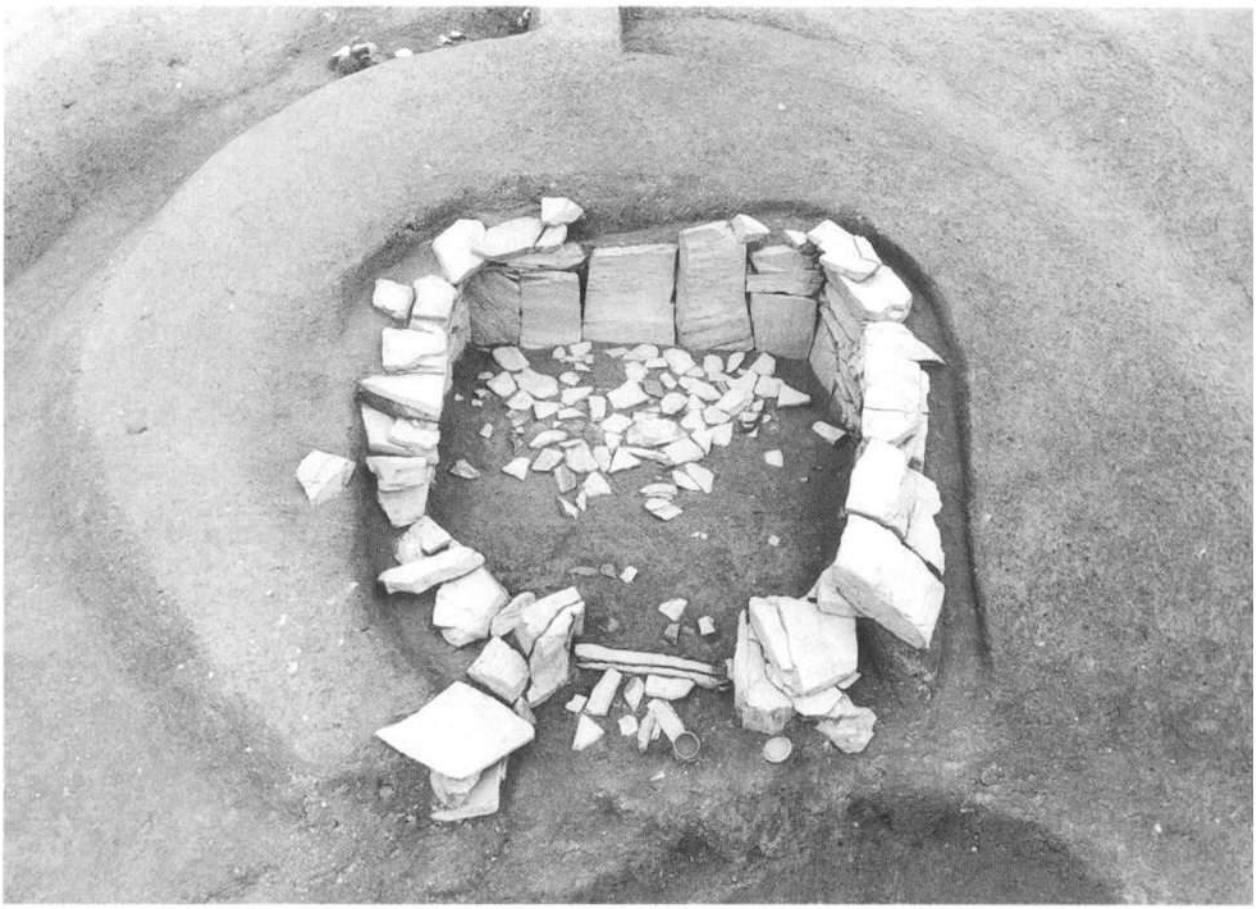




25号墳出土土器２，鉄器，玉類



1



2

1　26号墳全景（南から）　　2　26号墳石室（南から）

1

2

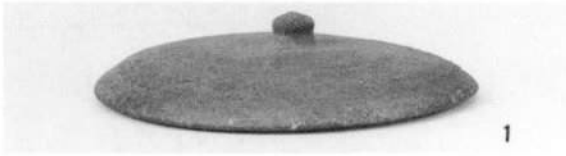
3

1　26号墳玄室奥壁
2　26号墳玄室左側壁
3　26号墳玄室右側壁

1

2

1　26号墳前室
　　遺物出土状況
2　26号墳周溝II区
　　遺物出土状況
3　26号墳石室出土
　　土器，鉄滓



1

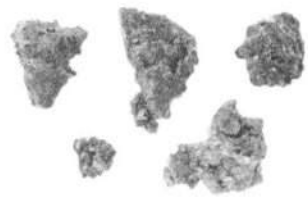
2

4

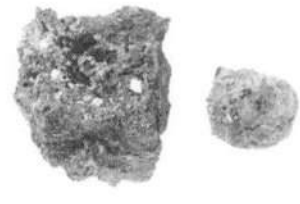
5

6

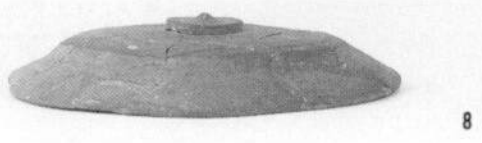
3



玄室出土鉄滓



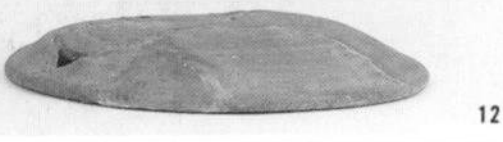
周溝II区出土鉄滓


8

9

10

11


12

13

14

16

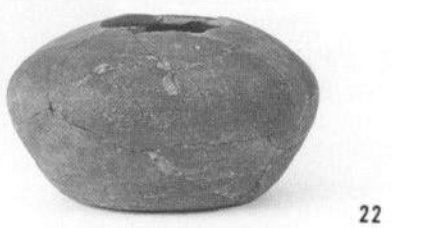
17

18

19

20

21


22

25

13

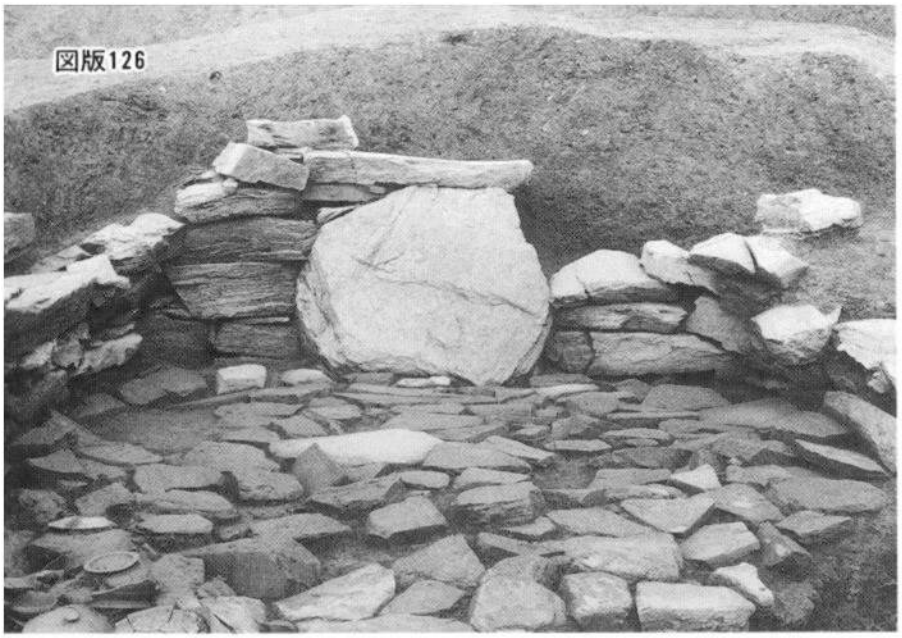
21

26号墳出土土器

1

2

1　27号墳全景（南から）　　2　27号墳石室（南から）

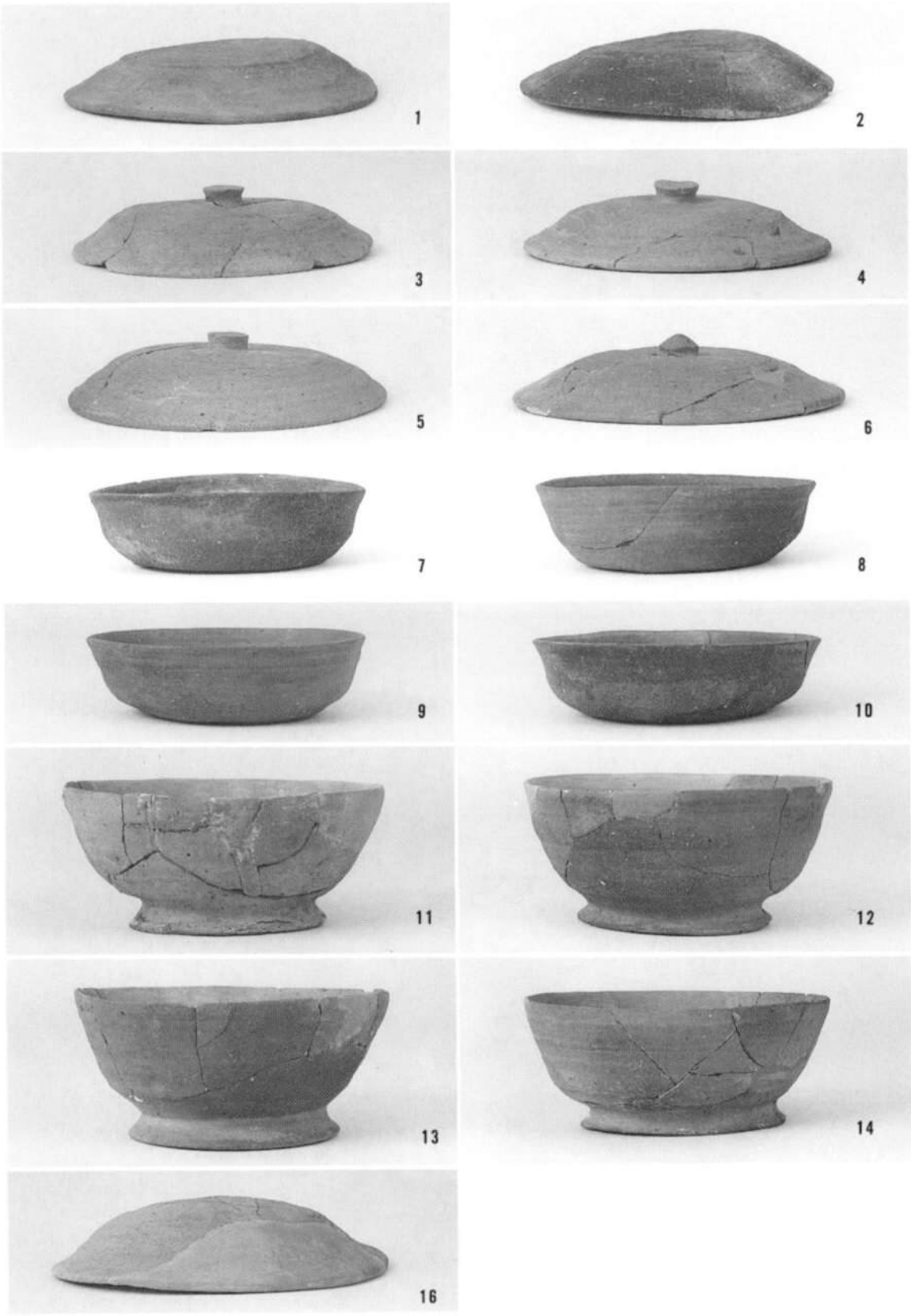


1

2

3

1　27号墳玄室奥壁
2　27号墳玄室左側壁
3　27号墳玄室遺物
　　出土状況



27号墳出土土器

1

2

1　28号墳全景（南から）　　2　28号墳石室（南から）

1

2

1　28号墳石室（西から）
2　28号墳玄室奥壁
3　28号墳玄室左側壁

3

図版130

1

2

3

1　28号墳玄室右側壁
2　28号墳石室玄門と閉塞
3　28号墳石室閉塞状況
（上から）

1

2

3

1　28号墳石室前面と閉塞　　2　28号墳玄室遺物出土状況　　3　28号墳出土土器

1

2

1　石棺墓全景（南から）
2　石棺墓（西から）

1

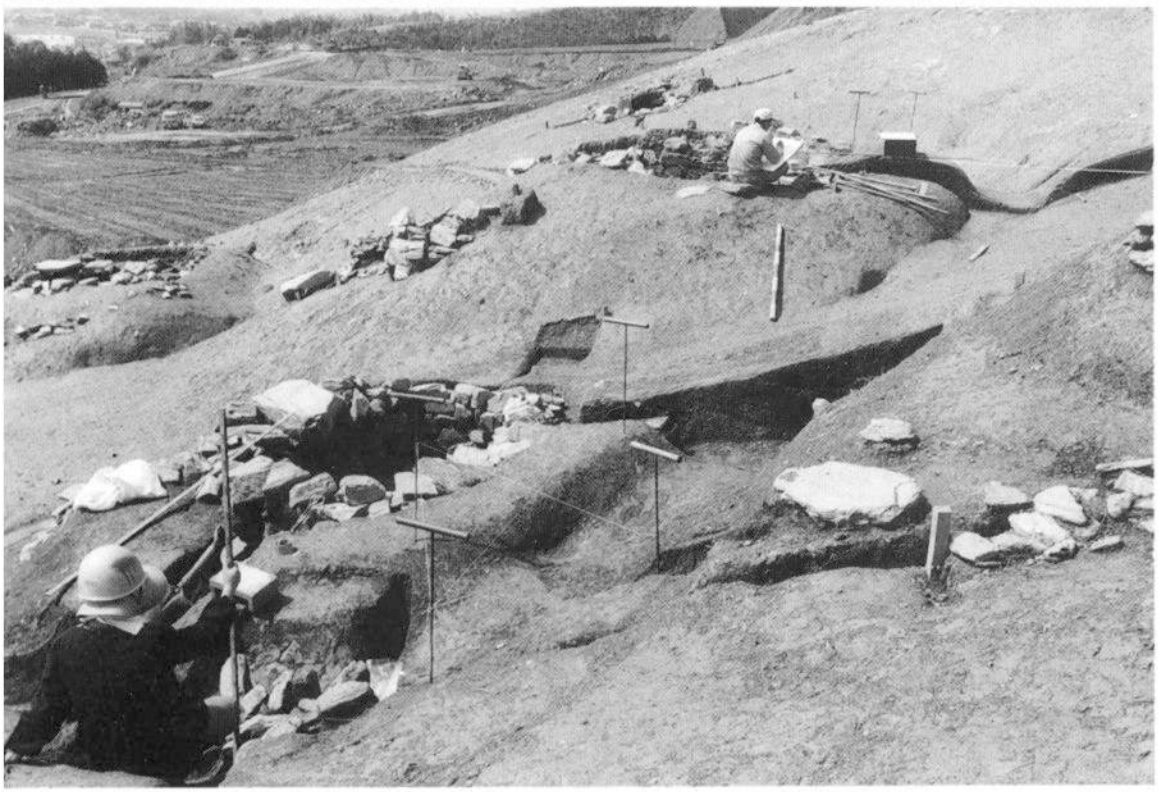
3

2

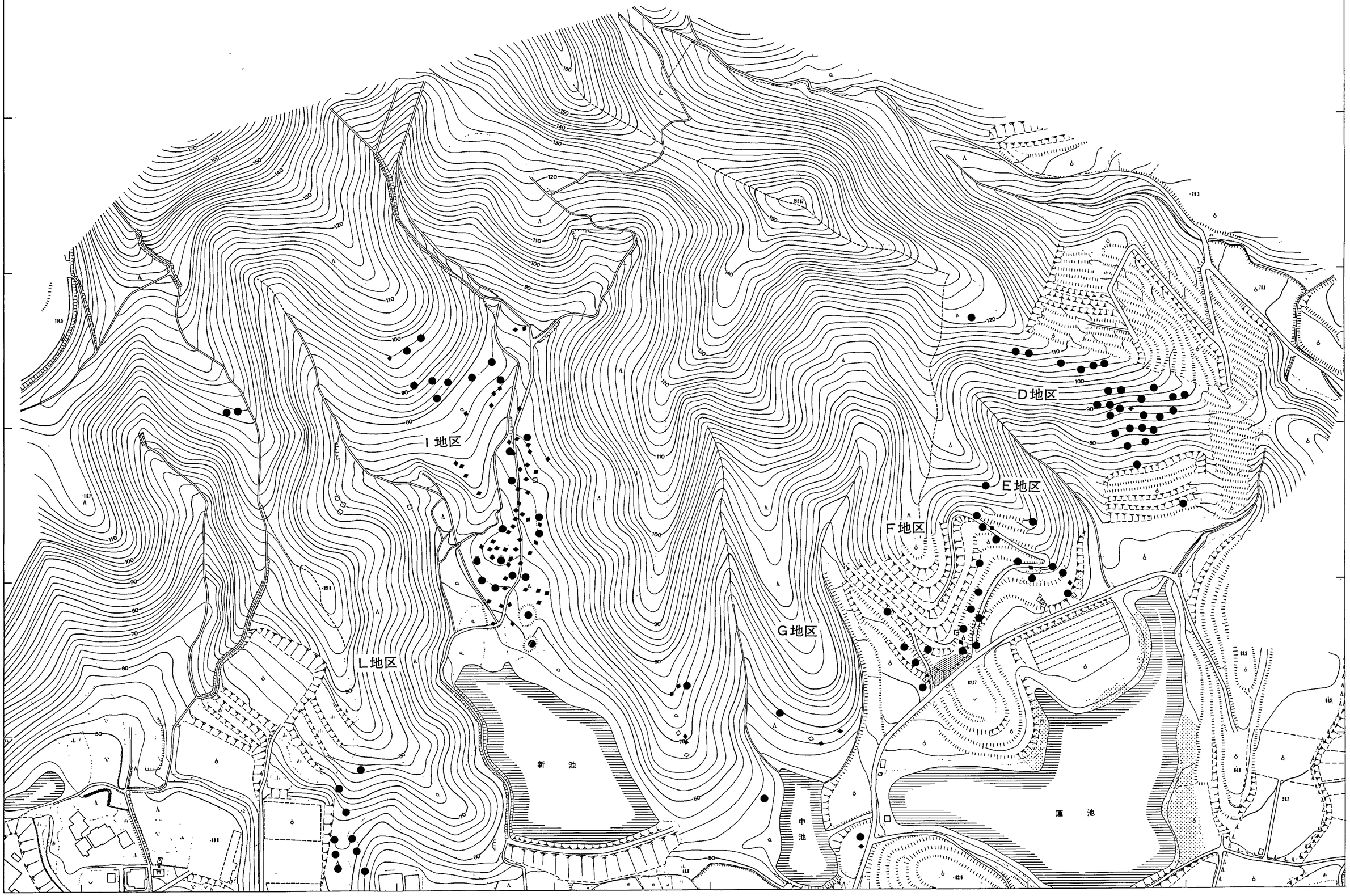
4

その他の出土遺物　調査風景２

調査風景 3



調査風景 4



● 古墳　◆ 石棺　□ 住居跡　弥生時代墓地群　弥生時代遺物分布範囲

付　図　柿原遺跡群地形図（1/2000）

0　200m

福岡県行政資料	
分類番号 ＪＨ	所属コード ２１３３０５１
登録年度 元	登録番号 7

九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告－19－

平成２年 ３ 月 31 日

発 行　福 岡 県 教 育 委 員 会

福岡市博多区東公園７番７号

印 刷　株 式 会 社 西 日 本 新 聞 印 刷

福岡市中央区天神１丁目４番１号